



AC  
145  
G855  
1939  
v.27

Gunsho ruiju

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---





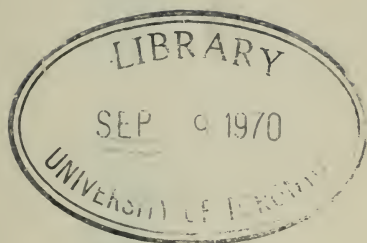


# 羣書類從

第貳拾七輯

東京

續群書類從完成會



AC

145

G855

1939

v. 27

群書類從第貳拾七輯目次

二十七

雜部

卷第四百七十一

桃花藥葉

一條兼良

卷第四百七十二

弘安禮節

一條內經

二判問答

二階堂政行  
一條兼良

三門口決

一云三光院內府記  
久日故實清談

西三條實澄

卷第四百七十三

大饗略次第

六九

大饗御裝束問事

七〇

大饗雜事

八四

大饗次第

嘉禎二年六月九日

九六

大饗次第

建長六年十二月廿五日  
富小路儀

一〇六

卷第四百七十四

十七箇條憲法

聖德太子

一〇九

建曆二年三月廿二日宣旨

一一一

意見十二箇條

三善清行

一一七

封事三箇條

菅原文時

一三〇

卷第四百七十五

寬平御遺誠

一三三

九條殿遺誠

藤原師輔

一三六

澁柿

一三九

竹馬抄

斯波義將

一六三

卷第四百七十六

小夜のねさめ

一條兼良

一七二

文明一統記

一條兼良

一八五

樵談治要

一條兼良

一九〇

卷第四百七十七

乳母のふみ一名庭のをしへ

阿佛

二〇七

めのとのさうし

一二九

卷第四百七十八

身のかたみ

二五〇

抄

二七四

卷第四百

枕草紙異本

清少納言……二九六

卷第四百八十

豐詞

藤原隆房……三六六

方丈記

鴨長明……三七八

十樂菴記

頼阿……三九一

夢庵記

宵柏……三九三

三愛記

宵柏……三九四

宇津山記

宗長……三九五

卷第四百八十一

三塔巡禮記

西三條公條……四〇六

石山月見記

西三條公條……四〇九

嵯峨記

九條種通……四一三

唐崎松記

尊朝法親王……四二一

夢想記

玄旨法印……四二二

さか衣

豐臣勝俊……四二三

卷第四百八十二

多武峯少將物語

……四二八

鳴門中將物語一名奈與竹物語

……四四三

卷第四百八十三

時秋物語

……四四九

今物語

藤原信實……四五一

卷第四百八十四

野守鏡

藤原有房……四七四

卷第四百八十五

吉野拾遺

松翁……五一五

卷第四百八十六

江談抄

大江匡房……五四九

卷第四百八十七

續古事談

……六二八

卷第四百八十八

東齋隨筆

一條兼良……七〇三

群書類從第貳拾七輯目次終

群書類從卷第四百七十一

雜部廿六

桃花蘂葉

後成恩寺關白兼良公

當家着用裝束以下事。

一束帶色目。

冠。有文冠は。小菱の文ある羅を用る也。近來羅織なきと稱して。其文分明ならざれ共。有文のよし也。冠の大小は其人のかしらによるへし。冠師をめて圖をとらしむ。近來十五歳まではうす額。十六歳以後はあつ額を用ふ。舊記を考れば。若年淺官の人は。十六歳以後も猶薄額を用べきよし見えたり。京極太閤は卅歳。師實左大臣の時厚額を用給へり。延久三年事也。後二條殿は卅二。内

檢校保己一集

大臣の時是用給ふ。寛治七年事也。宇治の左府は十八歳。これも内大臣の時はじめてあつ額を用侍り。

古記近衛久壽二正七。右大將兼長不觸<sub>レ</sub>余。用<sub>ニ</sub>厚額<sub>ニ</sub>冠。予問之。陳云。殿下謂<sub>レ</sub>余。十八歳用<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>。ニテ玉フ仍所<sub>レ</sub>用也。仰云。余爲<sub>ニ</sub>大臣<sub>ト</sub>所<sub>レ</sub>用也。汝雖<sub>ニ</sub>同歳<sub>ト</sub>官卑<sub>ヒキシ</sub>。甚不當也。自今以後可<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>薄額<sub>ニ</sub>者也。

袍。元服のち。大臣までは。袍の文。丁子の丸。杏葉だすき也。攝政關白になりては。雲立涌の文。大閤の時は。雲に鶴也。地はいづれもしづらの綾。前途のち。宿老の人



は。しどらなき熨斗目の綾をも着する也。

夏は穀。文は冬に同。色はいづれもふし金にてそむ。濃紫のよし也。但五位中少將は。あけの色也。但

附子かねはくさくて。はやくくつるによりて。近比故實の女工ありて。下を蘇芳の木をよく煎じて。それにて染て。うへをふしの枝。もしは葉を煎じてそむるが。色もうつくしくて。くさくもなきといへり。ふしの木なければ。じやくろの皮にてもそむるといへり。冬は平絹の裏あり。色はおもてにおなじ。攝録の時の夏袍。文浮線綾丸下襲ののよし。嘉禎四年四月或記に見えた文也。近來は夏も雲立涌を着す。浮線綾丸を用ることも難有まじきなり。

下襲。冬は浮線綾の文のあや。白粉張にして。やう貝にてみがく。裏は遠菱の文の綾。家の例たて菱也。諸家は橘びしを用也。ふしかねにてそむ。うへの

きぬにおなじ。但下襲は。蘇芳の打下襲といふ物也。本は打べきを。近代は板引にする也。すはうの色をも。紫のごとくふしかねにてそむ。いはれぬ事なれど。ひさしくさたしつれたり。禁色をゆるされぬ殿上人の。平絹の下襲をば。つゝじの打下がさねといふ。それもうらは蘇芳なるを。ふしかねにて染也。夏は。穀の遠菱の文。攝家はたてびし。冬の下襲の蘇芳にてくろむほど是をそむ。夏の下襲をば。蘇芳の下がさねとなづけ侍れば。をのづから相違なき也。うらはなし。非職人。夏の下がさねは無文穀。或生平絹。色は二藍。以ニ赤花及青花ニ染之也。或は公卿も着之。柳下襲。表は綾の白瑩。ミカキ裏は青打也。或は裏表張ても着す。正治二正十六。左通關白始着。柳張下襲。普賢寺關白冊五歳時事也。白襲といふは。綾若平絹を表裏白瑩にして着す。或表裏共ニ張之。四月十月更衣



の外は。暑月に着之。近衛久安二年七月三日法勝寺御八講に。宇治左府着<sub>二</sub>白重<sub>一</sub>。暑月には可<sub>レ</sub>着之由。見<sub>二</sub>西宮記<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>記之。時廿九歳也傍例かくのごとし。盛年の時も可<sub>レ</sub>着之。年老てはいよ<sub>一</sub>勿論也。

裾。下襲の尻也。むかしはつゞけたるを着用する時。煩あるによりて。きりはなして着之也。仍一として下がさねにかはる事なし。長は代々の制符不同也。但近代攝家に用來分は。納言以前八尺。大臣一丈。關白時一丈二尺計也。大概かくのごとし。又時にしたがふべし。

黒半臂。冬は綾をふしがねに染て板引にして着之。深紫色の半臂と名づく。裏あり。夏は生の穀。文三重たすき又ふし金にて染之。いづれも欄忘緒はうす物也。たゝみて付之。近代冬は一向略之。舊例も壯年人は半臂を着

す。老者はかならずしもしからざるよし見えたり。夏は大略用之。表衣のひとつへにすきて見ゆる故。殊更に着用す。但欄をばなを略之。闕腋袍にあらざれば。欄までは見えざるゆへなり。或抄云。近代以<sub>二</sub>半臂小緒<sub>一</sub>結<sub>レ</sub>之。往古の例は以<sub>二</sub>大緒二筋<sub>一</sub>結<sub>レ</sub>之。今世少<sub>二</sub>知人<sub>一</sub>云々。又着<sub>二</sub>織物下襲<sub>一</sub>時。用<sub>二</sub>同色半臂<sub>一</sub>。欄緒。皆織物也。不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>黒半臂<sub>一</sub>云々。

柏。春冬はこれを着すべし。然るを近代一向略之。若着用せば。小葵の文の綾をうす色に染て。平絹の同裏を付て可<sub>レ</sub>着之。或は紅打袖一重にても。又紅打にうす色あこめをかさねても用之。以上舊記に見えたり。

單。ひとへ。文の菱の綾を紅に染て。冬は張。夏は板引にす。十五未滿。濃裝束を着するときは。單の色もこき色也。鳥羽。濃。をたむ。建曆二玉藥。法性寺殿元永二。三。歳廿七月ノ比。

令<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>生單。重<sub>レ</sub>帷給。七月以後不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>帷云々。見<sub>二</sub>玉林<sub>一</sub>也。

大帷。ふるくは不<sub>レ</sub>用之。近代爲<sub>二</sub>衣文<sub>一</sub>用之。冬は白。夏は紅染。是をひとへの下にかさぬ。夏は汗取となづく。ふるくも着する也。老者香染也。

表袴。中少將より。大臣大將に至るまでも。

若年の時は。白縮線綾。窠霞の浮文を用ふ。

裏は紅打平絹也。十五歳以前。濃装束には

こき打の裏をつくべし。又大納言大臣等の

大將を不<sub>レ</sub>兼時は。堅文の藤丸を着す。當家藤丸

は二わなの文也。裏は紅打也。大臣大將も。宿徳の儀

にて固文藤丸を用。子細なし。一日の晴に

は。宿老大臣。攝政關白も。浮文窠霞を着用

有<sub>レ</sub>例也。

赤大口。生平絹。紅に染て用也。濃装束に

は。濃生袴也。

襪。着<sub>二</sub>練貫小袖<sub>一</sub>之時者用<sub>二</sub>練貫<sub>一</sub>。宿老は白平絹のねりはりたる也。

履。鼻切沓といふ物也。敷物は表袴のきれ

を用也。

靴。靴靴箋は赤地の錦。靴帶はひきはだの皮。

有<sub>二</sub>横金物<sub>一</sub>。節會の内辨外辨公卿。若行幸

供奉の時用之。深沓同事也云々。

笏。拜賀の時は。京極殿の御笏を用ふ。これ

を慶賀笏と名づく。

扇。十五歳以前は。杉横目の扇。繪は松鶴。イ三歳

など祝物をかく。うらのかたは蝶小鳥を

書。色々の絲にて是をとちて。糸のあまり

をあはび結びにして。梅のちり花などを結

びつけて。扇にまきて持也。かなめの蝶鳥

をかねにて打て用之。十六歳の時分までも

宥用ふ。くるしからず。檜扇は廿五枚。若年

の時は。白絲にてとちて。絲のあまりにて

藤の花を置物にして。かなめより上二三寸程持ところを残すべし。是は中納言中將。十七八歳の太刀言大臣などの時持べし。宿徳の大臣などの時は。藤丸を絲にてはして。兩方の面に押也。束帶の時は。夏も檜扇を持也。衣冠直衣などの時。極熱には蝙蝠の扇も子細なし。老者は猶冬の扇をもつべし。近ごろは。夏冬をいはず。蝙蝠をもつ人あり。例たるべからず。宇治左府は夏の扇。香染無薄を持給つるよし見えたり。仁平(近衛)元八十長者之後。春日詣時如此。尋常にも是をもち侍るよし。日記にしるされたり。又香染冬扇を持給へる事もあり。保延(崇徳)四二四春。日祭上卿時事也。劔。蒔繪太刀は尋常用之。木地螺鈿劔。或紫地。沈地。行幸時帶之。樋螺鈿劔。蒔繪螺鈿劔も行幸用之。又蒔繪螺鈿太刀は。拜賀の日又染裝束之時に用之。螺鈿野劔は。公卿次將大

將の時。遠所行幸。春日。日吉。行幸等。帶之。力平。力平。劔は。節會并御禊行幸供奉の公卿用之。又飭劔代といふ太刀あり。名のみきゝて。いまだ見ず。節會の日執政の時代が代と號して螺鈿劔を用る事あり。故殿は常に是を用給へり。飭劔代の。又代の心に。代が代とはいへる也。大臣の時は金裝束。太刀言までは銀づくりにてあるべけれど。近比はあるにまかせて用るによりて。金銀の沙汰にをよばざるなり。羽林より大將までは。職につきて帶劔勿論也。大將を兼せざる太刀言の時は。勅授帶劔の宣下を申て帶劔すべし。又大臣の大將を辭て後は。勅授帶劔如元之由宣下せられて。前途の時までも帶劔すべき也。平緒。紫綵平緒は。節會行幸拜賀等之時用之。飭太刀螺鈿を着する時は。大略紫綵を用る也。又若年の人は。常に用之。紺地平

緒は尋常用之。蒔繪太刀には紺地よろしき也。叙位除目執筆などの時は紺地然るべし。其外異色平緒は一日邂逅の時用之。先規によるべき也。

帶。有文をば隱文の帶ともいふ也。有文巡方は節會行幸拜賀の時用之。劔螺劔劔には必巡方を用る也。又有文丸鞆帶は。巡方丸鞆を兼たる帶也。但節會行幸には。いたくは不用之。其外刷の時可用。行幸にも帶ニ胡錄一には有文丸鞆を用べしといへり。無文丸鞆帶は尋常諸公事に用之。蒔繪太刀ニハ無文丸鞆ヲ用也。

魚袋。公卿ハ皆金魚袋也。三節會又御襖行幸の時付之也。右腋腰程付之。

一直衣事。

攝家元服日。禁色事被ニ宣下一也。雜袍事。別不レ被レ仰之。仍不レ待ニ勅免一着ニ直衣一參内。

當家代々例也。但永德二年四月讓位時。故格別殿殿于時大納言直衣勅免事。以ニ攝政宣一被レ仰之。其時儀未ニ一決一。二條家代始。每度蒙ニ勅許一云々。委細事見ニ故殿御記一者也。又着ニ烏帽子直衣一參ニ院中一事。蒙ニ免許一可ニ進退一。而近代着ニ小直衣一參院。不レ及ニ勅免沙汰一。頗不レ可レ然事也。諸家所爲一同之間。一身不レ及ニ守レ株一。愚老又着ニ小直衣一參入了。又社參之時。不レ可レ着ニ直衣一。神躰ハ必直衣ニ而現給故也。故殿被レ仰者也。

直衣。童體の時は。白浮織物直衣。文小葵。裏濃紫也。元服の後は。白志々良綾。文浮線綾丸。裏平絹。染色隨二年齡。若年の時は紫。次薄色。或半色。次淺黄。深。有淺。老者用無紋志々良白綾。或平絹。裏はいづれも平絹白也。童躰時又同之。夏穀。文三重タスキ。色又隨二年齡。淺黄。老者生單張平絹。或着ニ用無文薄物一。烏帽子直



衣。大納言以上參院の時着之。但可<sup>レ</sup>蒙<sup>ニ</sup>勅

免<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>私者。依<sup>ニ</sup>便宜<sup>一</sup>用之。無<sup>ニ</sup>子細<sup>一</sup>。淺官位イ、人頭赤ニ烏帽子直衣。其外無<sup>レ</sup>例。

鳥帽子直衣ニ事。大井川逍遙の時。該

文永元六四口筆云。參院穀無文直衣。平絹

指貫。香帷。老者所<sup>レ</sup>着也。于時四十二歲。

大帷白。腰繼。内々上結之  
時用之。

出衣。同單。直衣始并刷之日可<sup>レ</sup>着之。各以<sup>ニ</sup>

先規<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>進退<sup>一</sup>也。袍柏見<sup>上</sup>。老者張柏。刷

之日着之。光明曆應元薄青衣。白張單。不<sup>レ</sup>出衣

云々。

指貫。童躰時。紫二倍織物指貫。地文龜甲。白  
浮線綾丸。

夏は生。用<sup>ニ</sup>腹白組<sup>一</sup>。自<sup>ニ</sup>指貫上<sup>一</sup>貫之。元服

之後。濃紫浮織物。文龜甲。或鳥礫。次薄色浮織物

或半色。薄色の紫の方。次薄色堅織物。文藤丸。或鳥礫。次薄

色。付色綾。文藤丸ニ。ワナノ藤也。堅文綾志々良。次淺黃堅織物。文藤丸。次淺黃綾。文同志々良。以裏同ニ表色。平絹。

以上其色隨<sup>ニ</sup>年齡<sup>一</sup>。或依<sup>ニ</sup>官位<sup>一</sup>可<sup>ニ</sup>進退<sup>一</sup>也。

かならずしも一々にこれを着用すべきに

あらず。夏指貫。其色同<sup>レ</sup>冬。但織物浮文は

生也。堅織物と綾とは。夏冬の差別なし。

濃色。濃紫。薄色。經紫。半色。經緯共ニ。花田。淺  
薄紫也。花田染也。ウツ

色。薄青。經青。赤色。經紫。緯鈍色。シ花ニテ染也。赤也。

指貫可<sup>レ</sup>依<sup>ニ</sup>年齡<sup>一</sup>事。以<sup>ニ</sup>峯殿<sup>一</sup>重<sup>ニ</sup>御記<sup>一</sup>載<sup>レ</sup>之。十

五歲。中納言大將時。濃紫浮文。十七歲。大納言。薄  
色固織物。十八歲。

同官。薄色。廿八歲。左大臣。實有元。綾淺黃。卅七歲。關白直衣始。  
綾固文。

承元四二十四仲基入道來談<sup>ニ</sup>古事<sup>一</sup>。又曰。御

一家不<sup>ニ</sup>必依<sup>ニ</sup>老少<sup>一</sup>。任<sup>レ</sup>心着<sup>ニ</sup>指貫<sup>一</sup>。雖<sup>ニ</sup>幼少

人<sup>一</sup>着<sup>ニ</sup>堅文織物<sup>一</sup>。綾指貫。又薄色淺黃指貫

同着之。皆藤丸。是恒事也。雖<sup>ニ</sup>老人<sup>一</sup>極晴ニ

ハ。浮文紫指貫恒事也云々。同時着<sup>ニ</sup>紫薄色<sup>一</sup>

例。宇治左府長承二年春日祭上卿<sup>于時</sup>。出

京時。着<sup>ニ</sup>紫織物指貫<sup>一</sup>。歸京日着<sup>ニ</sup>龜甲薄色

指貫<sup>一</sup>云々。十五歲以後用<sup>ニ</sup>龜甲文<sup>一</sup>例。同左

府保延四年院御登山時。年十九。着<sup>ニ</sup>薄色織物指

貫。龜甲。建曆二四卅玉葉。法性寺殿。

蒲萄染指貫。源氏物語ニ在。故入道殿云。若人ノ指貫ハ。エビ染也。イツモ着用スル也。

當時モ其分也云々。エビ染ハ面蘇芳。裏花田也。當時着用薄色指貫事歟。或抄云。エ

ビ染。經赤。緯紫也。薄色綾指貫着事。大概

廿以後可然歟。禁色殿上人着ニ紫浮文指

貫一人モ。朝夕夙夜近習輩。内々着ニ紫浮文指

物并綾無憚之由。見十二代後鳥羽院御抄。凡鳥

襷ハ尋常浮文也。綾并固文ハ不可然云々。

但近代連綿云々。凡鳥襷ナラバ必浮文。藤丸

ナラバ必固文歟。鳥襷ハ幼年文也。固文并

綾ニ鳥襷ヲ用事不可然。無其理也。元

永二年歲廿三。始着ニ淺黃織物ノ指貫。見ニ玉

林云々。

下袴。紅或白。下結時用之。

紫若薄色指貫下結之時。若年人用ニ腹白組。

指貫の上より貫之。或籠結の末を組て垂之。或又籠結無腹白ても。以ニ紫組一筋一結之也。淺黃指貫ニハ。白組一筋用之。

帶。下襲の切を用る故。冬は浮線綾の文の

綾白瑩。裏は遠文たて菱。濃打也。夏は穀

立菱。蘇芳染也。源氏物語の所見は。直衣の

切を帶に用たるよし見えたり。聽ニ直衣入

は。猶直衣のきれを用べきにや。主上は。

御直衣のあまりを。御引帶に用給ふ故也。

愚老近年は。白平絹冬練。夏生張。をたゝみて帶と

せり。下がさねのきれならば。白重を老人

は着する故也。又直衣も。平絹を着用すれ

ば。いづかたへもかよふべきとおもへり。

詩繪野太刀。革帶也。大將直衣始并御幸供

奉の時用之。可レ依ニ先例也。大納言直衣始

にも。猶用ニ野劍之由。見寛治承久三年正月玉

葉。又長者之後春。日詣衣冠の時。帶ニ詩繪野

太刀。爲<sub>レ</sub>代々例<sub>一</sub>之由。見<sub>ニ</sub>寛喜二年二月同御記<sub>一</sub>。

半靴。御幸供奉。直衣騎馬の時用之。

一布袴事。反古裏圓明寺<sub>（實經殿御筆）</sub>。布袴ハ無<sub>ニ</sub>別子細<sub>一</sub>歟。

<sub>只先如<sub>ニ</sub>衣冠<sub>一</sub>下衣とも着し。サテ其上<sub>ニ</sub>下重き如<sub>ニ</sub>束帶<sub>一</sub>着<sub>ニ</sub>玉帶<sub>一</sub>。</sub>常袍に着<sub>ニ</sub>下襲指貫<sub>一</sub>。是を

布袴といふ。着用事は。可<sub>レ</sub>隨<sub>ニ</sub>先規<sub>一</sub>也。布

袴の時は無文丸鞆帶。野劔を帶するよし。

文治三年十月の御記に見えたり。又布袴に

不<sub>ニ</sub>帶劔<sub>一</sub>事も有也。

天永二正六位<sub>（實經殿御筆）</sub>。予今日在<sub>ニ</sub>簾中<sub>一</sub>。大臣不參之

上。御物忌故也。今日着<sub>ニ</sub>布袴<sub>一</sub>。<sub>見<sub>ニ</sub>知足院殿御記<sub>一</sub>。</sub>直衣

布袴といふは。直衣に下襲指貫を着する事

也。源氏物語にも見えたり。邂逅事也。<sub>（源光朝臣）</sub>應永

廿七<sub>（三イ）</sub>二九勝定院贈太政大臣嵯峨寶幢寺供

養之時。被<sub>レ</sub>着<sub>ニ</sub>直衣布袴<sub>一</sub>。密々有<sub>ニ</sub>顧問事<sub>一</sub>。

愚老未練之間。不<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>子細<sub>一</sub>。大略任<sub>ニ</sub>時宜<sub>一</sub>。

計<sub>ニ</sub>申之<sub>一</sub>。其時着<sub>ニ</sub>紅梅直衣下襲指貫<sub>一</sub>給。又

蒔繪劔。紫地平緒を用られし也。布袴には。

用<sub>ニ</sub>野劔<sub>一</sub>歟。但治安二年五月廿六日<sub>（關白競馬）</sub>。

下官布袴着<sub>ニ</sub>細劔<sub>一</sub>之由。見<sub>ニ</sub>小野宮右府

記<sub>一</sub>。又春日詣御前上官。少納言は布袴用<sub>ニ</sub>

蒔繪細劔平緒<sub>一</sub>云々。布袴用<sub>ニ</sub>蒔繪細太刀平

緒<sub>一</sub>事。粗有<sub>ニ</sub>准據例<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>難者歟<sub>一</sub>。直

衣着<sub>ニ</sub>下重<sub>一</sub>事は。度々儀。小右記に見えたり。

一狩衣直衣事。<sub>常稱<sub>ニ</sub>小直衣<sub>一</sub>也。</sub>

當家丞相已後着之。凡家は幕下之後着之。

文色ハ大略同<sub>ニ</sub>狩衣<sub>一</sub>。尋常着用は浮文織物。

夏生。冬練也。堅文織物并練薄物。夏冬通

用。浮文はしげく。堅文は遠也。但依<sub>ニ</sub>年齡<sub>一</sub>。

可<sub>ニ</sub>相計<sub>一</sub>也。風流小直衣は。無<sub>ニ</sub>法令<sub>一</sub>。且可

依<sub>ニ</sub>先規<sub>一</sub>也。裏は平絹。練生任<sub>ニ</sub>心<sub>一</sub>。色は

可<sub>レ</sub>隨<sub>ニ</sub>面色<sub>一</sub>。袖結はうすひら。蘇芳綫。宿老

は淺黃色濃薄打交。又堅固細々。長絹小直

衣ニハ。白絲をよりて二筋ならべて結とす。無<sub>二</sub>定法<sub>一</sub>。狩衣指貫に下結は常事也。小直衣ニ下結する事。先規未<sub>二</sub>勘出<sub>一</sub>之。衣單等かさぬる事は。久安四年三月宇治左府高野詣記に見えたり。於<sub>二</sub>私亭<sub>一</sub>内々對<sub>二</sub>面人<sub>一</sub>之時。小直衣ニ前張ヲ着スル也。猶褻時。スバシノ平絹ノ袴ヲキル。夏冬同。練薄物ト云ハ。タテハ生。ヌキハネル。織ヤウハ穀ノ如シ。モジリテラル也。

### 一狩衣事。

狩衣。其色不<sub>レ</sub>定。若年の時は。紅梅萌木の浮文織物。盛年は遠文。堅。十五未滿時は。袖紬毛拔形。若人はうすひらの組。萌木紫紅等の打交。次は紫匂。次は薄色等也。淺黄などをもちゐるほどにならば。小直衣を着べき也。狩衣は大納言迄着用する也。裏は面色を用べき也。名ある狩衣は。又勿論。是

はたゞ朝夕尋常着用事を云也。宿老は白よりクリ也云々。口傳一冊ノ反古うらにあり。但不<sub>二</sub>打任<sub>一</sub>事歟。

大帷。尋常用之。晴時は可<sub>レ</sub>着ニ衣并單等。指貫下袴。上ニいふにおなじ。

烏帽子。當家はもろ額也。四十以後。やうやうさはすべし。

### 一水干事。

紗にても。平絹生にても。又色は白にても。何色にても。大納言の時まで内々着用之。陽明の家ニハ。大臣又前途の後も如<sub>二</sub>長絹直垂<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>用之<sub>一</sub>。尤不審也。

### 一衛府具足事。

攝家中少將より行幸供奉す。公卿は二位三位中將。中納言中將大將の時までも。帶<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>供奉す。至<sub>二</sub>大臣大將<sub>一</sub>者。雖<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>胡籙<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>老懸<sub>一</sub>。昔雷鳴陣の時。大臣



大將帶<sup>平イ</sup>胡錄。而不<sup>平イ</sup>懸<sup>右イ</sup>綬云々。爰鹿苑院入

道相國永德二年左大臣・大將の時。行幸供

奉被<sup>レ</sup>稱<sup>ニ</sup>別勅之由。懸<sup>レ</sup>綬帶<sup>ニ</sup>胡錄<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>供

奉。別段事也。更不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>傍例。見<sup>ニ</sup>故殿御

記<sup>ニ</sup>者也。

冠。行幸の時。卷纓懸<sup>レ</sup>綬。

袍。羽林の時。闕腋。公卿以後縫腋帶<sup>ニ</sup>弓

箭<sup>一</sup>。

弓。蒔繪。若年の時以<sup>ニ</sup>紅梅檀紙<sup>ニ</sup>卷之。宿德

人用<sup>ニ</sup>白紙<sup>ニ</sup>。後鳥羽院仰云。隨<sup>レ</sup>年卷<sup>ニ</sup>紅梅

非<sup>ニ</sup>正義。只何も可<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>白加波。其色薄紅梅

也云々。

平胡錄。木地螺鈿胡錄。<sup>紫革  
裝束</sup>行幸日用之。蒔

繪螺鈿胡錄は。蒔繪螺鈿と兩方通用。又行

幸時帶之。蒔繪平胡錄。例幣行幸用之。帶<sup>ニ</sup>

螺鈿太刀<sup>ニ</sup>時も。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>妨云々。

壺胡錄。讓位節會等警固時。衛府公卿帶之。

但大將檢非違使別當は。不<sup>レ</sup>負<sup>レ</sup>壺云々。<sup>(安德)  
治承</sup>

五正三右  
大將良通。

箭。水精筥。鷺羽をはぐ。以<sup>ニ</sup>紅梅紙若白紙<sup>ニ</sup>

卷之。箭數平胡錄にはおとし矢まで廿一

筋。壺胡錄ニハ七筋云々。

間塞。薄様也。妻紅。

丸緒。蘇芳綬。上達部次將。遠所行幸帶<sup>ニ</sup>野

劍<sup>ニ</sup>の時。引<sup>ニ</sup>丸緒<sup>ニ</sup>云々。舊記結<sup>ニ</sup>表帶<sup>ニ</sup>とも

あり。同事なり。五位次將必結之云々。

一鞍具足事。

鞍。倭。

水精地。天永三春日詣  
中納言中將。

鏡地。赤銅。

黃地。治承(高倉)三朝  
觀。三位中將。

蒔繪。

表敷。赤地  
錦。

大滑。紫革縁。行  
幸時用之。

(安德)  
治承

ヘス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

ハス

御幸及春日詣等之時用之。行幸日地下前  
駟。不<sub>レ</sub>指<sub>三</sub>泥障<sub>一</sub>。攝政乘用馬。同不<sub>レ</sub>指<sub>三</sub>泥

障<sub>一</sub>之由。見<sub>三</sub>玉葉<sub>一</sub>。

鞞。

連着。承安(高倉)五朝  
觀。三位中將。

小總。

辻總。

紫末濃。仁平四春日  
上卿乘替。

小畝連着。天永二春日詣。  
中納言中將。

鐙。

壺。

舌長。

半舌。

力皮。赤。

貫鞞。豹皮。

轡。鏡。

手綱。

蘇芳綵。

紫綵。

棟綵。

差繩。

白二筋。

菊打交。大治五朝觀。  
少將賴長。

萌木勾

打交。在總。治承元  
十二年幸。

山吹。元永三春日詣。  
中納言中將。

紫村濃。

仁平四春日祭上  
卿。中納言隆長。

腹帶。白。

由木搦。ユキカラミ

鞍覆。

打鞍覆。薄物。有<sub>レ</sub>繻。天永三春日詣。中納  
言中將。萌木浮線綾鞍覆。

鞞。蒔繪。 柄立袋。

舍人指<sub>三</sub>懷中<sub>一</sub>。スデカヘ  
テ指之。 狩衣の右腋より取所

を出也。或右手に持之。或指<sub>三</sub>頸紙<sub>一</sub>。實房  
説。 主人

束帶時。自持<sub>レ</sub>鞞事ハ稀事也云々。

一狩襖事。

たゞあをともしふなり。ぬひ物をもし。く

くりぞめにもする也。又織物をも用ふ。織

襖と云。此事にや。或説。織襖と號する狩

衣。二重織也云々。

一魚袋。江次第云。魚袋付<sub>二</sub>右第二石<sub>一</sub>。隨<sub>二</sub>人肥

瘦。或付<sub>二</sub>第一石<sub>一</sub>。或付<sub>二</sub>第二石<sub>一</sub>。或付<sub>二</sub>第三

第二石間腰<sub>一</sub>云々。

一劍色々事。

元永四正一御記曰。關白着<sub>二</sub>飭劍代<sub>一</sub>。其勢如<sub>二</sub>螺鈿<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>金  
懸<sub>二</sub>伏輪<sub>一</sub>。紫檀地。上唐草。凡指具柄用<sub>二</sub>瑠璃露<sub>一</sub>。同。定  
舊物歟。殊  
勝物也。

飭劍。

三節會。内宴。御禊。行幸等公卿用之。玉

傍劔代。號<sup>ニ</sup>內宴劔<sup>一</sup>。諸節會公卿又用之。其

裝束見<sup>ニ</sup>承元四正峯殿御記<sup>一</sup>。土御門  
號<sup>ニ</sup>內宴劔<sup>一</sup>。諸節會公卿又用之。其

螺鈿長劔。地は沉地。紫檀等也。損貝。行幸。公卿以下着之。

節會日。諸衛將佐用之。又節會日。執政人

號<sup>ニ</sup>代之代<sup>一</sup>用之。故殿用給。恩老度々用之。御堂御流。元三

之間帶<sup>ニ</sup>螺鈿<sup>一</sup>。但於<sup>ニ</sup>殿上人<sup>一</sup>者。用<sup>ニ</sup>詩繪<sup>一</sup>也。

樋螺鈿劔。詩繪と螺鈿と通用劔之由。見<sup>ニ</sup>峯殿御記<sup>一</sup>。又金樋は過差之儀也。行幸公卿着

用之。

詩繪螺鈿劔。遠所行幸。公卿帶之。又拜賀之

時。必用之。

詩繪劔。號<sup>ニ</sup>平塵劔<sup>一</sup>。尋常着用之。詩繪細劔

同事也。

螺鈿野劔。近來有<sup>ニ</sup>毛拔形<sup>一</sup>。金也。將佐行幸時

用之。又春日等遠所行幸。公卿次將若大將

等着之。攝家一流之所爲也。其例。

永長二。春日行幸。左大將知足院殿。天永二。同。中納言中將法性寺殿。承元

四。同。左大將殿。元德二。同。左大將後分院。同年。日吉

詩繪野劔。革帶也。大將等直衣始。并御幸供奉。直

衣之時帶之。大納言直衣始。猶用<sup>ニ</sup>野劔<sup>一</sup>。有

例。

平鞘劔。細々出行時。入<sup>ニ</sup>車中<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>人。不

帶之。上皇襲御幸時。被<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>御車<sup>一</sup>云々。詩繪野劔。或號<sup>ニ</sup>平鞘

劔<sup>一</sup>。號<sup>ニ</sup>毛拔形太刀<sup>一</sup>。或號<sup>ニ</sup>革緒太刀<sup>一</sup>之由。

載<sup>ニ</sup>東山左府名目抄<sup>一</sup>。可<sup>レ</sup>尋之。

一平緒色々事。

紫綵平緒。節會。行幸。拜賀等之日用之。又

若年之人尋常用之。

蘇芳綵平緒。執政之人用之。

青綵平緒。五月最勝講用之。而<sup>ニ</sup>和三年正

月二日朝覲行幸。後圓光院關白<sup>多</sup>。帶<sup>ニ</sup>

沉地螺鈿劔。瑠璃有文巡方帶。青綵平緒云々。

櫛綵平緒。承元四八廿春<sup>一</sup>幸。左大將峯殿用<sup>ニ</sup>櫛綵<sup>一</sup>給云々。

棟綏平緒。

紺地平緒。

尋常用之。蒔繪太刀ニハ大略用

之。

萌木平緒。

紫地平緒。當家相傳之。故准后(經)被<sub>レ</sub>進<sub>一</sub>。勝定院贈相國。甚美麗物也。

紅梅地平緒。

染裝束時用之。嘉保二臨時客。後房

二條殿着ニ火色下襲紅梅地平緒<sub>一</sub>給。左府被<sub>レ</sub>給<sub>一</sub>。

難云々。或抄云。火色下襲ニハ必用ニ紺<sub>一</sub>平緒<sub>一</sub>云々。

緒<sub>一</sub>云々。

小忌平緒。白地有<sub>レ</sub>繡。大嘗會着ニ小忌<sub>一</sub>時用

之。

鈍色平緒。凶服用之。諒闇時着之。

白地平緒。小忌之外不<sub>レ</sub>用之。小忌平緒同事

也。

一玉帶色々事。

無文巡方帶。天子着ニ帛御服<sub>一</sub>の時用給。凡

人不<sub>レ</sub>用之。後堀河院御小帶。當家相傳之。

永享比被<sub>二</sub>借召<sub>一</sub>之後。遂不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>返下<sub>一</sub>。紛失之由。後日被<sub>レ</sub>仰之。無念事也。

有文巡方帶。隱文同之。節會行幸用ニ螺鈿太

刀<sub>一</sub>之時必用之。又拜賀時用之。

有文丸鞆帶。有文巡方。丸鞆通用之物也。

非<sub>二</sub>節會行幸<sub>一</sub>之時。有<sub>レ</sub>便云々。

無文丸鞆帶。尋常着用之。蒔繪太刀ニ此帶

宜也。

馬腦帶。四位人尋常用之。但保元三內宴日。後白河

關白法性寺殿。赤色袍。馬腦帶。又安元元四月侍

從良通。拜賀用ニ小馬腦帶<sub>一</sub>。五位人也。又應德三正

一匡房。于時非參議大弁。用ニ馬腦帶<sub>一</sub>云々。

犀角巡方帶。節會。行幸。四位五位用之。又

弁官拜賀等用之。

犀角丸鞆帶。五位人尋常用之。

白石帶。大外記用之。

金青玉帶。承曆二七廿八相撲召合。殿上人



用ニ巡方帶一而長忠用ニ金青玉云々。匡房記難之。

瑠璃帶。治承四四十九。信範記。藏人權佐申云。

御即位日主上可レ召有文玉御帶不レ候。先

院奏之處。如レ然之帶不ニ覺御。さやうにち

ひさき御帶候者。可レ被レ獻之由。院宣候者。

召ニ覺所レ在帶等。中有文瑠璃玉ちいさき御

帶有ニ一筋。即付ニ光長被レ獻了。

斑犀帶。鶴通天。駕通天。公卿諒闇等凶服着用之。

烏犀帶。六位用之。

一事事。

貞信公絲毛。元永二年三月七日中宮御料自

院借召之。稱ニ破損之由。不レ被レ獻之。爰上

皇仰云。借請之條不ニ落居一也。累代無ニ止

事。一家皇后乘來車也。而立他家不覺后。

其料借請誠可レ惜也云々。御時記。

檳榔毛。細々束帶御出之時被レ召之。

赤色簾。錦緣。江記云。執柄以後紫織物。以前蘇芳織物。蘇芳末濃。下簾

纒綢端帖。或時被レ用青簾。草綠。青末濃下

簾。金銅金物榻。

檳榔相指。今案。太閤御時召之。

御車内黑漆。在金物。垂木塗レ朱。物見外上連

子。物見緣黑漆。在金物。物見下檳榔毛。袖橫緣

上唐草。綠色彫透之。袖下。同彩色。地

漆。在所(赤イ)。袖内橫緣。菱針。簾。蘇芳緋絲。紫七緒。

綾。小簾。四枚四緒。懸結八筋。下簾。有緋。廂結細

美布。高欄如レ例。在金物。御榻如レ常。在金物。經綢

端帖。京延。開戸。黃金物。

保延八幡詣。下簾蘇芳。有レ緣金物。依ニ一日

晴一歟。尋常青糸濃。無レ緯。

唐庇。晴時召レ之。

上葺。檳榔毛。廂并腰總。同。立板外。綠色。同内。

押接。唐毛。袖外。綠色。物見。落入。外御簾形。簾。蘇

綸糸。紫七緒。下張。白色紙。小簾四枚。蘇芳緋絲。同四緒

緣懸<sub>レ</sub>緒。以下同<sub>レ</sub>上。上廂結。絹。御榻。驚

入角。有<sub>二</sub>下簾<sub>一</sub>。蘇芳浮線綾。以<sub>二</sub>色々絲<sub>一</sub>縫<sub>二</sub>唐花唐鳥<sub>一</sub>。總黃金物。下簾。筒貫在<sub>二</sub>木入<sub>一</sub>金物或普通。蘇芳下簾被<sub>レ</sub>用。軟。連著有<sub>二</sub>總<sub>一</sub>。綱。打交唐綾。在<sub>二</sub>總志<sub>一</sub>。晴時上<sub>レ</sub>部。或白如<sub>レ</sub>常。

苜。并廂總<sub>一</sub>件總。或用<sub>二</sub>紫末濃<sub>一</sub>。等用<sub>二</sub>白絲<sub>一</sub>。其上打<sub>二</sub>金物<sub>一</sub>。丸文。袖以<sub>二</sub>金銅<sub>一</sub>透之。立板外打<sub>二</sub>金物<sub>一</sub>。

付<sub>二</sub>風流居玉<sub>一</sub>。

廂。號<sub>二</sub>尼眉<sub>一</sub>。御直衣之時召之。壽永<sub>一</sub>。  
(號ニニ字治入。小直衣乘ニ庇車。)

網代。上白。袖。龜甲。立板。小八葉。簾。薄青絲。藍革五緒。裏

白。小簾。表青地。錦綾。裏白綾。物見。外御簾形。內繪落入。立板。綫。內押

如<sub>レ</sub>常。金物。雨皮付ニ。散物。メツキラサンタ。ル金物ヲ云也。楊。青

末濃下簾。或有<sub>二</sub>被<sub>一</sub>略之。時。依<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>。

半部。是猶網代之中也。御直衣非<sub>レ</sub>晴之時召之。

網代。上白。袖白網代。以<sub>レ</sub>漆畫<sub>二</sub>牡物見立板內<sub>一</sub>。同<sub>二</sub>廂<sub>一</sub>。

御車。大略同<sub>二</sub>廂御車<sub>一</sub>。金物。外方大臣以前不<sub>レ</sub>打。不<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>

御下簾<sub>一</sub>。歟。

網代。褻時召之。下簾尋常也。

網代。上白。袖如<sub>二</sub>半部<sub>一</sub>。簾。如<sub>レ</sub>常。立板大八葉。

執政之時稱<sub>二</sub>網代始<sub>一</sub>。召<sub>二</sub>具布衣隨身<sub>一</sub>。時用

之。其以後褻時每度用之。不<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>移馬<sub>一</sub>。上臚

隨身烏帽。猶乘<sub>二</sub>移馬<sub>一</sub>。在<sub>二</sub>車後<sub>一</sub>。最密々之時。

或牛童遣之。檳榔八葉等不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>外車宿<sub>一</sub>。

庇半部網代等立之。建曆元年八月十二日

玉藥。抑予網代車日者所<sub>レ</sub>用之文。只不<sub>レ</sub>兼<sub>二</sub>

大將<sub>一</sub>之時車文也。件車文ハ。三匹タスキ。依<sub>二</sub>不

審<sub>二</sub>尋<sub>一</sub>問或者。故入道殿。故殿御時造工所別當也。之處。申云。

文治二年入道殿御攝錄之初有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>。故內

大臣殿令<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>此文<sub>一</sub>給了。謂此文は。中は大八葉。袖はぼうたんの

立揚<sub>二</sub>其後建久二年故殿渡<sub>一</sub>御一條入道殿<sub>一</sub>

之時。于時大納言大將也。文治五年十月廿日。令<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>左大將<sub>一</sub>給也。又沙汰同被<sub>二</sub>

用<sub>二</sub>此文<sub>一</sub>了。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>不審<sub>一</sub>事也云々。爲

備<sub>二</sub>後代<sub>一</sub>記之。繪樣又續入之。建保四年二

月十三日。同御記。未時計參內。網代車依<sub>二</sub>破損<sub>一</sub>。

召<sub>二</sub>中將公雅車<sub>一</sub>用之。懸<sub>二</sub>下簾<sub>一</sub>。用<sub>二</sub>殿上

人若八葉車<sub>一</sub>之時。先例如<sub>レ</sub>此。故實云々。私

案云。唐庇。

唐棟。有庇。

執柄春日詣并御褰行

幸乘之。又任太政大臣拜賀用之。昔私家有

之。破損之後。自中古申出院御車所用

也。

檳榔庇。有庇。

太閤之時乘之。此車知足院殿

長承比始而廻意巧令造給。眉ハ常ノ眉

ノ角入タル也。凡家太政大臣之時或用之。

眉如唐棟。故是ヲモ號ニ眉云々。

網代庇。

唐棟。有庇。

號ニ眉。執政并太政大臣

着冠直衣之時用之。小直衣ニテ乘用。又

有例。見上。

半部車。

網代物見開之。物見上有半部。眉如常八葉。有八葉。

大將之時乘之。

大臣攝錄時猶用之。攝家大臣以前。不<sub>レ</sub>打

外金物云々。直衣非晴之時用之。

網代車。

無庇。眉如常八葉。物見不開之。無八葉。

自雲客時至大臣

并攝關時用之。各有差別。褻時乘之。大將

乘用車號<sub>ニ</sub>違物見<sub>一</sub>。攝家大臣以前不<sub>レ</sub>打<sub>ニ</sub>外

金物。凡家打之云々。當時八葉車。大略同網代者歟。

一隨身人數事。

付衛府長小雜色。

自羽林至中納言中將。衛府長一人。小隨

身四人。或二人。大納言時衛府長一人。小雜

色四人。

納言兼大將時。番長一人。

左右依主人官。

近衛五

人。

以上

大臣大將時。府生一人。番長一人。

近衛六人。

以上

大臣辭大將之後。衛府長

一人。

大臣兵仗時。左右番長各一人。左右近衛各

三人。

合八

關白。左右府生各一人。左右番長

各一人。近衛六人。

合十

此外拜賀之日。各具

一員。

將監將曹府生等。

可<sub>レ</sub>見舊記。

一同裝束事。

拜賀日。

官人束帶。壺胡錄。番長以下褐衣。白狩袴。

壺脛巾。狩胡錄。

承久二年七月玉藥。大納言拜賀。番長着三蘇芳色。壺胡錄。近衛白狩袴。

元三日。七日。又同。

官人以上束帶。壺胡錄。番長。左二藍狩袴。右朧木狩袴。壺胡錄。近衛紅梅狩袴。十六日以下諸會白襖袴。或十六日紅梅袴。

讓位節會同日之時。用三節會裝束。但立太子任大臣等。官人着三褐衣。云々。

行幸日。

官人以下褐衣。染分狩袴。左蘇芳。右朽葉。狩胡錄。莫脛巾。讓位御所各別之時。劔璽渡御。用三行幸裝束。云々。天永二正二朝覲行幸。大殿參

院給。無三行幸。供奉官人束帶。番長以下染分袴也。云々。

御幸日。一員束帶供奉。

官人以下褐衣狩袴。左二藍。右朧木。近衛。白襖袴。或染分袴。元三中紅梅袴。

尋常。

官人以下褐衣。白襖袴。番長狩袴。左二藍。右朧木。近衛白襖袴。

一衛府長事。號三雜色長。

大納言以下平禮布衣。大臣不兼三大將。節會日。束帶壺胡錄。號三香。取官人。叙位除目日。褐衣冠。尋常平禮布衣。

一小隨身事。

中納言中將以下衛府官時具之。

行幸日。

褐衣狩袴。左二藍。右朧木。狩胡錄。莫脛巾。或染分袴。

承安五正朝覲行幸。三位中將。朽葉。朽葉。安元元四賀茂行幸。二位中將。朽葉。朽葉。

節會日。

褐衣。紅梅袴。

尋常。

褐衣。白狩袴。或着三蘇芳色。見。治承二御記。



一小雜色事。

大納言時具之。

布衣。

此間房通拔之。依有極秘條々也。

一進禁裏仙洞書狀并請文事。當家口傳。

晴禮。

事委細可參仕言上之由。可令洩

奏給。某誠惶誠恐頓首謹言。或某誠恐頓首謹言上。

月 日

官姓某上

頭辨殿 可宛ニ管領頭ニ

日野中納言殿 可宛ニ執權卿ニ

表書同前

官姓某上

以ニ一枚 裏紙如レ常 書之。以ニ二枚ニ爲ニ禮紙。其

文又加ニ禮紙一枚。以ニ一枚ニ爲ニ立紙。初度

などは如レ此嚴重可レ然。

同請文様。

仰旨跪以奉候畢。是以下同前。但請文ニハ終ニ不レ書ニ宛所ニ歟。

内々略儀申入事由。有御免分也。

事之由。或以下旨。可令洩披露給。或可レ

令ニ申入給上。

月 日

某上

頭辨殿 禁裏或内々儀。奥ニハ略宛所表ばかりに書之。

日野中納言殿同前。

以ニ一枚ニ書之。以ニ一枚ニ爲ニ立紙。如レ常。或

說。以ニ二枚ニ爲ニ立紙。引レ墨如ニ女房狀。但

近代後普光園所爲等不レ然歟。

同御請文様。

仰旨跪以奉了。或畏承了。

自餘同前。

宛ニ女房ニ書狀様。

よし。御心え候べく候。あなかし

く。

表書。禁裏勾當内侍どのへ。別當どのへ。或左衛

門督どのへ。

以ニ二枚一書之。爲ニ立紙。上下ヲ撚テ。引レ墨如レ常。

同請文。

かしこまりてうけ給り候ぬ。――よし

御心え候べく候。あなかしく。表書禁裏勾當内

侍どのへ御返事。別當どのへ御返事。或左衛門

督どのへ御返事。

私書札禮節事。

當家所爲攝家事者。自他不レ憚。如ニ弘安禮

書之。清花輩。同官同位之時。通ニ書狀一無ニ

子細。名字等爲ニ同輩之禮。故也。又清花

丞相攝家納言之時者。不レ遣レ狀。大臣は判。

納言は名字たる故也。所用事者。以ニ使者

可ニ往來一也。或屬ニ知音人ニ可レ令ニ傳達一也。

家禮名家者。以ニ奉書一仰之。或女房狀。謹

言判などかく程の時分にあらずは。書狀は

一向斟酌可レ然也。攝家丞相之時。名家大

納言以下狀。宛ニ家司ニ可レ得ニ御意ニ之由書之。多分之儀なり。然而依レ人如ニ弘安禮一恐惶謹言と書之人あり。其時に不レ及ニ返事。以ニ使者ニ可ニ返答ニ之由。故殿被レ仰也。又攝關時猶如ニ弘安禮一書之人あり。沙汰之外事也。應永二年時分。葉室中納言宗顯卿進ニ故殿一書狀如ニ弘安禮一。某恐惶謹言と書之。鹿苑義常院殿令ニ聞及ニ給。被レ仰ニ緩怠ニ之由。可レ被レ召レ職之趣被レ仰之。委細見ニ故殿御記。其時分名家大納言以下一人も以ニ書狀一申入たる人無之。及ニ末代一者歟。彌以可レ有ニ過分義一也。計ニ時宜一無ニ巨難一之様可レ被ニ進退一也。應永三年十一月比。徳大寺入道相國進狀云。恐惶謹言常實上。故殿御報。恐々謹言判と令レ書給。彼禪門宿老たるによりて。別而以ニ芳心一如レ此之書様。是等者臨時處分也。向後も如レ此事者無レ難也。依

人隨時。可進退也。

弘安禮。僧正者准參議也。然而南都兩門跡。山門寺門之三門跡等者。其門下各有清華僧正。頗如君臣之禮。然而雖爲同僧正。爭無其差異哉。依是中國相國之所存。攝家僧正可准大臣。清華僧正可准大納言云々。其も一旦之會釋計也。非公儀之上者。一同難用也。仍自俗家書札等可有臨時之處分也。次又近代有准后僧正。古來准后禮節とは無之。然而故攝政所存。於准后者。可有一段禮之由。被申置之。仍近代武將所存等。大略此分也。但准后も可依其人也。北畠大納言親房卿も於南朝爲准后云々。近日妙法院准后者。種姓爲德大寺。然而爲普廣院贈相國之猶子。花族歟。弘安制符ニ存家々勝劣。宜令斟酌云々。自他各可有所有事

也。愚老庭訓分。以次可書置之。

攝關時。遣准后僧正。恐々謹言。名。遣攝家准后僧

正。恐惶謹言。判。但依人可遣清華以下

僧正。謹言。判。

大臣時。遣准后僧正。猶可レ用同輩禮。爲宿德

遣攝家僧正。恐々謹言。名。遣清花以下僧正。謹言。判。

大納言時。遣准后僧正。恐々謹言。名。遣攝家僧

正。恐々謹言。名。遣清花以下僧正。恐々謹言。判。遣諸僧

正。謹言。判。

一當家相傳十二合文書事。

太宰。即位灌頂印明事。大嘗會神膳。玉林抄

等納之。

小宰。恒例臨時公事次第。并節會笏紙等納

之。此中後京極殿三節次第。實錄峯殿大嘗會次

第六帖。卯日神膳次第一卷等秘書也。

大司空。節會抄也。實錄松殿口傳物召音。圓明寺

殿三節會御抄等在之。

小司空。官奏抄也。荒奏和奏等屈行膝行作法。進退口傳故實等<sub>レ</sub>在之。但近代中絶公事也。不可<sub>レ</sub>立用<sub>一</sub>者歟。

大司寇。叙位執筆抄也。舊次第新抄等加入之。

小司寇。女位執筆抄也。<sub>忠通</sub>法性寺殿以來執筆事。殊執<sub>レ</sub>之可<sub>二</sub>懇見<sub>一</sub>也。

小司徒。除目抄也。大間成文抄。<sub>後京御抄</sub>魚秘抄寫本<sub>後京御筆</sub>納之。

大宗伯。又除目抄也。記錄抄等并魚秘抄。<sub>正本イ月輪御筆</sub>納之。

小宗伯。又除目抄也。直廬叙位除目抄等加<sub>二</sub>納之<sub>一</sub>。

今三合。<sub>大司徒。大司馬。小司馬。</sub>應仁之亂於<sub>二</sub>毘沙門谷<sub>一</sub>燒失畢。此中一合者。自<sub>二</sub>以前<sub>一</sub>於<sub>二</sub>三條家門<sub>一</sub>被<sub>二</sub>借失<sub>一</sub>了。

當家相傳正記事。

玉葉。八合。月輪禪閣自筆御記。<sub>初寫本也。</sub>二條家相傳寫本號<sub>二</sub>玉海<sub>一</sub>。

殿御記。一合。後京極攝政自筆御記。<sub>良親王御筆</sub>

玉藥。七合。光明峯寺禪閣自筆記。<sub>實經</sub>

以上三代記真本。圓明寺殿爲<sub>二</sub>三家嫡流<sub>一</sub>而相傳給者也。

口筆。五合。圓明寺殿御記。<sub>實經</sub>仰<sub>レ</sub>人<sub>二</sub>多被<sub>レ</sub>書之<sub>一</sub>。故名爲<sub>二</sub>口筆<sub>一</sub>也。

愚曆。五合。後光明峯寺攝政御記。<sub>家藏</sub>

玉英。一合。後芬陀利華院關白御記。<sub>經廬</sub>

荒曆。六合。故殿御記。<sub>經廬</sub>

此外棲心院殿芬陀利華院殿御記等一合在<sub>二</sub>於<sub>一</sub>一條文庫<sub>二</sub>紛失<sub>一</sub>了。

家門末子入<sub>二</sub>室門跡等<sub>一</sub>事。

常住院。此院師迹。當時聖護院管領也。而良<sub>之イ</sub>

慶良瑜兩准后置文書札等明鏡也。向後有<sub>二</sub>

其器用<sub>一</sub>者。入室不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>豫儀<sub>一</sub>者哉。

大乘院。尊信<sub>室榮寺洞院攝政息。</sub>慈信<sub>大善三昧院圓明寺殿御息。</sub>兩僧



正置文并孝覺已心院後一

孝圓後報恩院

僧正

等書狀在之。當時尊僧正爲門主。令現

在之上者。不<sub>レ</sub>及異論。又經覺大僧正與

家門如魚水。更<sub>レ</sub>不及子細。九條若公入

室。是又<sub>レ</sub>不及豫儀。今僧正房覺爲二條

大閑息。以三室町持通殿子時前猶子分被入室。

非分之儀也。僧正房其子細者。又被覺悟

之人也。

妙香院。此師迹。當時青蓮院管領也。然而不

可<sub>レ</sub>離此家門之由。尊道親王書札。同尊

圓僧正證狀。以上康永元院宣以下明鏡之上者。

於子孫有<sub>二</sub>其器用<sub>一</sub>者。申談門主。且申

公方可<sub>レ</sub>遂入室。定不<sub>レ</sub>可有豫儀者歟。

隨心院。代々常家由緒。不<sub>レ</sub>及子細。故門主

祐嚴准后。今門主嚴實僧正。爲恩息之上

者。不<sub>レ</sub>可有<sub>二</sub>不審<sub>一</sub>者也。

曼珠院。號三竹內故門主良什准后。今門主良鎮大

僧正。二代已令相續之。有<sub>二</sub>其器用<sub>一</sub>者。向後可<sub>レ</sub>令入室也。

實乘院。號三岡時故門主桓昭。桓澄。早世。兩僧正令

相續。子細同上。

梅津是心院。大梅和尚門徒比丘尼也。椿山

大姉。後普光國院貞惠殿御息女與<sub>二</sub>故准后<sub>一</sub>有<sub>二</sub>知己之好<sub>一</sub>。

有<sub>二</sub>契諾之儀<sub>一</sub>。仍今院主者恩息令入室也。

先々二條家管領在所也。寺領者美濃國市橋

庄。今院主亂已後令在庄也攝津國小戸西庄。美作國打

穴庄。與三和國寺開山塔崇壽院有契約各支證別在之。

嵯峨禪恩院。惠林寺。禪宗比丘尼寺。五山

之一也。當院者雖爲<sub>二</sub>其塔頭<sub>一</sub>。相計本寺

者也。應仁之亂。寺家滅亡畢。寺領者因幡國

鳥取吉方鄉。山名被管領請地也播磨國石見鄉。明石郡也等

也。此亂世以後。有名無實也。住持二代。愚老比丘尼相續之寺院。令<sub>二</sub>本復<sub>一</sub>者。兒女子中可

令入室也。

同光臺寺法華寺門徒尼衆寺也。當時住持者。愚息小尼知行也。寺領者越前國安居保。別納吹圓名。其外能登國。伊勢國武成名等也。本寺者應仁亂燒失。頗有名無實也。

一家門管領寺院事。

報恩院。

在法性寺。月輪殿御草創有御願

文。

後京極殿御筆。

當時不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其在所<sub>一</sub>。念佛供僧六

口。

此中一口九條家門押領之也。

每度以<sub>二</sub>補任<sub>一</sub>定<sub>二</sub>仰其人<sub>一</sub>。

供米者。丹波國賀舍庄內。上人分六十石也。

本家ハ二條家領也。

見<sub>二</sub>峯殿御置文<sub>一</sub>。然而此亂中。守護

被管人致<sub>二</sub>濫妨<sub>一</sub>。有名無實也。

光明峯寺。

在昆沙門堂谷。

峯殿御終焉之地。十三重塔。

納<sub>二</sub>御遺骨<sub>一</sub>。而應仁之亂。寺家拂<sub>レ</sub>地燒失。寺

領小鹽庄。又爲<sub>二</sub>畠山右衛門佐<sub>一</sub>所<sub>二</sub>押領<sub>一</sub>。依

<sub>レ</sub>是供僧以下一人モ不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>跡。言語道斷次

第也。

東福寺。

惠山。

峯殿御草創。見<sub>二</sub>御置文等<sub>一</sub>。當時禪

刹五山之一也。寺家于今不<sub>二</sub>燒亡<sub>一</sub>。然而應仁以來寺僧等隨<sub>レ</sub>緣離山。佛事上堂等令<sub>二</sub>退轉<sub>一</sub>畢。文明十一年以來。世上聊以<sub>二</sub>靜謐<sub>一</sub>。住持等爲<sub>二</sub>武家<sub>一</sub>。被<sub>二</sub>定仰<sub>一</sub>之間。頗本復之跡也。長老入院之時。御教書自<sub>二</sub>武家<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>出了。然而依<sub>二</sub>代々芳躅<sub>一</sub>。家門御教書同副遣。往代者雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>司奉書<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>愚老之代<sub>一</sub>。任<sub>二</sub>武家御教書<sub>一</sub>。仰<sub>レ</sub>人令<sub>レ</sub>書之。加<sub>二</sub>官判<sub>一</sub>遣。入遣之後書<sub>二</sub>沙彌判<sub>一</sub>。每度潤筆料二百疋進之。于今不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>舊規<sub>一</sub>。又每年誕生日。維那僧持<sub>二</sub>來祈禱頌<sub>一</sub>。乞<sub>レ</sub>銘。仍書<sub>二</sub>姓名<sub>一</sub>遣之。

普門寺。東福寺門徒。十刹之一也。住持御教

書等同<sub>二</sub>本寺<sub>一</sub>。右四ヶ寺院。中比與<sub>二</sub>九條家<sub>一</sub>。

有<sub>二</sub>相論事<sub>一</sub>。

後芬陀利華院殿與<sub>二</sub>後報恩院關白殿<sub>一</sub>時也。

而應永七年

六月六日。鹿苑院大相國就<sub>二</sub>一門長<sub>一</sub>。

指<sub>二</sub>三流家督<sub>一</sub>也。

可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>管領<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>書狀<sub>一</sub>。

白筆也。

爾來于

今無<sub>二</sub>他妨<sub>一</sub>。又應永廿六年。廣橋儀同三司

以<sub>二</sub>勝定院<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>仰<sub>下</sub>東福寺以下管領不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>之由<sub>上</sub>奉書在之。尤可<sub>レ</sub>備<sub>二</sub>龜鏡<sub>一</sub>者也。

成恩寺。本名西願寺。在山崎。

家門知行分也。又有<sub>二</sub>少寄進地<sub>一</sub>。住持者奇山和尚門徒中。撰<sub>二</sub>器用一定之也<sub>一</sub>。

圓明寺。在山崎。後一條殿御山庄也。于今雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>

管領之稱<sub>一</sub>。亂世已後寺家顛倒。有名無實也。寶積寺。號<sub>二</sub>寶寺<sub>一</sub>。家門管領分也。而進<sub>二</sub>卷數<sub>一</sub>之外。

無<sub>二</sub>殊得分<sub>一</sub>。

一家領并敷地等之事。

山城國小鹽庄。當庄雖<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>家領安堵支證<sub>一</sub>。

寄<sub>二</sub>進光明峰寺<sub>一</sub>之後。一向爲<sub>二</sub>寺家之計<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>本家之締<sub>一</sub>者也。雖然應仁之亂寺家顛倒。寺僧一人不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>迹。已以可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>闕所<sub>一</sub>之處。文明九年十二月。愚老爲<sub>二</sub>御禮<sub>一</sub>致<sub>二</sub>參洛<sub>一</sub>。則可<sub>レ</sub>歸<sub>二</sub>寺之處<sub>一</sub>。此まゝ可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>在京<sub>一</sub>。然

者就<sub>二</sub>由緒<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>宛<sub>二</sub>行當庄<sub>一</sub>。暫以<sub>二</sub>此在所<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>堪忍<sub>一</sub>之由。被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>之間。已以及<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>畢。此中山崎分。爲<sub>二</sub>寺務得分<sub>一</sub>。割<sub>二</sub>與隨心院僧正<sub>一</sub>。一期之間は不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>違變<sub>一</sub>者也。

同國久世庄。爲<sub>二</sub>春日社神供料所<sub>一</sub>。辰市權預

代々致<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>者也。此中每年六十人夫役。

爲<sub>二</sub>家門之得分<sub>一</sub>。近年寄<sub>二</sub>事於左右<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>嚴密下知<sub>一</sub>者也。辰市當庄無爲知

行之時者。有<sub>二</sub>課役事等<sub>一</sub>。當時稱<sub>下</sub>不<sub>二</sub>入手<sub>一</sub>

之由<sub>上</sub>云々。無沙汰畢。

攝津國福原庄。領家職也。鎌倉右大將家已來傳領

之。武家代々安堵在之。讃岐國山田庄。土貢者。同在<sub>二</sub>紙<sub>一</sub>。

赤松請申時。爲<sub>二</sub>四百五十貫<sub>一</sub>。次第減少。當

時香川預之。守護被管。代官職爲<sub>二</sub>家門自專之在

所。檢斷人足等事。普廣院并當將軍下知狀等在之。

土佐國幡多郡。有諸村等。當時雖有<sub>レ</sub>知行之號。

有名無實也。但應仁亂世以來前關白令<sub>レ</sub>下向。于今在庄繼<sub>二</sub>渴命<sub>一</sub>者也。

備後國坪生庄。山名被管人大田垣爲<sub>二</sub>代官<sub>一</sub>。

其後平賀預申之。每年年貢二千五百疋。筵等也。山名書狀等在之。爲<sub>二</sub>園中納言給恩之地<sub>一</sub>。然而當時依<sub>二</sub>當國錯亂<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>入手也。

和泉國大泉庄。此事有<sub>二</sub>高野寄進分<sub>一</sub>。見<sub>二</sub>元弘三年綸旨等<sub>一</sub>。

于今知行無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>違。土貢細川阿波守被官人吉志請之。三千五百疋請地也。近年如<sub>レ</sub>形致<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>。堅可<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>下知<sub>一</sub>者也。

越前國足羽御厨。自<sub>二</sub>鎌倉右大將家<sub>一</sub>相傳。

手繼分明也。中比常磐井宮知行之。無<sub>二</sub>其

謂<sub>一</sub>者也。然間應永廿三年十二月。勝定院贈相國故殿御時。以<sub>二</sub>自筆狀<sub>一</sub>被<sub>二</sub>返付<sub>一</sub>之。可

<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>永領<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>文言<sub>一</sub>畢。爾來于今無<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>。代官朝倉美作入道請之。每年土貢

四百餘貫致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>。應仁亂世以來。朝倉彈正左衛門尉一向押領之。言語道斷事也。

別納行俊名。同朝倉請申之。年貢千二百疋。爲<sub>二</sub>家僕給恩之地<sub>一</sub>。

同安居保。足羽御厨別納也。安居修理亮請之。每年年貢

六千五百疋沙汰之。其後下直。代官座主僧令<sub>二</sub>所務<sub>一</sub>。千貫計得分也。應仁以來朝倉彈正左衛門尉押領之。

清弘名。安居別納名也。請四千三百疋。爲<sub>二</sub>家僕給恩之地<sub>一</sub>。

應仁以來又混<sub>二</sub>惣庄<sub>一</sub>押領之。

次田名。同。光臺寺寄進之地。請四千疋。子細同上。

同國東鄉庄。代官朝倉一族。號<sub>二</sub>東鄉<sub>一</sub>。預申之。年

貢七千疋。應仁以來彈正左衛門尉押領之。

一條室町敷地。花町第。應仁之亂燒失之。室

町面<sub>四ノ</sub>日野宿所。同時燒失了。其後日野第雖<sub>二</sub>新造之家門<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>再興<sub>一</sub>。爲<sub>二</sub>之如何<sub>一</sub>。

一條町口四十町地。此中小川西有<sub>二</sub>寄<sub>一</sub>進誓。



願寺之地。應仁已後。甲乙人任<sub>レ</sub>意知行之。

文明十年以來雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>武家下知<sub>一</sub>。奉公人等不<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>所勘<sub>一</sub>。紹慶庵敷地等有<sub>二</sub>掠申之輩<sub>一</sub>。于今不<sub>二</sub>落居<sub>一</sub>。

武者小路室町地。壺殿跡也。近年有名無實。

不<sub>レ</sub>知<sub>下</sub>誰人押領契<sub>上</sub>約他方<sub>上</sub>事。

尾張國德主保。普廣院贈相國初所<sub>二</sub>宛給<sub>一</sub>。

也。日野前內府家領等如<sub>レ</sub>元申賜之時。畠山

三位入道德本。入魂。家門返<sub>二</sub>付日野<sub>一</sub>了。

攝津國大田保公文職并賣得田畠。普廣院

時。同時載<sub>二</sub>一紙所<sub>一</sub>宛行<sub>一</sub>也。依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>要用<sub>一</sub>。

賣<sub>二</sub>與池田筑後守<sub>一</sub>了。此中。少分爲<sub>二</sub>堀川判官給恩<sub>一</sub>除之。

尾張國高畠庄。家門由緒之地也。畠山德本

禪門時。付<sub>二</sub>家門<sub>一</sub>了。此庄依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>要用<sub>一</sub>。賣<sub>二</sub>

與尾州廣德寺。貴志知行寺也。以上大田公文職并高

畠庄者。賣得之仁萬一令<sub>二</sub>得替<sub>一</sub>者。致<sub>二</sub>訴

訟<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>知行<sub>一</sub>。池田吉志知行無<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>者。

不能<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>者也。

文明十二年卯月上旬。爲<sub>二</sub>左大將覺悟<sub>一</sub>。任

筆所<sub>二</sub>注置<sub>一</sub>也。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>關外<sub>一</sub>。深可

藏<sub>二</sub>櫃底<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>言之。

後成恩寺殿沙彌御判 七十五 九イ

斯一冊。紙數廿九枚。故禪閣殿下御白筆遺誠

書也。一字各當<sub>二</sub>千金<sub>一</sub>。當家重寶何物過

之哉。深秘<sub>二</sub>篋底<sub>一</sub>。敢莫<sub>レ</sub>忽之。

故殿關白御判

一本朝本書事。

日本紀。卅卷。故殿受<sub>二</sub>吉田神主卜部兼源卿說<sub>一</sub>給。自<sub>レ</sub>爾

人親王撰。

續日本紀。四十卷。自<sub>二</sub>大寶元年<sub>一</sub>至<sub>二</sub>延

日本後紀。三十卷。自<sub>二</sub>延曆十一年<sub>一</sub>至<sub>二</sub>天長十年<sub>一</sub>。左大臣冬嗣公撰。

續日本後紀。二十卷。載仁明天皇一代

事。太政大臣良房公撰。

文德實錄。十卷。自嘉祥三年三月至

天安二年八月。都良香撰。

三代實錄。五十卷。自天安二年八月至仁

和三年八月。左大臣時平公撰。

新國史。字多天皇以來事也。

以上吾朝國史也。續日本紀以下別無口傳等。

令。十卷。吾朝法度也。故殿

受中原章忠說一給。

律。十卷。吾朝

刑書也。

格。弘仁。貞觀。延喜三代

撰之。臨時處分也。

式。五十卷。延喜百官式

也。此外儀式十卷。

西宮抄。西宮左大臣高明撰之。

恒例臨時公事儀式也。

北山抄。大納言公任卿撰之。

同。上。

江次第。大江匡房撰之。

同。上。

西宮抄者古禮也。北山抄者一條院以來儀式也。江次第者

延久以後禮儀也。但有誤事等。北山抄者爲勝書之由。

知是院殿仰也。

以上吾朝法令儀式等也。此書籍最可披見

者也。予粗一見了。此外弘仁式。貞觀式等在

之。類聚國史者。當家令撰之給也。

帝王畧論五卷。類業持來之。

本朝世記。卅卷。信西法師作。寬平一代國史也。

一可。覺悟一條々。書之。隨所見。

女房神拜。兩段再拜。乍居四度禮之也。

取幣拜之時。凡人右手持之。上ヲ左トス。上

皇ハ左手持之。上ヲ右ヘナス。右左右之儀

也。

兩段再拜。兩段之間。乍居可ニ小揖。出家後モ兩段再拜也。

日吉神事。不忌山僧。忌他僧。春日神事。

不忌奈良法師。忌自餘僧尼。專雖無其

理。古來所用如レ此。

月障女房。六月袂解解繩。撫大麻。無禪。

出菅貫者不存之。以衣裳代之。見元曆二玉葉。

天下觸穢時。六月袂不禪之。穢氣雖觸禁中。如神祇官御贖物。自陣外供之。有先例。

陰陽師穢時。稱高天原之時。解解繩。撫人

形。

陰陽家祭ハ漢朝事也。仍不忌觸穢。穢ハ起

我朝。仍忘穢。

公家御祈。泰山府君。四角鬼氣祭等都狀幼主之時。攝政書云入御諱字也。

觸穢人。出縁對面不憚。懸手於縁。或懸二片尻。無憚。

有三不淨之時。諸尊眞言憚之。每日念誦唱二名號。拜二淨三業眞言。不憚之。每日念誦心經眞言三反。聖觀音眞言百反。念佛百反。御記裏有之。一卷。淨三業。

一家正月戴餅。及五歲マデ沙汰來也。

主上御膳。無陪膳女房之時。男陪膳例也。

文治二年十月廿七日三位中將後京極院參內。勤女房陪膳。給也。內大臣時も被勤之。文治三年正月御齒固陪膳。內府。勤之給。

父爲亡息。追善事。文治五年二月十四日內府。通周廻佛事。月輪殿被修之。有御願文。

奉幣之時。於三神前。殿上人傳獻幣。拜了。註之幣ハ於東幣用雲之故也。後

直授三社司。是例也。異姓者取幣不憚之也。於三奉行陪膳者。不撰姓事也。見二文

治五年御記。

布施給二大樹之時。不加二裏物。被物之時加二布施。裏物也。

但如レ此事無法云々。

直衣始。帶二劔笏之時。着二殿上。無揖。或揖。

貫首於二私家。不勤二雜役。日次并申次役等也。獻沓賜

ウチギ祿等事者。貫首モ勤之。

出レ褂有レ憚之時略之。但衣單等籠テ着之。

褰二御簾。事。先跪テ取二御簾中央。二卷バカリ

シテ立揚テ張之也。左右ハ隨便宜也。

冠直衣拜二聖靈。時。持二念珠。三度拜之。又宮

槐竊唱二光明眞言等。文治二。三。年盆供事。

沒日公私不用之。土用中有二沒日。時ハ十九

日也。

賜二御馬。時。降レ自二中門切妻。跼跼指レ笏。或懷中。

取二御馬上手綱。或下手綱見ニ玉。藥曆仁元年。向二御所方。一

拜。隨身置レ弓付ニ上手。下手綱猶引之。私案。馬。右ハ上手。左ハ下手也。

取祿拜之時。如女裝束。左肩懸之。以笏抱持。前程左手相加之。進砌外再拜。

神齋中遭二親忌日。當御堂不憚。神今食齋

中。參御堂御八講也。見文治二御記。至臨時。神事者。猶可憚之云々。

神明御躰不入宮中。內侍所御座故也。

八幡神事者爲精進也。

太神宮法樂。雖憚佛經。於心經者不憚

也。建久五年正月廿五日御記。

多武峯者妙樂寺也。聖靈院并十三重御塔者各

別也。

舞祿掛。於他舞者雖懸左肩。於胡飲酒

者懸右肩也。

是左手取撥之故也。

和琴彈樂事者褻事也。晴御遊不可彈之

云々。安元二朝觀行幸。實家卿彈樂。師長

公難之云々。

輕服日數之間。不四方拜。

帶弓箭之日不舞蹈。仍而行幸賞被改二

級。奏慶之時再拜也云々。白馬節叙列衛府官舞蹈。正說也。然而帶弓箭者。

二拜又一說也。見建久八年正月七日明月記。

御堂餘流拜賀日。用螺鈿劍有文帶。閑院一族

帶詩繪劍無文帶。非此兩流之人。多用

有文。歟。大藏卿爲房。天永二年二月十三日任參議。同十四日拜賀。申請有文帶於殿下之由。

見爲隆記云々。因之。承三正廿三日宰相中將定能勅臣拜賀。帶螺鈿劍有文帶。見玉葉。

幼稚之者雖可着濃色裝束。於申請內々

裝束。着紅色一事。見玉葉。治承三十。月侍從拜賀事。

觸穢等之時。私四方拜無之。內裏猶有之。先例

也。

院御幸日。隨身前聲。參入退出之時發之。御幸

時不發之。院御隨身具故也云々。故實也。

攝家丞相以下輕服之時。除服職事仰上卿。上

卿下知外記。成宣旨。持參於攝關者。或

不待宣旨。出仕。先規兩端也。前官之時

者不及除服宣下。無可從公事之由。



故也。

劔筭事。寺院之禮必撤之。但御願寺供養准

御齋會之時。雖寺內不撤之。無此宣

下者。必可撤之也。又嘉保京極御堂雖不

准御齋會。諸卿帶劔筭。是依可爲始

終御居所也。又平等院供養之時。依別勅

公卿用螺鈿劔隱文帶。有先例者。

參堂之時。於掖門以下。車之時必解劔。定例也。

非警固之時。近衛將卷纓綉負壺事。立坊。立

后。任大臣等節會依立本陣。如此。元曆

二年賢所自草津入洛之時又如此。

弘長三年八月圓明寺殿。于時前攝政。還任左大臣。

爲攝政。推補儀也。彼度兼日有召仰。職事

向里第傳勅。然而不儲勅使座。奏謙

退之趣。元亨年中後照念院大相國還任之

時。同當日以勅使被仰事由云々。正元

冷泉相國。自前右大臣轉任左大臣之

時。兼日有召仰。其時儲勅使座。如任太

政大臣兼宣旨云々。明德三年十二月鹿苑院

准后還任左大臣之時。無其沙汰。無念也

云々。

內辨帶弓箭事。

小右外記云。圓融院讓位於華山帝之日。

右大將濟時爲內辨。帶弓箭。從事云々。三

條相國聞此事。被命不着弓箭之由。其

一證云。御齋會之日行幸之時。帶衛府之

人脫弓箭。行內辨事。亦小忌上卿爲內

辨之日。脫青摺衣服尋常袍。搥奉仕內

辨之事。可用常度云々。但天慶賊亂之時。

賜節刀於大將軍之日。清慎公帶弓箭。被

行內辨事。以之可相准歟。讓國之儀

賜節刀之事。皆以警固雖有輕重。其儀尋

之如何。殿下命云。濟時說尙不快。三條說

可然。



五節以前。殿上人着夏表衣。無子細。

布袴着下襲。指貫。無文帶。野劔云々。

見文治三十五葉。

建久元十廿六京官除目執筆。新宰相中將公繼

生年十六歲。公時卿爲上臈。在其座。未曾

有例也。於大弁者。不論上下臈。勤之。

大弁有故障之時。上臈次第被催之故也。

主人在公卿座之時。公卿以下不出入中

門車寄戶。故實也。月輪殿仰也。於院入車寄戶

事。或可斟酌云々。可用北妻戶云々。

七歲以前雖無服。其父三ケ日不隨神事

云々。文永八六廿愚曆云。自今日止春日

百ケ日拜。依小兒事也。七歲以前雖無

服。其父三ケ日不隨神事云々。神祇式文

也。

大臣之後攝籙以前以室家稱北政所事。

治承三十二年十月玉葉云。兵部卿入道信蓮

來。數剋談話。御一家皆大臣之後。雖攝籙

以前。以室家稱北政所。延久元永例也。

補家司供節供云々。此事未知。尤有

レ興。

太刀契事。

太刀四柄者。累代之靈劔也。國家殊被重

之。如天德記者。雖燒損形質猶存。仍

或琢磨刃。或造加飾。其時更不被出宮

城。是貴重之至也。契者。親王大臣及諸衛契

符也。天德同以修補之。魚符七十四候。分

入三囊。被加納太刀韓櫃中。行幸時左右

近衛將監持候是也。以納內侍司印稱契

櫃。以納兩種稱太刀櫃。古典所載已以

分明。然則有二合也。

節刀事。

節刀者。雜劔也。其中靈劔有二柄。是即百

濟國所貢進。日月護身劔。敵將劔等

也。納<sub>二</sub>辛櫃一合。行幸之時。相<sub>二</sub>副賢所<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>遷也。靈劍<sub>二</sub>鎌劔合卅四柄<sub>一</sub>之由。見<sub>二</sub>天德記<sub>一</sub>。以上見建武四年玉英。太刀契并節刀。建武度紛失。被<sub>二</sub>新造<sub>一</sub>之。

### 社參事。

應永三十四甲辰。内々參<sub>二</sub>詣吉田社<sub>一</sub>。十五日。今日沐浴。明後日内々可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>詣吉田社<sub>一</sub>之故也云々。今年未參之由也。衣冠<sub>下結</sub>。乘<sub>二</sub>八葉車<sub>一</sub>。懸<sub>二</sub>下簾<sub>一</sub>。中將狩衣。同參詣乘<sub>二</sub>予車<sub>一</sub>。基輔同在<sub>二</sub>車後<sub>一</sub>。頭中將滿親朝臣乘<sub>二</sub>毛車<sub>一</sub>。扈從諸大夫則秀參會。布衣也。兼敦朝臣着<sub>二</sub>衣冠<sub>一</sub>。候<sub>二</sub>社頭<sub>一</sub>。兼村同參。予於<sub>二</sub>神前<sub>一</sub>奉幣。頭中將取<sub>レ</sub>幣。兼敦朝臣傳<sub>レ</sub>之。予取<sub>レ</sub>之。兩段再拜。兼敦進來受<sub>二</sub>取幣<sub>一</sub>。次予取<sub>レ</sub>笏着座。兼敦持<sub>レ</sub>幣。再拜申<sub>レ</sub>祝了。又再拜。給<sub>二</sub>幣於兼村<sub>一</sub>。兼村取<sub>レ</sub>之。寄<sub>二</sub>懸<sub>一</sub>御殿前階。次兼敦取<sub>レ</sub>笏。向<sub>レ</sub>予小揖。申<sub>二</sub>返祝<sub>一</sub>。拍手予應<sub>レ</sub>之。

如<sub>レ</sub>形合手也。心中有<sub>二</sub>祈念事<sub>一</sub>。次起座出<sub>二</sub>中門外<sub>一</sub>。此間中將奉幣。頭中將取<sub>レ</sub>幣授<sub>レ</sub>之。其儀如<sub>レ</sub>初。事畢歸<sub>レ</sub>家。于時未<sub>レ</sub>剋也。抑常職之時。春日詣以前如<sub>レ</sub>此。内々參社頗雖<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>非禮<sub>一</sub>。予自<sub>二</sub>納言之時<sub>一</sub>。多年參<sub>二</sub>詣當社<sub>一</sub>。昇進先途事等祈。遂以達<sub>二</sub>其願望<sub>一</sub>。神鑒不<sub>レ</sub>空。是以偏專<sub>二</sub>敬神之儀<sub>一</sub>。大略每年參社。荒曆御記。依<sub>二</sub>重服<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>六月穢<sub>一</sub>事。

玉葉。壽永元六廿九。抑予依<sub>二</sub>重喪<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>六月穢<sub>一</sub>。但女房姫君等有之。大將少將等方同有之。良經良通各イ

春日御正體爲<sub>二</sub>金剛般若經<sub>一</sub>事。

治承五閏二廿六。今日覺乘訪來語云。故藏俊僧都云。春日御社御正躰。眞實者金剛般若經也。有<sub>二</sub>所見<sub>一</sub>云々。今聞。此語余所<sub>レ</sub>見之夢想。正夢之條更無<sub>レ</sub>疑事歟。仰可<sub>レ</sub>信者也。余多年之所願。決定成就之期也。感涙難<sub>レ</sub>抑者歟。佛神照情垂<sub>二</sub>其應<sub>一</sub>歟。廿七日今日

依夢想告。受金剛般若經於信助阿闍梨。  
小兒戴餅事。

玉葉。承安三

正一。余向關白第。基路

秉燭。是依今朝

之告也。當腹之小兒爲令戴餅云々。

康和法性寺殿御戴之時。內大臣雅實。被參

仕。以彼例。被請大臣也。余先着尋常

公卿座。此後數刻無來告之人。良久隨身等

參上立明。其後少將顯信朝臣來云。可下

渡此方給上者。則以參上其所。寢殿東妻

南庇二ヶ間也。垂庇簾。南面二間懸几帳。

東面妻戸不懸之。二行敷高麗疊四枚。

各二枚。副母屋簾立屏風。余入自東西妻

戸。候東間端帖。主人坐西間奥疊。次主人

召顯信朝臣。令抱出小兒。母屋東間簾下

中。屏風頗押帖。關其所也。民部大輔兼定取餅。件。人。手。宮

蓋。敷。檀紙。在橋井高岡。大禮事也云々。以薄簾裹之。餅三枚也。余申云。三ヶ日料一度

可候歟。爲格別歟。命云。一度之儀不可

然云々。關白被示氣色。余置笏起取餅。

作三枚。取之。

令戴若君頭上二度。俗有祝

不取言。又

忽不覺悟。如元置蓋中。取橋井齒固等各

三。置東面妻戸上長押上。是定事也。次若

君抱入畢。次關白被示可出居初座之

由上。仍余着上達部座。齒有二枚。

着次齒也。次關白

出。來座上圓座。次引馬。主人隨身。上

之後。依主人命。引出之於中門內砌外。余

前驅行賴受取之。

承元四正一。有小兒戴餅事。於寢殿東面妻

戸。有此事。余直衣冠也。令戴之。作蓋

取之。女房一

人抱兒。一人持餅蓋。一人持劔。先取餅

令戴。祝詞官位カメ命幸カメ以餅三度當

頂了。則以蓋返給女房。次取橋觸兒頂

上。長押打揚。三成橋三枝

次第如此二度。次

取大根觸兒頂。詞皆如此了。又打揚。三

筋。件餅親房調進。乳母也。餅三也。手宮蓋。時繪

松折

一讀様事。

枝。如<sub>ニ</sub>衣宮蓋<sub>一</sub>。敷<sub>ニ</sub>紅薄様<sub>一</sub>。二重置<sub>レ</sub>之。橘大根其勢如<sub>ニ</sub>折敷<sub>一</sub>。

同入<sub>レ</sub>之。件餅須<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>火切<sub>一</sub>也。而用<sub>ニ</sub>尋常

餅<sub>一</sub>畢。三ヶ日料橘大根等入<sub>ニ</sub>折櫃<sub>一</sub>。獻<sub>レ</sub>之。

次不<sub>レ</sub>改<sub>ニ</sub>裝束<sub>一</sub>。見<sub>ニ</sub>齒固<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>恒。女房同之。

面<sub>ニ</sub>ミス<sub>一</sub>。葉<sub>ニ</sub>セン<sub>一</sub>。代<sub>ニ</sub>或說<sub>一</sub>。空頂<sub>ニ</sub>クウチャウ<sub>一</sub>。黑幘<sub>ニ</sub>コクサク<sub>一</sub>。天子冠禮。

宸花<sub>ニ</sub>ハツオ<sub>一</sub>。同。火蛇取<sub>ニ</sub>クワジャトリ<sub>一</sub>。作<sub>レ</sub>輪<sub>ニ</sub>ツクル<sub>一</sub>。返輪<sub>ニ</sub>ヘンリン<sub>一</sub>。色<sub>ニ</sub>カ<sub>一</sub>。上行冠禮。

親王代<sub>ニ</sub>ミコダイ<sub>一</sub>。即位。近仗<sub>ニ</sub>キンチャウ<sub>一</sub>。行酒<sub>ニ</sub>カウ<sub>一</sub>。弓場代<sub>ニ</sub>ユミバドノダイ<sub>一</sub>。

王大<sub>ニ</sub>ヲホ<sub>一</sub>。側記<sub>ニ</sub>ホノキ<sub>一</sub>。留<sub>ニ</sub>トマル<sub>一</sub>。御前<sub>ニ</sub>ミサキ<sub>一</sub>。大臣<sub>ニ</sub>大臣<sub>一</sub>。連<sub>ニ</sub>ツラ<sub>一</sub>。新仕女<sub>ニ</sub>新仕女<sub>一</sub>。

奪情從公<sub>ニ</sub>ダツジツウジウク<sub>一</sub>。除服出<sub>ニ</sub>除服出<sub>一</sub>。水取<sub>ニ</sub>モンドリ<sub>一</sub>。後取<sub>ニ</sub>シンドリ<sub>一</sub>。還昇<sub>ニ</sub>クワンシヨ<sub>一</sub>。

常<sub>ニ</sub>常<sub>一</sub>。普ハセウ也。シヨハ名目也。又上<sub>ニ</sub>又上<sub>一</sub>引<sub>レ</sub>テ濁ル也。任請<sub>ニ</sub>マウシノマ<sub>一</sub>。任例<sub>ニ</sub>任例<sub>一</sub>。非

成業<sub>ニ</sub>成業<sub>一</sub>。

童殿上名簿。載<sub>ニ</sub>童<sub>一</sub>姓名叙位任官<sub>ニ</sub>者<sub>一</sub>。元服以

後事也。近代童躰之時。叙位任官無<sub>レ</sub>謂事

也。雖<sub>レ</sub>然自然稱號者。可<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>童名<sub>一</sub>。歟。可

尋事也。但童殿上名簿ニハ。書<sub>ニ</sub>男名之上<sub>一</sub>

者。依<sub>レ</sub>事可<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>名字<sub>一</sub>也。

平出。

皇祖<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>一</sub>。皇祖妣<sub>ニ</sub>同祖<sub>一</sub>。皇考。皇妣。

先帝。天子。天皇。皇帝。陛下。至尊<sub>ニ</sub>子<sub>一</sub>。天。太上天皇。天皇諡。大皇太后。

大皇太妣。大皇大夫人。皇太后。皇太

妣。皇大夫人。皇后。

闕字。

大社。陵號。乘輿。車駕。詔書。勅

旨。明詔。聖化。天恩。慈旨。中

宮。御<sub>ニ</sub>付<sub>一</sub>。至。闕庭。朝廷。東宮。皇

太子。殿下。

凡說古事言及平闕之名。非<sub>ニ</sub>指說<sub>一</sub>者。皆不<sub>ニ</sub>平

闕。

右桃花葉以大久保忠寄屋代弘賢本校正已了



群書類從卷第四百七十二

雜部廿七

弘安禮節

書札禮之事。

一大臣。

奉親王。

奉執柄。

遣大中納言。

遣參議散二位三位。無上所。狀如件。

遣藏人頭。

遣雲客。

遣大外記大夫史。

一大納言。

奉親王。

恐惶謹言。居所。

同親王。

謹言。官判。一有謹上字。

可被、之狀如件。

可被、之狀如件。

可被、之狀如件。或三合。

奉書。

誠恐謹言。人々御中。

奉執柄。

奉大臣。

遣中納言。

遣參議散二位三位。謹上。謹言。

遣藏人頭。

遣四位雲客。

遣五位雲客。

遣地下諸大夫。

遣五位外記史。

一中納言。

奉親王。

或恐惶謹言。或家司名。

同親王。

上啓如件。恐惶謹言。

謹上。恐々謹言。

無上所。狀如件。名字。

藏人頭同之。

狀如件。判。

四位。同五位雲客。

可被、之狀如件。判。

某恐惶謹言。家司名。



奉<sub>二</sub>執柄<sub>一</sub>。

同<sub>二</sub>親王<sub>一</sub>。

奉<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>。

言上如件。某恐惶謹言。  
一有進上字。

遣<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>。

謹上執啓如件恐惶謹言。

遣<sub>二</sub>參議散<sub>三位</sub>。<sub>三位</sub>謹上。恐々謹言。一無恐

遣<sub>二</sub>藏人頭<sub>一</sub>。

無上所。執達如件。

遣<sub>二</sub>四位雲客<sub>一</sub>。

同<sub>二</sub>藏人頭<sub>一</sub>。

遣<sub>二</sub>五位雲客<sub>一</sub>。

狀如件。判。

遣<sub>二</sub>地下諸大夫<sub>一</sub>。

四位。同<sub>二</sub>五位雲客<sub>一</sub>。

遣<sub>二</sub>五位外記史<sub>一</sub>。

可被、之狀如件。判。

一參議散<sub>二位</sub>。<sub>二位</sub>

奉<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>。

進上。某恐惶謹言。或子息。或家司名。

奉<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>。

謹上。上啓如件。恐惶謹言。一作謹恐。

奉<sub>二</sub>中納言<sub>一</sub>。

謹上。執啓如件。恐惶謹言。

遣<sub>二</sub>藏人頭<sub>一</sub>。

謹上。執達如件。恐惶謹言。

遣<sub>二</sub>四位雲客<sub>一</sub>。

同<sub>二</sub>藏人頭<sub>一</sub>。

遣<sub>二</sub>五位雲客<sub>一</sub>。

無上所。狀如件。一有名字。

遣<sub>二</sub>地下諸大夫<sub>一</sub>。

四位。狀如件。名字。

遣<sub>二</sub>五位外記史<sub>一</sub>。

可被、之狀如件。判。

一藏人頭。

奉<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>。

以此旨可令波申給。仍言上如件。某頓首謹言。家司名。官姓名。

奉<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>。

進上。上啓如件。誠恐謹言。一作言上。

奉<sub>二</sub>中納言<sub>一</sub>。

謹上。上啓如件。恐惶謹言。

奉<sub>二</sub>參議散<sub>三位</sub>。<sub>三位</sub>謹上。執啓如件恐惶謹言。

遣<sub>二</sub>四位雲客<sub>一</sub>。

謹上。執達如件。恐々謹言。

遣<sub>二</sub>五位雲客<sub>一</sub>。

謹上。謹言。

遣<sub>二</sub>地下諸大夫<sub>一</sub>。

四位。狀如件。名字。

遣<sub>二</sub>官外記<sub>一</sub>。

可被、之狀如件。判。

一四位殿上人。

奉<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>。

以此旨可令波申給。仍言上如件。某頓首誠恐謹言。進上。家司名。官姓名。

奉<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>。

進上。言上如件。某恐惶謹言。

奉<sub>二</sub>中納言<sub>一</sub>。

謹上言上如件。某恐惶謹言。

奉<sub>二</sub>參議散<sub>二位</sub>。<sub>二位</sub>

謹上。執啓如件。一某字尤。某恐惶謹言。

遣藏人頭。謹上。執啓如件。恐々謹言。或

恐惶謹言。

遣五位雲客。謹上。執達如件。恐々謹言。

遣地下諸大夫。

四位無上所。執達如件。恐々謹言。名字。五位同。執達如件。謹言。名字。

遣五位外記史。無上所。執達如件。謹言。判。

五位殿上人。

奉大臣。

以此旨可令洩申給。仍言上如件。某頓首誠恐謹言。家司名。官姓某。

奉大納言。進上。言上如件。某誠恐謹言。

奉中納言。進上。言上如件。某恐惶謹言。

奉參議散二位二位。

謹々上。上啓如件。恐惶謹言。

遣藏人頭。謹々上。或謹上。上啓如件。恐

惶謹言。

遣四位雲客。謹上。執啓如件。恐々謹言。

遣地下諸大夫。

四位謹上。執達如件。恐々謹言。名字。五位無上所。執達如件。謹言。名字。

遣五位外記史。無上所。狀如件。謹言。判。

一地下四位諸大夫。

奉大納言。居所。某誠恐謹言。

奉中納言。居所。某恐惶謹言。

奉參議散三位三位。進上。某謹言。官。有恐惶字。

遣藏人頭。謹々上。恐惶謹言。官。恐惶字无。

遣四位雲客。謹上。執啓如件。恐惶謹言。作恐々

遣五位雲客。謹上。執達如件。恐々謹言。

遣地下五位諸大夫。

一作恐々謹上。執達如件。露言

遣五位外記史。院宮。攝關家奉書之時。不可書上所。

遣五位下北面。無上所。執達如件。

遣六位下北面。狀如件。

一地下五位諸大夫。

奉大納言。居所。某頓首誠恐謹言。

奉中納言。居所。某誠恐謹言。

奉參議散三位三位。進上。某恐惶謹言。官。

奉<sub>二</sub>藏人頭<sub>一</sub>。進上。某恐惶謹言。一某字无官字有

遣<sub>二</sub>四位雲客<sub>一</sub>。謹々上。言上如件。恐惶謹言。

遣<sub>二</sub>五位雲客<sub>一</sub>。謹上。恐惶謹言。

遣<sub>二</sub>地下四位諸大夫<sub>一</sub>。

謹上。執啓如件。恐惶謹言。

遣<sub>二</sub>五位外記史<sub>一</sub>。院宮。攝關家。奉書之時。不可<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>上所<sub>一</sub>。

遣<sub>二</sub>五位下北面<sub>一</sub>。無上所。執達如件。

遣<sub>二</sub>六位下北面<sub>一</sub>。狀如<sub>レ</sub>件。謹言。

一醫陰兩道禮事。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>五位外記史<sub>一</sub>。

一五位下北面。

遣<sub>二</sub>四位上北面<sub>一</sub>。謹上。誠恐謹言。

遣<sub>二</sub>五位上北面<sub>一</sub>。謹上。恐惶謹言。

一六位下北面。

遣<sub>二</sub>四位上北面<sub>一</sub>。進上。某誠恐謹言。

遣<sub>二</sub>五位上北面<sub>一</sub>。進上。恐惶謹言。

同官不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>等差<sub>一</sub>。互可<sub>レ</sub>守<sub>二</sub>禮節<sub>一</sub>。兼復諸大

夫之中。昇<sub>二</sub>月卿<sub>一</sub>列<sub>二</sub>雲客<sub>一</sub>之輩并關別朝辨立

身之類。各存<sub>二</sub>家之勝劣<sub>一</sub>。宜<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>斟酌<sub>一</sub>者也。

一僧中禮事。

僧正。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>參議<sub>一</sub>。

法印。法務。僧都。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>四位殿上人<sub>一</sub>。

法眼。律師。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>同五位<sub>一</sub>。

凡僧。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>同六位<sub>一</sub>。

諸寺三綱及八幡社官僧綱法橋上人位。

可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>地下四位諸大夫<sub>一</sub>。

凡僧。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>同五位諸大夫<sub>一</sub>。但如<sub>二</sub>日來殿上五位<sub>一</sub>。不可<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>上所<sub>一</sub>。

威儀師。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>五位下北面<sub>一</sub>。

從儀師。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>同六位<sub>一</sub>。

弘安八年十二月 日

院中禮事。

一出御時 御前儀事。

公卿踞踞隨<sub>二</sub>御目<sub>一</sub>復座。殿上人下<sub>二</sub>簀子<sub>一</sub>。上北

面下<sub>レ</sub>地。便宜所。下北面御隨身可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>中門外<sub>一</sub>。左右。

一褻御幸路頭禮事。

大臣以下參會之時。供奉人不可下馬。但有

被扣御車者可下馬。

一遇大臣禮事。

大臣候座者。大納言以下隨氣色。可着座。

殿上人起座以敬屈。上北面可蹲踞。

一逢大納言禮事。

中納言以下請益着座。殿上人白地群居之所。

過其前者。可起座。上北面深磬折。

一逢中納言禮事。

同大納言。

一參議逢中納言禮事。

同中納言之逢大納言。

一殿上人逢參議散二位三位禮事。

同參議之逢中納言。

一上北面遇參議散二位三位禮事。

可敬屈。

一上北面遇殿上人禮事。

無存等同之儀。不可列座。聽昇殿之輩。

如名謁雖守位內々拜趨之分。莫違北面

之時。但列禁裏仙郎者。非此限。

一下北面并御隨身遇殿上五位以上禮事。

可蹲踞。

一參入退出禮事。

大臣參。大納言以下可下。逢大中納言參。參

議以下可准之。參議散二位參。殿上人以下

同上。殿上人參。上北面又同上。

一當番下部等可着狩衣水干。禮者定上下。

別同異。承天之道。治一作諧人情。上既好

之。下盍敬乎。同守斯制。敢莫違禮耳。

一作乎。

路頭禮事。

一遇親王禮事。



大臣共扣車僮僕互下馬。大臣前驅以下列居

車傍。親王前驅步行過之。親王車過畢。大臣

僮僕騎馬進行。若親王車後來者。大臣車直對

之。一作王車立之。自餘同輩准之。

大中納言。同大臣。

參議。散二位三位。出牛立榻於車前。或稅

駕置輓於榻上。

藏人頭。下車。

辨官。大辨宰相。其禮在右。非參議大辨以下。下車。

殿上四位五位。下車。

地下諸大夫。四位下車踏蹠。五位下車平伏。

大外記。大夫史。下車平伏。

一遇關白。禮事。

同親王。但於參議者雖非大辨。猶可稅

駕。其禮在右。

一遇大臣。禮事。

參議以上同逢親王。藏人頭。非參議。大辨。

稅駕不下車。

殿上四位。准之。但辨官可下車。

殿上五位。下車立輓外。或內。

地下諸大夫。四位下車踏蹠。五位下車平伏。

大外記。大夫史。下車平伏。

一遇大中納言。禮事。

參議。藏人頭。辨官。殿上四位五位以上。扣車

不出牛立。但辨少納言退出之時。於陣中

遇納言以上者。相從參入。納言謝遣之時退

出。

地下諸大夫。四位稅駕。五位下車。

大外記。大夫史。下車。

一遇參議散二位三位。禮事。

藏人頭。辨官。殿上四位五位以上。扣車。

地下諸大夫。四位扣車。五位稅駕。

大外記。大夫史。稅駕。

一遇藏人頭。禮事。



辨官。殿上四位五位。地下諸大夫。大外記。大夫史以上。扣車不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>稅<sub>レ</sub>駕。

自<sub>レ</sub>此以下次第可<sub>二</sub>准知<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>忘<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>。

路頭下馬禮事。

三位以下於<sub>二</sub>路頭<sub>一</sub>遇<sub>二</sub>親王<sub>一</sub>下馬。大臣歛<sub>レ</sub>馬傍立。四位以下遇<sub>二</sub>一位<sub>一</sub>五位以下遇<sub>二</sub>三位以上<sub>一</sub>六位以下遇<sub>二</sub>四位以上<sub>一</sub>七位以下遇<sub>二</sub>五位以上<sub>一</sub>皆下馬。

褻御幸路頭禮事。

大臣以下參會之時。供奉人不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>下馬<sub>一</sub>。但有<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>扣<sub>二</sub>御車<sub>一</sub>者可<sub>二</sub>下馬<sub>一</sub>。乘車及陪從不<sub>レ</sub>下。

僮僕員數事。

隨身。

太上天皇十四人。將曹二人。府生二人。

番長三人。

以上騎馬。近衛八人。步。

攝政關白十人。

府生二人。番長二人。以上騎馬。

近衛六人。

大將 大臣八人。納言。參議六人。

中將 四人。

少將 二人。

諸衛督四人。佐二人。

車副。

太上天皇八人。攝政關白六人。

太政大臣六人。左右大臣內大臣四人。

大納言四人。中納言二人。

參議一人。

弘安禮節撰者。

一條前關白。

花山院前右大臣入道。第壹

二條大納言入道資季。

意見之人數。

二條

大臣師忠。

九條

前右府忠教。

內大臣家基。

花山院

入道前左府定雅。

輔法親

前內府公親。

儀同三司基具。

二條

入道大納言資季。

廿四寺帥大納言經任。

主門大納言定實。

吉田前大納言雅言。

權中納言實冬。

中納言經長。

春宮大夫實兼。

皇后宮大夫公孝。

民部卿資宣。

按察使賴親。

大藏卿經業。

上北面

近衛殿宗成朝臣。

一條殿則任朝臣。

九條殿以隆朝臣。

弘安八年十二月三日定置給。非私用云々。

評定之後大藏卿經業清書之。

右弘安禮法。近衛前關白准后龍山公以御

本書寫之。努々不可有外覽者也。

天正十七年五月 日 平朝臣判。

右弘安禮節以大久保西山屋代弘賢松岡芳辰本校合了

## 二判問答

二階堂判官政行問

後成恩寺關白兼良公御答

不審申上條々事。

問

五位廷尉於兼國者。其例繁多也。京官中

以何官可協道理哉。八省輔并丞。四職

亮。諸司頭助。彈正忠。監物。勘解由判官等

兼任。可爲如何哉。八省輔外。六位廷尉兼

任。是又可爲何樣哉。

答

五位廷尉兼國例勿論也。京官兼帶事。廷尉佐

兼八省輔諸寮頭。勘解由次官等例在之。然

者以此准據。爲五位尉之人兼八省丞。諸寮

助。彈正忠。勘解由判官等條々。各所不背

理歟。但可依先規者也。

一六位藏人爲廷尉之時。地下五位廷尉座次

事。於地下五位尉者着六位藏人上。於

六位廷尉者雖位次上薦。依殿上六位着

藏人廷尉下<sub>レ</sub>之由。先蹤見及事候。可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>如  
何<sub>一</sub>哉。

五位以上人昇殿未昇殿相交之時者。任<sub>二</sub>位次<sub>一</sub>  
之條。古今通法也。但六位以下者出身之位階。  
其蔭不定之間。以<sub>二</sub>殿上六位<sub>一</sub>執之。着<sub>二</sub>其下<sub>一</sub>  
歟。頗似<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其謂<sub>一</sub>。所詮可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>也。

一雖爲<sub>二</sub>武家廷尉<sub>一</sub>。當時朝役參勤。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>  
子細<sub>一</sub>哉。

正應元七追加云。檢非違使事。

補任者翌年令<sub>二</sub>上落<sub>一</sub><sup>〔拾遺〕</sup>。或勤役朝畏以下之役。

或可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>仕賀茂祭。歸<sub>二</sub>參關東<sub>一</sub>之時者。放生  
會正月等出仕不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>懈怠<sub>一</sub>。凡當職之間。京

都公事隨<sub>二</sub>催促<sub>一</sub>。參洛可<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>也。

如<sub>二</sub>此制<sub>一</sub>分明也。至<sub>二</sub>高祖父行<sub>一</sub>。賀茂祭參  
向勤仕畢。雖<sub>レ</sub>然當時就<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>有職<sub>一</sub>中絕。頗  
可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>無念<sub>一</sub>者也如何。

先代制府尤以嚴重。在<sub>二</sub>其職<sub>一</sub>隨<sub>二</sub>朝役<sub>一</sub>之條。理

其所當也。但近代之儀可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>時宜<sub>一</sub>者哉。

一廷尉乘車事。可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>五緒小八葉<sub>一</sub>之由存之。  
如何。

小八葉尊卑用之。殊廷尉拜賀之時。用<sub>二</sub>小八  
葉<sub>一</sub>勿論歟。

一廷尉 勅許口宣案。宜<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>檢非違<sub>一</sub>。<sup>〔使殿殿〕</sup>是流例  
也。而或說可<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>使宣旨<sub>一</sub>。兩樣在之云々。如  
何。

廷尉宣下宜<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>檢非違使<sub>一</sub>云々。不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>。  
蒙<sub>二</sub>使宣旨<sub>一</sub>之文章。頗以不審。

一廷尉以<sub>二</sub>小路名<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>稱號事。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>子  
細<sub>一</sub>哉。同官數輩時。輒爲<sub>二</sub>分別<sub>一</sub>。其人稱<sub>二</sub>居  
所<sub>一</sub>事連綿歟。所謂六角判官。京極判官。七

條、<sub>二</sub>赤公<sub>一</sub>堀川。姊小路。高倉等如<sub>レ</sub>此。仍  
始可<sub>レ</sub>號事。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>巨難<sub>一</sub>哉。<sup>〔光範〕</sup>

廷尉呼<sub>二</sub>小路名<sub>一</sub>連綿也。始可<sub>レ</sub>號事。又不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>

有<sub>二</sub>巨難<sub>一</sub>歟。但可<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>事也。

一雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>坂中兩家<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>續<sub>レ</sub>業之廷尉。尙可<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>法家<sub>一</sub>哉。

上古不限<sub>二</sub>坂中兩家<sub>一</sub>。惟宗大江氏等又爲<sub>二</sub>法曹<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>法曹之輩<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>法家<sub>一</sub>之條。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然歟。

一政行應仁元蒙<sub>二</sub>使<sub>一</sub> 宣旨。其後依<sub>二</sub>世上亂<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>其役<sub>一</sub>。上雖<sub>レ</sub>徑<sub>二</sub>年紀<sub>一</sub>。任<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>奏慶事。可<sub>レ</sub>再興仕<sub>一</sub>之條如何。

雖<sub>レ</sub>徑<sub>二</sub>年序<sub>一</sub>。始出仕之時奏慶。何事有哉。且近代風儀也。

一爲<sub>二</sub>八省輔<sub>一</sub>者。前官之後。蒙<sub>二</sub>使<sub>一</sub> 宣旨之條如何。

廷尉佐兼<sub>二</sub>八省輔<sub>一</sub>例在之。然者八省輔前官之後。蒙<sub>二</sub>使<sub>一</sub>宣旨之條。不<sub>レ</sub>背<sub>レ</sub>理歟。

一廷尉兼<sub>二</sub>受領<sub>一</sub>之時。位署書樣之事。

從五位上行左衛門大尉兼山城守藤原朝臣某。可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>此定<sub>一</sub>歟。然<sub>二</sub>秀能法師當官之時

位署如<sub>レ</sub>此。防鴨河判官出羽守從五位上兼行左衛門少尉藤原朝臣秀能。於<sub>二</sub>羽州<sub>一</sub>者從下相當也如何。

廷尉兼<sub>二</sub>受領<sub>一</sub>之位署書樣。初所<sub>レ</sub>載可<sub>レ</sub>然歟。秀能位署誠以不審。

一五位尉任<sub>二</sub>受領<sub>一</sub>。諸司頭之後。可<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>任廷尉<sub>一</sub>之條如何。

五位尉任<sub>二</sub>受領<sub>一</sub>之後。還<sub>二</sub>補廷尉<sub>一</sub>何事有哉。諸司頭又可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>歟。

一廷尉扇事。春夏女郎花色。秋冬花田色。於<sub>レ</sub>香者不斷可<sub>レ</sub>用也。又表裏同色勿論。表香。

裏女郎花色。此定如何。付骨。差骨。黑白等共以可<sub>レ</sub>用哉。

用<sub>二</sub>夏扇<sub>一</sub>事。堅固內々儀也。雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>何扇<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>巨難<sub>一</sub>。但可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>多分流例<sub>一</sub>歟。

一同狩衣事。香茶染。白襖等之外可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>如何<sub>一</sub>哉。



大略不可<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>此等色<sub>一</sub>歟。

一大小判事雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>博士之廷尉<sub>一</sub>。經歷可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>如  
何<sub>一</sub>哉。

法曹輩之外兼任未<sub>二</sub>見及<sub>一</sub>。

一諸國守前官之時。他人稱<sub>二</sub>前司<sub>一</sub>之條勿論也。  
自身書之時可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>前山城守<sub>一</sub>哉。山城前司某  
可<sub>レ</sub>書之條。有<sub>二</sub>其例<sub>一</sub>哉。

某國前司卜書之事。先例見及樣也。但今間不  
<sub>レ</sub>慥。

冬良勘。未<sub>二</sub>公文受領<sub>一</sub>書<sub>二</sub>位署<sub>一</sub>之時。外國前司位上書  
之歟。見官位相當御抄如何。

一同權守事。於<sub>二</sub>武家之所望<sub>一</sub>者。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>  
勅許<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>云々。是又至<sub>二</sub>勝定院殿  
御代<sub>一</sub>有<sub>二</sub>其例<sub>一</sub>。爲<sub>二</sub>其以後<sub>一</sub>被<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>哉。

此條未<sub>レ</sub>觸耳。凡儀可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>何事<sub>一</sub>哉。

一和歌懷紙有<sub>二</sub>貴人<sub>一</sub>之持同姓不<sub>レ</sub>書之。諸社法  
樂之時。可<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>同姓<sub>一</sub>之條。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>巨難<sub>一</sub>

哉。

貴所家會懷紙。主人同姓時者。雲客以下略<sub>レ</sub>姓  
爲<sub>二</sub>故實<sub>一</sub>歟。至<sub>二</sub>諸社法樂<sub>一</sub>者。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>必然<sub>一</sub>哉。

一爲<sub>二</sub>彈正忠<sub>一</sub>之者。叙爵叙留之後。可<sub>レ</sub>號<sub>二</sub>彈正  
大夫忠<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>申輩<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>號<sub>二</sub>彈正大夫<sub>一</sub>之  
條無<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>歟。加<sub>二</sub>忠字<sub>一</sub>之段不審。左近大夫  
將監雖<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>似准據<sub>一</sub>。若可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>差別<sub>一</sub>哉。是爲  
<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>分<sub>二</sub>別左右<sub>一</sub>歟如何。

細々稱呼以<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>言爲<sub>レ</sub>先。彈正大夫。左近大夫  
何事有哉。左近大夫將監。是又無<sub>二</sub>巨難<sub>一</sub>歟。

一沓脫事。雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>上階<sub>一</sub>。源家御一族。其外廷尉  
經歷之武家。雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>六位之時<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>之哉。  
可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>何樣<sub>一</sub>哉。

至<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>履者。雖<sub>二</sub>私家設<sub>一</sub>沓脫。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>  
歟。

一簾釣丸事同如何。

近來沙汰不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>才學<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>傍例<sub>一</sub>哉。



一武家輩經歴六位藏人事。至鹿苑院殿御代連綿事歟。雖當代再興。不可有子細哉。

再興勿論事也。

一曩祖名字。令ニ翻頭ニ用之條可レ爲ニ如何ニ哉。冷泉爲尹卿。政爲卿。字替其例候。不替レ字者可レ有レ憚哉。

一字相替之上者。無子細。二字共同字者不審。一六位侍。布衣二藍。松重。檜皮之外。何色々可レ着レ用仕哉。茶染。香。雖ニ廷尉ニ可レ着レ用ニ哉。

此外雖爲何色。着レ用何事有哉。香又無子細。歟。茶染者聊不審。

一河內守光行入道并宇都宮蓮生法師等賀沙汰之由。見勅撰家集等。當時雖武家輩。可沙汰之條。可レ爲ニ如何ニ哉。一會之作法可レ爲ニ何樣ニ哉。

雖爲武家數寄輩。再興不能左右。但一會之儀不評定。有其時所見哉。

一散位書之時者。不書加位階之由示申輩。尤不審。

書加位例注申左。可レ爲ニ如何ニ哉。

堀川院。

嘉保三三十一中殿御會。

散位京極大廳從一位臣藤原朝臣師上。

順德院。建保六八十三同。

散位正五位下臣藤原朝臣行能上。

後醍醐院。元德二三廿三同。

散位從一位臣藤原朝臣道一上。

後光嚴院。貞治六二同。

散位從五位上臣藤原朝臣爲敦上。

散位下書位階之條勿論也。

一慈惠大師法樂和歌懷紙端作事。陪慈惠大師寶前。可書之歟如何。

此條不得才學。不可准諸社法樂歟。

一和歌懷紙次第事。不<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>地下堂上<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>位次<sub>一</sub>之段勿論歟。

後冷泉院。天喜四閏三廿七。修理亮源賴綱。右衛門權少尉源齊賴。文章生藤季綱。

法住寺殿御歌合作者次第。賴政卿。于時四位左京權大夫。

土御門內大臣通親公。于時四位羽林。已下昇<sub>二</sub>納言已上<sub>一</sub>家人々々。多爲<sub>二</sub>賴政朝臣下<sub>一</sub>。然者雖<sub>二</sub>當時可<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>位次<sub>一</sub>哉。

古來所用無<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>此至<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>杯飲<sub>一</sub>者。自他斟酌又爲<sub>二</sub>故實<sub>一</sub>歟。

一妙典廿八品和詞勸進之時。自<sub>二</sub>序品<sub>一</sub>始之。其次人可<sub>レ</sub>詠<sub>二</sub>勸發品<sub>一</sub>哉。端奧相替次第可<sub>レ</sub>支配仕<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>。然時者以<sub>二</sub>中將下薦<sub>一</sub>哉。書<sub>二</sub>經裏<sub>一</sub>之時。強不<sub>レ</sub>重之上者。上下不<sub>レ</sub>苦歟。以<sub>二</sub>懷紙<sub>一</sub>勸進之時。守<sub>二</sub>官位次第<sub>一</sub>重之者。品次第錯亂。以<sub>二</sub>品次第<sub>一</sub>重之者。官位有<sub>二</sub>參差<sub>一</sub>哉。被<sub>レ</sub>支<sub>二</sub>配八軸<sub>一</sub>令<sub>二</sub>書寫<sub>一</sub>之時。以<sub>二</sub>序品<sub>一</sub>

上首書之。以<sub>二</sub>勸發品<sub>一</sub>其次人可<sub>レ</sub>書云々。子細見<sub>レ</sub>右歟。此事見<sub>二</sub>伊行夜鶴抄<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>此准據案之。如<sub>レ</sub>右可<sub>レ</sub>支配仕<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>品經<sub>一</sub>者。不<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>次第<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>他不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>所存<sub>一</sub>哉。如何。

此條無<sub>二</sub>定法<sub>一</sub>上。任<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>隨<sub>二</sub>時宜<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>進止<sub>一</sub>哉。

一諸大夫并醫陰兩道侍等中。號<sub>二</sub>將軍家御簡衆<sub>一</sub>者。可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>行何樣事<sub>一</sub>哉。普光園院御簡衆有<sub>二</sub>之<sub>一</sub>。然者至<sub>二</sub>大臣及幕下等<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>件衆<sub>一</sub>哉。

攝關大臣家。宿中簡書。家司名<sub>二</sub>簡衆<sub>一</sub>者。若其事歟。冬良勘。建久二十廿五御記曰。中宮<sub>二</sub>名也。以<sub>二</sub>內<sub>一</sub>人範高<sub>一</sub>補<sub>二</sub>簡衆<sub>一</sub>。令<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>役<sub>一</sub>之。一鎌倉右大臣家勾當。是又何樣子細哉。諸大夫侍共以可<sub>二</sub>經歷<sub>一</sub>歟。如何。

諸大夫下薦有<sub>二</sub>勾當名<sub>一</sub>。執<sub>二</sub>當職<sub>一</sub>人所<sub>レ</sub>申由歟。一記錄所文殿。

記錄所被<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>禁中<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>上卿并關閤寄人等<sub>一</sub>。被

行天下政務之所也。自後三條院御代被始之。至後光嚴院時分有其沙汰一歟。

文殿被置仙洞一歟。冬良勘。文殿執柄家置之。補以下等爲所

衆書下知也。見于文治二年玉葉。記錄所。後白河院保元元年十月廿一日始被置之。依延久例也。

一武者所。

院宮以如瀧口爲武者所之由。見西宮抄。

自上古被置其所一歟。

一大番役。

右何御代被始之。又何比中絕候哉。

武家番役。大略自鎌倉右大將。如此事始歟。

一書狀料紙用引合一事。近年竹園大臣家之外

不可用樣存之歟。冷泉中納言爲相卿。書狀。歷

應之頃。武家輩等用引合所見有之。不可

守株一哉如何。

引合。杉原。雖有厚薄。大略同事歟。至引合。

近日依其人用之事未知子細。自然如此成

來歟。別而不可有子細一哉。

又。

一昇公卿一人々并地下諸大夫等廷尉經歷之例

有之。或爲藏人尉。仍當職時者。如法曹追

捕等例。諸官所役勤仕候。於上下者可任

位次一歟。抑經歷例少々注之。

範季卿。久壽三二任左少尉。即蒙使。宣旨。

宗業卿。文正元正廿右少尉。同四日蒙使。宣旨。

爲長卿。即蒙使。宣旨。

資實卿。治承二十二蒙使。宣旨。

家宣卿。建仁三十補藏人。同十二

時忠卿。任右少尉。蒙使。宣旨。

舊例不及異論。

一攝家以下諸家侍遣五位廷尉書札禮事。六位

准之。縱雖同階。於廷尉者。執啓恐惶勿論

歟。

書札禮事。凡雖守弘安制符。其後不一樣

事等繁多。所詮守家之勝劣。相互斟酌爲肝

要一歟。

一五位廷尉者。可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>攝家之諸大夫<sub>一</sub>由有<sub>二</sub>其說<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>何樣<sub>一</sub>哉。

此事同前。無<sub>下</sub>被<sub>二</sub>定置<sub>一</sub>之法上歟。

一廷尉牛馬輶事。可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>紫紺等<sub>一</sub>之段。可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>理運<sub>一</sub>歟。又茶染可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>如何<sub>一</sub>哉。

可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>流例<sub>一</sub>。且又可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>其所存<sub>一</sub>歟。

一白足袋事。於<sub>二</sub>廷尉<sub>一</sub>者勿論也。北面已下諸侍者可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>淺黃<sub>一</sub>歟。依<sub>レ</sub>人可<sub>レ</sub>用哉如何。

同前。

一直垂事。褐茶染流例歟。裏之色緋香黃可<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>意哉。於<sub>レ</sub>腰者必可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>緋歟。抑近年諸侍裏打之時用<sub>二</sub>革紐<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>廷尉<sub>一</sub>者用<sub>レ</sub>組之條。可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>理運<sub>一</sub>哉。

同前。

二階堂山城判官政行問題也。

愚管勘付之。

文明十年六月 日。

後成恩寺禪閣。二階堂判官政行給之物也。卽御自筆也。

權大納言御判。

大臣子孫稱<sub>レ</sub>君事。

一中右記曰。元永元十。內大臣殿渡<sub>二</sub>給民部卿姬君

許。民部卿宗通者右大臣俊家公男也。

一薩戒記曰。應永廿五。若君被<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>圓座<sub>一</sub>。

若君者花山院持忠公也。持忠公父忠定右大將也。祖父通定者右大臣也。

北政所事。

一玉葉治承三十。曰。兵部卿入道信遠來教訓談話。

御一家習。大臣之後雖<sub>二</sub>攝籙<sub>一</sub>以前。以<sub>二</sub>室家<sub>一</sub>稱<sub>二</sub>北政所<sub>一</sub>。延久元永例也。補<sub>二</sub>家司<sub>一</sub>供<sub>二</sub>節供<sub>一</sub>。



一後成恩寺殿下記曰。御當職之時。被<sub>二</sub>迎申<sub>一</sub>候。必北政所ト申候歟。御職已後者。不<sub>レ</sub>申候歟。承度候。

宣下ナド候歟。

雖當職以前。有<sub>二</sub>婚姻之禮<sub>一</sub>者可<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>北政所<sub>一</sub>候。延久元永等例如<sub>レ</sub>然候。近代大略攝籙之後。始儀式在之。補<sub>二</sub>家司<sub>一</sub>供<sub>二</sub>節供<sub>一</sub>候。不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>宣下沙汰<sub>一</sub>候也。

一大中納言女ヲモ北政所申候歟。必非<sub>二</sub>大臣女<sub>一</sub>者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申候歟。

六條攝政。後京極攝政等例如<sub>レ</sub>然歟。於有<sub>二</sub>婚姻之禮<sub>一</sub>者不<sub>レ</sub>背<sub>二</sub>道理<sub>一</sub>歟。近代不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>婚禮沙汰<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>大中納言女<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>北政所<sub>一</sub>歟。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然者乎。

一親王大臣妻女。一品マデモ被<sub>レ</sub>叙候歟。不<sub>二</sub>打任<sub>一</sub>事候哉。大中納言ナンドノ妻女ハ二品ナドニ被<sub>レ</sub>叙候歟。

親王大臣妻女叙<sub>二</sub>一品<sub>一</sub>之條。先規勿論歟。但多分者爲<sub>二</sub>帝王外祖母<sub>一</sub>之人如<sub>レ</sub>然候哉。

大中納言妻女叙<sub>二</sub>二品<sub>一</sub>之例。是又同前歟。但委不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>勘見<sub>一</sub>。室家ヲ稱<sub>二</sub>北方<sub>一</sub>事。

自<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>至<sub>二</sub>上人<sub>一</sub>。室家之通稱歟。

一小右記寬弘九  
六廿九。曰。左大臣殿。大北方。一條左  
府娘。

一後拾遺集曰。右大臣北方。右大臣六條顯房公。北  
方ハ權中納言隆俊女。民部卿宗通女。宗  
通者右大臣俊家男

一中右記保安元  
七廿二。曰。內府北方。法性寺殿  
通者右大臣俊家男

一同。寬治三  
九十五。右<sub>二</sub>北<sub>一</sub>方。六條堀房公

一後拾遺集。左衛門督北方。左衛門督ハ師忠也。土  
御門右大臣師房四男。

一山槐記保元二  
正九。頭辨北方。葉至光  
頼。

一増鏡曰。富小路の中納言秀雄の北の方にて  
おはせしかば云々。

右二判問答以村井古巖藏本校合畢。

## 三内口決

一云三光院内府記  
又曰故實清談

三光院内大臣 實枝公

## 一綸旨事。

綸旨者。職事書出候。勅裁ト號スル此事候。地下堂上并諸寺諸社へ被ニ成下一候事勿論之儀候。此外守護武士之中。或依ニ勳功之賞。或就ニ所帶一被ニ成ニ勅裁一之儀。連綿在レ之事候。以レ此准據。近代猥被ニ成レ下ニ綸旨一之沙汰共承及候。一向不ニ打任一儀候條。不レ可レ然候。

## 一勅書事。

本式勅書ト申候ハ。大内記黃紙相調候。奏聞候。其時年號月日之間。其當日ヲ勅筆ニテ被レ遊入候。是ヲ御畫ト申候。是假令右筆ノ書タル狀ニ。判ヲ加ル心ニテ候。當時洞家禪師號之勅書。世間流布候間。彼一紙被ニ披見一

候者。文牀分明可レ知候。又内々ニテ勅書ト申候ハ。勅筆之御直書候。堂上并諸門跡等之外。聊爾不レ被ニ染ニ御筆一事情。或眞名。假名。眞名交。或假名計。如レ此三重有レ品事情。然處近年武邊之權威恣候條。爲ニ時之計策。以ニ勅書一被ニ仰出ニ事共候。雖レ似レ輕ニ朝儀。當座之了簡候。但御文言勾當内侍令旨之分候。然時者。縱雖レ被ニ染ニ勅筆。非ニ御直書之道理一候。如レ此用捨可レ隨ニ時之宜一事情哉。

## 一女房奉書事。

是ハ内侍宣ノ准據候。天子ノ御口ヅカラノ仰ヲ内侍奉テ其旨ヲ傳ヘラレ候。是ヲ内侍宣ト申候。以レ此准據。諸事被ニ書出ニ候ヲ女房ノ奉書ト申候。被ニ成候品々ハ大略 綸旨同前候。下々へ被ニ仰出ニ候事者。以ニ宛所一被ニ書出ニ候。

## 一同奉書等御請事。

綸旨。勅書ハ傳奏之方ヘ内狀如レ常可レ然候。  
嚴儀可レ被ニ申入ニ候者。立文<sup>料紙</sup>。尤候歟。勅答  
之書札。文言以下作法有レ之事候。雖<sup>杉原</sup>然於ニ當  
時ニ者。内々披露狀可ニ相應ニ候。

女房奉書之御請ハ假名文ニテ。

かしこまりてうけ給候ぬ。なにノヽヽヽ  
——。このよし。よく御心ヘ候て御ひろ  
う候ヘかし。かしこ。

腰文ニテ封ジメノ下ヨリ

勾當内侍とのヘ

とも房。

諸家之儀。<sup>攝家ハ勿論。諸大  
臣ヘモ御慰勲候。</sup>

大中納言以下ハ。某大納言殿。某中納言殿。

某宰相殿。各稱號ト官ト相兼被<sup>レ</sup>載候。

右御名字許。

武士ヘハ。某ヽヽ——とのヘ。

右御判許。

但武家御任槐之後ハ。諸家ヘモ御判候。

一御下知事。

惣別武家之下知鹿苑院以來之事候。被<sup>レ</sup>准ニ

院宣ニ之條。其源雖<sup>下</sup>自ニ公家ニ出<sup>上</sup>。近代之作法

一向無案内候。就ニ諸奉公之輩。可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>得ニ才

覺ニ歟。

一公卿殿上人員數之事。

大臣三人。<sup>太政大臣  
此外也。</sup>關白在ニ此中。

大納言十人。中納言十人。參議八人。

都合卅一人。是ヲ現任之公卿ト號ス。天下

万機之政所<sup>レ</sup>行仁躰候。

公ハ三公也。<sup>三大臣ノ事  
ヲ申候。</sup>

卿ハ。大中納言。參議。此廿八人ヲ卿ト申

候。

殿上人ハ。四位五位ノ雲客ヲ申候。員數ハ不

レ定候。

中少將八省輔以下。依ニ家々ニ官之差別雖

レ有之。四位五位皆同稱ニ殿上人。

御幸之時。御輿前行二行。及ニ數十人<sup>一</sup>候。當時武邊走衆ナド申候ハ。此等之准據候哉。

一攝家清華事。

攝家ト申候ハ攝政家ト云心候。元來ハ近九之二流ニテ候。近衛ヨリ出タルヲ鷹司ト稱シ。九條ヨリ別レタルヲ二條。一條ト申候。是ヲ攝家ノ五流ト號候。攝家ハ子細アリテ。五流ヲ爲レ限。諸家ハ力量次第立ノ家候。近衛ハ系圖之面雖<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>宗領。名記無<sup>レ</sup>之。九條ハ雖<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>庶流。峯關白。月輪禪閣。後京極攝政之御記。是ヲ三代ノ正記ト號シテ。爲<sup>ニ</sup>天下之鏡。然間。九條ハ正嫡ト見ヘ候哉。雖<sup>レ</sup>然諸家之用ヒハ五流無<sup>ニ</sup>差別<sup>一</sup>候。但二條之一流ハ南朝御出奔之後。光嚴院被<sup>レ</sup>開<sup>ニ</sup>聖運。當代之御一流被<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>正統之事<sup>一</sup>者。二條後普光院攝政良基公。一家之勳功也。依<sup>レ</sup>之至<sup>ニ</sup>于今<sup>一</sup>稱<sup>ニ</sup>天下御師範<sup>一</sup>。清華トハ花族之公達ノ通稱候。大臣拜任之人者。清華勿論候。然處不<sup>レ</sup>經<sup>ニ</sup>大將<sup>一</sup>家候。雖

然清華一列不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>異儀<sup>一</sup>候。

閑院ノ三家。三條。西園寺。德大寺。久我。花山。大炊御門。

以上是ヲ稱<sup>ニ</sup>三家<sup>一</sup>。閑院ノ三家ハ又別也。

洞院斷絶也。庶流菊亭今現在候。

此外皇子王孫賜<sup>レ</sup>姓昇進候人々。此等ヲ清

華ト申候。

一姓朝臣事。

源朝臣。藤原朝臣ト書載候事ハ。位署ヲ書時之事候。譬法樂歌ニ。

冬日同侍太神宮社壇詠百首和歌。

正四位下行右近衛權中將源朝臣具房

此類候。面向之時ハ姓尸ヲ書載候。内々之時

ハ一向以<sup>ニ</sup>略儀<sup>一</sup>位ト尸ト除之候。

又名字朝臣ハ。四位雲客之時如<sup>レ</sup>此候。是ハ人

ハ書之。自ラハ不<sup>レ</sup>書之候。

一親房卿事。

於<sup>ニ</sup>南朝<sup>一</sup>昇進之人一切不<sup>レ</sup>用之候。然處此親



房卿計。北畠准后天下稱<sub>レ</sub>之候。御家規模無<sub>二</sub>比類<sub>一</sub>事候。廣才博覽所<sub>二</sub>世之推<sub>一</sub>候。

一副將軍事。

凡將軍ハ有<sub>二</sub>朝敵<sub>一</sub>之時爲<sub>二</sub>追討<sub>一</sub>。一旦被<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>之。尊氏依<sub>二</sub>別忠<sub>一</sub>。永代可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>將軍家<sub>一</sub>之由。被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候後。他人之競望無<sub>レ</sub>之候者也。副將軍者六孫王始被<sub>レ</sub>補候歟。建久以後無<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>。況於<sub>二</sub>當時<sub>一</sub>者。依<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>重<sub>二</sub>將軍家<sub>一</sub>。彌近代不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>候。

一御所。本所。御方等之事。

家門ト稱候ハ五攝家之儀ヲ於<sub>二</sub>公界<sub>一</sub>稱<sub>レ</sub>之候。清華以下之諸大臣家ヲバ於<sub>二</sub>其家<sub>一</sub>稱<sub>二</sub>家門<sub>一</sub>候。但家僕等ハ依<sub>レ</sub>執<sub>二</sub>其家<sub>一</sub>互<sub>二</sub>稱<sub>二</sub>家門<sub>一</sub>候。本所トハ諸家堂上之衆皆一同ニ本所ト稱候。

御所。是ハ大臣家以上之家。執<sub>二</sub>其主人<sub>一</sub>之故家僕等稱之候。公界へ不<sub>レ</sub>出事候。惣別依<sub>レ</sub>人

賞翫之詞有<sub>レ</sub>之事候。連歌一道之法師等ハ。御所之字ヲ付テ申來候。然處。官位剩呼<sub>二</sub>唐名<sub>一</sub>候。以外之曲事候。大臣之孫以後者。於<sub>二</sub>内儀<sub>一</sub>モ御所之號不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有事候。雖<sub>レ</sub>然先祖家僕所<sub>二</sub>申來<sub>一</sub>候故。不<sub>レ</sub>改儀モ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候歟。於<sub>二</sub>關東<sub>一</sub>諸家中。久我御所。小弓御所等有<sub>レ</sub>之上ハ。不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>異論<sub>一</sub>候歟。

一裝束之色目事。

冠。上古ハ以<sub>レ</sub>冠分<sub>二</sub>官位<sub>一</sub>候。大織冠。小織冠。錦冠上。錦冠下。如<sub>レ</sub>此其品々相分候。其後被<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>置官位<sub>一</sub>以來。冠之貴賤尊卑差別無<sub>レ</sub>之候。但垂纓之寸法。依<sub>二</sub>貴賤<sub>一</sub>長短有<sub>レ</sub>之事候。上自<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>下至<sub>二</sub>六位外記史<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>冠者<sub>一</sub>着<sub>二</sub>用<sub>一</sub>之。着用之差異無<sub>レ</sub>之候。雖<sub>レ</sub>然殿上六位藏人四人者。用<sub>二</sub>細纓<sub>一</sub>候。

又堂上之人々。自<sub>二</sub>元服<sub>一</sub>至<sub>二</sub>十六歲<sub>一</sub>。用<sub>二</sub>透額之冠<sub>一</sub>。冠ノ額ヲ半月形ニ堀透テ。裏面ハ羅ヲ懸通シタル物ニ候。貴人者及<sub>二</sub>廿餘

歲<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>用候。其以後者着<sub>二</sub>厚額<sub>一</sub>。常之冠之事候。後京極攝政。廿未滿之時被<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>厚額<sub>一</sub>候。殿。月輪父公<sub>殿</sub>以外<sub>二</sub>加<sub>二</sub>責勘<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>切<sub>二</sub>破冠<sub>一</sub>之由。見<sub>二</sub>舊記<sub>一</sub>候。

一烏帽子事。

立烏帽子ハ堂上一同着候。地下不<sub>二</sub>着用<sub>一</sub>候。但社官社人。雜色如木白丁退紅等。皆着<sub>二</sub>用立烏帽子<sub>一</sub>候。此等ハ暫時モ不着<sub>二</sub>風折<sub>一</sub>也。但雖<sub>二</sub>立烏帽子<sub>一</sub>。佐比各別<sub>之類也</sub>。之儀候。惣別<sub>之類也</sub>。最上與<sub>二</sub>最下<sub>一</sub>同等之儀有<sub>レ</sub>之物候。風折。地下諸大夫。布衣并直垂等。醫陰之輩。殿上之中ニモ着用之家々有<sub>レ</sub>之。世號<sub>二</sub>此折鞘之黨<sub>一</sub>候。但元服之初。至<sub>二</sub>十六歲<sub>一</sub>者。雖<sub>二</sub>諸大夫<sub>一</sub>。着<sub>二</sub>用立烏帽子<sub>一</sub>候也。又雖<sub>二</sub>堂上<sub>一</sub>。或馬上。或鷹狩。或蹴鞠等。如<sub>レ</sub>此之時者。必着<sub>二</sub>風折<sub>一</sub>候。又額有<sub>二</sub>種々之品<sub>一</sub>。

小諸額。攝政御着<sub>二</sub>用<sub>一</sub>。

諸額。十六歲迄用<sub>レ</sub>之。

右上リ。院御所親王等御着用也。但給<sub>二</sub>御

服<sub>一</sub>之人々。雖<sub>二</sub>臣下<sub>一</sub>着<sub>レ</sub>之。左上リ。諸家通用<sub>レ</sub>之。

佐比有<sub>二</sub>種々之品<sub>一</sub>。柳佐比之類。

皺御氣色之皺閑院。末披形。西園寺。鞭皺。園。

一束帶之具。

冠。注<sub>レ</sub>右。

表衣。又號<sub>レ</sub>袍。

夏冬。壯年之間ハ志々良。四十以後ハ能志目。

四位以上ハ紫。フシカネ染。

五位ハ緋。

六位ハ綠衫。

無位ハ黃袍。

又一日晴ノ時。有<sub>二</sub>染裝束<sub>一</sub>。

下襲。尻ヲ裾ト號ス。

夏。紅ノ濃目單也。

冬。有<sub>レ</sub>裏。面白綾。紋浮線綾。裏濃紫。フシカネ。

此外。一日晴之時。或織物。染色。

半臂。如<sub>二</sub>肩衣<sub>一</sub>ニテ有<sub>レ</sub>裏。是ヲ半臂ト云。有<sub>レ</sub>襷。紅綾ノ袖。自<sub>二</sub>漢高祖故事<sub>一</sub>。不用<sub>レ</sub>袖候。

單。紅綾。紋菱。一日晴之色目又各別也。

夏。板引。

冬。張之打物也。

大帷。布。夏。紅。

冬。白布。以<sub>レ</sub>糊成<sub>二</sub>張物<sub>一</sub>。爲

レ令ニ衣文ニ有レ力也。以ニ單之襟裏之。是ハ一向重之外也。

引倍支。是ハ每度ニハ不レ重候。晴之時着用候。

大略如レ單ニテ有レ裏。入レ綿。夏ハ綿拔テ着用。故ニ引倍支ト號候。平世之束帶ニハ無之候。

表袴。紋。藤丸綾。裏。紅平絹。板引。

赤大口。紅。小精好。裏。平絹。

太刀。蒔繪太刀。平生用。飾太刀。節會日用レ之。

木地螺鈿。樋螺鈿。晴之時帶之。

野太刀。行幸。有ニ尻鞘。大臣以下豹虎熊猪等各有レ差。

黑塗白飾太刀。凶事之時用レ之。

平緒。

紺地。三位以。紫段。四位。大將ハ雖ニ櫛段。五位以下。公卿帶レ之。

石帶。

石。唐公。碼碯。四位。犀角。五位。牛角。六位。

此外巡方ノ有文無文。兩様有レ之。晴之時用之。

丸鞆。平生ハ用ニ此石也。

笏。

沓。淺沓是也。黑漆有ニ上敷。或杉原。紋家々之紋。大將ハ沓紋不レ用之。隨身相隨之故也。

御卽位之沓ハ如ニ唐人之沓。皆朱。中ハ以レ錦張之。有レ環。有ニ紅緒。

靴。節會日用之。

魚袋。節會日石帶ニ着之。公卿衾。殿上人銀。

檜扇。以レ糸置レ紋。家々紋有之。

以上束帶之皆具此分也。

平生出仕之裝束。

直衣。夏。生ノ濃目。紋菱。色ニ藍。依ニ年齡ニ次第ニ青ク成候。

冬。面白綾。紋浮線綾。裏平絹ノニ藍。色之淺深如ニ直衣。壯年之間ハ志々良。老後能志目。

指貫。十五歲迄ハ濃浮織物。

自二十六歲。薄色之浮紋。鳥多須岐。

卅歲計之時。藤丸ノ薄色。四十以後。花田

指貫。

裏平絹。色ハ依ニ年齡<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>右。

殿上人之時。大臣ノ孫マデ。直衣指貫等如<sub>ニ</sub>

公卿<sub>一</sub>着<sub>ニ</sub>用之<sub>一</sub>候。可<sub>レ</sub>聽<sub>ニ</sub>禁色<sub>一</sub>之由。蒙<sub>ニ</sub>

宣旨<sub>一</sub>以後着<sub>ニ</sub>用之<sub>一</sub>候。

非色之殿上人ハ平絹之直衣。平絹ノ指貫

着<sub>ニ</sub>用之<sub>一</sub>候。

冬ハ面練貫。裏平絹。二藍。

非色トハ大臣之彦以下大中納言家之事

也。

檜扇。

與ニ束帶之時<sub>一</sub>同。廿五枚。但十五歳迄ハ杉横目ノ扇。有<sub>ニ</sub>肩繪<sub>一</sub>金物。丘色捻糸。付<sub>ニ</sub>結花<sub>一</sub>。平生卷之持。十六歳以後ハ置<sub>レ</sub>紋。折枝等長置候。家之紋。

蝙蝠扇。平生用<sub>レ</sub>之。兩金。描間。骨白。黒保禰不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之。

内々之衣裳。

烏帽子直衣。

大臣着<sub>レ</sub>之。親王着<sub>レ</sub>之。

曾波津々幾。

着<sub>レ</sub>之。

小直衣。

大臣着<sub>レ</sub>之。

白大口。

童裝束。面向晴之時着之。元服以前之事也。

水干。

攝政。清花。平生着<sub>ニ</sub>用之<sub>一</sub>。色不<sub>ニ</sub>相定<sub>一</sub>。當家ハ織物之水干着<sub>ニ</sub>用之<sub>一</sub>由。見<sub>ニ</sub>舊記<sub>一</sub>候。童形之間ハ諸家着<sub>ニ</sub>用<sub>一</sub>。元服以後ハ不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之候。大臣ノ孫子ハ。元服以後着<sub>ニ</sub>用<sub>一</sub>勿論候。

長絹。

地下之輩着<sub>ニ</sub>用<sub>一</sub>之物也。

狩衣。

下ハ着<sub>ニ</sub>指貫<sub>一</sub>。其上ニ用<sub>レ</sub>之候。堅固内々ノ衣服候。地下堂上皆同用之也。

或馬上。鷹狩。野遊等。爲<sub>レ</sub>泥<sub>ニ</sub>雜人<sub>一</sub>着<sub>レ</sub>之事候。但仙洞布衣始之後。爲<sub>ニ</sub>面向之衣

服<sub>一</sub>條。其差有<sub>レ</sub>之事候。

四季ノ狩衣ノ色目。相替候。

松重。梅。櫻。柳。欸冬。若苗色。

卯花。瞿麥。女郎花。朽葉。菊重。

雪下。

此外年中之用樣。不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>其數<sub>一</sub>候。

此外唐織物。浮織物等各有<sub>レ</sub>裏。

單狩衣ト云ハ紋紗也。色は不定。四季通用。

侍着<sub>ニ</sub>用之<sub>一</sub>時。是ヲ布衣ト云。平絹指貫

着<sub>レ</sub>之候。

直垂。諸大夫之外ハ。諸家共用<sub>ニ</sub>絹直垂<sub>一</sub>候。



鹿苑院殿御代。昵近之人々給ニ布直垂一候。其以來諸家着ニ用之一候。一向非ニ本儀一候。雖然大臣家ハ着絹候。當家ハ公時卿爲ニ講尺一平生祇候之條。依ニ御入魂一内々ノ時給ニ布直垂一候。然間兩樣着來之由。然處故入道院。右大臣拜任之上者。家之儀爲ニ各別。仍布之直垂相止了。惣別十六歲迄ハ諸家一同着ニ白絹直垂一候。色之直垂ヲバ不着レ之。諸大夫モ同前候。

一元服事。別可ニ注進。

凡之儀ハ。其座敷悉撤レ疊候。若板敷見苦敷者。敷滿建。其殿之中央。奥。圓座一枚敷之。南面。或爲ニ冠者之座。其左之座頭敷ニ疊一帖。西面。或爲ニ加冠之座。中央冠者之圓座之前二尺餘引去。又敷ニ圓座一枚。爲ニ理髮之座。刻限凡記冠者亂髮着座。次加冠着座。次雜役之人々置ニ雜具。先打亂宮。櫛巾裏冠者圓座之前中央置

之。次置冠。或鳥帽子。居柳。冠者之右方。次置湯須留杯。入レ水有ニ盃。鬢櫛一髮ヒ一。但櫛髮搔等兼不レ置。置也。同居ニ柳。冠者左方。理髮之人退去之時置レ之可レ然。同居ニ柳宮冠者左方。次加冠召ニ理髮之人。其人依レ仰着ニ圓座。其作法。先展櫛巾。調ニ雜具。作法一レ之。次冠者平伏。理髮之人。取ニ冠者之手。左右ニ指。前ヲ開之。令レ突之。可レ移レ刻之間。令用。理髮之人。取ニ冠者亂髮。搔撫テ取ニ本結。ト一結者。常紙捻。其次紫ノ小本結一筋ヲ二陪取テ。一本結ヲ卷上テ。其末ヲ結留。又以ニ紙捻一其京束。結之。次理髮之人。以ニ髮搔一髮ノ末ヲ一二分テ。以ニ紙捻一結之。先左方。次以ニ引合一卷之。次右方。二折ニシテ横卷之。兼書ニ左右一以ニ紫之小本結二筋一。左右結分之。片カキ。右相向。和那ヲトス。次理髮。其作法。結分タル髮ノ末ヲ折通シテ。筭ヲ逆手ニ持テ。左手ノ髮末ヲ本髮ニ取副テ理之也。理之テ刀ヲ櫛巾ノ前ニ通入。右手ニテ取ニ鬢木。櫛巾ノ中ニ藏引納之。冠者ニ不レ令レ見之。仍加ニ了。可レ有ニ理髮之人之作法如此。次加冠取冠。或鳥。令レ蒙之。理髮取ニ冠者之左右手。令レ持之。次理髮之人。雜具等打亂宮中へ返納。櫛巾如レ元相調。此時髮之櫛一。髮

搔一。置湯寸流坏一起座退出。次加冠之人。

進寄理髮之圓座下。取髮櫛髮搔。不沒水。漸

進到冠者之前。及而理髮搔髮。先左髮。次右。次中央。

心中祝三万々歲之壽。而髮櫛等如元返置

歸着座。次役者撤雜具。次冠者起座入

休所。於此時改本結眉等衣。裳以下。可成新粧。次加冠之人起座退

出。若着座之人有之者。冠者之右方敷疊

一帖。其中兩人着之。與加冠相向着座之。

此間座敷相改テ如常敷滿疊。次冠者出

座。冠者着我座之程。盃杓多少可隨時

也。

### 一隱居事。

上代之時者。相構山庄去塵境不預三世

間之事。仍家督之人。一切令支配者也。

於家領者。以分一爲隱居之活計分。

於臨時之所分者。所家督之人不可知

也。隱遁之人者。雖爲俗形。優婆塞之道理

也。於庶事非可染心候哉。

一法鉢裝束等之事。

參内ニハ宮鉢。下ハ指貫。上ハ如

鈍色。表袴。香ノ重ネ衣。香袈裟。

檜扇或持三念珠。右大納言ヨリ參議マデノ

法鉢ノ人着ノ用之候。内々ニハ素絹。平絹

ノ二重袴着ス。

道服。色ハ不定候。大中納言法鉢之人着用候。俗之時ハ。大納言ハ父子相並候時斟酌故實候。其故ハ佛道ニ

入之心候。然ハ櫛ノ裝之儀。免許後ハ不苦候。

直綴。下用之候。

律衣。上下衣。五條袈裟。參内モ不苦候。

禪衣。道具之時ハ參内モ不苦候。

唐帽子。素絹道具等之時ハ用之候。

帽子。律衣。禪衣之時用之候。

頭巾。是ハ堅固内々之儀候。間。可爲隨意候。

扇。宮鉢鈍色之時者檜扇。其外ハ蝠扇。

一殿并家作等事。

主殿ハ七間四面。南面通法候。

面七間之中。妻戸二有之。一ハ公卿座ノ中也。是ハ主人ノ妻戸。仍平生ハ不

開之。爲貴人等出入之路也。中門車寄此所ニ相兼テ作之。家々有之。與等自ニ此戸一可寄候也。其次之

妻戸。平生之客人之通路也。其迫出ニ廣縁。透連

子也。白壁之中也。其次落縁有ニ開戸。其廣縁之西面ニ是ハ奏者之仁。又雜人等之通路也。

又妻戸。是公卿座之入口也。公卿座四疊敷也。

或六疊敷也。清花之御所之公卿ノ座。六疊鋪也云々。此間有ニ置物。硯一面。脇

息。灯臺等也。公卿ノ間ノ妻戸。翠簾捲之。懸釣

丸。無客來一本主殿ノ間ニ有ニ帳臺構。南面。與ニ之時ハ垂之。

公卿座之間被障子二間。中央ヲ左右ヘ路ヲ開ク。客入レ自ニ

座末之障子。謁ニ主人。此對面所之後之座鋪。

有ニ押板。主人常住安座之所也。

此外間々有ニ名。不レ違レ記之。

凡主殿ハ兩中門。有レ廊。車寄。別棟也。縁之板敷殘候。其形如

右。對ノ屋二。東ヲ號ニ一。對。西ヲ號ニ二。對。主殿之北方對スル儀也。武士之家ニ稱ニ奥屋。是故實也。堂上之諸家ハ號ニ對屋一也。

階藏。大臣家。爲レ可レ申ニ行幸一也。

隨身所。大將經歷之家有ニ此所。土間也。三方有ニ腰懸。武士管領職之家。號ニ轡所一者。此准據也。

殿上。攝關家有ニ此日給。如ニ禁中ニ立ニ日給簡。

障子上。攝關之人内覽之時出ニ此所。凡家ハ無レ之。

一會所。

押板。書院等如レ常。有レ庭。或有レ池。

座敷手使等可レ隨ニ主人之所レ好。仍無ニ定之

樣。凡對屋作ニハ不レ入ニ角木。狐戶無レ之候。

主殿作。會所山庄等皆掛ニ角木。入ニ狐戶。

侍之家ニハ破風棟木等別樣也。法譜大工令ニ分別一者也。

廐。

禁中ニハ被レ置ニ左右馬寮。被レ繫ニ御馬一候。

是ヲ號ニ寮ノ御馬一候。以レ此准據。諸家ニ於ニ

面向ニ不レ立レ廐候。武士ハ依レ爲ニ守護。以ニ弓

馬ニ爲レ業。然間於ニ面向ニ必立レ廐。是公武之差

別也。二間三間者。諸人通法也。五間七間已上

者。依ニ分國之多少。有ニ其員。仍細川家者。爲ニ

十三ヶ國之拜領。依レ之十三間之廐規模之由

承及候。

一翠簾。

本式主殿之時。母屋之簾各別也。小壁無<sub>レ</sub>之候故。自<sub>二</sub>裏板<sub>一</sub>直掛之。仍其長過分候。無<sub>二</sub>釣丸<sub>一</sub>。其外廂。妻戸。格子等。常之翠簾無<sub>二</sub>差別<sub>一</sub>候。其外。廂。妻戸ハ可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>釣丸<sub>一</sub>。此外ハ不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>釣丸<sub>一</sub>。大炊御門一家ニハ。有<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>一切不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>釣丸<sub>一</sub>候。限<sub>二</sub>此一家<sub>一</sub>候。

一塗輿。四方。輿之代也。當時ハ車之代。

諸家之輿ハ有<sub>レ</sub>廂。僧并武士ハ無<sub>レ</sub>廂。

路頭之禮有<sub>レ</sub>之。以<sub>二</sub>車之禮<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>准據<sub>一</sub>。

前駟。雜色。以<sub>二</sub>角木<sub>一</sub>。

侍爲<sub>二</sub>騎馬<sub>一</sub>。諸大夫侍等之令<sub>二</sub>見<sub>一</sub>者也。下車步行之時者。諸大

夫雜色等可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>前行<sub>一</sub>也。以<sub>レ</sub>此准據。乘輿之

時モ可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>。武士ハ步行之時。前駟無<sub>レ</sub>之候也。塗輿者。諸

家諸山於<sub>二</sub>門前<sub>一</sub>乘之也。但東堂者。至<sub>二</sub>玄

關<sub>一</sub>乘之云々。若然者經<sub>二</sub>寺僧之推舉<sub>一</sub>之後。可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>其例<sub>一</sub>歟。惣別者。於<sub>二</sub>門前<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>乘之條。

爲<sub>二</sub>本儀<sub>一</sub>歟。凡輿之立所者。禁中ハ限<sub>二</sub>立石<sub>一</sub>。諸家ハ互<sub>二</sub>限<sub>一</sub>門外。但攝家凡家ハ渡御之時。限<sub>二</sub>網代車之准據也。仍路頭之禮無<sub>レ</sub>之。或寺中。或下馬。下車之在所一向不<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>其禮<sub>一</sub>。乘打也。依<sub>レ</sub>之男子忍之時乘之。女房ハ中臈迄掛<sub>二</sub>下簾<sub>一</sub>。末之者下簾無<sub>レ</sub>之候。又尼者雖<sub>二</sub>貴人<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>掛<sub>二</sub>下簾<sub>一</sub>。是偏捨世之儀歟。

一乘馬。

凡馬者。鞍皆具依<sub>レ</sub>位有<sub>レ</sub>差。唐鞍。水干鞍等。切付ニハ豹。虎。薙葛等。總轡ニモ有<sub>二</sub>種々之儀。網盤以下非<sub>二</sub>普通之物<sub>一</sub>。一々離<sub>レ</sub>記之。行幸之時ハ。三公以下

卅一人現任公卿爲<sub>二</sub>騎馬<sub>一</sub>。平生ハ野遊。鷹狩等

各乘馬也。此時ハ着<sub>二</sub>狩衣。鷹狩ニハ指貫之上ニ着<sub>二</sub>行騰<sub>一</sub>。近年者着<sub>二</sub>直垂<sub>一</sub>。

大略小略乘物勿論候。故勸修寺中納言傳奏

之時。自<sub>二</sub>武家<sub>一</sub>日々披露之儀依<sub>二</sub>事繁<sub>一</sub>直垂乘

馬參内之由見及候。

一腰物。

非<sub>二</sub>本式之儀<sub>一</sub>。仍於<sub>二</sub>公家<sub>一</sub>者無<sub>レ</sub>帶之。但院御



所ニハ内々御用意。北面等ニ被<sub>レ</sub>下之儀其例分明也。然時一向ニ非可<sub>ニ</sub>棄捐<sub>一</sub>之物。抑諸家之諸大夫。直垂之上ニ帶<sub>二</sub>腰刀<sub>一</sub>。是近代之作法一向不<sub>レ</sub>謂之儀。其故ハ權少輔清種。先祖代々爲<sub>二</sub>院御所之御裝束師<sub>一</sub>。或時候ニ御衣文<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>糸間之。而無<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>切刀<sub>一</sub>。仍自<sub>レ</sub>院給<sub>二</sub>御腰物<sub>一</sub>。乍<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>布衣<sub>一</sub>帶之。然間直垂之時モ帶之。是一家之規模限<sub>二</sub>此流<sub>一</sub>也。然處諸大夫ハ。必可<sub>レ</sub>帶<sub>二</sub>腰刀<sub>一</sub>之樣。諸家之諸大夫相似之條。如<sub>二</sub>西施襲<sub>一</sub>。太以見苦鋪義也。近代將軍家。以<sub>二</sub>武勇<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>先之條。直垂ニ被<sub>レ</sub>帶<sub>二</sub>腰刀<sub>一</sub>。御參内之時。御直廬迄<sub>長橋</sub>被<sub>レ</sub>帶之。是ハ一切法外。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>傍例<sub>一</sub>者也。

一常々可<sub>レ</sub>令<sub>ン</sub>持<sub>ニ</sub>太刀<sub>一</sub>哉否事。

一硯箱雜具入樣事。

有二束蒔繪。根本薄樣也。

懸子一者。男硯也。

一所置之候。但刀與筆混亂有其煩之間。左方一刀刀鉤  
ト如ニ刀房視納候條可レ然哉。猶又異様之視出共。古物ニ硯  
ノ之難守ニ一隅ニ歟。但近代之義而已。或人曰。四季之硯  
視言之硯。種々之故實在レ之云々。然問一册之細書。世間ニ傳  
レ之。以不可說也。  
不レ可レ用之。

一硯文臺蒔繪紋置之時巡逆如何事。

尊雖<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>之逆置也。如<sub>レ</sub>此之時モ文臺ハ紋ヲ巡ニ置候也。硯モ同前也。

一香爐灰并火事。

三具足之時。或取<sub>レ</sub>火。或不<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>火。兩樣候歟。常之香爐爲<sub>二</sub>置物<sub>一</sub>者。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>火歟。會席等之時者。爲<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>焚<sub>レ</sub>香也。然者可<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>火之儀勿論也。何樣必可<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>灰之段勿論候。

一幕事。

禁中左右近之陣有<sub>レ</sub>幕。大將ヲ號<sub>二</sub>幕下<sub>一</sub>事者。此子細ニ候。大將。中將。少將等。平生此近場ニ在陣之心ニ候。如<sub>レ</sub>此之條。幕之儀ハ外樣用之事歷然候。

又幔幕云ハ色々立交也。

有<sub>二</sub>堅橫。當時モ陣之儀被<sub>レ</sub>行之時。其形少相殘候。

纈纈ノ幔。

有<sub>二</sub>紅紺立交也。

舞立之時。樂屋引也。惣別幕ニ四ノ名候哉。平生尋常ノ幕。又軍陣ノ幕。家居之幕。本式ノ幕等候歟。尋常ニ用候幕ハ。家紋等公家武家之差別無之候。客來。酒

宴。野遊。普請等露破候處必施<sub>レ</sub>之候。

一盤。四方三方事。

大臣以上ハ四方。大納言以下ハ三方也。

攝家ハ不<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>淺官。自<sub>二</sub>幼少<sub>一</sub>於<sub>二</sub>公界<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>四方<sub>一</sub>候。爲<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>條一向各別事候。然處清華ノ諸流ハ。於<sub>二</sub>公界<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>四方<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>存歟。曾以無<sub>二</sub>其謂<sub>一</sub>。所詮於<sub>二</sub>禁中<sub>一</sub>御相伴之時。清花之大中納言。自<sub>二</sub>前々<sub>一</sub>三方ニ相定候上者。爭於<sub>二</sub>公界<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>四方<sub>一</sub>乎。諸家更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>免之事也。於<sub>二</sub>私宅<sub>一</sub>者。大臣之孫子迄ハ用<sub>二</sub>四方<sub>一</sub>候。是ハ堅固内々之儀候。如<sub>二</sub>愚老<sub>一</sub>モ内儀之時。四方受用理運事候。若如<sub>レ</sub>此之儀被<sub>二</sub>思直。清華之衆被<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>異儀<sub>一</sub>哉ト推量候。細縁之三方ハ六位藏人ニ用<sub>レ</sub>之候。公界參會之時如<sub>レ</sub>此。

私云。官女上臈分之人。用<sub>二</sub>細縁<sub>一</sub>。

殿上人。四位五位。公界參會之時三方勿論也。

然所於親王家。攝家。宮門跡等。被用折敷。隨分稱雄之雲客甚以不便。仍有所存之輩。酒肴之時者令早出。或平生不昵近。是故實也。愚老雲客之時。於伏見殿給細緣三方了。於攝家モ如此之用捨尤可然哉。況諸門跡之儀。誰不可存異儀。於家禮之輩者。一向非可被量。依此義。諸家之勝劣令混亂歟。無有職之所至也。

### 懸盤。

平生朝夕膳。諸家可用此盤事候。雖然各依無沙汰不用候。當所受用物者。一日晴ニテ號檜懸盤候打捨云々。再往不可用之器候。

### 一器事。

木具。土器。面向之參會。會席。祝儀ハ必用之候。

### 塗物ノ器。

平生受用之器勿論候。皆朱之上或有紋或無紋。漆箔等隨所好各用之候。堅固内々之儀

候。

青瓷。或白茶碗。大臣朝夕之器也。一切塗物不用之。道達院稱名院。禁中御會

參内之時者。自長橋局朝夕所用之茶碗密々被召寄。令受用トキ。大臣規模此分候。

此外上古之器共多候。

### 一折敷 食籠等之事。

酒宴ノ時。折ノ物二合三合一度ニ出之候。數少之時ハ。一合宛モ出候事。又常之儀候。

凡一獻之時。人々前之物之外ニ押物一充有之物候。然間折物ハ座上ヘハ不進候。獻ニ不

向之人々用候。雖然一獻省略之時者。爲

押物之代。座上ヘ進候也。本式之儀能於分

別可有執沙汰事候哉。食籠ハ内々之物

候。然者是モ爲押物之代出座敷候事。於

當時者理運事候。頗催座之興候條。尤之

儀候。土器之物サヘ。應仁亂後新儀之調法候。

雖然時代推移候條。可被任世上之作法

候。然トモ珍客等ヘ可被執進仁牀之事。諸

家堂上分之客來候者。或主人或ハ一門之人。可レ被ニ執進ニ之條可レ然候哉。但可レ依ニ其席ニ候條。兼難ニ調定ニ候。内々之時ハ。家僕之仁躰。可レ被ニ獻ニ之條勿論候歟。

一客來奏者等之作法事。

攝家。宮門跡渡御之時ハ。主人自身中門へ被ニ罷出。可レ被ニ奉ニ迎入。御座定候後。主人計我座之程ニ可レ有ニ祇候ニ也。此時。奏者之人ハ躰庭上。不可レ有ニ奔走之作法。御歸之時。主人出ニ座上ニ被ニ送申。御乘輿之時可レ被ニ歸入ニ也。奏者之人出ニ門外。御供奉之人々ハ。一禮可レ被ニ申。大臣并諸門跡等者。其人緣へ被ニ登之時。主人被ニ罷出。座敷被ニ歸入。相隨而我座之程ニ可レ有ニ安座。奏者之人中門之外ニ罷出。爲ニ案内者ニ前行。其人昇殿之時於ニ縁下ニ踞居。從ニ問道ニ前行可レ申ニ案内。大中納言分之人爲ニ客者。主人臨ニ期簀子迄可レ被ニ罷出。奏者之作法。略同前。若其人爲ニ大臣家ニ者。縱童形或雖爲ニ淺官。可レ致ニ慰勸之禮ニ也。

諸宗之長老等ハ。奏者座敷へ請入之時。主人立向テ可レ有ニ揖讓之禮。禮ハ對座候。一分可レ然候。上人分者。主人座定之後。奏者請ニ入之。座候躰對座可レ然。是ハ一寺一山之主。其室可レ然仁躰事候。或爲ニ道學興隆。一旦蒙ニ上人號ニ之輩ハ。於ニ落間ニ對面可レ然候。況送迎之禮。曾以不可レ有之。

座頭之檢校勾當等於ニ次間ニ對面可レ然候。於ニ院中ニ御自愛候故。諸家令ニ出入ニ事候。非分之花族無ニ勿躰ニ候。

祭主。賀茂。春日社官。陰陽。典藥。外記官務等之輩。次之間迄可ニ召入ニ事候。雖ニ然當時以外慮外之條。可レ有ニ所存ニ候歟。所詮被ニ相計ニ時之用捨可レ然候。公人等之儀ハ。禮節不レ及ニ沙汰ニ候。

一小者事。

公家中ハ不レ召ニ仕小者ニ候。小雜色計ヲ召具



候。家僕之青侍。私小者ヲ召使候。中間小者ハ。侍之家召置候。公家中一向不存候。假令名ヲ申替候計候。雜色ハ沓金剛令持之候。諸大夫取之令付之。諸大夫無之時ハ。雜色金剛等置之候。直非令着候。

### 一馬太刀進物事。

面向之一禮定儀候。

嫁取。元服。拜賀。扈從之人衆等必有此禮義。

行幸供奉之公卿。有此禮。

樂道郢曲等傳受候時。又有此禮。

就其馬太刀折紙書樣。

馬一疋ト載之時ハ。毛付有之。有毛付

之時ハ。太刀一腰ノ下ニ其作注之。若無

作之物之時ハ。持ト注之。馬ヲ一疋ト書

心ハ。可爲馬代之義也。但家々意互ニ

不可守株乎。

### 一鷹之事。

此一道者。持明院被預申譜代之家候。西園

寺之一代。與持明院依爲內緣粗被傳

受了。仍鷹百首世上令流布了。如此道之

主有之條。此儀一ニハ分テ難申候。就彼家

可有相傳候。惣別鷹之儀。藏人所ニ被繫

之。鷹所記被注之以來法度相定候。然間花族

之公達。近衛大將。中將。少將等。此道鍛練事候。藏人所之御

鷹者。裝束以下依無其隱。諸人對御鷹致

禮候。然處當時鷹有禮之由存誤歟。於私

鷹令下馬脫笠候事。奇恠千萬之儀候。一笑

一笑。

裝束ニ種々之色目無際限候。

取繫。是又一向人之不知儀共候。

神前繫。凶事繫。以下秘事共候。

### 一同鷹鳥事。

鳥トハ雉ノ事候。禁野。片野名物候。就此

儀故實繁多候。此鳥必付鳥柴候。切候刀目。口傳有之。

候。或鳥柴之代。其木不<sub>二</sub>相定<sub>一</sub>候。雖<sub>レ</sub>然下心之故實多候。鳥柴之鳥。小鳥之竿。田物等貴人へ被<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>御目<sub>一</sub>候作法ハ。難<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>文候。或ハ山之鳥懸<sub>二</sub>田緒<sub>一</sub>。田物山緒之時。一段賞翫之子細不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>記候。

# 一扇ニ居物事。

此儀一向無<sub>二</sub>才覺<sub>一</sub>候。堅固内々以<sub>二</sub>時之了簡<sub>一</sub>可<sub>二</sub>相計<sub>一</sub>事尤候。定樣不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候。  
一水引結物事。

於<sub>二</sub>禁中<sub>一</sub>者。多分被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>紙捻<sub>一</sub>候。但懷紙短冊等ハ白紅之水引以<sub>二</sub>一筋<sub>一</sub>結<sub>レ</sub>之候。女房髪之水引月前候。當時段々水引一向不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之候。半白ク半紅ナル水引白紅ト號シテ外樣ニ用之。

結樣事。中ニ可<sub>レ</sub>見用ノアル物ハ片鑑也。細々開<sub>レ</sub>見マジキ物ハ毛呂和那也。

又薄樣ノ水引ハ。其紙ヲ捻候テ。面ト懷胞ト中倍トノ五色ヲ捻テ。五筋宛<sub>二</sub>組<sub>一</sub>之。十文字ニ

カラゲテ。裏ニテ留<sub>二</sub>之片鑑<sub>一</sub>ナリ。  
單皮事。

此儀公家中無之物候。侍以下着之候。然間無案内候條。是非難<sub>レ</sub>申候。殿中御免之儀令<sub>二</sub>出來<sub>一</sub>候條。有<sub>二</sub>法度<sub>一</sub>物之樣候。織物頭巾。火打袋等御免之事。上代無<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>事候。況皮單皮御免之段不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>巨細<sub>一</sub>候歟。於<sub>二</sub>禁中<sub>一</sub>者。出<sub>二</sub>赤足<sub>一</sub>事狼藉之義候條。必束帶之時。老若着<sub>二</sub>下沓<sub>一</sub>候。指貫之時ハ。足不<sub>レ</sub>見候條。不<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>韃候。但五六十以後宿德之後ハ。衣冠直衣ニモ着<sub>二</sub>下沓<sub>一</sub>候。雖<sub>レ</sub>然御免申請義無之候。以<sub>レ</sub>此准據存候時御免候沙汰不審候。乍<sub>レ</sub>去家僕等隨意着用之段者。任<sub>二</sub>公界之儀<sub>一</sub>事候。

此一冊從<sub>二</sub>三光院内府<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>遣具房朝臣<sub>一</sub>北畠者也。以<sub>二</sub>中院入道也<sub>一</sub>足軒自筆本<sub>一</sub>騰寫之。

右三内口決以屋代弘賢藏本書寫以一本及伊勢貞方本校  
台畢

群書類從卷第四百七十三

雜部廿八

大饗略次第

節會訖。於弓場奏事由一拜舞。依召參三御前。次立弓場奏饗祿事。次退出歸第。入三閣門。着親王座。次諸卿已下列中門外。東上南面。尊者來臨。次主人下南階。次尊者以下列南庭。東上南面。次客主再拜。次揖讓。三度。立明官人居地。次客主昇階。客東主西。尊者着東一間橫座。西面。主人着親王座。次諸卿昇階着座。東上南面。次弁少納言昇對代前。外記史昇中門妻着。次召使等取人々咨。次酒部所人着座。次立尊者机。二脚。四位一人取簀薦二枚。五位一人昇机。次居肴物。次一獻。主人勸盃。瓶子殿上五位。上官座勸盃。地下五位。此間主人退歸。家司

敷三圓座於親王座上。主人着圓座。次立主人机。一腳。無三次簀薦。居肴物。次二獻。殿上四位勸盃。上官座勸盃。此間檢非違使着座。則起座。次三獻。勸盃同前。至此三獻。酒部所獻盃。料理所獻盃。次居飯。次居汁。次申箸。次四獻。次申箸。次召錄事。弁少納言殿上四五位各一人。上官座地下五位二人。錄事着座。則起座。次撤圓座。次五獻。勸盃納言。次居菓子。次六獻。居佳略之。次主人勸盃於非參議。大弁此間昇立祿案於庭中。次給史生官掌祿。次敷圓座於簀子。次尊者已下弁少納言外記史退候。次居肴物。尊主三本。納言已下二本。此間敷召人座。次召人着座。次穩座勸盃。中納言。召人勸盃。

次置樂器。次堪事侍臣着

不敷圓座

次取

笛。次御遊。

呂律。

此間給

外記

史祿。

次弁少納

言祿。

各肩之列庭中一揖退。

次公卿祿。

爲先宰相。自上禰。

此間給

召人祿。

次召人退。

次尊者祿。

白上禰。中出。

次引出物。

馬。

次尊者降階。

主人。

次

次公卿退下。

## 大饗御裝束間事

一鋪設裝束事。

付裝束始。

治安元七廿四小記云。

實表。

今日裝束了。亦令

立屏幔等。即令撤。明日可立之。亦立

酒部所平張。亦撤之。明日可張圓座平張等

借申入道殿。

道長。

康平三十七記云。

東三條。

寢殿南廂四間。西庇

二間。并同簀子敷。西頭廂。西南西北兩渡

殿。同北面渡殿。西中門北廊。鋪長筵垂

寢殿母屋南西兩面簾。卷廂簾。母屋懸壁

代。夏。鴨柯簾中懸几帳帷。

康平八五廿八記云。參殿申饗間事。屏幔中

門內幔東西廊前。屏幔如常儀。中門外幔

如何。隨身所前立之。侍所前立部前不立

之。

六月三日大饗也。

土御門高倉亭。

寢殿南廂西五間。

西庇二間。并上下鴨柯間垂簾。內懸四尺



几帳帷。或說。母屋懸夏壁代云々。雖號壁代。實是帳帷云々。同簾前立二四

尺屏風八帖。卷二廂南面并西面簾。西向同在。此中。

同底并南及西簾子敷敷二長筵。西南渡殿并

南北簾子敷同鋪二長筵。卷二南北簾。西北渡

殿母屋并北庇南簾子敷二長筵。北面簾子不

鋪。垂二南面簾。母屋北面。不懸簾。卷二北面庇簾。北庇

東橫切。同北面東第一間座。上下遣戶上懸

簾。不卷上。爲二殿上人座。西對東母屋并

廂渡殿內南第一二三合三間垂簾。母屋東

面二間南橫切并北鴨柯懸簾。不卷。其上

引二軟障五帖。廂東面三間。南面一間。不懸

簾。東面簾子敷并南廣庇。中門北廊敷二長

筵。對南簾子。中門北廊。東底南長押下不鋪。又寢殿坤角西面戶。西

南渡殿。南北戶西對巽角。東面戶合六間。皆

撤扉。寢殿乾角西面戶。北渡渡南戶不撤

之。

永保二年十二月十八日堀川左府記云。向

三條。堂上裝束并庭中立三幔等了。去十六日始堂上裝束事。酒部所裝束已下召三仰所司了。

同三年正月廿二日六條右府記云。今日始大

饗日。堂上裝束。三條殿。予始被三此召。

廿六日。任右大臣大饗也。於三條殿設之。

其儀。寢殿母屋南面東五間。東面三間。度々。二間。而今度依。座狹。用三間。并南北西鴨枝。

東底北鴨枝障子。懸簾。內懸壁代。上下。鴨枝內懸几帳帷。其上立三四尺屏

風八帖。卷二廂南面并東面等簾。同底等并南

及東簾子敷。東南殿敷二長筵。東北渡殿母

屋并北庇三間南簾子鋪二同筵。北面簾子。敷不敷。垂。南面簾。不懸簾。西北面庇簾。東西遣戶上橫切

懸簾。垂之。東對代母屋西第一二三間。依。西庇。用。西簾子敷。南廣庇中門北廊。侍廊中母屋。

障子以西三間。同鋪二筵。對南簾子。中門北廊。東西簾子不敷之。

對代母屋并北橫切鴨枝懸簾。不卷。其上曳。

軟障五帖。南并西面不懸簾。自中門角北廊前至南築垣立屏幔。當中門中央開幔門。眩折南西廊東面并南透垣前立屏幔五帖。不數南中門南腋。當對代母屋立酒部所幄。車宿隨身所前立同幔。侍所立部。不引幔。康和二年七月十七日。東三條大饗也。自去十一日被始御裝束。其儀。寢殿南底四個間。坤角間西廂二個間。同南面簀子。西孫庇西南透渡殿。同中殿北面渡殿。母屋并中門北廊。及東對南孫庇。敷滿長筵。寢殿母屋南西北三面。母屋自東第一間戶上不懸之。庇四面懸廻簾。庇南面西五個間并西面三個間卷之。自餘南垂。母屋南面四個間。西南二個間。簾中懸渡壁代。南底自南第三間鴨柯下西底自南第三間鴨柯下懸御簾。其內懸几帳帷。以上曳件南面庇簾前屈曲八個間。立豆四尺倭漢屏風。新調。西軒廊東砌引塞二色細幔。

當軒廊馬途間用幔門。西御隨身所北砌。寢殿軒廊南砌引渡同幔。又東中門。同南廊西砌去許丈。自東對南砌。池岸南邊引塞同幔。又東御車宿并御隨身所北砌引塞纈纈幔。上客料理所南砌又引塞同幔。宮儀。天承元十二中右記。屏風御遊物具。關白殿供行。其外物具酒部所幄等。從大殿供行。敷主人座事。公季。

治安元七廿五小記云。大府饗。一獻主人起座。勸予巡行。信乃守惟任。五位。執圓座敷之。主人着之。宮儀。予勸盃。尊者此間敷圓座。

北山抄云。主人先着南庇。勸盃。後着納言座上。

尊者座事。付客首例。

治安元七廿五小記云。予參上。閑院亭。太政大臣饗。見

座席似敷二連座。仍示二氣色。大府云。從

西方可着。仍自二簀子敷二東行。自二座末

着座。尊者并諸卿皆南面連座。未二見聞一事

也。貞信公拜二太政大臣一之時。尊者在二橫

座。故大入道并當時入道道長府兩所。以下子內

府所占列二尊者。依レ無二便宜一。有二權儀一設二

連座。當時大府無所據。抑座席儀。寢殿南庇

敷二尊者二人并公卿座一行。西上尊者二人

各二枚茵。一枚與二大納言座南面頗絕席。小野

寢殿南庇爲二上達部座。東第一間敷二尊者

座。上敷二枚。東京錦緣茵。橫座。西面。

康平八六三記云。尊者大臣入來之時。橫切

立レ机。敷レ地敷レ茵云々。

永保三正大右記云。寢殿南庇西第二間。橫

切迫二屏風。敷二青唐錦地鋪二枚。半許引其

上敷二東京錦茵一枚。東三爲二尊者座一。

康和二七十七條儀爲隆記云。南階東間屏風

前。西面儲二尊者內大臣座一。實敷二青地錦緣地鋪二

枚。其四敷二高麗緣上

地敷尺餘引重敷之。

北山抄云。尊者橫座。

諸卿座事。付親王。一世源氏座。

治安元七廿五小記云。大府饗。公卿座者。

敷二圓座。同日小野寢殿南庇爲二上達部座。

東第一間敷二尊者座。其座後并母屋南西庇

北隔等簾前皆立二四尺屏風。大納言已下座

南面。從二尊者座之次間中央一敷之。地敷圓

座。大中納言參議圓座。端色皆異。納言參議

南面。尊者納言參議座下。不レ敷二菅圓座。

依二苦熱一也。正月大饗敷之也。

永承二八一條高一土記云。寢殿南庇西五

間。西廂二間。上廂簾敷二長筵。傍二母屋簾

施二四尺屏風。放二出東二三間。敷二地敷圓

座。下不敷敷二但第二間一行。南面三四不レ鋪二親

王座。

康平三十七記云。寢殿東三條南廂鴨柯間。其

以西四間。西廂妻二間。同鴨柯間并八間。

副簾立三四尺屏風。南廂鋪地敷圓座。爲二

公卿座。納言四人座。東上南面。用唐錦緣。卒相座。用高麗錦緣圓座。對座儲之。當三納

言座前。敷垣下親王座。龍鬢建。青地錦緣。南簀子當

西第二柱。敷一世源氏座。紫端一枚。

康平八六三記云。土御門高倉亭。寢殿南庇東第四五

六間。鋪地敷五枚。其上先鋪三紫錦緣圓座

二枚。大納言座。黃地緣圓座三枚。中納言座。高麗端圓

座各二枚。南北對宰相座。當南階西柱庇。敷三錦端

龍鬢疊一枚。爲三親王座。南簀子敷西第二

間鋪三紫端疊一枚。爲三一世源氏座。

永保三正廿六六條右府記云。三條殿儀。寢殿南庇

西第四五六間鋪地敷五枚。其上鋪三唐錦緣

圓座七枚。大中納言前例。大納言座用三紫色錦緣圓座。中納言用三黃地錦圓座。而今度用一色。康平三。殿下任內。

大臣時之例也。高麗端圓座各二枚。參議座。南北對之。

當南階東柱庇。鋪三龍鬢疊一枚。爲三親王

座。南簀子東第一間鋪三紫端一枚。爲三一世

源氏座。故殿御記。敷第二間之由。所被注也。左大臣大饗時。敷第一間。又殿下代如此。內大臣

東三條裝束。又如此。

康和二七十七爲隆記云。東三條。尊者座。以三西

三個間。設三親王公卿座。奧座東上南面。敷三

高麗緣地鋪四枚。其上鋪三紫錦緣圓座二枚。

爲三三納言座。相次鋪三青錦緣圓座三枚。爲三

中納言座。其次鋪三高麗緣圓座三枚。爲三參

議座。當南階間。迫三西柱。敷三青錦緣龍鬢

疊一枚。爲三垣下親王座。或鋪三階東。自三西第一間。

鋪三高麗地鋪二枚。其上鋪三同圓座三枚。又

爲三參議座。東上北面對座也。往古公卿座一

行設之。近代數多末座設三對座也。南簀子

敷當三西第一間。迫三欄敷三一世源氏座。紫端一枚。先三當三第二柱敷之。今日當三西第一柱敷之。依三大殿仰也。

北山抄云。垣下親王座對三公卿。

并少納言座事。



治安元七廿五小記云。大府亭寢殿東庇。設

弁少納言座。南上西面。小野宮儀。弁小納言座在

西廂南上東面。兩面端錦疊。黑柿机。

永承二八一土記云。寢殿。三條北高倉東亭。西廂東面

南上。設弁少納言座。

康平三七十七記云。寢殿。東三條北高倉東亭。西庇。敷弁少

納言座。兩面端三枚。從戶間中央鋪之。

康平八六三土記云。寢殿。上御門高倉亭。西庇一行。

鋪黃端疊三枚。爲弁少納言座。自戶西中

央始鋪之。

永保三正六條右府記云。三條殿儀。寢殿南座一

行。敷三兩面端三枚。爲弁少納言座。非參議大敷龍鬘座一枚。無梅。但自東面南戶梓立敷之。

康和二七十七爲隆記云。東三條。寢殿西廂一个

間。設弁少納言座。南上東面。從西向戶北梓立一程。敷三兩面端帖三枚。非參議大弁着座之時。自戶中央敷之。

永久三四廿八國イ遠記云。東三條。弁少納言昇

鳥羽

上官座事。

自透渡殿西階。着寢殿西庇座。東面南上。

治安元七廿五小記云。大府饗。閑院。東對西

庇設外記史座。小野宮儀。外記座。西對南庇東上

對座。南北相對。鋪綠綠疊。座後引軟障。又到

東面母屋簾。同引軟障。西對南東等庇不

懸簾。以渡殿爲限。

永承二八一土記云。西對東廂。三條北高倉東亭。南上

對座。設上官座。座後施軟障。不敷親王

座。預居饗。

康平三七十七記云。西北渡殿。東三條。母屋三間

設外記史座。綠端疊。東上對座。外記着北。預垂。母屋北簾非第四間簾。引軟障。

康平八六三記云。土御門高倉亭。西對東廂。青端六

枚二行鋪。自東第三柱北進。三四許尺敷之。爲上官座。東史。西外記。

座上少東倚。座下少西寄。斜敷之。

永保三正大右記云。東對代母屋。無三四庇。鋪青

端疊六枚。二行敷之。自南第三柱北重三四許尺敷之。爲上官座。西史。

東外記。北上對座。座上少西倚。座下少東倚。斜敷之。

康和二七十七爲隆記云。東三條西渡殿從西第

一二三間。設外記史座。當第三間東柱。渡三

北柱南面。同懸三御簾。其上引渡木各見綾軟障四帖。其內鋪三蒲弘筵。東上對座。敷三青端疊六枚。

永久三四川邊記云。東三條上官昇自北渡殿

西階着座。東上南面對座。

所々座事。付酒部所祿所。

治安元七廿五小記云。小野宮儀西對南東等底不

懸簾。但東底北第一二間。以渡殿爲限。從其南謂第一二也。

懸簾。依有便宜。諸大夫座。西中門北廊。

又西對南唐庇敷座立机。近代例云々。太

無便。殿上人饗儲渡殿。史生儲案。政所敷使部

儲西隣。仰史公親令立幄敷座。中門內

南腋立酒部平張。高火爐。中取二脚。床子

等。修理職造立。檢非違使饗儲廐廊。尊者

前駟十人。垣下十人饗儲侍所。尊者雜色廿

人饗垣下并廿人設雜色所。謂垣下一則是

家々雜色也。又尊者車副四人。牛飼童饗。隨

身所饗。雖未下大將還宣旨。隨身等任之。

又立明官人等着隨身所云々。又檢非違使

等申云。立床子可候庭中者。余答云。

正月大饗候庭中。初任大饗不慥覺。又今

已有饗饌何不候哉。則立床子候庭中

穩座。祿布積中取二脚於庭中召賜之。

不當庭中當紅梅南。

永承二八一土記云。三條北高倉東亭西中門立斑幔。

當中門內南腋立酒部幄。其東立檢非違

使床子。西中門外南烈立幔。史生祿積中

取二脚立西對南庭。終頭不召史生於

便宜御座。

康平三七十七記云。東三條召人座。六衛府取

疊二枚敷南砌下。西北渡殿母屋爲上官

座。其座東第一間。母屋并廂假立障子。懸

簾爲急所。不置大臺寢殿北西渡殿母屋爲細

殿座。非參議三位并殿上人着之。數一紫端立机。饗所衆役之。西庇爲三所衆

座。西中門北廊爲三諸大夫座。有饗。政所

爲三檢非違使座。有饗。東御車宿馬道東爲三

史生座。其座頗狹。仍隔母屋庇。兩行數立机居饗。東倉町立机爲三

使部座。家居。立明官人候御隨身所。便行。寢

殿西孫庇北戸内爲三被物所。侍所廊東渡殿

爲三上客料理所。其前立一斑幔。西角廊東頭池畔立三

酒部所。幔。二丈。同廊東砌并東中門西砌。西

中門西屋前乾廊前。各立幔。便開。幔門。

康平八六三記云。土御門高倉。寢殿西北渡殿鋪三紫

端疊八枚。南北二行。北廂鋪三同疊二枚。爲三所

衆座。東西中門南北廊内立三屏幔。各當中

開三幔門。西中門内南腋立三酒部。西中門

外車宿。隨身所前立三同幔。侍所前。立部不曳幔。堂上

庭中裝束了。檢非違使座儲三此殿。政所史生

官掌召使座。西家政所史生座。勸盃上官五

位使部座。已上皆設饗。

永保三正大右記云。三條殿。東北渡殿母屋敷三紫

端疊八枚。南北二行。西上對之。北廂敷三同帖二枚。爲三所

衆座。中門北廊迫三東壁。敷三紫端帖二枚。

爲三諸大夫座。侍廊中障子一面三間敷三同帖

六枚。爲三尊者陪從座。中門南腋對代母屋

立三酒部所。諸大夫座立三机六脚。件饗多居三侍所大盤。

尊者陪從者。立三机十二前。以上皆居三飯汁有物

十前。檢非違使座十三前。尊者牛御車副等饗。但記史生座六皆下便所居之。但史生帷仰三所司設之。

康和二七十七爲隆記云。東三條。西渡殿西一二

三間設三上官座。第四間爲三尊者大臣急所。

件間南面并東西御簾垂之。母屋北面簾卷

之。副三北面御簾立三廻四尺屏風二帖。其内

南北行。鋪三高禮綠疊一枚。屏下居三大盃一口。件渡殿庇北面四間

西戸并第三間東簾臺下。懸三簾垂之。其内暫立三掌

燈具圓。寢殿北渡殿。母屋四個間。爲三殿上人

座等。件座以下母屋并庇。及東西部内懸三簾垂之。母屋西面座。一并同庇懸三簾。之。南上對座敷三紫端帖八枚。有非

參三木位者。座三鋪三高麗疊一枚。寬弘之例也。不鋪三件座。西庇此中隔三遺戸。

以<sub>二</sub>北二个間<sub>一</sub>。爲<sub>二</sub>藏人所雜色座<sub>一</sub>。

其內鋪<sub>二</sub>弘繩<sub>一</sub>。追<sub>二</sub>西

鋪<sub>二</sub>紫端帖<sub>一</sub>。寢殿西孫廂北戶簾內二个間。爲<sub>二</sub>被

物所<sub>一</sub>。打<sub>二</sub>眩金<sub>一</sub>。引<sub>二</sub>廻綑<sub>一</sub>。西中門北廊西戶以北。設<sub>二</sub>

諸大夫座<sub>一</sub>。傍<sub>二</sub>西壁<sub>一</sub>。鋪<sub>二</sub>紫端帖<sub>一</sub>三枚。

北設<sub>二</sub>尊者前駢座<sub>一</sub>。屋<sub>二</sub>三个間東柱西面<sub>一</sub>。其北間

對座鋪<sub>二</sub>紫端六枚<sub>一</sub>。初<sub>二</sub>尊者前駢<sub>一</sub>。被<sub>二</sub>諸之<sub>一</sub>。西渡殿爲<sub>二</sub>上

客料理所<sub>一</sub>。日來於<sub>二</sub>東御身所<sub>一</sub>。調侍。今朝渡<sub>二</sub>之南北

紫端帖<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>北政所屋爲<sub>一</sub>檢非違使座<sub>一</sub>。半部戶等

其所人座<sub>一</sub>。布<sub>二</sub>其內對座鋪<sub>一</sub>。東御隨身所爲<sub>二</sub>史生座<sub>一</sub>。撤<sub>二</sub>中隔

紫端帖六枚<sub>一</sub>。母屋一行。掃部寮鋪<sub>二</sub>布大緣長帖<sub>一</sub>。其西御車宿

儲<sub>二</sub>尊者舍人牛飼座<sub>一</sub>。南庇儲<sub>二</sub>張舟<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>繫牛所<sub>一</sub>。西

御隨身所爲<sub>二</sub>立明官人座<sub>一</sub>。東御倉町立<sub>二</sub>七丈

幄<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>使部座<sub>一</sub>。又立<sub>二</sub>五丈幄<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>尊者雜色

座<sub>一</sub>。當<sub>二</sub>寢殿坤角軒廊東頭<sub>一</sub>。追<sub>二</sub>池岸<sub>一</sub>立<sub>二</sub>幄

爲<sub>二</sub>酒部所<sub>一</sub>。在<sub>二</sub>黑漆骨<sub>一</sub>。纈<sub>二</sub>蘇芳網<sub>一</sub>。東西行立之。其內東

妻南北行立<sub>二</sub>二蓋棚一脚<sub>一</sub>。上并<sub>二</sub>立瓶子六

口<sub>一</sub>。茶坑四口。堂上料。青瓷二口。上官料。下

并<sub>二</sub>樣器<sub>一</sub>并<sub>二</sub>折敷等<sub>一</sub>。先年上官料。置<sub>二</sub>絹面

折敷<sub>一</sub>。弁以下料。置<sub>二</sub>塗折敷<sub>一</sub>。今度六置<sub>二</sub>塗折

敷<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>絹面折敷<sub>一</sub>。自<sub>二</sub>上客料理所<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>供之

由。或人所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申也。可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>。棚面東西

行立<sub>二</sub>高火爐一脚<sub>一</sub>。其上立<sub>二</sub>金輪二脚<sub>一</sub>。置<sub>二</sub>鎮

子二口<sub>一</sub>。火爐西頭立<sub>二</sub>黑漆酒樽一口<sub>一</sub>。在<sub>二</sub>臺

并網插杓一柄<sub>一</sub>。火爐南頭立<sub>二</sub>長床子二脚<sub>一</sub>。

有<sub>二</sub>雜役人座<sub>一</sub>。伴案棚大臺床子。木工寮造

進。

天承元十二廿二中右記云。宗忠於<sub>二</sub>三條西洞院

顯賴亭<sub>一</sub>儲<sub>二</sub>大饗<sub>一</sub>。寢殿南庇四間爲<sub>二</sub>公卿座<sub>一</sub>。

東庇三間爲<sub>二</sub>弁少納言座<sub>一</sub>。東對代廊南庇爲<sub>二</sub>

上官座<sub>一</sub>。其母屋有<sub>二</sub>殿上人座<sub>一</sub>。東中門廊諸大

夫座。東車宿隨身所爲<sub>二</sub>上客料理所<sub>一</sub>。其中門

內南腋立<sub>二</sub>酒部所幄<sub>一</sub>。南庭東西廊前引<sub>二</sub>幔<sub>一</sub>。

各有南庇閑所立<sub>二</sub>幄爲<sub>一</sub>官掌召使使部等座<sub>一</sub>。北山抄云。史生饗。於<sub>二</sub>便宜所<sub>一</sub>行之。祿時



召座前。天慶七年史生饗儲三政一所。使部饗儲三政云々。

永久三四川邊記云。三條座中立長床子。爲

檢非違使等出居座。史生官掌召使等座。御隨身所。使部東御倉町云々。

穩座事。

治安元七廿五小記云。公等大府饗。仰錄事之

後。又一獻了。敷圓座於簀子。實去主人及諸卿

下居。宮儀五獻了。敷穩座圓座。發絲竹

聲。

康平三十七記云。召人座。六衛府取疊二

枚。敷南砌下。

永久三四川邊記云。公卿移着穩座。并少納

言移着透渡殿。關白前大相國自簾中出

着簀子座。先是左近少將顯國朝取口萬敷簀子。居看物。

打出事。

康和二七十七爲隆記云。東三條寢殿南庇自東

第一二三并西庇北戶簾內。每間立几帳。女

房出袖。紅綾單重。藍織物。表着二朽葉織物。唐衣也。

一饗。

寶薦事。

治安元七五小記云。仰可編寶薦車。

饗事。付尊者牛車事。

治安元七十四小記云。初任饗。古昔例。隨

寒熱有湯漬水飯等設。承平六年變彼例。

被儲饗云々。

廿五日。大饗也。大府饗用漬食。正月大饗。

或稱御齋會間有精進例。諸卿頗驚。小野宮儀。

殿上人饗儲渡殿。史生饗儲政所。許惣官外記

史生多闕。官掌召使四人。等合卅人行之。使

部饗百前儲西隣。檢非違使饗廿前。尊者前

駟十人。垣下十人饗。尊者車副四人。牛童

饗。異例。饗机二脚。號強机榻足云々。飯

并菜太猛云々。隨身所饗廿前。任職雖未被

下大將還宣旨。隨身等住之。又立則官人

等着ニ隨身所ニ云々。

康和二七十七爲隆記云。殿上人座十八前。

左兵衛督被<sup>（實）</sup>ニ弁備。自餘諸國勤之。史生外

記十前。官廿七前。官掌料三前。召使料十

前。<sup>（上野）</sup>使部座。外記方卅三前。信乃。官方六

十六前。<sup>（武藏）</sup>因幡。諸大夫座八前。相摸。尊者前駟。

北山抄云。初任饗設<sup>レ</sup>庇。着座後立<sup>レ</sup>机。

永久三四川邊記云。<sup>（東三）</sup>公卿座定後。諸大夫

一人插<sup>ニ</sup>簀薦。二人昇<sup>レ</sup>机立<sup>ニ</sup>公卿座前。弁

少納言外記史生座前。諸大夫昇<sup>レ</sup>机同立之。

<sup>弁以下座机。先例未<sup>ニ</sup>着座<sup>一</sup>以前立之。今度不<sup>レ</sup>然。可<sup>レ</sup>尋<sup>ニ</sup>臧否<sup>一</sup>。</sup>

机事。付面事。

治安元七五小記云。外記史前。支佐木机十

四前可<sup>レ</sup>造事。仰<sup>ニ</sup>主明宿禰<sup>一</sup>。即召<sup>ニ</sup>進木道

工<sup>一</sup>云々。木佐木不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>求得。<sup>（關白殿以<sup>ニ</sup>檜</sup>

木<sup>一</sup>令<sup>ニ</sup>綵色<sup>一</sup>者。

同廿三日。<sup>（經通）</sup>部云。參議已上机面白絹。弁少

納言机面赤絹。見<sup>ニ</sup>正曆二年記<sup>一</sup>。輔公云。弁

少納言已上尊者白絹。外記史赤絹者。外記

史机面無<sup>ニ</sup>所見<sup>一</sup>。可<sup>ニ</sup>紙面<sup>一</sup>歟。按察云。輔公

說不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>用。外記史饗。古昔用<sup>ニ</sup>土器<sup>一</sup>。更不

可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>絹面<sup>一</sup>。爰知<sup>ニ</sup>紙面<sup>一</sup>者。

廿五日。大饗也。大府亭。尊者赤木机各二

脚。簀薦二枚。自餘簀薦。机面白絹。主人机

一脚。不<sup>レ</sup>敷<sup>ニ</sup>簀薦<sup>一</sup>。弁少納言黑柿机。不<sup>レ</sup>敷<sup>ニ</sup>

簀薦。古昔例尊者只用<sup>ニ</sup>赤木机<sup>一</sup>。以次上達部

黑柿。弁少納言支佐木也。<sup>（小野）</sup>尊者赤木机

二脚。<sup>（机面白絹）</sup>簀薦二枚。納言以下前赤木机

一脚。<sup>（机面白絹）</sup>簀薦。弁少納言黑柿机。<sup>（机面白絹）</sup>不

敷<sup>ニ</sup>簀薦<sup>一</sup>。机面等絹色依<sup>ニ</sup>正曆天慶例<sup>一</sup>。弁少

納言已上尊者。机面皆白絹。外記史机面黃

絹云々。倩案<sup>ニ</sup>正曆例<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>慥也。外記史朴木

榻足机。机面押紙。<sup>（天慶例。机面白絹。可<sup>レ</sup>依<sup>ニ</sup>此例<sup>一</sup>歟。）</sup>令<sup>ニ</sup>着座

了。予勸<sup>ニ</sup>孟尊者<sup>一</sup>。此間敷<sup>ニ</sup>圓座<sup>一</sup>。立<sup>ニ</sup>金前

一脚。不數二簀薦。

康平三十七記云。公卿赤木机。弁少納言

黑柿机。外記史朴木机榻足。面用黃絹。雖

注榻足。稱先例。作倚子足。主人前机

無簀薦。

康平八六三記云。尊者赤木机二脚。上達部

机赤木。白絹面。弁少納言机黑柿。同面。上

官机厚朴榻足。黃絹面。

永保三正大右記云。大中納言參議等座。敷

簀薦。立赤木机十一前。參議座二行立之。机皆有白絹面。弁少

納言座。立黑柿机八前。非參議大弁座。三寸許絕席。此座不敷簀薦。

外記史座。立榻足朴木机十三前。有黃絹面。記座立

六前。史座立七前。諸大夫座。立机六脚。尊者陪座。

立机十二前。

康和二七十七爲隆記云。上達部新。赤木机。

弁座。黑柿。外記史座。朴机。飯兼居之。

永久三四川邊記云。公卿座。赤木机。白絹

面。弁少納言。黑柿机。同絹面。外記史。厚朴机。黃絹面。

一諸司諸國課役。付人々。

治安小右記。火爐中取二脚床子等。修理職

造進。又門腋白土。同職塗之。

永保二年十二月十六日堀左記云。酒部所雜

具已下仰諸司。大饗官外記使部等。帷仰所

司。可令儲山。仰大夫史祐俊。依爲裴

束司也。

康和二七十七爲隆記云。棚大臺床子等。木

工寮造進。殿上人饗。左兵衛督弁備之。自除

諸國勤之。史生官掌召使等饗。上野。使部。四武藏。轡。

乃。諸大夫座。相摸。尊者前駢雜色。上總。車副。

信下總。牛飼。遠江。檢非違使。河內。

天承元十二中右記云。自院被尋仰諸國

所課。給國々皆從院被催。

立机居饗前後事。

治安元七十四小記云。今朝大府被<sub>レ</sub>示云。大饗日。諸卿着座後立<sub>レ</sub>机。而先年大相府任日。先立<sub>レ</sub>机。汝饗如何。報云。一條大相府上達部着座之後立<sub>レ</sub>机。然而一日之内所々饗。依<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>懈怠<sub>一</sub>可<sub>二</sub>先立<sub>一</sub>歟。此度諸卿向<sub>二</sub>三个所<sub>一</sub>。先被<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>机有何事<sub>二</sub>乎<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>下官<sub>一</sub>者。諸卿未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>來之前。可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>机。

廿五日。大饗也。上達部以下饗皆兼居。依<sub>二</sub>三个所<sub>一</sub>也。但不<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>飯。前例。着座後立<sub>レ</sub>机居饗了。一獻之後。主人着座。次立<sub>レ</sub>机。二獻居<sub>レ</sub>飯。小野宮儀尊者已下兼立<sub>レ</sub>机弁備。但不<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>飯。有<sub>レ</sub>議皆所<sub>レ</sub>立也。是正居例也。

永承二八一土記云。豫居饗。每人机一脚。用<sub>二</sub>樣器<sub>一</sub>。每<sub>レ</sub>机敷<sub>レ</sub>簀。

康平三年七月十七日記云。公卿已下座定後。酒部所人參入立<sub>レ</sub>机。敷<sub>二</sub>簀薦<sub>一</sub>。弁已下不<sub>レ</sub>敷之。先各敷<sub>レ</sub>簀立<sub>レ</sub>机了。諸大夫二人昇之。

同八六三記云。裝束了。弁少納言外記史座。立<sub>レ</sub>机居<sub>二</sub>肴物<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>飯。不<sub>レ</sub>敷<sub>レ</sub>簀。件座机。先例或者座了居之。而大閤太政大臣饗日。先立<sub>レ</sub>机居<sub>二</sub>物加<sub>一</sub>之。且有<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>云々。諸卿着座了。立<sub>二</sub>上達部机各一脚<sub>一</sub>。每<sub>レ</sub>机敷<sub>レ</sub>簀薦。机二人昇之。持<sub>レ</sub>簀者一人。予前不<sub>レ</sub>敷<sub>二</sub>簀薦<sub>一</sub>。自<sub>二</sub>座上<sub>一</sub>立<sub>レ</sub>机。豫居<sub>二</sub>肴物<sub>一</sub>。尊者大臣入來之時。横切立<sub>二</sub>赤木机二脚<sub>一</sub>。敷<sub>レ</sub>地敷<sub>レ</sub>茵云々。

永保三正大右記云。先例。公卿着座之後立<sub>レ</sub>机。三獻以後居<sub>レ</sub>飯。或弁少納言座。立<sub>レ</sub>机居<sub>二</sub>肴物<sub>一</sub>。三獻居<sub>レ</sub>飯汁。然而省略也。

康和二七十七爲隆記云。已刻。弁<sub>二</sub>備公卿已下饗<sub>一</sub>。預<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>康平例<sub>一</sub>。公卿以下參着之後。昇<sub>レ</sub>机可<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>饗也。然而兩所大饗之時。兼以居之。治安元年。永保二年例也。尊者料。光臨之後猶可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>居者飯兼居。以<sub>二</sub>上客料理所<sub>一</sub>勤之。十前。同。雜色廿前上總。車副四前。



下總。牛飼一前。遠江。檢非違使十前。河內。立明饗三十前。居臺盤上。

北山抄云。不<sub>レ</sub>差<sub>二</sub>餛飩<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>作幄<sub>一</sub>。太政大臣猶用<sub>二</sub>樣器<sub>一</sub>。故實料理隨<sub>二</sub>時節寒熱<sub>一</sub>。設<sub>二</sub>湯漬水飯等<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>必仰<sub>二</sub>錄事<sub>一</sub>云々。而承平六年差<sub>レ</sub>飯仰<sub>二</sub>祿事<sub>一</sub>。其後如之。

一用途。

治安元小記云。牛御料桶<sub>二</sub>。御料米一石。牛張船。飼草張船料。手作布一端。

長元六年正月十五日。宇治殿大饗。顯賴卿記。人々申云。西中門外南北。引<sub>二</sub>斑幔<sub>一</sub>。否之由。慥不<sub>レ</sub>覺云々。尋<sub>二</sub>見先例<sub>一</sub>。中門外引<sub>レ</sub>幔之由。只內府前年於<sub>二</sub>小二條殿<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>大饗<sub>一</sub>之時。東中門外南廊<sub>車宿隨身所等也</sub>。前。東西行引<sub>レ</sub>幔。北不<sub>レ</sub>引。彼時故殿御座間也。定被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>歟。又入道大納言在俗之間也。定有<sub>レ</sub>所謂歟。依<sub>レ</sub>之我前年行<sub>二</sub>大饗<sub>一</sub>之時。引<sub>二</sub>

中門外幔。其時故殿被<sub>レ</sub>仰云。中門外引<sub>レ</sub>幔。更不<sub>レ</sub>見不<sub>レ</sub>聞者。時人云。雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>是可<sub>レ</sub>引之幔也。不<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>幔之時。雖<sub>レ</sub>制<sub>二</sub>止列立<sub>一</sub>。門內之程自然狼藉也云々。雖<sub>レ</sub>然先閣不下<sub>二</sub>令<sub>二</sub>甘心<sub>一</sub>御上之事也。

# 大饗雜事

殿上人役。

一獻瓶子。五位。

二獻勸盃。四位。

三獻瓶子。五位。

四獻瓶子。五位。

祿事二人。四位。

五獻瓶子。五位。

祿取料。四位。

地下四位役。

一獻盃持參料。

主人陪膳料。

勸盃非參木大辨之時瓶子料。

非參議大辨以下祿取料。

諸大夫。十餘人。

次五位。式部。民部。四五人許。

諸司官人。衛府。諸司。數十人許。

一辨少納言座兩面端事。

小文高麗端。二重緣也。

一諸司官人者衣冠也。召人座敷。衛府者東帶也。

一定文硯者瓦硯也。

一酒部所火爐ニハ夏毛置<sub>レ</sub>火候。

一定文執筆之路仕事。

一一帙ニ有。禮記文也。

一尊者并主人居物役人路事。自<sub>二</sub>簀子<sub>一</sub>參上。入<sub>二</sub>

當間<sub>一</sub>辨少納言并上官役人。各經<sub>二</sub>座末<sub>一</sub>。

一酒部所。同茶瓶子四口。白瓷二口。青瓷二口。

一廂大饗。

一簀薦事。

裏ハ白生絹。其下ニ敷<sub>二</sub>油單<sub>一</sub>候也。鯖口折

トハ繪樣獻之。裏ハ閑付候也。

一簀薦。

如<sub>レ</sub>簾編<sub>レ</sub>竹。裏ニ着<sub>二</sub>白生絹<sub>一</sub>。

一油單。

面生うすくと青歟。

裏ハ練候也。雨皮體

也。

一折敷。

白蝶小鳥。尊者主人已下至ニ辨少納言。

青蝶小鳥。上官。

白鶴松枝。穩座折敷。高坏候也。

一辨少納言座兩面事。

辨少納言座の兩面疊ハ。兩面文ハ高麗にて。重縁と存候處。或所ニ大饗時の疊として候が。縁の兩面文の普通のわちがへのおしくゝみにて候は。以ニ何説ニ可用候哉。

兩面ハわちがへ也。非高麗文はおしくゝみ歟。且禁中如レ此候也。大中納言圓座縁も。わちがへにてこそ候へ。

一欲レ食レ飯先取ニ最花ニ事。

一食レ汁了汁土器置ニ机下ニ事。

一勸盃羽林差レ笏事。久安。實長朝臣。

一錄事人正レ笏帶劔事。久安。公親長成。

一役送諸大夫退歸之時不レ可レ拔レ笏候事。

大饗役人。

四位二人。可レ被レ催ニ範保朝臣。外。

藏人五位。

資綱。邦輔。

業國。光輔。惟賴。

已上可レ被レ催。此外之。

次五位。

式部一兩人。民部四五人。

諸司勞五位六人。

諸司二三各十餘人。束帶。

右大將家政所。

可三早參勤大饗日所々行事下家司事。

酒部所。俊兼。

帷幔。

康貞。

所々饗。

信弘。奉。

祿所。

貞職。奉。

守成。

貞仲。

立明篝火。

友景。

料理所。手長役皆參。

右來十日可令參勤花山院殿之狀。所

廻如件。

文治五年七月 日

御したがさねのしりの寸法事。

いま一尺計のび候也。任大臣の日。文かわりたるうゑの御ぞめし候へば。件日奉べく候也。

一御裝束儀。委見ニ久安記。

御裝束。永久三東三條儀委細也。

一御簾。

寢殿。首書。久安。西庇妻戸簾。内方懸之。自餘懸ニ外方。永久三記云。西廂南第一間妻戸放ノ扉卷上之。賴額下

四五寸許卷之。釣緒如ニ尋常儀。有ニ繩并絲糸懸緒。

母屋。南面。西面。

庇。南面。東面。西面。

公卿座。上西面。辨少納言座。末南面。

西對代。首書。久安記云。上官座不懸由。有議放之。永久記。上官座南面不懸御簾。先例也。永承記。西廂東廂。懸簾卷上。

懸簾卷上。

奥方。北也。東。端方。南也。西。

一弘筵。并差筵。或號ニ長筵。

永久三。寢殿南庇五個間。南差筵置ニ鎮子。西廂妻切二個間。有ニ差筵鎮子。寬治二時範記云。南廂敷滿長筵。無ニ指筵。垂ニ南廂東第一間簾。

寢殿。

南庇。同緣。西庇。同緣。

對代。

同南庇。中門廊。侍廊。永久三。藏人所不敷筵。依不儲尊者也。

一差筵。

一鎮子。

一壁代。

在網。永久三夏。壁代。



一凡帳帷。在手。久安記云。依及深更略之。母屋西第一間立之。可出祿故也。

一軟障。四帖。或五帖。在綱。

永保三正廿二時範記云。副御簾引。唐繪軟障。永久五帖云々。寬治外記史座上。去軟障三許尺。爲鋪祿事座也。

一白布綱。御簾內柱外引之。以五寸釘。每柱打付之。爲令風不吹入御簾也。

一濱床。廣與疊同。高二尺。

內々御見物料。

一祿綱一筋。打交。久安記。自板敷面四尺許上。打臂金。副西引組交綱。懸祿物。

打交布。紺。淺黃。白。臂金一。在座。

栗形。在座。

已上鐵。黑漆。

一疊。寬和二敷。高麗端疊。其上敷土鋪圓座等。

親王座。一帖。首書。永久記。青地唐錦緣。承平六。加土鋪云々。設茵云々。

龍鬚面。青錦緣。地白。白生絹裏。

長六尺五寸五分。弘三尺三寸。緣青地

錦。弘一寸五分。首書。永久。引重敷之云々。

辨少納言座三枚。

兩面端。面國筵。裡布高麗文。

首書。康和記。出雲筵。久安記。敷出南座中央。依爲狹間引重之。大辨机。與中辨机有隙。

一世源氏座。一枚。紫。

殿上人座。

諸大夫座。

雜色所衆座。

召人座二枚。裏殊用美麗。

延久記。先々諸衛官人數之。今度下家司鋪之。

已上紫緣。裏白布。如高麗裏也。

上官座六枚。緣端。面國筵。

尊者車副牛飼等座。布緣帖。

一地鋪。長四尺許敷。永久記。地鋪六枚。上敷圓座十二枚。又地鋪二枚。上敷圓座三枚。久安記。大臣爲尊者之時。第五間副東屏風。錦端地鋪二枚。頗引重敷之。其上施東京錦茵。延久記。青地鋪端地鋪二枚云々。

公卿料。久安記云。大納言紫緣地鋪。同緣圓座。中納言青緣地鋪。

面龍鬚。高麗緣。裏白生絹。

一茵一枚。尊者料。面。白堅織物。緣。東京錦。同圓座。參木高麗緣地鋪。

緣地鋪。

一圓座。

京筵。面ニ紙ヲ押ス。上ニ入ニ綿一陪二陪許。中ノ眞ハ京筵一枚裏面ニ紙ヲ押也。

大納言座。

永保經信記云。大納言座與ニ中納言座之間有二尺許。自餘四寸。

面。白堅織物。輪違。

裡。白生絹。

紫錦緣。

地白。文紫。輪違。

中納言料。

青錦緣。

地黃。文青。輪違。

參議料。

面。白堅織物。輪違。

裏。白生絹。

大文高

麗緣。地白文黑。輪違。

非參木大辨料。一枚。

首書。保元。非參木座敷ニ高麗端蘭筵半帖。

龍鬚面高麗端。

地白。文黑シ。龍ニ此緣ヲ差タルテ。上ニ白堅織物ノ面ヲ押タリ。此ハ例ノ疊ナドノ如ニ緣ヲバ差タル也。

一菅圓座四十枚。此内原圓座三枚。

證支圓座也。穩座料也。主人座圓座是也。寒時大饗。地鋪下敷ニ此圓座。以裏爲表敷之。當ニ上圓座下敷ニ也。

一四尺屏風。

一格子七間料。綱十四筋料。絹六丈六尺。

可ノ尋ニ用捨ニ

一燈臺十四本。

首書。寬治記云。尊者前一本。宰相座末一本。辨座末一本。打敷諸大夫行之。

延久記云。公卿座上下。東第五間立之。依ノ有ニ主人御座ニ也。下通ノ机立之。辨少納言座上下。上通ノ底巽角柱

立之。爲ノ有ニ奥座雜役之路也。下通ノ机立之。上官座上下。上通ニ長押立之。爲ノ錦祿事座也。下通ノ机立之。打敷十四枚料。絹十四丈。一疋六丈也。枚別一丈。

金銅蓋。六口。同盤。六枚。同箸。

六。金輪鉢。

此外。差油料六具許可ニ用意之。

一机。

天祿二記。大臣赤木。自餘黑柿。辨少納言黑柿。外記史本佐木榻足。保安三。尊者前机二脚。陪膳取之。次第雙立。南。依ニ座便ニ也云々。

首書。陪膳人取ニ簞薦。役送持參。肴物陪膳人取之居ノ机。役送持歸折敷。

公卿料。永承記云。皆用ニ樣器。永平記。大

赤木。

在ニ金銅菱釘。一脚別止。首二方四。長一丈六。承平六記。參木已上用ニ黑柿牙象机簞薦。

長二尺六寸。

弘一尺四寸四分。

面白生絹。

中倍用ニ美紙。永保三。諸大夫入ニ

面白生絹。

柳座中ニ往反立之。

辨少納言料。

承平六記。辨少納言用ニ支佐木。無ニ簞薦。以上用ニ樣器云々。

黑柿。

在金銅菱釘。一脚別止。首二方三。長一方四。

寸法同。

面同。或黃絹。其時上官机。押紙敷。

已上打ニ金銅金物。

長方六。短方四。

中倍同。

上官料

承平六記。史外記用文佐木榻足。口上器云々。康和記。記史榻足朴机。面押白絹。延久記。而黃絹。倚子足。永保三記。倚子足。康平記云。倚子足。年々記注榻足。而工等先例稱。作倚子足之由候。大殿御氣色之處。仰云。令作倚子足者。

朴。

作倚子足者。大殿御氣色之處。仰云。令作倚子足者。

寸法同。面黃絹。或押紙。中倍同。

無二金物。

長和六記。榻足。寬仁記同之。天曆九條殿御記云。外記史座可用榻足。而誤用牙象足。承平記。外記史榻脚。首書。久安記云。外記史厚朴榻足机。治安。榻足。承曆。榻文云々。

一簀薦。

保安三。尊者前簀薦二枚。二卷敷。尊者前。永久。尊者陪膳。取簀薦三枚。敷。五位四人。昇机二脚。立之。大中納言。參木陪膳。五位各取簀薦數枚。敷之。又五位等昇机立之。宰相座手長二人。依二行也。

裏白絹。無二中倍紙。弘長如二机寸法。

左右赤糸各二雙。中五筋。白糸立樣編之。

公卿柱下許敷之。辨少納言上官等机下不敷之。

首書。

永承。編竹作之。如簾也。各一枚當机敷之。如簾編竹。裏付白生絹。閉付之也。結口折也。

一幔三十五帖。皆斑幔也。

延久記如此。同記。侍所前立。部不曳幔云々。永保三記。皆額緋云々。

同柱八十本。

久安記云。所々引幔。白二襲殿東渡殿西。一作合南砌至南築垣。引二色。

平筒貫八十枚。

幔。當東中門。開幔門。以西五尺引之。西中門東砌引之。同幔。延久。庭幔中并門內。北門內斑幔。寬仁記。前庭引斑幔。

三寸釘十三連。

首書。康和記。車宿前額緋幔。史生以下座庭幔。主殿寮引之。車宿并隨身所前額緋幔。

行事侍并下家司等。前日立柱。當日引幔。

仰武士等。召二郎等。令守護之。

一酒部所。

二丈幄一字。

首書。康和記。黑漆骨。額緋覆。蘇芳網。東西行立之。久安。西中門南廊東砌立酒部所。東西妻。

柱九本。棟一支。桁二支。梁二支。

杭十二。槌一支。鐵布久志一柄。

覆一帖。十二幅。綱八筋。大小。

火爐具。

鉢一口。金銅。雖夏可。罐子一口。在金輪。

白木臺一脚。修理職造。逆之。

長四尺。弘二尺六寸。深七寸。

足高三尺四寸。白尻以下也。

首書。久安記云。其內東妻立二層棚一脚。南北妻上層。竝置瓶子六口。茶境四口。公卿辨少納言料。青瓷二口。外記史料。下層置檯器折敷等。棚西云々。

酒樽一口。

首書。其上立金輪二口。鑊子二口。爐西立黑漆酒樽一口。在臺網杓等。南邊立長床子一脚。東西妻爲雜役人座。

黑漆臺一脚。

緋綱三筋。

黑漆杓。

瓶子四口。

白茶碗二口。青盞二口。

白木二階棚一脚。修理職造進之。

高四尺。長三尺五寸。弘二尺二寸。

二階間一尺三寸。

繪折敷廿枚。

白十枚。青十枚。

弘方九寸。

塗胡粉。以移花繪松枝并鶴。

自上客料理所送遣之。五十枚之內也。

白木床子三脚。修理職造進之。

二脚。長各五尺。高一尺三寸。

一脚。長七尺。高同。

家司着幄進三獻。以下家司獻諸

司官人。

一獻。

繪折敷一枚。居樣器之坏。在蓋并尻居。

瓶子。

公卿座料。白茶碗。上官座料。青盞。

二獻。

同前。

三獻。

首書。久安記云。白四獻。用土器。青盞白盞瓶子各一口。自酒部所渡料理所。此前酒部供之。

此後。家司渡瓶子於料理所之後退出。

但件瓶子不遣酒部所。三獻以後自透

渡殿直遣料理所了。是一秘說也。

一垂布。上官料理所。

久安。上官料理所。西北二面。懸白垂布。其內副東西壁立三層棚各一脚。敷紫端黃端等疊。御車宿西東。隨身所二間懸紺垂布。

一疊。紫緣。綠端。

一棚三間。各三階。

一組二脚。此組二脚。修理職造進之。

一包丁刀二柄。

一懸子三十合。

一國折敷百枚。

一繪折敷五十枚之內。廿枚送酒部所。白十三枚。青七枚。

白蝶小鳥。尊者以下至弁少納言。青蝶小鳥。上官。白鶴松枝。穩座折敷高坏也。



一綠青折敷百枚。面押白絹。

一鉢五六口。

一鍋金輪。

一長櫃十合。

一後廳料米廿石。

一炭二石。

已上。

藏人所臺盤二脚。

一穩座折敷高坏。

大臣前三本。一本干物二坏。一本菓子二坏。一本窪器物二。生物二坏。

納言二本。一本窪器物二。酢鹽箸臺。

一祿。尊者祿。大掛外。或綾物。或綾掛加之。保安三記。尊者祿。紅梅綾。件掛可被重。大掛也。康和記。尊者祿。白大掛一重。加黃朽葉雜物掛。天祿二。加女裝一重。保元。右府祿。白掛。重濃蘇芳掛。今夜掛。白掛重。紅梅掛。以何爲是哉。近年度々大饗所重濃蘇芳掛也。

白大掛。治安記。尊者祿。從東一間南面出云々。首書。保安三。尊者白大掛一重。蒲萄染二重。綾物掛一領。

尊者一重。薄蘇芳羽長加之。白。母屋東一間。柱口翠簾下。押開屏風出之。

大中納言料各一重。以二領。爲二一重。

赤衾。承平記。火色衾云々。寬治記。茜染云々。首書。永久記。蘇芳衾云々。康和。赤練衾。

辨少納言料各一重。以二帖。爲二一重。

大夫外記史料各一領。

赤掛。寬治記。辨少納言茜染。參木紅。保安三。依無三位。給三蘇芳掛一領。康和。赤練一重。康平記。紅大掛一襲。首書。保安三。紅染掛一領。實色蘇芳也。

四位參議料各一重。以二領。爲二一重。

非參議大辨一領。

鳥子重。永保經信記。上一領。掛。下一領。蘇芳。天祿二記。紅白各一領。

三位參木料。

白六丈絹。首書。永承記云。六位四組取副笏。下立庭中。

六位外記各一疋。天祿二。指笏取之。

黃六丈絹。

六位史料各一疋。長和六記。六位史料。記插。笏持。絹也。

白布。

外記史生各三段。召使各二段。

同使部各一段。首書。治安記。五位家司一人。行史生祿。下家司一人。取見參。召之。

官吏生各三段。官掌各二段。

召使各二段。使部各一段。

立明官人。黃六丈絹廿匹。

召人祿。

五位。白褂各一領。六位。六丈絹各一匹。

一饗。久安記。召使使部等饗。諸司机兼居飯。諸司二分役之。

史生。各一前。立明官人廿八。各一前。

召人銜重。各一前。使部。加菅圓座。

召使。各一前。官掌。各一前。

尊者牛童饗机。號強机榻足云々。治安記。

一名鐔唐櫃一合。內黑。外朱。隅黑。

長二尺。弘一尺六寸五分。深九寸五分。

足六。足下高三寸。蓋深一寸一分。

足鐵菱釘十八。每足三。鐵黑漆。鑲鎰。鐵黑漆。

一宿中簡事。黑漆。

長四尺八寸。弘。上八寸。下七寸。厚六分。

兼日令工司造之。當日以胡粉。年預下家

司於政所。令書宿之家司職事已下來名。

大饗畢御覽吉書之後。下家司於階隱間。

向御所。乍立讀之。出納。舉炬。

一侍所簡事。白木。

長五尺三寸五分。弘。上八寸。下七寸。厚六分。

同袋。兩面。裏黃絹。

長六尺三寸五。二幅。緒。同兩面。

一諸司所進物。

工司。

箸。匕。宿申簡。侍所簡。

掃部寮。

所々疊。

上客料理所疊。史生座。使部座。

立明官人座。

修理職。

火爐一脚。二階棚一脚。

床子三脚。一脚長七尺。二脚長五尺。飯盛板二枚。

木工寮。

檢非違使床子二脚。長各八尺。高一尺三寸。

大藏省。木工寮。掃部寮。主殿寮。

使部帷。

大炊寮。

公卿以下上官以上飯。不給料米。只仰寮頭召之。

一立明官人。以下家司。下知年預。

左近十人。右近十人。

兼日仰各年預召夾名。

一打出六具。久安。出袴等。

一尊者祿。

一御遊具。

拍子。笛。笙。篳篥。琵琶。箏。

和琴。

一引出物。

馬二匹。飾羈。

一祿案二脚。久安記。下家司四人昇祿案二脚。各積信乃布八十五端。當第二間。昇立庭中。南北妻去。砌三許丈。

長四尺。弘三尺。高四尺。

首書。永久。家司主稅。清原真人信俊。進立案下。有史生官掌召使等。

一關白穩座茵。華茵。永久記。唐錦茵。

一侍廊大盤。

一可相尋方々。

修理職。木工寮。大藏省。大炊寮。

左右近官人。廳頭。御厨子所小預。

掃部寮。使部座疊。樂所。內匠寮。

檢非違使。主殿寮。庭幔。

一立明官人座黑漆大盤事。

一上客料理所。永久三。

藏人所東廊爲上客料理所。

南北二面懸白垂布。其內二行敷疊。高麗二枚。

紫四枚。母屋東西兩邊立二階白木棚各一脚。

先例或立。當日未明運渡雜物。其南砌撒透

一脚。付柱引額纈幔。康平記。斑幔云々。

一承曆記。

中門北廊爲<sub>二</sub>諸大夫座<sub>一</sub>。

鋪<sub>二</sub>紫端盤<sub>一</sub>。預居<sub>一</sub>。

西雜舍。西築垣外。

設<sub>二</sub>史生官掌召使等座<sub>一</sub>。

預居<sub>一</sub>。

同舍北地立<sub>二</sub>所司

幄二字。爲<sub>二</sub>官外記使部等座<sub>一</sub>。

居<sub>一</sub>。

隨身所爲<sub>二</sub>立明官人座<sub>一</sub>。

有<sub>レ</sub>饗。

洞院東政所屋爲<sub>二</sub>檢非違使

座。有<sub>レ</sub>饗。

一宿申次第并。

久安記。申<sub>二</sub>政所吉書<sub>一</sub>。次有<sub>二</sub>宿申事<sub>一</sub>。知家司右

史生信元讀<sub>レ</sub>簡。次侍所置<sub>二</sub>名簿辛櫃<sub>一</sub>。立<sub>二</sub>日給

簡。

當日召<sub>二</sub>式部大夫盛經<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>書之。次撤<sub>二</sub>所々幔<sub>一</sub>。堂上敷設。

一吉書事。成<sub>二</sub>返抄<sub>一</sub>之由。見<sub>二</sub>永保結信記<sub>一</sub>。

一天承元十二廿二中右記。

於<sub>二</sub>頭辨顯賴三條西洞院<sub>一</sub>儲<sub>二</sub>大饗<sub>一</sub>。

寢殿南庇四間爲<sub>二</sub>公卿座<sub>一</sub>。東庇三間爲<sub>二</sub>殿上人

座。東中門廊爲<sub>二</sub>諸大夫座<sub>一</sub>。車宿隨身所爲<sub>二</sub>上

客料理所。其中門內南腋立<sub>二</sub>酒部所幄<sub>一</sub>。南庭東

西廊前引<sub>レ</sub>幔。各有<sub>二</sub>幔門<sub>一</sub>。東中門外至<sub>二</sub>東門南北<sub>一</sub>各

引<sub>レ</sub>幔。

役諸大夫諸司官人等。從<sub>二</sub>關白殿<sub>一</sub>催給之。

一次第儀。保安三年記委細也。永久三同也。永保三經章記。

康和記。酒部所事委細也。兩所。寬治記同。永保

經信記。永承行成同。

一公卿座對座事。

永承記云。古昔例一行儲<sub>レ</sub>座。近代二行儲也。

依<sub>二</sub>公卿員數多<sub>一</sub>也。但外座除<sub>二</sub>上一個間<sub>一</sub>敷之

也。下薦中納言以下着之也。以上公卿座。東上

對座。非三木大辦不參之時。不<sub>レ</sub>敷<sub>二</sub>圓座<sub>一</sub>也。

一永久記云。自<sub>二</sub>西第五間西邊<sub>一</sub>至<sub>二</sub>于第一間東

邊。敷<sub>二</sub>地鋪六枚<sub>一</sub>。座上自<sub>レ</sub>柱出<sub>レ</sub>東三許尺。座末自<sub>レ</sub>柱出<sub>レ</sub>西二尺五寸。其上

敷<sub>二</sub>圓座十二枚<sub>一</sub>。西第二間迫<sub>二</sub>南柱<sub>一</sub>敷<sub>二</sub>地鋪二

枚。座上不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>柱一尺四寸。座末西出同<sub>二</sub>與座<sub>一</sub>。其上敷<sub>二</sub>圓座三枚<sub>一</sub>。

康和敷<sub>二</sub>青錦緣地鋪二枚<sub>一</sub>。其上敷<sub>二</sub>東京錦緣

茵。地鋪尺餘引重敷之。

一大納言陪膳一人。取<sub>二</sub>大納言養薦<sub>一</sub>。一々敷之。

中納言陪膳一

人。同。參議陪膳一人。同。



永久三記云。實房依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>大納言陪膳。取<sub>二</sub>簀薦

五枚<sub>一</sub>。一々敷之。盛雅取<sub>二</sub>簀薦五枚<sub>一</sub>。敷<sub>二</sub>中納言

座前。廣房取<sub>二</sub>簀薦五枚<sub>一</sub>。敷<sub>二</sub>宰相座前。

一肴物等役送路事。

寛治記。大臣納言料自<sub>レ</sub>南進。參木料自<sub>二</sub>座末<sub>一</sub>進。

永保三記。酒部所人來。東面渡殿授之。

不審事。

一地鋪面事。

一樣器事。

一壁代事。有無。

一大盤事。

一差筵事。

大饗雜事。

一所々御誦物。

一御參内御供人。

扈從公卿。殿上人。

御身固陰陽師。

一掃除。

軟障事。

面ハ生絹ニ唐繪ヲカク。縦様ハ三尺七寸。鐵

定。横ヘハ六幅ナリ。上下左右ニ綾ヲ紫ニ染

テ縁ニ付ク。其廣ハ六寸八分。金定。白練ノ絹

ヲ裏ニ付ク。縁ノ裏ハ紫ノ練絹也。紫ノ綾<sub>ト</sub>緣<sub>ト</sub>

同。ヲ一寸バカリニタ、ミテ乳ニ付ク。其數

十也。綱ヲトホスベキ料ナリ。紫ノ練ノ平絹

ノヒロサ一寸餘ナルニ。布ヲ縫タ、ミタル

綱ニテ張也。綱ノ長ハ一丈二尺。<sub>金ノ</sub>上官ノ座

ニ依テ。此軟障ヲ五帖或四帖。副<sub>ニ</sub>御簾<sub>一</sub>テ引

之也。今注付タルハ一帖分也。

大饗次第

嘉禎二年六月九日

尅限參內。吉時。

有文帶。螺鈿劔。紫綵平緒。

前驅八人。

仁安例。

車副二人。

此外二人并黃金物榻相儲。

陣邊退出之時可相具。

扈從殿上人。

頭中將褰簾。

中將獻沓。

於陣口陽明門代幔南口下車。入自閑院東

面北門。暫候便宜所。皇后宮御方。公卿座。

節會畢。新任大臣進弓場。奏慶。

先以職事。奏下可渡階前之由。

正治。先佇立西中門腋邊。以藏人木工頭

兼定奏之。

其路經左青瑱宣仁等門。自宜陽殿壇上出。軒廊東二間。經階下。自弓場行合。立廊西二間乾向。

親呢公卿。侍臣等相從。

顯定朝臣。通氏朝臣。

顯親朝臣。通成朝臣。

入夜者。殿上人取松明前行。前驅兩三竊相從。殿上人取松明。可扶持之。

自餘前驅雜色等自北陣廻會。

以近衛次將奏之。

康平。左中將隆綱。

永保。右近少將顯實。

康和。頭中將顯實。

久安。右近中將師仲。

仁安。左少將通能。

正治。頭權大夫親經。

奉仰拜舞。

依勅授不解劔。

次付藏人頭。若者五位職事。奏饗祿事。

其詞。マウチキムダチニミキ給ハム。

康平。頭弁經信奏之。

永保。藏人權右中弁通俊。

康和。藏人中宮大進爲隆。

久安。藏人右少弁光賴。

仁安。頭弁信範。

正治。頭權大夫親經。

職事仰聞食之由。

職事仰昇殿。

令藏人頭奏慶之時。同人仰之。令近將

奏之時。五位藏人仰之。職事早仰昇殿之

時昇殿。歸降奏饗祿事。

大臣拜舞。

入無名門。昇小板敷。有排。着殿上端座。小臺

盤前。即歸出。經本路退出。

出。自東面小門。

有下留御前。出立等。

入夜時止之。仁安正治例。

出陽明門代南口。乘車。

置金銅榻。

車副四人始警蹕。

歸本家。

入自北面小門。

饗儀。

上下裝束如記文差圖。

官人立明庭前。

主人暫着親王座。

客首已下列中門外。

東上北面。或東上南面。

家司申其由於主人。

主人降立南階東柱南一許丈餘。頗坤向。

先之地下五位一人自東方。搢笏取沓。傍

砌參進進沓。最下。最下。退候寢殿東邊。

衛府<sup>館裏</sup>人着<sup>二</sup>衣冠<sup>一</sup>取<sup>二</sup>繼沓<sup>一</sup>。

次客首以下列<sup>二</sup>立南庭<sup>一</sup>。

公卿一列。

少納言弁一列。第一人當<sup>二</sup>第三人後<sup>一</sup>。

外記史一列。第一人當<sup>二</sup>第二人後<sup>一</sup>。

主客再拜。

主客揖讓。

於<sup>二</sup>本所<sup>一</sup>三讓。先主人揖。客揖。次主人揖。客揖。次主人揖。客不<sup>レ</sup>揖。謂<sup>二</sup>之三讓<sup>一</sup>。

客首離<sup>レ</sup>列北進。

主人不<sup>レ</sup>揖右廻進<sup>レ</sup>北。

至<sup>二</sup>砌下<sup>一</sup>左廻立。

三讓。

客首三揖不<sup>レ</sup>進。永保<sup>二</sup>於<sup>二</sup>砌下<sup>一</sup>三讓。客又進<sup>二</sup>於<sup>二</sup>階下<sup>一</sup>。又三讓昇。

主人不<sup>レ</sup>揖右廻。北進至<sup>二</sup>南階東頭<sup>一</sup>。於<sup>二</sup>下一

級<sup>二</sup>脫沓<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>揖。傍<sup>二</sup>西欄<sup>一</sup>昇<sup>二</sup>階<sup>一</sup>。先<sup>二</sup>左足<sup>一</sup>。自<sup>二</sup>簀子

敷<sup>二</sup>着<sup>一</sup>親王座上頭<sup>一</sup>。北面不<sup>レ</sup>揖。

取<sup>レ</sup>沓人進寄。取之退出。取<sup>二</sup>繼如<sup>一</sup>初。

客首不<sup>レ</sup>揖北進。至<sup>二</sup>南階西頭<sup>一</sup>脫<sup>二</sup>沓於地<sup>一</sup>。傍<sup>二</sup>

西欄<sup>一</sup>昇<sup>二</sup>階<sup>一</sup>。自<sup>二</sup>簀子<sup>一</sup>西行入<sup>二</sup>南廂西第一間<sup>一</sup>。

經<sup>二</sup>公卿座下并後<sup>一</sup>着座。南面有<sup>レ</sup>揖。

第一人先着<sup>二</sup>第二圓座<sup>一</sup>。依<sup>二</sup>主人勸<sup>一</sup>着<sup>二</sup>第一

座<sup>一</sup>。第二納言已下一々揖。離<sup>レ</sup>列昇<sup>二</sup>南階東

頭<sup>一</sup>着座。

前人昇<sup>二</sup>立簀子<sup>一</sup>之間。次人揖進之。

納言着<sup>レ</sup>奧。參議相分着<sup>二</sup>上藁奧<sup>一</sup>。上藁奧。下藁端。

大弁着<sup>レ</sup>端。有<sup>二</sup>二人之時<sup>一</sup>。着<sup>レ</sup>端之人。自<sup>二</sup>簀

子<sup>一</sup>東行。入<sup>二</sup>西第二間<sup>一</sup>着之。

遲參卿相令<sup>二</sup>家司伺<sup>一</sup>主人氣色。依<sup>レ</sup>許着座。

少納言弁昇<sup>二</sup>中門廊南妻<sup>一</sup>着座。南上東面。

遲參弁少納言。令<sup>二</sup>家司觸<sup>一</sup>大弁。大弁申<sup>二</sup>主

人<sup>一</sup>。依<sup>レ</sup>許着座。

外記史昇<sup>二</sup>中門外階<sup>一</sup>着座。外記史。史端。

兩儀無<sup>二</sup>拜禮<sup>一</sup>。客首以下直昇着座。主人在<sup>二</sup>

西庇妻<sup>一</sup>見<sup>二</sup>客入<sup>一</sup>。自<sup>二</sup>簀子<sup>一</sup>出逢。



有<sub>二</sub>尊者<sub>一</sub>之時。於<sub>二</sub>中門<sub>一</sub>揖讓三度。互昇着座。

次召使十人入<sub>二</sub>西幔門<sub>一</sub>。取<sub>二</sub>客首以下沓<sub>一</sub>退出。

酒部所人入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>西幔門<sub>一</sub>着座。

公卿前立<sub>レ</sub>机居<sub>レ</sub>饌。入<sub>レ</sub>夜之時。兼<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>飯等<sub>一</sub>。

少納言弁外記史座。皆兼居之。

一獻。酒部所<sub>レ</sub>獻盞樣器。有<sub>二</sub>蓋尻居<sub>一</sub>。居<sub>二</sub>細折敷<sub>一</sub>。

主人揖起座。跪<sub>二</sub>一世源氏座<sub>一</sub>。乾向突<sub>一</sub>左膝。

此間。參議乍<sub>レ</sub>居平伏。少納言弁退座後平

伏。外記史動座平伏。

四位家司持<sub>二</sub>參盃<sub>一</sub>。先撤<sub>二</sub>盞<sub>一</sub>。

主人指<sub>レ</sub>笏取<sub>レ</sub>盃。入<sub>二</sub>南廂西第一間<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>公卿

座末并後。居<sub>二</sub>座上<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>揖。

殿上五位取<sub>二</sub>瓶子<sub>一</sub>茶碗。相從。

主人受<sub>レ</sub>酒目<sub>二</sub>客首<sub>一</sub>。客首揖。主人飲之。更受

<sub>レ</sub>酒授<sub>二</sub>客首<sub>一</sub>。巡流至<sub>二</sub>最末參議<sub>一</sub>。參議受<sub>レ</sub>酒。乍

<sub>レ</sub>居進<sub>二</sub>出座東<sub>一</sub>。納言者不<sub>レ</sub>動座。目<sub>二</sub>弁座上臚<sub>一</sub>。上臚起

座。經<sub>二</sub>机南<sub>一</sub>居<sub>二</sub>參議西頭<sub>一</sub>。受<sub>レ</sub>盃復座。

此間。地下五位。取<sub>二</sub>續酌<sub>一</sub>相替。

地下五位勸<sub>二</sub>盃上官座<sub>一</sub>。

瓶子。次五位。公卿座盃至<sub>二</sub>弁座<sub>一</sub>之間勸之。

客首放<sub>レ</sub>盞之後。揖右廻經<sub>二</sub>本路<sub>一</sub>。

此間。參議以下平伏同前。

歸<sub>二</sub>出簀子<sub>一</sub>。

此間。地下五位取<sub>二</sub>圓座<sub>一</sub>。厚。出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>。兼備<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>。

西第五間西柱東北親王座上敷之。

主人東行入<sub>二</sub>西第四間東柱傍<sub>一</sub>。自<sub>二</sub>座下方<sub>一</sub>跪

引<sub>二</sub>圓座<sub>一</sub>着之。

壬向有<sub>レ</sub>揖。參議起揚。弁少納言上官復座。

立<sub>二</sub>主人机<sub>一</sub>居<sub>二</sub>肴物<sub>一</sub>。

地下四位各一人昇<sub>二</sub>赤木机<sub>一</sub>一脚。面押<sub>二</sub>白絹<sub>一</sub>。自<sub>二</sub>簀

子<sub>一</sub>進<sub>レ</sub>東。四位在<sub>レ</sub>後。入<sub>二</sub>第四間<sub>一</sub>。立<sub>二</sub>主人座乾

方。良坤妻無<sub>二</sub>簀薦<sub>一</sub>。

此間。主人置<sub>レ</sub>笏。

地下五位二人。持參肴物二折敷。陪膳人取之。

置机上。待役送之間。乍指勿退候。

二獻。酒部所獻之。

勸盃。殿上四位。

瓶子。茶壺。地下五位。

經奧座。後勸客首。直巡流不擬主人。

上官座。

勸盃。地下五位。

瓶子。次五位。

檢非違使着座。

先看督長昇床子二脚。兼在中門邊。立酒部所良

庭。東西行。二脚相竝。

次檢非違使入西幔門着床子。東上北面。

三獻。酒部所獻之。

勸盃。殿上四位。

瓶子。地下五位。

勸客首。客首擬主人。主人擬第二人。

第二人經座後并座上。受盃復座巡流。

上官座。

勸盃。地下五位。

瓶子。次五位。

畢渡瓶子於上客料理所。

酒部所人退。

檢非違使退。

次居飯。

主人飯。居前左方。陪膳四位。役送五位。

客首以下飯。入夜之時兼居之。

居冷汁。

鮓汁。鮓實同。敷鏡葉敷。漬木綿。

雉。足以漬木綿裏之。

居二折敷。

主人陪膳役送同飯。

客首以下陪膳。地下五位三人。客首以下飯兼居之時。主人飯汁一度

居之。大納言一人。中納言一人。參議一人。

役送地下五位。

弁少納言座。次五位役之。

或兼居之。

居畢大弁候<sub>二</sub>氣色<sub>一</sub>。無大弁者。寂末參議申之。

主人取<sub>レ</sub>筭目<sub>二</sub>客首<sub>一</sub>。

客首揖。主人以下次第立<sub>二</sub>匕箸<sub>一</sub>。先立<sub>レ</sub>匕。次立<sub>レ</sub>箸。一同

食之。汁器置<sub>二</sub>机上<sub>一</sub>。

四獻。用<sub>二</sub>上客料理所春日土器<sub>一</sub>。

先<sub>レ</sub>之料理所。移<sub>二</sub>立<sub>二</sub>階棚於中門南砌邊<sub>一</sub>。

勸盃。參議。

瓶子。殿上五位。<sub>地下五位續酌。</sub>

勸盃入於<sub>二</sub>渡殿邊<sub>一</sub>。搦<sub>レ</sub>筭取<sub>レ</sub>盃<sub>二</sub>地下五位持參<sub>一</sub>。進<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>

簀子<sub>一</sub>。入<sub>二</sub>主人座間東邊<sub>一</sub>。勸<sub>二</sub>主人<sub>一</sub>。主人擬<sub>二</sub>

客首<sub>一</sub>巡流。過<sub>二</sub>我座<sub>一</sub>復座。

或勸<sub>二</sub>客首<sub>一</sub>巡流。主人不<sub>レ</sub>飲。仁安。

上官座。

地下五位。

瓶子。次五位。

居<sub>二</sub>熱汁裏燒等<sub>一</sub>。

依<sub>二</sub>康平例<sub>一</sub>。今度可<sub>レ</sub>略之。

仰<sub>二</sub>錄事<sub>一</sub>。

主人拔<sub>レ</sub>箸。不<sub>レ</sub>拔<sub>レ</sub>匕。把<sub>レ</sub>筭召<sub>二</sub>錄事<sub>一</sub>。願<sub>二</sub>座下氣色<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>詞。末座參

議傳召之。

殿上四位一人。同五位一人。師

參議候<sub>二</sub>南簀子<sub>一</sub>。東上北面。親王座南欄下。

主人仰云。左近中將師繼朝臣。弁少納言座錄

事各承<sub>レ</sub>仰微唯。同音。左廻退歸。

此間地下五位二人。取<sub>二</sub>菅圓座<sub>一</sub>敷<sub>二</sub>弁少納

言座前<sub>一</sub>。一枚當<sub>二</sub>第一人前<sub>一</sub>敷之。一枚自<sub>二</sub>第二人前<sub>一</sub>敷之。

錄事入<sub>二</sub>西廂北第一間<sub>一</sub>。各着座。南面。頃之起座。

右廻退出。自<sub>レ</sub>下退出。

外記史座錄事參進。

弁官座錄事入<sub>二</sub>西廂<sub>一</sub>程。相替參進。

地下五位二人參進。候<sub>二</sub>南簀子<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>前。

主人仰云。外記史座ニ御酒給へ。承<sub>レ</sub>仰微唯退去。

此間次五位二人取<sub>三</sub>菅圓座二枚。各敷<sub>三</sub>外記史座上。若有三人者。二枚取重敷之。

錄事相分着座。西面。頃之起座。

五獻。料理所獻之。

勸盃。定難中納言。地下五位

瓶子。獻盃。殿上五位。繼酌地下五位。

勸<sub>三</sub>主人。擬<sub>三</sub>客首。巡流。

居<sub>三</sub>菓子。

蘇。甘栗。枝柿。

役人同。汁物或略之。

主人勸盃。非參議大弁。跪<sub>三</sub>一世源氏座。取<sub>レ</sub>盃。

着<sub>三</sub>大弁座上。勸之。

四位<sub>三</sub>進盃等。大略同<sub>三</sub>一獻之儀。

瓶子。殿上五位。

給<sub>三</sub>史生等祿。

下家司四人。昇<sub>三</sub>祿案二脚。立<sub>三</sub>庭中。酒部所

祿殘入<sub>三</sub>長檣。同置之。庭東。西妻。在<sub>三</sub>案西。

退紅仕丁各昇之。

家司監臨。

知家事唱<sub>レ</sub>名。

案主賦之。

史生召使等。於<sub>三</sub>案南頭。一々賜之。一拜退去。

使部於<sub>三</sub>本座。給之。不<sub>三</sub>參進。

敷<sub>三</sub>穩座。此間卷<sub>三</sub>祿所簾。

先地下五位二人。撤<sub>三</sub>一世源氏座。敷<sub>三</sub>渡殿。

敷<sub>三</sub>圓座於南簀子。兼儲<sub>三</sub>祿所。役人。取之。

先地下五位一人。取<sub>三</sub>厚圓座。敷<sub>三</sub>階東間。主人

料。次々二三枚取具敷之。

階東間以西。次第敷之。

次公卿移<sub>三</sub>着穩座。



先拔箸匕。自下薦起座。自上薦着圓

座。東上南面。或北面。有揖。或不爾。

主人出我座間。着第一圓座。

奧座人經座後并末出西一間。東進着之。

端座人出我座間。

弁少納言退候渡殿。上官不動座。

敷召人座。紫端二枚。

衛府四人役之。去階一丈餘。砌前以西。

召人着座。東上北面。

居召人衝重。

諸司二分役之。

居公卿肴物。

土高坏。繪折敷。

主人三本。大納言已下二本。

主人陪膳四位。役送地下五位三人。

自簀子東進居長押上。

今度入西妻戸。自長押上東進居之。以

下同之。

納言以下無陪膳。地下五位二人直居之。

勸盃。中納言。地下五位。傳進盃。

瓶子。殿上五位。

自西妻戸經長押上。着主人座上。勸盃

巡流。

召人座勸盃。

勸盃。次五位。

瓶子。衛府官人。

公卿座居削氷。居折敷。白土器。

役人如前。

置絃管具。兼置被物所。地下五位。一々置之長押上。

先笛筥。盛笛筥。箏篋。

次琵琶。

次箏。

次和琴。

殿上侍臣堪事之人。依召候公卿座末。東面南上。

地下五位一人進頒絃管。

所作人。

拍子。帥中納言。

笛。花山院宰相中將。

琵琶。前大貳。

箏。侍從三位。

和琴。春日三位。

笙。教房朝臣。

箏篳。伊忠朝臣。

付歌。

絲竹合調。

雙調。

安名尊。席田。賀殿急。

平調。

更衣。五常樂急。

依三時議。可加三萬歲樂。

此間賜外記史祿。五獻以後。公卿移。穩座間可給之。

諸卿未移着穩座已前。於本座給之。

五位外記史。各赤衾一帖。地下五位取之。或次五位。

六位外記四人。白六丈絹各一匹。

六位史五人。黃六丈絹各一疋。

次五位取之。

各就祿所取之給。

次弁少納言祿。移穩座間賜之。

非參議大弁。弁少納言祿。於本座給之。早

起座之時。於渡殿邊給之。

赤衾各二帖。

地下五位取之。

弁少納言外記史。各懸祿降立庭中。六位捧持。

南階西脇。東上北面。

弁少納言一列。外記史一列。

非參議大弁不列。

次第揖退去。弁少納言還昇。

次參議散三位祿。

三位。烏子重各一重。

四位參議。赤大褂一領。

殿上四位五位。就被物所取之。自上

薦授之。

中納言祿。

白大褂一重。

同上上臚授之。

大納言祿。

同上。

歌遊終頭授之。

給<sub>二</sub>召人祿<sub>一</sub>。

五位白褂各一領。六位匹絹。

次五位役之。入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>西段門<sub>一</sub>。

客首以下起座分散。

給<sub>二</sub>立明官人祿<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>便所<sub>一</sub>給之。

廿人各匹絹。諸司官人役之。

次主人着<sub>二</sub>客亭<sub>一</sub>。

客首休所卷<sub>二</sub>南簾<sub>一</sub>敷<sub>二</sub>高麗一枚<sub>一</sub>。東<sub>四</sub>爲<sub>二</sub>其座<sub>一</sub>。

家司覽<sub>二</sub>吉書<sub>一</sub>。四位或五位。

插<sub>二</sub>文杖<sub>一</sub>。加賀國御封解文。

覽畢返給。

政所始。

下家司宿申。

天曙時止之。

主人入御。

# 大饗次第

建長六年十二月廿五日  
富小路儀

節會了諸卿來會饗所。

次客首已下列立中門外。東上北面。

公卿一列。弁少納言一列。外記史一列。

此間左右近官人立明南庭。

次主人降自南階立砌下。

次客首已下列立南庭。東上北面。

公卿一列。弁少納言一列。外記史一列。

次主客共再拜。

次主客揖讓。三讓。三辭。

其儀。先於本所三讓。主人向客揖讓。客

揖。次主人又揖讓。客揖之。次主人揖讓。客

不揖。離列北進一許丈。

次主人不揖。右廻至砌下。左廻向客立三

讓。客首揖不進。

次主人不揖。昇南階着親王座上頭。

次客首已下。次第昇南階着座。

次弁少納言外記史着座。

召使進取公卿沓。

次酒部所人着幄。

次立公卿机。近例兼立之。居有物。

次立弁少納言机。兼立之。飯汁菓子同居之。

次立外記史机。同上。

次一獻。

勸盃。主人。

瓶子。殿上五位。

續酌二人。地下五位。

巡流盃至于弁座。

主人着圓座。勸盃問敷之。卽立机。

次二獻。勸主人。

勸盃。殿上四位。

瓶子。地下五位。

續酌一人。



此間檢非違使着座。

史生着<sub>二</sub>饗座<sub>一</sub>。

次三獻。傳<sub>レ</sub>盞。

勸<sub>レ</sub>客。客擬<sub>二</sub>主人<sub>一</sub>。主人擬<sub>二</sub>第二人<sub>一</sub>。

勸盃。殿上四位。

瓶子。地下五位。

續酌一人。

次酒部所人退出。

次居<sub>二</sub>飯并冷汁<sub>一</sub>。

居了參議申上。

主客已下立<sub>二</sub>箸<sub>一</sub>。

次四獻。自<sub>レ</sub>是料理所獻之。勸<sub>二</sub>主人<sub>一</sub>。

勸盃。參議。

瓶子。殿上五位。

續酌二人。

次居<sub>二</sub>熱汁<sub>一</sub>。或略之。

申<sub>二</sub>上<sub>一</sub>下箸<sub>一</sub>。

次五獻。

勸盃。參議。

瓶子。殿上五位。

續酌二人。

次居<sub>二</sub>菓子<sub>一</sub>。或兼居之。

次主人仰<sub>二</sub>弁少納言并外記史祿事<sub>一</sub>。

次主人起座。勸<sub>二</sub>盃非參議大弁<sub>一</sub>。

此間昇<sub>二</sub>立祿案於庭中<sub>一</sub>。

次給<sub>二</sub>史生已下祿<sub>一</sub>。

此間撤<sub>二</sub>一世源氏座<sub>一</sub>。敷<sub>二</sub>穩座<sub>一</sub>。

次主客已下移<sub>二</sub>着穩座<sub>一</sub>。

此間家君出<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>東着<sub>レ</sub>茵給。

先<sub>レ</sub>是敷<sub>レ</sub>茵。

次居<sub>二</sub>肴物<sub>一</sub>。

次勸盃。中納言。若參議。

瓶子。殿上五位。

家君受<sub>レ</sub>盃令<sub>レ</sub>擬<sub>二</sub>客首<sub>一</sub>給。客首起座進寄

受<sub>レ</sub>盃復<sub>ニ</sub>本座<sub>一</sub>。飲了更受<sub>レ</sub>酒擬<sub>ニ</sub>主人<sub>一</sub>。主人擬<sub>ニ</sub>第二人<sub>一</sub>。其後巡流。

此間給<sub>ニ</sub>弁少納言外記史祿<sub>一</sub>。各列<sub>ニ</sub>立前庭<sub>一</sub>。一揖退。

次授<sub>ニ</sub>參議已上祿<sub>一</sub>。

次自<sub>ニ</sub>下臈<sub>一</sub>起座。

次主人起座。

次給<sub>ニ</sub>立明官人祿<sub>一</sub>。

今度有<sub>ニ</sub>子細<sub>一</sub>。無<sub>ニ</sub>御遊<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>儲<sub>レ</sub>饗無<sub>ニ</sub>御遊<sub>一</sub>之例。准<sub>ニ</sub>治安太政大臣饗例<sub>一</sub>。

群書類從卷第四百七十四

雜部廿九

十七箇條憲法

聖德太子

一曰。以<sub>レ</sub>和爲<sub>レ</sub>貴。无<sub>レ</sub>忤爲<sub>レ</sub>宗。人皆有<sub>レ</sub>黨。亦少<sub>三</sub>達者<sub>一</sub>。是以或不<sub>レ</sub>順<sub>三</sub>君父<sub>一</sub>。乍違<sub>三</sub>于隣里<sub>一</sub>。然上和下睦。諧<sub>三</sub>於論事<sub>一</sub>。則事理自通。何事不<sub>レ</sub>成。

二曰。篤敬<sub>三</sub>三寶<sub>一</sub>。三寶者佛法僧也。則四生之終歸。萬國之極宗。何世誰<sub>一作何</sub>人非<sub>レ</sub>貴<sub>三</sub>是法<sub>一</sub>。人鮮<sub>三</sub>尤惡<sub>一</sub>。能教從<sub>レ</sub>之。其不<sub>レ</sub>歸<sub>三</sub>三寶<sub>一</sub>。何以直<sub>レ</sub>枉。

三曰。承<sub>レ</sub>詔必謹。君則天<sub>レ</sub>之。臣則地<sub>レ</sub>之。天覆地載。四時順行。萬氣得<sub>レ</sub>通。地欲<sub>レ</sub>覆<sub>レ</sub>天。則致<sub>レ</sub>壞耳。是以君言臣承。上行下效。故承<sub>レ</sub>詔必慎。不<sub>レ</sub>謹自敗。

四曰。群卿百僚。以<sub>レ</sub>禮爲<sub>レ</sub>本。其治民之本。要在<sub>三</sub>于<sub>一</sub>一作乎禮。上不<sub>レ</sub>禮而下不<sub>レ</sub>齊。下无<sub>レ</sub>禮以必有<sub>レ</sub>罪。是<sub>一</sub>有<sub>三</sub>以字<sub>一</sub>君臣有<sub>レ</sub>禮。位次不<sub>レ</sub>亂。百姓有<sub>レ</sub>禮。國家自治。

五曰。絕<sub>レ</sub>餽棄<sub>レ</sub>欲。明辨<sub>三</sub>訴訟<sub>一</sub>。其百姓之訟。一日千事。一日尙爾。況乎累歲。湏<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>訟者。得<sub>レ</sub>利爲<sub>レ</sub>常。見<sub>レ</sub>賄聽<sub>レ</sub>讞。便有<sub>レ</sub>財<sub>一</sub>一有者字之訟。如<sub>三</sub>石投<sub>レ</sub>水<sub>一</sub>。乏者之訴。似<sub>三</sub>水投<sub>レ</sub>石<sub>一</sub>。是以貧民。則不<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>所由<sub>一</sub>。臣道亦於<sub>レ</sub>焉闕。

六曰。懲<sub>レ</sub>惡勸<sub>レ</sub>善。古之良典。是以无<sub>レ</sub>匿<sub>三</sub>人善<sub>一</sub>。見<sub>レ</sub>惡必匡。其誚詐者則爲<sub>下</sub>覆<sub>二</sub>國家<sub>一</sub>之利器。上爲<sub>下</sub>絕<sub>二</sub>人民<sub>一</sub>之鋒刃。亦佞媚者。對<sub>レ</sub>上則好說<sub>二</sub>下過<sub>一</sub>。逢<sub>レ</sub>下則誹<sub>二</sub>謗上<sub>一</sub>失。其如此人。皆无<sub>レ</sub>忠<sub>二</sub>

於君。无<sub>レ</sub>仁<sub>二</sub>於民<sub>一</sub>。是大亂之本也。

七曰。人各有<sub>二</sub>任掌<sub>一</sub>。宜<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>濫。其賢哲任<sub>レ</sub>官。頌音則起。姦者在<sub>レ</sub>官。禍亂則繁。世少<sub>二</sub>生知<sub>一</sub>。尅

一作念作聖。事无<sub>二</sub>大小<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>人必治。时无<sub>二</sub>急

緩。遇<sub>レ</sub>賢自寬。因<sub>レ</sub>此國家永久。社稷勿<sub>レ</sub>危。故

古聖王。爲<sub>レ</sub>官以求<sub>レ</sub>人。爲<sub>レ</sub>人不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>官。

八曰。群卿百僚。早朝晏退。王事靡<sub>レ</sub>盬。終日難

盡。是以遲朝不<sub>レ</sub>逮<sub>二</sub>于急<sub>一</sub>。早退必事不<sub>レ</sub>盡。

九曰。信是義本。每<sub>レ</sub>事有<sub>レ</sub>信。其善惡成敗。要

在<sub>二</sub>于信<sub>一</sub>。群一作臣。共一作信。何事不成。群臣字。無<sub>レ</sub>信。万事悉

敗。

十曰。絕<sub>レ</sub>忿棄<sub>レ</sub>瞋。不<sub>レ</sub>怒<sub>二</sub>人違<sub>一</sub>。人皆有<sub>レ</sub>心。心

各有<sub>レ</sub>執。彼是則我非。我是則彼非。我必非<sub>レ</sub>聖。

彼必非<sub>レ</sub>愚。共是凡夫耳。是非之理。誰<sub>レ</sub>能可

定。相共賢愚。如<sub>二</sub>環无<sub>レ</sub>端<sub>一</sub>。是以彼人雖<sub>レ</sub>瞋。還

恐<sub>二</sub>我失<sub>一</sub>。我獨雖<sub>レ</sub>得。從<sub>レ</sub>衆同舉。

十一曰。明<sub>二</sub>察功過<sub>一</sub>。賞罰必當。日者賞不<sub>レ</sub>在

功。罰不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>罪。執<sub>レ</sub>事群卿。宜<sub>レ</sub>明<sub>二</sub>賞罰<sub>一</sub>。

十二曰。國司國造。勿<sub>レ</sub>歛<sub>二</sub>百姓<sub>一</sub>。國靡<sub>二</sub>二君<sub>一</sub>。民

无<sub>二</sub>兩主<sub>一</sub>。率土兆民。以<sub>レ</sub>王爲<sub>レ</sub>主。所任官司。皆

是王家<sub>一</sub>。家字臣。何敢與<sub>レ</sub>公賦<sub>二</sub>歛<sub>二</sub>百姓<sub>一</sub>。

十三曰。諸任官者。同知<sub>二</sub>職掌<sub>一</sub>。或病或使。有<sub>レ</sub>闕

於事。然得<sub>レ</sub>知之日。和如<sub>二</sub>曾識<sub>一</sub>。其以<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>與聞<sub>一</sub>。

勿<sub>レ</sub>妨<sub>二</sub>公務<sub>一</sub>。

十四曰。群卿<sub>一</sub>。臣百僚。无<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>嫉妬<sub>一</sub>。我既嫉<sub>レ</sub>人。

人亦嫉<sub>レ</sub>我。嫉妬之患。不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其極<sub>一</sub>。所以智勝<sub>二</sub>

於己<sub>一</sub>。則不<sub>レ</sub>悅。才優<sub>二</sub>於己<sub>一</sub>。則嫉妬。是以五百歲

之後。乃今遇<sub>レ</sub>賢。千載以難<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>一聖<sub>一</sub>。其不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>

賢聖。何以治<sub>レ</sub>國。

十五曰。背<sub>レ</sub>私向<sub>レ</sub>公。是臣之道矣。凡<sub>一</sub>。夫字人有<sub>レ</sub>

私必有<sub>レ</sub>恨。有<sub>レ</sub>恨必非<sub>レ</sub>固。一作同非<sub>レ</sub>固<sub>一</sub>。則以

私妨<sub>レ</sub>公。恨起則違<sub>レ</sub>制害<sub>レ</sub>法。故初章云。上和

下睦。一作上其亦是情歟。下和睦

十六曰。使<sub>レ</sub>民以<sub>レ</sub>時。古之良典。故冬月有<sub>レ</sub>間。



以可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>民。從<sub>レ</sub>春至<sub>レ</sub>秋。農桑之節。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>民。其不<sub>レ</sub>農何食。不<sub>レ</sub>桑何服。

十七曰。大事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>獨斷。必與<sub>レ</sub>衆宜論。小事是輕。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>必與<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>大事<sub>一</sub>。若疑<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>失。故與<sub>レ</sub>衆相辨。辭則得<sub>レ</sub>理矣。<sub>一</sub>无<sub>二</sub>矣字<sub>一</sub>

右十七箇條憲法以屋代弘賢藏本及日本書紀太子傳曆拾芥抄所載校合各有異同今從是者爲定本

建曆二年三月廿二日

宣旨左大臣  
右大臣  
弁

一可<sub>三</sub>如法勤<sub>二</sub>行諸社祭祀神事等<sub>一</sub>事。

抑吾朝<sub>レ</sub>彝範。爲<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>敬<sub>レ</sub>神。万機繁務。無<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>愼<sub>レ</sub>祭。是以治<sub>レ</sub>邦安<sub>レ</sub>民。恐<sub>レ</sub>湖<sub>レ</sub>幽冥。恒例臨時宜<sub>レ</sub>儼<sub>二</sub>禮儀<sub>一</sub>。而有<sub>レ</sub>司怠慢而不<sub>レ</sub>調<sub>二</sub>職掌<sub>一</sub>。諸國<sub>レ</sub>捍<sub>レ</sub>而如<sub>レ</sub>忘<sub>二</sub>本條<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>只乖忤<sub>一</sub>。且是狎<sub>二</sub>黷神禁<sub>一</sub>。事<sub>レ</sub>之陵夷。責而有<sub>レ</sub>餘。早守<sub>二</sub>祭式<sub>一</sub>。宜<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>催行<sub>一</sub>。就<sub>二</sub>祈年祭<sub>一</sub>已下四度祭。幣物案下雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>勅。上<sub>レ</sub>設之備。諸國<sub>レ</sub>諸社。如<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>奉送之實<sub>一</sub>。任<sub>二</sub>建久二年符旨<sub>一</sub>。假令遵行。兼<sub>レ</sub>又祈年穀以下伊勢幣率分<sub>二</sub>所納物<sub>一</sub>。國或近年季充猶致<sub>二</sub>所混<sub>一</sub>。或當日刻限<sub>二</sub>纔<sub>レ</sub>進<sub>一</sub>。然則儀式空入<sub>二</sub>夜景<sub>一</sub>。奉遣殆及<sub>二</sub>曉更<sub>一</sub>。自今以後專存<sub>二</sub>謹慎<sub>一</sub>。永勿<sub>二</sub>懈緩<sub>一</sub>。

一可<sub>三</sub>如法勤<sub>二</sub>行恒例臨時佛事等<sub>一</sub>事。

抑禳<sub>レ</sub>災招<sub>レ</sub>福。偏仰<sub>二</sub>佛陀<sub>一</sub>。顯教密法宜<sub>レ</sub>抽<sub>二</sub>精勤<sub>一</sub>。就中八省御齊會。眞言太元兩法者。講肆之

積ニ薰修一也。春花久傳。密壇之專ニ請祈一也。夜月無傾。既爲ニ三春肇初之御願一。豈非ニ一歲安寧之上計一乎。而頃年一會兩法。施供尙易レ闕。恒例臨時。排備殆如レ廢。是則所司擁滯。宰吏難濟之所。慥守ニ先符一。宜レ令ニ勤行一。

一可レ令ニ有封社司修ニ造本社一事。

一可レ令ニ諸寺執務人修ニ造本寺一事。

抑已上修造之勤。格條炳焉。而社司寺司等徒

貪ニ社（符殿）頌寺領之利潤一。不レ顧ニ本社本寺之破壞一。

然間（符殿）竄ニ叢祠籬荒一而秋露空滴。蘭若檐頽兮春雨

不レ留。須隨ニ小破一且加ニ修理一。而及ニ大損一。始

經ニ奏聞一。頻申ニ請別功一。剩爲ニ已忠一。僞稱レ致ニ造

畢。偏忘ニ公平一。論ニ之政途一。殆指（疑指）科條。慥

令ニ彼司等致ニ連連脩造一。若背ニ符旨一。尙有ニ懈

怠者。解レ却見任。撰レ人改補。兼又有ニ殊功一。宜

加ニ褒賞一。但其領不レ幾。其勤難レ及者。注ニ損

色ニ經ニ言上一。課ニ別功一。令ニ造營一。

一可レ停ニ止京畿諸國建立諸社末社別功一事。

抑近曾愚拙之徒。恣立ニ仁祠於帝都之際一。知行

之輩。屢祝ニ末社於神領之中一。雖（似）敬神之有

餘。還涉ニ費祭之不信一。加之就ニ別宮末社之加

增。致ニ都鄙田地之掠領一。敗レ法亂レ紀莫レ甚ニ於

斯。自今以後永加ニ禁遏一。若猶不レ怕ニ嚴制一。縱雖

令ニ企ニ奉鎮一。慥從ニ停廢之儀一。勿レ致ニ如在之

禮。乖ニ違皇憲一者。其奈ニ神鑒一何。於ニ違犯輩一

任ニ法斷定一。

一可レ停ニ止諸國吏寄ニ進國領於神社佛寺一事。

抑如レ聞。諸國吏或稱ニ身祈一。或得ニ人語一。恣以ニ

國領公田一。寄ニ進神社佛寺一。非ニ又當時奉寄之

志。剩載ニ永代免許之字一。新司欲レ停レ之。則本所

頻爲ニ結ニ愁緒一之源。當任欲レ充レ之。亦後代定

不レ殘ニ立錐之地一歟。吏途之法條良失レ術。聖

斷之處裁封有レ煩。謂ニ其不治一職而斯由。於ニ不

帶勅免之地一者。宜レ令ニ國領一。兼又自今以後永

從<sub>レ</sub>停止。莫<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>更然<sub>一</sub>。

一可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止伊勢太神宮以下諸社司進奏狀上猶企<sub>レ</sub>濫事<sub>一</sub>。

抑諸社有<sub>レ</sub>訴之時。勒<sub>レ</sub>狀付<sub>レ</sub>官。官以<sub>二</sub>頭藏人奏聞。尋<sub>二</sub>理非<sub>一</sub>成敗。隨<sub>二</sub>狀跡<sub>一</sub>裁斷。是則聖代之勝躅。明時之軌範也。而近年外者任<sub>レ</sub>例雖<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>上達<sub>一</sub>。內者就<sub>レ</sub>緣猶企<sub>レ</sub>濫奏。已不<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>次第之裁定<sub>一</sub>。偏伺<sub>二</sub>諸人之形勢<sub>一</sub>。已求<sub>二</sub>媚於奧<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>裁於理<sub>一</sub>。神者不<sub>レ</sub>稟<sub>二</sub>非禮<sub>一</sub>。定乖<sub>二</sub>違于冥慮<sub>一</sub>者歟。就中理訴者。就<sub>レ</sub>理被<sub>二</sub>決斷<sub>一</sub>。執奏人稱<sub>レ</sub>之。我者非據者。依<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>無<sub>一</sub>裁報。上達輩殆猜<sub>二</sub>聖斷<sub>一</sub>。政道之濫吹。何事之加<sub>レ</sub>旃。自今以後慥從<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>。若不<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>嚴禁<sub>一</sub>。宜<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>處<sub>一</sub>重科。

一可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>所部官司停<sub>二</sub>止諸社神人諸寺惡僧濫行<sub>一</sub>事<sub>一</sub>。

抑神人者齋敬爲<sub>レ</sub>本。僧徒者修學爲<sub>レ</sub>先。而頃年猛惡之民稱<sub>二</sub>神人<sub>一</sub>盈<sub>レ</sub>城。愚癡之侶號<sub>二</sub>寺僧<sub>一</sub>濫

郭。不<sub>レ</sub>顧<sub>二</sub>神眷<sub>一</sub>。偏致<sub>二</sub>梟惡<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>憚<sub>二</sub>佛意<sub>一</sub>。剩事<sub>二</sub>狼喚<sub>一</sub>。濫行之至責而有<sub>レ</sub>餘。自今以後慥可<sub>二</sub>禁遏<sub>一</sub>。若不<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>嚴制<sub>一</sub>者。任<sub>レ</sub>法令<sub>二</sub>糾斷<sub>一</sub>。

一可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止賀茂祭使齊王禊供奉人簗車及從類裝束過差<sub>一</sub>事<sub>一</sub>。

簗車。金銀珠鏡錦繡薄等可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止之<sub>一</sub>。欝近衛官人已下衣服。

金銀珠鏡錦繡綾羅織物銅薄狩襖擣裡可<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>擣衣<sub>一</sub>者不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>制限<sub>一</sub>。

馬副手振。

擣衣伏組縞等可<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>。

小舍人童。

同<sub>二</sub>醺制<sub>一</sub>。

雜色舍人牛飼。

同上。但擣衣一切停<sub>二</sub>止之<sub>一</sub>。

抑簗車風流僮僕衣裳。空費<sub>二</sub>十家之產<sub>一</sub>。偏擅<sub>二</sub>日之美<sub>一</sub>。禁<sub>レ</sub>奢之法豈以可<sub>レ</sub>然乎。慥守<sub>二</sub>符旨<sub>一</sub>。永

令<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>。

一可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止同使等備近衛官人祿法過差<sub>一</sub>事。

抑治承宣下之後。建久折中之法。粗雖<sub>レ</sub>似

行。動人有<sub>二</sub>過差。慥守<sub>二</sub>彼法。莫<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>違越<sub>一</sub>。

一可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止五節出火桶櫛棚金銀錦繡風流<sub>一</sub>事。

抑偏以<sub>二</sub>金銀錦繡。恣爲<sub>二</sub>櫛棚裝飭。近年之間。遂

日過差。國家煩費莫<sub>レ</sub>不由<sub>レ</sub>斯。自今以後專

守<sub>二</sub>制法。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>違犯<sub>一</sub>。兼亦於<sub>レ</sub>銅者雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>制

限。尙隨<sub>二</sub>費用之多少。宜<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>禁制之弛張<sub>一</sub>。

一可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止京畿諸社祭供奉人裝束已下過差<sub>一</sub>

事。

抑邊鄙之民。下愚之輩。或裁<sub>二</sub>綾羅錦繡。或飭<sub>二</sub>

金珠玉。雖<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>神事之嚴重。偏爲<sub>二</sub>國家之煩

費。永從<sub>二</sub>禁制。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>違濫<sub>一</sub>。

一可<sub>レ</sub>糾<sub>二</sub>定繙素上下諸人服飾過差<sub>一</sub>事。

下<sub>二</sub>裾寸法<sub>一</sub>。

大臣一丈。

大納言九尺。

中納言八尺。

參

議。散三位七尺。四位已下六尺。

此外檢非違使別當已下。自<sub>レ</sub>元短裾官職

非<sub>二</sub>此限<sub>一</sub>。

御員數。

殿上六位已上貳領。地下四位已下壹領。

諸院殿上在<sub>二</sub>此內<sub>一</sub>。但檢非違使者。一斤染

之時。重<sub>二</sub>用白衣。不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>制限<sub>一</sub>。

織物狩衣。侍臣已下不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>之。但禁色之人

非<sub>二</sub>制限。三重已上小袖。不<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>男女。不<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>上

下。不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>着用<sub>一</sub>。

紅紫二色褂。除<sub>二</sub>殿上男女<sub>一</sub>之外可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止<sub>一</sub>。但

一院殿上人。同女房母后。妻后女房等不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>制

限。又六府判官已下同舍人着<sub>二</sub>褐衣<sub>一</sub>之時。擣衣

之單等聽<sub>二</sub>着用<sub>一</sub>。

王臣家雜仕裝束。惟止<sub>二</sub>絹類。宜<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>布。懸閑紙

停<sub>二</sub>止<sub>一</sub>之。同裳不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>綾。兼又綿以<sub>二</sub>冊兩<sub>一</sub>

入<sub>二</sub>三領<sub>一</sub>。



地下四位已下。不可着綾單。

僧侶袈裟。最上緒織絹等可停止之。同草鞋不可押錦。

使廳放囚不可着繩類。兼亦可停止金銀錦繡風流。

與外金物可停止之。但公卿妻室非制限。

車內金物要須所之外。不論貴賤可停止。僧侶之中。法印乘用外。金物車同可停止之。以金銀打含劍。不論上下一切停止之。縱雖

銅令摸銀之。已以混亂。同可停止之。蝙蝠扇金銀薄并畫圖等。爲先龜品。勿華美。

凡新調裝束。強不可好楚楚。

抑服飾之制。綸紵重疊而驪鮮屢移。風衛如忘。

俗人不量涯分。貴賤競好風流。國之凋弊職而由之。各守式法。慥停過差。

一可糾定縹素男女從類員數事。

王臣家雜仕不可令服仕二人。

騎馬供奉日。公卿已下尤得具當色舍人二人。

僧正。

從僧四口。中童子二人。大童子六人。

法務。興福寺別當。延曆寺座主准之。

僧都。

從僧二人。中童子一人。大童子四人。

法印准之。

律師。

從僧二口。中童子一人。大童子二人。

法眼。法橋等准之。

凡僧。

從僧一口。中童子一人。大童子二人。

抑人心專好驕逸。僧徒猶有奢侈。然問忘代制符。調面面威儀。有法不行。不如無法。嚴加制禁。勿令違亂。

一可停止諸司諸衛官人乘車并同從騎馬事。

抑自身駕流水。郎從鞭浮雲。軒騎相競奢侈云呈。嚴制屢雖降積習猶生常歟。慥加督察。宜守符旨。但於檢非違使乘車者。不在制限。

一可禁斷六齋日煞生事。

抑漁獵之制前後懇勸。就中明主施仁好生爲本。加之禁戒者則爲十重之初禁。又可禁制。

制法者已許六齋之外。制何不制。下知京畿諸國。每月件日日永禁斷煞生。若尙違犯者。慥

仰所部官司宜令科決。但於伊勢太神宮賀茂社已下神社有例供祭者。不在制限。

一可停止僧侶兵仗事。

抑近來僧侶之行。放逸爲先。加之觀念是暗。心隔四禪之夜月。印契如忘。手提三尺之秋霜。破戒之罪責而有餘。滅法之因職而由斯。洛中洛外諸寺諸山。慥加嚴戒。任法科斷。

一可停止私出舉利過一倍事。

抑出舉息利本條區分而事。建久以一倍之利

分爲永年之定數。以降雖似有施行之實。猶非无違犯之聞。固守彼符。會勿違越。一可下京中道橋京職加監臨。諸家當路致中洒掃事。

抑京職壅怠道橋頽危。諸家懈緩當路汗穢。非只忘洒掃之勤。剩有掘穿之企。慥守先符。宜令遵行。

一可停止閭里群飲妖的事。

抑羣飲射的之禁制者。累代如綸之所載也。已爲鬪亂之濫觴。宜闕文。

一可停止京中媒輩事。

抑比來天下有下女。京中稱中媒。其號大背法度。其企淺涉罪囚。和誘窺窹之好仇。配偶陋賤之足夫。或僞號英雄華族。或謀稱西施下蔡。偏蕩人情。只爲身要。紆罪已載本條。誑誕重科者歟。慥仰使廳。且實錄其宅。且糾彈其身。

藏人民部少輔藤原資賴奉

右建曆宣旨以村井古巖藏本書寫遂一按畢

其身。

一可停止私出舉利過一倍事。

抑出舉息利本條區分而事。建久以一倍之利

其身。

藏人民部少輔藤原資賴奉

右建曆宣旨以村井古巖藏本書寫遂一按畢

# 意見十二箇條

參議清行朝臣

臣某言。伏讀<sup>ニ</sup>去二月十五日<sup>ノ</sup>詔<sup>一</sup>。遍令<sup>下</sup>公卿大夫方伯牧宰進<sup>ニ</sup>讜議<sup>ヲ</sup>。盡<sup>ニ</sup>謨謀<sup>ヲ</sup>。改<sup>ニ</sup>百王之澆醜<sup>一</sup>。拯<sup>ニ</sup>萬民之塗炭<sup>一</sup>。雖<sup>下</sup>陶唐之置<sup>ニ</sup>諫鼓<sup>ヲ</sup>。隆周之制<sup>ニ</sup>官箴<sup>一</sup>。德政之美<sup>上</sup>。不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>過<sup>之</sup>。臣某誠惶誠恐。頓首死罪。臣伏案<sup>ニ</sup>舊記<sup>一</sup>。我朝家神明傳<sup>レ</sup>統。天險開<sup>レ</sup>疆。土壤膏腴。人民庶富。故東平<sup>ニ</sup>肅慎<sup>一</sup>。北降<sup>ニ</sup>高麗<sup>一</sup>。西虜<sup>ニ</sup>新羅<sup>一</sup>。南臣<sup>ニ</sup>吳會<sup>一</sup>。三韓入朝。百濟內屬。大唐使驛於<sup>レ</sup>焉。納<sup>レ</sup>賄。天竺沙門爲<sup>レ</sup>之歸化。其所<sup>ニ</sup>以爾<sup>一</sup>者何也。國俗敦龐。民風忠厚。輕<sup>ニ</sup>賦稅之科<sup>一</sup>。疎<sup>ニ</sup>徵發之役<sup>一</sup>。上垂<sup>レ</sup>仁而牧<sup>レ</sup>下。下盡<sup>レ</sup>誠以戴<sup>レ</sup>上。一國之政猶如<sup>ニ</sup>一身之治<sup>一</sup>。故范史謂<sup>ニ</sup>之君子之國<sup>一</sup>。唐帝推<sup>ニ</sup>其倭皇之尊<sup>一</sup>。自後風化漸薄。法令滋彰。賦歛年增。徭役代倍。戶口月減。田畝日荒。既而欽明天皇之代。佛法初傳。本朝

推<sup>ニ</sup>古天皇以後<sup>一</sup>。此教盛行。上自<sup>ニ</sup>群公卿士<sup>一</sup>。下至<sup>ニ</sup>諸國黎民<sup>一</sup>。無<sup>レ</sup>建<sup>ニ</sup>寺塔<sup>一</sup>者。不<sup>レ</sup>列<sup>ニ</sup>人數<sup>一</sup>。故傾<sup>ニ</sup>盡資產<sup>一</sup>。興<sup>ニ</sup>造浮圖<sup>一</sup>。競捨<sup>ニ</sup>田園<sup>一</sup>。以爲<sup>ニ</sup>佛地<sup>一</sup>。多買<sup>ニ</sup>良人<sup>一</sup>。以爲<sup>ニ</sup>寺奴<sup>一</sup>。降及<sup>ニ</sup>天平<sup>一</sup>。彌以尊重。遂傾<sup>ニ</sup>田園<sup>一</sup>。多建<sup>ニ</sup>大寺<sup>一</sup>。其堂宇之崇。佛像之大。工巧之妙。莊嚴之奇。有<sup>レ</sup>如<sup>ニ</sup>鬼神<sup>一</sup>之製。似<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>人力<sup>一</sup>之爲。又令<sup>ニ</sup>七道諸國<sup>一</sup>建<sup>ニ</sup>國分二寺<sup>一</sup>。造作之費各用<sup>ニ</sup>其國正稅<sup>一</sup>。於是天下之費十分而五。至<sup>ニ</sup>于桓武天皇<sup>一</sup>。遷<sup>ニ</sup>都長岡<sup>一</sup>。製作既畢。更營<sup>ニ</sup>上都<sup>一</sup>。再造<sup>ニ</sup>大極殿<sup>一</sup>。新構<sup>ニ</sup>豐樂院<sup>一</sup>。又其宮殿樓閣。百官曹廳。親王公主之第宅。后妃嬪御之宮館。皆究<sup>ニ</sup>土木之巧<sup>一</sup>。盡賦<sup>ニ</sup>調庸之用<sup>一</sup>。於是天下之費五分之一。仁明天皇即位。尤好<sup>ニ</sup>奢靡<sup>一</sup>。雕文刻鏤。錦繡綺組。傷<sup>ニ</sup>農事<sup>一</sup>。害<sup>ニ</sup>女功<sup>一</sup>者。朝製夕改。日變月換。後房內寢之飭。飲宴調樂之儲。麗靡煥爛。冠<sup>ニ</sup>絕古今<sup>一</sup>。府帑由<sup>レ</sup>是空虛。賦歛爲<sup>レ</sup>之

滋起。於是天下之費二分而一。貞觀年中。  
 應天門及大極殿頻有災火。儻依<sub>テ</sub>太政大臣  
 昭宣公匪躬之誠具瞻之力。庶民子來<sub>如</sub>。萬邦  
 麇至。修<sub>ニ</sub>復<sub>シ</sub>此字。并年而成。然而天下費亦  
 失<sub>ニ</sub>一分之半。然則當<sub>ニ</sub>今之時。會非<sub>ニ</sub>往世十  
 分之一也。臣去寬平五年任<sub>ニ</sub>備中介。彼國  
 下道郡有<sub>ニ</sub>邇磨鄉。爰見<sub>ニ</sub>彼國風土記。皇極  
 天皇六年。大唐將軍蘇定方率<sub>ニ</sub>新羅軍。伐<sub>ニ</sub>百  
 濟。百濟遣<sub>ニ</sub>使乞<sub>レ</sub>救。天皇行<sub>ニ</sub>幸筑紫。將<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>  
 救兵。時天智天皇爲<sub>ニ</sub>皇太子。攝<sub>レ</sub>政。從<sub>ニ</sub>行  
 路宿<sub>ニ</sub>下道郡。見<sub>ニ</sub>一鄉。戶邑甚盛。天皇下  
 詔試徵<sub>ニ</sub>此鄉軍士。即得<sub>ニ</sub>勝兵二萬人。天皇  
 大悅。名<sub>ニ</sub>此邑曰<sub>ニ</sub>二萬鄉。後改曰<sub>ニ</sub>邇磨。其  
 後天皇崩。於筑紫行宮。終不<sub>レ</sub>遣<sub>ニ</sub>此軍。然則  
 二萬兵士彌可<sub>ニ</sub>蕃息。而天平神護年中。右大  
 臣吉備朝臣以<sub>ニ</sub>大臣<sub>ナルヲ</sub>兼<sub>ニ</sub>本郡大領。試計<sub>ニ</sub>此

鄉戶口。纔<sub>ニ</sub>課丁千九百餘人。貞觀初。故  
 民部卿藤原保則朝臣爲<sub>ニ</sub>彼國介。時見<sub>ニ</sub>舊  
 記。此鄉有<sub>ニ</sub>二萬兵士之文。計<sub>ニ</sub>大帳之次。  
 閱<sub>ニ</sub>其課丁有<sub>ニ</sub>七十餘人。某到<sub>レ</sub>任。又閱<sub>ニ</sub>此鄉  
 戶口。有<sub>ニ</sub>老丁二人正丁四人中男三人。去延  
 喜十一年。彼國介藤原公利任滿歸都。清行  
 問<sub>ニ</sub>邇磨鄉戶口。當今幾行。公利答曰。無<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>  
 一人。謹計<sub>ニ</sub>年紀。自<sub>ニ</sub>皇極天皇六年庚申。至<sub>ニ</sub>  
 延喜十一年辛未。纔<sub>ニ</sub>二百五十<sub>ニ</sub>年。衰弊之速。  
 亦既<sub>レ</sub>如此。以<sub>ニ</sub>一鄉而推<sub>レ</sub>之。天下虛耗。所  
 掌可<sub>レ</sub>知。方今陛下鍾<sub>ニ</sub>千年之期運。照<sub>ニ</sub>萬<sub>ニ</sub>  
 興衰。降<sub>ニ</sub>惻隱於衆庶。施<sub>ニ</sub>惠愛於四方。宵起  
 旰食。夜念朝行。遍頒<sub>ニ</sub>綸綍。廣訪<sub>ニ</sub>藹藹。昔者  
 虞舜之居。三年成<sub>レ</sub>都。仲尼之政。并月自理。  
 然則民之繁孳。不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>五代之後。國之興復  
 應<sub>レ</sub>期<sub>ニ</sub>浹口之間。不<sub>レ</sub>任<sub>ニ</sub>扑躍。敢陳<sub>ニ</sub>狂愚。  
 猶如下管中見<sub>レ</sub>豹。纔知<sub>ニ</sub>一斑。井底望<sub>ニ</sub>天。不上



レ過ニ數尺ニ謹錄如左。伏待ニ天裁。

一應下消ニ水旱ニ求ニ豐穰上事。

右臣伏以國ハ民爲レ天。民以食爲レ天。無レ民  
何據。無レ食何資。然則安レ民之道。足レ食之要。  
唯在ニ水旱無レ殄年穀有レ登也。故朝家每年。二  
月四日。六月十一日。十二月十一日。於ニ神祇  
官立ニ祈年月次之祭。嚴加ニ齊肅。遍禱ニ神祇。  
乞ニ其豐熟。致ニ其報賽。其儀。公卿率ニ辨官及百  
官參ニ神祇官。神祇官每レ社。設ニ幣帛一裘。清  
酒一瓮。鐵鉞一枚。陳ニ列棚上。又社或有ニ奉レ馬  
者焉。祈年祭一匹。月次祭二匹。亦皆左右馬寮牽ニ列神馬。爰  
神祇官讀ニ祭文。畢以ニ件祭物。頒ニ諸社祝部。  
奉ニ本社。祝部須潔齊捧持各以奉進。而皆於ニ  
上卿前。卽以ニ幣絹一挿著懷中。拔ニ棄鉞柄。唯  
取ニ其鋒。傾ニ其瓮酒。一舉飲盡。曾無下一人全  
持ニ出神祇官之門者。況其神馬。則市人於ニ郁  
芳門外。皆買取而去。然則所祭之神。豈有ニ歆

饗一乎。若不ニ歆饗者。何求ニ豐穰。伏望。中  
勅ニ諸國。差ニ史生以上一人。率ニ祝部。令レ受ニ取  
此祭物。慥致ニ本社。以存ニ如在之禮。又朝家每  
年正月。始レ自ニ大極殿前。至ニ于七道諸國。修ニ  
吉祥悔過。又聖代每年修ニ仁王會。遍爲ニ百姓。  
祈禱豐年。消ニ伏疾疫。由レ是人天慶賴。兆庶  
歡娛。然猶所ニ以水旱不レ休灾殄屢發者何也。  
僧徒修レ之者多非ニ其人。也。臣窺ニ漢國之史  
籍。閱ニ本朝之文記。凡厥禪徒未ニ必皆修學俱  
備。禪智兼高者也。然而或固守ニ律儀。至レ死不  
犯。或偏行ニ菩薩。忘レ身利。佗。故帝皇之誠  
依ニ禪僧。而易レ感。禪僧之念與ニ如來。而必通。  
而今上自ニ僧綱。下至ニ諸寺。次第請僧。及法用  
小僧沙彌等。持戒者少違律者多。如レ此薰修  
者。三尊豈可ニ感應一乎。感應之來非ニ敢所望。  
妖咎之至還亦可レ懼。伏望。衆僧濫行有聞者。  
一切不レ預ニ請用。又諸國司等。公務怠忙。事多

不<sub>レ</sub>違。故國中法務。皆委<sub>ニ</sub>附講讀師<sub>一</sub>。而講讀師多非<sub>ニ</sub>持律之人<sub>一</sub>。或有<sub>ニ</sub>贖勞之輩<sub>一</sub>。況其國分僧少人皆是無慚之徒也。蓄<sub>ニ</sub>妻子<sub>一</sub>營<sub>ニ</sub>室家<sub>一</sub>。力<sub>ニ</sub>耕田<sub>一</sub>。行<sub>ニ</sub>商賈<sub>一</sub>。而今國司依<sub>レ</sub>例令<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>祈念<sub>一</sub>。望<sub>ニ</sub>其感應<sub>一</sub>。譬猶<sub>ニ</sub>緣<sub>一</sub>木求<sub>ニ</sub>魚向<sub>一</sub>窺探<sub>ニ</sub>花也<sub>一</sub>。重望<sub>ニ</sub>諸國講讀師<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>階業<sub>一</sub>。非<sub>ニ</sub>精進練行者<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>擬補<sub>一</sub>。又國分僧若有<sub>ニ</sub>濫穢<sub>一</sub>。而講讀師不<sub>レ</sub>糾者。解<sub>ニ</sub>却講讀師<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>此則聖主之祈感速<sub>ニ</sub>影響<sub>一</sub>。公田之稅蓄如<sub>ニ</sub>京坻<sub>一</sub>。十旬之雨隨<sub>レ</sub>節。千霜之詠滿<sub>レ</sub>衢。

### 一請<sub>レ</sub>禁<sub>ニ</sub>奢侈<sub>一</sub>事。

右臣伏以。先聖明王之御<sub>レ</sub>世也。崇<sub>ニ</sub>節儉<sub>一</sub>。禁<sub>ニ</sub>奢<sub>一</sub>。盈<sub>ニ</sub>服<sub>一</sub>。澣濯之衣。嘗<sub>ニ</sub>蔬糲之食<sub>一</sub>。此則往古之所<sub>ニ</sub>稱美<sub>一</sub>。明時之所<sub>ニ</sub>規模<sub>一</sub>也。而今澆風漸扇。王化不<sub>レ</sub>行。百官庶僚。嬪御媵妾。及權貴子弟。京洛浮食之輩。衣服飲食之奢。賓客饗宴之費。日以侈靡。無<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>紀極<sub>一</sub>。今略舉<sub>ニ</sub>一端<sub>一</sub>。稍陳<sub>ニ</sub>事實<sub>一</sub>。臣

伏見<sub>ニ</sub>貞觀元慶之代<sub>一</sub>。親王公卿皆以<sub>ニ</sub>生筑紫絹<sub>一</sub>。爲<sub>ニ</sub>夏汗衫<sub>一</sub>。曝<sub>ニ</sub>絁爲<sub>一</sub>表袴。束<sub>ニ</sub>絁爲<sub>一</sub>鞵。染<sub>ニ</sub>絁爲<sub>一</sub>履裏。而今諸司史生皆以<sub>ニ</sub>白縑<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>汗衫<sub>一</sub>。白絹爲<sub>ニ</sub>表袴<sub>一</sub>。白綾爲<sub>ニ</sub>襪<sub>一</sub>。菟褐爲<sub>ニ</sub>履裏<sub>一</sub>。其婦女則下至<sub>ニ</sub>侍婢<sub>一</sub>。裳非<sub>ニ</sub>齊純<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>服<sub>ニ</sub>衣非<sub>一</sub>越綾。不<sub>レ</sub>裁<sub>ニ</sub>染<sub>一</sub>紅袖者費<sub>ニ</sub>其萬錢之價<sub>一</sub>。擣<sub>ニ</sub>練衣<sub>一</sub>者裂<sub>ニ</sub>於一砧之間<sub>一</sub>。自餘奢侈。不<sub>レ</sub>能<sub>ニ</sub>具陳<sub>一</sub>。昔者季路緇袍不<sub>レ</sub>耻。狐貉之麗服。原憲藜戶。猶蔑<sub>ニ</sub>駟蓋之榮暉<sub>一</sub>。此賢哲之高規。非<sub>ニ</sub>庸人之克念<sub>一</sub>。故見<sub>ニ</sub>其僭差<sub>一</sub>。則競相放効。觀<sub>ニ</sub>其儉約<sub>一</sub>。則遽以嘲嗤。富者誇<sub>ニ</sub>其逞<sub>一</sub>志。貧者耻<sub>ニ</sub>其不<sub>一</sub>及。於是製<sub>ニ</sub>一領之衣<sub>一</sub>。破<sub>ニ</sub>終身之產<sub>一</sub>。設<sub>ニ</sub>一朝之饌<sub>一</sub>。盡<sub>ニ</sub>數年之資<sub>一</sub>。田畝爲<sub>ニ</sub>之荒蕪<sub>一</sub>。盜徒由<sub>ニ</sub>是滋起<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>此不<sub>レ</sub>禁。恐損<sub>ニ</sub>聖化<sub>一</sub>。伏望<sub>ニ</sub>隨<sub>一</sub>人品列<sub>ニ</sub>定<sub>一</sub>衣服之製。命<sub>ニ</sub>檢非違使<sub>一</sub>糾<sub>ニ</sub>其事<sub>一</sub>。以張<sub>ニ</sub>格式<sub>一</sub>。而此法常自<sub>ニ</sub>上破<sub>一</sub>之。令<sub>ニ</sub>下效<sub>一</sub>之。重望<sub>ニ</sub>令<sub>一</sub>下檢非違使張<sub>ニ</sub>行此制<sub>一</sub>。又王臣以下。至<sub>ニ</sub>于庶人<sub>一</sub>。追福之

制。飭終之資。隨其階品。皆立三式法。而比年諸喪家。其七七口講筵。周忌法會。競傾家產。盛設齋供。一机之饌。堆過三方丈。一僧之儲。費累千金。或乞貸佗家。或斥賣居宅。孝子遂爲逃債之逋人。幼孤自成流充之餓殍。夫以蒙顧復撫育之愛者。誰無追遠報恩之志焉。然而修此功德。宜有程章。豈可必待子孫之破產。以期父祖之得果乎。況此修齊之家。更設中客之饗。獻酬交錯。宛如飫宴。初有制芻之悲。俄成酣醉之興。孔子食於有喪者之側。未嘗飽也。豈其如此乎。但郊畿之內。道場非一。故檢非違使不遑禁止。伏望申勅公卿大夫百官諸牧。各慎此僭濫。令天下庶民知其節制。又維摩寂勝堅義僧等。皆貧道修學之輩也。一鉢之外亦無他資。而比年令之盛儲。僧綱并聽衆之齊供。非唯積饌成山。猶亦旨酒如淮。已乖佛律。亦害聖化。伏

望申誠僧綱。早立此禁。伏以。上不率正。下自差忒。若卿相守佛法。僧統隨制。則源澄而流自清。表正而影必直。一請勅諸國隨見口數。授中口分田上事。右臣伏見諸國大帳所載百姓。大半以上。此無身者也。爰國司偏隨計帳。充給口分田。卽班給正稅。徵納調庸。於是有其身者。纔耕田。頗進租調。無其身者。戶口一人。私沾件田。曾不自耕。至于租稅調庸。遂無輪納之心。謹檢案內。公家所以班口分田者。爲下取調庸。舉中正稅也。而今已奸其田。終闕厥貢。牧宰空懷。無用田籍。豪富彌收。并兼之地利。非唯公損之深。亦成吏治之妨。今須令諸國實見口班給其口分田上。其遺田者。國司收爲公田。任以沾却。若納地子。以充無身之民調庸租稅也。猶所遺之稻。委納不動。今略計其應輸之數。三倍於百姓所進



之調庸<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>公<sup>ノ</sup>有<sup>レ</sup>利<sup>ニ</sup>。爲<sup>レ</sup>民<sup>ノ</sup>無<sup>レ</sup>煩<sup>ニ</sup>。此皆國宰守行<sup>テ</sup>。應<sup>ル</sup>無<sup>ル</sup>殊<sup>ナル</sup>妨<sup>デ</sup>。然而事乖<sup>ニ</sup>舊例<sup>ニ</sup>。恐<sup>ク</sup>有<sup>ニ</sup>民愁<sup>ノ</sup>。伏望<sup>セ</sup>申勅<sup>ニ</sup>諸國<sup>ニ</sup>。試令<sup>ニ</sup>施行<sup>セ</sup>。

一請<sup>レ</sup>加<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>大學生徒食料<sup>ノ</sup>事。

右臣伏<sup>以</sup>治<sup>ノ</sup>國之道賢能爲<sup>レ</sup>源<sup>ニ</sup>。得<sup>ル</sup>賢之方學校爲<sup>レ</sup>本<sup>ニ</sup>。是以古者明王。必設<sup>ニ</sup>庠序<sup>ノ</sup>以教<sup>ニ</sup>德義<sup>ノ</sup>。習<sup>ニ</sup>經藝<sup>ノ</sup>而叙<sup>ニ</sup>彝倫<sup>ノ</sup>。周禮卿大夫獻<sup>ニ</sup>賢能之書<sup>ノ</sup>于王<sup>ニ</sup>。王拜而受<sup>レ</sup>之。所以尊<sup>ニ</sup>道而貴<sup>ニ</sup>士也。伏見<sup>ニ</sup>古記<sup>ノ</sup>。朝家之立<sup>ニ</sup>大學<sup>ノ</sup>也。始<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>人寶年中<sup>ノ</sup>。至<sup>ニ</sup>于天平之代<sup>ノ</sup>。右大臣吉備朝臣恢弘<sup>ニ</sup>道藝<sup>ノ</sup>親自傳授<sup>ニ</sup>。即令<sup>ニ</sup>學生四百人<sup>ノ</sup>習<sup>ニ</sup>五經三史<sup>ノ</sup>。明法算術。音韻籀篆等六道<sup>ノ</sup>。其後代代下勅<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>罪人伴家持<sup>ノ</sup>。越前國加賀郡沒官田一百餘町。山城國久世郡公田卅餘町。河內國茨田澁川兩郡田五十五町<sup>ノ</sup>。以充<sup>ニ</sup>生徒食料<sup>ノ</sup>。號<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>勸學田<sup>ノ</sup>。亦每日給<sup>ニ</sup>大炊寮百度飯一石五斗<sup>ノ</sup>。人別<sup>ニ</sup>五升<sup>ノ</sup>。以補<sup>ニ</sup>照讀之疲<sup>ノ</sup>也。又有<sup>レ</sup>勅。令<sup>ニ</sup>常陸國每

年舉<sup>ニ</sup>稻九萬四千束<sup>ノ</sup>。以<sup>ニ</sup>其利稻<sup>ノ</sup>充<sup>ニ</sup>寮中雜用料<sup>ノ</sup>。又舉<sup>ニ</sup>丹後國稻八百束<sup>ノ</sup>。以<sup>ニ</sup>其利稻<sup>ノ</sup>充<sup>ニ</sup>學生口味料<sup>ノ</sup>。而年代漸久。事皆廢違。承和年中。作善男訴<sup>ニ</sup>家持無罪<sup>ノ</sup>。返<sup>シ</sup>給<sup>ニ</sup>加賀郡勸學田<sup>ノ</sup>。又有<sup>レ</sup>勅。分<sup>ニ</sup>山城國久世郡田卅町<sup>ノ</sup>爲<sup>ニ</sup>四分<sup>ノ</sup>。其三分給<sup>ニ</sup>典藥左右馬三寮<sup>ノ</sup>。纔留<sup>ニ</sup>其一分<sup>ノ</sup>充<sup>ニ</sup>學生料<sup>ノ</sup>。又河內國兩郡治田頻遭<sup>ニ</sup>洪水<sup>ノ</sup>。皆成<sup>ニ</sup>大河<sup>ノ</sup>。又常陸丹後兩國出舉稻依<sup>ニ</sup>度度交替<sup>ノ</sup>。欠<sup>ニ</sup>本稻<sup>ノ</sup>。皆失<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>利稻<sup>ノ</sup>。當今所<sup>ニ</sup>遺者<sup>ノ</sup>唯大炊寮飯料六斗。山城國久世郡遺田七町而已。以<sup>ニ</sup>此小儲<sup>ノ</sup>充<sup>ニ</sup>數百生徒<sup>ノ</sup>。雖<sup>レ</sup>作<sup>ニ</sup>薄粥<sup>ノ</sup>。猶亦不<sup>レ</sup>周。然而學生等。成立之望猶深。飢寒之苦自忘。各勤<sup>ニ</sup>鑽仰<sup>ノ</sup>。共住<sup>ニ</sup>學館<sup>ノ</sup>。於<sup>ニ</sup>是性有<sup>ニ</sup>利鈍<sup>ノ</sup>。才異<sup>ニ</sup>愚智<sup>ノ</sup>。或有<sup>レ</sup>捍格而難<sup>レ</sup>用者。或有<sup>ニ</sup>穎脫而出<sup>ノ</sup>囊者。通計而論<sup>ニ</sup>之。中才以上者。曾無<sup>ニ</sup>十分之三<sup>ノ</sup>四也。由<sup>ニ</sup>是才士者已超擢舉用<sup>ノ</sup>。不才者衰老空歸<sup>ノ</sup>。亦其舊鄉凋落無<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>歸託<sup>ノ</sup>者。頭戴<sup>ニ</sup>白雪之堆<sup>ノ</sup>。



飢臥ニ碧水之淡<sup>リニ</sup>。於<sup>レ</sup>是後進者徧見<sup>ニ</sup>此輩成<sup>ニ</sup>羣<sup>ニ</sup>即以爲<sup>ニ</sup>大學<sup>ニ</sup>是延邇坎墮之府。窮困凍餒之鄉<sup>ニ</sup>遂至<sup>ニ</sup>父母相誡<sup>ニ</sup>勿<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>子孫齒<sup>ニ</sup>學館<sup>ニ</sup>者也。由<sup>レ</sup>是南北講堂鞠爲<sup>ニ</sup>茂草<sup>ニ</sup>。東西曹局闕而無<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>。於是博士等每<sup>レ</sup>至<sup>ニ</sup>貢舉之時<sup>ニ</sup>唯以<sup>ニ</sup>歷名<sup>ニ</sup>薦<sup>ニ</sup>士<sup>ニ</sup>。曾不<sup>レ</sup>問<sup>ニ</sup>才之高下<sup>ニ</sup>。人之勞逸。請託由<sup>レ</sup>是間起。濫吹爲<sup>ニ</sup>之繁生<sup>ニ</sup>。潤<sup>ニ</sup>權門之餘睡<sup>ニ</sup>者。生<sup>ニ</sup>羽翼<sup>ニ</sup>而入<sup>ニ</sup>青雲<sup>ニ</sup>。蹈<sup>ニ</sup>闕里之遺蹤<sup>ニ</sup>者。詠<sup>ニ</sup>子衿<sup>ニ</sup>而辭<sup>ニ</sup>饗舍<sup>ニ</sup>。如<sup>レ</sup>此陵遲無<sup>ニ</sup>由<sup>ニ</sup>興復<sup>ニ</sup>。先王庠序遂成<sup>ニ</sup>丘墟<sup>ニ</sup>。臣伏以<sup>ニ</sup>萃<sup>ニ</sup>人之道<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>食爲<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>。望請<sup>ニ</sup>。常陸丹後兩國出舉<sup>ニ</sup>本願<sup>ニ</sup>九萬四千八百束之利稻。二萬八千四百冊束之代。遍以<sup>ニ</sup>諸國田租穀<sup>ニ</sup>充<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>。綠海國半分。坂東國半分。以充<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>學生等食<sup>ニ</sup>。又罪人伴善男所<sup>ニ</sup>返<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>加賀郡田重亦沒官<sup>ニ</sup>。令<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>穀倉院<sup>ニ</sup>充<sup>ニ</sup>造<sup>ニ</sup>道橋<sup>ニ</sup>料<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>重望<sup>ニ</sup>。依<sup>ニ</sup>舊返<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>伴田<sup>ニ</sup>以爲<sup>ニ</sup>勸學<sup>ニ</sup>田<sup>ニ</sup>。又式云。學生不<sup>レ</sup>住<sup>ニ</sup>寮家<sup>ニ</sup>者。不<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>薦舉<sup>ニ</sup>者。比年雖<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>此式<sup>ニ</sup>。不

能<sup>ニ</sup>施行<sup>ニ</sup>者。依<sup>ニ</sup>學生之無<sup>ニ</sup>食也<sup>ニ</sup>。今須<sup>ニ</sup>嚴勅<sup>ニ</sup>博士及寮頭等<sup>ニ</sup>。諸<sup>ニ</sup>學生雖<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>才藝<sup>ニ</sup>。不<sup>レ</sup>直<sup>ニ</sup>寮家<sup>ニ</sup>者。不<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>貢舉<sup>ニ</sup>。如<sup>レ</sup>此則挑兮之徒<sup>ニ</sup>歸<sup>ニ</sup>我國<sup>ニ</sup>。皇矣之士<sup>ニ</sup>列<sup>ニ</sup>彼周行<sup>ニ</sup>。

一請<sup>ニ</sup>減<sup>ニ</sup>五節妓員<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>。

右臣伏見<sup>ニ</sup>朝家五節舞妓<sup>ニ</sup>。大嘗會時五人。即皆預<sup>ニ</sup>叙位<sup>ニ</sup>。其後年年新嘗會<sup>ニ</sup>。四人。無<sup>ニ</sup>下預<sup>ニ</sup>叙位<sup>ニ</sup>之例<sup>ニ</sup>。由<sup>レ</sup>是至于大嘗會之時<sup>ニ</sup>。權貴之家競進<sup>ニ</sup>其女<sup>ニ</sup>以充<sup>ニ</sup>此妓<sup>ニ</sup>。尋常之年。人皆辭遁可<sup>レ</sup>闕<sup>ニ</sup>神事<sup>ニ</sup>。爰有<sup>ニ</sup>新制<sup>ニ</sup>。令<sup>ニ</sup>諸公卿及女御輪轉進<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>。其費甚多不<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>堪任<sup>ニ</sup>。伏案<sup>ニ</sup>故實<sup>ニ</sup>。弘仁承知二代尤好<sup>ニ</sup>內寵<sup>ニ</sup>。故逼令<sup>ニ</sup>諸家擇<sup>ニ</sup>進此妓<sup>ニ</sup>。即以爲<sup>ニ</sup>選納之便<sup>ニ</sup>也。諸家僥倖<sup>ニ</sup>倖天恩<sup>ニ</sup>。不<sup>レ</sup>顧<sup>ニ</sup>摩費<sup>ニ</sup>盡<sup>ニ</sup>財破產競以貢進<sup>ニ</sup>。方今聖朝修<sup>ニ</sup>其帷薄<sup>ニ</sup>。立<sup>ニ</sup>其防閑<sup>ニ</sup>。此等妓女舞了歸<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>。無<sup>ニ</sup>預<sup>ニ</sup>燕寢<sup>ニ</sup>。然則此妓數人遂有<sup>ニ</sup>何用<sup>ニ</sup>。重案<sup>ニ</sup>舊記<sup>ニ</sup>。昔者神女來舞。未必有<sup>ニ</sup>定數<sup>ニ</sup>四五人<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>伏望<sup>ニ</sup>。擇<sup>ニ</sup>良家女子未

嫁者二人。置爲五節妓。其時服月料稍令饒給。節日衣裝亦賜公物。若貞節不嫁。經二十箇年者。卽預女叙。聽令出嫁。若願留侍者。預之於藏人之列。卽擇置其替人。亦如前年。

一請依舊增置判事員一事。

右臣伏按。職員令。大判事二人。中判事二人。少判事二人。皆掌決斷人罪也。然而近古以來。大判事一員。常用律學之人。其外五人。未必任明法之輩焉。故去寬平四年有詔。省大判事一人。中判事二人。小判事一人。唯置大小判事各一人。然猶大判事獨用法家。小判事亦非其人。今按事意。此詔之旨。竊有疑惑。何者。聖主之政。刑法爲大。昔皋陶以大賢爲理官。帝舜猶誠云。欽哉欽哉。惟刑之恤。光武以明察詳刑獄。桓譚亦奏云。法吏愛增刑罰。然則疑獄之斷。古今所難。而

今總一萬民之生死。繫之於一人之唇吻。括五刑之輕重。決之獨見之讞書。已乖閱實之理。恐貽濫罰之科。近曾安藝守高橋良成之罪。大判事惟宗善經。處之遠流。以禦螭魅。奏下已畢。官符亦下。儻依刑部大錄粟田豐門之駁議。良成之身幸蒙赦免。朽骨再肉遊魂更歸。然則法律出入。難可取信。天下獬豸莫不危懼。伏望依舊置判事六人。皆擇下明通法律者補任之。使下之俱議科文。詳定條章。各隨其意。然後奏聞。如此則怨獄永絕。罪人自甘。不待扶南之鰐魚。豈用堯時之獬豸。

一請平均充給百官季祿一事。

右謹按。式條。二月廿二日。八月廿二日。於大藏省。可給三百官春夏秋冬季祿。而比年依官庫之乏。物不得遍賜。由是公卿及出納諸司。每年充給。自餘庶官則五六年內。難給一季料。伏按事意。上下分階。故祿之多少各異。

閑忙殊<sup>ニ</sup>務<sup>ヲ</sup>。故物之精麤<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>。至<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>頒賜<sup>ヲ</sup>。宜<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>差別<sup>ヲ</sup>。豈<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>俱勤<sup>ニ</sup>王事<sup>ヲ</sup>。別置<sup>ニ</sup>偏照<sup>ノ</sup>之官<sup>ヲ</sup>。同列周行<sup>ニ</sup>式<sup>ヲ</sup>。此<sup>ニ</sup>牒國<sup>ノ</sup>之俗<sup>ヲ</sup>乎。伏望<sup>ニ</sup>。若<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>給<sup>ニ</sup>三季祿<sup>ヲ</sup>者。先計<sup>ニ</sup>物多少<sup>ヲ</sup>。公卿百官<sup>ノ</sup>一日遍給<sup>ニ</sup>。一如<sup>ニ</sup>式文<sup>ヲ</sup>。若<sup>レ</sup>官庫無<sup>ニ</sup>物<sup>ヲ</sup>者。同亦不<sup>レ</sup>賜<sup>ニ</sup>。無<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>偏頗<sup>ヲ</sup>。如<sup>レ</sup>此則<sup>ニ</sup>鴈鵠<sup>ノ</sup>在<sup>ニ</sup>桑<sup>ヲ</sup>。均<sup>ニ</sup>哺養<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>七子<sup>ヲ</sup>。單醪投<sup>ニ</sup>流<sup>ヲ</sup>。期<sup>ニ</sup>酣醉<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>三軍<sup>ヲ</sup>。

一請<sup>ニ</sup>停<sup>ニ</sup>止<sup>ヲ</sup>依<sup>ニ</sup>諸國少吏并<sup>ニ</sup>百姓告言<sup>ヲ</sup>訴訟<sup>ニ</sup>。差<sup>ニ</sup>遣<sup>ニ</sup>朝使<sup>ヲ</sup>事<sup>ヲ</sup>。

右臣伏以。牧宰者分<sup>ニ</sup>萬乘之憂<sup>ヲ</sup>。受<sup>ニ</sup>一方之寄<sup>ヲ</sup>。守<sup>ニ</sup>六條之紀綱<sup>ヲ</sup>。爲<sup>ニ</sup>兆民之領袖<sup>ヲ</sup>。故漢宣帝云。與<sup>ニ</sup>朕共<sup>ニ</sup>理<sup>ヲ</sup>者其唯良二千石乎。必須<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>擇<sup>ヲ</sup>用<sup>ニ</sup>其才<sup>ヲ</sup>尊<sup>ニ</sup>崇<sup>ニ</sup>其職<sup>ヲ</sup>。重<sup>ニ</sup>官威<sup>ヲ</sup>而厭<sup>ニ</sup>民心<sup>ヲ</sup>。捨<sup>ニ</sup>小瑕<sup>ヲ</sup>而責<sup>ニ</sup>大虞<sup>ヲ</sup>。而比年任用<sup>ニ</sup>之吏<sup>ヲ</sup>。或結<sup>ニ</sup>私怨<sup>ヲ</sup>以誣<sup>ニ</sup>告<sup>ニ</sup>官長<sup>ヲ</sup>。所部之民。或矯<sup>ニ</sup>公事<sup>ヲ</sup>以怨<sup>ニ</sup>訴<sup>ニ</sup>國宰<sup>ヲ</sup>。或陳<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>犯<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>官物<sup>ヲ</sup>之狀<sup>ヲ</sup>。或訴<sup>ニ</sup>政理違<sup>ニ</sup>法<sup>ヲ</sup>之由<sup>ヲ</sup>。此等條類千緒萬端<sup>ニ</sup>。於<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>朝家収<sup>ニ</sup>其告狀<sup>ヲ</sup>。發<sup>ニ</sup>

遣使人<sup>ニ</sup>。使人到<sup>ニ</sup>國<sup>ヲ</sup>未<sup>レ</sup>問<sup>ニ</sup>事之虛實<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>辨<sup>ニ</sup>理之是非<sup>ヲ</sup>。偏依<sup>ニ</sup>使式<sup>ヲ</sup>。每<sup>ニ</sup>事准擬<sup>ヲ</sup>。領<sup>ニ</sup>其印鑑<sup>ヲ</sup>。嚴其禁錮<sup>ヲ</sup>。卽以<sup>ニ</sup>官長之貴<sup>ヲ</sup>。與<sup>ニ</sup>小吏賤民<sup>ヲ</sup>比<sup>ニ</sup>肩連<sup>ヲ</sup>。口受<sup>ニ</sup>其推鞠<sup>ヲ</sup>。若<sup>レ</sup>辭對之間。纖芥有<sup>レ</sup>違則立<sup>ニ</sup>加<sup>ニ</sup>繹泄<sup>ヲ</sup>。便填<sup>ニ</sup>牢柱<sup>ヲ</sup>。若<sup>レ</sup>亦雖<sup>ニ</sup>告訴之旨事皆不<sup>レ</sup>實<sup>ヲ</sup>。而威權已廢<sup>ニ</sup>。政令不<sup>レ</sup>行<sup>ヲ</sup>。爰隣境百姓轉相<sup>ニ</sup>見聞<sup>ヲ</sup>。卽各輕<sup>ニ</sup>侮<sup>ニ</sup>其官長<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>肯<sup>ニ</sup>服<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>其政教<sup>ヲ</sup>。傷<sup>ニ</sup>化之源<sup>ヲ</sup>無<sup>ニ</sup>甚<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>此<sup>ヲ</sup>。況亦理劇之任庶務多<sup>ニ</sup>端<sup>ヲ</sup>。曉夕黽<sup>ニ</sup>。猶有<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>遑<sup>ヲ</sup>。而今朝使推問之<sup>ニ</sup>間<sup>ヲ</sup>。被<sup>ニ</sup>停<sup>ニ</sup>。釐務<sup>ヲ</sup>多<sup>ニ</sup>歷<sup>ニ</sup>旬月<sup>ヲ</sup>。空廢<sup>ニ</sup>治政<sup>ヲ</sup>。縱<sup>ニ</sup>免<sup>ニ</sup>賦吏之名<sup>ヲ</sup>。而猶成<sup>ニ</sup>任中之怠<sup>ヲ</sup>。秩滿之日遂<sup>ニ</sup>拘<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>山<sup>ヲ</sup>。如<sup>レ</sup>此則多致<sup>ニ</sup>公損<sup>ヲ</sup>。徒滅<sup>ニ</sup>良吏<sup>ヲ</sup>。助<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>訴人<sup>ヲ</sup>。報<sup>ニ</sup>彼私怨<sup>ヲ</sup>也。前年阿波守橘秘樹蕭<sup>ニ</sup>清<sup>ヲ</sup>所部<sup>ニ</sup>底<sup>ニ</sup>憤<sup>ニ</sup>貢<sup>ヲ</sup>。勤王之誠當時第一<sup>ニ</sup>。必須<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>殊<sup>ニ</sup>加<sup>ニ</sup>獎擢<sup>ヲ</sup>。以勵<sup>ニ</sup>俊良<sup>ヲ</sup>。而依<sup>ニ</sup>小民之誣告<sup>ヲ</sup>。降<sup>ニ</sup>朝使之廉問<sup>ヲ</sup>。雖<sup>ニ</sup>事皆虛詐<sup>ヲ</sup>告人逃亡<sup>ヲ</sup>。已而秘樹之身亦爲<sup>ニ</sup>廢人<sup>ヲ</sup>。如<sup>レ</sup>此則知<sup>ニ</sup>耻<sup>ヲ</sup>之士。誰冀<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>吏<sup>ヲ</sup>



乎。方今時代澆季公事難濟。故國宰之治。不能事事拘牽正法。故或有枉尺而直尋者。或有失始而全終者。昔者龔遂爲渤海守。奏曰。請勅丞相御史。且勿拘臣以文法。令下得便宜從事。又本朝格云。國宰反經制宜。動不爲己者。將從寬恕。無拘文法者。伏望此等告言訴訟。除謀反大逆之外。一切停止朝使。專附新司。若實有犯過者。具載不與解山狀。勘判之後。卽下刑官。論其罪科。或難。凡厥貪吏之盜官物。宜速加糾察也。若待其任終。恐倉庫無餘。答云。今假令有入告中吏盜賊。爰太政官卽馳輕騎。晝夜兼行。禁遏其奸者。事若可爾。而今訴人告狀。歷三審之程。得免下之比。擇定使人之問。裝束行程之限。事自彌留。度歷年紀。其間若有心盜犯者。豈遺遺一粒乎。然則與彼附後司。有何分別。況此牧宰等身出帝

簡志報朝恩。非唯求立績於明時。亦皆念垂名於後代者也。故比年陷此非者。皆爲公謀功未成之間。俄被告言而已。未嘗有自犯入己之人焉。靜尋其意。誠是公罪也。伏望覽寰天旒。照其可否。

一請置諸國勘籍人定數一事。

右謹檢案內三宮舍人。諸親王帳內資人。諸大夫命婦位分資人。諸司勘籍人。諸衛府舍人。式兵二省載季符者。一年四季之內。稍及三千人。又略計本朝課下。除五畿內陸奥出羽兩國及宰九箇國之外。不滿卅萬人。就中大半是無身。然則見課丁纔有三十餘萬人。今十餘萬人。中每三年除三千人之課役。傍薄而論之。未盈四十年。天下之人。皆可爲不課之民。然則國宰令何人備進調庸乎。由是國宰奉行蠲符卽除富豪見丁之課役。更以無實課丁一括出計帳。故例進調庸自然無可徵之



門。然則調庸備。會非國宰之意也。都是  
獨符猥濫之所致也。而今依此意。遂爲未得  
解山。豈不悲乎。或難云。三宮舍人。帳內位分  
資人等。古來所充給也。然而累代獨符無有  
此妨。今至當時。何出異論。答云。凡諸勸籍  
人等符。損符獨符通計可載獨符。具在式  
條。而今比年所下獨符之損。百人之中無符  
獨一人。又近古諸家一得資人。無復改補。而  
比年補資人後。卽遷轉三宮及諸司內考。重  
復改請。於是三省史生書生等。因緣爲奸。或  
不觸本主。不依國解。僞稱勸籍。獨載三季  
符。其尤甚者。本主未補一人。省底已盈其  
數。如此奸濫。日以加倍。公損之甚。無過於  
此。伏望。件等勸籍人。隨國大小。每年立其  
定數。大國一年十人。上國七人。中國五人。小國  
二人。以載獨符。此外不得增加一人。又舊  
例。近江國一年免百人。丹波國免五十人。兩

國凋殘。蠲此之由。今須因准此例。近江國減  
定十人。丹波國減定七人。又勸籍解文必二通  
進官。其一通留官底。一通加外題。卽下式  
部省。省進三季符之日。與官底解文。勘合。然  
後請印。又獨符所載多符損少符獨者。勘  
返不得請印。但京戶五畿內不拘此制。冀  
也調庸易納。牧宰無煩。

一請停。以贖勞人。補任諸國檢非違使及  
弩師事。

右諸國檢非違使。掌糾正境內之奸濫。禁中民間  
之凶邪。然則國宰之爪牙。兆庶之衝策也。必須  
明習法律。兼詳中決斷。而今任此職者。皆是  
當國百姓。納贖勞料者也。徒費公俸。不堪  
差役。空帶其名。會非其器。亦猶如畫餅不  
可食。木吏不能言也。伏望。監試明法學  
生。充任職。其試法一如明經國學之試。國  
中追捕及斷罪。一向委此檢違非使。猶如京下

有<sup>ル</sup>判事及檢非違使<sup>ヒ</sup>也。又緣邊諸國各置<sup>タ</sup>弩師<sup>ヲ</sup>者。爲<sup>メ</sup>防<sup>ニ</sup>寇賊<sup>ノ</sup>之來犯<sup>ス</sup>也。臣伏見。本朝戎器。強弩爲<sup>レ</sup>神。其爲<sup>レ</sup>用也。短<sup>ニ</sup>於逐擊。長<sup>ニ</sup>於守禦。古語相傳云。此器神功皇后奇巧妙思別所製作<sup>シ</sup>也。故大唐雖有<sup>ニ</sup>弩名。曾不<sup>レ</sup>如<sup>ニ</sup>此器之勁利<sup>ニ</sup>也。臣伏見。陸奥出羽兩國。動有<sup>ニ</sup>蝦夷之亂。大宰管内九國。常有<sup>ニ</sup>新羅之警。自餘北陸山陰南海三道。濱海之國。亦皆可<sup>レ</sup>備<sup>ニ</sup>隣寇<sup>ニ</sup>者也。而今件弩師。皆充<sup>ニ</sup>年給。許令<sup>レ</sup>斥賣。唯論<sup>ニ</sup>價直之高下。不<sup>レ</sup>問<sup>ニ</sup>才伎之長短。故所<sup>ニ</sup>充任者。未<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>軍器之有<sup>レ</sup>弩。況曉<sup>ニ</sup>機弦之所<sup>ニ</sup>用乎。假令天下太平。四方無<sup>レ</sup>虞。猶宜<sup>ニ</sup>安不忘危。日慎<sup>ニ</sup>一日。況萬分之一。若有<sup>ニ</sup>隣寇挑<sup>ニ</sup>死者。空懷<sup>ニ</sup>此器。孰人施用乎。伏望。令<sup>ニ</sup>六衛府宿衛等。練<sup>ニ</sup>弩射之術。試<sup>ニ</sup>其才伎。隨<sup>ニ</sup>其功勞。充<sup>ニ</sup>任件國弩師。然則人才適<sup>ニ</sup>名。城戍易<sup>レ</sup>守。一請<sup>レ</sup>禁<sup>ニ</sup>諸國僧徒濫惡及宿衛舍人凶暴<sup>ニ</sup>事。

右臣伏見。去延喜元年。官符已禁<sup>ニ</sup>權貴之規<sup>ニ</sup>銅山川。勢家之侵<sup>ニ</sup>奪田地。芝州郡之枳棘。除<sup>ニ</sup>兆庶之螫蟻。吏治易<sup>レ</sup>施。民居得<sup>レ</sup>安。但猶凶暴邪惡者。惡僧與<sup>ニ</sup>宿衛<sup>ニ</sup>也。伏以。諸寺年分及臨時得度者。一年之內。或及<sup>ニ</sup>二三百人<sup>ニ</sup>也。就中半分以上。皆是邪濫之輩也。又諸國百姓。逃<sup>ニ</sup>課役<sup>ニ</sup>。逋<sup>ニ</sup>租調<sup>ニ</sup>者。私<sup>ニ</sup>落<sup>ニ</sup>髮狼著<sup>ニ</sup>法服。如<sup>レ</sup>此之輩。積<sup>ニ</sup>年漸多。天下人民。三分之二。皆是禿首者也。此皆家蓄<sup>ニ</sup>妻子。口啖<sup>ニ</sup>腥膻。形似<sup>ニ</sup>沙門。心如<sup>ニ</sup>屠兒。況其尤甚者。聚爲<sup>ニ</sup>群盜。竊鑄<sup>ニ</sup>錢貨。不<sup>レ</sup>畏<sup>ニ</sup>天刑。不<sup>レ</sup>顧<sup>ニ</sup>佛律。若國司依<sup>ニ</sup>法勸糾。則霧合雲集。競爲<sup>ニ</sup>暴逆。前年攻<sup>ニ</sup>園安藝守藤原時善。劫<sup>ニ</sup>略<sup>ニ</sup>紀伊守橘公廉<sup>ニ</sup>者。是濫惡之僧。爲<sup>ニ</sup>其魁帥<sup>ニ</sup>也。縱使官符遲發。朝使緩行者。時善公廉皆爲<sup>ニ</sup>魚肉<sup>ニ</sup>也。若無<sup>ニ</sup>禁懲之制。恐<sup>ニ</sup>乖<sup>ニ</sup>防衛之方。伏望。諸僧徒有<sup>ニ</sup>凶濫<sup>ニ</sup>者。登時追捕。令<sup>レ</sup>返<sup>ニ</sup>進度緣戒牒。卽著<sup>ニ</sup>俗服。返<sup>ニ</sup>附本

役。又私度沙彌爲其凶黨者。卽著鉗鉢。驅役其身。又六衛府舍人皆須每月結番。曉夕警備。當番陪侍兵欄。佗番休寧京洛。東西警刀町也。若有機急者。又須當番他番俱勤防衛。而今件等舍人。皆散諸國。或在千里卸驛之外。百日程之境。豈得門籍編名宿衛分番乎。此皆部內強豪民間凶暴者也。國司依法勘糾其事。則駿奔洛。卽納錢貨。賈爲宿衛。或帥徒黨而劫圍國府。或奮老拳以凌辱官長。凡厥蠹害。非唯疥癬。夫以選置衛卒者。爲備警急也。而今遠在甸服。不居京畿。縱令皇都無慮。則此輩何用。若有急者。奔赴無及。然則徒爲諸國之豺狼。曾非六軍之猛虎。望請諸衛府舍人充捕之後。不得歸住本國。若有寧歸者。各限暇日。取本府牒附送國衛。不得限外留連。若猶懈緩不還者。國宰且解其職。且錄事狀。牒送本府。如

此則猿臂比肩於門欄。狗吠休警於州壤。一重請修復播磨國魚住泊事。

右臣伏見山陽西海南海三道。舟船海行之程。自櫻生泊至韓泊。一日行。自韓泊至魚住泊。一日行。自魚住泊至大輪田泊。一日行。自大輪田泊至河尻。一日行。此皆行基菩薩計程所建置也。而今公家唯修造輪田泊。長廢魚住泊。由是公私舟船。一日一夜之內兼行。自韓泊指輪田泊。至于冬日風急。暗夜星稀。不知舳艫之前後。無辨濱岸之遠近。落帆棄櫂。居愁漂沒。由是每年舟之蕩覆者。漸過百艘。人之沒死者。非唯千人。昔者夏禹之仁。罪人猶泣。況此等百姓。皆赴王役乎。伏惟聖念必應降哀於者也。臣伏勘舊議。此泊天平年中所建立也。其後至于延曆之末。五十餘年。人得其便。弘仁之代。風浪侵瀾。石頽沙漂。天長年中。右大臣清原真人奏議起

諸<sup>レ</sup>遂<sup>ニテ</sup>以<sup>ス</sup>修復<sup>ス</sup>。承和之末<sup>ニ</sup>。復<sup>タ</sup>已<sup>ニ</sup>毀壞<sup>ス</sup>。至<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>貞觀初<sup>ニ</sup>。東大寺僧賢和。修<sup>シ</sup>苦薩行<sup>ヲ</sup>。起<sup>ニ</sup>利他心<sup>ヲ</sup>。負<sup>ヒ</sup>石<sup>ヲ</sup>荷<sup>テ</sup>。錫<sup>シ</sup>盡<sup>シ</sup>力<sup>ヲ</sup>底<sup>ヲ</sup>功<sup>ヲ</sup>。單獨之誠<sup>ヲ</sup>雖<sup>レ</sup>未<sup>ダ</sup>畢<sup>ス</sup>。其業<sup>ヲ</sup>。年紀之間<sup>ニ</sup>。莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>蒙<sup>テ</sup>其利<sup>ヲ</sup>。賢和入滅<sup>シ</sup>。稍<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>三十年<sup>ニ</sup>。人民漂沒<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>勝<sup>テ</sup>計<sup>ス</sup>。官物損失<sup>ス</sup>亦累<sup>ニ</sup>巨萬<sup>ヲ</sup>。伏望<sup>シ</sup>差<sup>下</sup>諸司判官幹了<sup>ニ</sup>。有<sup>ニ</sup>巧思<sup>ヲ</sup>者<sup>ヲ</sup>。令<sup>テ</sup>修<sup>シ</sup>造<sup>シ</sup>件<sup>ヲ</sup>泊<sup>ヲ</sup>。其料物充<sup>ニ</sup>給<sup>ヘン</sup>播磨備前兩國正稅<sup>ヲ</sup>。冀也<sup>ニ</sup>。早降<sup>シ</sup>聖朝援手<sup>ヲ</sup>之仁<sup>ヲ</sup>。令<sup>テ</sup>脫<sup>ス</sup>天民爲<sup>ル</sup>魚之歎<sup>ヲ</sup>。凡厥便宜具載<sup>ニ</sup>去<sup>ニ</sup>延喜元年所<sup>ニ</sup>獻意見之中<sup>ニ</sup>。不<sup>ニ</sup>更<sup>セ</sup>重陳<sup>ス</sup>。

延喜十四年四月廿八日。從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上奏。

# 封事三箇條

從三位文時卿

一請<sup>レ</sup>禁<sup>ント</sup>奢侈<sup>ヲ</sup>事<sup>ヲ</sup>。

右俗之凋衰。源自<sup>ニ</sup>奢侈<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>塞<sup>ニ</sup>其源<sup>ヲ</sup>。何救<sup>ニ</sup>其俗<sup>ヲ</sup>。方今高堂連閣。貴賤共壯<sup>ニ</sup>其居<sup>ヲ</sup>。麗服美衣。貧富同寬<sup>ニ</sup>其制<sup>ヲ</sup>。官途締<sup>テ</sup>交之儲<sup>ヲ</sup>。窮<sup>ニ</sup>陸海<sup>ヲ</sup>而盡<sup>ス</sup>珍<sup>ヲ</sup>。私門求<sup>レ</sup>嬾之饋<sup>ヲ</sup>。剪<sup>ニ</sup>綾羅<sup>ヲ</sup>而敷<sup>レ</sup>器<sup>ヲ</sup>。富者傾<sup>ニ</sup>產業<sup>ヲ</sup>。貧者失<sup>ニ</sup>家資<sup>ヲ</sup>。然而且愁且好<sup>テ</sup>。所<sup>ニ</sup>以不<sup>レ</sup>息者。一思<sup>レ</sup>容<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>。一難<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>俗耳<sup>ヲ</sup>。是故雖<sup>下</sup>明詔頻降<sup>リ</sup>嚴禁無<sup>レ</sup>緩<sup>ヲ</sup>。而積習生<sup>レ</sup>常<sup>ヲ</sup>。流通忘<sup>レ</sup>還<sup>ス</sup>。令<sup>テ</sup>天下愚夫愚婦<sup>ヲ</sup>謂<sup>ニ</sup>風教<sup>ヲ</sup>。而爲<sup>レ</sup>不<sup>ト</sup>宣<sup>ス</sup>。謂<sup>ニ</sup>霜科<sup>ヲ</sup>。而爲<sup>ニ</sup>無用<sup>ヲ</sup>。伏望<sup>シ</sup>重勅<sup>ニ</sup>有司<sup>ヲ</sup>。更張<sup>ニ</sup>舊法<sup>ヲ</sup>。若致<sup>ニ</sup>容隱<sup>ヲ</sup>。殊加<sup>ニ</sup>譴責<sup>ヲ</sup>。抑朝廷所<sup>ニ</sup>行者<sup>ヲ</sup>。從<sup>ニ</sup>制猶遲<sup>ス</sup>。人若所<sup>レ</sup>好者。承指盡速<sup>ナリ</sup>。故書曰。違<sup>ニ</sup>上所<sup>ニ</sup>命<sup>ヲ</sup>。從<sup>ニ</sup>厥攸<sup>ヲ</sup>好<sup>ヲ</sup>。傳曰。上之所<sup>レ</sup>爲。人之所<sup>レ</sup>歸。昔吳王好<sup>ニ</sup>劍客<sup>ヲ</sup>。百姓多<sup>ニ</sup>瘡痍<sup>ヲ</sup>。楚王好<sup>ニ</sup>細腰<sup>ヲ</sup>。宮中多<sup>ニ</sup>餓死<sup>ヲ</sup>。夫餓與<sup>レ</sup>瘡者。是人之所<sup>レ</sup>厭。然尙不



嗜味不避危者。唯欲從上之好也。況於救弊之謀。何有違命之輩乎。伏惟采椽土階。清風扇于古。損膳減服。紫泥新於今。猶願內彌親儉。外惣遏奢。見其僭侈者則惡之。聞其儉者則喜之。天下將知其去奢而好儉。誰敢費已財逆君心者哉。斯實所以不不禁而止。不令而行也。然則浮僞之俗自改。敦龐之化可成。

一請停賣官事。

右量能授官。官乃理。擇材任職。職乃循。若不量而授。不擇而任。則人謂之謬妄。俗爲之衰亡。方今授任之道非不正。黜陟之規非不明。然時有以財官人矣。公家以爲助國用。衆庶以爲輕天工。於是功勞之臣自退。聚斂之輩爭進。至於令下彼暴客猾民。殉不義之富。彌深慮於貧殘。良吏胥子企無厭之求。更薄情於官學。望其化盛治平。不亦難哉。

昔館陶公主爲子求郎。明帝不許。賜錢千萬。所以輕厚賜。重薄位者。爲其官人失才。害及百姓也。降逮桓靈之后。初開占賣之官。皇綱遂紊。王業已衰。歷訪漢家之典。略考皇朝之記。未有賣官而敦俗。鬻職而安民者矣。伏望早改彼澆時之政。令返於淳世之風。若憂國用。則每事必行儉約。若行儉約。則何因可乏貨財。欲利之源。從此暗滅。廉正之路自然開。

一請不廢鴻臚館。懷遠人。屬文士事。

右鴻臚館者。爲外賓所置也。星律多積。雲構頻頽。頃年以來。堂宇欲盡。所司不能修造。公家空以廢忘。禮曰。以舊防爲無所用而壞。必有水敗。以舊禮無所用而去之。必有亂患。恐彼歸化之國。慕德之鄉。得風聞於萬里。成狐疑於兩端。一以爲君恩薄而無

懷柔之情。一以爲國用乏而無含弘之力。加之國家故事。蕃客朝時。擇通賢之倫。任行人之職。禮遇之中。賓主鬩筆。又拔諸生能文者。令預餞別之席。因茲翰苑銳思之士。無不以對蕃客爲其心期。方今詞人才子。顧相誠曰。人命有限。世途難拋。何徒勤苦於風月之間乎。請見鴻臚館之不可復爲文章場矣。昔子貢欲去告朔之餼羊。仲尼不許。以爲羊在猶所以識其禮也。今陳不廢此館者。蓋亦爲文章道焉。夫文章者。王者所以下觀風俗。厚人倫。感鬼神。成教化也。無翼而飛。無脛而至。敵國見之而知有智者。故憚而不侵。殊俗聞之而覺有賢人。故畏而自服。魏文帝所謂文章經國之大業。不朽之盛事者也。伏望深圖遠慮。勿廢失此寶館。然則遐方不離心。文士無倦業。是則示海外以仁澤之廣。輝天下以威風之高也。

以前封事。依去天曆八年七月廿七日綸旨。上奏如右。臣素不達政道之要。只空竊儒士之名。詔是難逃。義苟無隱。遂忘罪責。敢獻狂言。臣文時誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言。

天曆十一年十二月二十七日。從五位上行右少辨臣菅原朝臣文時上。

按是年十月廿七日改元天德疑年月之際誤寫

群書類從卷第四百七十五

雜部三十

寬平御遺誠

供<sub>ニ</sub>御膳<sub>一</sub>申時。一本云以下蠹損

以上陣直超<sub>レ</sub>倫。聲譽遍聞者。昇轉叙位。及兼國貢物。勿<sub>レ</sub>拘<sub>ニ</sub>掌例<sub>一</sub>。唯忌<sub>ニ</sub>婦人之口小人之舉<sub>一</sub>耳。

諸國諸家等所<sub>レ</sub>申季祿大糧。衣服月料等。或入<sub>ニ</sub>官奏<sub>一</sub>。或就<sub>ニ</sub>內給<sub>一</sub>。申<sub>ニ</sub>不動正稅等<sub>一</sub>。縱令勘<sub>ニ</sub>申國中帳遺<sub>一</sub>。或遠年帳雖<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>實。難イ今湏<sub>ニ</sub>不動者一切禁斷<sub>一</sub>。正稅者隨<sub>レ</sub>狀處分。若必用<sub>ニ</sub>不動者<sub>一</sub>。卽後年全令<sub>ニ</sub>委填<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>忘。此事當時執政所<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>進止<sub>一</sub>也。雖<sub>レ</sub>然存<sub>ニ</sub>於內心<sub>一</sub>補<sub>ニ</sub>萬分<sub>一</sub>。努力々々。

齊宮者。出在<sub>ニ</sub>外國<sub>一</sub>。用途雖<sub>レ</sub>繁。料物不<sub>レ</sub>足。隨<sub>ニ</sub>其申請<sub>一</sub>量<sub>レ</sub>宜進止。唯寮司能々可<sub>レ</sub>選<sub>ニ</sub>任<sub>一</sub>之。齊院者。種々雜物藏例雖<sub>レ</sub>具。其於<sub>ニ</sub>用度<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>足<sub>ニ</sub>十分之一<sub>一</sub>。特加<sub>ニ</sub>相勞<sub>一</sub>。以下六字蠹損不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>之。大略仰<sub>ニ</sub>菅原朝臣季長朝臣<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>彼兩人檢<sub>一</sub>諸國權講師。權檢非違使等。朕一兩許<sub>レ</sub>之。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>例。虫讀師隨<sub>ニ</sub>孟冬簡定<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>任<sub>ニ</sub>諸階業僧等<sub>一</sub>。虫（此間十九字虫損）事坊<sub>レ</sub>之。一二度朕失<sub>レ</sub>之。新君慎之。內供奉十禪師等定額僧等之闕。必用<sub>ニ</sub>本寺選舉<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>輒許<sub>一</sub>前人之讓。虫妄他<sub>レ</sub>所之囑。若有<sub>下</sub>知德普聞。戒律令<sub>上</sub>。（此間五字虫損）問許<sub>レ</sub>之。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>之。外蕃之人必可<sub>ニ</sub>召見<sub>一</sub>者。在<sub>ニ</sub>簾中<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>之。不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>直對<sub>一</sub>耳。李環朕已失<sub>レ</sub>之。

慎<sub>レ</sub>之。諸國新任長<sub>請</sub>虫。

任用者。或掾。或目。醫

師博士等總不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>之。唯諸國諸所有<sub>レ</sub>勞。勞

中爲<sub>レ</sub>他人<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>遍知。堪<sub>レ</sub>其用<sub>一</sub>者。量<sub>レ</sub>狀許<sub>虫</sub>。

不<sub>レ</sub>分明<sub>一</sub>者恐<sub>イ</sub>忘<sub>レ</sub>之。莫<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>忘。有憲不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>。

昇殿之狀。去年引<sub>レ</sub>神明<sub>一</sub>附<sub>レ</sub>定國<sub>一</sub>。申遂已畢。

莫<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>之。莫<sub>レ</sub>淫萬事<sub>虫</sub>。節<sub>レ</sub>之。

可<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>賞罰。莫<sub>レ</sub>迷<sub>レ</sub>愛憎<sub>一</sub>。

用意平均。莫<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>好惡<sub>一</sub>。

能慎<sub>レ</sub>喜怒。莫<sub>レ</sub>形<sub>レ</sub>于色<sub>一</sub>。

左右近衛將監叙位之事。追<sub>レ</sub>昔例<sub>一</sub>。左右遞隔年

叙<sub>レ</sub>之。而今叙位之事不<sub>レ</sub>必每年<sub>一</sub>。宿衛之勤殊

倍<sub>レ</sub>他府。始<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>舍人<sub>一</sub>至<sub>レ</sub>判官<sub>一</sub>。置<sub>積</sub>四<sub>五</sub>十年<sub>一</sub>。

殆難<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>其運<sub>一</sub>。令<sub>須</sub>復<sub>レ</sub>近代之例<sub>一</sub>。每<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>儀式

之叙位。左右共叙<sub>レ</sub>之。將<sub>レ</sub>勵<sub>レ</sub>宿衛之人。新君慎

<sub>レ</sub>之。內侍所者。有<sub>司</sub>已存。唯宮中之至難者。是

後庭之事。今須<sub>共</sub>共<sub>イ</sub>方雜事御匣殿收殿絲所等事

者。定國朝臣姊妹近親之中。可<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>其事<sub>一</sub>者一

兩人。一向行事。日給之物等節之類。總可<sub>レ</sub>處

分。洽子朝臣自<sub>レ</sub>昔知<sub>レ</sub>絲所之事<sub>虫</sub>之間。猶令

兼<sub>レ</sub>知之。息所菅氏宣旨滋野等者。日夕出<sub>レ</sub>居

女房之侍所。行<sub>レ</sub>藏人等日給之事。兼正進退

禮儀。至<sub>下</sub>有<sub>レ</sub>更衣<sub>上</sub>之時<sub>一</sub>。又加<sub>レ</sub>教正禮節。其更

衣藏人隨<sub>レ</sub>事給<sub>レ</sub>賞物。依<sub>レ</sub>功授<sub>レ</sub>官爵之事。皆

悉可<sub>レ</sub>執奏申行<sub>一</sub>也。菅氏是好省<sub>レ</sub>煩事之人也。

宣旨又寬緩和柔之人也。激<sub>レ</sub>勵各身。令<sub>レ</sub>勤<sub>レ</sub>仕

之。新君慎<sub>レ</sub>之。

中重北面廊采女女孺等各爲<sub>レ</sub>曹司居住<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>家。

代々常有<sub>レ</sub>失火之畏。雖<sub>レ</sub>然遂不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>追却<sub>一</sub>。令

須<sub>下</sub>每<sub>レ</sub>夜藏人殿上人。可<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>其事<sub>一</sub>者一人。差<sub>一</sub>。

加藏人所人一兩。令<sub>巡</sub>檢<sub>上</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>怠<sub>レ</sub>之。又

宮中人々曹司坪々等凡下之人常致<sub>レ</sub>破壞。須<sub>下</sub>

五日一度同遣<sub>レ</sub>殿上人。令<sub>巡</sub>檢<sub>上</sub>警<sub>上</sub>。新君慎

<sub>レ</sub>之。

左大將藤原朝臣者。功臣之後。其年雖<sub>レ</sub>少已熟<sub>一</sub>



政理。先年於女事有所失。朕早忘却不置於心。朕自去春加激勵令勤公事。又已爲第一之臣。能備顧問而泛其輔道。新君慎之。

右大將菅原朝臣是鴻儒也。又深知政事。朕選爲博士。多受諫正。仍不次登用以答其功。加以朕前年立東宮之日。只與菅原朝臣一人

論定此事。女知伺侍居之。其時無共相議者一人。又東宮初立之後。未經二年。朕有讓位之意。朕以此意密々語菅原朝臣。而菅原朝臣申云。

如是大事自有天時。不可忽。不可早云々。仍或上封事。或吐直言。不順朕言。又々正論也。至于今年。告菅原朝臣以朕志必可

果之狀。菅原朝臣更無所申。事々奉行至于七日。可行之儀。人口云々。殆至于欲延引其事。菅原朝臣申云。大事不再舉。事留則變生云々。遂令朕意如石不轉。總而言之。菅原朝

臣非朕之忠臣。新君之功臣乎。人功不可忘。新君慎之云々。

季長朝臣深熟公事。長谷雄博涉經典。共大器也。莫憚昇進。新君慎之。

朕聞。未且求衣之勤。每日整服。盥嗽拜神。又近喚公卿有議給。訪治術。亦還本座。招召侍臣。求六經疑。聖哲之君。必依輔佐。以治事。華夷寡小之人。何無賢士。以感救微。事有持疑。必可推量以決之。新君慎之。

諸司諸所。言奏見參。有先例者。可下諸司。令勘舊跡。縱有舊迹。能推量可行。新君慎之。

延曆帝主。每日御南殿帳中。政務之後。解脫衣冠。臥起飲食。又喚鷹司御鷹。於庭前。令呼酣。或時御手作。箸爪等。可好。又至苦熱。朝政後。幸神泉苑。納涼。行幸之時。先令問左右近中少將。即喚手與御之。行路之次。

若有御興。令近衛等相撲。是爲好相撲也。

造羅城門。巡幸覽之。卽仰工匠曰。此門高

可減三五寸云々。後又幸覽之。卽喚工匠如

何。工匠云。旣減。帝歎曰。悔不加三五寸。工匠

聞之。伏地絕息。帝奇聞。工匠良久蘇息。卽

云。實不減。然而爲有煩詐言耳。帝宥其罪。

帝王平生晝臥帳中。令遊小兒諸親王。或召

采女。時令洒掃。其時人夏冬服綿袴。其采女

袴體如今表袴。欲使御也。是等語。故太政大

臣舊說也。雖不可追習。爲存舊事附狀

末耳。又弘仁御時。諸堂殿門額初書。宮城東面

帝親書耳。又初製唐服云々。

以前數事之誠。朕若忘却而有所囑者。引此

書可警。以此爲孝。不可違失耳。

承安二年十一月七日。以納言殿御本。書取

畢。日向守定長

寬元三年四月十一日。加一校畢。以中宮

權大進俊兼本。書寫之。春宮權大進光國

右以厩代弘賢本書寫得一本。校合了

## 九條殿遺誠

九條前右大臣師輔公

遺誠并日中行事。造次可張座右。

先起稱屬星名號七遍。徵音。其七星。貪狼者子年。巨

文曲者卯酉年。廉貞者辰申年。門者丑亥年。祿存者寅戌年。

武曲者巳未年。破軍者午年。次取鏡見面。次見曆

知日吉凶。次取楊枝。向西洗手。次誦佛

名。及可念尋常所尊重神社。次記昨日事。

事多日。日ノ中可記之。次服粥。次梳頭。三箇日一度可梳。之。日々不梳。次

除手足甲。丑日除手甲。寅日除足甲。次擇日沐浴。五箇日沐浴。黃帝傳曰。凡每月一日沐浴短命。八日沐浴長。

浴吉日。黃帝傳曰。凡每月一日沐浴短命。八日沐浴長。十八日逢盜賊。午日失愛敬。子日

耻。惡日不可浴。其惡日。寅辰午戌下食。日等也。次有下可出仕事。卽服

衣冠。不可懈緩。會人言語莫多。又莫言

人之行事。唯陳其所思。兼觸事。不可言人

言也。人之灾。出自口。努力慎之。又付

公事。可見文書。必留情可見。次朝暮膳。如

常勿多飡飲。又不待時尅。不可食之。

詩云。載々慄々。日愼一日。如臨深淵。如履

薄氷。長久之謀能保<sub>二</sub>天年<sub>一</sub>。凡成長頗知<sub>レ</sub>物情<sub>一</sub>之時。朝讀<sub>二</sub>書傳<sub>一</sub>。次學<sub>二</sub>手跡<sub>一</sub>。其後許<sub>二</sub>諸遊戲<sub>一</sub>。但鷹犬博奕重<sub>二</sub>所<sub>一</sub>禁遏<sub>レ</sub>矣。元服之後。未<sub>レ</sub>趁官途<sub>一</sub>之前。其所爲亦如<sub>レ</sub>此。但早定<sub>二</sub>本尊<sub>一</sub>。盥洗<sub>レ</sub>手唱<sub>二</sub>寶號<sub>一</sub>。若<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>眞言<sub>一</sub>。至于多少。可<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>人之機根<sub>一</sub>。不信之輩。非常天命。前鑒已近。第三關白貞信公語云。延長八年六月二十六日。霹靂清涼殿之時。侍臣失<sub>レ</sub>色。吾心中歸<sub>二</sub>依三寶<sub>一</sub>。殊無<sub>レ</sub>所懼。大納言清貫。右中辨希世。尋常不<sub>レ</sub>尊<sub>二</sub>佛法<sub>一</sub>。此兩人已當<sub>二</sub>其殃<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>是謂<sub>レ</sub>之。歸眞之力才逃<sub>二</sub>災殃<sub>一</sub>。又信心貞潔智行之僧多少隨<sub>レ</sub>堪相<sub>二</sub>語之<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>唯現世之助<sub>一</sub>。則是後生之因也。頗知<sub>二</sub>書記<sub>一</sub>。便留<sub>二</sub>心於我朝書傳<sub>一</sub>。夙興照<sub>レ</sub>鏡先窺<sub>二</sub>形體變<sub>一</sub>。次見<sub>二</sub>曆書<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>日之吉凶<sub>一</sub>。年中行事略注<sub>二</sub>付件曆<sub>一</sub>。每日視之。次先知<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>。兼以用意。又昨日公事若<sub>二</sub>私<sub>一</sub>不得<sub>レ</sub>心事等。爲<sub>レ</sub>備<sub>二</sub>忽忘<sub>一</sub>。又聊可<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>付件曆<sub>一</sub>。但其中要樞公

事。及君父所在事等。別以記<sub>レ</sub>之。可<sub>レ</sub>備<sub>二</sub>後鑒<sub>一</sub>。凡爲<sub>レ</sub>君必盡<sub>二</sub>忠貞之心<sub>一</sub>。爲<sub>レ</sub>親必竭<sub>二</sub>孝敬之誠<sub>一</sub>。恭兄如<sub>レ</sub>父。愛<sub>レ</sub>弟如<sub>レ</sub>子。公私大小之事。必以一<sub>レ</sub>心同<sub>二</sub>志<sub>一</sub>。纖芥勿<sub>レ</sub>隔。若有<sub>二</sub>不安心之事<sub>一</sub>。常語述<sub>二</sub>其旨<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>結<sub>二</sub>恨<sub>一</sub>。況至于無賴姊妹<sub>一</sub>。慙扶持。又所<sub>レ</sub>見所<sub>レ</sub>聞之事。朝謁夕謁必白<sub>二</sub>於親<sub>一</sub>。縱爲<sub>レ</sub>我有<sub>二</sub>芳情<sub>一</sub>。爲<sub>レ</sub>親有<sub>二</sub>惡意<sub>一</sub>。早以絕<sub>レ</sub>之。若雖<sub>レ</sub>踈<sub>二</sub>於我<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>懇<sub>二</sub>於親<sub>一</sub>。必以相<sub>二</sub>親之<sub>一</sub>。凡非<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>病患<sub>一</sub>。日々必可<sub>レ</sub>謁<sub>二</sub>於親<sub>一</sub>。若有<sub>二</sub>故障<sub>一</sub>者。早以<sub>二</sub>消息<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>夜來寧否<sub>一</sub>。文王之爲<sub>二</sub>世子<sub>一</sub>也。尤足<sub>二</sub>欣慕<sub>一</sub>。凡爲<sub>レ</sub>人常致<sub>二</sub>恭敬之誠<sub>一</sub>。勿<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>慢逸之心<sub>一</sub>。交<sub>レ</sub>衆之間用<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>也。或有<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>公家及王卿<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>殊謗<sub>一</sub>。而言<sub>二</sub>不善<sub>一</sub>之輩。如<sub>レ</sub>然之間必避<sub>レ</sub>座而却<sub>去</sub>。若無<sub>レ</sub>便<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>座。守<sub>レ</sub>口<sub>二</sub>緘<sub>一</sub>。勿<sub>レ</sub>預<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>。縱人之善不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>之。況乎其惡哉。古人云。使<sub>二</sub>口如<sub>レ</sub>鼻<sub>一</sub>。此之謂也。非<sub>レ</sub>公若<sub>レ</sub>私。無<sub>二</sub>止事<sub>一</sub>之外。輒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>



他家。又妄勿<sup>ニ</sup>交<sup>與イ</sup>契於衆人。交之難古賢所<sup>レ</sup>誠也。縱有<sup>レ</sup>人。甲與<sup>レ</sup>乙有<sup>レ</sup>隙。若好<sup>ニ</sup>件乙<sup>一</sup>則甲結<sup>ニ</sup>其怨<sup>一</sup>。如<sup>レ</sup>此之類重可<sup>レ</sup>慎<sup>也イ</sup>之。又莫<sup>レ</sup>伴<sup>ニ</sup>高聲惡狂之人<sup>一</sup>。其所<sup>レ</sup>言事。輒不可<sup>レ</sup>聞驚。二度反覆與<sup>レ</sup>人交<sup>レ</sup>言。又不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>行<sup>ニ</sup>輒輕事<sup>一</sup>。常貴<sup>レ</sup>身重<sup>レ</sup>心。如是送<sup>レ</sup>日曾莫<sup>ニ</sup>誤忘<sup>一</sup>。常知<sup>ニ</sup>聖人之行事<sup>一</sup>。不可<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>無跡之事<sup>一</sup>。又以<sup>ニ</sup>我身富貧之由<sup>一</sup>。曾勿<sup>ニ</sup>談說<sup>一</sup>。凡身中家內之事。不可<sup>レ</sup>輒披<sup>披イ</sup>談之。始<sup>レ</sup>自<sup>ニ</sup>衣冠<sup>一</sup>及<sup>ニ</sup>于車馬<sup>一</sup>。隨<sup>レ</sup>有用<sup>レ</sup>之。勿<sup>レ</sup>求<sup>ニ</sup>美麗<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>量<sup>ニ</sup>己身<sup>カイ</sup>好<sup>ニ</sup>美物<sup>一</sup>。則必招<sup>ニ</sup>嗜欲之謗<sup>一</sup>。德至<sup>リ</sup>力堪何事之有哉。不可<sup>レ</sup>輒借<sup>ニ</sup>用他人之物<sup>一</sup>。若公事有<sup>レ</sup>限必可<sup>レ</sup>借用<sup>者ハ</sup>。用畢之後。不可<sup>レ</sup>移<sup>ニ</sup>時日<sup>一</sup>。早以返<sup>ニ</sup>送之<sup>一</sup>。故老及知<sup>ニ</sup>公事<sup>一</sup>之者。相遇之時。必問<sup>ニ</sup>其所<sup>知</sup>。聞<sup>賢者之行</sup>。則雖難<sup>レ</sup>及必企<sup>ニ</sup>庶幾之志<sup>一</sup>。多聞多見。是知<sup>レ</sup>往知<sup>レ</sup>來之備也。若有<sup>レ</sup>官之者。催<sup>ニ</sup>行僚下<sup>一</sup>。爲<sup>ニ</sup>一所長<sup>一</sup>之者。整<sup>ニ</sup>役其下<sup>一</sup>。各全<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>職以招<sup>ニ</sup>幹事<sup>一</sup>之

譽。若有<sup>ニ</sup>故障<sup>一</sup>之時。早奉<sup>ニ</sup>假文<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>申<sup>ニ</sup>障之由<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>申<sup>ニ</sup>故障<sup>一</sup>闕<sup>ニ</sup>公事<sup>一</sup>之時。其謗尤重。慎<sup>レ</sup>之誠<sup>ニ</sup>之努力<sup>カイ</sup>。節會若公事之日。欲<sup>ニ</sup>整<sup>一</sup>衣冠。早參入。爲<sup>ニ</sup>殿上侍臣若諸衛督佐<sup>一</sup>之者。當直日早參入。必可<sup>レ</sup>宿直。但至于文官人非<sup>ニ</sup>劇務<sup>一</sup>者。隨<sup>有</sup>事而殊能勤<sup>レ</sup>之。緩怠之聞重可<sup>レ</sup>畏者也。凡採用之時。雖有<sup>ニ</sup>才行<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>恪勤<sup>ニ</sup>之者<sup>一</sup>。無<sup>ニ</sup>薦舉之力<sup>一</sup>。縱非<sup>ニ</sup>殊賢<sup>一</sup>。僂俛之輩。尤堪<sup>足イ</sup>舉<sup>ニ</sup>達之<sup>一</sup>。大風疾雨雷鳴地震水火之變。非常之時。早訪<sup>レ</sup>親。次參<sup>レ</sup>朝。隨<sup>ニ</sup>其所<sup>レ</sup>職之官<sup>一</sup>。廻<sup>ニ</sup>消災之慮<sup>一</sup>矣。在<sup>レ</sup>朝也欲<sup>ニ</sup>珍重<sup>一</sup>於莊。在<sup>レ</sup>私也欲<sup>ニ</sup>雍容仁愛<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>小事<sup>一</sup>輒不可<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>慍色<sup>一</sup>。若有<sup>ニ</sup>成<sup>一</sup>過之者。暫雖<sup>ニ</sup>勘責<sup>一</sup>亦以寬恕。凡不可<sup>レ</sup>大怒。勘<sup>ニ</sup>人之事<sup>一</sup>。心中雖<sup>ニ</sup>怒思<sup>一</sup>勿<sup>レ</sup>出口。常以<sup>ニ</sup>恭謹<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>例事<sup>一</sup>。喜怒之心敢無<sup>ニ</sup>過餘<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>一日之行事<sup>一</sup>爲<sup>ニ</sup>萬年之鑑誠<sup>一</sup>。凡在<sup>レ</sup>宅之間。若道若俗所<sup>レ</sup>來之客。縱在<sup>ニ</sup>梳頭飲食之間<sup>一</sup>。必早可<sup>レ</sup>相遇<sup>一</sup>



也。捉髮吐哺之誠。古賢之所重也。家中所得物。各必先割十分之一。以宛功德用。沒後之事。豫爲格制。慥令勤行。若不爲此事之時。妻子從僕多招事累。或乞不可乞人。或失不可失之物。非一家之害。必招諸人謗。仍所得之物。必以割置。始自葬料。盡于諸七追福之儀。但清貧之人。此事尤難。然用意與不用意。何無差別。

以前雜事書記如右。予十分未得其一端。然而常蒙先公之教。又訪古賢。今粗知三事要。依萬一之勤。雖非才智。已登崇班。爲吾後之者。熟存此由。縱非如法必用意。可勤公私之事。

右九條殿遺誡以平戸侯珍藏本書寫以拾芥抄所載及百花庵宗固所授本并僧白玄梓行本校合畢

## 澁柿

### 明惠上人傳

承久三年の大亂の時。梅尾の山中に京方の衆多く隱置たるよし聞えければ。秋田城助義景。此山に打入てさがしけり。狼藉のあまり。如何思ひけん。大將軍泰時朝臣の前にて沙汰有べしとて。上人をとらへ奉て先に追立て六波羅へ參けり。折節泰時朝臣。物沙汰して侍に座せられたり。軍勢堂上堂下に充滿せり。義景上人を先に立て。彼前へ至て事のよしを申。泰時朝臣先年六波羅に住せらるゝ時。此上人の御事師及給しかば。先仰天して驚畏て。席を去て上にすへ奉る。此鉢をみて義景あやまり仕出しけるにやと興醒たる鉢也。さて上人宣ひけるは。高山寺に落人多く隱置たりといふ御沙汰の候なる。それはさぞ候らん。其故

は。高弁が有様。まゝ聞及人も候らん。若きより本寺を出て。所々に迷ひありき候し後は。日來習置候し法味の義理の心に浮だにも。更に不<sub>ニ</sub>庶幾<sub>一</sub>處也。まして世間の事においては。ひとたびも思量するにをよばずして。年久しくまかりなり候ひき。されば貴賤に付て人の方人せんと云心を發すといふとも。沙門の法に有間敷事に候。其上かゝる心の一念きざせども。二念と相續する事なし。何によりてか少も人の方人する事候べき。又人の祈は縁に付てしてたべと中人も多く候しか共。一切衆生の三途にしづみてさし當てくるしみ候をこそ先祈資べくは祈候はむすれ。是等を皆祈浮て後こそ。浮世の夢のごとくなる暫時の<sub>一</sub>をば祈ても奉らんすれ。大事の前に小事<sub>ナニ</sub>と返答して。更に不<sub>レ</sub>用して遙に年月<sub>スガ月をばるかにイ</sub>をつもれり。されば高弁に祈あつらへたりと中人。今

生界の中にはよもあらじと覺候。然るに此山は三寶寄進の所たるに依て。殺生禁斷の地なり。依て鷹に追るゝ鳥。獵ににぐる獸。皆こゝにかくれて命をつなぐのみ也。されば敵を逃るゝ軍士の勞して。命計を資て。木のもと岩のはざまに隠居て候はんするをば我身の御とがめに預て。難にあはんすればとて。情なく追出して敵の爲にからめとられて身命を奪れん事を顧りみん事やは候べき。我本師能仁のいにしへは。鳩に代て全身を鷹の餌となされ又飢たる虎に身をたび候しぞかし。其までの大慈悲こそ及候はずとも。かばかりの事だになくやは候べき。かくすことならば。袖の中にも袈裟の下にもかくしてとらせばやとこそ存候しか。向後も一可<sub>レ</sub>資候。是道のため難儀なることに候はゞ。即時に思<sub>ハ</sub>首を<sub>ハ</sub>はねらるべしと云々。泰時朝臣 仰を聞給。頻

に涙を押拭て申されけるは。子細もしらぬ田舎夷共の左右なく參候て。らうせき仕候けること返々不可思議に候。さて剩尊躰を是まで入まいらせ候條。其恐不<sub>レ</sub>少候。今度若無爲に令<sub>ニ</sub>上洛<sub>一</sub>候はゞ。京前に參上仕候て。生死の一大事を歎申べきの由。深心中に挾存ながら。此忿劇にさゝへられて。今に無<sub>ニ</sub>其儀<sub>一</sub>候つるに。不思議に御目にかゝり候事。しかるべき三寶の御はからひかど存候。就<sub>レ</sub>夫候ては。如何してか生死をばはなれ候べき。又如<sub>レ</sub>此の物沙汰に聊も私なく。理の儘にをこなひ候はば。罪にはなるまじきにて候やらんと云々。上人答給けるは。すこしきも理にたがひて振舞人は。後生までもなく。今生に頓て滅ならひ也。それは不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申。たとひ正理の儘に行ひ給とも。分々の罪まぬかれぬ事は有べし。生死のたすけとならん事は。おもひよらぬ事也。山

中にうそぶく僧侶すら。猶佛法の深理に不<sub>レ</sub>叶ば輪回暫免がたし。況や俗塵の界に心を發して。雜念にほだされて。佛法といふ事をもしらずして。あかしくらさん人をや。世に大地獄といふものゝ現するは。唯其等の御様なる人の墮てにへかへらん料にてこそ候へ。無常の殺鬼は弓箭にも不<sub>レ</sub>恐。刀杖にも不<sub>レ</sub>惶者也。只今にても引づり奉てゆかむ時は。いかゞし給べき。げに生死をまぬかれんと思ひ給はゞ。暫く何事をも打捨て。まづ佛法といふことを信じて。その法理を能々わきまへて後。せめては正路に政道をもをこなひ給はゞ。をのづから宜しき事も候べしと云々。泰時大に信仰の躰に住して。更におもひ入たる様也。扱御輿用意して召せ奉りて。門の際まで自送出し奉ける。其後世聊靜りて。常に此山に參詣して法談申されけり。次の歲義時朝臣逝去して後。

天下の事掌に握られける寂初に。丹波國に大庄一所。梅尾に寄進せられたりければ。上人被<sub>レ</sub>仰けるは。かゝる寺に所領だにも候へば。住する僧ども。いかに懶墮懈怠にふるまふとも。所領あれば僧食事闕まじ。衣裳補ぬべしなど思ひて。無道心なる者つゞき居て。彌不當にのみ成行候べし。寺のゆたかなるに付て。兒ども取をき酒もりし。兵具をひつさげ。不可思議のふるまひ不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>勝計<sub>一</sub>。さもと有山寺の佛のいましめにたがひて淺ましく成行は是より事起れり。只僧は貧にして人の恭敬を衣食とすれば。自放逸なる事なし。信々として誠しく行道する所は。さすが末代なりといへ共。十方日那の信仰も甚しければ。自然に法輪も食輪も盛也。不律不如法の僧侶の肩をならぶる處は。只僧家謗法の罪をあたふるのみにあらず。合力貴敬の輩もなければ。隨日衰微

して。荒廢の地とのみなれり。されば共に誠の本意にはあらねども。二をくらぶれば。人<sub>ノ</sub>貴敬せざらん事にはぐかりて。不律儀にあらずは。暫法命を繼方はまさるべく候也。又所領のよせてよかるべき寺も候はんすれば。左様の所に御計なんども候べし。かゝる寺に所領なんどの候はんは。中々法の爲よろしからじと覺候。返々かやうに佛法を御崇候事有難候へ共。此所に限ては存旨候とて。返し給けり。秋田城介義景は其後出家して上人の御弟子に成て。大蓮房覺智とてたつとき僧に成たりけり。

秋田城介入道大蓮房覺智語て云。泰時朝臣常に人に逢て語給ひしは。我不肖蒙味の身たりながら。辭する理なく政を官りて天下を治たる事は。一筋に明惠上人の御恩也。其故は承久大亂の後。在京の時常に拜謁す。或時法談



の次に。いかなる方便を以てか天下を治る術候べきと尋申たりしかば。上人被<sup>レ</sup>仰云。何様に苦痛顛倒して一身穩ならざる病者をも。良醫是をみて。これは冷より發たり。是は熱にをかされたりとも。病の發たる根源をしりて。藥を與へ灸を加れば。則其冷熱さり自病退き。身軀快がことし。かやうに國の亂て治がたきは。何に侵さるゝぞと先根源をよく知給ふべし。さもなくて。今目の前にさし當たる罪過ばかりををこなひ。忠賞ばかり沙汰し給はば。彌人の心かたましくわわくにのみ成て。耻をも不<sup>レ</sup>知。前を治ば後より亂。内をなだむれば外は恨つきずして。しづまり治べからず。これ妄醫寒熱を不<sup>レ</sup>弁して。一旦苦痛の有所を灸し。先彼が願に隨て猥に藥をあたふるがごとし。患をつくして療すれ共。病の發たる根源を不<sup>レ</sup>知故に。倍病惱重て不<sup>レ</sup>愈がごとし。さ

れば世の亂るゝ根源は。何より起るぞといへば。只欲を本とせり。此欲心一切に變じて。萬般の禍となる也。是天下の大病にあらずや。是を療せんと思ひ給はゞ。先此欲心をうしなひたまへ。天下をのづから勞<sup>サ</sup>せずして治るべしと云々。秦時申云。此條尤肝要にて候。但我身計は心の及候はん程は此旨を堅守べしといへども。人々此無欲にならずは。天下治がたし。如何して此無欲の心を人毎に持する謀候べきと云々。上人答たまはく。其段はやすかるべし。只大守一人の心によるべし。古人曰。未<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>其身正影曲。其政正國亂<sup>一</sup>と云々。此正といふは無欲也。又云。君子居<sup>ニ</sup>其室<sup>一</sup>言<sup>ヲ</sup>出。善則千里外皆應<sup>レ</sup>之と云々。此善といふも無欲也。只大守一人。實に無欲に成すまし給はゞ。其德にイいふせられ其用に耻て。國家の万民自然に欲心うすく成べく。小欲知足ならば。天下や

すく治るべし。天下の人の欲心深訴來らば。我欲心のなをらぬゆへぞと知て。我方に心をかへして。我身を耻しめ給べし。彼を咎に行給べからず。縦ば我身のゆがみたる影の水にうつりたるをみて。我身をば正しくなさずして。影のゆがみたるを噴て。影を咎に行はんとせむがごとし。心ある人のそばにて見てをこがましく思事也。傳聞。周文王の時一國の民くろをゆづりしも。たゞ文王一人の德國土に及し故に。万人皆かゝるやさしき心になりし也。くろをゆづると云は。我田の堺をば人のかたへ多くさりゆづりて。我方の地をば少くせし也。たがひにかやうにゆづりあひて。我田地を人のかたへやらんとはせしかども。かりにも人の分をかすめ取事はなかりき。他國より訴訟のため都へのぼる人。此周の國をとほるとて。この有様を道の畔にて見て。我欲のふかき事

を耻。路より歸にけり。此文王我國を治のみならず。他國まで徳を及玉ひしも。只一人の無欲に依て也。剩此徳充て天下を一統にして。八百の祚を持ち。されば大守一人の小欲に成給はゞ。一天下の人皆かゝるべしと云々。此教訓を承しに。心肝に銘じて深く大願を發し。心中に誓て此趣を守き。隨て義時朝臣逝去の時。頓死にてありしかば。讓狀の沙汰にも及ばざりし程に。二位家の命にて。泰時嫡子たる上は。分限少くてはいかにとしか天下の御後見をもすべきなれば。皆を官領して。舍弟共には分に隨て少宛わけあたふべきよし承しかども。つら／＼父義時の心を思ふに。我よりもはるかに此舍弟どもをば寵愛せられしぞかし。然ば父の心にはかやうにこそとらせたく思ひ給ひけんと推量りて。朝時重時以下に宗と多く分與て。泰時が分には三四番の末子の

分限ほど少取き。ケ様にては。何としてか御後見をもすべきとて。二位家よりも諫られしかども。今までは聊も不足とおもふ事もなし。如此萬小欲に振舞し故やらん。天下日々に隨て治。諸國年を逐て安穩也。孝のよろしきを見るはしげく。訴のゆがめるを聞はすくなし。是一筋に此上人の恩言によるなりとて。涙をぞ拭ひ給ける。此大守の前に。訴論人番て來望には對面し給て。しばしつくくと兩人の面を守て被<sub>レ</sub>命云。泰時天下の政を官て。人の心に奸曲なからん事を存。然に今爭ひ來らるゝ二人の中に。一方は必定奸曲なるべし。廉直の中に論有事なし。來何の日。兩方文書を持來らるべし。當日に正して。奸謀の仁においては。則其輕重に隨て。忽に死罪にも流罪にも中行べし。奸智の者一人國にあれば。万人に禍を及す失有。天下の歎何事か是にしくべ

き。とくく歸給べしとて立れける。此躰を見るに。頓ていかなるめにも合せられぬべし。益なしとて各歸りて後。兩方云合て。或は和談し。或はひがごとの有方は私に負て。論所をも去渡けり。無欲なる躰を振舞人をば。甚感じ賞し。欲がましき者に向ては。或はいかりていましめ行ひ給しかば。人々いかにもして。無欲に尋常なる事し出して聞え奉らんとのみ。遠き堺も近き所も。心をひとつにして勵しかば。人の物掠とらん奪とらんとする訴は。絶てなかりき。さるに付ては。國々穩におさまりて政罷し。からず。寛喜元年天下飢饉なりし時は。鎌倉京を初て諸國の富る者に。我所負主に成て委狀をかくせ。判をくはへて米を借て。其所其郡其鄉村々。餓死せんとする者の所望に隨て。むらなく借給ひにけり。來々年中に世立なをらば。本物計慥に返納すべし。利分はわが方よ

り添て返さるべしと法を定られて。面々の状を召をかれけり。只賦給はゞ。所の奉行も紛をかして。誑句も有ぬべければ。紛かさじために。かしこかりし沙汰也。さて世立なをりて面

面返納すれば。本所領なども有て便有人のをば。本物計をさめさせて。本主には約束の儘に。我方より利分をそへて。慥に返しつかはされけり。無縁の聞有者のをば皆ゆるし給て。我領内の米にてぞ本主へはかへしたひける。左様の年は。家中に毎事儉約を行て。疊を初として。一切のかへ物どもをも古物を用。衣裳の類もあたらしきをば着せず。ゑぼしの破たるだにも。古きをばつくろひつがせてぞき給ける。夜の燈なく。晝の一食をとゞめ。酒宴遊覧の儀なくして。此費を補ひ給けり。心ある者の見聞たぐひ。涙をおとさずと云事なし。然るに大守逝去の後。漸父母にそむき。兄弟を失はん

とする訴論多成て。人倫の孝行日々に添てをとろへ。年に隨て廢たり。實上人の御教のごとく。一人正しければ。万人隨へる事分明也けるとぞ申傳<sup>傳イ</sup>し。

泰時朝臣。此山中に入來。法談の次に上人問奉て云。古賢云。人多則勝<sup>レ</sup>天。天定破<sup>レ</sup>人云々。然に只武威を以國をかたづけ給といふとも。其德なくば果して禍來らん事久しからじ。賢聖の詞不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>疑。自<sup>レ</sup>古和漢兩國に以<sup>レ</sup>力天下を取たぐひ。更に長く持者なし。忝も我朝は。神の代より至<sup>レ</sup>今九十代に及て。世々受繼て皇祚他をまじへず。百王守護の三十番神。末代と云ともあらたなる聞有。一朝の万物は。悉國王の物にあらずと云事なし。然ば國主として是をとられむを。是非に付て物惜<sup>まん</sup>する理なし。縱無理に命を奪といふとも。天下にはらまるゝたぐひ。義を存せんもの。豈いなむ事あらんや。



若是をそむくべくば。此我朝の外に出て。天竺震旦にも可<sub>レ</sub>渡。伯夷叔齊は。天下の粟を食じとて。蕨を折て命をつぎしを。王命にそむける者。豈王土の蕨を食せんやとつめられて。其理必然たりしかば。わらびをも不<sub>レ</sub>食して餓死けり。理を知心を立たる類皆如<sub>レ</sub>此。されば公家より朝恩被<sub>二</sub>召放。又命を奪給と云とも力なし。國に居ながら。惜そむき奉給べきにあらず。然を剩私に武威を振て。官軍をほろぼし王城を破り。あまさへ太上天皇を擒にし奉て。遠嶋にうつし奉り。皇子后宮を國々に流し。月卿雲客を所々に迷し。或は忽親類に別て殿閣にさけび。或は立所に財寶を奪はれて。路巷に哭する躰をきくに。先打見る所其理に背けり。若理に背ば。冥の照覧。天のとがめなからんや。大につゝしみ給へし。おぼろげの徳を以て其災をつぐのふ事有べからず。是をつぐの

後鳥羽順德

ふ事なくむば。禍のこん事不可<sub>レ</sub>回<sub>レ</sub>踵。なみなみの益を以て。此罪をけす事あるべからず。是をけす事なくば。豈地獄に入事如<sub>レ</sub>矢ならざらんや。御様を見奉るに。是程の理にそむくべき事。し給べき事にはあらぬに。いかにと有けることにやと。拜謁の度には。且は不思議に。且は痛敷存と云々。泰時朝臣。こぼれおつる涙をさらぬ躰にをしのごひて。疊紙を取出し。はなかみなどしてをししづめて答申て云。此事所存の趣。日來委語申度存候つるを。さして次而なく候て。自然に罷過候き。故將軍大相國禪門の人類を滅し。龍顔を休奉り。万民の愁をたすけ。君の爲に志をつくし。忠の爲に私をわすれ。こき味をなめては。先君にそなへん事をいとなみ。珍敷財をまうけては。則君に獻せん事を専らにす。有時はいさめ。有時は隨ひ奉しかば。大將の門に有とし有もの。上一人

をおもんじ奉らずといふ事なし。如レ此の功を感じ被<sub>二</sub>思召<sub>一</sub>けるにや。官位俸祿日々にそひ。年々にかさなり。大納言大將になさるゝのみにあらず。日本國惣追捕使を被<sub>レ</sub>給き。かゝる時は。毎度被<sub>二</sub>固辭申<sub>一</sub>いはく。賴朝凶徒をしづめ御慮をやすめ。まづしき民をなでて。勅裁を亂ざらんことを存。わかきより心にかけて願來る處也。然に今飽まで官位をきはめ。恣に俸祿にあき。且此志をけがすに似たりと。かたく子細を被<sub>レ</sub>申けれども。勅定再三に及ければ。力なく勅命そむきがたきによりて。泣々終に領掌被<sub>レ</sub>申けり。仍親類眷屬恩賞に浴する中に。祖父時政。父義時。殊に厚恩にはこる。是皆故法皇の御惠の下を以て榮運をひらけり。されば彼御子孫においては。彌無<sub>二</sub>三心<sub>一</sub>忠を致し。益唯一つの功をつむべき旨。深心中に挿候き。然に法皇崩御なり。幕下<sup>後白河</sup>逝去の後。公家

の御政廢はてゝ。忠有者も忠を失。無<sub>レ</sub>罪被<sub>レ</sub>罪輩不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>勝計<sub>一</sub>。諸國大に煩ひ万民甚愁。差當誤なき族。重代相傳の庄園を被<sub>二</sub>召放<sub>一</sub>。あしたに給るものは夕に召れ。昨日被<sub>二</sub>下所<sub>一</sub>は今日改らる。一郡一庄に三人四人の主在て。國々に合戦たゆる事なし。所々に罕々の人多くして。山賊海賊みちみてり。諸人安堵のおもひなく。旅客の通ずる事まれ也。去に付ては。飢寒にせめらるゝ者多く。妖厄<sup>ヤモイ</sup>にあふ者數を不<sub>レ</sub>知。此事此兩三年殊に放廣の間。關東深歎存る刻。結局誤なき關東を滅さるべき由。内々洩聞え候しかども。さしたる支證なく候し程に愁中に不<sub>レ</sub>及。謹て恐怖の處に。既に伊賀判官光季課て。數万騎の官軍關東へ發向のよし聞え候し間。父義時ひそかに予を招き語云。已に天下此儀に及。いかゞはからふべき。内議をよく談じて。其後竹の御所に參て。二位家に可<sub>二</sub>申合<sub>一</sub>。

由申候間。泰時答申て云。平大相國禪門。君を  
なやまし奉り。國を煩はしによりて。故大  
將殿御氣色を承て討たいらげ。上をやすめ下  
を治てより以來。關東有忠無誤所に無過し  
て罪を蒙らん事。是偏に公家の御誤にあらず  
や。然ども一天悉是王土にあらずといふ事な  
し。一朝にはらまるゝ者。宜君の御心に任せら  
るべし。さればたゝかひ申さん事理にそむけ  
り。不<sub>レ</sub>如首をたれ手をつかねて。各降人に參  
てうれへ申べし。此上に猶首をはねられば。命  
は義に依てかろし。何のいなむ處かあらん。無  
<sub>レ</sub>力事也。若又芳免をかうぶらば可<sub>レ</sub>然事也。い  
かなる山林にも住て。殘年をも送給べきかと  
申たりしほどに。義時朝臣暫案じて。尤此事  
さる事にてあれども。それは君王の政たゞし  
く。國家治る時の事也。今此君の御代と成て。  
國々亂れ所々不<sub>レ</sub>安。上下万民愁を抱かずとい

ふ事なし。然に關東進退の分國計。聊此横難  
に不<sub>レ</sub>及して。万民安樂のおもひをなせり。若  
御一統あらば。禍四海にみち。わづらひ一天  
に普くして安事なく。人民大に愁べし。是私を  
存じて隨申さざるにあらず。天下の人の歎に  
かはりて。たとへば身の冥加つき。命をおと  
すといふとも。可<sub>レ</sub>痛にあらず。是先蹤なきに  
あらず。周武王。漢高祖。既に此義に及歟。其  
は猶自天下を取て王位に居せり。是は關東若  
運をひらくといふとも。此御位を改て。別の君  
を以御位に即申べし。天照太神。正八幡宮も何  
の御とがめ有べき。君をあやまり奉るべきに  
あらず。申すゝむる近臣共の惡行を罰するに  
てこそあれ。急可<sub>ニ</sub>罷立。此旨を二位家に申べ  
しとて立しかば不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>力。これ又一義なきに  
あらざる上は。父の命依<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>背なき隨き。仍  
て打立て上洛仕しに。先八幡大菩薩の御前に

ある赤橋の本にして馬より下。首をたれて信

心を致。祈申て云。此度の上洛背理。忽に泰時

が命を召れて後生をたすけ給へし。若天下の

助と成て人民を安じ。佛神を興し奉るべきな

らば。哀憐をたれ給へ。冥慮定照覽有歟聊私を

不存云々。又二所三嶋の明神の御前にして誓

事有き。其後は偏に命を天に任て。只運の究あ

らん事を待き。而聊の難なくして今に存せり。

若是始の願のはたす所歟。然にもし予緩怠に

して。佛神を興せず。國家の政を大にたすけず

は。罪一人に歸すべし。仍一度食するに。士來

れば終らずして急に是を聞。一度かみけづる

にも。士來れば終らざるに是にあふ。一休一寢

猶不安。士愁をいだきて待ん事を怖る。進ん

では深万人を安ぜん事を計。退ては必一身に

失あらん事を思といへども。天性蒙昧にして

不<sub>レ</sub>及所あらん歟。誠に其罪難<sub>レ</sub>免。今慈悲の仰

を承て。感涙難<sub>レ</sub>禁云々。

上人御語抄。

人は。あるべきやうはと云七文字を可<sub>レ</sub>持也。

僧は僧の有べき様。俗は俗の有べき様也。乃至

帝王は帝王の有べき様。臣下は臣下のあるべ

きやう也。此あるべき様をそむく故に。一切あ

しき也。

### 文覺上人消息。

かさねての仰委承候ぬ。御返事は先に申て候

へども。猶同じ事を申候也。返々も故大將殿頼朝の

仰をうけたまはるとおぼえ候て。忝哀にこそ

覺候へ。御祈の事は。故大將殿。東大寺修造の事

申行せ給て候き。又高雄の興隆も偏に御力に

て候しかば。其功德にて。後世も定て資からせ

給候ぬらんと存候。文覺も此力に依て。佛の恩

徳を報て。衆生を利益する事にて候へば。御恩



の至無<sub>ニ</sub>申計<sub>ニ</sub>悦存候。仍仰なき先より。安穩に  
おはしませと念願する事にて候。但徳を行善  
を好む人にとりて。祈はかなふ事にて候。不義<sub>愚義</sub>  
に振舞家には。いかなる祈も不<sub>レ</sub>叶候也。不義<sub>愚義</sub>  
とは。無道に物の命を斷。酒にめで財にふけ  
り。歡樂して明し暮すほどに。人の歎もしら  
ず。國の安からぬをかへりみざるを申事にて  
候。徳とも善とも申候は。佛法をあがめ。王法  
を重じ。世をすくひたすけはぐくむ心也。あ  
やしの賤男賤女。百姓万民にいたるまで。万の  
物に父母のごとくにたのまるゝ心ばへをもち  
たるを申候也。かやうの心づかひはなくて。  
放逸不思議成が。さすが我身をたもたばやと  
おもふ人。僧侶にあつらへ諸道に仰て祈禱<sub>禱イ</sub>す  
るを。僧侶も可<sub>レ</sub>然仰蒙たりとて祈申す。まし  
て外法の諸道は云に不<sub>レ</sub>及。たのもしげに申て  
祈たれども。其檀那よからざれば。あへて感

應なく。かへて惡候也。さ候へば。僧もおんや  
うしも。しつらひたる心なくて色代せず。有  
の儘にさはく候はん者に。御祈を仰付て。  
御身のとがをも聞召て。押直々々してぞよく  
候べき。御身のをさまらずして。只祈<sub>いのれくイ</sub>と計にて  
は。あやうき事にて候。殿<sub>題家</sub>の御身は日本國の  
大將軍にておはします。されば祈申<sub>まいらせイ</sub>さん者も。  
廣大正直の心を以。努努千秋万歳して。空<sub>イ元</sub>ぼめ  
し奉らぬ無双の强者の。しかも慈悲あらんが。  
御祈の師には可<sub>ニ</sub>相應<sub>ニ</sub>候也。惣而は君を守た  
てまつり。御身を祈んとおぼしめさば。先國  
土を祈万民を祈らせ可<sub>レ</sub>給候。祈は人の<sub>カイ</sub>分際  
による事にて候。威勢世に蒙らしめず。人にも  
用られず。さる様なる者こそ我身を祈事にて  
候へ。此道理をしらずして。近代は君も臣も  
唯身をのみ祈らせ給へば。はかく敷事候は  
す。佛神の冥慮にも不<sub>レ</sub>叶。蒼天の照覽にもた

がひ候也。返々も鎌倉殿の御恩にて。無道の愁なげきもなく。邪の禍にもあはぬぞと。万の人に思はれたのまれんとおぼしめせ。左だにも候はゞ。別而御祈候はずとも。伊勢太神宮。八幡大菩薩。加茂。春日。皆々嬉しと思召。諸佛。諸聖。諸天善神。必々守まいらせさせ給<sup>候べく候イ</sup>べき也。大かた<sup>ハ</sup>・佛法いまだ候はざりし時。天竺。震旦。日本國に各賢王聖主おはしまして。世間も日出度。一切諸人上下たのしく候き。君も寶祚長遠にて。百姓万民の父母とならせ給候き。則三皇五帝とて。堯舜の君も佛法以前の人にておはしまし候ぞかし。さ候へば。無量億劫にもあひがたき三寶にあひ奉らせ給得分には。只後生を祈て。三界の火宅を出。生死のくるしびとて。心うきめにくり返<sup>たくしてイ</sup>／＼あひ候事をまぬかれて。佛果菩提にいたらんとおもふ祈を。君も臣も心にかけてさせ給べしとこそ

覺候へ。此上の佛法も。外法も災を拂。福を可<sup>レ</sup>招事明に候。されば三國相傳して。其効驗も利益もなきにあらず。然ば先御身ををさめて。政を能々調て。其上に御祈候はゞ。響の音に應すると申たとへのごとく。混沌<sup>ヒタエ</sup>の鎚にて有べく候。さても近代の様。人の作行<sup>サマエ</sup>。功德も祈も人目計にて候。眞實の底には。國の費人の歎のみにて候へば。佛も神もうけさせ給はず候也。佛神は偏に德と信とを納受して。物により寶<sup>時</sup>を悦ばせ給はぬものと可<sup>ことイ</sup>知食<sup>イ</sup>にて候也。かやうの事の謂を御意得候て。武家を治。帝王の御守と成。諸人の依怙とならせ給候はゞ。聊<sup>わうイ</sup>もあしく腹ぐろく思まいらせん者をば。日本國三世の敵にて候はんずれば。其身自然に可<sup>レ</sup>滅候。如<sup>レ</sup>此委様をも申ひらかすして。蒙<sup>レ</sup>仰を悦として。御氣色をよからんとのみおもひて。佛神の御心をばかへりみおもはず。たの

もしげに申なして。御祈申候はん事は。田地の費と成。庫倉の物のみうせて。御爲も一切其益有まじく候。却て御怨にて候也。文覺も罪業を受べく候。さる御損をば。いかゞとらせまいらせ候べき。猶々伊勢八幡等の太神善神は。財寶珍物をまいらするには。ふけらせ給候はぬが如く御存知候へ。たゞ心うるはしく。身をさまりたる人をまぼらせ給候也。其故は八幡の御託宣にいはいく。わける銅の炎をば吞とも。心直ならざらん者の手向をば不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>受給<sub>一</sub>云々。同託宣に云。日夜に天下國家万民を守護するに不<sub>レ</sub>遑。若は國土も豊ならず。又世上も亂逆ならば。諸天三寶の御にくみにやあづからん。穴賢く候めり。日本國は神國也。他の國よりも我國。他の民よりも我人と御誓あり。されば日本六十餘州は。いかなる野のすゑ。山のおくまでも神の御知行也。然を世間の

物念御身の煩敷時。私に在所を御計有て。所領を御教書にて神社佛寺へ御寄進の事は。更に神慮に不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶候。只御祈には正直慈悲を先として。内典外典其名のうるはしき者に仰て。施物を限らず御祈誓候はゞ。君も御心安く。民百姓も樂候。佛神の擁護も疑有まじく候。主なき所領は有間敷候。夫を神社佛寺に寄進事は返々神道に可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>御背<sub>一</sub>候。是を能々御心得可<sub>レ</sub>有候。皇居を守。人民を育ませ給事に候へば。偏に諸の寺社等を御心中に不<sub>レ</sub>忘。破壊顛倒せんをば。限有事に付て修理可<sub>レ</sub>有候。仍此國の民の愁は。うたてしき事にて可<sub>レ</sub>有候。大海はくぼきに依て水たまり候様に。心うるはしき人の身に福徳は集候。さてもさても八幡の。心うるはしきものをまぼらんと仰候は。心うるはしきと申候は。帝王攝政將軍の。搆て身の樂を思はず。只いかにもして人

をついやさず。人をくるしめ侘しめず。國土をたのしく安じて。寒暑時をあやまたず。飢疫の禍なく兵亂なく。浪風もたゞず。世間を靜になさんと營給を。心正きとは申候也。返々も殿の御身は。武士の徳を一も不洩双備と勵せ給へ。扨君の御敵と成ものは。謀反人にもあらず。無道に人をわびしむる怨人にもあらず。させる罪なからん者をば。搆て／＼ほろぼさじと思食。いたく狩漁をこのみたのしみて。そぞろに物の命を殺事をなさせ給そ。物をころさず物の命を扶を能將軍とは申候也。然に我身をさまらずして。天下の人によき人とも思はれさせ給はぬは。山だち。海賊。強盜。竊盜多くして。終には國のほろび候也。制禁頻に下。御下知しげく成候へども。彌仰こそかろく成候へ。一人を斬せ給共惡黨十人に可成候。いよいよこそあしく候はんすれ。是をば我御身

の科とはつや／＼不<sub>ニ</sub>思召<sub>一</sub>して。惡黨の科とのみ思召て。捕よ。搦よ。うて。はれ。召籠よ。籠圀園に入よ。くびを切。手足を斷などと被<sub>レ</sub>仰候はんも心うく候べし。扨後生の罪をば如何せさせ給べき。全人のする科にてはなし。只我身のをさまらぬ科とふかく思召。武家の政道は。いかさまにも物を知て候し人に問し時。よに安しとて只一口に答へ候しは。的を射に似たりと申候也。是を御心得候へ。是は日出度本文にて候。さて御身だに治候ぬれば。冤あれ角あれとの御いましめもなく。御下知もなく。御教書も候はねども。あなおそろしとて。自然に國土はをだしく候也。かく日出度時に當て。古今の間に惡黨なきにはあらず。身をさめ世をすくはせ給てのうへに。わろからんえせものをうしなはせ給候はむ事は。菩薩の大行にて候べし。世も靜り候べし。御教書もお



もく候べし。御罪にも成まじく候也。全仰忝候へば。かやうに所存の趣重て申候也。故大將殿は文覺をばひた口の強きものとおぼしめて候し也。殿には別て奉公も候はぬに。是ほどまで申候事恐存候。御許候へ。殿は若より樂たうとくて。人の歎民のくるしびをしらでやましまさんと淺ましく痛しく思ひまいらせ候間。いづくへなりとも。まれに流しまいらせて。暫わびしき目をみせ參らせ給へ。それぞいとをししく思給。至極後の御樂御イにて候べきと故大將殿には内々申て候し也。京中の者申合候なるは。いたく狩を好て人の歎をしらせ不給。世の費をもちへりみさせ給はぬ。すべていさむる事をきゝ入させ給はず。彌御前あしくなる故に。人皆口をとぢて。只目出度おはしますとのみ申をききて。すべて御身のとがをば一つもきかせ給はず。しらせ給はぬとさ

さやきて。謗申げに候也。若左様におはしまさば。いかでかおやの御跡を續て。帝王を守まいらせ。國土の固とはならせ給べき。それを押直させ給ての上の御祈にて可有候。夫をなをさせおはしまさずば。いかに祈まいらせ候とも。しるし有がたく候。まして文覺などはかなふまじく候。あるまゝの心を心にまかせて申候へば。一定うとまれまいらすべく候。それくやしく思まじく候也。能てもよくおはしませとてこそ申事にて候へ。物知たる人々の本文を引て申を承れば。爲<sub>レ</sub>君爲<sub>レ</sub>世よき事を只一言に申出したるは。千兩の金をまいらせたるにははるかにまさり候と。明王は定をかせ給ひて候なるに。げにも殿の御身には。金をば何にかせさせ給ふべき。君に黄金をまいらせさせ給はんよりは。國土をしづめて米穀を多くなし。民をゆたかに成て進せさせ可<sub>レ</sub>給

候。それぞおほきなる御忠にて候べき也。いか

にもいかにも我御身の咎を聞せ給へ。過をさ

かすして國土を治んとするは。病をいとひて

藥をにくむがごとくのことと承候なり。咎をき

くには色代せざらん忠誠節イの人。宗徒は御臺所

にて有べく候也。混口きくイの茂法師に御目をみせ

て。やはら密々申させて聞召。謗まいらすれ

ばとて。いかにも御腹立候な。能々念じて聞

召。あつきやいとを堪てやけば病はいゆる也。

所詮此御代は何事もめでたしと色代申さ

む者に。過たる毒は有間敷也。我咎をいひ知

する者に。過たる忠はなしとふかく可おぼめしつめにイ思召

候。御心にかなひていとをしくと。是はえせ

者と知。にくゝ見たからず思召とも。是は能者

と思召。世を治する謀には。只此事第一の寢詮

至極にてありげに候也。重々御文給はり候事

忝候へば。恐々申候也。恐々イ元謹言。

正月廿三日ナイ

文覺

鎌倉殿

御返事

左衛門督源家殿于時左近衛中將

正治元年十二月之比。被

進御教書於文覺云々。同二年正月此御返事

被申候云々。

賴朝佐々木ニ被下狀。

建久二年辛亥潤十二月廿三日丁卯。佐々木小

次郎兵衛尉定重。依山門訴被處流刑對馬

嶋之處。不慮鬪諍出來被殺害之由。今日有

其說。幕下被聞食驚五フ云々。

廿八日壬申。佐々木小次郎兵衛尉定重横死事。

流言不及三二度。然而非無其疑。依難默

止。今日爲御訪被遣委細御書於父左衛門

尉定綱許云々。未趣配國。

次郎兵衛事。まことしくは思召ね共。世のなら

ひさる事もなからむ哉。不便の事也。一方ならぬ心中ども。思召やらるゝ也。わかき者のくせといひながら。餘に心とくはやり過たる者にて有と御覽せしに。案のごとく心みぢかく物さはがしくて。父兄弟にも咎をかけ。天下の大事ともなす也。結句は身も終にけるにこそあんなれ。事の次而なれば仰らるゝぞ。定綱は猶も子共を持たれば。いひをしへよかしと思召也。武士といふ者は。僧などの佛の戒を守るなるがごとくに有が本にて有べき也。大方の世のかためにて。帝王を護まいらすうつはもの也。又當時は鎌倉殿の御支配にて。國土を守護しまいらする事にてあれば。錐を立るほどの所をしらんも。一二百町を持ても。志はいづれもひとしくて。其酬に命を君にまいらす身ぞかし。私の物にはあらずとおもふべし。さるについては。身を重くし心を長く

して。あだ疎にふるまはず。小敵なれども侮心なくて。物さはがしからず計ひたばかりをするが能事にて有ぞ。ねたさはさこそ有けめ共はづかしかるべき武士にもあらず。何にもたらぬ宮仕法師と云賤き者に寄合て身を損じぬるは。心短きがいたす處也。身を徒になさんには。多くの御恩のむくひも有なん哉。無下に臆病なき事也。古き物語云傳たるには。多田攝津守殿のもとに。四天王とて聞えたるをのこ共の中に。公時と云は自知有て宗としける。綱と云は新參にて有が。公時に心の剛に成様をしへよといひければ。公時が返答に心の剛をならはむとおもはゞ。臆病を習へといひければ。綱胸をひらきけり。此事を能々思ひ續れば。いみじき才覺にて有也。かならずしも臆病なれとは教しもせず。心ながく案じはからへ。用心を能せよといひつる心也。唯うち有事だ

にも。大事を思はからふ者。物とがめをせず。事ならぬことを事になさじといふぞかし。増て君の御犬事にまいらすべき命を細事故に失候はむには。人たね有なん哉。さる不忠の<sup>その</sup>をのこには。所知を給ても何かはせむ。遠からぬ事ぞかし。早河の戦の時は。敵既に近付参事五六度也。思食切たりしかども。御心ながくためらひき。心短くては。日本國の權を取けん哉。まな鶴の海を渡し給し時の心細さは。かゝるべしとはおぼしめさざりしか共。廿万騎の御勢をぐして。きせ川へ着せ給ひたりし時は。何様に静りたる時の御心地よりも。猶いさましかりし。大方源平の亂なれば。唐土までも聞えざらんや。人もさこそは討れぬらめと覺ぬべきを。御方にとりては。北條三郎。三浦介。狩野介。那田與市。藤田小三郎。河原太郎。同次郎。此等計こそ討死の者にては有らめ。是等

は自然の御運のしからしめたる事といひながら。心ながきたばかりの末。ひかずばかりんやは。されば去年の御在京に。初て院の<sup>白河</sup>見参に入て。さまゝの御諛共を下されし中に。平大相入道の心短くて。何事<sup>に</sup>も念ずる事の叶ざりしが。かくては世をたもち。天下の御うしろみ申事有べからず。臣はいみじく心ながくて。つらき事をもゆゝしく忍びにけるが。有難も行末もたのもしく思召ぞよと御感有き。すべて筆とりもまして弓取も。むかひたる目計かかりて故實なからん事は。世にもはかなかるべき事也。たとへば鹿狐をも見あひぬるを<sup>疑</sup>けの事といひて射んには當りこそせざらめ。却て物題のかはりうする先表也。便宜能寄合こしらへて。たらゝをもむけて。射にくき所にて弓をひき。まうけえたる所にて。矢を放つべきにこそ。一旦心のはやりの儘にしたる事



の後悔ならぬ事はなし。土佐房。常陸房は僧の身ながらもうるさき剛の者なるによりて。さて土佐も命をまいらする上は。左右なき事なれ共今少はやり過てあぶなきかたのみえしにあはせて。九郎判官に討れにき。常陸は心しづまりたるにて。十郎藏人をもいみじくたばかりすましてからめ取て。思のごとく首をも切て奉き。もとより一人當千と云事は。一人して千人にはいかでか向べきなれども。はかりごとをよくし。居ながら多勢をはろぼす事を名付たる也。定綱は心も剛に故實もたけたり。舊武者にこそ有に。子共が何も千騎にぬけてかけ出んとみえたるは。心地よけれども猶もはやり過たるくせ者共にて有なんめれ。能々教しづめて。御大事にも合べき也。波多野右馬丞が。世にさる者にて有しも。上總介が奉公深かりしも。悪きことありて御勘

當ありき。かやうに御計有こそ御本意なれ。宮仕法師の故より事起りて。京より流されまいらせたること。見ぐるしく御面目なくて。公私の名折にはあらずや。只いちはやき咎一つより起たる也。定綱は宮仕も勳功も有がたく。御心安も思食ばこそ。かたへもあらそひし箭開の餅の二の口をも給て。他の人の恨をもおひたりしが。又近江の國をも預たびぬれば。就中件の國は都もちかく。聞る山三井寺もあれば。隣の狼藉向後とてもなからんや。能々案じてはからひて事をも過さず。さればとていふかひなくもせず。かまへてなさけ有て。國の者共にも親の様におもひつかうるべし。物をとらず。人にもすかされずたゞしく行ならば。をのづから威勢と成て。人にも用られて。自然に國も治。法師ばらなどにも侮らるまじき也。わが身は國の檢非違使ぞかしとて。其事とな

く人はおぢおそれんと。勝にのりて小事をとがめて威をふるはんとし。國の者共をも所従などの様におもひなして振舞事あらば。後には能事あらんや。かへて耻に成べき企也。都近ければとて京のなま人にはしく。僧や兒などに交遊などして。さしも智慧ふかき京人どもに。心ぎはをもみえしられて。することも云ことも何ばかりの事かあらんなど。さはぐりみえらる間敷也。武士は鬼神やらん何やらん。さこそふかき心中に案をこめて持ためと。人にうとく思はれんのみこそ。君の御爲も彌然べけれ。返々も鎌倉殿御家人にて。久敷も又子どもの末まで續せんとおもはゞ。心を長くしてつゝしみてよかるべき。筋なき事仰たりとおもはで。此御文をよくく見まいらせて。子共にも面々云をしへよとの仰にて候也。仍執達如件。

潤十二月廿八日

盛時奉

佐々木太郎左衛門尉殿

泰時御消息

近年在京の武士共。物を射るとて内野を馬場に定たるよし其聞え有。事實ならば代々皇居の跡也。馬の蹄にかけむ事恐あるべきよし内御沙汰も候へば。一定仰出さるゝ道も候はぬと覺候。其上物詣の還車。若所詮なき人々。態とも車を立て見物もし候らん。よしといはれべき事はせめて如何はせん。兒女房などに。關東武士の弓箭徒事也と笑沙汰せられんは。あやまりて上方の御耻ともいひつべければ。手の本もしらずかゝる晴わざをこのむ輩は不忠成べし。就中六波羅方より内野へ出んことは殊に然るべからず。若き者共に馬を馳させ弓をひかせ。我と腕をのされんと思は

れん時は。いづかたにも兼て所を定ずして。かた邊の便宜をはからひ用べし。京人には。みえても詮なきが故也。大方は病もはなれば。常に馳引（馳）をもして風にあたり。中にも普通のには超たる具足にて。物毎に弓の眼を引折て。身をせめらるゝ事。今は有べからず。弓箭をたしなむは。自然の御大事にあふべき學なるを。一年御亂の時。至極心みられし事なれば。さのみならしの入べきにもあらず。さればとて又捨べきにもあらず。うちをくものならば。河原のんちや。とぎまなる惡黨の奴原などに侮らるべき基也。一月に二三度計は。我と馳走をしつけらるべし。往昔の事は勝てかぞふるに不<sub>レ</sub>及。故殿の御時むねと頼思召れたりし射てども。中にも下河邊の庄司行平。工藤庄司景光などの逸物達の申しは。弓取と云は。必唯心の上手に有。されば寢ても覺ても此態を思

はなすべからず。せめては弓を張て置ても。一日に三度はすびきをもすべし。それも心のうちに。少あてをすることなくてはすべからず。増てうるはしき箭をはげてあてがはん時は。遠物近物。大なる物小きもの。すべては女のみん所にても。亦堅固に人のみざらん所などにもあれ。唯御所の御弓場に立て。千万の人人にみらるゝ心仕にて。儀式をわすれず。あだには物を射るべからず。箭を放む度には。此矢ぞ寂後。もし射はつしなば。二の矢をとらぬさきに。敵にも射とられ。又は生物にも喰殺さるべき身也と思籠て射べき也。能臆病有を本とはすべしと云教たる事の。逐年身にしみて。面白も有難も覺る事にて候也。されば甲斐國には。我は／＼とおもひたる上手どもと申も。又我々がいたらぬ身までも彼二人の庄司也。海野左衛門尉。諏訪祝。愛甲三郎。此四五人の

下ならぬ射手は。一人も有べからず。皆此人々の教たる名残也。然間世の大事をおもふ毎に。なき跡につけても。今有人に付ても。彼射手達の事。あだをろかにも存ぜざる也。當時有人の申は。弓取と云は。我事をさきとして。必しも弓を手にふれずとも。其ための郎從眷屬なれば。射させよかしと申事あり。是は末代の若き人々の大毒也。一人の好む事をこそ諸人も賞翫することにて侍れ。主だにも射ざらんには。増て郎從も叶なん哉。力なく年も寄。さたなどにも隙なからんは其限あり。さならぬ人々は。かゝるやり觀法にて。むねと大事にすべき道をさし置て。無益に多の御領をふさげては何かせん。弓箭の末なりし人々たるも。漸假令の沙汰出來ぬれば。するの代のうしろめたなこそ彌術なく候へ。事の次でなれば。存知のためにはまでは申候。ゆめ／＼披露有間敷事也。

南條殿上洛候へば。委細の事は申候。又此方様のこと。能々尋聞しめ給べく候。謹言。

正月十七日

泰時

修理亮殿時氏。于時六波羅。

右嵯柿以岡室正定藏本書寫以伊勢貞丈藏及明惠上人本傳并稱文覺上人自筆之消息授合畢



# 竹馬抄

治部大輔義將朝臣

よろづのことにおほやけすがたといふと眼といふことの侍るべき也。このごろの人おほくは。それまで思ひわけて心がけたる人。すくなく侍る也。まづ弓箭とりといふは。わが身のことは中にをよばす。子孫の名をおもひて振舞べき也。かぎりある命をおしみて。永代うき名をとるべからず。さればとて。二なき命をちりはいのごとくにおもひて。死まじき時身をうしなふは。かへつていひがひなき名をとるなり。たとへば。一天の君の御ため。又は弓箭の將軍の御大事に立て。身命をすつるを本意といふなり。それこそ子孫の高名をもつたふべけれ。當座のけいさかひなどは。よくてもあしくても。家のふかく。高名になるべからず。すべて武士は。心をあはつかに

うか／＼とは持まじき也。万のことにかねて思案してもつべき也。常の心は臆病なれど。綱といひけるものゝ末武にをしへけるも。最後の大事をかねてならせとなるべし。おほくの人。みなその時にしたがひ折にのぞみてこそ振舞べけれとて過るほどに。俄に大事の難義の出来時は。迷惑する也。死べき期ををし過しなどして後悔する也。よき弓とりと佛法者とは。用心おなじこととぞ申める。すべてなにごとくも心のしづまらぬは口おしき事也。人の心とききとも。案者の中にのみ侍る也。一人の立振舞べきやうにて。品の程も心の底も見ゆるなれば。人めなき所にても。垣壁を目と心得て。うちとくまじきなり。まして人中の作法は。一足にてもあだにふます。一詞といふとも心あさやと人におもはるべからず。たとへ色を好み花を心にかけたる人なりとも。

心をばうるはしくまことしくもちて。そのうへに色花をそふべき也。男女の中だにも。實なきは志の色なきまゝに。なくばかりのことまれにこそ侍れ。

一我身をはじめておもふに。おやの心をもどかしう。教をあざむくことのみ侍也。をろかなるおやといふとも。そのをしへにしたがはば。まづ天道にはそむくべからず。まして十に八九は。おやの詞は子の道理にかなふべき也。わが身につみしられ侍なり。いにしへもどかしうをしへをあざむく事のみ侍しおやのこと葉は。みな肝要にて侍る也。他人のよきまねをせんよりは。わろきおやのまねをすべきなり。さてこそ家の風をもつたへ。その人の跡ともいはるべけれ。

一佛神をあがめたてまつるべきことは。人として存べき事なれば。あたらしく申べからず。

その中に。いさゝか心得わくべき事の侍なり。佛の出世といふも。神の化現といふも。しかしながら世のため人のためなり。されば人をあしかれとはあらず。心をいさぎよくして。仁義禮智信をたゞしくして。本をあきらめせんがため也。その外には。なにのせんにか出現し給ふべき。此本意を心得ぬ程に。佛を信ずるとて人民をわづらはし。人の物を取り寺院をつくり。或は神をうやまふと云て。人領を追捕して社禮を行ふことのみ侍る。かやうならんには。佛事も神事も。そむき侍べきところ覺侍れ。たとひ一度のつとめをもせず。一度の社參をばせずとも。心正直に慈悲あらん人を。神も佛もをろかには見そなはしたまはじ。ことさら伊勢太神宮。八幡大菩薩。北野天神も。心すなをにいさぎよき人のかうべにやどらせ給ふなるべし。又我

身のうき時などは。神社に祈などする人のみ侍る也。いとはかなくおぼゆる也。たゞ後生善所と祈ほかは。佛神の願望侍べからず。それぞしるしも侍べけれ。それすら眞實の道には。直にいたらずとぞ教き。

一君につかへたてまつる事。かならずまづ恩を蒙て。それにしたがひて。わが身の忠をも奉公をもはげまさんと思ふ人のみ侍なり。うしろざまに心得たる事なり。もとより世中にすめるは君の恩徳なり。それをわすれて猶望を高くして。世をも君をもうらむる人のみ侍る。いとうたてしき事也。

一世中にやくの侍べき人の。その身を卑下して我身やすくはとおもふ。かへすく口おしく頑しき事也。人と生なば。万人に超。他人をたすくべき願をおこして。他のため心をくだくを生々世々のおもひ出とはすべきなり。苦

薩といふもたゞ此ためなれば。凡夫の身として菩薩の願にひとしくせば。思ひ出なにごとかこれにまさるべき。

一能の有人は。心のほどもおもひやられ。その家も心にくき也。世中は名利のみなり。能は名聞なれば。不堪と云とも猶たしなむべし。心のをよび學びもて行ほどに。物のへたといふとも。功の入ぬる事は。かたはらいたきことのなき也。よくする事はまれなり。尋常しくなりて。人なみに立まじはるまでを詮とすべし。いかに高き家に生。みめかたちよく侍人も。歌よむとて短冊とる所。詩作るとて韻などさぐり。管絃の所の器のまへわたし。連歌の中にせぬ人にて他言うちまじへ。音曲する人の座しきにつらなりてつらづえつき。鞠などの場に露をだにえはらはず。又わかき友だちのよき手跡にて消息かきかはしなどす

るに。他人の手をかりて。口筆をだにはかばかしくえせぬもいふがひなきに。あまつさへ女の方への文などの時。人の手をやとひ侍るほどに。忍ぶべきこともあらはになり侍るは。いかゞ口おしからぬや。圍碁。象碁。雙六やうのいたづらごとにだにも。その座につらなりて。知侍らぬはつたなくこそ侍めれ。弓箭とりにて的。笠懸。犬追物などたしなむべきことは。云にをよばず。もとよりのことなり。

一智慧も侍り心も賢き人は。ひとをつかふに見え侍なり。人毎のならひにて。わが心によしとおもふ人を。万のことに用て。文道に弓箭とりをつかひ。こと葉たらぬ人を使節にし侍り。心とるべき所に鈍なる人を用などするほどに。其ことちがひぬる時。なか／＼人の一期をうしなふことの侍なり。その道にしたし

からむをみて用べき也。曲れるは輪につくり。直なるは轅にせんに。徒なる人は侍まじき也。たとひわが心にちがふ人なりとも。物によりてかならず用べきか。人をにくしとて。我身のために用をかき侍りては。何のとかあらん。かへす／＼もはしに申つるごとく。心のまことなからむ人は。なにごとにつけても入眼の侍まじきなり。万能一心など申も。かやうのことを申やらんとおぼえ侍也。ことさら弓箭とる人は。我心をしづかにして。人のこゝろの底をはかりしりぬれば。第一兵法とも申侍べし。

一尋常しき人は。かならず光源氏の物がたり。清少納言が枕草子などを。目をとめていくかへりも覺え侍べきなり。なによりも人のふるまひ。心のよしあしのたゞすまひをしへたるものなり。それにてをのづから心の有人



のさまも見しるなり。あなかしこ。心不當に人のためわろくふるまひ。かたくなに欲ふかく能なからん人を友とすべからず。人のならひにてよきことは學がたく。あしきことは學よきほどこに。をのづからなるゝ人のやうになりもて行なり。此ことはわが身にふかくおもひしりて侍なり。鳥の跡ばかりかなゝど書つくる事は。はづかしく思ひ侍し女の。ものよく書侍しにあひて學侍き。かたのごとく和歌の道に入て。新後拾新増古二代の集に名をかけて侍ること。

連歌などいふことも。みなわかき友だちといどみあひ侍りて。はじめは我執をおこし。中ほどは名聞をおもひ侍りしほどこに。をのづからとし月の行につけて。こゝろの數奇侍て。かたのごとくの人づらにもたちまじはり侍也。老ののちは人にいとはれて。さし出がたきとかや申なれば。かたはらの能だにもなか

らましかば。人に有ともおもはれず。我心をもなにてかなぐさめ侍べき。まりなどもわかゝりしときは。人數のかけたるところに。せめ立られまいらせしほどこに。辱なきまじらひし侍しほどこに。終にはかひなくしからねども。そのしるしは。人の名足又上手下手のふるまひ。心づかひなどは見しりて侍れば。いかなる上手なりとも。なかは辱給はざらん。又絲竹の道は。さしもおやの重せられて。三曲にいたるかひにとて。物の心もしらざりし比は。わづかに七ばちなどばかりをしへられ侍しを。世につかへしいとまなさに中絶き。そのゝちはかやうの事學ぶ友だちにも。そひ侍らざりしほどこに。心ざしをむなくし侍りき。口おしきことなり。これにつけても。ともによりて能はつきぬべし。むかしよりいままでも。男女の色好の名をとりたる人は。別の

子細なし。たゞ心を花月にしめて。世間の常なき色をくはんじて。こゝろを細くもち物の哀をしりて。こゝろざしをうるはしくせしかば。能も才も人にすぐれて。やさしきかたより。此道の名をとり侍りき。かやうのことをおもひつゞけ侍れば。今の世には。色好といはるべき人。さらに侍まじきやらん。ただわかくさかりなるほどは。なにとなくさまのよくみゆれば。それにのみほこりて。われはと心ひとつにおもふまゝに。こゝろをもたしなまず。能をもほしくせぬなり。目心はづかしからん人にあひては。たちまちみおとされこそせんすらめ。無能ならん人の。としのよるやうをおもひやるに。たゞ狐狸などの年経ぬるにてこそあらんすれ。いかゞすべき。業平中將の。老らくのこむといふなるといひ。行平中納言の。なみだのたきといづれた

かけむとよみ。黒主が。年経ぬる身は老やしぬると詠じ。小侍従が。八十の年の暮なればとよみたればこそ。花なりし昔もさこそ戀しかりけめと。あはれにもやさしくも聞ゆれ。たゞわかき人の。としのよりたるばかりは。なにほどの思ひやりかは侍べき。夢幻のやうなれども。人の名は末代にとゞまり侍なり。或はよき佛法の上人。或は賢人聖人。又はすける人などならでは。誰人かなかく世にいられて侍ける。人木石にあらずと申ためれど。いたづら人のながらへんは。谷かげの朽木にてこそ侍らんすらめ。たしなむべし。一人のあまりにはらのあしきは。なによりもあさましき事なり。いかにはらだたしからん時も。まづ初一念をば心をしづめて理非をわきまへふせて。我道理ならんことははらも立べき也。わがひがみたるまゝに。無理にはらだ

つには。人の恐侍らぬほどに。いよくはらのたつも詮なき事也。たゞ道理と云ことにこそ。人はおそれはぢらひ侍べけれ。たゞ腹だつべきことには。かまへて／＼心をしづめて。思ひなをすべし。非をあらたむることを。はばかりざるがよきこと也。よくもあしくも我しつる事なればとて。そのまゝに心をもとをしふるまふは。第一のなんなり。又よきといはるゝは。たゞをだしくて三歳の子のやうなるをいふとて。はらのたつをもたてず。うらむべきこと。なげくべきこと。又人にも必おもひしらするふしなどをも過しなどして。この人は。ともかくも人のまゝなるよと人にしられたるは。なかなか人のためもわるく。わがためも失の侍べきなり。心をば閑にもちて。しかもとがむべきふし。云べき事をばいひて。無明無心の人とおもはれぬはよきなり。

たかき世には。人ことによりかりければ。さやうのひとをよしともあしとも申べし。此比はあるひはめたれをみ。あるひはわゝく心のみ侍ほどに。一すぢにやはらかにうるはしき人をば。人のいやしむる也。無心の道人などとして。佛法者などの。目も心もなきやうにみえて。三歳の孫のごとくなどいふは別のことなり。又愚癡の人は。ものゝ惡もわきまへず。只黙々としたるは。よき人といふべきにあらず。是程のことはよく／＼思ひわくべき也。坐禪する僧達などは。生つきより利根なる事はなきも。心をしづかにするゆへに。諸事に明かなり。學問などする人も。その事を一大事に心をしづめておぼえ侍るほどに。他事にもをのづから利根に侍なり。たゞ人の心は。つかひやうによりてよくもなり。あしくもなり。利根にも鈍にもなるべきなり。人のさか

りは。十年には過侍らず。そのうちになにごともたしなむべし。十ばかり十四五までは。眞實物の興もなく侍也。四十五十になりぬれば。又心鈍になりて。よろづ物ぐさきほどに。はかくしきけいこもかなはず。十八九より三十ばかりまでのことなれば。物をしとゝのへておもしろき根源に至事は。ただ十二三年に過べからず。不定の世界には。とくけいこすべきなり。

一人の世にすむは。十に一も我心にかなふことはなき習なり。一天の君だにも。おぼしめすまゝには。わたらせ給はぬなるべし。それに我等が身ながら心になはぬ事をば。いかゞして本意をとをさんとせんには。終に天道のいましめを蒙るべき也。すべて人毎にきのふ無念なりしかば。けふその心をさんじ。去年かなはざりしかば。今年其望を達せんとおも

ふまじき也。さらぬだにも塵のごとくなる心を相續して。念々ごとにす身。いよく望を忘すべし。怨を殘さん事口惜きねぢけ人なるべし。佞人として世法佛法にきたなきことに申也。人毎に我執をおこしわするまじきには。心みじかくよはくしき也。打拂ふて心にとどむまじきやうなる事には。餘念をおこすこと也。あひかまへてく萬のことに人をもととして。あざむく事有まじき也。戰ふことには。おほけなくとも心をたかく持て。我にまされる剛の者あらじとおもひつめて。人の力にもなり。人をもたのもしきと思ふべき也。いかに心やすき人と云とも。生得臆病ならん人に。戰の事尋まじきなり。大事なればとて。さし當たるわざをのがれんとすまじきなり。やすければとてすまじからん戰をすゝむまじきなり。凡合戰はやすかりぬべき時



は。他人にさきをかけさせ。大事ならん時は。  
たとひ百度といふとも。我一人の所作と心得  
べき也。いつはれるふるまひは。ことさら合  
戦にわろきなり。かやうの事。をろかなる身  
におもひ知事のみ侍れば。せめてのおやの慈  
悲のあまりに。我よりもなををろかならん子  
孫のために書付侍り。涯分身をまもり修て。  
万事に遠慮あるべきなり。

永徳三年二月九日

沙彌判

右竹馬抄以立原萬藏本書寫

# 群書類從卷第四百七十六

## 雜部三十一

### 小夜のねさめ

後成恩寺關白兼良公

唐國にはおほく春をあいし。我國の人は昔より秋に心をよするなるべし。されば光源氏も我身にしむる秋の夕風とながめ給へり。萬葉集より代々の歌にも此二のあらそひ未いづれと定がたし。霞める空に花鳥のいまめかしう色なることは。わかき時のほらしき心なれば。秋のうれへのみぞ老の夕はげに忍がたく侍る。長川<sup>日あまりイ</sup>廿よ日も過ぬれば。うら枯わたる萩の音も空飛鷹の羽風もとりあつめて身にしむ心地ぞするや。さらぬだにあつしうおぼえ侍る身に齡の數あらはれて。夜寒のねさめもこ

とほり過。まろねの手枕も所せきまでぬれま  
さる。曉は見ぬ世の事もそのさき<sup>まへ</sup>の哀も思ひ  
のこすことぞなき<sup>なまかなイ</sup>や。すべて人の身は。朝がほ  
の花の露きえをあらそひ。ひをむしの朝の命。  
夕をまたぬものぞかし。されど心をやしなひ  
身をたもちて。百のよはひをのぶるたぐひ昔  
今おほくぞ侍るめる。誠に二なき實。命にしく  
はなし。いきとしいけるものいかでか身をお  
さめざらん。されど人ごとのならひにて。色に  
そみこえにふけり。あちはひにたのしむゆへ  
に。多く心をもくだき身をもそこなひ侍る也。  
唐國にも文をまなび詩をつくり酒を愛しなど  
さまゝの人のくせ侍るとかや。樂天といひ

し人は朝夕ふみをつくるくせあるゆへに。心をくだきてわかくより鬢のかみしろしと詩にもつくられ侍りき。此おきなもそのかみよりなにとなくものをこのむくせのすべてなをり侍らぬは。われながらもどかしく覺ゆる也。代代のふるごと。やまともろこしの筆のすさび。源氏狭衣やうのものまでもてあそび侍ること。老のやまひととなり侍るべき也。されど空なる星をたらひの水にうつし。廣きわたつみを蛤の貝にてすくひ侍るほどの事だにはかばかりからねば。心の水淺きに任せてふかき旨をくみしることもなし。朝夕人のもてあそびとなれる三代集の中にだにいまだあきらめざる事は多く侍り。まして日本紀万葉集などは。いまだかなもなかりし世のえびす歌。國々の境談とて。いやしき民の言葉をもひろひあつめたる物なれば。よみとく事だにもかたかり

しを。顯昭といひし人。日本紀の神代よりの歌の心をかきあらはし。仙覺といひしもの萬葉集のむねをえて三百餘首。順などだにもよみとかざる點をくはへ侍り。光源氏をば光行といひし田舎人。水原抄五十餘卷をつくりて昔よりの難義ども多くあかせり。これらの中にもひがごとまじれる事はあれど。數寄の心ざしは此世ひとつなる事ことにあらす。佛神の御たすけによりて一道をさとりえたとぞおぼえ侍る。是はいやしき輩なれども名をあらはし。かしてき御門の御前にめし出され。身にあまる御いつくしみをかうぶり侍し也。後鳥羽院八十二代御八十一代嵯峨院などの御代は。殊にはへばへしかりしかば。かやうのふるき道をもおこさせ給ひけるにこそ。此比承侍れば。歌よむ人の中にも萬葉は見ぬ事などと申すかたぐも侍るとかや。いとおぼつかなき事也。俊成定家爲家卿な

どもことさら萬葉をばもてあつかはれけるとぞ。さののわたりの雪の夕ぐれ。花のさかりを  
 おもかげにしてなどいふ名歌も。此人々は万  
 葉よりこそよみ出されたれ。後鳥羽院も歌の  
 心ひろくしること此集に過ずとこそ仰られけ  
 れ。又源氏の物語などをも此ごろはいたくみ  
 あかす人もなきにや。紫式部が源氏。白氏が  
 文集。身にそへぬ事はなしとこそ後京極殿も  
 仰られけれ。俊成卿も源氏見ぬ歌よみは口お  
 しとぞ判の詞にもかゝれて侍る。又狹衣の歌  
 を源氏にまさりたりといふこと心うし。歌も  
 詞もふしぎのもの也。及ぶもの有まじきとぞ順  
 徳院の御記にもあそばし侍るなる。時うつり  
 風變することはりはさることなれども。歌よ  
 みの翫ばぬことになり侍るはいかなる事にか  
 ・おぼつかなし。又連歌といふことは歌よむ人  
 のゐむことになれり。是もいかゞとぞ覺侍る。

爲氏卿は日本のものゝ上手を唐國へつかはさ  
 れば。我身は連歌の・にてや人のくにもまでもわ  
 たるべきなど狂言申されけるとかや。後鳥羽  
 院の御代には連歌の上手をば柿本の衆と名付  
 られ。わろきをば栗本の衆と名付られ侍りき。  
 柿本の長者となる。ことなる嚴重の事ぞかし。  
 同じき御時とねるもの。百のかけものゝおり  
 も。定家卿は四十とられたるとぞ日記にも侍  
 る。爲家卿も齡たけては歌案じつづくるはむ  
 づかしきとて。朝夕連歌をのみせられけるとぞ  
 承し。後嵯峨院の御代には弁内侍。少將内侍な  
 どいひし女房連歌しにて。いとほへくしき  
 事ども侍りき。この比地下にのみ翫ことにな  
 れる。いと無念なるわざ也。連歌のことば。歌と  
 たがひたらば。たゞ歌のやうにおもしろき句  
 共もせられ侍れば。子細有まじきに。歌の毒と  
 て一向にすてられ侍るは。昔にはたがひたる



事にこそ。詩作る人の聯句嫌ことはいまだなし。何とて歌よみの連歌をのみ給ふやらむ。初心のおりこそ猶用心も侍るべけれ。口も心もさだまりたらん人の連歌にとられ給ふ事やはあるべき。さて又歌の判の詞といふこともすべて道の人のかゝぬ事になれり。是もいといぶかしくおぼえ侍る。後嵯峨ちひりイのゐんの御時などは。常座の歌合イ元にも判の詞かゝれぬはなかりき。爲家卿光俊朝臣などこそたびごとになふでをとりて詞の花をそへられしか。此ごろ承れば。道のあやまちあらじとてかやうにとぞめられ侍るとぞ。是はことほりなるかたもあるにや。唐國の文をうかゞはざる人は。すべて判の詞をば思ふまゝにはかきのべられがたき事にや。されば基俊などは詩作りにて有しかば申にをよばず。俊成定家爲家卿までは。ひろく學問をせられたる人にてあれば。歌の判も唐

國の詞をかざり。ゆうにとりなされてこそかかれしか。今は我道の事をこそわづかにたしなみ給ふらめ。あらぬ道まではうかゞひ侍る事のなければ。判の詞かゝれざらんもいはれあることなり。せむなさことなれども。あまりおぼつかなく覺ゆるにつきて申出せる也。先にも申つるやうに。ものこのむくせの老の僻みに猶まさり侍る事こそ。かへすく我身ながらもどかしく覺ゆれ。されどむかしよりこのみたき事のイ・一あるをいまだこのみいだし侍らぬが。この世の恨とも。後世こんイの障ともおぼゆる也。馬牛萬の鳥獸五はがいぶん五求出す事もありき。茶香の具足はやるころは。伊勢物ふせい尋出して。茶のひくつはきあつめて。からみたてたるも。心ひとつは物ごのみの數とも思ひなし侍るべし。井の中の蛙の水をたのしみて宮殿樓閣とおもひたるもことほり也。大鵬と

いふ鳥の一羽に千里をかけるも。せきあんとてゆめばかりなる鳥の一二寸を飛も。たゞそのたのしびはおなじことゝかや申せば。心ひとつをなぐさめむ事は。まことに不足なくや。ただすべて好むになき物は人にて侍るなり。わづかなる家のうちのことを申あはせんと思ふにだにもその器なし。ましてことひろく。人をも世をもたすけ侍る程の人をこのみいだして。御門にもまいらせたく覺ゆることのいまだかなはぬに。其ほかの物ごのみはものうく侍る也。中頃も匡房邦綱などいひし人々は。みな攝録大臣の家のうちにはいやしき人なりしかども。後は天下の重寶となりき。彼邦綱大納言は武家ざまの事をもひとへに我心に任てはからひき。又廣元などいひし人は賤く數ならぬものにて有しかども。鎌倉の右大將いとをしくせられて。日本國のことをもはからひ

申て。今の世に諸國に地頭などをかれたるも。此人の申されたとぞ承侍し。かやうの人を尋出してこそ物ごのみの灌頂にてもあるべけれ。さりながら人をしる事は。から物。茶香の具足などには似べからず。何としてよしあしをもやがてわきまへしるべきと中人のありし。それはまことに大事にて侍るにや。さてこそ昔より人をしらせ給ふ御門をば聖主ともかしこき御代とも申。人をしらせ給はぬ御時は亂がちなることのみおほく侍也。大かた臣をみることに君にしかず子を見ることに父にしかずと申侍れば。なじか上として下を御らむせぬ事は侍るべき。たゞわろしとはおぼしめせども。しりぞけらるゝ事もなく。よしとは思食ども賞せらるゝ事のなきにてこそ侍らめ。又人をこのみかしこきをもとめ給はゞ。やがて人の善惡はあらはるべきにや。唐物鳥獸など

もてあそぶ人も。その事になれてこそものゝ善惡は覺ゆべけれ。佛と佛との境界。聖と聖との一たび目をあはせ。蓋をかたぶけて。胸のうちのしらるゝことはまことにあるまじき事也。たゞよのつねの人のよしあしは。世にかくれなきものにや。二の目の見る所。十のゆびのさす所。なじかかくれはて侍るべき。孟子といふ人の申たるは。左右の人のよきと申とも又あしきと申とももちひべからず。たゞ天下の人のおなじ口にいふをもちひべしとかや侍るなる。げにも物のよしあしはさすが名譽による事也。世の末にはあしき事もよくなり。よきこともあしくなることもあれども。物の上手人の稽古などはかくれぬ物ぞかし。唐國の文にも我國の日記にも讒言といふことをあさましき事に申侍る也。白を黒く黒を白く申なし侍る。蠅といふ虫の塗物などにはしろくはこ

をしかけ。白きものにはくろくはこをしかけ侍るにたとへたるにや。唐國にもさしもめでたかりし成王と申御門だにも。周公旦とていみじき聖人のめでたく國をおさめ侍しを。あしき弟の二人ありて讒奏せられしに。御門まことに思食てしりぞけられき。其時雨風あらく。世中さはがしくて。草木もかれしほみ。秋の田の實も損せしうへ。周公旦成王の父の武王の命にかはらんといふ願書を物の中より求出されて。是ほどに忠ある人なりけりとて。やがてめしかへされて。讒奏したる弟二人をば誅せられてこそ世はめでたく侍しか。源氏の大將を繼母のあし后あし大臣などのそねみて須磨へながされ給ひし時。雨風やます。世中さはがしくて。めしかへされし事は。此周公旦の例を露もたがはすかきたるこそいみじき女のさいかくと覺侍れ。又めでたきために申延喜編

の帝も時平の大臣の讒奏によりて北野の御事も出来たりしこと也。鎌倉の右大將の時景時が讒言によりてあまたの人の損じて侍るとかや。さてこそ後には景時もあさましき死をして侍りけめ。人のあしきことは何よりも讒臣にて侍るとかや。人ごとのならひにて。したしくうときによりてそのけぢめあることは常のことなれど。たゞ心のひくにまかせてさはさとそらごとなど申つけ侍ることはあさましき也。まめやかの道理などをひが事に申なさんは。たゞ其ことばかりにてもあるまじき也。やがて國の政のたがひて。佛神の御心にもかなふまじければ。誠に心をかれ侍るべきにこそ。かやうのことやがてきはくとなけれども。心得ぬればすべて其人にはばかされ侍らぬ事也。狐狸などいふものも。それと知ぬればあやまちのなきことにて侍るとぞ承り

し。さて又人の世のならひ。名利思はぬ事なし。寶物もほしく官位もねがはしく侍れば。それにつけてをのづから人をもついしやうなどすることは常の習也。さればとて。まさしきひがごとを道理にいひたてゝ。そのかはりに多くものをとらむは。たゞひたすらに大罪にて侍べし。盗人などと申ものは我身一にてこそあれ。よそをばそこなふことはあるべからず。かやうならん輩は忽に國をも人をも損じ侍べければ。よくゝその器を定らるべきにや。世の末にはまことに欲もなく名聞のなきことは有まじけれども。さすがはちしらひたらん人は。さほどの道なき事は有まじければ。淺深厚薄につきてさたも有べきとぞ覺侍る。さて又人の恩をしらす。不義に過分なることの世の末には多く侍るにや。臣として君をかたぶけなどし子として父をあやまつ程の事は



よのつねになきことなれば申に及ばず。上をかろくしをのれをさきとするたぐひのみ多く侍るにや。大かた恩を思はざるは鳥獸にをとり侍るとぞ申。心なきたぐひ猶恩を報ずることおほし。人としていかでか思ひしらざること有べき。昔韓信といひし人わかくてはあさましくまづしかりしかば。釣などをもしけるにや。浦人の家へ行たりけるに。うへにのみ給へるにやとて。さまぐもてなしたりけるに。此韓信後に御門にめし出されて。國の管領などになりて。此浦人の家に行て。色々の寶物をもたせて。昔の心ざしを報せむと申けるに。浦人申けるは。たゞまづしきをあはれみ奉りしにこそあれ。かならず恩を報せられ侍るべしとはさら／＼思はずとて。寶ものをもみなかへしてとらざりけり。韓信も一度のもてなしをむくひけるもやさしく。又浦人の志

も誠に有がたきためしにぞ申つたへたる。一飯もかならずむくふといふことはこれより侍るところ。此比のやうは。我身のかなしき折は手すりあしすりして。そのことやみぬれば。やがてあくる日よりさることのありしとだに思ひ侍らぬこといと心うきわざ也。もとより心もあり。世になれたる人などはさることあるまじけれど。人にもまじらぬやうなるもの俄にいみじくなりぬれば。やがて心をぎりせらるゝ事にぞ侍にや。されば虞舜は始は民にて有しが。御門の位につきて後たるイも。たゞもとの民の心を失はで。世をもめぐみ人をもおそれ。やすけれどもあやうきを忘れぬところを侍れ。當時の人はやがてをごり心地侍るこそかへす／＼もせむなくおぼゆれ。大かた唐國にも大臣公卿以下さだまりてその位にあたりたる祿のあれば。さのみ法をこえて朝恩など

たぶことはなし。するおもきものは必おると  
て。根よりも枝葉のかちたることは常にはわ  
ろきことに申侍れば。かまへて上に下のまさ  
る事侍るまじき事にや。いくらも申たきこと  
は侍れども。まづさしあたることはこれらに  
て侍る也。又もろくの道をよくあきら  
め給べき也。男はいかほども稽古才學あらん  
人。僧はいかほども戒行清淨にて驗有てたう  
とからん人。其外は詩歌管絃にいたるまでも。  
一道の堪能ならん人をばまことにめぐみ給ふ  
べきにや。さてこそ人も稽古をし。みなもろ  
もろの道もおこる事にて侍れ。さても人のよ  
しあしはいかなるをさだめ申べきにか。をろ  
かなる心にはわきまへがたく侍れど。唐の文  
五經三史などをはじめとして。聖人だちのか  
きをかれたる物には皆人のよしあしを手をと  
りてをしへ侍る也。今さらことあたらしき事

なれども。かの文などをみざらん人のためは  
かなき女房おさなき人などのために申侍る  
也。まづ人の本とは聖人を申也。是は獸にた  
とへば麒麟。鳥にたとへば鳳凰のごとし。すべ  
て世に出ることのかたく侍るごとくに。今は  
さる人も有まじければ。中々こまやかに申て  
もせむなし。堯舜夏禹殷湯文王武王周公旦孔  
子などよりほかは。まさしき聖人と世にもゆ  
るし人も用たる事なければ。をろかなる言葉  
にてとかく申べきにあらず。我國にも聖徳太  
子大師だちなどをやさも申べからん。此聖人  
と申程の人は。萬かけたることなくて天地と  
心ざしをひとしくし。日月に徳をならべたる  
ほどの事なれば。とかく申に及ばず。只よの  
つねは。まづ賢人君子の分際をこそよき人と  
は申侍らめ。それだに今は有まじきこそ無念  
に覺侍れ。賢人君子などの位になる程の人は

更に我身といふ物を思ふ事はあるべからず。ひとへに國のため民のために心をくだき。をのれを忘れ人を助る也。またしたしきによりてあしき事をはゞかることもなく。うときによりてよきことをかくすことも有まじき也。たゞ道理といふことひとつを。いさゝかの偏頗もなくをこなひて。世をしづめ人をめぐむより外のことは更にあるべからず。君をあがめ。親をうやまひ。兄弟のみちをたがへず。朋友の禮をみだらず。よきをえらび。あしきをして。忠あるものを賞し。科有ものを罪するも。みなその分際にしたがふまじき也。名利をこのます。財寶をおもくせず。もとより國のたからは賢人君子也。金玉の類を翫事なし。かやうならん人は賢者とも君子ともいはれ侍るべきにや。これほどの事も今の世には返々有まじければ。たゞよのつねの人のちと佛神をも

心がけ。國をも民をも助け。さのみ我身をさきとせず。賄賂獻芹にふけらす。萬のことに道理といふことをさきとして私なからんぞ。今の世には返々よき人とも申べき。大方三皇の代に至極わろき人と申は。中古はよき人になり。中古にわろき人といはれたるは。末の世には又よき人にてあるべしと唐の文にもみえたり。かやうにのみなりゆかば。此比の人はいかにかなりゆかむとおぼえ侍れども。政よくて國のおこる時は又すべて昔にもたちをよぶことの有べき也。五百年に一たび聖人は出侍るとかや申せば。あはれ其時にあひ侍らばやとぞ覺る。又才學いみじくて。から大和のことを知たる人も。それによりて心のよき事は有まじき也。たとひなにもしらぬ人にてありとも。をのづから道理をしりたらんぞ學文したる人とは申侍べき。いかに才學ありとも道理

にそむきたらん人をば學文せぬ人と申べしとこそ孔子も仰られけれ。北條時政より九代たもちたることもすべて才學のすぐれたることはなかりしにや。わづかに貞觀政要。御式條などいふ物ばかりを覺て。私なくをこなひ侍しほどは。すべて國もしづかに世もめでたくぞ侍し。わづかなる家のうちをおさめ侍らん事だにもたやすからず。まして日本國の事をさたし侍らん程のことはまことに人のきりやうをもよく撰ばるべきにてこそ。それもわたくしといふことだにもさはくとなくば。わづらひあるまじきとぞ古き人はいひをかれ侍る。人のうちには諫臣とて常にわろき事を申侍る人の有が何よりもめでたき事にて侍る也。藥はにがけれどもつゐには身をたすく。毒はあまけれども後には病をなす。昔のかしこき帝はよき諫言を聞てはその人を拜し給て賞

翫せられし也。さりながら此ごろの人はいかによきことなれども我心にたがふ事をばわろしと申。わろきことなれども我心にかなふ事をばよしと申侍るなり。かやうならんいさめごとは。たゞ我心にまかせていふことなれば。すべて國のためもそのしるしあるべからず。誠に私なからん人の君の心ざしもふかく。二心なく申侍らんことのはや。げに世のたすけとなり侍らん。先人をよくくこゝろみ給ふべき也。其人の心のうちをもふるまひをも御らむじすまして。今は心やすきほどに思召て後こそ政をもはからはせ。世をもあづけ給べきことなれ。されば堯と申御門の舜をめしだしては。まづ萬の事をせさせて至極心見られて後天下の政をもあづけ申されし也。聖人猶かくのごとし。ましてよのつねの人のやがてよしあしをござらんじさだむることは有まじ



き也。うへは穩便にて下の利根なる人の過分  
になからんぞ世のためにも人のためもよかるべ  
きと覺侍るあまりに。いたづらごと申侍るつ  
いでに。ちと女房の有さまをも申侍るべし。  
大かた女といふものは。わかき時は親にした  
がひ。ひととなりてはおとこにしたがひ。老  
ては子にしたがふものなれば。我身をたてぬ  
事とぞ申める。いかほどもやはらかになよび  
たるがよく侍ることにや。大かた此日本國は  
和國とて女のおさめ侍るべき國なり。天照太  
神も女躰にてわたらせ給ふうへ。神功皇后と  
申侍りしは八幡大菩薩の御母にてわたらせ給  
しぞかし。新羅百濟をせめなびかして。此あ  
しはらの國をおこし給ひき。ちかくは鎌倉の  
右大將の北のかた尼二位殿教子は二代將軍の母に  
て。大將のちはひとへに鎌倉鎮を管領せられ。  
いみじく成敗ありしかば。承久鎮のみだれの時

も。此二位殿の仰とてこそ義時ももろゝの  
大名には下知せられしか。されば女とてあな  
づり申べきにあらず。むかしは女躰のみかど  
のかしこくわたらせ給ふのみぞおほく侍し  
か。今もまことにかしこからん人のあらんは。  
世をもまつりごち給ふべき事也。又男女の中。  
いろなる事どもは光源氏にこまかに申侍れば  
今更申にをよばず。お事也雨夜のしなだめにこと  
つき侍るべし。それも心おさまりたらん人を  
こそいへとうじともさだめて。まことのよる  
べともし侍るべけれとくれなゝかゝれたれ  
ば。たゞ男も女もうかゝしからず。正直に道  
理を知ららん。よりほかは。何事もいたづらご  
とにて侍るにや。しやうぞくする人の一さい  
のえもんをばわきへかきいるゝとかや申様  
に。萬のことは道理といふ二の文字にこもり  
て侍るとぞ慈鎮和尚と中人のかきをかれ侍

る。いと有難き事也。今申たる事はみなかしこき文どものむねをかなにかきなし侍れば。

聊も私の言葉はなき也。又權道とて世にひがごとなる様なることの終に道理になることのあるにや。弓矢とる人は約といふ事のかたく侍るべきとぞ承りし。承久の亂の時院宣の御うけ文にも。武士は約を變せぬよしをこそ義時朝臣もかゝれたりし。唐國には盟と申て。牛の血をのみて起請などのやうに契約せし也。

今も一揆など申はかやうなること侍にや。大かた君子は比せずとて。よき人は黨をたつること有まじき也。唐國にも國のみだれたりし時より牛の血などをものみけるにや。三皇五帝などの世にはさることもあらじとぞ覺侍る。たゞ<sup>代イ</sup>うへをのみあふぎて。私の一揆などはなきこそよき事なれ。小人は比すと申て。わろきもののあつまりてたうをたてゝ。よきこ

とをも申やぶりなどすることは返々あしきことなり。盟と申侍るもたゞ合戰の時のわざにてあれば。今もさやうの時は一きもさもありぬべきこと也。さしたる事もなき時。私の契約は詮なき事にぞおぼゆる。抑近き比。波風さはがしかりしあきつしまの<sup>オイ</sup>うち。今は人の國までおさまりて。ゐながらとをきをしたがへ給ふ時になりぬ。彼漢高三尺のつるぎも是にはしかじとぞおぼゆる。すゑの世には今の時をこそ又めでたきためしにもひき侍るべければ。いよゝかしこき御政もあれかしと。今老のあらましにはし侍る。あまのさえづりとかやのやうにはじめもはてもなきことを申侍る也。小夜のねさめに思のこさぬふしゝをあかつきの燈のかすかなる闇におきゐてかきつけ侍るなり。

此一帖。文明の比。妙禪院へ後成恩寺かきて  
まいらせられ侍る本のまゝうつして。一臺  
へまいらすものなり。

于時大永六年八月廿二日

兎屋叟

邦高親王

右小夜の目さめ以横田茂語藏本書寫以承應二年印本及  
扶桑拾葉集按合畢按妙禪院者從一位富子常徳院殿母儀  
慈照院殿御臺日野贈内大臣重政公息女也系圖禪作善

## 文明一統記

同

一八幡大菩薩に御祈念あるべき事。

其御祈念有べきことは。賤くも我身征夷將軍  
の職を蒙りておほやけの御かため也。日本國  
中六十六ヶ國を治べき仰をうけ給ふことは。  
前世の宿習といひながら。父母二親の御恩  
也。但天下を治。すなをなる世にかへさずむ  
ば。其職に有ても詮なかるべし。ねがはくは  
八幡大菩薩の御はからひとして威勢を加へ  
せしめ給へと。かくのごとく威勢の事を祈申  
は。またく我身思さまにふるまはん爲にはあ  
らず。此十餘年。公家武家を始として僧俗男  
女に至まで。一所懸命の地を人に奪れ。憂悲  
苦惱をするを見てける。餘に不便におぼゆる  
故に。威勢だにもあらば道を道に行んと思ふ  
によりて。ひとへに御神の冥慮をあふぐもの  
也。諸國の守護たる人の心向。いかにも穩便

になして。慈悲の心をつけ給へ。げに／＼思なをらすは忽に冥罰をあたへ給ふべしと也。ふたゝびすなをなる世に立かへらば。今生の願満足して後世までも名將軍といはれん事。人間の思出是に過べからず。併大菩薩の御はからひに有べしと。毎日に朝とく御手を洗。

御口を灌ぎ給ひ。南方に向せ給ひて。至誠心に御祈念有べし。神明世にましますものならば。などか納受し給はざらん。此御心中の趣。世にかくれなくは。つたへ承ものも一たびは神慮に恐をなし。一たびは武威を辱思ひて。諸守護の心向もをのづから持なをして。文明一統の天下に成べきこと掌をさすがごとくなるべし。

一孝行を先とし給べき事。

高きも卑きも父母なきものはなし。父母の恩の重きことをいふに。釋尊の内教。孔子の外

典にも此ことを説給へり。佛の教には。左のかたに父を荷ひ。右のかたに母を荷ひて。毎日に須彌山をめぐるとも。此恩はなをむくひがたかるべしと説給へり。孔子の教には。身體皮膚は父母にうけたり。敢て毀ひ傷らざるを孝のはじめといへり。たとへば子たるもの我身は親のあづけたるものなれば。いかに身を慎て。疵かたわもつかぬやうにふるまはむが孝行の道なるべし。其故は子の身に病つゝがもあれば。親は愁かなしむものたるによりて。よく身をつゝしめば。おやのうれひをなさざるによりて孝行とは成もの也。次に父母の過ち有時は。子たるもののいさめざるも。又不孝の罪なるべし。其あやまちあらん時は。いかにも機嫌をとり。言葉をやはらげ。色をよくして。教訓をいたすべき也。それにもかゝはらずは。なきくどき。そら腹立をし



ても。思ひなをるやうに教訓すべきが孝行にて侍る也。そもくわが身がおやに不孝なれば。そのむくひに我まうけたる子が又吾に不孝なるべきによりて。其時に思知事有べき也。凡夫の習。内典外典にいふがごとくつくしくはふるまはれぬことなれど。その道理をば誰々もよく心得給べき事なるべし。

一正直をたとふべき事。

佛の教には正直捨方便と説給へり。八幡大菩薩の御詫宣にも神は正直のかうべに宿り給ふとのたまへり。正直といふはたゞ直なる心也。心ゆがみぬれば。身に行こと一としてゆがまずと云ことなし。他人に對してもよき人をば能と思ひ給ひて勸賞を行給ふべし。あしきものをばあしきと思ひ給ひて征罰をくはへらるべし。是則正直の心に行はるゝ正直の政也。正直の心のたとへを申には。鏡に過た

ることはなし。みめよき人が鏡にむかへば。みめよきかげを移し。みにくき人がかゞみにむかへば。みにくきかげをうつすがごとし。是によりて佛の智恵をば大圓鏡智と號て。かがみに是をたとへ。神の御正躰といふも。鏡にかたどる成べし。

一慈悲をもらにし給べき事。

慈といふ文字は拔苦といふ心也。悲といふ文字は與樂といふ心也。佛の御心には衆生のために苦を抜て樂をあたへんとおぼしめすが慈悲の文字の心也。外典の書には是を仁となづけ侍り。仁といふは人を愛する心也。言葉こそかはり侍れ。心はたゞ慈悲の文字に相違なき也。すべて鳥獸も手馴てかふとなれば。不便におもはるゝもの也。況人たるものをばをしなべて哀憐の心をたれさせ給はんが仁君の行にて侍るべし。抑此十餘年。上下万民

所帶をはなれて。飢寒につめられたるもの幾千万といふ數をしらず。かくのごとく無理非道に押領をいたす輩は。偏に慈悲の心のかけたるゆへなるべし。修因感果のことほりを思ひさとらぬことこそあさましけれ。

一藝能をたしなみたまふべき事。

弓馬の道はもとより御家のことなれば不及申。其外歌道蹴鞠諸藝に至までも御好にしがふべし。鹿園院殿は節會の内弁なども勤仕し給ひ。管絃聲明の道までも嗜給へり。それまでの事は御數寄のあまりなり。何事にて近習の輩などに心をゆかさしめん事は時にしたがひてたしなませ給ふべし。酒なども歡伯と號てよろこびのともにするわざなれば。たれくにも給はるべき。何の子細か有べきや。さりながら論語の文にもたゞ酒ははかりなし。亂にをよばさずと見えたり。下戸

上戸によりて更に法令なき物なれば。はかりなしとはいへり。亂に及さずといふは。本性を失ふほど醉まじき事を申侍り。いかにも面白く興有ほど是を翫びて酔と思しめさん時は。たれくもはやく寐たらんにはしくべからず。いかにも矢有事おほき故也。近習の輩など酒に酔て緩怠をいたさば。酔たるほどは中々仰らるべからず。さけ醒て本性に成たらん時。かゝるふるまひの有しは覺侍らぬか。いかにも向後は斟酌をいたすべしと仰られんこと。御扶持助けのあまり成べし。

一政道を御心にかけるべき事。

何事を申てもおちふす所はたゞ政道を正しく行はんにはしくべからず。近年寺社の本所領を無理に押へ。知行せいるかたぐいのこと。猛惡の心を先として。後代の名をも耻辱をかへりみざるにや。流石代々忠節奉公をいた

せる家にて。忽に先祖の跡をはづかしむること。口惜とも中々いふ計なし。その身一期の事はさもこそ侍らめ。子孫を思ふ心のなきは頗遠慮なきに侍らずや。是によりて政道のことを指をかるゝ條は千万然べからず。けりやう上裁に應ぜざる人においては。かれら申入事も聞しめし入られざらんが。そのいはれ有にたり。惣別に御心をやすめらるゝ時は。とが有物もなき物も差異<sup>明イ</sup>なかるべし。かつうは又すてばひろはむと申事の侍れば。いかなる野心を存する者も出來すべし。かたゝ然べからず。此前にもすでに御判初有し上は。もし輿奪申されば。御代官としてやすきことなど御成敗あらんに何のやうか侍るべき。一方むきのさは奉行披露にまかせて御教書に御判をすへられん計也。たとひ又破戒のさた成とも。兩方の訴陳せんことを。たれにて

も兩三人に仰付られて。批判をせられて。理有方へ付られんもいとやすき事なるべし。一旦聞あやまり又見おとしたることなどあらば。越訴をたてゝ申さんとき。あらためられんことは又今はじめたる事にあらず。むかしより有來ことなるべし。万機の政なれば。一日二日の懈怠だにも然べからず。それを一かうにうち捨られんことは勿躰なき事成べし。よくよく御思案有べきにや。事多しといへども筆かぎりあれば。大かたはからひ申侍るもの也。

此一冊者。後成恩寺殿御作者也。自<sup>ニ</sup>常徳院殿<sup>ニ</sup>依<sup>ニ</sup>御所望<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>之。則以<sup>ニ</sup>御筆跡<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>寫之畢。

大永七年十月四日

藤房道判

右文明一統記以伊勢貞丈立原萬伊下維馨藏本校合畢

## 樵談治要

同

一神をうやまふべき事。

我國は神國也。天つちひらけて後。天神七代地神五代あひつぎ給ひて。よろづのことわざをはじめ給へり。又君臣上下をの／＼神の苗裔にあらずといふことなし。是によりて百官の次第をたつるには神祇官を第一とせり。又議定はじめ評定始といふことにも。先神社の修造。祭祀の興行をもはらさだめらる。これみな神をうやまふゆへ也。一年中のまつりは二月四日の祈年の祭より始まる。此祭は。あきつしまの中にあとをたれ給三千一百卅二座の神に御てぐらのつかひをたてらるゝ物也。其中に七百卅七座には神祇官よりこれを獻せらる。のこり二千三百九十五座には六十餘國の國のつかさをの／＼うけたまはりて幣帛を奉る也。年中の災難をのぞき國土の豊

饒をいのるによりて。祈年のまつりとは名付たる也。又此月に祈年穀の奉幣といふことあり。これは廿二社に別して幣使をたてられて。旱水風損のうれへなく。五穀不熟なからん事をいのり奉る祭なり。五穀は人民のいのちなり。たれの人か是をかくせむや。廿二社のうち。石清水吉田祇園北野の四社は延喜式の神名帳にのらざる社たるによりて。式外の神と申也。もとは其數さだまらざりしを後朱六十九代雀院の御宇長暦三年八月に廿二社にさだめられて後は不増不減也。昔は太極殿に行幸有て。その使を發遣せられしかども。太極殿なきによりて。神祇官にてをこなはるゝなり。其後諸社の祭をの／＼上卿弁など參向してとりをこなふ。その所々月日支干などは年中行事にみえたるべし。中にも六月十二月の月次の祭。九月十一日の例幣。十一月の新嘗會



は。四度の幣といひて。伊勢太神宮へ王氏。卜部。中臣。忌部の四姓のつかひをたてられて。とりわけ兼日の御神事など有て嚴重の祭也。代々の聖主はいづれも我御身のためとはおもひ給はず。万民のためにかくのごとき祭などをさだめさせ給へる也。神明も由緒なき祭をばうけたまはず。天子は百神の主也と申せば。日本國の神祇はみな一人につかさどり給ふ。次には天下主領の大將軍をまもり給べし。諸國の神社は又その國の國司守護地頭に屬し給へるによりて。祈年祭の二千餘座をば國司につけらるゝ也。又神は我子孫の祭をとりわきうけ給ふによりて。諸社の祭の使には神の御子孫をたづねもちひらるゝなり。石清水の使には源家の人。春日の使には藤氏。北野へは菅氏をもちひらる。其人なき時は他姓をもさゝるゝ也。八所御靈と申はむかし謀叛

をおこしてその心ざしをとげず。あるひは又何事にてもうらみをふくめる人の靈をまつられたる社なり。これらは和光垂迹の神明にてはましまさざる也。もろこしに神といふはおほくは先祖の靈をまつりて神といふ。御靈などのごとき也。かくのごとき神のたゞりをなすことあらば。いかにもその子孫尋て。官位をもさづけ。祭のことをなさしむべきよし。橘の博覽が擬潛夫論といふものにかかり。鬼は歸する所あればすなはち癘をなさすといへり。もろこしの事なれど。鄭の國に良霄といふ物あり。つみせられて死にき。その靈疫癘となりて人民をそこなひしとき。子産といふ智惠の者ありて。良霄が子に官をさづけて祭のことをつかさどらしめしかば。それよりのちは人をころすことやみ侍り。又神の詫宣といふ事昔はつねに有けるにや。弘仁三

年九月の官符に恠異の事は聖人語らず。妖言の罪は法制かるきにあらず。神宣はいちじろく其しるしあらはれたることにあらずは。國司言上すべからざるよしさだめられ侍り。是は御こかんなぎなどのするわざなるによて也。次に神社修理の事退轉有べからず。太神宮は諸國の役夫工米をもて廿一年にかならず造替遷宮の事あり。其外諸社の造營は。ねぎ神主等。小破の時修理をいたすべし。万一大風若は炎上など有て大營に及ばず。その由を注進せしめば。先例にまかせてさた有べし。弘仁三年の官符には有封の社の神戸の百姓をもて無封の社の修理をいたすべきよしみえたり。有封無封といふは。神領のあるとなきとをいふ也。近代は諸國の祭事衰微せるによりて。有封の社の造營猶もてなりがたかるべし。いはんや無封の神社においてをや。

抑この十餘年は天下のみだれによりて。神社の荒廢たぐひなく。祭祀の陵遲法に過たり。國のまさにおこらんとする時は。神明くだりて其德をかぐむ。國のまさにはろびんとする時も。神又くだりて其惡をみるといへり。神いかり民をむかば。何をもてかよく久しからむともいへり。かるがゆへに國司守護などは別に私のいのりなどをしては益なきこと也。かぎり有國役などを嚴密に成敗して。昔より有つけたる神社の修理。祭祀の退轉せるを申をこなひ侍らば。君には奉公の忠となり。神には歸敬の誠をあらはすべし。おほやけわたくし清淨の心ざしをさきとして。如在の祀をもはらにせば。陰陽不測の神明もいかで黍稷かうばしきにあらざることほりをうけたまはざらんや。

一佛法をたとふべき事。

それ佛法王法二なく。内典外典又一致也。そのかみは一佛の法門たりといへども。大小權實の相違によりてそのながれ八宗にわかれ侍り。いはゆる八宗は。眞言。華嚴。天台。三論。法相。俱舍。成實。律宗これなり。但俱舍をば法相に付られ。成實をば三論に兼學するによりて六宗になれり。其後淨土と禪との二をくはふれば猶八宗と稱すべし。天竺の事は。程遠ければしりがたし。唐土には今の世にたえたる宗どもおほく侍るにや。八宗の血脉いとすぢのごとくつらなりて。かたのごとくも今にのこれるはわが日本國計也。末世の佛法は有力の檀那に付囑し給ふよし釋尊の遺勅あれば。大檀那たる人は。八宗いづれをも斷絶なきやうに外護の心をはこび給ふべし。其中いづれにても心よせの宗に別して歸依あらんことは。一は宿習により一は所縁にしたが

ふ事なれば。ともかくも其人の心にまかすべし。さりながら華嚴。天台。三論。法相等の宗は。法門無盡にして義理深奥なれば。たやすくまなぶべきにあらず。眞言は暗誦加行もしは灌頂など。其人にあらずんば相應すべからず。律宗は一日の八齋戒をたもち。天臺の圓頓戒などをうけん事はやすけれど。誠に二百五十戒などをたもたんことは又有がたかるべし。然るに淨土と禪との二の宗は。とりより所のたやすきにや侍らん。當世の人の此二の門にこゝろざさざるはすくなかるべし。それも人によるべきこと也。天子の位にありては。まづ仁徳の行をさきにし給て。朝儀のすたれたるをおこし給。大將軍の職に居して。武道をもはらにして。万民のうれへをすくはせ給はゞ。いかなる佛法修行にもまさるべきを。あるひは坐禪工夫にいとまなきと稱し。

あるひは稱名安心にひまをえざるといひて。やゝもすれば向上のまんをおこし。又本願ばかりをなす事は大なるあやまり也。昔梁の武帝は佛法にかたぶけるあまり。大同寺に行幸ありてみづから經を講じ給しかば。其世の群臣も君の心ざしをうけて。苦空無常の觀をなししかば。天より花ふりさまぐの奇瑞なども有しかど。文武の道をすて侍しゆへに。侯景といふ臣ひまをうかゞひ。兵をおこし都をかこみしかば。武帝はのがるゝはかりごとをうしなひ。つゐにやまひを感じて崩じ給へり。唐の太宗はかゝる前蹤をかゞみ給ひて。たとひ佛法をこのむとも。先國をしづめ民をやすんじてのこと也とて。もはら政道をさきとせられしかば。貞觀のまつりごとといひて。日出たきためしに申つたへ。唐の世は三百年にをよびて天下をたもち侍り。それ大悲

の菩薩は衆生にかはりて苦をうけんとせいぐはんをおこし給へり。天下主領たる人。誠に不足もなき身において。政道をともちこれれををこなはんことは。大にむづかしきことなれど。たれにゆづるべきことにもあらざれば。つとにおき夜半にいねて万民のうたへをき。理非をけつし。其のぞみをかなふることは。地藏觀音の慈悲の誓願も。唐堯虞舜の仁徳の政道も。さらに別に有べからず。是を佛法王法二なく。内典外典一致也といへり。唐の李舟が書にいはく。釋迦中國に生れなば教を設ること周孔のごとくならん。周孔西方にむまれなば教をまうくること釋迦の如くならん。天堂なくは則やんぬ。あらば則君子のぼらん。地獄なくは則やんぬ。あらば則小人入らんといへり。是は内典外典を和會して至極のことばりをのべたる物なるべし。又寺



をつくり僧を供養する事も。無欲清淨の心よりおこらず。民をなやまし人をむさばらば。

たゞ名聞利養の佛事にして無上菩提の善根とは成べからず。長者の万燈よりも貧女のガイ一燈はまされるといふたとへあり。聖武天皇の四十九代

天平十三年に諸國に護國國分の二寺をたてられて。僧尼を安置し。金光明法花等の經をかき供養して。當國の百姓のため四時をととのへ。百穀の豐饒をいのり給へり。諸國の守護たらん人。かゝる所を再興せむは。昔の檀那の心にもかなひ。今のついえもさのみ有べからず。あたらしき寺をたてんよりは。古きを修造せむはその功德猶まされるよし像法決疑經にもとかれ侍るにや。さて出家のともがらもわが宗をひろめむと思ふ心ざしは有べけれど。無智愚癡の男女をすゝめ入て。はてはては徒黨をむすび。邪法ををこなひ。民

業をさまたげ。濫妨をいたす事は。佛法の惡魔。王法の怨敵也。これらのともがらをばいかにもいましめらるべきこと。武道の專一也。一遍聖のやうなるたぐひは。一旦歸依渴仰すといへども。世のわづらひとはならず。

それもいたるなることは佛法の正理にあらざるべし。昔の大師先德は求法のため風波の難をかへりみず。もろこし船のともづなをとき經論聖教をわたしてもさらには是を私せず。ことごとく朝廷に奉れるを。御覽有て則返し給はり。世にひろむべきよしの勅諭をうけて。わづかに得分とては。度者の二人三人を申うけ候シイばかり也。度者といふは今の世のやうに思ふさまに出家する事はかなはず。公方のゆるるされをかうぶりて。髪をそり衣をそめしかば。我宗をも相承せしめ。又年よりて杖ともせむがため。これを申うけし也。毎年人

數をさだめ。ゆるされをかうぶりて。其寺につけをくをば年分度者と申也。出家をゆるさるをもて。これを功德とも稱し。又朝恩とも思ひ侍る也。今の世にも大法會の時は度者の使とてたてらるゝは昔をわすれぬばかりにて。その實なき事なるべし。かゝるゆへに諸宗の今に繁昌せることは。ひとへに大師先德の陰德のいたす所なり。

一諸國の守護たる人廉直を先とすべき事。

諸國の國司は一任四ヶ年に過ず。當時の守護職は昔の國司におなじといへども。子々孫々に傳て知行をいたすことは。春秋の時の十二諸侯。戰國の世の七雄にことならず。所詮賴朝の大將後白河院（セモト）の勅詔として。六十六ヶ國の惣追捕使に補せられしよりこのかた。守護職といふは武將の代官をうけたまはれる由にて。當代にいたるまでも其例ををはるゝう

へは。はやくさだめをかれたる御法をまもり。かぎりある得分の外は。そのいろひをなさず。上には事君の節をつくし。下には撫民の仁をほどこして。廉直のほまれ當世に聞。隱德の行末代に及さば。冥慮にもかなひ。榮花を子孫につたふべきを。やゝもすれば無道をかまへ猛惡をさきとする事。かへすゝしあんなきにあらずや。貞永（橋堀河）の式目には或は國司領家のそせうにより。或は地頭士民の愁鬱につきて。非法のいたり顯然ならば。所帶の職をあらためられ。穩便のともがらに補すべき也。又建武（後龜岡）の御法には守護職は上古の吏務也。國中の治否只此職による。尤器用に補せられば。撫民の義にかなふべきかと云々。此式條のごとくならば。時にしたがひ人をえらびて其職に補せらるべきよしみえたるにや。然るに當時の躰たらく。上裁にもかゝはら

す。下知にもしたがはず。ほしいまゝに權威をもて他人の所帯を押領し。富に富をかさね。欲に欲をくはふる事は。さしあたりてことかけたるゆへにはあらず。只無用の事のしたきと人かすをおほくそへんとのため成べし。もとより富貴の家にいたづらに寶をたくはへて人にほどこさぬは思出もなき事なるべし。妻子珍寶及王位とて。死ぬる時は。わがめ子もたからも位をも。一として身こそへぬ事にこそ。佛もとき給ふなれ。されば猿樂田樂のかけものにし。傾城白拍子の纏頭にあらたふることは。さらに非分の事にはあらざるべし。只世のそしりをうけ。人のうらみをおふは。無理非道の押領をなすゆへ也。又人數のほしきこともたれかはねがはしからぬ事にはあらざれど。正躰なき家人に所領を多くあてをこなへば。後々は過分になりて。いさ

さかも氣にあはぬ事のあれば。主をもとりかへんとす。かゝる事はまのあたりに見をよぶ事ども也。又人をたづぬるよし聞つたへて。あなたこなたよりふしぎの物どもが。一旦の給恩をむさばらんために名字をいだすといへども。一大事にのぞみ戰場などにおもむく時は。我先にと落うせて。折角の用に立ものはこれまれ也。木曾義仲は藩東を立し時五万騎と聞えしかども。粟津の原にて討死する時は主従二騎になれるがごとし。かるがゆへに用にもたゝぬ猛勢はかへりてあだと成ためしあり。名と利との二はいづれも人のねがふ事なれど。利は一旦の利也。名は万代の名也。武士の一命をすつるも名をおもふがゆへなるに。無理非道の惡名をば何とも思はぬは。命よりもたからは猶おしき物にや侍らん。慈鎮和尚と申人のよろづの事は道理といふ二

の文字にこもりて侍ると申給へるが。我領知を人にとられじとすると人の領知ををさへてとらんとするその道理はいづ方に有べきぞや。本より欲界の衆生なれば。欲なき人は有べからず。又まよひの凡夫なれば。理に迷はぬ事は有まじけれど。これぶんざいの道理はさすがにたれもしり侍べきを。あやまりをあらためむとおもひよれる事のなきこそ。つゐには我人の不運にては侍るなれ。昔晉の代に周處といふ人のありしが。力つよくしてなす事の人のためによきこと一もなかりしが。有時人にいふやう。今年は年もゆたかなければ。たれくもたのしみこそすめととひければ。三害といふものいまだのぞかざれば。たのしむ人有べからずとこたふ。周處その三がいは何々ぞといひければ。一には南山にひたいの白き虎のありて人をくらふと。二には

長橋といふはしの下に。みづちといふもの出て。人をそこなふと。三にはなんぢがふるまひをいふとこたへければ。周處此よしを聞て。すなはちつるぎをぬきもちて南山へ入て虎をほろぼし。長橋の下におりくだりてみづちをころし。をのれは俄にぐくもんをして。引替善人になれるためしあれば。きのふまではあやまれる事も。一念ひるがへせば。無量の罪たちまちにほろぶることなるべし。

一訴訟の奉行人其仁を選ばるべき事。

凡奉行人は天下の公事を執行ふ職たるによりて。政道の善惡もととして是によるべし。いかにも心正直にして私を不存。黑白をわきまへ。文筆に達し。理非にまかせて最負をいたさざらんをよき奉行とは稱すべし。是によりてあやまりあらん奉行人をばながくめしつかはるべからざるよし貞永の式目にの



せられ侍り。兩方の支證をとり合せ。究決せられて。理有方へ付られたるをもとの給人として。難澁をいたさんをば別て罪科に處せらるべし。いはんや奉行人として存知ながらとりあげ披露せんは大なる越度なるべし。もし又奉行人として最負をいたし。かたてうちになされたる公事たらば。越訴を立て申さん事。其咎有べからず。其方の奉行たる人。傍

輩にかたらはされ。媚をなして理をまげんは。かへすぐ口惜かるべし。御法にも奉行をさしをきて別人に付て訴訟をいたす事をば停止せらるといへども。時にしたがひ事によるべし。いかにも内奏強縁をもてまなげき申べきことなるべし。又諸人の愁は緩怠に過たるはなし。むなく廿ヶ日を過ば庭中を出すべき制法ありといへども。理運の訴訟にいたりてはいかにも不日にこれを申さたす

べし。いはんや一所懸命の地。人にさまたげられん輩においては。明日を期せざる存命也。いかでか慈悲の心をもてあはれみをたれざらんや。所詮親疎を論せず。理非にまかせてわたくしの賄賂にふけらす。公方の瑕瑾にならざる様に正路にをイ申さたせん奉行人においては。別て臨時の勸賞もをこなはれて。後昆の忠勤をすゝめらるべきものをや。

一近習者をえらばるべき事。

是は建武の十七ヶ條の中にものせられ侍る題目也。其器用をえらばるべきこと尤然るべし。又黨類を結。たがひに毀譽をなす事。誠に鬭諍のもとる成べし。たとひ私のうらみをさしはさむといふとも。公庭において其色をあらはす事は未練のいたり成べし。さてその器用といふは事々によりて一具に定るべからず。孔子の門弟には四科をたて侍り。高祖の

功臣には三傑の不同有がごとし。いかさま一には正直廉潔にしてごくしん（漢）なる人をえらばるべし。二には奉公の忠節をいたして私をかへりみざる人。三には弓馬の道に達して心いさみ有人。四には和漢の才藝あらん人をよしとすべし。又よからぬ類をいはず。一にはうろん猛惡にして欲にふける人。二には不奉公にして人の非をいふことをこのむ。三には武藝の道につたなくして臆病第一也。四には狂言綺語をもて人にわらはるゝを面目とす。すべてよからぬ事どもをいひてはさらにがい（漢）さい有べからず。但近習者として召遣れんはいづれをも先れんみんは有べし。春の雨の草木をうるほす事大小の根莖をわかたざるがごとし。子を見るは父にしかず。臣をみるは君にしかずと申侍れば。よきあしきに付て其心得をみ給て。正躰なき者の申事には同心あ

るべからず。狐狸は人をばかす物ぞとしりぬればばかされぬがごとし。次に君のあやまりましませむ時はいさめ申を忠心（臣等）といふ。存知しながら申入ざらんをば不忠の人といふべし。いさめ申につきては。機嫌によりてかならずいかりをなし給ふことも有べし。いかに生涯にかへても申べき事をば申べき也。君も又いかに御意にちがふことなりとも。それを咎になさるゝ事はゆめ／＼有べからず。大事と存すればこそ是程までは申らめと。別して後には勸賞をもをこなはるべき事也。さりながら此比の人はいかによきことなれども我心にたがふをばわろしと申。わろき事なれども我心にかなふをばよしと申侍べし。かやうならんいさめは只我心にまかせていふことなれば。國のためそのしるし有べからず。さればまづ人をよく心み給ふべき事也。昔朱雲

といふ人漢の成帝をいさめし時。帝大に逆鱗ありて廷尉に仰付られ。朱雲をきられんとて引出さるゝ時。朱雲は出じとすまひし程に。

取つきたる殿の檻をひきおりたり。是をのちに修理せんと申人ありしを。成帝はすべて修理すること有べからず。君のあやまり有時はかくこそいさめしものはあれと。後の人に見せてためしにせんと給へり。あやまりまします時。いさめをいれざれば。國をも天下をもうしなふによりて。唐の太宗はいさめ申ものをことに賞し給へる也。侍従の官をば闕たるををぎぬひ遺をひろふといひて。君のあやまりあり又わすれ給ふことをひそかにつけ申つかさ也。諫議大夫といふは今の宰相をいふ也。是はもはらいさめをつかさどる職なり。昔よりかくのごとくいさめの事はなくてかなふまじき事にさだめられたる也。是は公私

大小の差別こそあれ。一家のあるじたりといふともそれあやまりあらば。分々に其ひくはんにんたる人はいさむべき事なるべし。次に讒奏といふことはあさましき事に侍り。しろきをくろく。黒をば白きと申なす事。青蠅の物をけがすにたとへ侍り。周の代に成王と申御門は周公旦とていみじき聖人にて國をおさめ侍りしを。管叔蔡叔といふあしきをとゝ二人ありて讒奏せられしかば。成王誠と覺しめして周公をしりぞけられき。其時雨風あらく。世のなかさはがしく。秋の田のみなども損じ侍りしうへ。成王の父武王の病し給ひし時。命にかはらんと周公のかき給へるちかひの言葉。金縢の書といふ物をもとめ出されて。これほどの忠有人なりけりとて。めしかへされて。讒奏したるをとゝ二人をば誅せられじかば。雨風もたちまちにやみ。田のみも

おきなをれるよし申傳へ侍り。又めでたきためしに申侍る延喜の御門も時平のおとどの讒奏によりて菅丞相の御事もいできたりし事也。鎌倉の右大將の時梶原平三景時が讒言によりてあまたの人をそんじけるとかや。さてこそ後には景時。其子景季以下同時にことごとく誅せられて。あさましき死をし侍りけるとなん。人のあしきことは何よりも讒言にて侍れば。君たる人はよくその心をえ給ふべきにこそ。

一足がるといふ者長く停止せらるべき事。

昔より天下の亂るゝことは侍れど。足がるといふことは舊記などにもしるさざる名目也。平家のかぶろといふ事をこそめづらしきためしに申侍れ。此たびはじめて出來れる足がるは超過したる惡黨也。其故は洛中洛外の諸社。諸寺。五山十刹。公家。門跡の滅亡はか

れらが所行也。かたきのたて籠たらん所にきては力なし。さもなく所々を打やぶり。或は火をかけて財寶をみさくる事は。ひとへにひる強盜といふべし。かゝるためしは先代未聞のこと也。是はしかしながら。武藝のすたるゝ所にかゝる事は出來れり。名有侍のたゝかふべき所をかれらにぬきゝせたるゆへなるべし。されば隨分の人の足輕の一矢に命をおとして當座の耻辱のみならず。末代までの瑕瑾を残せるたぐひも有とぞ聞えし。いづれも主のなきものは有べからず。向後もかゝることあらば。をのゝ主々にかけられて光明あるべし。又士民商人たらば。在地におほせ付られて罪科有べき制禁をかれば。千に一もやむ事や侍べき。さもこそ下剋上の世ならめ。外國の聞えも耻づべき事成べし。

一簾中より政務ををこなはるゝ事。



此日本國をば姫氏國といひ又倭王國と名付て。女のおさむべき國といへり。されば天照太神は始祖の陰神也。神功皇后は中興の女主たり。此皇后と申は八幡大菩薩の御母にて有しが。新羅百濟などをせめなびかして足原國をおこし給へり。目出かりし事ども也。又推古天皇も女にて。朝のまつり事を行ひ給ひし時。聖德太子は攝政し給て。十七ヶ條の憲法などさだめさせ給へり。其後皇極持統元明元正孝謙の五代も皆女にて位に付。政をおさめ給へり。もろこしには呂太后と申は漢の高祖の後惠帝の母にて政をつかさどり侍り。唐の世には則天皇后と申は高宗の後中宗の母にて年久敷世をたち侍り。宋朝に宣仁皇后と申侍りしは哲宗皇帝の母にて。簾中ながら天下の政道ををこなひ給へり。これを垂簾の政とは申侍る也。ちかくは鎌倉の右大將の北の

方尼二位政子と申しは北條の四郎平の時政がむすめにて二代將軍の母なり。大將のあやまりあることをも此二位の教訓し侍し也。大將の後は一向に鎌倉を管領せられていみじき成敗ども有しかば。承久のみだれの時も二位殿の仰とて義時も諸大名共に廻文をまはし下知し侍りけり。貞觀政要と云書十卷をば菅家の爲長卿といひし人に和字にかゝせて天下の政のたすけとし侍りしも此二位尼のしわざ也。かくて光明峯寺の關白の末子を鎌倉へよび下し猶子にし侍りて將軍の宣旨を申なし侍り。七條の將軍賴經と申は是也。此將軍の代貞永元年に五十一ヶ條の式目をさだめ侍て。今にいたるまで武家のかゞみとなるにや。されば男女によらず天下の道理にくらからずば。政道の事。輔佐の力を合をこなひ給はん事。さらにわづらひ有べからずと

覺侍り。

一天下主領の人かならず威勢有べき事。

人の威勢は善惡にわたるべし。道理をしれる人にははぢおそれてまことに歸伏すること有。又無理非道の人にはとがめられじとて心ならずおぢはざる事有。三尺の利劔は箱の中を出ざれども人は是をおそれ。いかづちのこゑは百里の外に聞えてきもをけすがごとし。又猛虎は深山に有時もゝのけだ物をののきふるふ。麒麟は角のうへにしゝ有によりていきほひあれども人をやぶらず。是を聖人は威ありてたけからずとの給へり。此ゆへに武の道は威勢有を其徳とす。その威勢といふは。ちかきより遠に及ぼし少事によりて大事も成就す。近をいるがせにすれば。遠き人間傳ておそろゝ心なし。少事を指をかれば。大儀はいよゝ成事かたし。法令のさだむるとこ

ろ理に當てをこなはるゝことを施行せざるを違勅の人といひて一段の罪科あるなり。人の訴詔理にまかせてかへし付らるゝ所に。この間もち付たる人。難澁を出すことあり。誠不便なる事ならば。をつてかはりの地をあてをこなはるゝとも理をば理とつけらるべし。それに猶違亂を出す事あらば。所當の罪科なくては有べからず。上裁を背上は。先出仕をとどめ。餘の所領もあらば沒收せらるべき歟。又向後かれが申事。たとひ理有事成とも聞入給ふべからざるか。かくのごとくの制法ををかれずは。上をあなづること更にたゆべからず。又一國の守護など所勘にしたがはざらんをばいかゞはせん。凡大將軍といふは。おほやけの御かためとしてしきみの外を制し給ふべきゆるさをかうぶれる職として。成敗有ことを違背申さむは。別して罪科に處

せらるべし。代々武將の其例をもて義兵をおこし。朝敵に准じてすみやかに退治のさに及べき事。理のをす所左右にあたはず。しからずは。はかりごとをとばりの中にめぐらして。いかにも前非を悔。承諾申やうに。うらおもてより計略有べきか。是又仁の道に有べし。それ又しからずは。私なき心をもて冥の照鑒にまかせられば。上裁を用ず雅意にまかせん強敵は。かならず自滅すること有て。

俄に威勢を付奉る事。是又前蹤なきにあらず。しばらく時節到來をまたるべき歟。これらの進退よりのきは。ひとへに大將軍の所存に有べし。とかく人の申に及ばざる所也。

樵夫も王道を談ずといふは。いやしき木こりも王者のまつりごとをば語心也。今八ヶ條をしるせる事は。八幡大菩薩の加護によりて大八嶋の國を治給ふべき詮要たるに

よりて。樵談治要とは名付侍る物なるべし。

常徳院殿自筆御奥書

右此一冊。一條殿御作者也。可レ秘々々。

文明十三年十二月六日

自御方御所様被下也。

文明十四年七月五日

義覺御判

以下他本所載

義尚

自大樹政道詮要可書進之由示給之間。暫雖令斟酌。及度々有御催促。仍此一巻書出之。文明十二年七月廿八日進覽之。奏者伊勢二郎左衛門尉也。其後以御使示給云。被進准后御方之處。有御一覽被褒美申。能々可被守此法之由被仰之間。一段令祝着給者也。同者外題可書進云々。則書之付御使令返進訖。頗可謂眉目者

也。

三關老人御判

此一冊借<sub>ニ</sub>請政弘朝臣<sub>一</sub>仰<sub>ニ</sub>量綱<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>之者也。

長享元年仲秋日

槐下桑門御判

右此一帖申<sub>ニ</sub>請<sub>一</sub>龍翔院御本<sub>一</sub>書<sub>ニ</sub>寫<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>。於<sub>ニ</sub>辟落之誤<sub>一</sub>者。歷覽之髦人添<sub>ニ</sub>削<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>矣。

延德三年五月九日 律師宏盛在判

右樵談治要以橫田茂語藏本書寫以讀耕齋藏及流布印本  
校合畢



群書類從卷第四百七十七

雜部三十二

乳母のふみ

一名庭のをしへ

阿 佛

なにはのこのよしあしをもおぼしめしわき候はんまでは。うきをもしのびすぐして。御身をさらぬまもりにとこそおもひまいらせ候つるに。をのが世々にもなりぬべく候事のさやは契しとおきふしなげかれ候に。御ふみ見候へば。いさめしものと見えさふらふこそあはれにおぼえ候へ。げにさぞおぼし召候らんと御こゝろぐるしうて。ちかきほどのおもひやりだになく。都鳥にこととふたよりも候はぬ身のかへるなみをのみうらやみて。くもでに思ふことたえぬ八はしのなもうらめしく。わ

たりもやられ候まじき心のうちに。まだおぼしめしなげき候はんすることなどをおもひづけ候へば。いとどものうくて。大かたいかにもみそぢにあまりてこそうるはしく物はおもひしられ候なれ。はたとせがうちは。なをおもひさだまらぬ事にて候なるを。ましていかにと御心ぐるしく候へども。いくとせつもりたらん人よりもおとなしく見まいらせ候ほどに。よろづおぼしめしわく御事もやとて。御覧じとぞむるふしぐもやとこまかに申候なり。らうたくうつくしき人のそのかたちのうきよにならびなく候とも。心さだまらずなど候へば。いたづらごとよとおんこゝろをそへ

て。いかにあらまほしくおぼしめす御ことありとも。をのづから人ももり聞て。もどきをしりぬべからんことは。御心にころをかけたらひて。おぼしめしわすれ候へ。心のまゝなるが返々あしきことにて候。たとへひとのいみじうつらき御事候とも。いろに出て人に見えんははづかしかりぬべきこととおぼしめして。さらぬかほにてはありながら。さすがにうやとは覺えて。ことずくななるやうに御もてなし候へ。またうれしう御心にあふ事候とも。こと葉にうれしやありがたやなどおほせごとあるまじく候。うきもつらきもうれしきも御心に能おぼしめしわきて見え候はんぞ。また人のころのうちなどをとこそありけれ。かかる心のしてなど。人にもおほせられきたする事あるまじく候。御心のうちばかりにて。よくおぼしめしとめて。我心。身のうへを

も。人の事を。おぼろげのひとにうちかたらし。色見ゆる御ことなど候はで。大かたに何事をも。御心のうちばかりにおぼしめしわき候へ。あさはかに物などおほせられ候はんはあしき事にて候ぞ。さればとて。あまりに上<sup>首</sup>すびてにくい氣したるもわろく候へば。そのほどはわきまへふるまはせ給ひ候へ。何よりも心みじかく。ひきゝりなるが。あなづらはしく。わろき事にて候。なが／＼と何事もあるやう。あらんすらむとおもひのどめたるが。なだらかによく候。さればとて。大やけわたくしにつけて。いそぐべからんことを。いふがひなくて。月日をくくり時をうつされ候はんはわろく候。人にもうちたのまれ。御こと葉をもませたらんことをば。きは／＼しうすゑとをるやうにはかなからんことをも。我御身の手をもふれ。いろひたせたまひ候へ。かく申候

へばとて。にくいげしてさし過。さが／＼し  
うおもだつさまの御もてなしは。ゆめ／＼候  
べからず。たゞおいらかにうつくしき御さま  
ながら。よしあしを御覽じとぞめて。ことよ  
く申よらん人にもおぼろげにて御心うつさ  
ず。また氣にくうもてはなれなどせで。大かた  
につけてひとをばぐくみ。なさけあるやうに  
あはれむはよき事にて候。とめるをば人ごと  
にうらやみ。おもくするならひにて候。まこ  
とにそれほどいかでなくては候べきなれど  
も。御心のうちには。まづしきをあはれる物  
にかすまへおもふがほんたいにて候。たとへ  
ば人のうへをそしり。にくみなどしても。し  
のぶ事をいひあらはし。うちさゞめきなど。  
かたへの人の候はんに露ばかりこと葉ませさ  
せおはしし候まじく候。あやまりて人はな  
にとかまうしつるいかゞなどたづねまいらす

ること候とも。いさなにとやらん。あらぬこ  
とをいひしほどにきかずなりにけりなどはか  
なげにおほせられなして。ことざまなる御あ  
ひしらひ候べく候。人になさけをかけ。あは  
れかはすさまの御心むけはあるべく候。しる  
人ごとにしたづらなるすゞろふみしげくかき  
かはす事よからぬ事にて候。なべてひとにく  
からぬもてなしにて。さる物から。とりなし  
うちとけたるむつことの心よせある御しる人  
には。おぼろげならず。えらびておぼしめしか  
はすべく候。人の心はどうちとけにくうおそ  
ろしきものは候はぬぞ。何のみにちに車をくだ  
き。なにの海に舟をうかべたらんよりもと。  
ふかく申ならはして候へば。よく／＼やうあ  
ることとおぼえ候ぞ。かへす／＼御心得候べ  
く候。我めしつかふ人々の中にも。おとなし  
く。さもありぬべからんには。物をもおほせら

れあはせ。うちたのむやうにあたらせたまひなどしてわがうさいとなからんには。たゞいまにくからぬやうにおぼしめし候とも。ひたひさしあはせて。御きそくよげにうちさゝやき。たはぶれかはしなどするも。かろくしきまへは。さりともと御心やすくおもひまいらせて候へども。わかきほどの心は。おもふにつけて人のもてなしによることも候へば。なをうしろめたきやうにてこれまで申候。また御心むけはさる事にて。はかなきわざにも。とりふれさせたまひ候はんずる物ごとによしあるさまにとおぼしめし候へ。さすがに上のしなのえらびになりぬる人のすたれうたであることは候まじけれども。おなじこともあるにまかせてこゝろをそへぬやうに候へば。ひさうなきものにて候。そのみすのまへは。く

るしきやうに。そのわたりは心にくゝなど心ときめきせらるゝやうに候へば。人にも所をかれ。はぢらるゝ事にて候ぞかし。御たきものなどあはせられ候はんにもかきませのつらにはあらず。しみふかくめづらしきにほひをそへて。人の御ほどをしはからるゝやうにおぼしめし候へ。ことゝ敷。けばやきかほりなどもて出て。このましくするていには候はで。たゞいつもうちとけず。御ぞのにはひも。なつかしきやうにしめてわたらせたまひ候へ。ひとのたきものこひまいらせ候はんにかうぐとゝのはず。おもひいれたるすぢなきやうに候はんなどちらさせたまひ候まじく候。その人のにほひは。べちのものにてといはるるやうに何ごともなべてのつらにはあらじとおぼしめし候へ。さればとて我こそはとにくいけして。ひとのことをもどくやうになど



は候はで。うらくとなにのすぢあるさまに見えぬものから。こゝろの中にはうつくしく。なにごとともゆへある色をそへてしがなとおぼしめし候へ。大かたの御もてなしけはひもいとをしきすぢをそへて。さぶらふ人々にもあさしくみだれたるふりなく。よういあるやうに御をしへ候へ。さるかたにおかしきけして。色をもかをもはへくしく。しるさまにみせ。いまめかしう花やかなるふるまひは。一どはさるかたにかひある心地し候へども。二たびかへり見候へば。いかにぞや。見をとりせぬやうは候はぬぞ。さるべきいらへ。おりふしのなさけ。いたくむもれいぶせくて。ふるぎのかはきぬにくちおほひたるやうなどそこそくちおしかりぬべく候へ。こはえもいはぬなどやうにいらへぬべからんごたちをば。わきてらうたきものにせさせたまへ。

ほどしらぬおもひなきも。むげなる事にて候へば。我こゝろひとついかにおもひをきて候へども。すゑさまにいふがひなくはぢをもしらぬていなる人だに候へば。我めのとをりならぬことは。あやまりおほき事にて候。この人はことのほかならじとすこし心ばせありて御らんせむ人をば。せうくはなんあることありともおぼしめしかへていとをしくもせさせたまへ。さのみおもふやうなることは。かたかるべければなど。よろづを御こゝろえ候へ。ひとのつぼねにいでいままいりの此たびのはまさりたるをとりたるといひさたせらるは。かへすくあさくしく。こゝろにくからぬやうに候なり。おぼろげにては日比よりこのたれがしなど人にもしられあひしらひつけたるていにて。としごろになりたらん人をばいださせ給ひ候まじきにて候。それもやう

にこそより候はんすれ。心ながきやうをたてても人になんせられ。かたへの人のためにもたへがたきことなどの候はんは。又まんに候へてもあしく候へば人のほど心のきはぎはをよく御覽じて御はからひ候べく候。又人のすがたもてなしなどはむまれつきたることにては候へども。それもさすがに心むけにより候へば。ほのかならんうしろでをも。こはくしからぬやうにみさほにもてなさば。よろしくはなどか見えざらんとおぼえ候。ひちのかかりもてすゝみ。なますゞろぐきは。何と申にもをよび候はず。たゞなべてよきほどに人とうら／＼とむかひて。御かほのをきどころ。つじやかに。すがたうつくしくゐなして。水どりのうきたるさまおぼえて。御袖のをひやうおもひはづさすこゝろをそへて。木丁のはづれゆかしきさまにもてなして。御ぐしの

かゝりもおほどかにすたれぬさまながら。あまりよし有と。わざとめかしからぬやうにはづかしきかたをそへて。おほどかによくはへて御ふるまひ候へ。うちさらどきあひきやうつき。にぎはくしくなどあるまじく候。かく申候へばとて。さるべき人のまいりて候はんするに。神さび物とをくて。春日野の雪のあした。かものやしろのかはなみなどおぼえたるやうには候まじく候。たゞ御もてなしばかりのおもりにあさはかならぬすぢのありたく候。わざともひとをわかす。なづかしき御人さまにてありたく候。人のきはく／＼をおぼしめしわくべく候。ひとにむかひてなにのすぢともなきものがたりして。代つぎがよゝり。この御代までのこと葉もつづかず。時よもしらぬいたづらものがたりなどおほせられ候まじく候。みすのきはちかくゐよりて。たれが

うむりのひたひつき。くつのをとなど申わらふ人の候はんに。ゆめ／＼こと葉ませさせ給候まじく候。すべてひとのしのほどよりもおとなしくおよすげたるがよく候。人にいみやうつけなどしてわらひ。心しれるどちめ見あはせて。人のあまねくしらぬほどの事。うちわらひ。そゝやなどさゝやきて。をのづかなぞやなどとふ人あれば。たゞさることのなととて。氣色ばみたる事。かへす／＼くちおしき事にて候なり。花月などもいかにぞや。あることの候ぞ。な御覽じそにては候はぬ。きげんによりたるものにて候。わかきほどにまたいたくおよすげたるものにききことにて候。あまりにふえうめきたるもわろく候へば。をくれすぎぬほどにわたらせおはしまし候へ。人丸赤人があとをもたづね。むらさきしきぶが石山の浪にうかべるかげを見て。うきふね

の君の法の師にあふまでこそかたくとも。月の色花のにはひもおぼしとぞめて。むもれいふがひなき御さまならで。かまへて歌よませおはしまし候へ。歌のすがたありさまは。みなふるきに見えてくでんにしるして候へば。よく御らんじ候へ。たゞ女の歌にはこと／＼しきすがた候はで。詞たがはず。いとをしきさま。うら／＼とありたく候。さればとて。ゑんあるすがたにのみひきとられて。たましゐの候はぬもわろく候へば。さやうのことはなをなをふるきを御覽じ候へば。いかにも歌をばこのみて。しふにいらせ玉ひ候へ。なにのわざもこのよのたはぶれにてこそ候へ。いのちたえぬれば。みなむかしがたりにて候。うたはすべらぎの御代のつきし候まじく候へば。かしこき君にもそのあとはしられ御覽せられ。家々のもてあそびにもあはれなりけるわ

ざかなと忍ばれさせ給候べきことにて候はん  
すれば。いかほども御このみ候へ。何事もい  
けるほどこそせんなれ。このよをわかれん後  
はいかでもと申人の候。よにひがごととおぼ  
え候。ほねをばうづむともなをばうづむまじ  
と申事の候へば。いまのなげきよりもまさり  
て。心うかるべきこととおぼしめし候へ。御  
手などかまへてくうつくしくかゝせ給ひ候  
へ。手のすぢは。こゝろくゝにこのみ。おりに  
したがふことにて候へば。ともかくもさだめ  
申がたうおぼえ候。女の本たいにてはとを<sup>手</sup>か  
たちにて。はかなき筆のすさみも。人のほど  
をしはかられ。心のきはも見ゆることにて候。  
をきものの御づじの御さうしなど給てかゝせ  
たまふほどにとおぼしめし候へ。<sup>ま</sup>なは女<sup>文</sup>の  
このむまじき事にて候なれども。<sup>も</sup>じやう歌<sup>字</sup>  
の題につけて。さるさまをしらぬほどならん

は。をこがましく候。御覽じしりて筆のすさ  
びにかゝせおはしまし候べく候。すみつき筆  
のながれ。よるの鶴にこまかに申げに候。御  
らん候へ。又ゑはわざとたてたる御のうまで  
こそ候はずとも。人のかたちなどうつくしく  
かきならひて。物語ゑなど詞めづらしくつく  
り出てもたせおはしまし候へ。大かたゑとて  
もかたくなならぬほどにかきならひて。御び  
やうぶのすみがき。しきしなどをかゝせお  
はしましたらんこそよき御事にて候へども。  
それまでをよび候はずばのことにて候。御こ  
とびはなどはえたる御のうにて候ぬべければ  
心やすく候へども。御物ぐさげならんおりし。  
ねんじてそこをきはめむとおぼしめし候へ。  
わごんもよろづのものねにたて候とおぼし  
めさずとも。ついできてすこしならひとらせ  
たまひ候べく候。されどそれはまねぶ人。か



たきことに成ぬれば。たゞしやうのことをとりわきてあはれにおもはしきもののねにて。五の御としよりならはしそめまいらせて候しに。ふしぎなるまで御ぎりやうさとき。いみじき人々にもをとるまじくなどほめられさせおはしまし候しに。七つにて御いままいりの夜。ゐんの御まへにてひかせおはしまし。又八の御としとおぼえ候に春宮の御びはにひきあはせまいらせなどをあげさせ給候し御ことにて候へば。いかにもはげませたまひて上ずのなをもえんとおぼしめし候へ。さるべき物がりども。源氏おぼえさせ給はざらんはむげなることにて候。かきあつめてまいらせて候へば。ことさらかたみともおぼしめし。よくよく御覧じて。源氏をば。なんぎもくろくなどまで。こまかにさたすべき物にて候へば。おぼめかしからぬ程に御らんじあきらめ候へば。

なんぎもくろくおなじくこからびつにいれてまいらせ候。古今新古今など上下のうた。そらにみなおぼえたきことにて候。もしやおぼえさせおはしますとて。をしてすゝめまいらせ候へども。よに心にいらす。ものぐさげにおぼしめして候し。かへすゝほいなく候。おなじみやづかへをしてひとにたちまじり候へども。わが身のきりやうにしたがひてかしこき君にもおぼしめしゆるされ。かたへの人に所をかる物にて候。おもてをさらし。ひとによしあししたせられたるばかりにて。なにのおもひてとしも候はず。おやのこゝろざしひとつにいだしたて候へども。させる所なきつらにて。はかなきことのいらへなどにつけても。くちおしききはにてやみ候はんこと返心うきことにて候。みめかたちもさることにて。まめやかに人はこゝろをきてなだらか

にのうなど候へば。うへにもさるかたのめやすきものにおもはれまいらせ。どうれいの中にも。これは何もじぞ。そのおりの事はいかなりけるぞなどていのことをも。人のとひかくるほどのこと。いふがひなからぬほどにうちあひしらひ候へば。あなづらはしからず。さるかたにて。たよりなげに人わらはれなるべきまじらひのさまなれど。ゆるさるゝかたありて。人々しき數にゐることにて候。まどのうちひとつにかしづかれて。おやのをきてにしたがひて。世をすぐすほどは。おほくのとももてかくされてやすく候。ふるくもこれていの事は申て候やうに。かたはなるべき事はひきかくし。よにもれ聞えてよかるべきことをばことゝしくまねびたてなどし候へば。心にくゝ候をつねならぬよのならひ。さてしもありはつるやう候はす。たのめし松もかれ

はてゝ。下葉かれゆく吳竹のをのがよゝにわかれぬる後は。よるべなう心ぼそき物にて候につきては。人にもあさはかにおもひおとしめられ。心よりほかにかるゝしくなもれぬべき事にて候。御身にちかく候はん人のよからんにつけても。うきなをもながし。そしりをもおひぬべき事にて候。たかきまじらひにつけては。ことに品々わきたる心をきてのあらまほしく候ぞ。御てうどどもも。あるべきさまにてみだりがはしからず。わきていみじからぬものなりとも。うたてげにとりなすこと候はで。心ばかりにもとゝのへ。はかなうもてならす扇のひとつも見所あるやうにしもたせたまひ候べく候。中々にぎはゝ敷。ゆたかなる人のあたりは。よのきらにもてなされて。なんにも覺えぬこと有げに候。その御身などにはけぢめありぬべく候へば。ことふれ

すたれず。なさけふかきやうによういして。その人のまへは心にくゝなどいはれさせたまひ候べく候。かく申候へばとて。よろづにそみ返り。物めでするさまにも出て。ゑんある氣色あるさま人にみえんなどは。おぼしめし候まじく候。はなぐとあひぎやうづき。けぢかきもてなしの過候ぬれば。なにわざにつけてもなむになることにて候。月も秋のさやかなるかげよりも。冬霜夜にさえわたりて。氷にまがふ色は心にしめられ。春の花。秋のもみぢのはへぐしき色よりも。霜がれのせんざいのそこはかとなくかれ行て。たれにとはまし秋の名残をと。さながら雪のしたにうづもれて。心ぐるしげなるかれ野などのわきてあはれにおぼえ候心ならひに。花の色。秋のもみぢをも。人にたがひて。すさめたる御氣色見えさせ給はずとも。ことにふれてけはやかからず。物

あはれなるかたに御心とぞめて。このませおはしまし候へとおもひまいらせ候。ものの色あひもはれぐとうつくしく。たつた姫のにしきをそめかさね。花のたもとをたちそへ。にぎはしく。あなげざやかなど。めにたつていにはとて。うは邊は。おりにつけ時にしたがふやうに候とも。御心のうちには。ものさび。あひなきかたによりて。おほどかなるさまをしめさせ給ひ候べく候。人の心のきはは。たはれごと。なをざりの詞にみゆる物にて候ぞ。うへにはなにともなきやうにふるまひなし。上ずめかしう人をあざむくていには見えぬものから。心のそこには。ひとと一とをりをおもひこめて。はじめよりすゑのことまでたがへず。ものをもおほせられ候へ。うすきをこくいひなし。をろかなるをふかきにいひなして。さしもやはとおぼゆることに色をそへ

て申なすこともかへすぐわろきものにて候。たゞ何事もいつはりかざらず。げにとおぼゆるやうに候へば。かひぐしからず候へど。ものしてはよく候ぞ。大かたは人をもうらなくうちたのみ。なづかしきさまに見せて。名残なくうちとけさせ給候まじく候。さのみ又われきもありがほにさかしばみ。にくいけしたるもてなしなどは。いさゝかも候まじく候。人にはうとからずしたしからず。いつもけぢめ見えぬやうにふるまはせおはしませ。なにと申ても。人のしたちによることにて候。又あぢきなき夢のよにたのしみさかへてもいつまでか候はん。つゐには佛のたねとこそおもひいるべき事にて候へども。をろかなる心のおこがましさは。うへをきはめたるくらゐにもそなはり。日の本のおやともあふがれさせたまひ候はんこそ。かりの此世にもなぐさむか

たにて候べきを。そのおもひ出なくば。後のよには。くらきみちにまよはんこと。かなしく候ぞかし。ほうのひきひきは。かぎりあることにて。何とあてがひ。おもふにもよらぬならひにて候へども。まだしきに。身をもてけちなどもしかるべからぬ事にて候。かやうのことをよく／＼おぼし召わきて。ほどにもすぎて。やんごとなかるべきと。まづたてたるすぢひとつわたらせたまひ候へ。かいりうわうの后とかや。あぢむきけん人の心地して。そのまねめかしく候へども。かひなき心ざしひとつには。上がうへにも。いつぎすへて。見まいらせばやとおもふすぢふかく候に。その心をたがへじとおぼしめし候へ。我身の人數にて。世にたちめぐるかひも候はゞ。心の限りかしづきたてゝ。御くわほうのほどをも見まいらせ候なまし。宮づかへなど心ぐるしく。あはつ



けき名ももれぬべきわざと見候しほどに。いはきなき御ぼどよりさまでいとなみ。いつしかといだしたてまいらせ候べきにては候はざりしかども。身のいふがひなきやうに候へば。山がつになしはてまいらせ候はんよりは。をのづから世にまじらひ。人めかせおはしまさばとおもひたてたるとをり。ひとつにあながちに心つよくおぼしめし候へ。二葉よりいそぎたてまいらせ候御みやづかへも。うはの空におもふ所なきにては候はず。その御身いまだむまれさせ給はず候しほどに。あやしうたのもしき夢を見て候しにも。かならず女にて。かたじけなきくらゐに世をてらすさまにさやかにみえさせ給候し。それにつけてはすこしそねみきしろふかたもやあらなどまでくはしく候し。いかさまにも。やんごとなきくらゐにとうたがひあるまじきよしあはせ候しの

ちも猶々心ふかき夢のつげどもたびかさなりて候。春日の神もさだめて。いつはり申とはおぼしめし候はじ。御心にもおぼし召あはせ候はんずらんたのもしさは。いまだわすれ候はず。此夢あはんまで人にかたらず。ふかくおさめて。朝におきて夕にふしても神佛にいのり申ことをこたり候はず。いまだかばかりもらしそめ候ぬる。我心にもかけて。をしなへたるきはに身をもてなさじ。さるべきすくせありて社夢のつげもありけめ。さるにつけては。おほせなくとも。たのもしかるべきをとおぼしめして。物うくなど候とも。心ながくしばしば世を御らん候へ。それもおもふにたがふ事にて候はゞ。いくよしもあるまじき世中にこのたびしやうじをはなれ。ぼだいにおもむかばやとうるはしくおぼしめしとるかた候て。御心もしづまり候はゞ。御かたちもか

へ。まことのみにいらせたまひ候へ。いかで  
人なみにもとおもひおきてしまゝにも。たが  
ひはてぬ。なきおやのくらき道にまよはん光  
にも。いかであきらけきみのりのそこをなら  
ひとらんと思召候へ。おもひのほかにもしは  
身にあまる御くわほうひらくるほどに候はん  
は。申にをよび候はず。御もちひもなにごと  
もをろかなるふしおほくとも。人にもてなさ  
れてとがはかくるゝ物にて候へども。それに  
つけてこそよのすゑまでいみじかりしためし  
にといひつたへられたきことにて候へ。かし  
こきひじりの御代より女御後の御うへまで。  
よつぎに見えて候へば。よく御覽せられ候へ。  
三でうの後の御もてなしぞかたはらいなき事  
ながら。すゑの代まであらまほしくいみじき  
御ふるまひにて候。御心もちひ世のをきて。  
ふるきをあらため。むらかみの御代より此か

た。御らんじ覺て。しよくしや守地。ひゞしき  
たぐひにはあらぬものから。ふしことにゆへ  
をそへ。おもふ所あるがよきことにて候。い  
まやうの人は。わらはれもどかるゝかたも候  
はんずれば。心得てよきほどに。このおはひ  
は。御はからひあるべきにて候。うちまかせさ  
いはひなどひきいづる人はすくなき事にて  
候。さすがにをしなべてのつらにちと御めか  
けられまいらせなどするほどの事は。又もる  
るもありがたき事にて候へども。その中にも  
すこし御心とめられたるとだにおもひをとり  
候へば。したりがほににくいげして。人にそ  
しりもどかるゝ事のみ候。げにもまたすこし  
色かはり。あぢきなきおもひもそひぬれば。  
かけまくもかたじけなき御ことなどを。ひき  
ならしがほにうらみまいらせなどして。かぎ  
りあるおほやけごとにも。さはりと申。世の

おぼえありがほに。あまたの御つかひをも。  
かさねてこそなどおもむけたる人。返々ある  
まじう。びんなかるべきことにて候。我きら  
ありがほにほこりにぎはゝしきもわろく候。  
それていにおもむけたる人は。露のたがひめ  
にも。いちはやうおもひしほれてさとがちに  
あはつけき色をもたちあしきことにて候。あ  
らあじきな。御心なぐさめさせたまへなどそ  
そのかす人あればとて。かくおもひしづまん  
もよしなし。げに時々はつみかろむわざもし  
てしがなといひて物まうでをし。をのづから  
かろびたるありきなどして人にをとしめらる  
るふしもまじりぬべし。さやうにて。さしも  
ふかゝらざらん御心ざしなどは。わざとなく  
ともとだえゆきて。なごりなきさまになりは  
つることもや。はじめよりあながちにはへば  
へ敷。御おぼえならずとも。心もちゐをだし

くて。人とあらそひそねむけはひなう。ほこ  
らかにもてなして。さるなみにて。まじらひぬ  
べからんほどは。よろづをしらずがほに。うら  
なく。らうたきさまして。さる物から。みのあ  
りさまは。ふかくおもひ入たるやうにうちと  
けみだれ。心ゆるみたる氣色など御らんせら  
れず。ことのつまごには物おもはしきをお  
もひいます。うちまぎらはすほどとおぼえて。  
さるべきおり／＼の御いらへさやかならぬも  
のから。うちかすめて詞おほく。なが／＼と  
ことつゞけぬやうにおもひしりけりとほ。さ  
すがに色見ゆるていに。なにのあはれをも。  
おもひしりたるいろみえてあはれなるべきふ  
しもおもひとゞめず。そこはかとなき身のほ  
どにてなどほのかにほのめかせたまふとも。  
ことに出てかほの色かはり。ものうらめしげ  
なるいろあらはさず。人わらはれにほいなき

ことありとも。心のうちふかくしづめて。數なるまじき身のなをかへてもまじらふこそめやすからめなどおぼしめして。うへの女房たちなどにも身のありさまをかきくつし。ほいなうおもはずなるよし。露ばかりもおほせられ候べからず。あやまりてほいなきことかななど申候はん人候とも。なにかは人々しくその數におぼしめさるべきにもあらず。しひてこゝろのみこそなど詞すくなにてわたらせたまひ候へ。たゞかきませのひとくならで。おもふどちらなん人などの心ばせもなづかしばみて候はんには。それもまた。うらなきやうに。うちかすめもして。折々につけて。はしたなきこともありながら。よろづをしらずがほにてながらふるも。心あさけれど。又ふたばよりたちはなれざりし御かげのなづかしさに。などていのかどくしう物うらみがほに

はなくてうちかたらふついでなどには。もらしもせさせたまひ候へ。さとすみしげくいでありにつけても中々身のはぢあらはるゝやうに候へば。いとどかごおつることにて。たゞおいらかに心しづかなるふるまひにて。人よりはもてつけ。おさまりたる所だに候へば。うち／＼のおぼえはなやかならねども。しせんに御らんじなれて。たちまへば。世のたとへに申たるやうに。こゝろながきはとり所にて。宮たちなどいできさせ給ふほどの御事など候へば御かしづきにまぎれても。命のきはゝ。すぐすことにて候。身のほどもよのありさまも。おもふやうにならぬ事にて候とも。五とせ六とせのほどはしのびて。色かはらぬやうにさふらはせたまひ候へ。なをうき身のすくせとも思ひしりぬべくならせ給ひ候はんときは。一すぢにおもひさだめて。さるべきつい



でして。さまうちかへて。しづかにおぼしめし候へ。よからぬ人は。やがてかきませのきは。みをもてなして。あはしくはふるゝことなどの候。返々くちおしき事にて候。さやうの御心むけはあるまじく候。夢のよなどと申なして。心もちひあさしくしき人のなにごともしるべき事と申て。よからぬすぢには。かろらかに。物にこゝろえたるさまして。みをやすらかにもてなし。しなをくれたるまどのうちにも。にぎはしくてだにかしづきすへられ候へば。こゝろにうれふる事なくてありなんかしなど申なす事候べく候。ゆめゝその心づかひ候まじく候。さやうにものをおもひはじめ候ぬれ。おちぶれ身をもて。はふらかし候ぞ。たゞおやのおもかげのこらん家のうちに。まことにだいかたぶき。すたれたえても。むぐらにかどをとぢられ。のきのよもぎにう

づもれて。たれふみわくるあともなき庭のあさぢをながめても。むかしにかはらぬ月ばかりこそこととひくるかたにて。たれはぐくみあはれをかはす人候はずとも。佛の御をしへのまゝにてあきらかなるみちの光をも見。おやのありどころをもしらばやとおぼしめし候へ。物がたりにつけたるしるべ。もしはさぶらふふるごたちのなかにも。あなこゝろぐるしの御ありさまや。かくてはいかゞすぐさせたまひ候はんぞ。かれはいづくにおはしましてこそかしこきことはあなれ。これはとしてこそ身をもていでて。なかゝにめやすきていなれなど申きかせ。いざなひ候べく人候とも。なびかせ給ひ候な。げにそれをさるまじきと申にては候はず。本草もちぎりをきたるいろゝ候へば。御えんもありこそし候らめども。うきは身にそふならひの候へば。こゝ

をさりかしこへゆきても。人こそかはり所こそあらたまりぬるとも。さるべしとさだめをきなん身のすくせ。一たんのことによるべしとはおぼえ候はねば。たゞ御身をもてわづらはで。あるにまかせて御らん候へ。あらぬ所をゆかしうする心は。ひとのおちくだるぬんえんにて候。むかしのかげとゞまれるまきはしらは。なつかしく。こゝながらこそかたちもかへ。きやうほとけの御かざりをも。みのたへんにしたがひてこそいとなまめ。をこがましく。うへなきくらゐにもいつきかしづきて見ばやとおもひたりしおやのをきてにもたがひはてゝ。かくうつりけるみのはてを何事につけてもちやくしむさばるおもひなくて。そむくとならば。露もこのよに御心とゞめじとふかくいとひすてさせおはしまし候へ。みをかへても。人たてまいらせんと心にたしなみ

候つる御心ざしの程おぼしめしやり候へ。をろかにすたれぬべからん御心をもはげまして。いかでさやかならんみちの光にもならまし。ながらへてあらましかば。かゝるありさまを見て。いかに心ぐるしく。こほりにむせぶしたおきの袖のしづくをもおもはましなどのどかにおぼしめしつゞけ候はゞ。さりともし御心すゝむるたよりにはなり候はんずらん。をのづから見まいらせ候はん人など。かくまではおぼしめしすてけるよにかなどやうに申人候はゞあまりにつみふかくむまれたる身のうかぶかたやあるとてとばかりおほせられて。いみじくさとひらけたるさまなどもてなさせたまひ候まじく候。またいかなるひじりよにきこえたかくてかしこきありと申とも。むつびよりてほうもんきかむなどなれちかづく御事。返々あるまじく候。中々思ひよる

はるく殿

ほどの事。かはると申候人候はんはひがごと  
にて候。さやうのことによりて。あしきこと  
わろきなもたつことにて候。あるまじきこと  
は。いか程もうとくしくおもひへだたりた  
るがよいことにて候。ちからなくうけたもた  
せ給ふべきのりのことば。ごじやうの法文も  
あきらめたくおぼしめさば。うるはしきほと  
けのおんまへにて。御じゆかいなどひとあま  
たさむらはせて。うけもたもたせ給ひ候はゞ。  
よにかしこきあまたちなどの此ごろはゆるさ  
れあまた候へば。それも心のほどなどよく御  
らんじさだめて。御がくもんなどの師にはせ  
させたまひ候へ。かりそめにも。此ひじりこ  
そかのきえ僧など人にいはれさせ給ひ候まじ  
く候。佛事などせさせたまひ候はんにも。人ひ  
とりを。わかすあまねき御心にそむえんに。こ  
ころぐるしく候はんあたりをしりて。まこと

にほとけの御心にかなひぬべきやうにせさせ  
給ひ候べく候。うはべばかりの事はわろく候  
也。おなじこともまことをいたし心ざしをい  
たさぬは。なのみありてまことにはいたらぬ  
事にて候なり。またきえんまち／＼なること  
にて候へば。人のをしへにもよるまじく候へ  
ども。いづれもおなじ御ほうにてこそ候へな  
どとて。あれこれにかゝりたち候へば。心もち  
りて。一すちにそまぬものにて候ぞ。かまへて  
かまへて一かたにおぼしさだめ候へ。ゆるが  
ずたじろがず。御心をおこさせたまひ候へ。  
さればとてわがしう我宗ばかりほうはありて。よ  
のけうはいたづらごとぞなどていの事をろん  
じて。をとしめなどすることは。かへす／＼  
あるまじきことにて候。世をもそしらす。我  
しうをもいかに人申そしるとも。それにより  
てあやぶきたがふ御心候まじく候。おもひ出

候にしたがひて。よろづのことを申つゞけ候へば。おなじこともおほく御覽じにくゝも候はん。申てもく。この世後のよにも心のすゑとをり。おもりかにまことある人がよく候へば。人のうへを御らんじても。よからんにつけあしからんにつけ御心つくべきものにて候。朝夕そはせたまひ候はん人にも心のきはみえて。あらけうざめなど思はるゝていの御ふるまひあるまじく候。中々よその人は。さのみいたりたちてのことをいかでかしり候はん。身にちかく。めちもならべたるひと。めしつかふものどもなどの見まいらせ候はん事は。みなよにちらんずるとおぼしめし候へ。うときは物をもらすことのやうに。これは我うちのもののなれば。よもいひちらさじとて。をこがましきことはいでき候也。人のきゝにくきこそまさり候へども。かくれある事は候はぬ

なり。よにありわびたらん人のよるべなくただよひ候はんをば。あはれをかけて。はぐくませ給ひ候へ。おもひのほかなることにて。中比よにふるたづきもすたれ。したしきにもそむけられ。うときにもましてこととふかたなう成たる事候しをばぐくみまいらせし心ぐるしさはおほふばかりの袖もひきたらず。それにつけてもかたくなしきかしづきは。更にいたはしく。あらき風をもよるのふすまをかさねて衣のうすきをふせぎ。いづみの水をもすまして扇のかせのぬるきを心ぐるしく。朝におきては花のひらきたる心地して。木だかきかげを心もとなくまち。夕にふしては露のちりをもすへじと。とこなつのはなのほひにもすぎて。らうたくまほり。むば玉のかみのすぢことに千いろをいはひてもあかぬ心地して。はるのにしきも秋のたつたひめもわが



子のためにたちかさねんことをおもひ。まだひとへなる袖のうたゝね。こゝろぐるしくて。さむきよにもゆかをあたゝめて。かたはらにふせまいらせ。雪の光をかべにそむけるひかりとたのみて。あかずよなくおぼえ候しにもめにみえぬ神ほとけをかこち。いにしへのむくひをうらみて。ふたとせばかりをすぐして候し程に。心をくだき身もなやみて。おいさきとをき御ためとのみよろづにいのりしに。

さやは佛のおんちかひむなしく候べきとすく案ごうのつたなき身をかへり見ず。大ぐわんをおこして。ひとたびはうらみ。一たびはたのもしくぬかをつき。きやうをよみて。一すぢにせめふせ申侍しに。みつとまでは候はねども。佛の御しるしにやと覺ることのみ候へば。いかにもして。御しんつよくねんじまいらせて。もしおもふやうなる世を待出させたまひ候は

ば。ひとのうれへをやすめ。まづしからんものをたすけんとおぼしめし候へ。申てもまうしても。ただ夢のよにて候に。あぢきなきまうねんなくて。佛の御をきて御ようい候べく候。かやうの事申候へば。返々をこがましく。おちちりたらんためもかたはらいたく候へども。せめての御心ざしのあまりにたちはなれまいらせ候はん世のおぼつかなさに。これをやがて。わかれのはじめにてもや候らん。しらぬ世にて候へばその詞ともおぼしめし出候ばかりとをろかなる筆にまかせ候も。まづうきつらき涙におぼれてなにごとを申候やらん。かきもらしたることもおほくおかしき事も候らん。それにつけても御らんせんたびごとにあはれとおぼしめし候へ。いたづらごととおぼえ候へども。いさごの中にも玉はひとつかならずゆられてあるものにて候。此ふみの中

にもをのづから御覽とまるとも候はゞ。かならず御ようにたち候はんするぞ。扱も／＼おさなくより法文の師とたのみたる人の候しに。ひさしくかやうの事もうけ給はり候はねば。にぐりにしづみてみなわすれて候と申て候しに。庭草はけづれどもたえぬ物にて候ぞかし。とものみやつこのあさぎよめいそがしくのみつとめ候やうに。あくごうのつもりたらんをつねにはらはんとおぼしめして。五ぢよくあくせの我ら。けうまんけだいの心しきりにおこり候へば。庭草のやうにたねをたえぬものにて候へども。たかきふしぎのぐわんはあさきよめするとものみやつこまで。つねにさたしをこたりなく念佛だに申候へば。わうじやううたがひなくおぼしめし候へと申され候し。げにとたのもしくうれしく候。いづれのほうも詞こそたがひ候へども。此心はし

きりにうとくへだたりやすく。わろき心はすすみちかづきたがるものにて候を。わが心ながらもつねにざんげして。心ををしへ行候へば。しだいにたてなをさるゝものにて候。わが心のまゝにふるまひ候はんにはいたづらごとにて候。かゝることはりとはしりて人ごとにまよふことにて候。よく／＼御こゝろえ候て。御れうけん候べく候。あなかしこ。

一本云

きの内侍どのへ 雲ぬはるかにへだつる

かたより

右乳母のふみ一巻以尾代弘賢藏本書寫畢一本及松桑拾葉集所載者爲更別本雖無由對校有偶合者采以訂之

## めのとのさうし

むかしより女の心づかひ身もちなどのこと。もろこし日のもとにも侍りつれども。中比は女のこゝろばせ。おきふしたちゐまで。むげにしくなり侍りしにより。たか松のようゐん。紫式部などふくなげきたまひて。上たるひとは下をあはれみ。下たるものはかみにつかへ。家をおさめ。身をたて侍るべきことをこまゝとかがとゞめたまひしなり。このことがきを御らんじて。御心をたしなみ給ふべし。女の御身にてあめがしたをしめし給ひしこと。ひとりふたりにてもなし。それは心のすぐれたるによりての事なり。みめかたちはさる御事なれども。かたちよりは心なんまさりたると侍れは。女はこゝろのたしなみをほんとせよとなり。

おとこ女によらず。心もち大事にて候。ことに

女は。まづ上下によらず。のどやかにうらうしく。おもふことをしのび。あらまほしきことかんにんして。さすがにうきをもまたうれしきをも。ふかうおもひしりて。そのことゝなく。ことのあらんおりゝ。けぢめみせて。ひとの御わすれなきとおもふばかり。あはただしからず。さすがにはへゝしく。おほどかならんこそよき人とは申べき。あまりうつくしきかたにひかれていふがひなきも口惜。あまりきもちすぎかどゝしきもあしく候。御ひたいと申は。女のかほのちやう上にて候へば。なりよくけしからずたかきもうたてあり。あまりひきゝもしなゝし。ちとたかきかたによりたるが。男女ともに見よく候。

目は人のかほのうちのいきものにて。おほきなるもちいさきも。いきほひことなるもので。さのみおもふまゝに見いだし候へば。よ

き目つきもおそろしくなり候。わろき目つきなれども。なづかしううら／＼と見出し候へばよく候。

はなは人の顔のうちにさし出てたかくめにたつものにて候。あひかまへて／＼。しろくおんけはひ候まじく候。さし出て見にくき物にて候。

御口はよくもあしくももてなしにて御入候。いかによき口つきも。おもふさまにゑみひろげ。のどのあな見え。したのひろき。口わきよりあはふくだりてものいへば。いかにうつくしき口つきも。あしくなり候。またあしき口つきも。のど／＼と物うち云。又おかしき事もうちゑみたる。にくからず。

人のかほもち大事に候。け／＼しく人はぢたるさまにうつぶきたるもわろし。またさしあふのきて。かほふりあげたるもわろし。もとより

こくびひねりて。やうありげなるも見にくし。なにとなげにて。うら／＼とむかひたるぞよき。

御ゑりはいしやうのかざり。いかほどもほきはきとうつくしうめし候へ。ひきあはせ。くさくさとして。なにをきたるもみぐるしく候。御ぞのつま。袖口。ひきあはせ。もつばら御たしなみ候へ。くせ／＼しく。ゑもんひきつくろひがちなるも見ぐるし。むかしものがたりにも。きなし給へる人がらにやとみえたり。御かほなどふか／＼と御身もちがま敷きたるもみにく／＼わろくなり候。いかにみめよく候へども。ふりふせいわろく候へば。見る人ごとにあたから人のしづかなるけをそへばやなどわらひもし。またなげく人もあるべし。能々おぼしめしわけて。なにごと人も人のうへ。人のいひきたることをば。御耳にとゞめられて。げにさ



ぞあらんとよく／＼御こゝろえ候へ。ふしぎなる人にもかどある事候。身おちぶれたりとて。御あなどり候まじく候。又いみじき人。そしらはしきこと候へども。時によりいはぬことにて候。さやうのうへを申候へばかきへんずとてわらひ申候。

人めしつかひ候にしながらあり。そろひてよき人なし。たゞ十に二つ三つばかりよきことあらば。めいじんとおぼしめせ。思ふやうになき人も。ときにより御ようにたつことあるべし。又その人はよからねど。そのゆかりなどにつけてよきこともあり。又しひにてもあるべし。たゞ心にまかせ。よき人めしつかはん。あしき人をくまじきとおぼしめすな。千人萬人にても能人ひとりもあるまじく候。たゞめしつかはるゝ人を御はち候へ。御身のおきふし。つね／＼の御はたらき。御心の色をばみや

づかふ人ならでは申ひるめ候はぬものにて候。よく／＼御しあん候て。うちとけず。又かどかどしう御心をきがほになど御あひしらひ候まじく候。御かほもち。まへに申やうにあふのかずうつぶかず。よきほどにして。御あひもしたしからずうとからず。はづかしげにおく有て。なつかしう。よき程に御さた候べし。御ぞをひとにいだされ候はゞ。うらをもてよきをいださるべし。たか松のによう院は。ごふくと申は。御うらなどもうすく。さのみうつくしからず。おんつかひれうとありしは。ことのほかに御しつのよし申つたへしなり。かまへて／＼めしつかひ候はんする人。うへを下に。したをうへに。わが御心になふとて。めしつかふことあるまじ。人うらみをなすものにて候。ゆめ／＼御心にあひたるとて。わがまゝにめしつかふべからず。

あしたさのみよるからおきて。人づかひのき  
びしきもあしく候。又あまりあさいねひさし  
きもきたなきものにて候。よきほどに御ひる  
なりて。御てうづさるていに御さたあり。御  
みやづかへ人も。御あるじも。御かづみ御覽じ  
て。御ぐしをときくだし。まゆのそゝけたるを  
おんのごひなどして。そのうち御きやうにむ  
かはせたまひて。さのみなが<sup>長</sup>か<sup>香</sup>ん<sup>經</sup>きん。人のき  
らふ事なり。

御ものねたみの事。女房のだい一の大事にて  
候。さのみおそろしくいひはらだてば。家をう  
しなひ身をはたすもの也。またさのみ家のう  
ちに人ありともおもはれてあなどらるゝもく  
ちおし。光源氏のむらさきのうへぞ。御ものね  
たみのやさしくみえて候。かの女三のみやの  
うつろひ給はんとて。さまゝの御てうどを  
も。とゝのへられし。もろ心にいとなみて。あ

るひるつかた。源氏のおはしましたる。御手  
ならひの御すぢりのしたにをし入られたる  
を。げんじひき出して見給へば。紫のうへ。御  
手ならひに。

身に近く秋やきぬらん水鳥の書はの山もうつろひに鳧  
源氏あはれと御らんじて。

水鳥の書はは色も變らぬを萩の下はそけしきことなる  
とかきそへ給ひて。御心をと給ひしぞげに  
やさしき。このみやわたり給ひて。三日の夜。

むらさきのうへ。ならはぬ御ひとりねのかす  
そふもさすが心ほそく。ゆくすゑはかくのみ  
社あらんとおぼしつづけて。よもすがらなき  
給へるに。御ひとへの袖。いたくぬれたるを。  
源氏あかつき歸りおはして。御袖をひきやり  
て。そひぶし給へるに。御ひとへの袖をひき  
かくしたまひしぞ。源氏あかすあはれにらう  
たかくおぼしめして。御心ざしいとゞよさるゝぬ。

人はかうこそあるべけれ。たゞおそろしく。  
いひはらだつことようなし。男おぢおそろゝ  
やうなれど。まことに心かはり。えんつきぬ  
るものなり。しめやかに。うしとはさすがおも  
ひけるさまを。とき／＼見せて。こらへ給ふべ  
し。

男のいしやう見ぐるしきは。上下によらず女  
のはちなり。いかにもいしやうを御たしなみ  
候べし。むかしより女ばうは男をしつしおも  
ふものなり。あひせんべんざい天みなおとこ  
をしつし給ふなり。いかにもおつとのためみ  
ぐるしからず。家のうちけたく。すみなさ給  
ふべし。

御すぐりなど人のめし候はんに。ふんだいの  
御すぐりならば。そのうへにもとよりありと  
も。れうしなど御そへ候てまいらせられ候へ。  
またすぐりばかりなれば。ふたをあけて。その

ふたのうへにれうし御をき候べし。れうしそ  
へぬははちなり。

御すぐろくなどあそばし候とて。ばんをめし  
いだす事あれば。まづ石の袋をもちてまいり。  
そののちばんをまいらせ。さてちと御けしき  
をうかゞひて。うつしてむかひのいしをたて  
て。御二人のなかへまいらせらるゝことなり。  
めしつかはるゝ人にも御をしへ有べし。御か  
ひめしいだされ候はゞ。まづひだりをもちて  
まいり。のちにみぎをまいらせ候。御かひうつ  
して。二かたへわけて。くちにしろきを。十二  
にても。おほきならば十にても。げに／＼く  
ちひろくは。八つもたて申候。それも中にかひ  
のゐ候はんほどを御らんじて。あはせ候べし。  
ちいさきは。十六もたて候はんに。せぬこと  
にて候。いだし候事は。ちとさがりたるやくな  
り。すゝまずしんしやくせぬ事にて候。さてい

だし候へとある時。かひを手のうちにもちて出すべし。うへとある人の御かたへかしらむけて出すべし。うへに御あはせ候はんほどまちまいらせて出すべし。また下の人おほひ候はゞ。やがて出し候べし。上をまたせ申さぬ事にて候。めしつかふ人にも御をしへ候へ。みやづかひのひとしつけ候はねば。御うへにものをしろしめさぬになり候べし。

まれ人など参候はんに。御たいめんのかとは。いかに久しくさぶらふべき人にて。はじめはちとひきつくろひ。いしやうなどをあらためて。置ものなどあるべかしく御あひしらひ候へ。みやうもくにだにも。はじめきらめきと申ことにて候。よめいりなどほど。その家にひさしくあらんずる人にて候ほどにはづかしからず候へども。はじめはしつしもてなす物にて候。よく／＼はじめをちと御たしなみ

候べし。あひかまへて／＼。御はぢいらせおはしまし候へ。人ははぢをしり候へば。よろづを心得候ものなり。いやしきものゝ中にも。はぢをぞんじ候へば。ぬすみなどはせぬものにて候。いかにほしきものも。はぢをおもへばおもふまゝにもえとらず。よろづのことはぢをしり候へば。身おさまるものなり。男ははぢあるさぶらひは。二心なくうちじにはらをもきるぞかし。たうせいは。人がはづかしきとて。人にもものなどやらぬこそ淺ましけれ。くふものをくひさしなどするぞおかしき。人の子など参りあそび候はんに。わが子のごとくおぼしめしあつかひ候へ。風ひかせ。どくなるものほしがるとて。御くはせ候まじ。その御あたりへたち入て。こども。ひと／＼かどあるやうに見えて社御所がらのめでたさもしられ候へ。相かまへて／＼あらるゝまゝに。わがこ



ならずとて。あらせられまじく候。さりとてま  
たしかり候へば。おとなさへくるしう候。いは  
んやおさなき人はおぢ候べし。

いやしきものとて御いやしめ候まじく候。こ  
とにはづかしきことをよくしるものにて候。  
むかしさる御かたにいま參りの女ばうの見ぐ  
るしげにてさし出たるが。御まへのひばちに  
御すみをひばしにてをかれ候を。御しうもは  
うばいも。御まへのすみは手にてをくもの  
にて候。はしにてはをかぬものと申候へども。ひ  
ばしにてをきて。たちのきて。御すみあしく候  
ほどにと申て。そのまゝ御いとま申ける。この  
人は。おさなくよりしゆめいもんゐんの御か  
たはらにさぶらひける人となんきこえし。げ  
にも御まへのすみはよくのごひてひきて。あ  
ぶらをぬりてをくなり。れうじなることをお  
はせられけると申なり。

おとこをおもふといふことべちにあらす。た  
れもしたしく思ひおもはではそはぬものな  
り。いかに我ためよくとも。人のそしりいはん  
事をよく／＼御つゝしみあるべし。女房の心  
ゆへ。男をたやすありきさきあひしのほうく  
はの事。たゞよそにあるまじ。よく御心をし  
づめて。男になんをきせぬやうにのどやかに  
おはしまし候へ。

御手いかにも／＼うつくしくあそばし候へ。  
さりとてこなたかなたさのみにあそばし。御  
ちらかし候まじく候。文人の花にて候。思ふ  
ことをさのみにいひちらすへだて。ぶんしや  
うにてその人の心をしり。はちをもかき候な  
り。

御うはがきの事。むかしは大かた我身どうは  
いにも。またはおとどいなどにも。參とかき申  
候。ちかきころ色々の御さだめ候ひし時。御

あつかひ候は。御しうへは。御ひろう。一けのしうおやかたなどへは。申給へ。その下の上らうへは。中らうのかたより申給へ。上らうのかたより中薦へは參。上郎の御なかは。參るべしとあり。

御むすめそでて候こと。十ばかりにもなり候はゞ。おくふかく人にみせられ候まじ。心もちうらやかにこゑひきく御そでて候へ。あらるまゝにくるはせ。ものいひしどけなく。はしぢかにうちふしなどさせらるまじく候。そうじてひとすくなきみちありく事。又大勢うちまじり候おりなど御心をへて御みはなつまじく候。かやうの事。母おやの心もちに有事なり。

もし御ぐしなどすくなく。おんかづらにてつくろひ給ふことありとても。よく／＼御身にそふやうにうつくしくしなさせたまへ。まこ

とのやとひものゝやうに。かづらのふしめきたるは。はしきものなり。よるなどもかひとりと。御枕のあたりををかれ候へ。たゞぬるもおくるも。身にこゝろのそひたるがよきにて候。よるふとしたることあるに。ひとのおどろかしまいらせ候事も。又我とうちおどろき候とも。しづかに御目を見あげて。心をしづめて。御おきあるべし。ふためき候へば。ありさまおそろしきもの也。

御ぶつじなど御さた候はゞ。いかにも／＼御心にふかくおぼしめし。御身のたからをも世をいとふにこ<sup>厄</sup>うたちにおほせつけられ。御はつかう御ずきやうなどおこなはせられ候へ。いかにしたしく候とも。ほうしなどちかくとひとなき所にてものおほせられ候事あるまじく候。

うとき人に御たいめんの時は。おとなしきひ

とをあまた御ざしきにをかれ候へ。ことに男に御たいめん候時。おめずさし出ず。ゆる／＼とうち見のべて。さながらゆへありて。はづかしげに御むかひあるべし。あまり人をも人共せず。うちあらけたるも見にくし。あまりおくしがちなるも。よし／＼敷見にくし。

もし心ならず御身よりいやくおぼしめし候人に御そひ候とも。かまへて／＼家のうちにあらんほどはちからなし。さきの世のしゆくえんとなぐさめて。ふたつなき心ならば。いとどたがひにあはれにおもひかはして。いよいよ御心をけだかく。かゝる御すまひなれども。身持のやさしく物のたまふなど人にほめられさせ給へ。我はさる人なりといふ色御みせ候はず。いかほどもうちしたがひて。御心にはかどを御たしなみ候へ。かゝるとて。御心までいやくならせ給はんこと。うたてし

き事なり。

御くわほういみじくて。御さいはいありて。女御後の御位にたち給ひ候はゞ。いよ／＼うへをしつしまいらせ。御身をひげし給ふべし。御ありきの事。さい／＼候まじ。年に二度ばかりものまふでせさせ給へ。かる／＼しくさいさい御ありき候まじく候。又御ありきのおりふしには。車ぞひなどさりぬべきひとあらん人をめしつれられ候て。神ほとけのさゝげものなどものめかしう。神も佛もめだつばかりのたむけをぞうけ給ひ候はんずらん。彼あかしのうへのたまひしもことはりに社。

おはしまさん所のさま。いかほどもじんじやうに。御づしのたな。三むうのちがひだな御をきもの。かゞやくやうに御沙汰候べし。じやうとうもんゐんの御つばねふちつばは。御をきものゆへこそかゞやく藤壺とは申ならはし

候へ。そうじて。くはんばくどのなどの御所にもつねにきたまんどころは。九けんの御うへ。三まの御ざ。その御ざにたなををかれ候。御たなのうへに火とり。ちんのはこ。いたいけなる花たてなどもをかれ候。なでして。すゝきていのものたてられ候。うつくしく。春は梅のはななどたてられ候。二ぢうめのわきに硯ををかれ候。おんたなのきはには御手ばこ。よりかゝり。御草紙のはこなど。そのつぎにかいおけ。御琴。びは。其次にすぐ六ばん。ごばんををかれ候。御ぐしの箱。もとゆひのはこをちとさがりてをかれ候。水ひきはうへのたなにををかれ候。きちやうのはづれなどに御琴かきならし給ふふせいにて社めやすけれ。御ぐしにまいる人にもうつくしく遊ばせられ候べし。おもひいでて候まゝ申もひがくしきやうに候へども。まづ女ばうのほんには。じやうと

うもんゐん。二代のみかどの御母にて。みだうどのの御ちやくによにて。めしつかふ人々にも紫式部。和泉しきぶ。大貳の三位など。とて。名をえたる人々めしつかはれしにて。なにごとかをろかなるべき。ことさら小式部などは。をさなかりしよりめい歌をおほくよみけるとかや。この人々の御さだめにも。かんだうの御たなは。せきしやう。しのぶなどをつけたるいは。めづらしきちやわんのもの。又こどう。ゆへあるべき物にすへてををかるべし。秋はむしこおほく参らせらるゝををかれ候。御れんだいの御よう。と社申侍し。何事もめづらしからぬことも。いにしへの人はおもしろく。かふ虫は。ひらの。れんだいの。むらさきの。又はきよみづなどよりもまいり候。

ものを御すき候と申。事により候。びは。こと。ご。すぐろく。かい。花もみぢなどにすきたる



はよし。またわらはにすきてあひし給ひし人もあり。されども。くわんべいのみかどのこうきうはつねに歌あはせに御すき候て。今にのこり候。かやうのやさしき御事。さるおんことにて候。たれもやさしきすぢにいはれさせ給へるが。その御うたぐちいかゞぞなど申つたへ候なり。そうじて物を御すき候はゞ。いちご御すき候へ。みやうもくに。へたのものすきといふ事あり。されどもふかくこゝろにいれられ候はゞめでたかるべし。なにとやらん。ひとさかり／＼御すき候て。末もとをらぬは見にくし。一かうぐちむちにはをとり候とこそおもひ候へ。昔人もさこそは申をきさぶらし也。

おん湯どのとまうす事はなくてかなはぬ御事にて候。あひかまへてゆやふろにて御ものがたりあるまじく候。めしつかふ人にもこゑた

かくさせられ候まじく候。見ぐるしくきぐるしきものにて候。はだかよりあひにたか聲して人にのぞかれまほしげなるかろがろしく候。そうじてたかくものいはぬことにて候。うつせみの御かたがへの夜。人げすくなきはおそろしきものとの給ひしをこそ。光源氏はたちぎきて。さてはひとなしと心えて。しのびいらせ給ひ候へ。これもかろきかたにこそつたへ候へ。

御庭のうへきなどに御詠もことに候はんずる。さには昔も今も。梅さくら。わきて上下の人心をなやまし。みな人うかれたるためしおほく候。

しせん御ありきのおりふし。又はざしきの一けう。時によりてめされたる御ぞなど給はり候はん時は。たゞみ候はぬものにて候。そのまをしいだされ候をとりて二つにおりてひだ

りのかたにそのまゝうつし候物にて候。一度御めし候とも。ふるきものにて候べし。

御あふぎ。うすやう。人に下され候とも。十ぼんと候へば。あふぎつゝみにつゝみて。薄やうはときにより。梅がさね。もみちがさねやうのうすやうにつゝみて。その色のみづひき五すぢにてからみ候。またはことによりて五本三ぼん出され候も。ひきあはせにつゝみて。三ぼむまではうへをゆひ候。二ぼん一本はたゞひきあはせ。すぎはらやうのものにつゝみ候べし。うすやうも十帖二十でう候へば。だいにひとつにすへ申候。三束なれば。一そくづつすへ申候。かやうの事はげんきもんるんの御とき。かまぐらのさがみにうどうの女房いせへ参りて。御つばねまで御れい申候時。ごうだのゐんより。ちよくにより。いろ／＼の御さだめさぶらひし。いなか大みやうは。みやこの事をほん

にするなり。御はぢしらひ候へと御申候により。色々の御ことはり候。そのおりの事にておはしますか。こうたうの内侍のつばねへより。物見けるに。きじ一つがひだいにすへてありしをみて。ともの女ども。上らうたちの御いり候所にあのやうのものをかれけるといひしに。しうの女房きゝて。たかの鳥なればやつけし。尤ともあるべし。さこそいかならば。よしなきものあんじかな。がんなどにもあらずといひて出たり。のちにきゝたる人。はづかしきわざかな。かうなんじあつかひけるわれは。何ともおもはでとありし社。がんなどは。けちかくをくまじきことにや。女房いろひさたせぬ事なれば。あつかひぐさにのりたる事はかきつけたり。

れうしとあらんに。ひきあはせ。たかだんし。こたかだんし。杉原いだすべし。又けさう文な

どにうすやうなにかさねとあり。もし人料紙給はり候はんとあらんに。いかにうつくしく共。かさねの薄やう御出し候まじく候。また男などけさうぶみのようとて申候はゞ御やり候へ。こなたよりれうしと申とて御つかはし候まじく候。

まきぎぬなど人に出され候ば。一ひきも十疋もだいにすへ候。百ひきの時は。五十疋つつひて。だいふたつにすへて。二人してかきいだすべし。むかしはおびたんざく。匂ひぶくろ。みづひきをば。やないばこにすへ候。ちかき頃はたんざくよりほかはすへぬことにせられ候。

おびなど人にひきむすびても出され候。十筋よりは薄やうにつゝみ候。又たまものなどはふねにもいれ候。ふねはかねにて候。ちかきまでもみをよび候。そうじてむかしは。ちやう

しなども。もんめんをたはらにぬふて入たることもあり。今はかみふくろよりほかには入られ候はぬ事おかし。

ぢん。にほひ。人にくだされ候はゞ。いかほどもその御かたより出候と人の中やうなるを出され候へ。もしいづくよりも。あふぎ。うちは。又ついだしやうじにびやうぶなどゑやういかにと申され候。かたゝあるべし。いかにも御たしなみ候て。四季のていを出いらす能々尋わけられて。あながち。げんじ伊勢物語にあらぬものなり。さりながら。歌のこゝろにも古今萬葉をもちひたまふべし。ちかきころは千載集のうたえらびもちひ候。新古今なども。能々御覧じ候て御出し候へ。かりそめにもひがみたる事をば人のわらひぐさになることなり。一色になんをいはれ候へば。その人たしなみなき色。何事にもわたり候物にて候。御た

しなみあるべし。

人のいらへの事は上中下に女房はみつあるものにて候。おやしうのいらへは。をと申。はうばいたちあふなかは。やとこたへ候。召つかふものなどには。ゑいとこたへ候。なよたけといふものを御らんじ候へ。女房のいらへのほんにはすべきか。なるとの中將をはめたるも。女房の心得のいうなるによりてこそみかどをはじめほめおのゝきたることにて候。はじめみかどの御返事に兵衛のすけなにかしにて仰られし時は。なよ竹とばかり御返事申されし。あまた人に御たづねありしに。關白こまつ殿より。なよ竹とは。かはぎしに。一ちやうも七八尺もあるが。竹のたゞよは。二つみつならではなく。ほそくすぐなるを申也。ふるきうた。

高く共何にかはせんや竹の一よ二よのあたのふしをは

此心にやと申されけるとなん。かゝる事も。

いたづらながら。ゆへありて。能いらへにこそは。源氏。伊勢物語。さらぬ草子よみやうもしらで。字にあたるまゝによませ給ふまじく候。かなはいたりなくては讀にくき物にて候。御心得あるべし。人いかにあそばせと申とも。しんしやくにて御讀候まじく候。つよくしゐて申さば。しらずよみなりともと御ことばをつかはれて。遊し候へばよく候。かなはずとこそよみたれ。など申物にて候。また男のちかく候に草子聲御きかせあるまじく候。うたゑいじごゑなど人にきかるゝははゞしき事なり。いまやうは。かやうの事やさしくなどは申まじく候。見かぎるたぐひおほかるべし。ことにかんきむなどたかくきやうよみたるは聞にくきもの也。かならずそらんきんとて。人のわらふものなり。

もし世中おもふやうならで御みやづかひ候は



ば。かまへて／＼しうのためうしろやすく心に入まいらせられ。大事とおぼしめせ。男ならずをんななりとも。おしうのためにはいのちをもすてんとおぼしめされ候へ。おつともおしうにも二心だになければ。みやうがありて。ひとさらにをろかにおもはず。こゝろの色を見てこそめしつかふ人になさけをもかくるものなれ。たゞひとへに大事とおもひ候へば。御しうもたのもしくおぼしめすものなり。たとひまた御心には命なりともたてまつらん。身をもすてんとおぼしめし候とも。御心にあはぬいけんなど御申あるまじく候。いかにも御心にあひ。仰をそむかず。うらやかにむかひ御申あるべし。御心にあひ候へば。しせん御申候事御もちひある事なり。はじめよりしうをしたがへ。我心におもふやうにならずとてそしる事もつたいなきこと也。人を

ふぢしをきて。くわぶんなるあつかひをして。をろかなるをよしとおもふべきならず。ほどほどにしたがひ。一しんをやすく。たすくるものをろかにやはあるべきと思召て。よくもあしくも仰にしたがひ。御心にあひて朝夕わかず。御みやづかへあるべし。ちとも御しうのうしろことを人のいひ候にさしいらへあるまじく候。

御身より下にさぶらふ人などには御なさけをかけられ。ありつきよくおもふやうに御あつかひ候へ。おしうの御心に入たる人など。たかきいやしきもおそれられ候へ。いやしきとて。そらみせずして。なさけあることばかけられ候へ。さればとて。またいやしきものにちかづきて。うちなづき候な。よき事はぬもの也。さのみあしきにはあらねども。げすはものいふことばよりはぢめ。ふりふせい。いやしき

に御ちかづき候へば。御身もちもあしくなり候。よそにても。げすはその人に参りあひ候事をみめのやうにおもひ。くわにしていひちらすものなり。おん心え候へ。

わがみよりたかき人をいか程も／＼御しつしあるべし。あなどり申さぬ事にて候。かまへてかまへてめに見えぬはぢあたるものにて候。

いにしへは。男はれいにあまれ。女はくはしよくにあまれと申せども。今はさのみ上らうとてあがりたるも見にくし。さりとてまたついしやうがましくひとにしたがひかしこまりたるも見にくし。たゞ人にいはねど。しるく人しく。我身かる／＼しからず。人をもおもひ思はれたる社よきためしとは申。またすねずねしく。なさけなく。かど／＼しくはあるまじきことなり。とにかくに上ろうはみとをりしておくふかく候。げすは見ざめしてあさきも

のにて候。たとへみいやしくとも。この心もちあらんこそよきひととはまうすなれ。御みやづかへは。いかなる御所だいらも。おつばねすまひ廣くはなきものなり。それに又御あひすみあるものにて候。たか松の女院には。一のたい御つまは申にをよばず。うへの御ざしきに中らう二人。つぎのまにおしもひとりさぶらひければ。三のまに御女ばう三人。めしつかふ人五人も六人もあれ。または七八人もあるべき。ひとつに候へば。おもひ／＼みやづかへ。さこそせばく心ぐるしからんとおもはるゝまゝに。たちよりとぶらひければ。ひとりにてもなし。御つばねごとにはさぶらひければ。なにかはといらへられしも。げにをのが人しげく。すまひなしてとおもひけれ。はづかしうこそ侍し。

人はたゞいかほどもなさけおはしませ。じひ

なさけにこそ人はおもひつくものにて候へ。  
おんあるしうにはつかへずとも。なさけある  
しうにはいのちをすてんとおもふものにて  
候。めしつかはるゝひとのなかにも。身まづし  
く。よろづことたらぬ人をばいかほども御な  
さをかけられ。見ぐるしくともくるしから  
ず。心やすく。とくのすてがたからんものな  
どは。さいく下され候へ。むかしさる御方に  
て。ふるきをび小袖ていの物とりをかれ候を  
おとなしき人に申されけるは。あらうつゝな  
や。かやうの物をかけて何にかはせさせ給ふ  
べき。たれくにもたび候へと申されければ。  
はづかしや。さやうの物を人にとらすべきか  
との給ひければ。さるがく。でんがく。けいせ  
い。しらびやうしなどに下されんこそはづか  
しきわざなれ。心やすき女ばう。さぶらひな  
どのさむげなるものにたびたらんは。なにか

苦しかるべき。下されたらんをいかほどかよ  
ろこび参らせんとみなくさゝやき申けれ  
ば。げにもはづかしきものあらめとてたび  
けり。たゞつねに御なさけかけられ候へ。  
女も男もたゞあけくれざりをおもへば。我家  
のみちをたしなみ。人にをとるまじく候。よ  
しなき物いひも。ざりをしらぬもののわざな  
り。源氏のものがたりに。紫式部はざりをほ  
んとたてゝ候へ。まづ女はふたりのおつと  
かほを見ず。はづしからず。しつゝといへる  
かしこくすみなし。にくき人のあしからん事  
を心におかしくまたは嬉しくおもふとも。し  
らすがほにもてなさせ給へ。又いとおかしき  
人のあしきことを人のいへばとてはらたて  
ず。またしたしきことなれば。さのみいふべ  
きにもあらず。たゞあさましとおもひ入たる  
御さまぞよき。さればげんじの物がたりにも。

あしきはたらき見えてあれども。薄雲のによ  
う院。御まゝこの源氏にあはせ給ふこと。こ  
れはみやづかへにてたちあふことなれば。わ  
りなくこそ。つゐに御心おちゐてみえず。され  
ばやさしきかたにもなりぬべし。又うきぶね  
はよるべたがへ。またはうこんじうがしい  
でたることなるべし。女三の宮ぞたまのうで  
なにかしづかれて。ちかづき参るべきやうも  
なきに。はゞしく。かるくしくて。はしらか  
くれのおも影も見え。しとねの下のふみ。をき  
どころのかるくしき。かたぐとがにおと  
され給ふ。それもしうをあなづり参らせてし  
いでたるなるべし。

ひたゝれしたて候やうだい御心えありて人に  
もおんをしへ候へ。まづひだりの袖のつゆを  
御さた候て。そののちそでをとりて。もんを  
よくあはせ。右の袖よりぬふものにて候。おほ

ぐちは左のもゝだちよりぬひ候。かやうの事。  
よく御覺候てめしつかふ人にも御をしへ  
あるべし。又したつる人の有様をも御覽じ候  
へ。今参りなどの物したて候やうだいやがて  
見ゆるものなり。山がらのくるみまはすやう  
に。あちこちとりまはしたるばかりにて。か  
いしやうらしく。物ぬふさまをしらざれば。見  
にくき物にて候。能々御をしへなされて仰つ  
けられ候へ。

御ぞたちぬふ事。いやしきわざにてあらず。天  
照太神の御父母いざなぎいざなみのみことよ  
りはじまり。ゑやういろあひなどの事はもん  
とくてんわうのきさきよりはじまり。住吉へ  
御参りの時。かのもものたちのつきをたてま  
つり給ふ。今のすみよしだちこれなり。それ  
よりくじら。くはのもののさしに。やなぎのかき  
いたを御もちひ候。まづしたて物にみつので



きゝあり。第一にははやくうつくしく。第二にはしたてはさほどなけれども。はやければ時のようにたち候。第三にはをそけれどもうつくしきをとる候。かやうの事よく／＼思召わけられ候へ。さればすみよしの御たくせんにも。手のきゝたる女はくわほうさいはひあるべしとあり。ことにさぶらひは。馬の鞍ををくひまに。かみしも一具ぬはぬ女はあらじと也。

おびなどしどけなくして御つまをふは／＼としたるも見にくし。御胸ひろうあき候事も御ぞのしたてがらにて候。めしものによりておんむねもあき。しどけなくみえ候。こえりひろくあき申せばむねあき候。うはぎなどはひろく。したぎはせばくあけ申なり。物による事をしらぬなり。

人の申事におんつきありてよきこともあるべ

し。さりながら。さのみ人まかせに心のならんもかひなし。何事をもさるやうに人にもうらやかにまた申事をも聞し召いれられ。心のうちにてよしあしをおもひするぞよき。男なども人の心を見んために申さるゝ事もあり。手ならひも。わろくともそのすぢめをかへずあそばすぞよき。

紙つかひは第一のはちなり。御たもとにもよくもませて入られ候へ。ちかきころの事にや。ある女ばう五十ばかりにておはしけるが。袖のかみとてもませけるをうちわたりにありけるなまみやづかへ人の申されけるは。あら御わか／＼しのことやとうちわらひぐしてとをりしを。ぬしのしらすはとがめぞかし。くちおしのいてどころやとわらはれしを人々きゝて。いづれかおかしからん。いづれかよきとありし時。御まへにてふちはらのきよちかと

かやのさぶらひけるが申されけるは。こはいかに。この女ばうは。こきんまんえふ源氏伊勢物語などをもよむ人なり。いかなるくぎやうてん上人も。さしよるところにてもものよませてきこしめして。ゆへある事御たづね候。物讀のたしなみにて。袖の昏もませけるものとぞ申ける。物をしつする心にはかならず身をもしつし候。なんじたる人なんおかしき。ふる人のことをばしらで。なんする事なかれ。歸りて人のなんになるとぞ。

おさなき人などのかたことしたるぞあひらしくうつくしき。としおとなしく。なにのあやめもわくばかりの人となりて。すみにごりのこともしらすして。文のかきやう。かなのことばちがひたるは見にくし。ことにたんざくなどにかたことかきたるはなをみにくし。いかほどいかほどもおんしつし候へ。

ひとの身にをのづからありかなどある人。うるさくにくきわざなれど。うちあふ人などにかゝることこそうるさけれとのたまはで。時時によからんちんなど御たき候てさしいだし。その中にとゞめさせ。めしすてたるものによくたきしめさせ。そのありかをうしなふばかり御たしなみ候へ。人にもたしなませられ候べし。よきぢんのかには。ましやうまえんはおそれ。神佛しんじおぼしめすものにて候。能々御心え候て御たしなみ候へ。

ざしきなどのきよめよくおほせつけられよ。たなをしいたのすみぐをきよめさせ候へ。庭のうへ木のもとなどはやかにはかせられ候へ。人ひとりまいるたびにはかせらるゝ事はぢ也。にはかにさし入ひとあればとて。はきたるは見にくし。つね々さはやかに見ぐるしからぬやうに候へ。

あひかたらふべき人にてまたしる人の中にもかたらひてよき人もあり。またさるやうには見えながら。こゝろばせふさはしからずは。御ちかづきあるまじく候。又心ばせひとくしくとも。しななからん人にはさのみちかづきたまふな。

人のことのね笛のねなどきこしめして。いかに御きゝしり候とも。たれがふゑのね。ことのねなどと人ひはんするとも。しろしめししらぬがほぞよき。

そのものとなからんぬのふせい人にたび候はんに。手のごひにても御さたあれと仰られ。ちごならでは。かたびら。ひたゝれなどといださぬ物にて候。これはみなつゝみてだいにすへて出すもの也。九條殿のきたのまん所の御かほにはたけといふものいできて。みにくきほどこにありし時。てんやくのかみ申けるは。たふをくれなゐにそめしめ御のごひ候はゞ御かほのはたけよくなり申よし申ければ。夫よりして。こゝかしこより御顔のごひ参らせら

るゝ也。

昔はそうじて御心ざしなどには身にもたれける。てぐそくおんぞを御ふせには出さるゝ事にて候。じやうとうもんゐん。こしきぶがとぶらひにも。きぬばかま出させ候。今の世にはせぬことにするぞあしき。

くこんをきこしめされんに。上たる人のあまりはへなく。さかづきのさしあひもすげなきも見にくし。またさしうけゝまいり。けつくはてはきげんあしく。けうをさまし。人をしかりなどする事はもつたいなき事也。この心をよくゝおぼしめして御たしなみ候へ。

いはひにはいかにもいかめしくさせられ候へ。うちとの人もよろこび。ふるいけんぞくのひろさも。このときにこそしらるゝものにて候なれ。

右乳母のさうし以百花庵宗因藏本書寫畢

群書類従卷第四百七十八

雜部三十三

身のかたみ

それ人げんのありさま。ぢやうみやうむそぢと侍るに。ことしもすぎ侍りぬ。あやなくともくれゆけば。春のひかりをまちえつゝ。このはるもやながらへんとそごろに心ぼそくおぼえ侍るに。このごろとなりては。うちたえ水などをさへ見いろゝことも侍らず。心ぐるしうなやみわたるに。ぢやうみやうを過ぬれば。ことしかならずはかなうなるべきとしにこそはと心ぼそくかなしくて。はかなうおひうちかけて。きやうよみをこなひなどしぬたるを。おさなうよりめしつかひける人のこのごろ世

にありつきてありけるが。夏のはじめつかたにできたり。つくぐと見侍りてうちなき。いまさることの外にもおとろへさせ給ふものかな。かくてはいかゞさせ給ふべき。ものにはかならずのちのくぬといふことの侍るなれば。くすしなどにも見えさせたまひて。いかなる御心とだにしろしめせかし。さてのみやはつくぐとくらさせ給ふべき。さりぬべからんくすしなどにあはせおはしまして。御心地のさまをしらせ給へとて。かひぐしくくすしなどよびいでて御いみやくとらせ侍りける。くすしいとあやしげにうちかたぶきつゝ。しさいありがほにうちむせびたるに。人々も



いとあやしとおもひ。御みやくの次第。れうちなどくはふべきやうくはしくうけ給はりて。其心し侍らん。又おいぬる人<sup>老</sup>はかならずながからぬならひなれば。かど<sup>首途</sup>でもやおはしますらん。さらに御心をこさすおほせられよ。たのみきこえ侍るとこまかにきこゆれば。くすしもよにおもはゆげにて。その道にたづさはりていさゝかもれうちあるまじく候。御みやくのしだい。あやしき事侍り。もし御としのほどにてあるまじき御ことなれども。ただならぬ御みやくにてこそ侍れといふに。いらふべきかたなし。はづかしくつゝましくていらへもせず。人々もあさましとおもひてもいふ人もなし。くすしもあしういひいだしたりと思ふけしきにてかへりなすとす。さてあるべきにあらねば。この心地はいにしへもわづらひ侍りき。いかさまにもわづらふこと

あらば。かさねてこそは申候はんすれとてかへしつ。その後つくぐとおもふに。わが身のありさま。げになべてのこゝちにはあらざりけり。さることもやあらん。さあらばいとあはつけいことにこそあらめ。よの人もいかにいひなやまんとおもひつゞくるに。はづかしかなしきに。まことにさることのいでまうできて。心うきわざならば。あはつけいことにこそ。ひたすらに又なき身ともならまほしうおもへども。いふかひなしや。この春の比ほひ見し夢のなごりならば。いとかたじけなき御ことにこそおはしまさめ。たれもいとはづかしうこそおぼえ給はめ。よろづにつゝましき事あめ山なり。夏もやうくくれ。秋たつ日影にもかせのをとむしのねにつけて心ぼそさはやるかたなし。この秋のみやきゝはてんと心ぼそきに秋もくれぬ。神無月ふりみふら

すみさだめなきころは。いとゞわりなき袖の  
けしきなるもかなしきに。霜月十日あまりに  
もなりぬ。雪いさゝかうちちりて。えんなる  
あさばらけ。有明のなごりおほうものあはれ  
なるにうちながめて。れいのをこなひし侍る  
に。そのけしきと見え給れば。なく／＼さる  
べき人などあとまくらにみな／＼侍りて。な  
にくれときこゆるに。いたうもなやまず。た  
いらかに姫君うまれさせ給ひけり。あげみた  
てまつるに。かたじけなき御かほに露たがは  
せたまはず。うれしうもあはれにもはづかし  
うもおぼえ侍るに。いかも／＼かなどいふこと  
もすぎてうつくしう見えさせ給へば。おひい  
でさせたまはんゆくすゑ見まほしきに。をの  
がいのちのほどもあるまじうおぼへ侍れば。  
たれやの人かはありて。御ためあしざまなら  
ん事をも。あしと申きかせん。あながちに御心

にあはんとばかりおもへば。いとゞかなしく  
て。御行末のためにかきをき侍り。御心つか  
んまゝに。このまきものを御らんじて。むかし  
がたりもきかせ給はん身のかたみと御らんず  
べきもの也。

第一。御心と申は五<sup>體</sup>たい六<sup>根</sup>こんのたましぬ。一  
しんのちやうじやうなり。何事もたゞしく。  
うきもつらきもおぼしめしらせ給ひて。さ  
るは又おもふ事をいはず。いかにしたしき人  
なりとも。うちとけに。とこそおもへかうこそ  
おもへなどとおほせられ候<sup>言</sup>な。おもふ事をさ  
へ天知我しると申候。ことにいだしたらん事  
は。世にみちひろごりて。その人はとこそあ  
れかうこそあれなどあつかはれ。ひとに心を  
しらるゝ事くちおしきことにて候。又人に心  
をくもわろく候。とけにくきも見にくくうた  
てあるものにて候うへは。やはらかにうらう

らと。したの心はたましゐをすふる事かんに  
うにて候。

第二。御ひたいはいにしへすいてんわうの  
女體のみかどにてわたらせ給ふまでは。今の  
世の人のやうにたかくはぬく事候はずと申  
也。見ざまのよきをほんにし申ものにて。わ  
けめはさのみとをきも。かぶしのうへながく  
みえておかしく候。わけめのほどいかほども  
かうばしくして。二すん五ふんにはすぎ候ま  
じく候。まゆはたうのやうき<sup>揃</sup>ひ<sup>如</sup>。げんそうく  
わうていのきさき。はゝのはらにやどらんと  
せし時。はゝの夢に柳のつゆをのむと見て。  
やがてくわいにんして。やうきひをうめり。  
このやうきひたぐひなきびじんにて。みかど  
の御おぼえならびなかりしかば。さいはひの  
ほどをうらやみて。柳の糸のみだるゝ時。す  
ゑの葉ふたつひらくるを。やなぎのまゆとい

ふ。それをまなびてまゆといふ事はつくり侍  
り。さればかたじけなくも。天照太神は女た  
いとして。日月ひかりあきらかなるをまなび  
て。三日月をいたゞき給ふ。女房といはるゝ。  
このまゆの故なり。ほそやかにいつくしう。  
山のはいづる月のごとく。露をふくめるはな  
のかほばせ。あをやぎのまゆのごとくつくら  
せ給べきものなり。あひかまへて。たゞがほに  
て人には見え給ふまじきものにて候。女ばう  
と申ものは。おほかたつくりものにて候。さて  
こそまろこしにも。花女柳男とはもちひて候  
へ。おとこはそのすがたつくらずしてよきを  
ほんとし。女ばうはつくりてよきをほんとし  
候。たゞうつくしう御さた候べく候。

第三。御めはしやうとくうまれつきたるもの  
にて候ほどに。おほきくもちいさくも。まな  
こはともあれ。見まはしうつくしうのどや

かに見なし候へば。をのづからうつくしきものにて候。いかによきめつきにても候へ。まんまんと見まはしてふとみつけたるやうに候へば。能めつきもをのづからみにく候。よきにつけてもな。[ ]にうつくしう御らんじ

なされ候はゞ。よく御入候べく候。

第四。御みゝは御ぐしのはづれよりありくとさしいでたるはみにくきものにて候。おんぐしのびんのわきよりいでたる筋を十すぢばかり御とり候て。かみよりかゝりたる御びんをやまとぐしにてみぐしけづりかけられ候て。うつくしうかゝり。みゝはさしいで候まじく候。

第五。御はなは顔のうちのぐにとりわきさしいりにめにたつものにて候。けしやう化粧のうちにて御心をそへられ候へ。こくしろくあそばされ候な。よのところよりはちと薄く御けは

ひ候べく候。

第六。御くちはひろくもせばくものいひしどけなく。口のわきよりあはふきたらし。おかしきことありとてくちひろくあきて。したのさきひろめき。のどのあな残りなくみえなどしては。いかにそのくちつきよしとても見にく候へば。うけ口。すけぐち。わにぐちなどとてなをえたるあしきくちつきなりとも。

こは髪ひき低にうちやすらひて。のどかにものいひたらんは。いかばかりきゝよく見能候はんすらむ。人ごとにわれのみはあしとおもひ候はねども。かたはらにて見る人のいひさたるにつけても。かほのもちやう。もののいひやう。そのしなぐしらるゝものにて候。又いかに上らふと申候へども。はなのさきまがりて。あみがたくほうけづきたるはみにくし。さしてなき人なりとも。うちあみ御あひしら



ひ候はゞ。あしき御くちつきもつみゆるされ候べく候。

第七。御ひきあはせの事。御むねにつねく御心をそへられ候はねば。いかにうつくしきゑりなりとも。しどけなくはうそくにひきなされ。とりはづしては。胸ひろがりて。ちのしたまであきとをり。みにくきこともいづるものにて候。かんようは。御ひきあはせに御心をそへられ候はゞ。下はをのづからあき候まじく候。さるは又いかにみぐるしきものなれども。ゑりうき／＼ときなし候へば。めもあやにまもらるゝわざなり。いかにうつくしきものなれども。みにひきまとひてゑりのゆくゑなく見え候へば。あなあさましとめをたつるものにて候。

第八。御ひちのかゝりのこと。たちてもゐても人のかゝりはひちづかひかんようにて候。

さりながら神祇官のねり人のやうに。ひちのかゝりこは／＼しうして。もてつけたらんは見ぐるし。ひかる源氏の物がたりには。すゑつむ花は。みめかたち。ひちのかゝり。こは／＼しうて。いかばかりうつくしかりし御うしろでをもてけち給ひしぞかし。さりとして又ものあぢきなくひきすがめ。十大御でしのなかにひきいだされんも。のちの世はさもこそあらめ。見るやうまづ心うからむ。

第九。御うしろでのかゝりの事。あふのかすうつぶかす。そらずかゞます正。路にして御ぐしをもゆはせらるべきものなり。御うはぎぬをめされん時は。ちとせをそりてゆはせられ候へ。御かまちにより御うしろのかゝりはよきものにて候。さればせいわてん皇の御は、もんとく天皇のきさきは。すみよし行幸の御とき。あまのみるめを参らせたりけるを御ま

へにて一ふさづつひきあげられしに。わきに  
みじかきふさのありけるを。女ばうのうしろ  
ではかやうにてよかるべきとて。<sup>供奉</sup>ぐふの人々  
三十六人の女ばう。一どにびんをぞそがれけ  
る。其時御前の木よりせみのなきておちける  
が。はをひろげたるを御らんじて。せんけん  
のりやうびん。かくのごととおほせられき。  
源氏のむらさきのうへ。かくそがせ給ひしか  
ば。げんじの君。はかりなきちひろのそのの  
みるふさのおひゆく末は我のみを見む。むら  
さきのうへの御かへし。ちひろともいかに  
しらんさだめなくみちひるしほののどけから  
ぬに。みるふさをかみにたとふる事。これらの  
故なり。

第十。御きぬのすそのけまはしなども。ひき  
あはせよりをしくだしてきたるが。人がらゆ  
ふに見え侍らん。ふた／＼とけまはされて。す

そのけにたるくゆう／＼として。らう。<sup>廊</sup>めむ  
だう。<sup>道</sup>つりどの。わたり殿。<sup>殿</sup>こゝかしこのきり  
どのわき。つまどのはづれなどにて。人の引  
とめ参らせたらんに。ぬしゝらずとも。又知人  
にもあれ。ひききりなどおはしますな。御ぞの  
すそひきとめらるゝをあやしとおぼし召候は  
ば。しづかにかへり見て。物にかゝりてあら  
んにつけては。引なをさせたまへ。かつはそ  
の御身もちあらげなくてきずのつきたるは。  
御ふりもはゞしく見え候。又はとある御けし  
やう人のひきとめたらむは。そのふせいに  
みをとりの候はんずる。またはしのぶる人な  
どのその御けしきよそより見てはいかなりし  
ことぞなど人のさたせんもかる／＼し。たゞ  
なさけあるさまにこしらへてとをらせ給ひ候  
べし。

十一。朝おきの事。さのみいかなる大人もい

たづらにあさぶしして。おきあがりて。かほのゆくゑもしらず。ほれまどひたるありさまにくし。おほとのごもりたらんところに。御鏡をきて。あしたには御覽せよ。かほ見ずして人にみえさせ給ふな。御ぐしはことさらたわせく物にて候。又は人の御たまくらなどにも。御まゆみだるゝ事有。ひだりねはかはるものにて候。さて六花の歌にも。あさねがみたが手枕にたわをきてけさはかたみとふりだして見るとは候へ。あしたは御櫛にて御ぐしなで。御まゆのみだれをひきつくろひて。出させ給ふべきもの也。めしつかはるゝものゝさたせんも。つゝましくはづかしかるべし。十二。ひるのしだい。女房のさのみいたづらぶしに侍るは。まさなきわざになん。うのはふきはせずのみことの御はゝ。かいりうわうのひめ神とよたまひめのをしへにより。いも

うと玉よりひめ  
十三。ゆうべの事。口くるればねんとばかり思ふこといとあさましき御ことにて候。たかもひきくも。御おとこにさしむかひていらせ給ふうちにも。きのふくれけふもすぎぬとつぐるいりあひの鐘のをとしよぎやうむじやうをしろしめせ。いつも聞ものとや人のおもふらん命つゞむる入あひのかね。この本歌を御心にかけてさせ給ひて。あながちにきやうをよみ。ずゝをくり。ねんぶつを申ことはなくとも。たゞしやうじのことを心にかけ。明くる日影は。わがねはんのざうとふかく思召しり。いとをしき御心をとめ。はかなの夢のよやとおぼし召しるべし。されば夢といふもじは。秋のくさのいほりにて。おもひかまへてつくりたるもじにて候。さればよのはかなきことをば夢にたとへて候也。かく何事をもおも

ひとらせ給て。いくばくならぬ世ぞとおぼし召。おごる物も久しからず。つゝにゆく道とはたれもありと。わかき御時よりふかく御身をしろしめされて。しやうじむじやうのことはりをよく／＼いさめ給へ。心やさしきおとこはげにもとおもひ。又たけきものゝふもあはれと思ひしる心あらば。邪正じやしやう一如によとなることはり有べく候。

十四。御はぢの事。たゞ人はかんようは耻をしろしめせ。名をおもひぎりをぞんずるもはぢをおもふ故也。いかにあらまほしきことなれども。はづかしくおもへば。さのみあしくははたらかぬものなり。女はことによく／＼はぢをおもひ給ふべき事也。なをざりにこゝろえゆだん候へば。あるまじき心もつく物にて候。又しはくきたなき心にもはぢをおもへば。人に物をもいだすものにて候。又いかにほし

くとも。耻を思はゞこひもとめまじく候。とにかくにはぢを思ふ事肝要にて候。されば本もんにも。はぢをおもはゞいのちをすてよと侍る。

十五。たゞ人はいかにも／＼しん／＼いらせ給へ。さればかくれてのしむあれば。あらはれてのとく有といへり。あながちに神ほとけにつかへ候はねども。心にしんをいたし。しんめいをうやまひ。ぶつだのかごをあふぎたまふべし。さりとてざいけの御身にて。ながかんきんなどは御沙汰あるまじく候。あしたのかむきんは。くわんおんぎやう一卷。しん經三ぐわん。せうさいしゆ七へんばかりにはすぎ候まじく候。神はたゞこゝろのちいんをおもふ物にて候。佛神にちかづかんとおもはゞ。しやうじきをほむとして。またはうべんの心をくわへて。じひをもつばらにし。心をひろく



してばん民をあはれび。いとおしきをひいきせず。ことばをやはらげ。心をすなをにして。たみをたすけさせ給へ。ところにしたがつてしゆとなれば。りつしよみなしん也。そのころをもつてしんめいにはうけられ候ものなり。

十六。人めしつかふべきやう。まづ其人をよく御覽せよ。心中さりぬべき所だにもあらば。あながちさしたるのふなくとも。御心を添てめしつかふべし。ぬしの心ばせいふがひなからんをば。御じひをもつてめしつかふべき也。三ど五どまでのあやまりをば。御心とおぼし召ゆるせ。六ど七どのあやまりは。人にもめんじ。ぬしにもたいしやうをたてさせられよ。あしきととも。又しせんに御やうにたつことも有べし。人の國にもかうむりのゑいとりけんためしもおぼし召あはせらるべく候。惣じて

人は上に十のとく。中に五のとく。下らうに十のあく有。かみのとくと下のあしきとは。どうはいの事にて候。つぎのもののあしきとは。ことわりとおぼし召て。めしつかふべき物也。

十七。人にみやづかふ事も。我よりそめ人からしといふともおろかにせさせ給ふべからず。御身のかいぎやう薄くして。人にみやづかふことなれば。せんごうつたなきこととはちくゐて。いよく其人を大事におぼし召候はば。御みやうがありて。くわほうも御入候べし。そひながら御しうをあなづり。我みやづかへのこうをばつまず。うすくしてうらむる心あらば。三ぼう<sup>三</sup>にはなたれて。身のはてあしきやまひとなりて。淺ましくはつることも有。さやうの事おほく候。

十八。いやしきにつかふることも。よのならひにて候へば。ちからなきこととおぼしめして。

山家集。

何ことに  
つけてか  
よをはい  
とはまし  
うかりし  
ひとそ今  
はこひし  
を

つらき御しう成とも。露をろかにおぼし召候  
まじく候。げに／＼うきふししげく候はゞ。ば  
だひのたねとおぼしめして。世をすてさせ給  
ひ。のちのよを御ねがひ候はゞ。かならずし  
やうじ出離すべく候。夫こそうかりし人のな  
さけなるべけれ。

十九。たかき人にみやづかふ事。あなかたじけ  
なとおもふより。露をろかならず。うしろめ  
たき御心をもちたまふべからず。御手などか  
かりたらんに。その色見えてはみかざられ給  
ふべし。おくふかきものに見えさせたまひ候  
へ。されば村上のてんわうは。京極のみやす  
所をば故ある女御のためしにおぼし召けれ  
ば。中宮ふかくうらやませ給ひて。御たしな  
み有しかば。御まへの女房だち。善人の敵とは  
なるとも。悪人をともとなせそとは。かやう  
の事にやと申されしと也。

二十。たかき君におもはれたてまつること。女  
御など申て。御身ちかき程にてみえたてまつ  
りたまはゞ。いかにも心有さまたしなみたま  
ふべし。御おぼえある御身ならば。ともにま  
つりごとをたゞしくして。万みんをあはれみ  
おはしまし。さるはまたおくふかく。もしは  
みやづかふ人。殿上のをのこなどにこゝろを  
かけて。たれがかうぶり。くつのをとときえん  
に。あひかまへてことくはへさせ給ふな。むか  
しよりうへみやづかへはうしろめたきためし  
おほし。かのなりひらの中將。月やあらぬと  
ながめしも。もゝどせにひとゝせたらぬつく  
もがみとありしも。みなうへみやづかへの御  
事なれば。女御かういの御うへにて。うしろめ  
たき御事なり。おぼろ月よのないしのかみ。  
さばかりめでたき御おぼえ。雲井のほかのく  
ちおしさ。女三のみやのけぶりくらべ。さこそ

つゝむとせしかども。その名はもれて。いまでもうき世がたりと成にき。

廿一。どうはいいに見ゆること。ふうふをんあいのみちとてむかしよりさだまれることなれば。あだにもをろかにもおもひ給ふべからず。さらでだに女は大ろくてんのまわうのけんぞくにて。おとこの佛道をさまだげんためにをんなとなりてきたれるなり。さればきやうにいはいく。たとひ大じやを見るとも女人をば見べからず。女を一けんすればながく三づのごうとなる。いはむやいちぼんにをいてをやとあり。されば御身はかならずまわうのつかひとして。このたびぶつだうをしやうげせんずるものと思召。しゆつりげだつの心をすゝめ。三ぼうにきゑし神明につかへば。甚其家ふつきはんじやうし。より／＼人の心をすゝめ。御うちのをあはれび。万民をはぐくみた

まひ候はゞ。ふくとくさいはひるんまんして。末の世まで。ねがひのまゝにて。げんせあんおんごしやうせんじよなるべし。

廿二。我よりいやしきものに見えさせたまふとも。おとこといふものは。三世のしよぶつのけげんにて。しやうばつたゞしく。じひのこゝろもつはらあり。をろかにもおもふべからず。たゞぶつぼさつにそひたてまつるとおもふべし。おとこをばあいせんみやうわう。その身は女躰にして。ゆみやをたいしてしゆごし給ふ。べんざいてんは。わたをわにしておとこをいたゞき。如法に見えたまふ御すがたなり。

廿三。春のみじかき夜のなごり。のこれる有明にすだれすこしまきあげ。びわことなどしらべ。たゞならぬあさばらけ。身にしみてぞおぼえ侍る。ばいくは。くろぼうのにはひくゆり

みちて。風のまよひ。そこはかとなくかほりき  
て。ありかゆかしきこゝちするは。物のあはれ  
かぎりなからむものなりと。むかしの人もさ  
だめをかれしぞかし。其いにしへのりよりの  
あそんの女の歌に。

浅みとり花もひとつに霞つゝ臚にみゆる春のよの月

女ははるのあはれを知といひて。源氏のむら  
さきのうへも。春のそらをしめさせ給ひにき。  
廿四。夏の日はあつくたへがたきに。御うちは  
などさせ給ひ候はん。人のためにもかようの  
にほひくゆりみちて。うすものをんぞ。すずし  
のひとへ。かうのふせんれうなどやうなるも  
の。すずしやかにうちにほはし。ひなどわらせ  
てすいばんたまはらせて。御まへちかき人々  
にこゝろをいさめ。涼しきかせのたよりもと  
めてなど。人をはぐくみおはしますべし。あ  
つき日すずしきたよりをなす事。すなはちば

さつのぎやうなるべし。

廿五。秋の夕は月のかげほのかにさし出。せん  
ざいの草むらはなさきて。露の玉きら／＼と  
をきわたし。虫の音もおりしりがほになきわ  
たり。とを山のしかのねほのかにきこえ。雲  
井のかりもとづれてあはれなる折から。紅  
葉をそむる村雨にさうのことゆるかにかきな  
らし。つまをとげだかく聞え。うゐてんべん  
生死むじやうのことはり。飛花落葉の有さま  
おもひしらるゝばかりにて。ながきよすがら  
露とともにおきゐつゝ。歌をよみ。ことをひ  
き。こゝろをすまされんに。おもひのこすこと  
は。よもあらじとおもひ侍り。

廿六。冬のよのことさらさむきには。池の氷も  
むすばうれ。なみまのをしのうはげの霜をは  
らひ。あしのほなみに風さえて。おいのねざ  
めのいかばかり物うからんとをしはかられ。



月清集。  
おほふへ  
き袖こそ  
なけれ世  
中のまづ  
しきたる  
のさむき  
よなく

うづみ火のもととなつかしう。あはれなる夜半のけしきにうき世のありさまおぼし召しりて。たみをはぐくむ御心ぶかう。さむからんねやのうちまで御心をはこび。御ぞたまはらせばやと。ほど／＼にしたがひてまめやかならん御とぶらひも侍べし。

廿七。御歌の事。あめのしたにいきとしいけるもの。いづれかうたをよまざりける。まして女の御身においてをや。まづうたと申は佛たいをあらはし。天地相應して出きたる物なれば。歌をよまんとおもふ心すなはちこれ天也。こころはたねをくだす所すなはち父也。たねを求てうたをあんする所を則地といふ。よみいだすは則母の胎内をいづるがごとし。さて三十一字のうたのさまよきを則ぶつたいともちいる也。如來に三十二さう有。歌に三十一字。心を添て三十二さう也。惣じて歌の五句は人

の五常也。則五たいなり。五躰難なくしどうたの姿すなはちよき歌となる。譬へば。歌にやまひなくして五じやうたゞしきは。則能人のすがた也。ふうふゐんやうわがうの時。ふうふともにせんしんあれば。うまるゝところの子せん人なり。父母あしき心をもてば。その子あく人なりといふがごとくに。歌のすがたよきはすなはち佛也。歌にやまひといふこと有。六義と申は風。賦。比。興。雅。頌也。古今の序におほかた見えたり。うちみえしあたりは。歌の心やすらかに。くちおとなしうよみなし。春ははなさくをまち。秋は月のひかりをあはれば。飛花落葉のことほり。ことのほにみえたり。花のさくを待。郭公の初音をまつなどいふことはつねの事にいひならはし侍り。かりなどは。あながちにしのぶにあらねども。たまづさのたよりに。秋のかりをば待ともいひ。お

拾遺集。  
あら玉の  
年たちか  
へるあし  
たよりま  
たるゝも  
のはうく  
ひすの聲

もしろきこゑなれども。うぐひす。鹿のねは。  
まつとはいはず。たゞしまたるゝものはうぐ  
ひすのこゑといふことはゝのこりて侍れど  
も。さやうにさして色ふかくいひ出んことは  
かたくや。花のちるをおしみて。紅葉のちる  
をおします。花をまちて紅葉をまたず。時代の  
ことは。わかあふぎ。すざくゐんのすいな  
うより女房の歌のことは見えたり。爲相卿の  
御はゝにあぶつの中されしは。御おやなどう  
ちむかはせ給て。まとのほど／＼にわかれて  
は。うとき人には歌の道もとひがたく。はづ  
かしとのみおもひて。さてすぎぬれば。世中に  
歌よむ人のすくなくなるこそ心うけれ。集を  
御覽するは。ことばのちからをつけため也。  
歌をよみあがらんとおもふには。手づからに  
しくはなし。歌を御心のをよばんほど。五十首  
も百首もあそばし候て。うとからぬ人の参た

らんに見せられ候て。言葉をつくはへさせられ  
候て。よむまじきことは。そのしだいちがひ候  
はんずるところをよく／＼たづねられ。わが  
心のくせなどもよくかんべんありて。せんあ  
くをわかつたせたまひ候ては。御歌となり  
たく候。惣じてせんだちの中され候。どうるい  
をあまたたびよみ候ては歌と成がたし。し  
かればしうをよくみるべし。又たゞおさなき  
程は。しらすよみにいかほどもよみて。歌の  
心つき候にしたがひて。集をよく御覽じて。歌  
かざりと成候やうにあそばし候はゞ。よき人  
のよきゝぬきたらんごとくになり申べく候。  
そうじて人のはづかしき申ては。歌はよまれ  
ぬ事にて候。おかしきうたをとりはづして。人  
にきかれたる社はづかしく候へ。けいこにな  
にしらすよみたらんは。師と我とより外はた  
れかしり候べき。しも歌の心よく候ては。

よも人には申まじ。師を御はぢ候はで。御歌を  
さい／＼御見せられ。御けいこなさるべく候。  
耻を思は、命をすてよ。なさけをおもはゞは  
ぢをすてよと申ことは。歌の道の事にて候。  
けいこだにもよくしたまひぬれば。あながち  
ふせいをたづねもとめ候はずとも。をのづか  
らいかやうのこともよまれ申べく候。又百首  
をよむには。五六首のあいだをしみて。その  
ほかをば地うたとて。さら／＼とよみながし  
たるがよきよし定家卿も申され候。歌をよく  
よみぬれば。神も佛もなうじうある事と申  
候。

廿八。御手跡はことに女のたてたる御のうに  
て候。いかにも／＼そのすぢ見ぐるし  
かるべき也。さきのさいぬん。古皇后宮の御手  
のすぢをあそばし候へ。その人のしゆせきと  
て人の見参らせんに。あまりにいふがひなか

らんはくちおしき御事にて候。返々いかにも  
うつくしくあそばし候べく候。

廿九。さうしなど御覽する事。惣じて歌集など  
御らんじ候て。十二代集のうち。とりわき古  
今集肝要にて候。新古今はさだ家のをきふみ  
どもにしるしをかれしむねとのほんどもに大  
がいそへ申べく候。御らんじ候べく候。物語  
さうしなどの事は源氏ものがたり。なりひら  
のくだんのほかのすいなうにしるし候。げん  
じの物がたりは。大かた和歌のはんがくと見  
え候。いにしへ人もさこそ申をかれ候し。こ  
の物がたりにもるゝ事は候はず候。この物語  
を御らんじても。女ばうのしんたい。御たち  
ゐに御心がけ候べく候。又御さうしなど聞せ  
給候はんにも。御心えあるべきこと。高松の女  
院の御おくがきに。大納言のつぼね。さる人げ  
んじよみけるが。いさゝかよみかねうちかた

ぶきみる所を。大納言のつぼね。さきざまにの給ひしかば。よむ人心よげにうちわらひて。よくおぼえさせ給ひけりとほめけるを。女ばうだち御まへにて女院へ申てければ。女ゐんきこしめして。おかしくおもひてこそよくおぼえさせたまひたるとはいひけん。まことに思ひけんことはづかしさよとおほせられて。御涙をはらくとながさせ給ひしを。女ばうだち見まいらせて。あしうけいしけりといひあへり。そののち女ゐんうちへ参らせ給ひて。御ものがたりのついでに。わかう人せうせうまいらせん。何事もいひをしへさせ給へと申させ給ひて。御かへりありて。大納言の局をはじめて三人のひとくを。しばしうちへ参りて。世のたゞずまひ有べきやう見おぼえて。われにはちかゝせざらん程にかへり給へ。かうのみふかくさきわたり。はなやかな

らぬにつけても。はちがましき事の侍るうちおしさとて。まいらせられければ。女ばうもさる人にて。いかでうちへ参らんとて。夫よりすぐにさまをかへ。ふかき山にこもり給ひしかば。まつだいにさうしなど聞べき人のためしよとおほせられて。きろくにのせてとゞめられけり。道を覺し召。世をはぢさせ給ふ女院の御心ざしの程かたじけなく。又かの女ばうのさまかへけんもやさしくこそ。いゑをしつしみちをしるはかうこそあるべく候。さうしなどよませられ候はんとおほに。よしなきさうしなど御らむじ。ようなき物語などかへすがへす候まじき事にて候。はづかしき事にて候。なにしにその歌おぼえさせたまひけんと御めのとなりけるもののかきくどきかたりしぞげにさうおもふらんとあはれにおぼえ侍りし。



三十。びわあそばされんによき御師えらばせ給。人の御みゝにとむらんばかりあそばし候へ。そのぬしと成人のみゝにとむばかりあそばし。その事たらぬかなどきかれんはくちおしきわざになん侍り。たゞ御心に入られて。御ことのねをもすまされ候へ。雲井にひゞかし候ばかり御心にとどめてあそばし候へ。びわはことにねたげなるものの年がらにて。わざとかどあるほどに遊ばし候はでは。中々なることも候べし。いふがひなき事は人の御身により候。かひなでの人はそのほどもやさしくおぼえ候御人ならば。ことに御心のをよばんかぎり御たしなみ候べく候。かのじんやうの江のほとりのよそほもしろしめされ候べく候。

卅一。人のおまし所は御心のうちのかぐみなり。人のさし入て見まいらせしにもそのひと

の心ぎはみゆるもの也。大かたをき物のしだいさだまれるが。こと。びわのふくろに入てたてられぬるあたりなどは。しつしたるやうの物などさぶらふべし。さしさがりてはかひおけ。ごばん。すぐろくばむ。又ひきよせて三ちうのたな。そのをきものはつねのごとし。又ついでも候はゞ。申候はんずるいのちもがなとおもひまいらせ候。

卅二。御すぐりいださるゝやう。もし人御すずりと申され候はん時も。又御まへにてめされ候はむにも。ふんだいにすへたる御すぐりにて候はゞ。すぐりのふたをあけられ候て。ふたをみぎのかたにをかれ。ふたのうへにれうしををかれていだされ候べく候。又ふむだいにすへぬすぐりにて候はゞ。ふたをあけてすみをすり。ふたのうへにれうしををかれ候べく候。

卅三。うときまれ人などにはあひかまへてはぢあつかはせ給へ。あひなれてこそ御心をもしり候へ。そのまゝうとくなる事もあるもの

にて候。かまへて／＼はじめよくひきつくろひてさるべき人など御うち候はずは。よそよりめしいだしても。御はぢかゝぬほどに御あつかひ候べく候。はじめの御たいめんに入の御心ぎはみえ候物にて候。はじめ人を御はぢ候はでは。のちにはなにに御はぢ候べき。

それをこそ人をみならふものにて候へ。よめ入は心やすく久しく。いへのぬしになるべきなれども。はじめ候いはゐもてすものにて候。

卅四。御しうとめなどにはいかほども御心を(飛騨)をき候。たとひその身いやく。くだれるい

へなりとも。しつする御心あるべし。ふとまいらせ給ひしとも。御いしやうをあらためられ。御たいめんあるべき物にて候。あやまり

てもをろかにむかひ給な。たとへきかへ候はん物なきほどの身なりとも。おびをとき。しなをし候へとこそ申候ひしか。

卅五。御殿ふくとり申物をば。一かさねなければ。かたでにうちかけていで。給はる人のみぎのかたにうちかけていだす物にて候。一かさねともあるをば。四にたゝみてみぎの袖をうへになされ候て。わきの下をしばりとぢてをかれ候。廿がさねまではひろぶた一にすへて候べく候。めうせんゐん殿。このまき物を御らんじて。いづくもよてさりながら。いにしへこそさありげに候へ。今はくこんなどのついでにとりあへぬこそかたにもかけ候へ。たとひ一がさねなくとも。くだされんになり候て。一なりともひろぶたにすへてもくるしからず候。又十がさねよりおほくすへれば。ひろぶたもちくるしかるべし。ちか比武衛のくわん

れいの御とき。御あはせ四十がさねまいるこ  
とあり。それは十がさねづつ。四のひろぶた  
にすへられしおはせごと候ほどに。十がさね  
大かたたうせいのだまりかとおぼえ候。

卅六。御すぐろくなどあそばし候とてばんを  
めしよせられ候はゞ。ばんをもちてまいりて。  
ちとひきさげてをきて。さてさいのふくろを  
もちてまいりて。うちむかはせ給候はんかた  
をみて。うつしまいらせ候べきやらんとうか  
がひて。いしをたて候物にて候。ばんのうへ  
にふくろなどをきて。もたぬものにて候。

卅七。こばんをめされ候はゞ。ばむをもちてま  
いり。又恭簡ごげをもちてまいり。ふたをあけて。  
右のわきよりごげをまいらせ候ものにて候。  
卅八。みづひきうすやうなど人の申され候は  
んに。百すぢ二百すぢとも。又うすやうをい  
だされ候はゞ。もののふだにすへられ候てし

かるべく候。ないし五十すぢ卅すぢなどはな  
にとなくをしつゝみていだされ候てよく候べ  
く候。うすやうは一でう二でう五でうまでは  
なにとなくさりげなくいだされ候へ。一そく  
とも候て物にすへられ候へ。だゐなくばもの  
のふたにもいれられ候べく候。

卅九。おびなど人にいだされ候はゞ。十かけ  
も候はゞ。ひろぶたにすへられ候べく候。一お  
もて二おもてはたんざくの如くつゝみて。う  
ちぐもりなどにてゆひて。もののふたに置候  
しとおもひ候。すへ物のなきには。やないば  
こなどにすへられ候物にて候。又つけおび十  
すぢ廿すぢなどは。おびづつみにうすやうを  
あつらへられつゝみ候。又花のえだにつけて  
もいだされ候。一すぢ二すぢなどは。たたうが  
みにつゝみたるがよく候。  
四十。ぬのなど人にいだされ候はゞ。越中。越

後。宇治ぬのなどやうなるものは。十たん五  
十たん百たんもしんじやう候し時は。さがみ  
入道殿めしよせられ御らんじ候き。かずなら  
ぬ六位藏人などは。十たん五たんも。ひたゝ  
れのれうとて。だいにすへたび候へけるとな  
ん御物語候。又その名のなきる中ぬののよき  
を人のたびて候へしをば。いかにうつくしき  
候へばとて。なにといひてかひとにたび候べ  
きと申て候へば。ながはしのこうたうのな  
しの御つぼねにじゝうといひし女ぼうおりふ  
しさむらひけるが申しは。うちわたりにては  
御のごひぬのところ申候へとありしかば。さ  
がみ入道殿げにもおもしろしとの給けり。か  
やうの事こそききならふべけれとて。十たん  
廿たんづつのごひぬのに御さた候へとてまい  
らせられし。おもしろくやさしくおぼえ候。  
四十一。もとよりあらぬの。太布たふなどは。御か

ほのすりとて。高まつ女院のたふめされしよ  
り。せんとうの女ぼうしゆの御かほのごひに  
なり候へるほどに。とりわきしん上候ひし也。  
あらぬのはくれなるのふりてのようになたす  
る物にて候。くれなるのはなおろしそめつけ  
て。こきくれなるにしは。されば歌にくれな  
るのふりての色のをかつゝじとよまれ候。さ  
やうのものにめしつかひ候べく候。  
四十二。はしたがみとはあまたしさい候。よ  
ろづのものたらぬをばはしたと申候。かみに  
かぎらぬ事ぞかし。千種のとうの中將とのゝ  
まへにてすこしうときまれ人さぶらひける  
に。御もてなしやいかにありけん。きたのか  
たかなしくおぼしめして。御まへにさい相と  
いふ女ぼうありけるに。御そばなるれうしを  
はんでうばかりあふぎにていだされ候を。さ  
いしやう一めみて。それをばてにとり候はで。



御ざしきをみまはしけるに。兩かい三ばうの  
だいに御さかづき一そふてありけるを。その  
よし申てをきける。心とき女のためしに。の  
ちまでほめさせ給ける。

四十三。花もみちを人につかはす事。したし  
き御なからひなどにかきかはされん御中はく  
るしからず候。それともおとこしげきあたり  
は。色々しきふしもやと御心をかせおはしま  
すべし。大はらのの花。くろだにの梅。あらし  
山のもみぢなどは。まいらせてもくるしから  
ず候。さるは御にはのこするなど事過たる物。  
ふねなどにうちをかれ候はくるしからず候。  
よきあしきもやさしきやうにていろめかしく  
候。さりながらをんなどちは。いかほどもく  
るしからず候。

四十四。御にはひあまたのはう候へども。さ  
せる事なきにはひなど。その御かたのにはひ

とていだされ候はんは。人からにあはぬ御事  
にて候。いかにもくせむせられ候て。梅花。  
くろばうなどはなどきくもくるしからぬ物に  
て。よくくあはせられ候て。御まへわたりの  
女ばうたちにたえずくだされ候はんことしか  
るべく候。返々ちんよくきくさだめられて。お  
ほかた御心をそへ。四きのかうをもあはせら  
れ候べく候。

四十五。

四十六。御ふろゆどのなどへ御いで候はんを  
ば人に御見え候まじく候。あかはだかになる  
物にて候ほどに御心せさせ候べく候。まづゆ  
ぶろなどにてたかごゑわらひごゑなどせぬ事  
にて候。ことにざれごといはぬことにて候。

一條院上東門院は。弁の命婦。小式部内侍。さ  
らではたかつかさ殿兼子の女ばうしゆならでは。  
御ゆどのにはまいられず候。

四十七。御貝あそばし候には。おけをふたり  
してもち候。又ひとりしてもちてまいりしに  
は。みぎをさきにひだりをあとにもちてまい  
り候ものにて候。みぎのおけをかたへを  
しのけて。ひだりのかひをうつして。ひだりみ  
ぎりへをしわけて。ふたりしてもこれをふす  
ると申候。かひのくちは。大きなるは八。ちい  
さは十二にふせ候。御かひ出すやくはすこ  
しさがり候。すゝみて出さず候。又しんしやく  
もしにくきことにて候。御いだし候はゞ。をし  
しづめて。御きそく<sup>氣色</sup>をうかゞひて。おけのふた  
をあけて。そばをみず。かひをてのうちにかく  
しもちて。おはしますかたを見て。うへとし  
たるかたのあそばしはて候時いだされ候。べく  
候。すゑの人のおほひはつるまでは。ま  
たせまいらせ候事おそれにて候。よく御  
はからひ候ていだされ候べく候。かいをろん

じうばひ候事。おとこ又けいせいなどのする  
事にて候。さりぬべき女ばうなどは。そうじて  
物をもいはぬ事にて候。わがまへを人にとら  
れぬやうにおもふものにて候。わがまへをば  
さしをき。人のまへにこゝろをかけなどし候  
ことわろく候。そうざうしくあるまじき事  
にて候。

四十八。御けんぶつなどはあるまじき事とは  
申ながら。ことにより物見もならひにて候。  
さるべき人などのさそひ給候はんときなど。  
われこそのでいにて。あるまじきことをなど  
の御ふりはあるまじき事にて候。もし御いで  
候事候はゞ。御ともの人きらびやかに。くるま  
ぞひ。むまぞひなど。御わたくしの御ともまで  
もきれいに人めよきやうに御入候。べく候。  
四十九。御物まうでの事。しげくはあるまじ  
き御ことにて候。たまさかの御物まうでは。

神のこゝろもなごむらんとや。人もめをおどろかし。いかに御なうじうもふかからんと。きねがたもとにうちならすすどのこゑ。千歳ののぶるさかき葉とりかざし。まんざいゝといさめさせ給ふべきものなり。

第五十。御ぶつじなどは。御心をいれて。一大事とおぼしめして。なにのたからも。めに見えぬわざとて。いかにとなうたがはせ給ひそ。いかにもゝしんにいれて御いとなみ候はば。じやうぼんれんだいの御かざりとなるべく候。いかにもよく御たしなみ候て。一かどあらんときは。御身にかはらん物をくやうせさせたまへ。女ばうの身におしとおもふは。つみふかき物ならではあつめもたぬ物にて候。さるほどにかやうのほうしなどには。たむけさせ給ひて。つみをかるめさせ給へ。何にもしうしんふかきは。あさましきことにて候。さ

よふに候はゞ。またゝもとめさせ給ふべし。又さしてもなきそらほうしなど御ちかづけ候まじく候。よきことはなきものにて候。御ぶつじなどにもなだかき人を御くやう申候べく候。

此一書未詳誰作。而三十五ヶ條中。武衛管領之文。則應永以後之記者必矣。一日小雨中各被評云。疑是後成恩寺殿下之御作也乎云云。依以記之而已。

天正八閏三月初六

藏人右中弁藤判

## 慈元抄序

天下靜に民の竈賑ひて。貴も賤も樂み多かりし代は。孝道に不<sub>レ</sub>最背<sub>一</sub>故也。去は孝經に曰。先王の至德要道有て以天下を教へし時には。民以和睦して上下恨なしといへり。七難の風吹。三災の浪立て。君の船漂ひ。臣の水濁り。一天四海安き時希成事は。偏に内外二の依<sub>レ</sub>背<sub>一</sub>孝經也。爰を思合て。孝經の詞。その外孝行の筋を書置の文の端々。心に浮ぶ通り書集るものなり。是非<sub>ニ</sub>私言<sub>一</sub>共。定て誤り多からむ。他見有<sub>レ</sub>憚。唯爲<sub>ニ</sub>子孫<sub>一</sub>形見に残置而已。

## 慈元抄卷上

夫孝道は大古難を遁れ。望を遂て幸に逢。位に進むとなり。世間の業多き中に和歌の道こそ内外の孝經の心に叶ひたる物なれ。

問云。孝は難を遁るゝ道なりと云り。孝行故に

難をのがれたる人ありや。答曰。唐に張禮と云者ありき。飢饉の年老母を養ふ。或時出て菓を拾ひて歸るとて道にて賊に逢。張禮を害して喰むとす。唐には飢饉の時には人を殺して喰へばなり。張禮歎じて云。我老母を養ふ。今日未<sub>レ</sub>與<sub>ニ</sub>食事<sub>一</sub>。願は少しの暇を得させよ。家にかへりて母に食事を與へて。重て來て殺さるべし。若我約束を違たらば。到<sub>ニ</sub>吾家<sub>一</sub>。一類を皆可<sub>レ</sub>失と云。賊免して家に歸す。張禮歸りて悦で母に食事與ふ。母奇み問云。今天下愁へ悲しむべきときなり。汝何悦笑ふや。張禮が云。吾拾<sub>レ</sub>菓歸る時に逢<sub>レ</sub>賊。欲<sub>ニ</sub>我殺<sub>一</sub>。我老母に食事を奉らむ爲に暫の命を乞て歸る。若我愁へば母必食事をなし給はざらむ。爰を以強て咲ふ。母は能留り玉へ。我行て可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>害と云。はゝの云。汝既に賊を遁て歸り來る。何ぞ更に自殺さるべしや。張禮がいふ。我不<sub>レ</sub>行賊



來て可<sup>レ</sup>失<sup>二</sup>一類<sup>一</sup>。母をもおどろかしまいらせ  
ば非<sup>レ</sup>爲<sup>二</sup>孝子<sup>一</sup>云。其弟門を隔て聞<sup>レ</sup>之。偷賊の  
所に走り行て。先の者は兄也。兄は孝にして老  
母を養ふ。辛苦して瘦たり。吾は膚肉多し。願  
は兄の命に替らんと云。兄又賊の所に至りて  
云。我は元來殺事を免す。何ぞ弟を殺さむやと  
云。其時賊二人の詞を聞て憐みて。張禮に米  
二石。鹽一斗を與ふ。張禮歸て母を養て。孝敬  
の道を全くと云り。是孝行故に難を遁れた  
るなり。孝經に曰。身軀髮膚を父母に受たり。  
敢そこなひ破ることなかれと云は孝の始な  
り。身を立道を行て名を後世に揚て以父母を  
顯す孝の終なりといへり。孔子論に曰。昔孔子  
東荆山の麓に行玉ふ。道に三人の小兒あり。土  
をくだきて城をなす。一人の小兒は默然とし  
て不<sup>レ</sup>戲。孔子曰。車の道をさくべし。我行む  
とするに城を作る小兒云。我聞聖人は上天命

をしり下人情を知。古より今に至るまで車ま  
さに城をさくべし。城何ぞ車を去むやといふ。  
孔子車を別て地に下て問云。二人は共戯る。  
汝何ぞたはぶれざる。小兒云。戯は益なし衣を  
破道なり。石をなげむよりは稻を舂むには不  
<sup>レ</sup>如。他と争に勝んよりは庭を掃むには不<sup>レ</sup>如。  
戯の餘りは恨あり。恨のあまりは憤りあり。  
怒のあまりは破れあり。破の餘りは亡ぶる事  
あり。上官司を煩はし。中父母を愁しめ。下兄  
弟に有<sup>レ</sup>耻。始は咲ひ。終は泣。隣里相恨。親族  
相離る。愚なり。さるに依て戯す。徒に衣服を  
費す。大に成患は戯による。故に不<sup>レ</sup>戲といふ。  
孔子曰。善哉善哉。後世可<sup>レ</sup>恐とは是を云かと  
いへり。此心は聞ゆるごとく。戯の終は身軀髮  
膚をそこなひ破り。父母を患へしめむことを  
前より知て不<sup>レ</sup>戲。是聖人は未萌を知と云理に  
叶へり。難を遁の最上なるべし。

問云。孝は望を遂る道也といへるは孝行故に望を遂たる人ありや。答曰。唐に燕の太子丹と云ありき。秦の始皇に捕はれて國に歸らざること久し。太子丹孝行にして老母を憶へる事切也。或時始皇に申て云。國に老母あり。暇を給てかれを見むと思なりと申されければ。始皇の云。汝を返さむことは。駒に角生。鳥の頭白くならむ時なるべしと仰けり。太子丹仰天俯地。願は駒に角生。鳥の頭白くなして給ひ玉へ。今一度古郷に歸て老母を見んと被祈ければ。天の憐みにや。駒に角生。鳥の頭白くして。始皇の庭前に來りけり。始皇見玉ひて。綸言如汗出て二度不返ことはりを思ひ給ひけるにや。太子丹に暇を給けり。然れども返さんことを猶不安思ひ玉ふ。燕の國へ行道に大きな川あり。其河に橋あり。太子丹渡らむとき。落入様にしつらはせ給けり。太子丹不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之。渡ると

て落入ぬ。されども水に少も不<sub>レ</sub>溺。向の岸に着く。見れば大なる龜ども餘多甲を揃へて浮み出て渡しけり。是孝行故に望を遂給ふなり。問曰。孝は幸にあふ道也と云るは孝行故に幸に逢たる人ありや。答曰。唐に郭巨といふ者有き。家貧にして老母を養ふ。其妻一子を生む。三歳に成ころ。老母常に食事を分て此孫に與ふ。郭巨妻に語て曰。貧くして事不<sub>レ</sub>足。此子をば埋むべし。子は二度有べし。母は二度得べからずと云。妻もさらばとて。終に穴を掘事三尺餘にして。忽に黄金の釜をほり出す。釜の上に文あり。曰。天より孝子郭巨に給はる。臣も奪ふ事を不<sub>レ</sub>得。人も取事不<sub>レ</sub>能とありけるとかや。是孝行故に幸に逢るなり。問云。孝は位を進む道也と云るは孝行故に位をすゝみたる人ありや。答曰。昔唐に重華といふ者ありき。幼時母にをくれたり。父をば瞽

叟と云。後に又妻を持て象と云子を生ず。彼繼母重華を惡む事不<sub>レ</sub>常。父も繼母讒言を信て重華を殺さんことを思ふ。或時家を葺せける。華其心を知て筵を持て登る。父四方の軒に火を付たり。華むしろを以て身を包て踊り下て遁れぬ。其後井を拂はせける。隣家に其心を知て華に語て曰。父母井を拂はせんとする事必惡心なり。何辟ざる。華が曰。我唯父母に順て死して孝をなすべし。父母に違て不孝をなすべからずと云。友達は哀て。華に錢を與へて。豫はかりごとをなして隣の井へにげ道を掘てをく。翌日此錢を偷に持て井に入。父母鉤を舉て見るに金錢一文あり。悦て可<sub>レ</sub>埋事を忘れて掘せけり。井深くして暗し。見るに底不<sub>レ</sub>見。其後はや錢盡ぬといふ時。上より石土を取て埋みけり。華は隣の井より出て遁れぬ。父は兩眼盲て。母は耳つぶれたり。弟は瘡癰

になる。後には殊外貧しくなりなき。又天火にあひて家を燒。重華は歷山と云所に居て田を作りて。年々二百石の米を取。名を改て市に入て米を賣。繼母薪を賣て飢寒たるを見て。薪の代を増て與へけり。米を賣ては錢を偷に米の袋の中に置。餅肉を與て返す。家に至て袋を開みれば。米の中に錢を得たる事度々也。譬叟あやしみて是を問。妻云。市中に若き者ありて我貧困なるを憐て如<sub>レ</sub>斯。叟云。是我子重華に非ずや。妻云。華は今百尺の井底にあり。石を以埋<sub>レ</sub>之。聖人にあらざらむよりは豈能只にいきんや。叟云。來日に我を連て市に行け。昨日の若き者に引合ふ。叟問云。若は何人なれば哀む事深き。我年寄果て。不善にして兩目不<sub>レ</sub>見。貧して報答なすこと不<sub>レ</sub>能と云。華云。我は是忠孝の人なり。翁の貧困なるを見て憐むのみなり。何必しも報答を云ん。叟其答る

聲を聞て。我子にあらずや。音聲似たりといふ。重華なりと答。こゝにをいて父子相抱て悲み泣けり。市人見てあはれますといふことなし。重華袖を以て父の目を拭ふ。則明かに開く。母又能聲を聞。弟の象則能語る。重華再拜して云。我不孝にして背く。自今以後更に如斯ならずと云。父又大きに悔て曰。今より後愚なる心を以。我聖子に向はむと云。市朝の人民重華が孝行をみて涙を不流といふことなし。依之孝順の名四海に聞ゆ。堯王聞玉ひて。位を讓て與之玉ふ。是を舜王と申といへり。問曰。孝行故とは云ながら田夫野人として王位に昇る事不淺不思議也。常の心持如何成けるや。答云。孟子に曰。虞舜は善なる事人と同。事あれば己を捨て人に隨ふ。人にとりて以善をなすことを樂といへり。問云。如何なる故を以か世を治玉ひける。答曰。呂氏春秋に

曰。堯は欲諫の鼓を置。舜は誹謗の木を立。論語に曰。天下を保て。衆に撰て。皋陶を舉しかば。不仁者は遠ぬ。又云。無爲にして治るは夫舜歟。孟子に曰。堯舜の道は孝悌のみ。又或詩に。野老は不知堯舜力。酣歌一曲太平人共云り。問曰。和歌の道孝道に似たらば歌故に難を遁れたる人有や。答曰。西行法師盛なる花を見て一枝折ければ。花守る人大に嘖りて西行を搦んとす。西行よめるうた。

白浪と名には立とも吉野川花ゆへしつむ身をは惜ましと讀りければ。免しけるとなむ。又或時西行道を行とて。物染る藍と云草殖たる中をすく。路にして通るとて一本引切てもてり。藍主見付て。僻法師の振舞かな。藍を踏そこなふのみならず。折とるべしとて搦捕て。手に持たりける藍を押へて食せけり。食ながら讀る。

西行は鶉と云鳥ににたる哉繩をかゝりて鮎を食へは



と讀りければ。面白し。扱は西行にておはしけるよとて。免しけるとなん。是歌故に難を遁れたりける。

問云。歌故に望を遂たる人ありや。答曰。在原業平。東の五條邊に最忍て行けるに。みそかなる所なれば。門よりも得入らで。童のふみあけたる築地の崩より通ひけり。人しげくもあらねど。度重りければ。主聞付て。其通ひ路に毎夜に人を居て守らせければ行とも得ん逢歸り。扱讀る。

人しれぬ我通路の關守は宵々ことにうちもねなむ

と讀りければ。主免してけりと。いせ物語に書り。是歌故に望遂ける也。問曰。歌故に幸に逢たる人ありや。答曰。昔有馬の王子零ふれ給て下野國まで下り給。其國に五万長者とて富人あり。其に立寄せ玉ひて。奉公すべき由を宣ふ。長者奉置。或時酒宴の半に。巡の舞あ

りて皆舞けり。彼若殿原も舞べしと長者云ければ。王子やがて立て歌をよみ玉ふ。

いなむしる川そひ柳行水に流おれふしそのねはうせす

と詠じて舞給ひければ。長者只人にあらずとて。座敷を立て御手を引て。上座にをき奉りけるとなむ。其比長者獨の娘を持たり。かねては常陸の國司に參すべきよし約束有ければ。

彼王子忍逢給ひて。無程懷妊有ければ。國司より催促ありけれど。娘は早死したりしとて。喪葬の儀式をなして野邊に送る。棺には。つなしと云魚を入て。焼て烟を立。彼魚は焼匂ひ人を焼に似たればなり。其心を讀る。

東路の室のやしに立煙たか子のしろにつなし焼らん

ごのかはりに焼とよめり。それよりしてこのしろと云となむ。是歌故に王子幸に逢給ふ。今も歌よび連歌師とて。人の賞幸に逢なるべし。問曰。歌故に位を進たる人ありや。答曰。源三位賴政いまだ四位にて渡らせ玉ひける時の

述懷のうた。

升るへき便なければ木の下にしゐを拾ひて世を渡る哉  
と讀玉ひしに依て。三位になり給ひけるとな  
ん。

問云。和歌の道内外の孝經に叶へりと云る。外  
典の孝經に似たる事をばはや是を聞。法花經  
に似たりとは如何成所ぞや。答曰。歌道は外  
典よりは猶内典に叶へる事多し。問。歌道に  
は風賦比興雅頌の六義あり。經に似たる事有  
や。答。法花經には六根清淨の法文あり。六  
万恒沙の菩薩あり。六卽の位あり。數を出せ  
ること先似たり。六義に各叶へる經文あるべ  
し。夫を申さむには。歌道の事知れる顔なれ  
ば斟<sub>ニ</sub>酌<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>。

問。歌道の邊序題曲流は似たる事ありや。  
答。邊は喩へば佛此經を說玉べしとて。先瑞  
相を現じ玉ふがごとし。序題曲流は序正流道

に似たり。問云。歌の三十一字は似たること  
有や。答。佛の三十二相にかたどれるとか  
や。相は三十二。歌は三十一也。一字不<sub>レ</sub>足謂  
ありとぞ。五七五七七の五句も。數多の習あ  
りとかや。家隆相傳の書には。此五句は妙法  
蓮花經の五字也と書り。又應永廿七年の時。  
院の御所に大納言播磨の御局とて女房御座し  
ける。家は橘の朝臣もろのり卿の息女たり。  
歌道に達者の人也。稚きより天神信仰の人に  
て。日夜朝暮渴仰の心怠る事なし。正月十八日  
の曉。鳥の音も鐘の聲も過。しのゝめも明方  
なる折節。院は御寢所を出させ給けるに。播磨  
の御局に男の聲にて憚る様もなく物語聞えけ  
る。院は不思議に思召て。暫徘徊はせ給に。  
大納言の聲にて申されけるは。吾日夜朝暮も  
社頭に參籠申度候へ共。女の身にて候上。愁に  
龍顏に近付まいらする身にて。心に任せずぞ

侍る也。乍<sup>レ</sup>去自<sup>レ</sup>稚渴仰の心不<sup>レ</sup>淺候由かき口  
說申させ玉へば。誠に氣高由ある御聲にて。

女房の志を感じてこそ加様にも現聞ゆれ。必  
足手を運ずとも。我聞の中にも我を不<sup>レ</sup>忘。

心の正しからむ事こそ肝要なれ。我も和光垂  
跡の志を勵し。詠歌にこゝろをくだきつゝ。不<sup>レ</sup>

撰<sup>ニ</sup>貴賤<sup>一</sup>此道に入ぬる人を偏守る也と。さま

ざま御物語有て。先三十一字を釋すれば。初

の五文字は妙法蓮華經の五字を表せりと教へ  
給けるとぞ。猶様々御物語有<sup>レ</sup>之。肝要佛道執

行の爲に可<sup>レ</sup>爲事を心にかけて。放逸邪見我慢

慳貪利養を捨て。むざん破戒を離れ。柔和忍

辱にして此事を業となすべし。尋常人の適翫

も。只時の興計に名聞に執行へば悲也。誠を本

とせざる無には劣れり。然ば加様の人も心を

變する時は。雜念なくして惡事に不<sup>レ</sup>交。噴恚

清淨にして。是又佛道に入べき便にて。衆罪

を消滅するなりと教へ給けるとかや。猶様々  
の御物語有を。女房連歌付て見玉へとて。

雪に梅花もさくらの木すらかな

と仰せければ。

松のあらしや吹かす無らむ

と付申されければ。面白し。如<sup>レ</sup>斯今より後は。

女性も連歌有べく候とて。書消す如にみえ玉

はず。障子一重隔て。院も具に聞召て。御身の

毛もよだつばかり也。御覽すれば。薄雪降晴

て。をしはるゝ呢月のあさばらけ。餘りの貴と

さに堪かね。御胸騒ぎつゝ。御格子の妻戸あく

方なく。御庭は白雪降敷て人跡もなし。いと

ど奇特に思召。御局をめして御尋有ければ。有

つる次第。具に奏聞申さるゝ様は。いつもわら

はは寅の刻に起みつゝ。手水をつかひ。念誦

して。そい障子に打かゝり候へるに。衣冠正し

き上臈の打向給て御座しつるを。頓て是こそ

北野にてましませと人の告知する様に思ひなして。御會釋を忝も白圍にて申つれば様々の御事ども詞にては申もおとすべし。又忘るゝ事もやとて。元來能書にて御座しければ。御前にて墨すりながし。引合一帖計に御詞少も不替書記して備<sub>レ</sub>叡覽玉ひけるとかや。花に鳴鶯。水に住蛙のこゑをきけば。いきとし生るもの。何れか歌を讀ざりけると貫之が書るも。法花經の心に似たり。慈鎮和尚の歌に云。

おく山に妻とふ鹿の聲までも皆與實相不相違背也

とよめり。源氏物語之卷の數は天台六十卷を表せりと云一説あり。源氏の卷の六十卷に不<sub>レ</sub>足も又謂れ有となむ。夫を宗祇の拔書を八冊になせり。目錄系圖どもには十卷とかや。是も法華經に似たり。一部八卷に序分の無量義經と結經の普賢經を副て。法花經一部十卷とも申となむ。問曰。連歌の起。別して經に

たることありや。答曰。賦何の五字は妙法蓮花經の五字なり。表の八句は一部八卷也。片表に十四句。又片面に十四は。釋文十四品。本文十四品。一折二十八品也。末の八句は八相成道を表すといへり。懷紙の四折は四安樂行に似たり。四安樂とは身口意誓願の四に付て。安樂の筋を説玉へり。連歌の會席にては。力をも盡さず。風にもあたらざるは身安樂なり。白不<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>他人好惡長短<sub>一</sub>の金言に叶。詞花金葉を翫は口安樂也。惡きことを不<sub>レ</sub>思。貪瞋癡をはなるゝは意安樂なり。或は佛法の法樂にさゝげ。或は古人の報恩に備へ。或は賓客の奔走になし。或は自分の徒然を慰も皆是誓願安樂成べし。又四佛智見あり。四大菩薩有。四法成就有。四の數に似たる事多し。又四季をかたどるにも似たり。當季を發句にして。餘の三季を交へて。百韻の移り行事。春夏秋冬と一年の押



移るがごとく。百韻の数は。經に若十。二十。乃至百數とあるに似たり。發句に多分かなとするは祝言也といへり。經に善哉々々とあり。賦物は廿八品のそれ／＼の趣によつて題號の替れるに似たり。花を四本に定められたるは。佛の法を説玉ふ時。天雨の四花とて。赤白大小の四種の花ふると云類に似たり。懷紙に年號月日を書事は。經に處々自說名字不<sub>レ</sub>同。年記大小と説るににたり。問曰。祝儀と祈禱の會には無常と哀傷をばすべからずと多分思へり。佛法は何と心得べきや。答曰。加樣事は。歌道不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>身にて。是非の儀を沙汰す。べきにあらず。去ながら佛法に付て推量を廻す事有。祈禱法華經一部を讀誦するとして。三界無安猶如火宅の文と。世界不漏故如隨末法緣と説る類の文をば可<sub>レ</sub>除あらず。戀。述懷。哀傷。無常の理をせめたること。神慮に叶べしといへり。

誠やらむ。或貴人の病中の祈禱の連歌有しに。

くすりになにの草をやくらむ

といふ句に。

はては野のけふりなるへき身をしらて

と心敬の付られけるとなむ。其病頓て平癒ありと申傳たり。愚秘抄云。大貳三位高遠が公任卿の重病に沈み侍と聞て。常よりも取つくろひ。花やかに出立て。彼宿所に行向ひけるに。大納言所勞の事訪にぞ來るらんと。寢ながら如何に何事に入御候やらむと問ければ。煩の事をばつや／＼云出さで。

相坂の關のしみつにかけみえて今や引らむ望月のこま  
と讀て侍り。又高遠が。

あふさかの關の岩かとふみならし山たち出る桐原の駒

此兩首を詠じくらべて見侍るに。一二返にては。桐原の歌殊外まさり聞え侍り。三四返にもなれば。などやらん貫之が歌の遙に勝て聞え

侍るは如何成事にて候やらむ。此不審を御存  
日の時申て承定むが爲に参りたりと云けれ  
ば。大納言涙を浮べて。公任没し侍なん後。此  
道を執せむ人誰かはと心細く。歎かしく侍つ  
るに。御邊のおはしける事よ。返すく哀にも  
神妙にも覺え給る事かなと云るとなん。病中  
に行なば。御煩は驗氣に渡らせ玉ふや否や。定  
て早々平愈あるべしなどと云べきに。さはな  
くして。此病にて定て死し給ふべきなれば。片  
時も存日の内。此不審たつねまいらせむと。尋  
常の人ならば心にもかけ無興有べきに。道を  
知。道を重むする人なればこそ。斯は感じ給ふ  
なれ。況神慮にをいてをや。千世萬代ぞめでた  
かりけるにて。偽かざりたる事は神慮に叶べ  
からずとなむ。祝言と思つてする句にきはめて  
無祝言なる句も有といへり。

問云。連歌の會席をみるに。一座口をとち壁に

懸り。胸をしづめて。爰までは春の句か秋の  
句なり。戀歎旅歎何れをか付むと。十方に心  
を廻し案じたる。粧もゆへびたる似たる事あ  
りや。答曰。經に深入三禪定。見十方佛とあ  
るに似たり。

問云。春に春を付。秋に秋を付。戀に戀を付る  
は常の事也。春に秋を付。季の替りたる計に  
て。すがたのつれたる句もあり。又一向にあら  
ぬ方に轉ずるもあり。其轉じたる句と申は。

たちかへりては門にこそたて

あらたまの春はむかへるみねの松

かへさの袖は手にもたまらず

爪木とる山路を花にわすれきて

水のうごくにかせわたるみゆ

人の身に五のかたちあらはれて

さてもなにかはやかはるらむ

罪人をおもふもかなし六のみち

面かけをわすれぬまゝにかさねきて

大比叡いくつ高きふしのね

此類ひ勝計ふべからず。經に似たる事ありや。

答云。法花經は物を轉ずるを以本意とす。餘經には女人惡人二乗せんだいは永く佛なるべからずと説り。此經には女人も惡人も二乗せむだいも悉く轉じて。如我等無異の佛とし玉ふ。爰を大師の釋に。たきやうだんき。菩薩ふき。二乗だんき。なむふき。女だんき。せむふき。あくだむき。人天ふき。ちくこんきやうかいと云り。又轉せらる事あり。多寶の塔の戸をひらかむために釋尊の分身の諸佛を十方の國土より靈山に集め給ふ時。佛力を以海山に平になして。八方各四百万億那由たの世界を一靈山淨土に飾りなし給ふ。縦ばせばきつばをひろげて。まがきを取のけ。あたりの雜木をほりこぎて。山をつきなをし。眞砂をしきなをすがごとし。其時は西方極樂淨土をもあらためられけるか。其まゝをかれけるか。如何さま

靈山淨土の内に纔に有べし。其故は極樂淨土はしやばより十万億の世界を隔たりと云り。

靈山淨土をひろげられる時は。西方へ計り四百万億那由他の世界をひろげられると云り。靈山淨土の内に極樂淨土のある事は。縦ば碁盤の上に石一置たるがごとくなるべし。又此經に物を轉せられぬ事も有。夫は當位即妙の重也と云り。問曰。連歌には神祇。釋教。戀。旅。述懷。懷舊。水邊。山類。天象。殖物。そひき物。衣類。居所。降物などあり。似たることありや。答曰。皆悉く有。神祇は十種神力あり。戀はしれゑ戀慕と有。旅は遠至餘國とあり。述懷はしゝふしゆせつかはり妙なんしとあり。懷舊はくはむひくをんゆによまむにちと有。水邊。山類。天象は經に云。縦ば一切のせむる江河の諸水の中には。海の第一たるがごとく。此法花經も又々如<sub>レ</sub>斯。もろくの如來

の所説の經の中にをいて。尤深大なりとす。又大せむこく。せむ小てちいせん。大てちい山。及十方山諸山の中には。須彌山の第一たるが如く。此法華經又々如<sub>レ</sub>斯。諸經の中にをいて尤其上たり。又諸の星の中には月天子の尤第一たるがごとく。此法花經も又々如<sub>レ</sub>此。千萬億種の諸の經法の中にをいて。最照明也とす。又日天子の能諸の暗を如<sub>レ</sub>除。此經も又々如<sub>レ</sub>此。能不善の暗を破り給ふとあり。問曰。水邊山類にはたいくをといふ有や。經にもありや。答云。此山水の喩への續きにたいようの法問あり。問云。船もありや。答云。如渡得船とあり。衣類居所は衣座室の法門あり。降物そひき物は一雲所雨の喩あり。殖物は三草二木のたとへ有。問。竹もありや。答云。稻麻竹葦の喩あり。動物はうしやくこふの鳥あり。こくゆへむの虫有。虎狼野干の獸物有。

問云。連歌には去嫌といふ事有。法華經には嫌物不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有。經に曰。貴賤上下。持戒弃戒。威儀具足。及不具足。正見邪見。利根鈍根。とうゝはうゝと説り。殊此經をば海に喩たり。大海塵を不<sub>レ</sub>撰と云り。爰は連歌にかはれるや。答云。此經に嫌物なき證文先以しかなり。但此を知て彼を不<sub>レ</sub>知は盲者の大象に如<sub>レ</sub>觸といへり。此經を海に喩たるをば何とか心得給ふらむ。海には八種の不思議有。先一の不思議には大海塵を不<sub>レ</sub>撰とは乍<sub>レ</sub>云。死人をば不<sub>レ</sub>留<sub>二</sub>海底<sub>一</sub>。渚に浪の打あたる事定れる不思議也。如<sub>レ</sub>其此經の大海には惡人女人破戒邪見を不<sub>レ</sub>撰をさめ給へども。此經誹謗の人をば法花の海底にはとゞめ玉はず。地獄に遣し給ふなり。經に云。若人不信毀<sub>二</sub>謗此經<sub>一</sub>。即斷<sub>二</sub>一切世間佛種<sub>一</sub>と説き下をせ玉ひて。其人命終入<sub>二</sub>阿鼻獄<sub>一</sub>と説り。傳教大師の釋にも。日月の光遍けれど



も濁水には不<sub>レ</sub>浮。諸佛の慈悲深重なれども不信の前には不<sub>レ</sub>來と云り。葛氏外篇に云。日月も光を曲。穴にほどこす事不<sub>レ</sub>能。衝風も波を井底にあぐることも不<sub>レ</sub>能と云り。又此經には餘經を交へて用る事を嫌へり。經に曰。乃至不<sub>レ</sub>受餘經一偈と有。問云。法花誹謗の人をば永く嫌るゝや。又時節をへて免さるゝや。答曰。時節を経ても免さるゝとは不<sub>レ</sub>見。經に曰。如是てんくしむしゆかうと説り。問云。連歌の嫌物は五句去か七句去か。面をかぶるか折を替るか。如何様末には又用るなり。法花誹謗の人を永く嫌はれば。經と連歌と嫌ひやう替れるや。答曰。此經にもふきやう菩薩を嘗打擲せし人は。千劫の間地獄におちて。終に又ふきう菩薩に逢てさとりを聞く。是は信伏隨從の故也と云り。五逆をなして地獄に落し違多は。此經の半に天王如來に被<sub>レ</sub>成た

り。此等は連歌の嫌物の面をかへ折をかへて又用るが如し。法花誹謗の人計を永く嫌るゝなり。連歌も折に隨て會により。其一座の果るまで。嫌ひとをす物有べき歟。移徙の連歌には烟を一向に嫌ひ。旅の祈禱の連歌には不<sub>レ</sub>歸と云詞を嫌。城地の祈禱の會には落るといふ詞をきらひ。堤祈禱の會にはきるゝと云詞を嫌ふべし。灯庵主問答曰。良阿河州に下ける時。千丁が鼻といふ處の堤をつきけるに。其所のなま侍名主庄官などやうの者はを見て。今此を通るこそ名譽の良阿彌陀佛よ。夜前清書したる連歌取て來りて點を申せやとて。乗たる馬の口に付て。所望しけるほどに。頓而下馬して懷紙を引ひろげて。奥をみるに不<sub>レ</sub>及。發句に長點を合せたりけるとかや。よに人楚忽げに思ひたりけるほどに。少會釋して堤をつかれ候時の御發句。され字候はず候間。あ

まり目出度候て。長を合申て候といひ捨て。  
馬に打乗て逃たりけるとかや。此利根さを思  
へば。點も如何に上手にて有つらんと云り。

問云。懷紙の末に作者を書を句數をしるすこ  
と似たる事有や。答曰。其一是序品第一。其  
二は方便第二。其十は法師品第十。其廿は不輕  
品第廿。其廿七は教王品第廿七。其廿八普賢  
品第廿八也。加様に心得て見れば。連歌百韻の  
始中終。法花經一部の面影也。連歌の祈禱に成  
も此故なり。是併法花經を嫌疎人に縁を結ば  
しめむとの佛神の方便也。結縁の功德計は輪  
廻もあり。此經を直に持て信する人は無輪廻。  
經に云。乘此法乘直至道場と説り。

### 慈元抄卷下

問。孝は難を通れ望を遂。幸にあひ位を進むと  
いふ事。外典にてははや聞レ之。内典にをいて

聞つべしや。答曰。此條に内典に於て今更申  
に不レ及候ながら。位を進む一計りをあら／＼  
申べし。四教の位の沙汰さま／＼あれども。夫  
をば置ぬ。廣大法界といへども。不レ過三十界。  
其十界と申は。地獄。鬼。畜生。修羅。人。天。聲  
聞。緣覺。菩薩。佛。是十の位なり。人間一界の  
内にては貴賤上下の位さま／＼也。天にをい  
ても梵天帝釋の位尤勝れたり。日月四天王は  
帝釋の臣下也。帝釋は欲界を領し給ふ。此經を  
一心に信じ敬て疑をなさざらむ者は。若人中  
に生れば百官万乘の君。其外富貴人とならむ。  
若天上に生せば梵天帝釋の位を得べしとみえ  
たり。經曰。若生三人天中。受勝妙樂。と有。此  
梵天の上に聲聞あり。聲聞の上に緣覺有。緣  
覺の上に菩薩あり。菩薩の上に佛あり。佛の  
うへに位なし。此故に無上佛道と云。此經を持  
信する人は。位の頂上たる妙覺極果に至ると

みえたり。經曰。於我滅度後應受持此經。是

人於佛道必定無有疑と有。又若有能持

即時佛身も説り。成佛の難きに非ず。此經に

逢事かたしと云り。是此經を持信する人。位

をすゝむにあらずや。問云。如何なる故に

法花經をば内典の孝經とは云るや。答曰。餘

經には女人成佛を免さず。爰を以舍利發は龍

女が成佛に疑ひをかけられけるとなん。女人

成佛せざらむは釋尊もふかうにてとをり給ふ

べし。其故は御母摩耶夫人の成佛あるべから

ざればなり。此經を説玉ひてこそ。摩耶夫人

の成佛も定り給ふなむ。此故に内典の孝經と

は申なるべし。清少納言はこゝもとをよく聽

聞しけるにや。經には法花經更なりと枕双紙

にかけり。又小野小町が歌とかいへる。

ふたつなく三なき法ときく時は五の障りあらしと思

と讀り。小式部は母に先立て失けるが。或時

物に詫して讀るうた。

仇人のなきけの色にほたされてあひの焔に入を悲しき

和泉式部聞之。痛打泣て讀る。

あた人の情の色に絆さるゝあひの焔をいかゝけすへき

と讀ければ。小式部重て告げる歌。

焔けす御法の雨は一味にて妙なる法にわきてけすへき

とよめりけるに依て。以此經一品をなしける

となん。小式部も幼子を持たりし。それを置て

歎きのあまりに和泉式部。

殘しをきていつれ哀と思ふ覽子はまさり鬼子や増る覽

と讀り。問曰。親の恩の重き事聞つべしや。

答云。親の恩は際限不可有。内典には父母恩

重經に具に説り。外典にもそくばくの説あり。

孝經に云。父母子を生て撫之養之。是をか

へりみ是を復す。攻苦功是より大なるはなし

と云り。毛詩に云。哀々たる父母我を生て劬勞

す。又云。父として我を生。はゝとして我を養

ひ。我を長じ我を育む。此德を報せむとするに  
昊天無極と云り。童子教に曰。父の恩は高山  
須彌山猶下し。母の德は深海蒼溟海還て淺し。  
白骨は父の嬌。赤肉は母の嬌。赤白二諦（海賦）和して  
五舛身分となる。胎内に處して十月。身心常  
に苦勞す。胎外に生じて數年。父母の養育を蒙  
る。夜は母の懷に臥て乳味を費事數斛。晝は父  
の膝に居て摩頂を蒙る事多年と云り。論語に  
曰。子生れて三年。而後に父母の懷を免る。三  
年の喪は天下の通喪なりといへり。通喪とは  
天子より万民まで通じて用る儀也。唐には親  
の恩を報せん爲に三年廿五月の程喪に居とな  
り。我朝にて三年忌と云るの間也。昔或者鷲  
に子をとられて山中に追入て尋行けるに。終  
に思ひ堪かねて死したりし。其靈魂鳥となり  
て子は／＼となく。是を喚子鳥と云るとなん。

人の親の心はやみにあらね其子を思ふ道に迷ひぬる哉

とも讀り。子をおもふ事は人に不<sub>レ</sub>限。鳥類も  
畜類も不<sub>レ</sub>替となり。女訓集云。天上人中よ  
り始て。山野の鳥獸。江河の鱗。螻蟻蚊虻に至  
るまで。子をおもふ道に不<sub>レ</sub>迷といふ事なし。  
春の野の雉子は巢の内に卵をいだきて野火の  
爲に身を焦し。巫陽江の猿は子を惜て獵者の  
船におち。夜るの鶴は子をおもひて籠の中に  
啼。屠所の羊は子の別ををりの外に悲む。家  
をうがつ雀。梁に住る燕。かるもをかきふす  
猪。犢を引羣牛。惣じていきとし生る物。かた  
ちは異なれども。心ざしは不<sub>レ</sub>易と云り。吳子  
に云。伏鷄の狸をうち。乳犬の虎を犯すがごと  
しといへり。子を溫めて臥たる鷄はたぬきを  
もふせぎ。子に乳を含る犬は虎にも闘ふとな  
り。螻蟬斧を取て龍車に不<sub>レ</sub>向とは是を可<sub>レ</sub>云。  
子を思ふ心の切なるに依て也。問云。鳥類  
畜類の中にも孝行なるものありや。答云。



鳩に三枝の禮有。鳥に反哺の孝あり。歸雁列を不亂。孝羊跪て乳を呑といへり。鳩は親の居たる枝を三去て下枝に居となり。鳥の子はおとなしくなる時必見忘る謂れ有。然れども猶親の恩徳を不<sub>レ</sub>忘してやしなひ返さむ事を思へども。何れをか親とも不<sub>レ</sub>知。深山などに老極りたる鳥の飛えずして飢つまりてあるをみては。若我親にてもやあらむとて。わかき鳥ども養ふと也。それを反哺の孝と云り。鴈はとぶとき親より先へは出すとなり。羊は親に恐て跪て乳を呑となり。又つゝじの花のつぼめるを見ては。親の乳房に能似たる事を思て跪て花を愛して過ると云り。問曰。兵の道は疵付事をたのしみ。難を招くのみなれば。孝の道には大にかはるべしや。答曰。兵の道猶孝行を專にす。孝經に云。孝を以君につかふるときは忠有。又云。忠臣は必孝子の門

より出。論語に云。父母に事能其力をつくし。君につかふまつるには能其力を致す。又云。見危命をさづくとも云り。むかし唐に楚の惠王の兄の子白公亂をなす。楚王是を伐にえず。王の曰。我聞忠臣は必孝子の門より出。もし孝子を得て軍の將となさば必能伐<sub>レ</sub>之。臣下奏して云。申明と云者有。父に仕へて孝を極めつくす。楚王召<sub>レ</sub>之。申明云。我聞孝子は忠臣に背て君に仕へむやと云て不<sub>レ</sub>行。王重て召<sub>レ</sub>之。申明堅く辭して出ず。其父申明に語て曰。汝何ぞ楚王の爲に國を安じて万代に名を留ざる。汝只行。我死せざらんと云。申明父の語に隨て行。楚王申明が來るを見て大に悦て將軍となして白公をうつ。白公曰。申明は是孝子也。かならず忠臣たらむ。今將軍として伐<sub>レ</sub>我。我必破れんと云。臣下云。申明が父を搦捕て我

軍中にをかば。申明即引<sup>レ</sup>兵去らむといふ。白公申明に語て曰。汝が父已<sup>レ</sup>搦て我軍中にをく。汝我とともに和すべし。若不<sup>レ</sup>和父を害せむと云。申明白公に答云。我聞忠孝の二事ならび不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>行。我今君の祿を食む。あに更君に背て父に仕へむや。汝がころすに任せむ也と云。申明即いかつて軍を發て白子を生捕て楚王に奉る。王大に悦玉ふ。申明王に申て曰。明が父既白公に切れて死す。王聞て則白公を申明に切らしめ給ふ。王申明が父を納めて禮を以葬り給ふ。申明天に仰て歎き云。我國を治る功有といへども。父を害する耻有と云て。遂に自殺して死すといへり。孟子に曰。天の時是不<sup>レ</sup>如<sup>三</sup>地利。地の利は不<sup>レ</sup>如<sup>三</sup>人和と云り。兵の道は天地人の三才の中には人和を專にす。孝行の赴き。万民和睦し。上下無<sup>レ</sup>恨道也といへり。問云。孝道は無爲を本とす。兵道

は亂を本とす。殊身軀を毀傷る不孝あり。万民を惱し農務をさまたげ奪ふ不仁あり。然らば孝行の人豈發<sup>レ</sup>兵。答曰。三略曰。夫兵者は不祥の器。天道惡<sup>レ</sup>之。不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>止用ゆ。是天道也と云り。欲心深くして人の境を貪り。靜なる國を騷し。不義の軍を發すは。天道に背き不孝の兵也。六韜に曰。欲義に勝則亡ふといへり。湯王の桀を亡。武王の紂を伐て治<sup>三</sup>天下<sup>一</sup>給ひしは。是天道に叶ふ孝行の兵也。孟子に云。湯王征する事葛より始。一征して天下に敵なし。東面して征すれば西夷恨み。南面して征すれば北狄恨む。何ぞ我を後にすと云。民の臨<sup>レ</sup>之大旱に雨を望むがごとく。市にきする者やまず。草ざる者うごかずといへり。問曰。孝經には身軀髮膚をそこなひ破らざると云り。孝子の兵に赴く事は君に忠を致すに依てなり。法華經は內典の孝經とかや。內典

外典とて孝行の道さのみかはるべからず。然に法華經修行の法師ならば。髪を剃事いはれなし。殊に此法花經の行者として不惜身命を胸にあつると云るは。大に不審也。 答曰。論語

に曰。泰伯をば夫至徳と云べからくのみ。三たび天下を以譲ると云り。此泰伯は周の大王の太子也。大王に三子あり。泰伯は長子なり。次の弟は中雍。少弟をば季歴と云。何れも賢人也。季歴の子に文王昌あり。昌は聖人の徳あり。昌必天位を保む事を知。或時大王病に沈み給ふ。泰伯藥を尋と號して吳越に行く。髪をきり身をもとらして歸り給はず。三度天下を以譲と云に二説あり。大王薨じて季歴立。一人の譲也。季歴薨じて文王立。二の譲なり。文王薨じて武王立。爰にをいて天下を持つ。是三の譲也。又一説に大王病し玉ふ時に藥を求號して出玉ふ。是生る時はつかふまつるに禮を

以てせざる一の譲也。大王薨じて歸らず。季歴をして喪をつかさどらしむ。是死せる時は葬るに禮を以せざる二の譲なり。我は髪を切身をもとらして季歴にまつりをつかさどらしむ。是まつるに禮を以せざる三の譲なり。如<sub>レ</sub>斯髪を切身をもとらし。父を看病せず。死に不<sub>レ</sub>逢。喪におらざるは。是不孝第一と云つべし。然れども其志の至り賢なる至徳といへり。は何も孔子の説なり。法花經修行の法師。髪をそり衣を墨に染る事も。俗人の事にあづからず。一心に此經を修行して世外なる事をしめす故なり。其上佛の時よりの法度なり。次法華經修行の人として不惜身命を胸にあつる事。此經に勸持品あり。勸持をばすゝめたもたしむると讀と云り。此品に曰。佛滅度後恐怖惡世の中にをいて我等まさにひろくとくべし。諸の無智の人有り。惡口めり等。及刀杖

を加へむ者。我等皆まさにしてのぶべしとあり。(新略)又云。我不レ愛ニ身命。但惜ニ無上道」とも説り。此品のこゝろを讀る歌。新古今。

數ならぬ命は何かおしからむ法とく程をしのかかりそ  
又同品の心を讀る。正三位經家同集に。

去すとして幾世もあらしいさらは法にかへつる命と思はむ  
とよめり。過去の不輕菩薩は禮拜の行をなし  
玉ひしに。惡人共ありて杖木瓦石を以打擲せ  
しかども。其行不レ怠功德によりて釋迦如來  
となれりと説たまふ。此經を持に付ては。父  
母に背ても不レ苦。親にそむかじとて。此經に  
背て。親子永く生死に輪廻せんは愚なるべし。  
父母の後世を救て佛果に至らしめむこそ誠の  
孝行なるべけれ。孝經に云。父に爭ふ子ある  
時は不義におちいらすといへり。始は背くに  
似たれども。終に背かずば權道也。唐棣の花  
にたとへたり。爰を以法華經の行者は不惜身

命を胸にあつると云り。經に云。今此三界皆  
是我有と説るときは。釋尊は我等が君にてま  
します。其中衆生悉是吾子と説給へば。釋尊  
は我等が親にて御座す。唯我一人能爲レ人護  
と説玉へば。釋尊は我等が師匠にて御座す。  
此故に三德有縁の佛と申奉る。此一佛に背き  
奉るは。主師親の三に背に成す。能於ニ來世ニ  
讀ニ持此經。是真佛子と説る時は。此經を讀持  
たざらむ者は。不孝の御子なるべし。此三德  
有縁の佛をさしをいて。他家に奉公するがご  
とし。又我師匠をさしをいて。他寺の老僧に  
仕るがごとし。又我親を次になし。人の親を  
愛敬するがごとし。孝經に云。不レ愛ニ其親。他  
人を愛するをば悖德と云。其親を敬せずして。  
他人を敬するをば是を悖禮といふと云り。悖  
は亂也。又曰。五刑の屬三千。然に辜不孝より  
大なるはなしといへり。一世の契の親に背く



さへ罪如<sup>レ</sup>斯。況無始無終の親たる佛にそむき奉るつみ限あらむや。抑唯我一人の教主たる釋迦一佛ばかりを信するを不足に思はんや。不足に思はゞ此經に疑をなす也。此經に疑をなさば。地獄に落む事必定なり。經に曰。生<sup>レ</sup>疑不<sup>レ</sup>信者。卽當<sup>レ</sup>墮<sup>三</sup>惡道<sup>一</sup>とあり。上一人より下兆民に至まで。内外の孝經にだにも背き玉はず。天長地久御願圓滿。現世安穩後生善處たるべき者也。

右此條々愚昧の身として。いすかのはしの如くなる事も。假にも筆に任せ。紙をけがすべきにあらず。乍<sup>レ</sup>去君子たる人こそ假初のしわざをも人の鑑になす事なれば。一言をも慎み玉ふべけれ。數ならぬ者は。たま／＼能事を云出したればとて人これをよしとも思はず。あしき事をばもとよりさなるべしと毎人に云るなれば。如何様に違へる事有ても不

苦。唯佛意。神應の照覽の程こそ計り難けれ。夫も經には隨力演說とあり。孝經には大節身にある時は。小過ありといへども不孝とせずといへり。佛法は。多年常に聽聞す。歌道は更に不<sup>レ</sup>知。經旨に似たる事あるを宣るまでなり。所詮志の程を感ぜられて。誤りあらむ事をば。佛神先賢免し玉ふべし。

月星の残れる影にさし向ふあさひの光ひとつにそみる

時永正七月上章鶉火黃鐘下句誌<sup>レ</sup>之畢。

群書類従卷第四百七十九

雜部三十四

枕草紙

清少納言

春はあけぼの。そらはいたくかすみたるに。  
やう／＼しろくなりゆく山ぎはのすこしづつ  
あかみて。むらさきだちたる雲のほそくたな  
引たるなどいとおかし。

夏はよる。月のころはさらなり。やみもなをほ  
たるおほくとびちがひたる。又たゞ一二など  
ほのかにうちひかりてゆくもいとおかし。

雨のどやかにふりたるさへこそおかしけれ。  
秋は夕暮。夕日のきはやかにさして。山の葉ち  
かう見えわたるに。からすのねにゆくとて。三  
四二などとびゆくもあはれなり。まして雁の

おほく飛つらねたる。いとちいさく見ゆるは  
いとおかし。日いろはてゝ後。風のをと。むし  
の聲。はたいふべきにもあらずめでたし。

冬はつとめて雪のふりたる。さらにもいはず。  
霜のいとしろきも。又さらねどいとさむきに。  
火などいそぎおこして。炭もてありきなどす  
るを見るも。いとつき／＼し。ひるになりぬ  
れば。やう／＼ぬるびもてゆきて。雪もきえ。  
すびつ。火おけの火もしろき。はひがちになり  
ぬればわろし。ころは。

正月。三四月。五月。七八月。九十月。十一  
月。すべてみなおりにつけつゝいとおかし。

せちは五月五日。七月七日。九月九日もお

かし。ふる物は。時雨。あられ。雪。さては

また五月の四日の夕つかたよりふる雨の。五日のつとめて。いとあをやかなるのきのあやめのすそよりおつるしづく。よもぎのかほりあひていとおかし。

風は。あらし。木がらし。二三月ばかりの夕つがた。ゆるく吹たるあま風。又八月ばかりの雨にまじりて。ひやゝかに吹たる風おかし。霧は。川ぎり。木

の花は梅。ましてこう梅はうすきもこきもいとおかし。櫻ははなびらおほきに。葉の色

いとこきが。枝ほそくて。かれはなに咲たる。ふちのしなびながく色こく咲たる。いとおかしうめでたし。四月つごもり。五月ついたちごろのたち花の葉は。いとこくあをきに。花はいとしろくさきて。雨うちふりたる。つとめてはなべてならぬさまにおかし。花のなかより身のこがねのたまとみえて。いみじうきはや

かに見えたるなどは。春の朝ぼらけの櫻にもおとらずぞおほゆる。ほとゝぎすのよすがとさへおもへば。なをさらにいふべきにもあらず。なしの花は。よにすさまじくあやしき物にて。はかなきふみうちつけなどもせず。あい行をくれたるかほなど。うちみてはたとひに人のいふも。げに色よりはじめてあはひなくすさまじければ。ことはりと思ひしを。もろこしには。めでたきものにして。ふみにもおほくつくりたるを。さりともあるやうあらんと思ひて。せめて見れば。花びらのさきに。おかしきにはひこそ。心もとなうつきためれ。楊貴妃の御門の御つかひにあひて。なきけるほどのにはひにたとへて。梨花一枝春帶雨といひたるは。おぼろげならじとおほゆるに。よろづの花よりはめでたし。桐の花は。むらさきに咲たるはおかしきを。葉のひろごりたるさま

ぞうたてくこちたき。されどこと木どもにひと  
 とういふべきにはあらず。もろこしにてこ  
 とごとしきなつきたらんとの。これにしも  
 すむらん心ことなり。ましてことにつくりて。  
 さま／＼なる音どものいでくるは。おかしと  
 も世のつねにもいふべきにやある。又木のさ  
 まぞにくけれども。あふちの花いとおかし。  
 こと木の花にはにす。いとまれにさきて。か  
 ならず五月五日にあふ心。いとおかし。

花の木ならぬは。五葉こえふ。かつら。柳。

そばの木。楓しななき心地したれど。はなの木

どももちりはてゝ。をしなべてみどりになり  
 たるなかに。時もわかず。こきもみちのつやめ  
 きて。おもひかけずあをき葉のなかよりさし  
 出たるめづらし。まゆみ。さかき。りん  
 じのまつりのみかぐらのおりなどいとおか  
 し。木きしもこそあれ。神の御前の物とおひはじ

めけむも。とりわきてかしこし。楠木は。こ  
 だちおほかる所にも。ことにまじらひてたゝ  
 ず。おどろ／＼しき思ひやりなどうとましけ  
 れど。ちえにわかれて。戀する人のためしに  
 いはれたるぞ。たれかはかすをしりていひは  
 じめけむとおもふにおかし。ひの木。又けぢ  
 かゝらねど。みつばよつばのとのづくりにも。  
 これこそはつまとおもふにいとおかし。五月  
 の雨の聲をまねぶらんもあはれなり。かえ  
 での木。わかやかにもえいでたる。葉はすゑの  
 おなじかたさまへさしひろぐりたる。はなも  
 いとはかなげに。むしなどのかれつきたるに  
 にておかし。あすはひの木。この世にちかく  
 も見ずきこへず。みたけにまいりて返たる人  
 などぞもてくめる。枝ざしなど。袖ふれにくげ  
 にあらましかれど。なにの心にて。あすはひの  
 木とつけけむ。あぢきなきかねことなりや。



たれかたのめたるにかと思ふに。きかまほし  
うおかし。ねずもちの木。ひとくしう。  
人なみくになるさまにはあらねど。はのいみ  
じうこまかにちいさきがおかしきなり。あ  
ふしちの木。やまなしの木。しるの木。  
ときは木は。いづれもあるを。それしもたが  
へせぬためしにいはれたるおかし。しらか  
しといふもの。みやま木の中にもいとけどを  
くて。二位三位のうへのきぬをむるおりこそ  
葉をだに人の見るめれ。おかしき事にとりい  
づべくもあらねど。雪のふりおきたるに。み  
まがへられて。すさのをのみことのいづもの  
くにへおはしける御供にて。人丸がよみたる  
歌などおもふに。いみじうあはれなり。いふ  
事につけても。ひとふしあはれともおかしと  
もきくおきつる物は。草も木もとむしもお  
ろかにこそおぼえね。ゆづる葉のいみじう

つやめきふさやぎたる葉は。いとあをくきよ  
げなるに。思ひかけずにくもあらぬ。く  
きのあかうきらくしう見えたるこそあやし  
けれどおかしけれ。なべての月ごろは。つゆ  
みえぬもの。しはす師走のつごもりにのみ時め  
き。なき人のくひ物にしくを見るがあらな  
るに。又たとしへなくいはひのおり。はがた  
めのぐにもしきてつかひためるは。いかなる  
にか。もみぢせむ世やといひたるもたのもし。  
かしわ木。いとおかし。葉のまだちいさきお  
りより。はもりの神のおはしますらんもかし  
こし。また兵衛督四すけぞうなどをさいふ。  
いとおかし。すがたなけれど。すろの木から  
めきて。わろき家のぐとは見えす。なにとな  
けれど。やどりぎといふなは。かなだちていと  
おかし。  
草の花は。なでして。からのさはらなり。やま

ともいとおかし。をみなへし。き經。朝  
 がほ。かるかや。きく。つぼすみれ。り  
 うたんは。枝ざしなどぞむづかしげなれど。  
 こと花のみなしもがれたるなかより。いとは  
 なやかなる色あひにて。さしいでたるいとお  
 かし。又わざととりたてゝ。人めかすべきに  
 はあらぬさまなれど。かまつかの花らうたげ  
 なり。名ぞうたてある。かりのくるはなとぞ文  
 字にはかきたる。がむひの花。色はこれからね  
 ど。ふちの花にいとよくにて。春秋と二たびさ  
 くとおかし。夕がほの花のさまも朝がほ  
 ににて。いひつゞけたるもおかしかりぬべき  
 を。はのすがたぞにくきや。身のさまこそいと  
 くちおしけれ。などかさはたおひいでけむ。ぬ  
 かづきなどいふものゝやうにだにあれかし。  
 されどなを夕がほといふなのつきそめけんい  
 とおかし。しもつげの花。あしの花。こ

れにすゝきをいれぬいとあやしと人いふ也。  
 秋ののゝをしなべたるが。おかしさにはすゝ  
 きこそあれ。すゑのいとくすはうにて。あ  
 さぎりにぬれて。うちなびきたるは。さばかり  
 の物やはある。されど秋のはてぞいとみどこ  
 ろなき。色々にみだれさきたりし花の。かた  
 もなうみどころなうちりにたる後。冬のすゑ  
 までかしらのしろくおほどれたるもしらず。  
 むかし思ひいでがほに。風になみよりひゞろ  
 ぎたてをめる人にこそにたれ。よそふる心あ  
 りて。あやまりてそれをしもぞあはれと思ふ  
 べけれど。いさや。  
 花なき草は。さうぶ。こも。あふひいと  
 おかし。まつりのおりに。神世よりしてさ  
 るかざしとなりけむよりはじめ。ものゝさま  
 もおかしき也。おもだかは。心あがりしたら  
 むと思ふなのいとおかしき也。みくり。ひ

るむしろ。こけ。こたに。日かげ。雪ま  
のわか草。かたばみは。あやのもんにてある  
もおかし。あやふぐさ。きしのひたびにね  
をはなれて。げにたのもしげなうあはれなり。  
いつまで草は。かべにおふらん又いとはか  
なうあはれなり。きしのひたひよりも。います  
こしくづれやすからんかし。まとのいしばひ  
ぬりたらむには。えおひずやあらむとおもふ  
こそいとわろけれ。ことなし草は。おもふ事  
をなすにやあらむと思ふこそいとおかしけ  
れ。しのぶ草。いとあはれ也。みちしば。  
つばな。よもぎなどもいとおかし。やます  
げ。山ある。はまゆふ。くず。さゝ。  
あをつぐら。なづな。なへ。あさぢ。いとお  
かし。はちすは。よろづの草よりも世にすぐ  
れてめでたし。妙法蓮華經のたとひにも。花  
は佛にたてまつり。身は数珠すゝにつらぬき。念佛

して往生極樂のえむとすればよ。また花なき  
ころ。みどりなる池の水に。くれなるに咲たる  
もいとおかし。されば翠扇紅ともじにつくり  
たるにこそ。からあふひの日のかげにした  
がひてかたぶくこそ草木といふべうもあらぬ  
心なれ。さしも草。やへむぐら。つき草  
は。うつろひやすなるぞうたである。鳥は。  
ほかのとりなれど。あふむいとおかし。人のい  
ふらむ事をまねぶらんよ。ほとゝぎすいと  
めでたし。くゐな。しぎ。みやこどり。  
ひは。ひたきどり。山どりは。ともこひてな  
くに。かげをみてなぐさむらんこそ。心わかう  
あはれなれ。たにをへだてたらんほども心ぐ  
るし。つるは。みめもなづかしからず。おほの  
かにうちなきさまなれど。さわにてなく聲の  
雲井にきこゆるほど思ひやるにいとけだか  
し。かしらあかきすすめ。いかるがのおとり。

たくみどり。かはちどりのともまどはすらいいとあはれなり。さぎは。みめもみぐるしう。まなこゑなどもおそろしげに。よろづとり所なけれど。ゆるぎのもりにひとりねじとあらそふらん心ぞすでがたき。雁の聲はちかをとすれど。秋まちえて霧のたえまにほのかにきゝつけたるいとおかし。又冬のいとさむき夜など雲井になきたるも。はねの霜はらふらんほど思ひやられていとおかし。鶯は。さまたちよりはじめうつくしう。はじめてたによりいでたる聲などは。かばかりありて。めでたきほどよりは。夏秋のすゑまでありて。しらこゑになくと。だいのうちにすまぬとぞ。いとわろき人の。さなんあるといひしを。さしもあらじと思ひしに。十年ばかりさぶらひて聞しに。まことにさらにおとせざりき。さるはたけもちかう。こうばいもいとよ

くかよひぬべき枝のたよりなめりかし。まかでてきけば。あやしき家のみどころなき梅の木などには。いとほなやかにぞなきいでたるや。又よるなかなぬもいといぎたなき心地す。ほとゝぎすは。あさましうまたれく。いみじうよふかう。うちいでたる心ばへこそかぎりなうめでたけれ。六月などには。やがておとせずかし。それもすゞめなどのやうにてのみあらば。うぐひすもさしもわろくもおぼえじかし。春のとりとて。としたちかへるあしたよりまづまたるゝものなれば。すこし思はずなるところのあるも。かくくちおしうもおぼゆるなり。人をも人げなく。世のおぼへあなづらはしうもなりそめにたるをば。そしりやはする。とりのなかにも。とび。からすなどのことをば。みきゝいるゝ人なし。これはなをふみなどに。いみじうつくられたる物なれば。ほ



どよりはと思ふに。なを心ゆかぬ心地する也。  
おかしなどのかたにはあらねど。にはとりの  
子のちいさき程こそあはれなれ。むしは。  
まつむし。すゞむし。きりくす。はた  
をり。てふ。われから。ひぐらし。はた  
る。ひをむし。みのむし。いとあはれなり。  
おにのうみければ。おやににて。是もやおそろ  
しき心あらむとて。お<sup>男</sup>やのあやしき衣をひ  
ききせて。いま秋かせふかんおりにぞ。こむ  
とするまでよいひをきて。いにけるをさも  
しらず。まことかとて。風のをとをきしり  
て。は月ばかりになれば。ちくよくとほかな  
げになく。いとあはれなり。ぬかづきむし。  
またあはれなり。さる心地に道心をこし  
て。つきありくらんよ。思ひもかけすくらきと  
ころなどに。ほとくとしありきたるこそお  
かしけれ。夏むし。いとらうたげなり。火ち

かうとりよせて物がたりなどみるに。さうし  
の上にとびありくさま。いとほかなびておか  
し。ありは。にくけれど。身のかろくて水の  
上などにたゞありくこそおかしけれ。山は。  
をぐらやま。みかさ山。このくれ山。い  
りたち山。わすれ山。かたさり山こそ。た  
れに所おきけるにかとおかしけれ。いづは  
た山。かへる山。のちせやま。まゆみ山。  
かさとり山。ひらの山。とこの山は。わが  
なもらすなど御かどのよませ給たるがおかし  
きなり。いぶきの山。あさくら山は。よそ  
に見るらんいとおかし。おほひれ山。をひ  
れやまも。りんじのまつり思ひいでられてお  
かし。みわの山。ましかね山。たまさか  
山。みくなし山。あらしの山。葛城山。  
くらぬ山。さらしな山。をしほやま。さ  
びのなかな山。みねは。ゆづるはのみね。あ

みだのみね。いやたかのみね。野は。さが野さら也。いなびの。かたの。こまの。とぶひの。しめしの。宮木野。あはづの。むらさき野。そうけいのこそすゝろにおかしけれ。などさはつけけるにかあらむ。はらは。なしはら。みかのはら。あたのはら。そのはら。うなひこが原。しのはら。はぎはら。こひはら。をかは。ふなをか。しのびのをか。森は。うへのきの森。いはたの森。うたゝねの森。いはせのもり。おほあらしのもり。たれそのもり。たちきゝの森。うきたのもり。こひのもり。しのだの森。こばたのもり。里は。ながめのさと。ねざめの里。人まのさと。たのめのさと。ゆふ日のさと。とほちのさと。なが井の里。つまどりのさとは。人にとられたるにやといとおかし。

ふしみのさと。いくたのさと。むまやは。なしはらのむまや。野ぐちのむまや。せきは。あふさかのせき。すまのせき。くきたのせき。しら川のせき。はぐかりのせき。ころものせき。なこそせき。きよみがせき。よこはしりのせき。みるめのせき。たぐこ忍のせき。はぐかりのなにはたとへなきがおかしきなり。又よしなゝのせきこそは。いかに思ひかへしてけるぞといとしらまほし。これをなこそとはいふにやあらむ。あふさかなどをかく思ひかへされたらむこそわびしかるべけれ。みさゝぎは。しよろう。うぐひすのみさゝぎ。かしはらのみさゝぎ。あめのみさゝぎ。わたりは。たまづくりのわたり。しかすがのわたり。みつはしのわたり。こりすまのわたり。はしは。あさんづのはし。ながらのはし。あ

まひこのはし。はまなのはし。をがはのはし。かけばし。うたゝねのはし。とゞろきのはし。さのふなばし。みづのうきはし。かさゝぎのはし。やますげのはし。ゆきあひのはし。人はみぬものなれど。なをきくにおかしきなり。ひとすぢわたしたるたなはし。こゝろせばけれどおかし。海は。水うみ。よさのうみ。かはぐちのうみ。いせの海。かこのうみ。しまは。うきしま。やそしま。たはれしま。とよらのしま。まがぎのしま。松がうらしま。なとしま。はまは。うどはま。ふきあげのはま。ながはま。ちひろのはま。いかにひろからんと思ひやらるゝにおかし。うちいでのしま。浦は。しほがまの浦。なたかのうら。こりずまのうら。しのだの浦。河は。おほ井がは。おとなしがは。

みなせ河。あすかがは。せもさだめぎなるこそおかしけれ。みゝとがはは。なに事をさしも。さくじりきゝけむと思ふにおかし。いづみがは。ほそたにがは。ふちは。かしてぶち。いかなるそこの心をみえざるなをつきたらむとおもふもおかし。ないりそのふち。たれにいかなる人のをしへけるならむ。あを色のふちこそ又いとおかしけれ。くら人などのぐにしつべきよ。いなぶち。かくれのふち。たまぶち。のぞきのふち。たきは。をとなしのたき。ふるのたきは法王の御らんじにおはしましけむがめでたきなり。なちのたきはくまのにありときくがあらはれるなり。とゞろきのたき。いかにかしがましかるらん。いでゆは。なゝくりのゆ。ありまのゆ。なすのゆ。つかまのゆ。とものゆ。いけは。

にへののいけは。はつせにまうでしに。水鳥のひまなうゐてたちさはぎしがおかしく見えしなり。水なしの池こそあやしうなどかうつけたらんととひしかば。五月などすべてあめいたうふらんとするおりはこのいけに水といふものなむなくなる。いみじう日てるべきとしは。春のはじめに水などいとおほくいづるといひしを。無下になくかはきてのみあらばこそさはいはめ。いづるおりもあなるを。ひとすぢにもつけけるかなとぞいらへまほしかりし。さるさはの池は。うねべの身なげたるをきこしめして行幸のありけんこそいとめでたけれ。ねくたれがみをと人まろがよみけんなど思ふにいふもおろかなり。をまへのいけも。なにの心にてつけけるならむとゆかし。さやまのいけは。みくりといふうたのげにおかしうおぼゆるにやあらん。こひぬまの

いけ。はらの池は。たまもなかりそとよみけむいとおかし。ますだのいけ。すがたの池。井は。はしり井。あふさかなるがおかしき也。山の井など。さしもあさきたとへになりはじめけむ。あすか井は。みまぐさもよしとほめられたるこそおかしけれ。ほりかねの井。たまの井。少將井。さくら井。きさいまちの井。市は。たつのいち。つばいち。やまとおほかる所のなかに。はつせにまうづる人のかならずとまりけるが。観音の御しるしあらはるゝ所にやと思ふに心ことなるなり。おふちのいち。しかまの市。あすかのいち。いへは。このゑの御かど。二條あたり。一條もよし。すぐく院。かも院。をののみや。すがはらの院。こうばいどの。あがたのみと。そめどの。れいせい院。とう三條。こ六條。



神は。松のを。やはたは。むかし御かどにて  
おはしましけむこそめでたくおかしけれ。行  
幸にきのはなにてたてまつるよ。ひらのゝいが  
きにくすのいとおほくはひとりしに。つらゆ  
きが。秋にはあへずとよみたるこそ思ひいで  
られておかしかりしか。かすが。すみよし。  
佛は。やくし。如いりんの人をわたしわ  
づらひて。つらづえつきてなげき給へる。いと  
あはれにかたじけなし。地さう。がう三世  
は。みめこそおそろしげにおはすれど。御ちか  
ひいとあはれにたのもし。だらにも。いとつき  
づきしかめり。經は。法華經。品は。方  
便品。やくさうゆ品。だいば品。六のま  
きはさながら。仁王經の下局。壽命經。  
だらには。阿彌陀大壽尊ぞ尊せう尊だらに。すい  
ぐ求だらに。千手求だらに。す法ほうは。な  
らがただらによむさまも。なまめかしうやさ

し。大のとくのもいとおかし。寺は。つば  
さか。いしやま。かさぎ。ほうりん。兩  
山は。さかほとけの御ちう處のなににたるが  
あはれなるなり。こが阿は。しが。文は。  
文選。文集。こそむもおもしろし。集は。  
万えふ集。古今。物がたりは。すみよ  
し。うつぼのるい。殿づくり。くにうつり  
はにくし。とほ君。月まつ女。こまのは。  
くひものまうくるぞにくき。むもれ木。か  
はほりの宮。ど經は夕暮。だらにはあか  
月。あそびはよる。人のかほみえぬほどはよ  
し。法華經はふだん。時は。さる。とり。  
ね。うし。せ經説のかうしは。かほよきつとよも  
るほどにこそ。とく事のたうとさもきこゆれ。  
ほかざまにむきぬればみゝにもいらす。つみ  
のふかさなれば。あからめせじとねんじゐた  
るにくさげなるもつみうる心地す。このこと

はとゞむべし。わかき時こそかやうのつみふ  
 かし事もよかりしか。おいてはいとおそろし。  
 冬のあふぎは。あか色のそめはぎ。かう  
 ぞめ。またしろきにつくりゑもよし。つら  
 ぬきざまはむかし。かはほりは。ほゝの木に  
 むらさきのかみ。かりぎぬは。うすか  
 う。とくさ。うす色もよし。さしぬきは。  
 むらさき。したがさねは。冬はかいねり。  
 さくら。夏は二ある。すはうもよし。そく  
 たいは。四位五位は冬。六位は夏。しら  
 がさねなどもよし。すべておとこは。うちぎは  
 なに色もきたれ。きぬはしろきはよし。くれ  
 なるものもきたれど。なをしろきはまさる。  
 女のうはぎは。うす色。ひとへは。こき。  
 あやのもんは。あふひ。あられち。おり  
 物は。むらさき。しろき。もえぎにかえ  
 でのおり枝をりたるもよし。から衣は。

冬はあか色。夏は二ある。秋はかれ色。も  
 は。おほうみ。かざみは。つゝじ。さく  
 ら。うすやうは。しろき。むらさき。あ  
 かし。かりやすぞめのあをきもよし。すど  
 りのはこは。かさねず。まきゑにとりをもん  
 にしたるよし。ふでは。ふゆげみめもよ  
 し。すみは。まろなる。くしのはこ  
 は。ばん<sup>聖給</sup>ゑよし。かざみは。四寸五分。  
 夏のしつらひは。よる。冬のしつらひは。ひ  
 る。まきゑは。からくさ。火おけは。あ  
 かい。あをいろ。しろきにつくりゑもよ  
 し。たゝみは。かう<sup>候</sup>らいはし。又きなる  
 ちのはしもよし。び<sup>候</sup>らう<sup>毛</sup>げは。のどやかにや  
 りたる。あじろははしらせたる。さきうちおい  
 ても。人のいへのかどのまへよりなど。ふとみ  
 やるほどもなくすぎて。ともの人のはしるば  
 かりぞみゆる。たれなりつらんとおもふこそ

おかしけれ。　したすだれは。　むらさきの

すそご。つぎにはすはうもよし。　むまは。

いとくろきがかたのわたりたゞすこし白き。

むらさきのもんつきたるあしげ。うすこうば

いのいろにて。おがみなどはいとしろきは。

げにゆふかみともいひつべしかし。又ひたひ

くろきが。あし四しろきもおかし。うしは。

いとくろきが。はらのした。あしのさき。おの

すそなどしろき。　ねこは。　うへのかぎり

くろくて。はらの下は。しろきもよし。　ち

ごとわかき人とは。こゑたるよし。　ざうし

きすい<sup>脚</sup>身は。やせほそきよき。人もおとこは

わかきほどはやせ／＼なるこそよけれ。いた

うこゑたるは。ねぶたかるらんと見えて。おと

なびてすらう<sup>孝</sup>などになりなむおりは。こゑふ

とりたらむよし。　こどねりわらはは。ちいさ

くてかみうるはしく。すそさはらかにいろな

るが。こゑらう／＼しき物から。わかやかに

て。うちかしこまりて。ものなどいひたるこそ

おかしけれ。うしかひは。かみあら／＼かに。か

ほあからかにておほきなる。　ほうしは。こ

とすくななるおとこだに。あまりつき／＼し

きはにくし。されどそれはさてもやあらむ。

女は。おほどかなる。したの心はともかくもあ

れ。うはべはこめかしきは。まづらうたげにこ

そみゆれ。いみじきそら事を人にいひつけら

れなどしたれども。みち／＼しくあらがひわ

きまへなどはせで。たゞうちなきてゐたれば。

みる人もおのづから心ぐるしうて。ことはり

つかし。　女<sup>恭</sup>のあそびは。ふるめかしけれど

も。　らんご<sup>恭</sup>。　けふせき。　すぐろくはしら

き。　へんつくもよし。　おとこのあそびは。

こゆみ。さまあしきやうなれども。まりもみ

どころあり。　ゐんふたぎ。　すぐろくはてう

ばみ。まひは。たいへいらく。たちぞう  
 たてあれど。いとおかし。らくそんふたりし  
 てまふは。まさりておもしろし。こんろん  
 ばとうは。かみふりかけたるほどは心にき  
 に。あふぎたるまみいとうとまし。されどが  
 くのおもしろき也。わうざう。すさまじけれ  
 どもあはれなり。又もとめこ。するがまひ。  
 いみじうおもしろし。こまうたもおかし。  
 ひきものは。びは。さうのこと。しらべ  
 は。ふかうでう。わうじきてう。れう王  
 のはきう。とりのはきう。そかうのはき  
 う。はるのうぐひすのさえづりといふがく  
 も。いとおもしろし。さうふれん。ふきも  
 のは。よこぶえいとおかし。とをくよりきこ  
 えたるも。ちかくなりもてゆくもいとおかし。  
 ちかかりつるが。いととをくなりゆきて。は  
 るかにきこえたるもす。べておかし。くるまに

てもむまにても。すべてふところにさしいれ  
 たるもなにとも見えず。さばかりおかしきも  
 のはなし。ましてきしりたるてうしなどは。  
 いとくめでたし。あか月などにいづる人の  
 わすれたりけるが。まくらのもとなどにあり  
 けるを見つけたるも。いみじうこそおかしけ  
 れ。人のとりををこせたるををしつつみてや  
 るも。たてぶみのやうにみえて。いとつきく  
 し。さうのふえは。とをき月のあかきに。  
 くるまなどにてふきたるはおかしけれど。と  
 ころせくもてあつかひにくげにぞみえたる。  
 さてふくかほやいかにぞや。それはよこぶえ  
 もふきなしにありかし。ひちりきは。いと  
 かしがましう。秋のむしといはゞ。くつはむし  
 などの心地して。うたてけちかくきかまほし  
 からず。ましてわろくふきたるはいとにくき  
 に。りんじのまつりの日まだごせにはいでは



てぞ。もののうしろにて。よこぶえをいみじ  
う吹たてるを。あなおもしろときゝたまふほ  
どに。なからばかりよりうちつけて。吹のぼ  
らせたるほどこそ。たゞいみじううるはしき。  
かみもたらむ人もたちあがりぬべき心地す  
れ。やう／＼ことふえしらべあはせてあゆみ  
いでたるほど。せむかたなくおもしろし。

日はいり口。月はあるあけ。雲はむらさ  
き。風吹日のあま雲。日いりはてたる山ざ

はのまだなごりとまれるに。うすき<sup>青</sup>ばみたる  
雲のはそくたなびきたるいとあはれなり。  
いまあけはなるゝほど。くろき雲のやう／＼  
きえて。しろくなりゆくおかし。あしたにさ  
るいろとかや。ふみにもつくりためる。

ゆきは。ひはだや。しぐれあられはいた  
や。冬はゆきあられがちにこほりし。かせ  
はげしくて。いみじうさむきよし。夏は日い

たうてり。あふぎなどもかたときもうちをか  
ず。たへがたうあつきぞよき。なのめなるはわ  
ろし。つかさは。左右大將。權大納言。權  
中納言。宰相中將。三位中將。春宮大夫。

中宮のもあしからず。じゝうの中納言。

殿上人は。權中將。四位の侍從。弁少將。  
くら人の弁。四位少將。すらうは。いよ

のかみ。きのかみ。いづみのかみ。やまと  
のかみ。權守は。しもづけ。かひ。ゑ

ちご。あは。やどりづかさならで。たゞか

うぶりえたるは。式部大夫。左衛門大夫ぞ  
よきかし。やまひは。むね。あしのけ。

さては。其こととなく物くはでなやみたる。

女の宮づかへ所は。きさいの宮。一品宮。

齋院宮。つみふかけれどおかし。ましてこのご

ろのはめでたし。みものは。行幸さらな

り。春のも冬のもりんじのまつりいとなま

めかしうおかし。まつりのかへさ。あをむまは。おほ<sup>多</sup>うはうちにてみるは。いとせばきへいのうちなれば。とねりどものかはのきぬきもあらはれて。しろきものより<sup>侍</sup>つかぬ所は。くろきにはにゆきのむらぎえたる心地してみぐるし。むまのあまりちかくて。あがりさはぐもいとおそろしくて。よくもみずひきいられぬかし。

正月一日。三月三日。うらゝかにてりたる。五月五日は。やがて日一日くもりくらしたる。七月七日は。つとめてひるまではくもりて。夕がたよりはれて。やう／＼そらに雲なくなりもてゆきて。くれはつれば月いとあかく。ましてよふくるまゝに。ほしのすがたあらはにみえたるこそおかしけれ。九月九日は。あか月がたより雨すこしふりて。菊の露もこちたくおほひたるわたなど。いたうぬれた

るぞ。うつしのかまさりておかしき。つとめてはやみたれど。そらはなをくもりて。やゝもせば。ふりおちぬべくみえたる。いとおかし。めでたきもの。后宮はじめ。又やがて御うぶやのありさま行けいのおりなど御こしよせて名たいめんなどしたるほどいとめでたし。そのころ一の人の御かすがまうで。さらぬ御ありきもめでたし。今上一宮などやうにやむごとなきみこたちのまだわらはにはおはしますをいただきあつかひたてまつる。御おほ<sup>父</sup>ちはさらなり。おちなどにても。見たてまつりたまへる氣色こそよにめでたけれ。御むまひかせて御らんじ。殿上人くら人などめしつかひあそばせ給ふほどなど。よそ人もみたまつるは。げにこそまづえましけれ。した地のらでんのはこ。からくみ。よくそめたるむらごのいとひきときてみたる心地。から

にしき。かざりだち。六位くら人。いみじき  
君だちといへど。えしもき給はぬあやをり物  
を心にまかせてきるよりはじめて。御かどに  
ちかくなれつかうまつるさまなどのいとめで  
たき也。御ふみかゝせ給へば。御すぢりのす  
みする。夏は御うちはまいる。そのみなら  
すいとめざましきまで。みゆることどもこそ  
おほかれ。又<sup>持</sup>ち<sup>經</sup>きやう者いとあはれにめで  
たし。さるべき所の御ど經にさぶらひても。又  
こゝかしこのてらにこもりなどしてきくに  
も。をのづからくらきおりにゐあひたるにみ  
な人はえよまで聲やみたる。ゆる／＼ととど  
こほる所もなくよみいだしたるは。まことに  
めでたくこそおほゆれ。又身のざえ<sup>オ</sup>あるお  
とこ。めでたしといふもおろか也。かほもに  
くげに。ことなる事なき下らうなれども。や  
むごとなきさもあるべきことなどはせたま

ひなどするおりはちかづきまいりぬかし。ま  
して御ふみの師にてさぶらふはかせなどは。  
かぎりなくうら山しくめでたくこそおほゆ  
れ。じよ<sup>序</sup>へう<sup>其</sup>ちよくたうなどつくりいだして  
ほめらるゝいとめでたし。ほうしのざえあ  
るもさらなり。すべて／＼いふべきにもあら  
ずめでたし。ひろきにはにゆきのおほうふ  
りたる。ようをりたるゑびぞめのをり物。す  
べてはなもいともかみもむらさきなるめでた  
し。そのなかにはかいつばたぞすこしにくき。  
されどそれもいろはめでたし。なまめかし  
き物。ほそやかにかたちよききんだちのな  
をしすがた。おかしげなるわらはのわざと  
こと／＼しき。うへのはかまなどはきてほこ  
ろびがちなるかざみばかりきて。うづ<sup>卯</sup>ち<sup>國</sup>くす  
だま<sup>玉</sup>などうちつけて。あふぎさしかくしなど  
して。かうらんそりはしなどあるきたる。い

となまめかし。うすやう。いまもえいでたるやなぎの枝に。あをきうすやうにかきたるふみつけたる。みへがさねのあふぎ。いつへになりぬればあまりあつくともなどにくげなり。よくさきたるふぢの松にかゝれる。おかしげなる人の夏の木丁のうらうちかけて。そひふしたるすきかげ。こききぬのつやゝかなるなどきて。すどりひきよせて。手ならひなどしたる。かたちよきを小忌みの君だちの日かげのくみかほなどにかゝりたるかたのほど。りんじのまつりのまひ人のほむびのを。かざしの花にゆきのすこしふりかゝりたる。ゑふゑふのくら人のあを色のとのゐすがた。ひ監げ能こおかしうしたる。ひわりこ。のりゆみ。いとあたらしうふりもせぬひはだやに。さうぶ能のいとながきふきわたしたる。あをやかなるみすの下よりくち木がたの木丁のわ

かやかにていでたるに。ひものかせに吹なびかされたる。つねの事なれどおかし。さやうなるすのまへ。かうらんなどに。おかしげなるねこのあかきく原びづなに。しろきふたつにてむらごのつな。いとながうひきてありくこそいとなまめかしうみゆれ。さつきのせちのあやめのくら人。さうぶのかづら。あかひものいろにはあらぬ根帯くたいひれなどしてたちなみきたまへるに。くすだまたてまつる。いみじうなまめかし。とりてこしにひきつけつゝ。ふたうしたまふも。いよ／＼なまめかし。灌佛のわらはのかたちよき。ほそだちにひらをつけたる。ふさながきふぢにつけたるふみもなまめかし。五せちのわらはは。べも。めもあやなる物。もくゑのさうのこのかざりたる。七ほうのたう。もくざうの佛のちいさき。うつくしき物。うり瓜にかきた



るちごのかほ。すゞめの子のねすなきする  
におどりくる。二ばかりのちごのいそぎて  
はひくるみちに。いとちいさきちりなどのあ  
りけるをみつて。いとおかしげなるを<sup>指</sup>よび  
にとらへて。おとなに見せてゑみたるいとお  
かし。うつくし。又あまそりなるほどのめ  
に。かみのいるをかきはやらで。うちかたぶ  
き物などみたるもうつくし。又はかまなど  
きたるが。たすきがけにゆいたる。こしのか  
みのしろくすきてありくもうつくし。おほ  
きにはあらぬ殿上わらはのさうぞきてありく  
もうつくし。おかしげなるちごをあからさ  
まにいだきてあそばしなどするほどに。かい  
つきてねぬるいとらうたし。ひゝなのてう  
ど。八九十などのおのここのこゑはおさな  
げにてふみよみたる。いとうつくし。ねた  
きもの。人のもとにこれよりやるも。又返事

にてもふみかきてやるに。つかひのいぬるの  
ちに。歌のもしを一二にても。さこそいふべ  
かりけれなど思ひなをしたる。とみの物ぬ  
ふに。かしこくぬいはてつと思ひて。はりひき  
いだすほどに。いとものしりをかためざりけれ  
ば。やがてぬけぬる。ひがぬ<sup>舞</sup>ひしたるもいとね  
たし。又<sup>長</sup>るたる所の庭にせんざいなどうへ  
てみるを。なが<sup>舞</sup>びつうちもたせて。すきなどひ  
きさげたる物ら。たゞいりにいりきて。せい  
するをもきゝいれず。ほりていぬるこそわび  
しくねたけれ。よろしきおとこなどのあるお  
りはさもせぬ物を。女どちはいみじういへど。  
たゞすこしばかりなどいひて。いぬるのちは  
いとかひなし。す<sup>舞</sup>らふなどの家にさるべき  
所のしもべなどいふもののかきて。なめげにあ  
さましげなる事どもいひて。さりとめわれを  
ばいかゞせむと思へる氣色。いとねたげなり。

又しのびたる人のふみもひきそばみてみるほ  
どに。うしろより人のはかにひきとられた  
る心ちいとわびし。庭にはしりなどしぬるを  
をひていけど。我はすの<sup>座</sup>もとにとまりぬれば。  
したりがほにひきあけてみたてるをうちにて  
みるこそいかにせむと。ねたくとひいでぬべ  
き心地すれ。又人のがりやるふみをと  
りたがへて。みすまじき人に見せたるつかひ。  
いとねたし。かゝるわざしたりなどいふをげに  
いとおしうあやまちけりなどはいはで。うち  
こはくうちいらへておるは。人めをだに思は  
ずばはしりもうちつべし。ものへゆくみち  
に。きよげなるおとこ車のあひたるなどをた  
そとみむなど思ふほどに。ふとすだれおろし  
てゆきちがひぬるこそねたけれ。はつせに  
まうでてつばねにゐたりしに。あやしきげず  
どもものうしろをさしまかせつゝゐなみたりし

こそいとねたかりしか。いみじき心を思ひお  
こしてまうでつきたるに川のおとなひのおそ  
ろしく。日くれはしをのぼる程などのおぼろ  
げならずこうじて。いつしか佛のおまへをと  
くみたてまつらむと思ふに。しろき衣きたる  
ほうしのみむしのやうなる物どもなどあつ  
まりて。たちゐぬかづきなどしてつゆばかり  
ところをかぬけしきなるは。まことにねた  
くてをしたふしもしつべき心地せしが。いづ  
くもそれはさぞあるかし。やむごとなき人の  
まうでこもらせ給へる御つばねのまへばかり  
をこそはらひなどもすれ。よろしき人のは。  
せいしわづらひぬべし。さはしりながら。な  
をさしあたりてさるおりは。いとねたきなり。  
かたはらいなき物。よくねもひきとゞめぬ  
ことをよくもしらべて。心のかぎりかきたて  
たる。まらうどのきて物などいふほどに。わ

が人にまれ。人のひとにまれ。うちとけたる  
事いひ。こはだかになどあるをえせいせでき  
きゐたる心地。いとかたはらいたし。又い  
みじううちとけてねたる人のけはひのちかき  
も。わりなくかたはらいたし。思ふ人の忍ひ  
てさかしらがり。おなじ事いたうしたう。

又きゝゐたるをしらで。人のうへいひたる。  
それはなにばかりの人のうへならず。つかふ  
人なれど。なをかたはらいたし。たびだちた  
る所などにて。げすどものおのがどちざれた  
はぶるゝを見る心地。にくげなるちごをお  
のが心地のかなしきまゝにうつくしみて。こ  
れがわれがまへにいひける事どもをかたりな  
どしたる。ざえある人のまへにて。なまじり  
の人の物おぼえごゑに人のなくといひたる。  
ことによしとおぼえぬわが歌を人にかたり  
て。人のほめし事などいふもかたはらいた

し。わざとむことりたるに。すまぬむこのえ  
さがたき所にて。さしあひたるしうとの心  
ち。あやなき物。さしぐしすりはててみが  
くほどにおりたる心地。のりたるくるまの  
うちかへしたる。さるおほのかなるものは。  
所せくやあらむと思ひしに。たゞゆめの心地  
して。あさましうあへなかりき。のりゆみ  
にいみじうねんする人のわなゝきて。ひさし  
うゆるしたるやのはづれたる。人のために  
はぢとあるべきことをあしき事とも思はず。  
つゝみもなくうちいひたる人。かならずきな  
むと思人をまつとて。夜ひとよおきあかして。  
あか月がたにいさゝかうちわすれてねいりた  
るに。からすのいとちかうなく聲にうちおど  
ろきてみあげたればひるになりける。いみ  
じうあへなし。こ<sup>手</sup>う<sup>打</sup>つに。しにたるいしをさ<sup>上</sup>  
うずめきておきたるほどに。あやまちて人の

はいき。わがはしにてみなひろはれたる心地。  
無下にしらすみぬ事をさしむかひて。あらが  
はすべうもあらずいひたる。物うちこぼし  
たるもいとあさまし。てうば<sup>調食</sup>みうつに。上手  
めきててはたてたるが。かけられて。そのほ  
どにてうどもうちしきりて。やがてみなかけ  
とられぬる。くちおしき物。五せち佛名  
などにゆきはふらで雨のかきたれてふりくら  
したる。さるべきせちゑなどの御物いみに  
あたりたる。いと見かはしていつしかとま  
つことのにはかにさはりいできてとまりぬ  
る。まめごとになれ。あそび事にまれ。みす  
べきことありて。よびにやりたる人のこぬ。  
いとくちおし。宮づかへ所などよりおなじ  
やうなる人々ぐして。物まうでにまれ。さら  
でもさうぞくこのまじうして。のりこぼれて  
ものへゆくに。さるべき人の馬にてもくるま

にても。ゆきあひてみえずなりぬる。くちお  
し。わびてはげすなどもすぎくしき心あ  
りて。人などにもうちかたりなどしつべから  
んをがなと。おとも女もほうしもなど思も。  
けしからぬ心なるべし。ゆくすゑはるかな  
る物。はひのをひねりはじむる。みちのく  
へゆく人のあふさかのせきこゆるほど。む  
まれたるちごの七日ばかりになるほど。大は  
んにやのど經のひとりしてはじめたる。千  
日のさうじ<sup>精造</sup>はじむる。いひにくき物。人  
のせうそこのながき。ましてよき人のおほせ  
ごとなどのおほかるを。はしよりおくまで。つ  
いで<sup>い</sup>のまゝにはいいいひにくし。又返事まう  
す。はたいますこしいひにくし。はづかしき  
人のもとよりものおこせたる返事。おとな  
になりたる子の思はずなる事きくも。まへに  
てはいひにくし。



いやしげなる物。式部のせう丞の尺。くろき

かみのすぢあしき。くろぬりのだい。むしろばりのくるまのおそひ。しげううちたる。

ぬの屏風のあたらしき。ふりくろみたるは。

なか／＼なにともみえずなどして。いゝどり

ゑがきたるが。さみゆるなり。やりど。づ

し。い伊興よ雲すのすぢふとき。ぬなかこぼうし

のふとりたる。まことのい出雲づもむしろのた

たみ。ゆ報負げいのすけのかりぎぬすがた。

むねつぶるゝ物。くらべまみる。もとゆ

いよる。おやにまれ。こにまれ。おほかたわ

が大事におもふ人の心地あしなどいひて。れ

いならぬ氣色なる。まして世のなかさはがし

などきこゆるおりは。よろづおぼえず。思ふ

人のさすがあらはれてはあらぬが。あらむと

もしらぬに。こと人々にまじりてものいふ聲

きゝつけたる。又さらねどおほかたにて。人

のその人の事などいひでたるにも。まづこそ

つぶるれ。いみじくにくき人のあるをふと

みつけたるにもつぶるかし。とにもかくにも。

あやしうつぶれがちなるものは。むねこそあ

れ。まづはじめてきたる人のつとめてのふみ

のおそきは。ひとのうへにてもつぶる。思ふ

人などのふみは。さしいでたるをみるにも。

なをつぶるゝこそあやしけれ。きよらにと

思ふもの。はりておもしろくをきたる。と

をきゐ中に思ふ人おきたるおりに。そらごと

にてもゆゝしき事きゝたる。人ばへする

物。しはぶき。はづかしき人にもいひはむと

するに。まづさきにたつこそあやしけれ。さ

とびたる人の子のさすがにおごりたる。四五

なるゆかしかりける物を。あれにみせよや。

はゝなどひきゆるがすを。おとなどちものい

ふとて。ふときゝいれねば。おそばへて身づ

からひきいでて見るこそにくけれ。それをま  
なともけいせず。とりもかくさで。さなせそ  
そなふなとばかりうちゑみていふおやもに  
くし。われはたはしたなくも。いはでみるこ  
そわびしけれ。

おそろしきもの。あをぶち。たちのほら。

はたはたくろち。つちくれ。いかづちは

なのみならず。いみじうおそろし。はやち。

ふさうぐも。ほこぼし。うしはざめ。ら

うそく。をさいかりなのみならず。みるも

おそろし。ひちかさあめ。くちなはいち

ご。おにところ。いきすだま。からたち

のむばら。なはしろあらだ。人だま。く

まだか。おほかみ。うしおに。つのむし。

はたほこ。ほこ。たち。さるまろ。

みるはことなる事なきものの。もじにかきて

ことくしきは。いちご。露くさ。水ふ

うき。こもくろめ。やまも。いたどり

はましてとらのつゑとなむかきたるとか。つ

ゑなくともありぬべきかほつきぞかし。こ

くは。くるみ。あふしち。むづかしげ

なる物。ぬいもののうら。ねずみのこのま

だけおひぬ。もゝほとき。うらまだつけ

ぬかはぎぬのぬいめ。ねこのみゝのうち。

ことにきよげならぬ所のくらきに。ことなる

事なき人のちいさき子どもあまたもたりて。

あつかひぬたる心ざし。いとふかくもあらぬ

めなどのこ。心地あしがりて。ひさしうなや

みたるも。おとこの心地むづかしかるべし。

ゑせものところゆるおり。正月のおほね。

おなじ三日のくすりこ。大がくのすのあ

ゆみ。行幸の<sup>節</sup>のひめまちぎみ。六月十

二月のつごもりのよ<sup>節</sup>の命婦。きのみど

經の<sup>節</sup>のすいぎし。あかげさきてそうのな

よみあげなどしたる氣色。いときら／＼しか  
めり。七月のすまひ人。みやのへのいをど  
も。かたさけみさるのこすりこ。御讀經佛  
名などのおりの御さうわくしのたきぐち。

かすがのまつりにたつ所のとねり。うづゑ  
のほうし。たいぎやうのおりのしさう。雨  
ふる日。行幸のいちめがさ。五せち御前の心  
みの夜の御くしあげ。せちゑの御まかなひ  
のうねべ。わたりするおりのかとり。

くるしげなる物。二ところかよひするおと  
こ。こなたかなたふすべられて。いづかたに  
も心とどむと思ひまどひたる氣色。いとくる  
しげなり。夜なきするちごのめのと。こは  
きものけにあづかりたるげんざ<sup>髪音</sup>。げんだに  
まことにはやくはよかるべきに。さしもあら  
ぬを。人わらはれならじとて。念じいりてか  
ぢしたる。いとくるしげなり。わりなく物う

たがひするおとこに思はるゝおんな。心い  
られしたる人。ひとの所のさるべき人にて。  
時にあひたる人も。やすらかにはあらざめり  
かし。それはくるしきにつきてもよし。

うらやましき物。經ならふとていみじうた  
どたどしくわすれがちにて。返々おなじ事の  
みよまるゝに。ほうしはことほり。おとこも  
女もくる／＼とやすらかによみたる人こそあ  
れ。かやうにいかならむおりあらむとすらむ  
と。わびしううらやましうおぼゆれ。心地  
などあしうわづらふことありて。ふしたるお  
りに。思ふことなげにて。うちわらひなどし  
て。心ちよげなる人。いとうらやまし。いな  
りまうでするおりに。なかのみやしるのほど。  
たえがたくくるしきを思ひをこしてやう／＼  
のぼるに。こよなうおくれてくる人のいさゝ  
かことども思ひたえて。する／＼とさしあゆ

みつゝ。たゞさきだちにさきだちぬる。つねはさしもめでたかるまじき事なれど。そのおりにあたりては。あなうらやましとおぼゆ。六月のむまの日あか月にといそぎしかど。さがのなからばかりあゆみしかば。三ときばかりにきやうくあつくなるまゝに。まことにわびしくなごやからで。よき人もあらむものを。なにしにまうでつらむとなみだもおつるまでおぼゆれば。しばしはやすむとてゐたるに。とし四十よばかりなる女のつばさうぞくにはあらで。たゞひきはづみたるが。なゝたびまうでし侍なり。三たびはまうでぬ。いまよたびはことにも侍らず。ひつじの時には。<sup>回向</sup>ゑこうし侍ぬべしとしりたる人にや。みちにあひたる人に。うちいひかけてくだりゆきしが。うしろみやりしが。たゞいまあれが身にならばやと。まことにうくおぼえしなり。お

とこにても女にてもほうしにてもよきこたゑる人は。いみじううらやまし。かみいみじうながうきよらなる人も。うたもその人こそさりともと人にしられて。さるべき事のおりにも。まづとりいでらるゝ人。いとうらやまし。よき所にさぶらふ人おほかるなかにも。さるべきこゝろはづかしき所などにつかはすべきおほせがきなど。おまへにあまたさぶらふを。さしおきてしもなるをめて。御すざりとおりおろし。かみなどたまはせて。かゝせさせ給ふなどは。うらやましかりぬべきことぞかし。さやうの事は。その所のおとななどになりぬれば。いとしもすぐれぬど。をのづからとにしたがひてかく物なり。されどこれはさやうにはあらず。うときかむだちめなどのさうさせ給ふ事あるなり。ことしは心にくき人のむすめのはじめてまいらんなど。まどすが<sup>う</sup>



りつかはすがことなり。たれもいととりのあとのやうにしもやはある。されどとりわかせ給はなをことなるにこそはと見ゆれば。あつまりてたはぶれにもねたがりいひうらやむなり。うち。春宮の御めのと。うへの女ばうなどのいづくにもないけゆるされて。うちかよひまいりたるもうらやましかし。寺つくりいでて三まいなどして。よひあかつきにごわう大じといのらるゝ人。かぎりなくうらやまし。又まことにこの世はなれたりとみゆるひじり。いとうらやまし。いとさばかりのきはにはあらねど。すぐろくうつおり。かたきのさいきゝたるこそうらやましかし。下らうのなかには。女はとのもづかさ。おとこはすい身ぞあやしう。さてもありなむかしとうらやましくおぼゆれ。とくゆかしき物。むらごくゝりぞめ。まさぞめなどそめはてたる。

人のこうみたるおのこゝ女ご。よきひとのほさらにもいはず。たゞことなる事なきげすなとのさへこそゆかしくて。なにぞとはとほるれ。陰目ちもくのつとめて。しる人のなるべきあるおりはさらなり。さらぬおりもまづきかまほしうて。たづねらるかし。ゑりぐさをきてそゝぐも。そめはぎ。かいねりうたせたるをもてきたる。おもふ人のふみ。心もとなき物。我はかくれゐて。しられじと思ふ人のきたるに。まへなる人にをしへてものいはせて。きゝゐたる心ち。とみの物。人のもとにぬいにやりてまつほどの心ち。ものみにいそぎ出たるに。いまや／＼とひさしくゐいりて。そなたをまもらへたる心ち。又まだしからむとたゆみてをそくいでたるに。ことなりにけりととくたちにくるくまどものはざまよりあかぎぬきたるもの。しろきしもと

さゝげたるをみつて。いそぎてやりよする  
ほどわびしう。をりてもいぬべき心地す。

子うむべき人のほどすぐるまでさる氣色な  
き。とをきほどより思ふ人のふみをくらき

ほどにもてきたる。火ともすほどまつこそわ  
りなく心もとなけれ。かたくふじたるそくい  
などあくるほども。いと心もとなし。いつし

かなと思ふちごの。いか。<sup>又十日</sup>も、かなどになり

たるほどのゆくすゑいと心もとなし。とみの  
物ぬふに。なまくらふてはりにいとつくる。

されどわれはさる物にて。ぬふべき所をとら

へて人につけさするに。それもいそげばにや  
あらん。とみにもみつけぬを。いでさはとゝ

へど。さすがになどてかと思ふほどに。みさ

せぬはにくささへそひたり。なに事にてまれ  
いそぎてものへゆくべきに。まづさるべき所

へ。いつとてたゞいまをこせんとて。人のい

ぬるくるまをまつほどこそいとこゝろもとな  
けれ。おほぢいきけるを。それななりとよろ  
こびたれば。ほかざまへいぬる。いとくちお  
し。まして物見にいでむとするに。ことはなり  
ぬらんなどいふこそいとわびしけれ。子うみ  
たるにのちの物のひさしき。又物みてらまう  
でなどに。もろともにあるべき人のせんにゆ  
きてくるまをさしよせたるに。とみにものら  
で。しばしなどいひてまたするも。いと心も  
となく。うちすてゝもいぬべき心ちす。又と  
みにていりすみおこすも心もとなし。人の歌  
のかへしすべきが。とみによみいでられぬほ  
ど。いと心もとなし。けさう人などは。いとさ  
しもいそぐまじけれど。をのづから又さるべ  
きおりもあり。まして女どもうちいひかは  
す事は。ときこそよけれ。心ちあしうてもの  
のおそろしきおりなどに夜のあくるまつ。い

と心もとなし。にわかにわづらふ人のあるにげんざもとめにやりてまつほど。へんつくかた人にて。持にもありもしはかちもしぬべきに。へんの一あるを心よせの人にくくばせてえさすれど。とみにみつけぬほどこそわすれてをよびもさしいでて。をしへつべくおぼゆれ。ふたあゐのあふぎそで。さだまりてにくき物。めのとのおとこ。むかしおぼえてふようなるもの。ふぢのかゝりたる松のかれたる。もかうのすのへりなき。くち木がたの木丁のきばみたる。からあやのびやう風のおもてそこなはれたる。ゑ師のめくらくなりたる。ちすりのものはなかへりたる。七尺のかつらのあかみたる。えびぞめのおりものゝはひかへりたる。いろごのみのおいくづをれたる。おもしろき家のやけて。木だちうせたる。いけなどはあれど。

うき草みぐさしげければ。そのものともみえずかし。とをくてちかき物。ごくらく。くらまのつゞらおり。しはすのつごもりと。正月一日と。宮のべのまつり。ちかくてとをき物。思はぬはらからのなか。めおともさぞある。舟のみち。たのもしき物。心地わづらふにすはうはじめたる。やむ事なきごく経のほう。たのもしげなき物。六位のかしら白き。風はやき日。ほかけてはしらする舟。心みじかう人わすれがちなりときく人を。むこにとりたるが夜がれがちなる。そらごとする人のさすがに人のことなしがほにて。たしうけたる。としいたうおいたる人の心地あしうしてひさしうなりぬる。一ばんにかちぬるすぐろく。こゝろにくき物。物へだてゝきくに。女房のとはおぼえぬてのおと。しのびやかにきこ

へたるに。こたへてうちそよめきたる。人の  
まいるけはひする。又ものまいりなどする  
に。はし。かひなどのとりませられてなりた  
る。心にくし。ひさげのえのたふれふすおと  
も。耳こそとまれ。よき人の家の中門にびら  
うげの車のしろくきよげなるに。すはうの下  
すだれのはひよきほどにて。あざやかなる  
かけて。しぢにうちおきてたてるこそ。もの  
へゆくみちにかどのまへわたりてみいたる  
に。いみじう心にくけれ。四位五位などした  
がさねのしりはさみて。尺のいとしろき。かた  
はらにうちおきて。とかくうちさまよふも。  
又すい身のさうぞくきよらかなるが。つばや  
なくひなどもちて。いでいりなどしたる。い  
とつき／＼し。女のきよげなるがさしいでて。  
なにがしどのゝ人やさぶらふといふ。おかし  
くおくゆかしきに。とくゆきすぎぬるこそく

ちおしけれ。又さればみたる家のかどに。む  
かひたるたてじとみひきやりて。たゞいまく  
るまのいでける氣色しるくて。ひろびさしつ  
まどぐちなどに。四尺の木丁のかたびらのあ  
ざやかなるなど。こなたかなたにうるはしか  
らすついたてなどしたるも。いかなる人のす  
みかにななどこそおかしう見られしか。  
又さしぬきの色こまやかにて。かいねり山ぶ  
きなど。いろ／＼にぬぎかけこぼしたる人の  
しろきあふぎのつらぬかぬをてまさぐりにし  
て。つまどのまへにわらうだうちおきてゐた  
るをみいるゝも心にくし。又七八。それより  
ちいさきなども。ちごどものはしりあそぶな  
どが。ちいさきゆみしもとこぐるまなどやう  
なる物さげあそびたる。いとうつくしう。く  
るまとどめてもいだきいれまほし。たき物の  
かのかざれたるもいと心にくし。又しつらひ



よくしたる所のなに事にかあらむすることあるかたに。君はおはしませば。こなたには人もなくて。まだ御かうしなどもまいらぬに。ながすびつに火をいとおほくおこしたれば。その光のいとあかきに。もやのみすのもかう。御丁のかたびらひもなどのいとつやゝかに。そばゝよりみいれたるこそめでたく心にくけれ。またしうもおはしまし。人々もさぶらふに。うちの人内侍のすけなどのはづかしげなるがまいりたるとき。御まへちかくて御ものがたりなどある程。御となぶらも物のかくれにとりやりなどしたれど。すびつひおけの火ばかりには。ものゝあやめもいとよろしうみゆれ。心にくきいままいりのしそくさせて御らんするきにはあらぬが。まいりたるもさやうにぞあるべき。よふけて人のこゑもせず。みなおほとのごもりたる氣色なるに。

とのかたに殿上人としづやかに物がたりしつゝゐたるに。いとおくふかうはあらず。ごいしけにいしのいるをとのしたるこそ心にくけれ。火とりのはしかひのなりたるをともおかし。又いとよくなるびはをつとをさへて。ねもいださぬ物から。つまびきに心とどめてひきたるを物へだてゝきゝたるも。まだねざりけると思ふにいとこゝろにくし。あざやかなるかいねりにかみのおもやかにふりやられたるをと。よひにまいりたるそうをあらはなるとらせたるに。聲もせねば。いぎたなうねたるなめりと思ひて。これかれ物いひ人のうへほめそしりもしたるに。すゝのすがりの心にもにあらず。ころもの袖たもとけうこくなどにあたりてなりたるこそ心にくけれ。よくてうじたるひをけに。はひのきはきよげにみえて。火

おこしたれば。うちにかきたる梅のおり枝な  
どのけざやかにみえたるこそおかしけれ。火  
ばしのいときはやかにきらめきて。すぢかひ  
てたちたるもおかし。おほかた火はともさ  
で木丁をしやりて。びるはさしもむかはぬ人  
なれど。うちのかたにそひふしたるうしろつ  
きなどのよさあしさはしらす心にくし。夏  
すのこに火ともしたるうちこそ心にくけれ。  
木丁のひとつへうちかけて人のふしたるをさし  
のぞきてみたるいと心にくし。きたなき  
物。殿上のが<sup>合子</sup>うし。なめくぢ。みゝす。  
ふと心おとりしてわろくおぼゆる物。こと葉  
わろくこはづかひあやしき人のいやしきこと  
もさとはしりながら。ことさらにいひたるは  
とみゆるは。されどさしもあらず。わがもと  
いひつたりけることばをなだらかにふとつ  
つみもなくうちいでたるは。あさましきわざ

なり。又さしもあるまじくあいたる人のわざ  
とつくろひ。ことさらびたるもにくし。ま  
さなくあやしき事をとしなどおとななる人  
は。まのもなくいひたるを。わかきひとはい  
みじうかたはらいなきことにきえいり思ひた  
るこそさるべき事なれ。ないがしろなる  
物。女官のかみあげすがた。かはのひじり  
の物いひ。  
夜まさりする物。こきかいねり。むしりた  
るわた。ひたひはれてかみうるはしき人。  
かたちわろき人のけはひよき。きむの聲。  
ほかげおとりする物。ふぢの花。むらさき  
のをり物。すべてその色の物はさぞある。く  
れなるのは。月夜こそわるき。さはがしき  
物。いたやのうへにとぎのさ<sup>寝</sup>はうちあげた  
る。なまけしからぬ人のゑひたる。あま夜  
の夢。つじかせ。せんざいやくとて火つけ

たるに風の吹たる。　ろうさうはりてはなつ  
ほど。　さがなきむまのはなれたる。　思ひか  
けぬほどにいくよりにかあらむさるのほな  
れていきたる。いと心あはたゞし。

心ゆるいなき物。　子こうむべきほどちくな

りて。うちわたりなどのつぼねにある人。　お  
いたるおやのあつしきもたる人。　あはたゞ

しうはふほどのちごもたる人。　いろごのみ  
なるおともたる人。　ものゝけつきそめぬ

る人。　舟のみち。

つれづれなる物。　所さりたる物いみ。　輪目ちも

くのあしたにつかさえぬ人の家。　むまおり  
ぬすぐろく。　物のあはれしりがほなる物。

はなたりしたるおり。　かつはななみつゝ物

いふけはひ。　山勢わさびくふ。　まゆぬくも。

たゆまるゝ物。　さうじんの日のおこなひ。

日とをきいそぎ。　てらにひさしうこもりた

る。　人にあなづらるゝ物。　人の家の北おも  
て。　よろしとてかどあけそめぬる物いみ。

あまり心よしと人にしらぬる人。　ついひ

ぢのくづれ。　心あはゝしきをんな。　よう

しといふかみ。

（舊本以下下巻）  
すさまじき物。　はるのあじろ。　ひるほゆる

いぬ。　四月ばかりのこうばいのきぬ。　九月

のしらがさね。　火おこさぬすびつひをけ。

わざとむかへたるにちあへぬめのと。　うし

しにたるうしかひ。　ちごなくなりぬるうぶ

や。　博士はかせの家の女ご。　ましてうちしきりて

むまれたる。　はたいふべきにもあらずかし。

かたがへ。　物いみなどしにゆきたる所のあ

るじなき。　ゐなかぶみの物なき。　京のをもさ

や思ふらん。　されどそれはおぼつかなくゆか

しき事。　そのころ世にあることなどをかきあ

つめたるをみて。　なぐさむらんかし。　又人のも

とにたて文にまれ。むすび文にまれ。わざと  
きよげにと思ひて。したてゝやりたるふみを  
返事もてくるめりと思ひて見るに。ありつる  
おなじふみのうへに。ひきわたしつるすみも  
きゆるまで。いみじうきたなげにとりふくめ  
て。おはしまさざりけりともしはかたき  
御物いみにてなんなどいひてもてきたる。す  
さまじさこそかぎりなけれ。又かならずくべ  
き人と思ひて。むかへにくるまやりていつし  
かとまつに。いりくるをとすれば。さななり  
と思ひてみれば。くるま車やどり宿ざまにやりい  
れて。ながえほうとうちおくを。いかなりつ  
るぞととへば。ほかへおはしましにけりともし。  
又けふはさほる事ありてといひて。うしのか  
ぎりひきいでていぬるこそあさまじうすさま  
じけれ。ましてちごのめのもとなど。あからさ  
まとて。いでぬれば。とかくあそばしまじら

はしてまつに。こよひはえまいらじなどいひ  
たる。すさまじきのみならず。心地もいとむ  
づかし。又おやなどゐたる家の内の大事にか  
ぎりなくいそぎたてゝ。むことりたるむこの  
いくばくのほどへすこそなりぬるこそすさま  
じともよのつねなれ。なまねぶたきに。いと  
おもはしからぬ人のをしおこしつゝ。せめて  
物いふこそいみじうすさまじけれ。まつ人  
あるおりに。よすこしふけてかどたゝけば。  
さにこそあらめとうたがひなく思ひて人い  
だしたるに。こと人のあらぬなのりうちして  
きたるこそすさまじといふなかに。返々す  
まじけれ。げんざのものゝけうつすとて。  
いみじうしたりがほにとこす蜀などうつるべ  
き人にもたせて。せみごゑいだし二ときばか  
りかぢしゐたるに。いさゝかさりげもなく。  
こ誤ほうだ法につかねば。おほくのだらにをよみ



こうじて。さらにつかすふようなめり。いと  
はかなしやとて。とらせつる物どもとり返し  
て。あいなく我ながやかに。うちあくびあめ  
きて。ひたいよりいたゞきざまに。かしらさ  
ぐりあげてたちぬる。いと／＼おしうすさま  
じげなり。ことしはかならずつかさなるべ  
しときこえて。はやうありし物どもなどのか  
たる中にすみつき。もしはほか／＼にゆきち  
りたるなどもみなきあつまりて。いでいるく  
るまにも。ながへのひまなくつかへ。物まう  
でのともにも。われも／＼とつかうまつりな  
どしつゝ。をの／＼物くひさけのみ。心地よ  
げにもてなしつゝ、除目ちもくをまつに。はつるあ  
か月になりぬれば。かどた／＼人がある／＼  
とみゝをさゝげたるに。をともせずさきおふ  
こゑ／＼しつゝ。かむだちめなどみないでた  
まひぬなり。とくきゝてつげよとて。うちわた

りにやりをきつる細さうしきおとこなどのさむ  
さもおぼえざりけるなど。いまぞいとすさま  
じげなる氣色にて。わな／＼きいできたる。あ  
ゆみくるけしきしるければ。いかにぞなども  
とひもとほれずかし。ほかよりきたる人のさ  
ていづくにかならせ給へるなどとふめれば。  
なにのせんじ前司にこそはなど。かならずいらふ  
る。さだまりたる事ぞかし。まことにたのみ  
ける人は。すさまじとのみにもあらず。いみ  
じうなげかしと思ひたる氣色。いとゞおしげ  
なり。ひるになるまゝに。さふら侍ひにひまな  
くゐたりつるものども。やう／＼ひとりふた  
りたちすべりいでつゝいぬめり。えさりがた  
くてとしごろはゆきはなれぬ二三人ばかりの  
こりたるも。たかやかにうちなげきつゝ。よ  
りゐたる氣色どもこそあはれにすさまじげな  
れ。せめて思ひあまりぬるなぐさめにや。來

年あくべき國のかすなどをぞをよびうちおり、  
つゝかぞへなどする。あるじもいまいく月を  
念せよ。ことにもあらずなどいひたる。なを  
なをいみじうすさまじげなり。よろしうよ  
みたりとおもふ歌を人のがりやりたるに返事  
なき。け<sup>懸</sup>そ<sup>想</sup>うぶみのはいかせむ。それだに  
おりおかしうなどある。返事なきはすさまじ。  
まして女どちのなからひのわろきだに。うち  
おしうおぼゆ。またさはがしうときめかしき  
所に。ふるめかしうさびしきところなる人の  
をのがつれ<sup>く</sup>なるまゝに。ことなる事なき  
歌よみつゝ。つねにをこするいとすさまじ。  
又ものゝおりのあふぎをかならずようしてむ  
と思ふ人にいひつけたるに。その目になりて  
もてきたるが。なでうことなきさまなる。い  
とわびし。すさまじ。うぶやの所のうぶやし<sup>産</sup>  
なひ。むまのはなむけなどのつかひに物とら

せぬはかなき。くすだまうづち<sup>卯</sup>などやうのつ  
かひにだにかならずとらすべし。思ひかけぬ  
ことにもえたるをばいとけふある事に思ひた  
るに。ましてこれはさる事あらむとすらんと  
かねてより心ときめきたるに。なきはいみ  
じうすさまじき事なり。むことりをしてこな  
たかなたのおや<sup>く</sup>など。いつしかと思ひて。  
おもふさまなるなからひのとしごろになるま  
でこうまず。うぶやしなひなどせぬ。いとく  
ちおしうすさまじ。又おとなびたるこおほ  
く。むまごなどあまたになりたる人のおほち  
やおやなどのひるねしたるこそすさまじけ  
れ。いとさらで。またわらはなるほどのこども  
も。おやどものひるねしたるほどは。いみじ  
うこそよりどころなうすさまじげに思ひため  
れ。しはすのつごもりのなが雨。ねおきて  
あむるゆ。はらだたしうさへこそおほゆれ。

にくき物。いそぐ事あるおりにきて。そこは  
かとなきながごとするまらうど。あなづらは  
しきほどならば。けふしかくのことなむあ  
る。のちになどいひてもやりつべきに。さす  
がに心はづかしき人なるこそむづかしけれ。  
すづりにかみのいりてすられたる。又すみの  
なかなるいしのきしくとすれたるもにく  
し。ものゝけわづらひたるおりに。よびもて  
きたるげんざのほかにてこうじたりけるに  
や。ねぶりをのみしてはかくしうかぢせ  
ぬ。なでうことなき人の物いひがましうえ  
かちなる。ひおけすびつなどにてのうらうち  
かへし／＼あぶりて。をしすり。かほをしの  
べなどしゐたる人。せめてあやしうなりぬる  
人は。あしのうらをさへかきいでてあぶりお  
るかし。又人のもとにきてゐむとする所をこ  
とにちりもみえねど。まづあふぎしてかきは

らひ。ふた／＼とあふぎちらし。とむきかう  
むきぬもさだまらず。ひろめく人ありかし。  
さやうのことは。いつかはわかやかなる人。お  
いたるもはかくしききはのひとは。する物  
かはなど思へど。をのづからさしもあらぬや  
うもあり。おのこはやがてかりぎぬのしりか  
いまくりあげてゐるかし。もとより思はしう  
もあらぬ人のいとゞにくげもしはらだちた  
る。又身のうへなげきもきゝにくし。ものうら  
やみなどする人もいとにくし。人のきかせぬ  
事ゆかしがり。あながちにとひたづねきゝて  
は。又わがもとよりしりえたるやうに。むか  
ふ人ごとにかたり。人のうへをもあつかひな  
どする人。にくしとはをろか也。物きかむと  
するおり。かしがましくなくちご。からす  
のあつまりてぎめきたるにくし。しのびて  
くる人みつけてほゆるいぬ。うちころさまほ

しうおぼゆ。人しげくわりなきところに。ふ  
せたる人のいびきする。又しのびてくる人の  
ながゑばうしして。さすがに人にみつけれ  
やせむとまどふほどに。あらくものにつきさ  
へてそよろとならしたる。いみじうにくし。

<sup>帽</sup>もかうのすゞ。はしのきもようゐなくうちを

けば。いとしるくなるかし。つまどやりどな  
ども。あらくはなちあくるはいとうたてあり。  
さうじもさぞある。すべてなにごとにも。心

をくれたりとみる人は。いとにくくこそおぼ  
ゆれ。ねぶたしと思に。かのほそごゑになの

りて。かほのもとにとびありくだにくきに。  
さる身のほどにかせさへありて。あたりたる

こそいとにくけれ。またはへ<sup>編</sup>の秋などおほく  
て。よろづの物にあしはぬれつめたくて。かほ

にもゐありく。いとむづかしうにくし。さるは  
これらひとしくしう。かたきにすべきさまに

ぞあらぬや。又きしめく車いとにくし。のり  
てゆくぬしは。みゝもきかぬにやあらむとお  
ぼゆ。人々世のなか物がたりするに。我に  
もいはぬ人のさしいでして。ざい<sup>ヤ</sup>まぐれいひ  
とりていふいとにくし。むかし物がたりを  
もするに。しりたりけるは。ふとおくいひい  
でてくたしたるも。おほかたわらはもおとな  
もさしいらへは。いとにくき事なり。おなじ  
事なれど。さることやある。さやきゝしなど  
人のいふにつけていふはよし。よるねずみ  
のつれてはしりたる。あからさまにきたる  
わらはべこどもなどをめづらしびに。くだ物  
くはせ。おかしきものとらせなどしたるに。  
ならひてつねにきてゐりて。あたりにおき  
ちらしたる物にてふれそゝぎゐたるいとに  
くし。家<sup>ヤ</sup>にても宮づかへ所に<sup>ヤ</sup>も。あはであ  
りなむと思ふ人のきてせうそこしたるに。そ



らねしてきゝいれぬを。わがもとなる人のよ  
りて。せめておこしつゝ。いぎたなしと思ひ  
がほにをしゆるがしなどしたるいにくし。  
新いままいりのさしすぎてをしへやうなる事い  
ひ。まだしきにうしろみたるにくし。人もよ  
びいでぬにともすればさしいでて。人のする  
ことをも見あつかひ。わがもとありし所の事。  
ためしにひきいでて。とこそありしかかくこ  
そなどいふを。そめものはり物につけても。  
げにさこそすべかりけれときゝならはるゝこ  
ともありかし。されどなをさらぬにはをと  
りたり。これはものせし所にありときゝし人ぞ  
ときゝおきたるには。さしもさいまぐれねど。  
人みないかゞなどとひつるものなり。おと  
こもわがまへにて。むかし見し人のうへいひ  
いでてほめきかせなどするは。ほどへにたる  
ことゝおもへどいにくし。ましてさしあた

りたらんは。いふべきにあらずかし。なかな  
かそれはさしもあらずやあらん。はなひて手  
づからずもん調文しいのる人いにくし。おほか  
た人のしうならぬ人のはなたかくひるはいと  
にくき事也。ことなる事なしと思ふおとこの  
ひきいり聲しみんなちたる。すみながるゝ  
すどり。女の物ゆかしうする。のみもいとに  
くし。衣のしたにおどりありきて。人をもた  
ぐるやうにするよ。いぬのもろ聲にながな  
がとなきあげたるいとまがくしうにくし。  
なにゝまれものみる所に。たゞひとりくるま  
にのりてたてるおとこいにくし。いかばか  
り心せばくけにくきならむとこそをしはから  
るれ。本ノマ、あとかのひばしいとにくし。ふるき  
歌のはしぐこゝかしこちずして。はてに  
かならずともしすゑたる人。いみじうにく  
し。心ときめきする物。すゞめのこがひ。

ちごあそばしする所のまへわたりする。よきたき物たきてひとりねたる。からかゞみのすこしくもりたるみたる。よきおとこの車とゞめて。ものあないしたる。かしらあらひけさうして。かうにいりたるきぬなどきたる。みるべき人もなき所なれど。心ひとつにおかしうおぼゆ。まつ人あるよは。かせの吹たるをときにも。ふとおどろかれて。まづ心ときめきこそせらるれ。又男も女も。かたちよき人みるこそあやしう。我もよからむとおぼえて。心ときめきせらるれ。みるにつけてすぎぬるかたこひしきもの。かれたるあふひおりからしさうしの中などにありけるをみつけたる。おさなかりしときもたりしあそび物。あはれなりし人のふみのありけるを雨などのふる日さがいだたる。こぞのかはほり。二あむむらさきのさいてのをしま

かれたるがものゝなかにありける。心ゆく物。よくかきたる女ゑのこと葉ぐしたる。ものみのかへさにをのこともおほくよきくるまにいみじうのりこぼれて。うしよくやる物にて。車はしらかして返りたる。しろくきよげなるみちのくにがみに。いとほそくかくべくにはあらぬふでして。くつろかにきよげなるてしてかきたるふみこそみるにすごろに心地ゆけ。うるはしきいとねりぐりしたる。てうばみうつに。てうおほくつゞけてうちたる。物よくいふ人どち物がたりしかはしたるきゝたる。くちきゝたるをんやうじにて。すそのはらへしたる。ねおきてのむ水。物まうでしてものまうさするに。てらにてはほうし。やしろにてはねぎなどのしたゝかにわが心ちのうちおもふ事などをあやまりてまさゞまにをしはかりつゝ。きゝよく申あ

げたる。まことにたちまちに思ふ事なりぬべきやうにおぼえて心ゆけ。きよなるかねよくつけたる心ゆくかし。かはぶねのくだりざまも。うれしきもの。君の御まへに人々あまたさぶらはせ給て物がたりなどせさせたまふに。我にしもみあはせさせ給ひて。ものがたりなどせさせ給ておほせられたるいとうれし。又さるべきことあるに。人えられなどしけるを。みしりてしもあるに。めしいでられたるこそめいぼくありておもたずしう。いましばし世にもありぬべき心ちすれ。又申しやうじをばはなちてはかみえたるいとうれし。そのなかにしきしうすやうはさらなり。みちのくにがみしろくきよげにおもてるはしきはいとうれし。ものへだててきくに。人のいらへにさもいはゞやとおもふ事をいひあてたる。あいなくうれしけれ。四月

ついたちに。はじめてほとゝぎすの聲聞つけたる心地いとうれし。いどみたることにかたちよき人々のおまへにおほくさぶらひて。ところもなかりけるに。まうのぼりたるを。とをくより御らんじつけて。そこもとあけよとてちかくめしよせられたる。ものへなどおぼしめして。かゝせ給ける御ふみのよくかゝれたりとおぼしめしけるを。これはいかゞとて。みせあはせさせ給へるこそかぎりなくうれしけれ。いひしらすいふがひなくとりどころなき物。くろつちのかべ。としおいたるかたい。くろくふりたるいたやのもる。くろぬりのくしのはこのすみわたる。ひ中のようじ。ゑせずみのくちたる。かほにくさげなる人の心あしき。くろぬのくしばらひ。くろがねのけぬきの物ぬけぬ。やきすゞりみをひめのぬりたるといふことをぞ

よろづの人いみじうにくむなる。されどうれしもて。だいいちにおぼえんをばいかかせむ。したの心がまへわろき物。からゑのびやう風さうじ。いしばひのうへ。ひはだやのうら。かはしりのあそび。もり物。

みぐるしき物。したすだれきたなげなるかむだぢめのくるま。ひてるときにはりむしろしたる車。もなどきたるげす女のかいねりのきぬきたる。はかまきたるわらはべのしろきあしだはきたる。つぼさうぞくしたる人のいそぎてあゆみたる。あやしげなるくるまによはうしかけてまつり行幸など見たる人。もじにかきてあるやうあらめど。心えぬもののな。いためしほ。あこめ。かたびら。けいし。ゆする。おけぶね。ききにくき物。聲にくげなる人のゆげして物いひみわらひなどうちとけたるけはひ。い

みじうつくるひたるに。よくはあらず。されどそれはうたてげにはなし。ねぶりてだらによみたる。はぐろめつけて物いひたる聲。ひちりきならふ。見るにおそろしげなる物。つるばみのかさ。やけたる家のあと。

かみおほかるおとこのかみあらひてほす程。きよしと見ゆる物。かはらけ。あたらしきごき。かなまり。たゝみにさすこも。水を物にいろゝすきかげ。わびしげなる物。六七月ばかりいみじうあつき日ざかりに。よろづふりきたなげなるくるまに。よはうしかけてゆるがしゆくもの。いとさむくもあらぬおりに。無下にゆゝしげに。なりあしきげすのこおいたる。よろしき人はさやはあるな。ちいさきいたやのくろくきたなげなるが雨にぬれたる。又雨いたうふるひ。ちいさきむまにのりて。こせしたる人のかぶりもひしげ。



うへのきぬも下がさねもひとつになりたる。  
いかにわびしからんとみえたり。夏はされど  
よろし。<sup>い</sup>あつげなる物。<sup>す</sup>すいしのおさの  
かり衣。<sup>け</sup>のふのけさ。<sup>い</sup>いでゐの少將。<sup>い</sup>  
ろくろき人のいとうこへてかみおほかる。き  
んのふくろ。六七月のすほうのあざりの日  
中時などをこなふ。いかにあつからむと思ひ  
やる。又おなじころのあかぎねのかぢ。  
つれ／＼なぐさむ物。みどころある物がた  
りのおほかる。ごす／＼ろく。三四ばかりな  
るちごの物いひおかしき。又むげにおさな  
きが物がたりしゑみなどするもなぐさむ。  
くだものとりちらしたる。おとこのうちさ  
るがひ物がたりしたる。つねよりことに  
きこゆる物。殿上のくるまのをと。春のに  
はとりの聲。あかつきのしはぶき。ものの  
ねさらなり。めでたき物の人のなにつきて

いふかひなくきこゆる。むめ。やなぎ。  
さくら。かすみ。あふひ。かつら。さう  
ぶ。きり。まゆみ。かえで。こはぎ。  
ゆき。まつ。ゑにかきてをとる物。な  
でしこ。さくら。物がたりにかたちよしと  
いひたるおとこ女のかたち。ゑまさりす  
る物。松の木。秋のの。山ざと。山み  
ち。やなぎ。らん。おなじことなれど。  
きく耳ことなる物。ほうしのこと葉。おと  
このこと葉。よき人のこと葉。げすのこと  
ばは。みなもじあまりたらぬこそあやしけれ。  
ありがたき物。しうとにおもはるゝむこ。  
しうとめに思はるゝよめ。かねのけぬきの  
物よくぬくる。しうそしらぬすんざ。かた  
ちよく心よく。おほかたかたわなく。よろづ  
ぐしたる人。おなじ所にすむ人のかた身に  
はぢかはして。いみじうよいしたりと思ふ。

なをつゐにみえでやむこそありがたけれ。  
又物がたり集などかきうつすに。本にすみつけぬこととかたし。よきさうしなどは。いみじう心してかけど。かならずきたなげにこそあるめれ。おとおんなをばいはじ。女どももながらへてたがはぬこととかたし。又かいねりうたせたるに。つやうぢめ思ふやうにて。うるることかたし。あぢきなき物。わざと思ひたちてみやづかへにいでたちたる人のことにもものうがりてさとかちなる。とりこのかほにくさげなる。しぶく／＼に思ひたる人をしてむことりて思ふさまならずとなげく。ことゐ中へゆく人のたよりぶみこひて返きてよろし。いたはりなるよいひてはらだつ。心地よげなる物。うづえのことぶき。かぐらの人長。ごらうゑのむまおさ。いけのはちす。むら雨にあひたるくさ

つのこととり。おほきにてよき物。ふくろ。ほうし。くだ物。うし。松の木。おのここのめ。いとほそきは女びたり。又かなまりのやうなるもおそろし。火おけ。ほうづき。やへ山ぶきの花。むまもよきはおほきにぞある。みでかくてよき物。とみの物ぬふいと。下す女のかみうるはしうぞあるべき。とうだい。人のむすめの聲。人の家につぎ／＼しき物。ひぢおりたるらう。わらうだ。三尺の木丁。ち火ろ。おほきやかなるどう女。すいしこどねり。このたれぬの。さぶらひのくりやさうしも。をしき。かけばん。ちうのはん。をはゝき。ついたてさうじ。さうぞくよくしたるゑぶくろ。からかさ。かきいた。たなづし。さかしき物。いまやうの三とせご。げすの家のおんなあるじ。はらとりのおんな。

みるかひなき物。 いろくろくやせたるちご  
のかさいでたる。 ことなることなきおとこ  
のゆく所おほかる。 物むづかりする。 かた  
ちにくさげなるむすめ。 あてなるもの。  
うす色にしらがさねもあてなり。 梅の花に  
雪のふりかゝりたる。 かりのこ。 けづりひ  
にあまづらいれて。 かねのつきにもりたる。  
すいさうのすゝ。 ふぢの花。 うつくしきち  
ごのいちごくひたる。 さしかけ。 まづし  
げなる物。 あめうしあめうしのやせたる。 ひたゝれ  
のわたうすき。 あをにびのかりぎぬ。 くろ  
かゐのほねにきなるかみはりたるあふぎ。 ね  
すみはみたるゑぶくろ。 かうぞめのきばみ  
たるかみにあしきてをうすすみにかきたる。  
ほいなき物。 あやのきぬのわろき。 みやた  
てたる人のなかあしき。 心とほうしになる  
人のざえなくてきよからぬ。 思ふひとの物

がくしする。 とくゐのうへをしる。 冬のゆ  
きふらぬ。 したりがほなる物。 こゆみい  
るにかたはらなる人のまぎらはししはぶき  
などするに。 ほゝえまるゝを念じて。 おなじ  
き物ををとたかくいあてたる人のけしきこ  
そ。 いみじくことしろしたるさまなれ。 又こ  
わきもののけうつしえたるげんざの氣色。  
正月ついたちの日。 つとめてさいそにはなひ  
たる下らう。 よろしき人はさしも思ひたらず。  
ゐんふたぎいひあてたる人。 きしろふ人あ  
またあるたびのくら人にこなしたる人の氣  
色。 ちもくにそのとしのいちのくになり  
たる人。 よろこびいひに人のゆきて。 いとか  
しこくなりたまへるなどいふ。 いらへはなに  
かはとことやうにほろひなりて侍ればなどは  
いへど。 いとしりがほなり。 またけさう人  
おほかる人のむすめに。 えりてよせられたる

むこの心ち。われはとおぼゆかし。ごうつにかたきのむげにさばかりぞあらむと思ひころしえてをきたるいしを。かまへていけて。人のいしおほかるをころしえて。ひろひとりたる人の氣色もいみじうしたりがほなり。かたきはあさましとうちまもりていでなし。あしこにはいかでかあらむとてをしこぼちつる。たゞのませよりはねたからんと見えた。おぼつかなき物。十二年の山ごもりしたるほうしのめおや。やみなる夜しらぬ所にはじめてきたる。あないもしらねばにやとつゝましくて。火もえともさぬ。さすがに人はあまたゐなみたるほどこそおぼつかなくれ。又まいできたる下すなどの心もしらぬに。やんごとなきものなどもたせて。人のがりやりたる。をそく歸るほど。物いはぬ程のちごのにわかにおどろくしうなきで。こ

れいだくにもかれいだくにもいだかれず。そり返てなきたるこそ。いかなる事のあるにかとわりなくおぼつかなくれ。くらき所にていちごくひたる。たとしへなき物。夏と冬と。よるとひると。かきくらし雨ふる日と。いみじうてりたる日と。人のわらふとはらだつと。おひたるとわかきと。しろきとくろきと。思ふ人とにくむ人と。おなじ人ながら心ざしあるおりとかはりぬるおりとは。まことにこと人とこそおぼゆれ。火と水と。こえたるとやせたと。かみのながき人とみじかき人と。身をかへたるとみゆる物。さるべき所にたゞにてさぶらふ人の御めのとになりたる。たゞの人のをばいふべきにぞあらぬ。ほかよりいままいりたるはさしもおぼえず。つねは我らがおなじ人と思ひならひたるに。やゝもすれば。から衣ひき



すて。しものこしばかりゆるゝかにときくだし。かぎりなきおまへにそひぶしなどするほどみるは。天にむまれたゝむにも。なをのちのおとろへ。うしろめたなし。そくしんに佛になりたらん人は。かくやとぞみゆるや。さては又ざうしきのくら人になりたる。一の人の御もとにせじもてまいり。大饗のあまぐりのつかひなどにまいりたるをもてなし。やむごとながらせ給さまなど。いづくなりしあまくだりの人ならむとこそみゆれ。又むすめのきさき女御などにておはします所につかひにてまいりたるに。御ふみとりいるゝそでぐちよりはじめて。しとねさしいづるほどなども。くら人六位さぶらひなどのだいばんに四位五位さらなり。六位もことなることなき物どもなれど。つかさあるはかみにて。むげのすゑにゐたれば。あさましうあなづらはし

うみえしものとぞおぼえぬかし。したがさねのしりひきちらしてゑふなるは。いますこしおかしかめり。御てづからいであひて。さかづきなどさしたまふは。わが心地にもいかゞはおぼゆらん。つちのそこにいりゐてうやまひきこえしいへの子のきんだち。殿上などにては。けしきばかりこそうちかしこまりかたざりきこゆれ。おなじやうにうちつれてありきたるほどなど。いかばかりの所をおきためる。さてあるほどいくばくかはある。ひさしき定にて三四年にこそはあなれ。そのほど。なりあしく物の色わるく。たき物のかなどせでまじらふこそいふがひなくくちおしきことはあれ。だうりあらむかうぶりのほどのちかくならんだに命にかへてもおしかるべきに。りんじのかうぶりとめ。こゝかしこの御給はり。なにくれと申まどひありきて。い

そぎおるゝこそいかならむ心なるらんと心う  
くおぼゆれ。むかしのくら人は。らいねんお  
りんとて。ことしの春夏よりだにこそなげき  
たちけれ。いまの世にはしりくらべをこそす  
めれ。又家のなかわろくて。としごろありあ  
りて。はじめてすらうになりたる人。わづか  
にあるすさも。なめげにあなずりそしりにく  
みせしに。我にもまさりたる人きあつまりて。  
かしこまりまどひ。いかでおほせ事うけ給は  
らんとついそうしたるは。すぎぬるかたと人  
にいふべからず。又いみじうちいさきさう  
ぶをうへたりしが。ねのいとながくなりにつ  
るをひきいでたるこそあらぬものとおぼえて  
めでたうつくしけれ。はづかしき物。  
いざときよひのそう。みそかぬす人のさる  
べきくまぐゝにゐてみるらんをばたれかはし  
る。くらきまぎれにふところに物などひきい

るゝ人もあらむかし。それはしもおなじ心  
におかしとやみるらん。よひのそうは。いとほ  
かしき物なり。わかきひとぐゝあつまりて人  
のうへをもいひわらひにくみもするを。つく  
づくときゝあつむらん心のうちはづかしか  
し。あなうたてかしがましなどおとなびたる  
人氣色ばみいふをもきかず。いひ／＼のはて  
は。みなうちとけてねぬるのちもはづかし。  
おとこはうたて思ふさまならず。心づきな  
ことありとみれど。さしむかひたるほどはう  
ちずかして。思はぬことをもいひたのむるこ  
そ。はづかしきわざなめれ。ましてなさけあり  
このまじう。人にしめられなどしたる人は。を  
ろかなりと思はるべうも。もてなさずかし。心  
のうちにのみにあらず。あまたみなこれが  
ことはかれにいひ。かれがをばこれにいひ。  
かたみにきかすべかめるを。わがことをばし

らでかうかたるは。なを人よりはこよなきな  
めりとや思ふらんと思こそはづかしけれ。い  
でさるはすこしも思ふ人にあへば。心もとな  
きなめりとみゆることもあるぞ。はづかしう  
もあらぬかし。いみじうあはれに心ぐるしう  
みゆるをも。いさゝかなにとも思はぬなめり  
とみゆるは。いかなる心ぞとこそあさましけ  
れ。さすがに人のうへをば。もどき物をいと  
よいふよ。ことにたのもしき人もなき宮づ  
かへ人などをかたらひて。たゞならずなりぬ  
るありさまなどを。しらでやみぬるよ。  
むとくなる物。しほひのかたにをるをぶね。  
おほきなる木のたふれてねをさらせてよこた  
はれふせる。ゑせ物のずさ。かうかぶるひ  
じりのあしもと。かみみじかき人の物とりあ  
ろして。かしらけづりたるうしろで。おき  
なのもとどりはなちたる。すまひのまけて

いるうしろで。人のめのすゞろなるものもし  
らでかくれたるをかならずたづねさはがむも  
のぞと思ひたるに。さしもあらすのどかにも  
てなしたれば。さてもえたびだちるたらで。  
心といできたる。またなま心おこしたる人の  
しりたるひとゝ。すゞろなることいひむづか  
りて。ひとつにもふさじとみしぐりいでたる  
をひきよすれど。しゐてこはがれば。あまり  
になりては。人もさはれとて。かいくらみて  
ふしぬるのちに。冬などはひとへぎぬばかり  
をひとへきたるも。あやにくがりつるほどこ  
そさむさもしられざりつれ。やう／＼夜のふ  
くるまゝに。さむくもあれどおほかたの人も  
みなねにたれば。さすがにおきてもえいかで  
ありつる。おりにこそよりぬべかりけれと。  
めもあはず思ひふしたるに。いとどおくのか  
たよりものゝひしめきなるもいとおそろしう

て。やをらまろびよりて。きぬをひききるほどこそむとくなれ。人はたけくおぼゆらむかし。そらねしてしらぬがほなるさまよ。

はしたなき物。こと人をよぶにわれがとてさしいでたる。まして物など御らんするおりは。をのづから人のうへなどうちいひそしりなどもしたるに。おさなきことのきゝとりて。この人のあるまへにあぶなくいひいでたる。あはれなる事など人のいひてうちなくに。げにあはれとはいひながら。涙のいでこぬいとはしたなし。まめだちてなきがほつくりて。氣色ことになせど。いでこぬなみだをばいかゞはせむとする。さるはさやうなるにも。きくかひありてうちあへしらふ人こそものゝあはれしりたる心ばへとはみゆれ。またさしも人めにみえじとつゝむ事に。思ひもあへずたゞいできにいでくるもはしたなしかし。

あはれなる物。おやのためにけうある人の

こ。わかきおとこのみたけさうじする。さだまりたる人ぐしたるも。又さらでうちしのびたるおもふひとあるも。あはぬよな／＼へだつるは。くるしき物にこそ思ふべかめるを。

ことのほかにきびしうへだてなして。ひとりいでゐてうちをこなひたる。あか月のぬかのほどなむいみじうあはれなり。る歟むつまじき人のめさましてきくらむ心地。いかならんど思ひやらる。はてぬる後もみちのほどいかにおぼつかなくつゝしみ思ひたるこそめでたけれ。おとこも女もわかうかたちよき人のふぐなるこそあはれなれ。十月ばかりにきりきりすの聲きゝつけたるいとあはれなり。にはとりのかいこいだきてふしたるいとあはれなり。日ひとひ。むしやなにやとひまなくくいありく。心に念じてあらんよ。秋ふかき



庭のあさちに露のきらめきて。たまのやうに見えたる。又かはたけの風にふかれたるをと。ゆふぐれもあかつきもよなにも。ねざめてきゝたるいとあはれなり。又思ひかはしたるなかのつゝむことありて。心にまかせぬ。山ざとの雪。九月廿七日のあか月がたまで人と物がたりしてゐあかしたるに。あかなきかにほそき月の山のはよりわづかにみえたるこそあはれなれ。又あれたるやのいたまよりもりくる月影。やま里のしかの聲。九でうのしやくぢやうの聲。念佛のゑかうこそよき人の申たる。あれたるいへのももぎむぐらはひかゝりたるにはに月のくまなうあかき。あしうはあらぬかせのをと。かたちよきわかき人の物思ひたる。さてはいけある所の五月のなが雨のころこそいとあはれなれ。さうぶこもなどのおひたりたれば。

水もみどりなるに庭もひとつ色にみえわたりて。くもりたるそらをつくゝとながめくらしたるは。いみじうこそはあはれなれ。いつもすべていけある所は。あはれにいみじうおかし。冬の氷したるあしたは。いふべきにもあらずかし。たてゝつくろひみがきたるよりも。うちすてゝあれ。みぐさがちなるが。かぎりなくあはれなるなり。にげなき物。かみあしき人の白きをり物のきぬきたる。又したがみたはつきたる人のかみにあふひつけたる。げすの家のあやしきに雪のふりたる。また月のさしいりたるもにげなしかし。ゑふのふとりたる。月のあかきにむなしぐるまなどいふものゝありく。きたなげなきおとこのにくげなるめもたる。おいたる女のはらたかくてありく。わかきおとこもたるだににげなきに。こと人のもとへゆくとて。ね

たみはらだちたるいとみぐるし。おいたる

おとこのおさなきこもちてあそばしたる。

こゑろろき人のねこよびしたる。ひげくろ

らかにおとなびたるおとこのしゐつみたる。

はなき女のむめくひたるが。すがりてにがみ

たるかほもいとみぐるし。げすのくれなる

のはかまきだる。されどこのごろはさのみぞ

あめる。けびいしのやう。くら人もほそど

のゝつぼねにぬぎかけたらんに。あを色はあ

へなん。おなじことなれど。ろうさう森はかい

わくみて。あとのかたになげやりてぞをきた

るべき。うへのばう官などいひつれば。よに

はきらくしき物にいひたり。げすなどはま

してこの世の人とも思ひたらず。めをだにえ

みあはせでたちわななくめるに。しのびあり

きなどするが。あはずにげなきなり。そら

だき物なつかしうにははしたる。木丁にぬ

ぎかけたるはかまのさまなどよ。おもたげに

いやしくみし（笑）からんとをしはからる。うへの

きぬは。さかしらにわき關あけにて。ねすみの

おのやうにわけかけたらむこそ。いますこし

あがりたる權のすけなどいふもあか衣に思ひ

かけず。しらくしきげすのはかまのうらそ

ひたる。さらにげなきさまなり。うへのき

ぬもしのびてこかしこたゝすむにつけて

は。いちじるきにやあらん。さらぬ人もかく

れてやはやむとはいひながら。これはまづこ

そ人によくみつけらるれ。あなおそろし。こ

のわたりにけんぎの物あるべしなど。たはぶ

れにてもとがめられたる。いとわづらはしか

し。さらでかしくかくれふしたるにつけて

も。人わろき心ちこそすれ。なをかやうのす

きすきしさに。このつかさのほどはとどめた

らんぞよかるべき。よききんだちなれど。殿

上の人などはびむなしかし。宮中將のさもなく  
ちおしかりしかな。心づきなき物。心あ  
しきめのとのやしなひたるこ。さるはこれが  
つみかはとは思へども。よにくしとおもふ  
人のせめてまどはし。ねんごろがるさけのみ  
てあめき。くちをさぐり。ひげあるはそれ  
とりて。ひぎなてれうしなど。やすからずけ  
いめきするひと。まして又めのとの人にそゝ  
のかされて。いや／＼と身ぶるひをし。くち  
わきをひきたれて。わらひなどするぞわびし  
く心づきなき。はてはうち／＼どのにまいり  
てなど。いたうそぼれうたひしようれはしも  
ある。よき人のさしたまひしをみしが。いみ  
じう心づきなくみえし也。又いそぐことも  
あり。ものへもけふかならずいかむなど思ふ  
日あめふると心づきなし。つかう人のわ  
れをばおぼさず。なにがしこそときの人など。

おなじ心なるどちいひあはせてそしるをこそ  
はみゝにきゝたる。いと心づきなし。正月  
の一日は。そらの氣色もうららかにかすみわ  
たりて。めのうちつけによろづめづらしくみ  
なさるゝこそおかしけれ。よにありとある人  
も。みなすがたかたちなどこそかはることし  
もあらじを。いかにすることにか。あらぬさ  
まにとつくろひたてゝこといみしつゝ。こと  
にあらためなしたる氣色どもいとおかし。  
七日は。ゆきまのわかな。あをやかにつみいで  
て。れいはことにさやうなる物も。めにちか  
からぬ所々にも。もてさはぎあつかひたるこ  
そおかしけれ。あをむまみるとて。さと人は  
くるまきよげにしたてつゝゆく。なかの御か  
どのとじきみひきいるゝほどに。かしらども  
も一所にゆきあひて。さしぐしもおれおちな  
どしたるをかた身にわらふも又おかし。さい

ものぢんのもとに殿上人あまたたちて。とね  
りのゆみどもをととりて。むまどもおどろかし  
わらふもあり。はづかに見れたれば。たてじ  
とみくす<sup>殿</sup>どのなど。わづかにみえて。とのもづ  
かさなどのゆきちがひたるが。ほのかにみえ  
たるいとおかし。いかばかりなる人。この  
へをかくたちならすらむと思ひやらるかし。  
八日は。人のよろこびしてはしらすくるま  
どもをと。つねよりことにきこえていとお  
かし。十日のほど。そらの氣色は雲のあつく  
みえながら。さすがに日はけざやかにさした  
るに。ゑせもの家のあらはたけなどいふ所  
にちいさやかなるもの<sup>もの</sup>の<sup>敷</sup>きのあるが。わかた  
ちのつらゝかにさしたるをうづちにきらむな  
どいひて。わらはべのさはぐをみれば。かた  
がたはいとあをく。いまかたつかたばこくつ  
やゝかにて。すはうのやうにみえたるこそい

とおかしけれ。人のこどねりなどにやあら  
む。ほそやかなるわらはのかり衣はこゝかし  
こかけやりなどして。かみうるはしきがのぼ  
りたるに。又こうばいの衣しろきなどひきは  
へたる。おのこどにはにきて。はう火はきた  
るなど。二三人木のもとにたちてきて。きり  
ていてなどこふに。又かみおかしげなる女わ  
らべなどのあこめ<sup>和</sup>のほろびがちなるはかま  
の色よきが。なよゝかなるなどきたるも。三  
四人などいできてうづちの木の下からむきり  
でおろせなど。おまへにもめすぞなどいふに。  
おろしたれば。我まづおほくとらんとはしら  
かいたるこそおかしけれ。くろばかまきた  
るおのこのはしりきて。われにとこふに。と  
らせねば。よりて木のもとをひきゆるがすに。  
あやうがりて。さるのやうにかいつきておめ  
くもおかし。梅のなりたるおりなどもさや



うにするぞかし。十五日は。もちかゆのせく  
まいり。かゆづえひきかくしつゝ。家のきん  
だちわかき女ばうどもうたんとうかゞふを。  
うたれじとよいいして。つねにうしろを心づ  
かひしたる氣色どももおかし。いかにしつる  
ひまにかあらむ。うちえたるをばいみじうけ  
うあり。うれしと思ひてわらひなどしたるさ  
まもはへ／＼しきを。うたれたる人は。ねた  
ういみじと思ひたるもことはりにおかし。こ  
ぞよりあたらしうとりよせたるむこのきみの  
うちへまいらんとていでたつほど心もとな  
ければ。ところにつけてわれはとおもひ。と  
ころえたる女ばうのうたんとてのぞき氣色ば  
み。おくのかたにたゝずむを。まへにゐたる  
ひと／＼は。心えてうちわらひなどすれば。あ  
ながまとまねきてかきなどすれど。女ぎみは  
しらぬかほにてゐたるこそおかしけれ。こ

こなる物とりいでんなどいひて。はしりうち  
てにぐればあるかぎりわらふ。おとこ君もあ  
い行づきてうちゑみて。みをこせたるに。こ  
とにおどろかぬさまにて。かほうちあかみて  
ゐたるもおかし。をのがどちは。かた身にう  
ちの／＼しりて。おとこなどをさへぞうつめる。  
いかなる人にかあらん。なきはらだち。うち  
つる人をのろひ。まが／＼しき事どもをいひ  
などするも。にくきものから猶おかし。うち  
わたりなどのやむごとなきも。けふはみなみ  
だれてかしこまりもしらるまじかめり。つご  
もりになりてぢもくのほどなどいとおかし。  
雪ふりいみじうこほりあれたるに。まうしぶ  
みどももてありきさはぐにも。四位五位のわ  
かやかなるはたのもしげなり。おいてかしら  
しろきなどが。この人かのひととおもて／＼  
にうれへありき。女ばうのつばねにもきつゝ。

わがたうりぬるよしなど。心ひとつやりていひきかすれど。ふかき心もしらぬわかき人々などは。なにかは思はむ。わが大事と思はぬまゝに。おこがましげに思ひて。かほのまねをしいひわらへどさもしらず。よきにけいし給へ。あがきみ／＼などいふこそいとおかしけれ。さいふ／＼もしえたるおりにはいとよし。えずなりぬるこそあはれなれ。三月三日は。のどやかにてりわたりたるこそよけれ。もゝの花のいまさはじめたる。やなぎなどいとおかし。こぞよりさきなれ。はゞひろになりたるはいとくし。あまりとくさきてちりたるとしもありかし。それはいとわろし。おもしろくさきたるさくらをなからおりて。おほきなるかめにさしたるこそわざとまことの花がめにさしたるよりもおかしかれ。さくらのなをしにいたしうちぎなどしたるま

らうどにまれ。御けうとのきんだちにまれ。そこちかくゐてものがたりなどし給ふるいとおかし。そのわたりにとりむしのひたひつきいとうつくしうてとびありくもおかし。四月のころもがへいとおかし。かんだちめ殿上人もうへのきぬのこきうすきけぢめばかりにて。しらがさねどもはおなじさまに。すゞしげなるすがたどもおかし。きゞの木の葉もまだしげくはあらず。わかやかにあをみわたりて。かすみもきりもへだてぬそらのけしきなどこそたゞなにともなくおかしかれ。すこしくもりたる夕つがた。よるなどしのびわたる郭公のそらみゝかとおぼゆるまで。ほのかなる聲をきゝつけたるは。まことにかぎりなくおかしうおぼゆ。まつりちかくなりては。あをくちば二あるなどやうなる物ども。ほそびつにいれつゝみ。もしはかみひとひらばかり

に。氣色ばかりをしまきなどしつゝ。もてあ  
りきゆきちがふもいとおかし。すそご。む  
らご。まきぞめなども。つねにみるはしもおぼ  
えねど。そのころはいとおかしうぞみなさる  
る。わらはのかしらばかりあらひたてつゝ。  
なりはなえほころびがちにうちみだれて。け  
いしにおすけさせなどてことにもてさはぎ。  
いつしかとその日を心もとなげにまちたる  
氣色どもにて。いそぎたるもいとおかし。つ  
ねはあやしくはしりおどり。さまよからぬ物  
どもと見るに。さうぞくしたてつれば。をの  
をのいみじうもてなしつゝ。しづめてさうな  
どいふほうしのやうに。ねりさまよふこそお  
かしけれ。ほど／＼につけては。おやをばの  
女。あねなどいふ物も。その日はみなとも人  
になりて。つくろひかしづきありくいとあは  
れにおかし。よろづよりもわびしげなる車に

さうぞくわろくてものみる人。いと／＼もど  
かし。物まうでせ經きくなどは。いかゞはせ  
む。つみうしなふことなれば。それだになをい  
とあながちなるさまなるはみぐるし。まして  
行幸かも。まつりなどは。いみじうゆかしと  
念じてみてありぬべし。したすだれもなく  
なへたるひとへぎぬのそでうちたれなどした  
るもありかし。なにごともしたゞその日のれう  
と思ひしたてゝ。いと無下にはあらじとおも  
ひていでたるだに。又まさるくるまなど見つ  
けては。なにしにいでつらんとおぼゆる物。  
ましていかば<sup>か</sup>りなる心にてさてみるらん。お  
りのぼりはしらかしてみありくきんだちくる  
まのをしあけてたつるおりなどこそ心ときめ  
きはせらるれ。よき所にたてんといそぎて。  
とくいでてまつほどのいとひさしければ。こ  
なたかなたのうきたちあがりなど。あつくる

しうまちこうずるほどに。草下ゑかにまいりたりけるきんだち。弁少納言などの車ども七八と。ほどひきつゞけて。院のかたよりはしらせていできたるこそことなりにけりとおどろかれてうれしけれ。

けのまへにたてゝみるいとおかし。殿上人物いひをこせなどし。ところのごせんだもにすいばんくはせ。はしのもとにむまひきよするに。おぼえある人のこどもごうしきなどは。おりてむまのくちとりなどしておかし。さらぬものゝみもしらぬなどぞいとおしげなる。御こしわたらせたまへば。あるかぎりのくるまのながえまどひおろして。すぎさせたまひぬれば。又いそぎあぐるもおかし。さるべき人のさじきのまへにくるまたつるをいみじうせいしはらへど。などてかたくせめてたてさせたれば。いひわづらひて。はてはせうそがりがたらふこそおかし

しけれ。かくところもなくたちこみて。ひまもなしとみゆるに。ときの所の御くるまのひと。たき人もあまたひきつゞきて。くるまをいづくにいかにしてたゝんずらむとみるに。ごせんだもはらくとおりてうちみまはして。さりぬべき所にやあらむ。この車どもすこしづつあらさゝせよなどおきつる。しばしきゝいれねば。こはだかにいへるは。このくるまのをのこどもなきかなどいふにて。まどひするけしきどもいと人わろし。さてたゞのけにのけさせて。そらの車をみなながらたてならべつるこそいとめでたけれ。一の御くるまをば。さる物にてつぎ／＼にのりたる人どもも。いかにめいぼくありておぼゆらむと思ひやらる。をいのけられつるゑせ車どもといづくへにかあらん。うしうちかけてゆるがしゆくこそいとあはれなれ。なりよくきら



ざらしげなるをば。いとさしもえせずかし。  
なをさやうに人あなづられならむほどの物  
みは。とどめつべし。又なにごともいみじう  
したてたりとみえながら。ひな／＼しからぬ  
氣色したるは。いとじるしかし。うつくしき  
ちごいたしすへたるこそおかしけれ。にくげ  
なるはみぐるし。なに事も人がらことがらに  
すこしはよるべきにや。なを見るには。かへ  
さこそまさりておかしけれ。昨日はよろづの  
事うるはしくて。一條のおほちのつねはいと  
ひろきも。せばく所なき心ちして。くるまに  
さしいりたる日のあしもまばゆければ。あふ  
ぎしてさしかくし。とかくぬなをりなどしつ  
つ。ひさしくまつもくるしうあせがましかり  
しを。けふはいととくいそぎいでて。雪林うりう  
院。ちそく院などのほどにたてゐるに。よきくる  
まどものかぎりあまりあきたくさしこみては

あらず。さはらかにたちたるなどおかし。日  
はいできたれど。そらはなをうちくもりたる  
に。いかできかんとよるもめをさましおきぬ  
つゝまつほとゝぎすのあまたさへづるにやと  
きこゆるまでなきひゞかすをいみじうめでた  
しと思ふに。うぐひすもそれをまねばむとに  
や。おいたるこそゑしてにせんとおゝしこゝち  
そへたるも。ほかにては心をくれたる心地し  
てにくけれど。所がらにやとり／＼のとりのお  
ほくぞかしと思ひなされて。れいよりはお  
かしうぞきこゆる。しばしばかりありてみや  
しろのかたよりあか衣きたる物どもつれだち  
て。いかにぞことはなりぬやととへば。また  
むこといらへて。御こしどもなどもてかへる。  
かれにたてまつりたらむ人かなと思ふもめで  
たくかたじけなきに。さるげすどものけちか  
くいかでさぶらふにかとぞおそろしきはる

かげにいひつれど。ほどもなくかへらせ給に。御つかひのかざしのあふひもすこしなよかなり。かづらの葉もうちしほみたる。ななかいとえんにみえたり。御くるまのすぎさせたまふにほひよりはじめ。いだし車どものあふきから衣。あをくちはなるなども。いみじうなまめかしうぞみゆる。さうしき所のしうのあを色に。しろき一かざねどもけしきばかりひきかけたるは。うの花のかきねにことならすみえて。ほとゝぎすもかげにかくれぬべくぞあめる。昨日はくるまひとつにあまたのりて。二あめのなをし。さしぬき。あるはかりぎぬなどもみだれきてすだれをときおろし。物ぐるをしきまでたはれたりしきんだちのけふは院のゑかにとて。ひのそふぞくうるはしくして。くるまにもひとりづつのりたりしにおかしげなる殿上わらはなどはかりをのせた

るもおかし。わたりはてさせたまふやをそきとなどかさしもまどふらん。まづわれさきにたたむとおそろしきまできはひさはぐを。かくなひそぎそ。たゞのどかにとあふぎをさしいでてせいすれど。きゝもいれねばわりなくて。すこしもひろき所にとゞめさせたるを。いと心もとなくにくしと思ひたるけに。我ひとり心のどかにとおもへど。人はさも思はぬにやといとうたてあやうきこともありぬべければ。なをことかたよりとせめいひて。やらするみちはむげの山ざとのみちきていとあはれなり。うつぎのかきねをわけゆけば。枝どものいとあら／＼しうおどろがましげにてさしいるをいそぎてとらへんとするに。いとどとくぞすぎゆくやまた。はなすくにはあれど。ひととしてすこしおらせて。あふひかづらのかればみたるがくちおしきに。さしくはへたる

もおかしうおぼゆ。とをきほどはえもとをるまじうみゆる。ゆくさきのちかなりもてゆけば。さしもあらざりけるこそおかしけれ。たれともしらぬおとこ車のしりにひきつゞきて。むごにくるもおかしと見るほどに。ひきわかるゝ所にて。みねにわかるゝといひたるこそおかしけれ。　せちは五月五日にしくはなし。このへのおほどのよりはじめて。いひしらぬたみのすみかまで。わがもとにおほくふかむと思ひさはぎて。ふきわたしてふけらかしたるさうぶよもぎのかほりあひたるかなどは。なをいとさまことにめづらし。いつかは又さる事はある。そらのけ色くもらはしきもいとおかしき。さきの御もとには。ぬひどのよりくすだまとて。いろ／＼のいとどもくみさげて。あやしげにあみたるさうぶをまいらせたるも。さるかたにおかしうこそあれ。とり

いれて三丁たてたるもやのはしらの左右にゆひつけたるをつきごろありて九月九日に又きくをすゞしのさいてにつゝみてまいらせたるに。とりかへてぞすつめるかし。さうぶは。きくのおりまであるべき物にやあらん。御せくまいるわかきひとく。さうぶのさしぐし。物いみつけなどして。さま／＼のからぎぬかざみどもにながきねにおかしき花の枝ども。むら／＼のくみしてつらぬきつゝつけなどしたるは。はじめてめづらしくいふべきにもあらねど。なをつきせずこそおかしけれ。つちありくわらべなどもほど／＼につけつゝ。いみじきわざしたりと思ひて。つねにたもとをみ人にくらべなどえもいはず思ひたるを。そばへたることねりわらはなどにひきとられて。なきなどするもおかし。むらさきのかみにあふちのはなつけ。あをさかみにさうぶのはほ

そくてひきゆひ。もしはしろきかみをねじて  
むすびくはへなどしたるも。さま／＼いとお  
かし。いとながきねをふみのなかにいれて疊  
たるも。いとえんなる心地す。返事かゝむと  
て。かたらふ友だちといひあはせ。みせかはし  
などしたるもおかし。人のむすめやむごとな  
きところなどに。御ふみきこえかはしたまふ  
も。けふは心ことにおぼえて。なまめかしうお  
かしうぞおぼゆる。夕ぐれのと／＼ぎすのう  
ちなのりてゆくもすべて／＼おかし。おなじ  
ころあめふりたるにもまさらね。あさはかな  
るあかぎぬきたるもの。草のいとあをきを  
しりかぎ。うるはしくきりたるやうにしても  
てゆくこそあやしうおかしけれ。世のなかな  
べてあをく見えわたるに。ところ／＼うるは  
しくはあらぬかきねどもに。うのはなの枝も  
たは／＼にさきかゝりたるなどよ。又さやうな

るみちのいとほそきをゆくに。うへはつれな  
く草のおひしげりたるとみゆるを。たゞさま  
になか／＼とゆけば。したはえならざりける  
水のふかくはあらぬが。さら／＼と人のあゆ  
むにつけて。なりつゝとばしりたるいとおか  
し。そばなりけるよもぎのをしひしがれたり  
けるが。わのまひたりけるに。おきあがりて  
ふとかゝへたるかもいとおかし。さていきも  
ていけば。たかき木どもなどある所になりて  
ほと／＼ぎすのいとらう／＼しくかどある聲に  
うちなきたるは。あないみじと心さはぎして  
おぼゆかし。いとあつきほど。夕すゞみとい  
ふほどのもののさまなどおぼめかしきに。お  
とこくるまのさきおふはいふべきにもあら  
ず。たゞのひともしりのすだれあげて。ひと  
りふたりものりてはしらせゆくこそいとすゞ  
しげなれ。まいてびは<sup>舞</sup>はいしらべ。ふえのを



となどきこえたるは。すぎていぬるもくちお  
しう。又さやうなるおりに。うしのしりがひの  
あやしうかきしらぬさまなどうちかゝれたる  
が。おかしきこそ物ぐるをしけれ。又いどくら  
うやみなるに。さきにともしたる松のけぶり  
のかの車のうちにかゝれいりたるもおかし。  
月のいとあかきに小川をわたれば。うしのあ  
ゆむまゝに。すいさう氷をくだきたるやうに水  
のちりたるこそおかしけれ。したすだれをた  
かやかにをしはさみたれば。くるまのながえ  
はいどつやゝかに見えて。月のかげのうつり  
たるなどいとおかし。ゆきつくまでかくてあ  
れかしとおぼゆ。五日のさうぶの秋冬まで  
あるが。いみじうしらみかれてあやしきを。  
ひけとりあけたるそのおりのかのおなじやう  
にかゝれたるいみじうおかし。よくたきし  
めたるたきものゝ。昨日おとゝひけふなどは。

うちわすれたるに。きぬをひきあげたれば。  
けぶりののこりていとかうばしう。たゞいま  
のよりはめでたくこそはおぼゆれ。六月廿  
日ばかりにいみじうあつきに。せみの聲のみ  
たえずなきいだして。風のけしきもなきに。  
いとゞこだかき木どものおほかるが。木ぐら  
くあをきなかよりきなる葉のやう／＼ひるが  
へりおちたるこそすゞろにあはれなれ。秋の  
つゆ思ひやられて。おなじ心にいみじうあつ  
きひるなかに。いかなるわざをせんとあふぎ  
の風もぬるくわびしければ。ひみづにてひた  
しなどあつかひて。たゞいまなにはかりなる  
ことあらんに。このあつさをわすれて。心う  
つす事あり。なんやといふほどに。あたりには  
ふばかりなるうすやうを。なでしこのいみじ  
う色こきに。むすびつけたるふみをとりのれ  
たるこそかきつらんほどおもひやるも。心ざ

しあさくはあらじと思ふに。かくつかふ風だ  
にあかすぬるく覺えつる。あふぎもうちをき  
てまづひきあげつべけれ。またてやみ<sup>手止</sup>もせず  
あふぎをつかひくらしで。ゆふすゞみのまち  
いでたるがうれしければ。はしちかくふして  
きくに。月のいとあかきに。井ちかき所の水  
くみたるをとこそいとすゞしけれ。ましてや  
り水などのちかきは。いふべきにあらず。

南ならずはひむがしのひさしのいたのかげみ  
ゆばかりつやめきたるに。あざやかなるうは  
むしろうちしきて。三尺の木丁のかたびらの  
いとすゞしげに。うすもののひもなどのみえ  
たるをうちかけて。をしやりたればすきて見  
ゆるいとおかし。きみはすゞしのひとへに。  
くれなゐのうちぎのいたうなへぬをこしにす  
こしひきかけてそひふしたりとうちに火とも  
したる二まばかりをさりて。すだれたかくま

きあげて。女ばうわらはなど。なげしにより  
かゝりたるもあり。おろしたるまにうちふし  
たるもあるべし。ひとりに火よくうづみて。  
よきくろばうをたきにははしたるいと心にく  
し。よひうちすぐるほどに。しのびてかどう  
ちたゝくをとするにあはせて。れいの所にと  
心じりの人氣色ばめば。ひとめはかりてやを  
らいざりいたりたるこそさすがにおかしけれ。  
かたはらにびはのよくなるをきたるを。そ  
のかたの人なれば。物がたりのひまゝにし  
のびやかにひきならしたるいとおかしうきこ  
ゆ。六月のつごもり。七月のついたりなどとは。  
いみじうあつければ。よろづの所あけながら。  
うたゝねにてよるもあかすかし。月のころは  
ねおどろきてみいだすもいとおかし。やみも  
おかし。ありあけはいふべきにもあらず。い  
とつやゝかなるいたのはしちかう。あざやか

なるたゝみ一ひらばかり。もしはいとあをや  
かなるうはむしろなどをかりそめにうちしき  
て。三尺の木丁をおくのかたにおしやりたる  
ぞあぢきなきことにこそたつべけれ。おくの  
うしろめたからむよ。人はいでにけるなるべ  
し。うす色のうらいとこくて。うへはいとう  
すきが。ところ／＼かへりたるならずは。こ  
きあやのいとつやゝかなるなどが。いたくは  
ならず。又あまりこは／＼しくはあらぬを。  
かしらながらひききてぞねためる。ひとへは  
かうぞめき。すゞしなどにや。くれなゐのは  
かまのこしのいとながく。きぬの下よりひか  
れたるも。またしたゝかにゆはれぬなるべし。  
そばのかたにうちたゝなはれて。ゆるらかに  
をかれたるかみのほど。ながさをしはかられ  
ておかしうみゆるに。またいづくよりにかあ  
らむ。あさばらけのいみじうきりたちたるに。

二あゐのさしぬきあるかなきかに。うすきか  
うぞめのかりぎぬ。しろきすゞしのひとへと  
ほすこそはあらめ。くれなゐのいとつやゝか  
なるうちぎぬのきりにいたくしめりたれば。  
にほひもいとしみふかきをぬぎかけて。びむ  
のすこしふくだみたれば。えぼうしをしいれ  
たるさまもしどけなくみゆるが。あさがほの  
露おちぬさきに。ふみかゝむとみちのほども  
心もとなく。おふのしたぐさなどくちすさみ  
て。わがかたへゆくに。こなたのかうしのあ  
きたれば。人はおきてやとゆかしきに。みす  
のそばはすこしひきあげたるに。かくてふし  
たるさまや。めとまるらん。しばしみたちたる  
に。さくらのかみのほどにほゝの木のみらさ  
きのかみはりたるあふぎのゑおかしうかきた  
るが。まなの手ならひところ／＼したる。ひ  
ろごりながらあり。みちのくにがみのたゝう

がみのほそやかなるに。はなかくれなるか。  
すこしうつろひたるも。木丁のもとにちりば  
ひたりけり。女は人氣のすれば。きぬのなか  
よりほのみあげたるに。うちえみて見あはせ  
て。やがてなげしにをしかりてぬ。わざ  
とはちなどはせねど。又まことにうちくべき  
心にはあらぬ人にや。ねたくもみえぬるかな  
と思ふべし。こよなき御なごりのあさるかな。  
たれをふしみのとて。すのうちにからはい  
りたれば。露よりさきにおきける人のもどか  
しければといらふも。わざととりたてゝお  
かしき事とて。かくべきことにはあらねど。  
たゞかくいひかはすほどの氣色どものにくか  
らぬなめり。まくらがみなるあぶぎをよび  
て。わがもたるぬりばねあかきかみはりたる  
してかきよするほどあまりちかくよりくる心  
ちして。心ときめきせられて。いますこしひ

きぞいらるゝ。とりてみなどして。こよなう  
ごとくおぼしたる事などうらみつゝ。うちか  
すむることどももあるべし。たゞしばしと思  
ひつるほどに。やう／＼あかうなりて人の聲  
もするは。口たかうなるなるべし。きりのた  
えまみえぬほどにといそぎつるふみも。たゆ  
みぬめるこそなを／＼とこの心はうしろめた  
なけれ。いでぬる人もいつしかと思がほに。は  
ぎのつゆながらをしおりてつけたるふみあめ  
れど。かくてある程はえさしいです。丁子ぞめ  
のうつしのはなやかにほひたるほどなどい  
とおかし。あまりはしたなきほどになりぬれ  
ば。たちいづるにもおかしきありさまは。み  
すてがたきぞにくきや。わがをきつるところ  
もかくてやなど思ひやるもおかしかりぬべ  
し。女もひとしれず思ひいづることもありけ  
むかし。七月十日はかりのひざかりのい



みじうあつきに。おきふしいつしか夕すゞみにもならなと思ふほどに。やう／＼くれがたになりて。ひぐらしのはなやかになきいでつる聲きゝつるこそ物よりことにあはれにうれしけれ。しのびたる人のかよふには。夏の夜こそおかしけれ。いみじうみじかく。つゆもまどろまぬほどにあげぬるよ。やがてよろづのところもあけながらあれば。すゞしげにみわたされたるかほ。いますこしいふべきことどもはのこりたる心地すれば。ふともえたちさらず。かたみになにくれといひかはすほどに。たゞこのゐたるうへにからすのたかうなきてゆくこそけせうなる心地しておかしけれ。まづたかきひむがしみなみなどのかうしあけとをしたれば。すゞしげにみゆるよ。もやに四尺の木丁たてたるまへにわらうだうちをきて。三十許なるそうのいときよげなるう

す物のころもげさなどいとあざやかにさうぞきて。かうぞめのあふぎうちつかひつゝ。だらによみゐたるこそ物きよげにみゆれ。もののけにいたくなやむ人にやうつすべき人とおほきやかなるわらはのすゞしのひとへあざやかなるはかまながやかにきなしてゐざりいでて。こなたざまにたてたる木丁のつらにゐたれば。とざまにひねむきて。いときはやかなるところをとらせて。すゝをしもみうちおがみなどしてよむだらにいとたうとし。けそうの女ばうどもいとおほくそひめて。つとまもらへたるに。ひさしくもあらでふるひいでぬれば。もとの心はうせて。をこなふにしたがひててうせらるゝさま。佛の御心ばへを見るにもいとたうとし。せうといとこなどやうなる。いりたちの人々もあまたあり。又げらういりたちのほうざなどもありて。うしろにゐて

うちわするもあり。みなたうとがりてあつま  
りたるも。れいの心ならば。いかにはぢまど  
はむとみゆるにいとoshi。身づからの身は。

くるしからぬ事といひながら。わびなさたる  
かほの心ぐるしげなるを。つきびとのしる人  
などは。いとoshiう思ひて。木丁のもちか  
くゐて。きぬひきつくろひなどす。かゝるほど  
に典ミ。おはしますに。御ゆなどいへば。北お

もてへとりにゆくほども。わかき人どもは。心  
もとなくゆかしくて。はむをひきさげながら  
ぞいそぎて見るや。ひとどもいときよげにて。  
うす色のもなどい。いたうなへがかりては  
あらずめやすきほどなり。さるの時ばかりま  
でいみじうてうせられて。ことはりなどいは  
せつればゆるしつ。木丁のうちにそこを思ひ  
しか。あらはにいでにけるかなといひて。は  
づかしといみじう思ひたり。かみをふりかけ

てすべりいれは。しばしとどめて典ヘミ。すこ  
しして。いかにぞさはやかにおぼえさせ給に  
やとてうちえみたるも。心はづかしげなり。  
しばしもさふらふべけれど。ときのほどにな  
り侍ればとて。いそぎていでぬ。いとうれし  
うたちよらせ給へるしるしにたへがたうおも  
ふ給へつるに。たゞいまをこたるやうに侍れ  
ば。返々なむよろこびきこえ。さすがあすも御  
いとまのひまにものせさせ給へなどいはず。  
いとしうねき御もののけに侍めり。たゆませ  
たまはざらんむよく侍べき。よろしうもの  
せさせ給めれば。よろこび申侍になんとばか  
りことすくなにていへるは。いとしるしあり  
て。佛のあらはれたまへるとこそはおぼゆれ。  
きよげなるわらはべのちいさくてかみうるは  
しき。又おほきなるがひげおひたれど。思は  
ずにかみながきうらホテマちがみむくつけくなる

もいとおほかり。いとまなげにて。やむごとなうおぼえのあるこそいとあらまほしうめでたけれ。

這本以ニ 後光嚴院宸翰ニ不レ違ニ一字ニ書寫功了。

右清少納言枕冊子原爲一冊標題無之半面十一行書之今分上下加題目且文章之中雖有可疑者以謂 後光嚴院宸翰不違一字書寫不敢改之如假名遣亦偏任本畢

群書類從卷第四百八十

雜部三十五

艶詞

入道大納言隆房卿

あらたまのとし月ををくりむかふるにつけて。おもふ事なきにしもあらぬ身の人しれぬ戀地にさへ。おもひいりぬるよしなさを。こはなに事のありさまぞと思ひあまりのなぐさめに。むかしのあとをたづぬれば。ちはやふる神の御代よりみとのまぐはひして。いもせを忍ぶことたえずぞ有けらし。それよりこのかた。もゝ世をへて。しぎのはねがきをかぞへ。千束まで錦木をたて。ふじの煙を我思ひより立かとおどろき。清見が關の白波は。袖しの浦より立にけるかとぞさはぎける。せりつむ

人もつりするあまも。わぎも子がために心をつくすといへり。業平の中將は。我身一つをもとの身にしてとかなしみ。としゆきの兵衛のかみば。夢のかよひぢ人めよくらんとうらみたり。みわの山本いかにまち見んは。いせのことばなり。色見えでうつらふ物は。こまちがおもひなるべし。さぞなむかしの人だにもかゝるおもひはありあけと。おもひとれどもとられねば。過にしかたよりけふまでに。つきぬおもひのかす／＼を。もしほ草かきあつめ。さゝがにのいとをしともやいふとてなるべし。

人しれすうき身に茂る思ひ草思へは君そ種はまきける



ぬれにし袖はかはく間もなく。またの春秋ゆ  
きかへるぞかし。さゞ浪やあふみの海のみる  
めなぎさにたどり。又月日の數はつもれども。  
いやとしのはにをきどころなくせきがたく  
て。しのびもはてす成にしを。袖に涙のかゝ  
りけるちぎりのほどをしらずして。ありしそ  
の夜のありあけに。おもひしことのはかなさ  
を。

昨日まで恨みし袖にけふよりはあふ嬉しさを包ける哉  
そのあかつきともだちにぐして。あふさかの  
關よりほかへ行たりしに。これのみ心にかゝ  
りていそぎかへるとて。

都へとはやむる胸の足ことに其ひまもなく人を戀しき  
せきぢのには鳥もなくほどに。あふさか山を  
うちこゆれば。ちかくなりゆくはうれしけれ  
ども。さしも人めをつゝむ中なれば。あひみん  
事はいとかたからんとかねてなげかしきに。

いそきても必ず人に逢坂の關にしあらは嬉しからまし  
あふまでこそ思ひもよらざらめ。ひとこと葉  
のひまだになければ。せんかたなくて。

えそいはぬ思心は茂けれと夏野のすゝき忍ひやかにも  
さすがにあさ夕は見ることはひまなければど  
も。それしも中々なるしらずがほなるしたの  
心おもひやるかたなくて。

夜と共に我には物を思はせてさのみや人の知す類なる  
あながちにうらむれば。こよひはさらばたち  
ながらと契て。暮をまつ久しさは。千世ふる  
心ちして。まちえたる心のうちのやるかたな  
さはいひしらず。夜ふけ人しづまりてのちな  
れば。月にしにかたぶくを見るにつけても。  
かきくらす心ちしていとたへがたし。ぐした  
る人いかにや。あけすぎぬるよしつぐるに。  
いそぎかへるあさましさ。

迷ぬる心の内の暗けれはあくるもしらす今朝の歸るさ

かくて月日もすぐるまゝに。せんかたなくて。

さもこそは身に餘りぬる戀ならめ忍ふ心のをき所なき

おもひのあまりになにとなく口ずさむを。あはれとやきゝけん。てならひにしたりけるを人とりて見せしかば。さすがにおもひけるとうれしくて。

なにとなく云し心をかきなかつその水莖の跡を嬉しき

見る事こそなけれども。おもかげは立はなれねば。

立かへる君の面影やかてきは後の世までも我に離るな

ひるとてもわするゝ事はなけれども。をのづからなぐさむる事もあり。くるれば世中もしづまり。又まどろまんとうちふすおりは。さまざまにおもひつゞけられて。かくてはいかで世にもながらへんとおぼえて。

君が事思ひ臥あゝの床なれや戀しかりもにかくは戀しき

ひとかたならずところせき人のありさまかな

と思ひつゞけられて。

いつとなく君に心を筑波山このもかのもとに物を社思へ

いつとなきくるしさをあぢきなくあんぜられて。

あつまちのすかのあら野の初お花いつ迄物を思亂れん

ひまもなく戀しきまゝに。なみだのおつる事やむときなれば。

みさこあるとしまか磯の浪たにもかけぬ折々有と社聞

かりそめにまどろみたりし夢にたゞあれいかにもしてあひみんといふとおもひてうちおどろくまゝに。いとかなしきことかすまさりて。日ごろよりげにこひしくて。

うたゝねにみしよの夢や左纏打はへてのみ人の戀しき

人あまたある中にても。めかれせずまもらるれば。人あやしと思ふらんとおもひしことを。

つく／＼と見るに心はくれは鳥怪し／＼人のめにや立竝

たま／＼しづかなりしひるつかた。立ながら  
物いひし所へ。人のきたりしかば。あやしと  
やみつらんとわりなくて。

よそ乍らふれる槽の移香を重ねてけりと人な咎めそ  
わかき人々あつまりて。よそなるやうにて物  
がたりなどするほどに。しのびかねたる心中  
色にや出て見えけん。すづりをひきよせて。  
ちかのしほがまとかきて。なげをこせたりし  
ことのおもひいでられて。

思ひかね心は空にみちのくのちかの歸電近きかひなし  
四月みあれの日。人のつかひにてちながら  
あひたりしに。いまはこの世を思ひすてゝ。い  
かならん山の中にも行て。もろともにあらん  
とかたらひし時。かみにつけたりしあふひを  
とりて。これはなにぞとひしもわすれがた  
くて。

しるらめやせて萎のかたければ猶たにたるとるけふのかしを

みづからとらせたりしかへりごとを。もとゆ  
ひのやうにひきむすびて。これはたがぞとな  
げをこせたりしは。うれしながらむねうちさ  
はぎしことを。

うれしさをいつか忘れん年ふりて我元結に霜は置共  
さしもしのべどもいかでかもりけん。人きゝ  
てけるを。あながちになげくもことはりにお  
ぼえて。心ぐるしさいふばかりなくて。

覺つかないかなる風に散にけん誰も忍ぶの杜の音のは  
かくてしのぶもなをもりきこゆるはよしな  
し。心のうちのしるべにてあらんといひしも。  
いまはおもひたえなるときこゆれば。

いかにせん心一つの通ひちもはては勿來の闇となる覽  
いまはふみをだにかよはすまじければ。この  
たびばかりぞとて。こまかにかきたるをみる  
につけても。なみだとゞまらず。

此まゝにたえてもいはぬ色なりとそめにし心思返すな

かくくるしき事になりぬるは。我やはあやま  
ちたる。みのとがにてこそあれといひしかば。

情なき人の心は果敢くてさのみはいかゝ身を恨むへき

あながちになげくをあはれとやおもひけん。  
さらば月に一たびふみばかりをとらせんとた  
のめしもむなしくてすぎゆけば。

頼めこしその月竝も過にけりかきたえぬるか水堂の跡

うちやすむ間もなく。たちまじりたるくるし  
さに。かゝる物おもひをさへうちそへて。かな  
しさあぢきなさ。

盡もせぬ身の苦さに打そへていとかく物を思はする哉

かゝる物おもひに。身もかげのやうになりた  
るも。おしからぬみなれども思ひつゞくれば。  
ながらへてこそまれのひまも見めとおもふお  
りは。いのちもおしからずしもなければども。く  
すしに見せでやかんとするが。さすがにおそ  
ろしければ。

今更にやく共何か惜からん常は思ひにもゆる身なれは  
かくてかきこもりたる心の中は。きしかた行  
末おもひつゞけられて。まぎるゝかたなくわ  
びしければ。夜もすがら目もあはぬまゝにつ  
まどをしあけたれば。廿日あまりの月くまな  
くさし入たるにつけても。なぐさむかたなし。  
おりしも文などどもて行しも人もなければ。い  
づくにあるとだにきかで歸る心ばそさやるか  
たなく。月のひかりはゆかぬ所なければ。こひ  
しき人の行衛もしるらんとおぼえて。

我思ふ君かあたりは月やしる影の至らぬ隈もなければ  
しづかなりし夜。つくぐと思ひし心の中は。  
人しれぬ戀のすみかを尋ねれば我臥床の上にそ有ける  
しろきとりのとびかふる。そなたのこすゑを  
とぶにつけても。とひけん人のこゝろの中を  
しはかられて。

君か宿こすゑにかよふ鳥ならは思ふ心を行てさえつれ



しづかなる日。とを見いだしても。庭にたま水のあるをみて。

君こひておつる涙のたま水の行かたもなき心とをしれわすれ草といふ物の心ちよげにおひたるを見るにも。

君が事思ふもくるし忘草わするゝことを我にをしへよとよのあかりのよひにはかにもえ出て。うちわたりもまづかきほどなれば。人々あつまりてのゝしる中にも。この事のみわすれがたく。心にをこたらねば。われながらあさましくて。もえまさる煙の中の心こそ時をもわかす身を焦しければ。そのしたしき人をみればあはれにむつまじくて。

武藏野の草のはむけそむつまじき若紫のゆかりと思へは八月十六日のこむまびきの夜。ひきわけに院(てい)へまいりしかば。月いとあかくてさらぬだになぐさめがたきおりから。いとせんかたなく

て。あとにひかせたるこまをみて。

けふやさばうらやましくも逢坂の關を越ける望月の駒かくてすぐすほどに。あひみし月日にも成ぬれば。此日しもよそながらあひたりしかたはらなる人に。けふはいくかぞととひしかば。こぞをおもひいづるにやといとあはれにて。

そのさきはいとかく計りなかりしをまさる思はこそけふよりそのよいとふくるほどに。あひたりし所へ行てうつふしたりしに。五でうわたりにてなげきけんも。かぎりあればこれほどはあらじとおぼえて。

歎きつゝ春や昔に變らしと云けん人をよそにやはきく又その所に行て心をなぐさむるも。つねよりもののかなくしてなきふしたるに。袖のつめたくて。かほにさはれば。さくらのうはぎ色かへりてしるかるらんと思ひわづらふほどに。ある人こゝをすぐとて。袖にみなとのさはぐ

かな。もろこし舟もよせつばかりにと。なに心  
なくながめてすぎしかば。おりからみゝにと  
まりて。

何となく濡る袂におとるかん袖に湊のさはくなるよに  
すぎにしかたの事おもひつゞけられて。

そのまゝに又も結はん草枕いくらかちりの積はつらん  
あまりになげくをいとおしとや思ひけん。し  
るべきにてこそあるらめ。たちながら物いは  
んそにてまちてよといひしかば。いとうれ  
しくて待ぬたりしかども。ありあけも入かた  
になりにかば。なく／＼かへるとて。

待かねてあはれとともに歸りけり涙は袖に月は枕に

神ほとけの御あはれみにやありけん。思ひの  
ほかにゆきあひたりしかども。あまりのうれ  
しさのあまりに心さはぎして。日ごろの事も  
思ふばかりもいはれぬ程に。夜も明がたにな  
りしかば。ありあけのくまなくたちのぼる影

を。いとまばゆげに行過しすがたの。いついか  
ならん世に。わすれなんといふかたなくて。

たまさかに我待えたる月なれば臆けならぬ有明のかけ

あまりめづらしかりしまゝに。むげにあさま  
しきまでうちとけたりしことのいかゞ思ひけ  
んとさま／＼はづかしくて。こと人にもかゝ  
るありさまはいまだ見えぬ物を。いかばかり  
わりなきぞと。我ながらあさましくて。

をしなへてかゝると君や思ふ覺餘なる送むつれにし社

あはれこのまゝにて思ひはなちて。ばやと思し  
かば。

此まゝに君に心を盡さすてあすより物を思はずもかな

さとに出てのち。まれにひまありしに。わりな  
くしてたち入たりしこそなか／＼なりしか。  
さ夜ふけて入しづまりてのちなれば。ほどな  
くかへるなごりのおほさこゝろまよひつ。(ついで)そ  
なたのこすゑのかくるゝまでかへり見つゝす

ぎゆくみちすがら。とりのなきしかば。

恨めしやいつしか鳥の鳴つ覽厭ふは今宵一夜はかりか

かへるあしたしも。又いつをまつべしとも。かぎりの中々よひよりもなをなげかれければ。

今宵さへ忍ふ心の慰めにけさしものと物そかなしき

あまりにあさましきまでおぼゆれば。とりあへず物にものでかちより行たれば。れいのあはぬ物ゆへ。むなしくかへるさのくるしければ。

たとりつゝ歸る袂にかけてけり行もならはぬ道芝の露

ひさしく世にあるまじき夢を見るといひし事のわすれがたくて。

後の世を哀と君かいふならはしなん命も何かおしまん

そののちまたひまなくて。あひみるべくもなければせんかたなきやうにて。そのへんに夜な夜なゆきて。かたはらなるふるきいるに立かくれてのみ空をながむれば。軒の忍ぶのし

げりたるを。

いたつらに佇む軒の忍ふ草なれさへ袖に露なこほしそ

かくは夜な／＼たゝずめども。いまはひまもあるまじきに。思ひはなちてよといへば。まことに人めのしげさはことはりなれども。またなぐさむばかりのなさけをもかけよかしと。いとうらめしくて。

諸共に心は通へあし垣のさこそひまなきすまゐ也とも

かゝるたゞすまゐよをかさねてすごせど。ありとだにしられでかへれば。

幾夜へぬあはぬものゆへ行かへり道芝の露打拂ひつゝ

なげきつゝすすす月日をかぞふれば。ことしもすでに暮ぬ。

戀わひてすすす月日を數ふれば今年も早く暮にける哉

年もかへりぬればことしより思ひすてゝ。身をこがさじと思へども。つきせすかなしければ。

新しき春返り來ることしもやこそに變らす物を思はん  
思ひこめてのみすぐるあぢきなさを。

徒らに年ふる中のたくひ哉むすほゝれたる岩代のまつ  
物へまいるとて。そのかどをすぐれば。むねう  
ちさはぎて。見てすぎがたきといひけん人も  
ことはりにて。

門のうちへ思ひ入ぬる心こそ我過ゆくと妹につくらん  
うつゝになさけなきゆへにや。夢にもさての  
み見ゆれば。

なそやこの戀し／＼と思ひねの夢にも君か情なるらん  
かくおもふけにや。このたびは思ふまゝにて  
見ゆれば。

ねぬる夜の夢に心の變らすはさむる現も嬉しからまし  
とし月つもれば。やう／＼わするゝ事もやと  
おもへども。日にそへてふかくのみなれば。  
かなしくて。

ともすれば身にそふ君か面影ないかにもえこそ思ひ放れね

ある所にて人のふみをもちたるを見れば。心  
にはなれぬ人の手にわたるを。つく／＼とお  
もへば。おなじ所にすむ人。それはそなりとい  
へば。いとあはれにて。うちもをかすまもら  
るれば。

一すちに同じ流と見つるよりこの水くきの袖ぬらす哉  
物をへだてゝ物いひたはぶれなどするにつけ  
ても。うらめしき物から。忍びがたくて。

聲をたに物思ふ我に聞せずは驚くほとに歎かましやは  
なにのまひとかやに入て。はなやかなるふる  
まひにつけても。あはれ思ふ事なくてかゝる  
まじらひをもせば。いかにまめならましとお  
ぼえて。又さしもうらめしくあだなれば。見る  
事つゝましく。

ふる袖は涙に濡てくちにしをいかに立まふ我み成らん  
さてもかゝるなさけなき事は。我ならざらん  
人には。よもこれほどあらじをとおぼえて。



なそもかく我から人の辛からん蜚の蒨藻に宿りせね共  
おもはぬ事もなく。思ひつゞけるまゝに。か  
くてすぎんほどに。あらぬさまにやきゝなさ  
んと思ふかなしさはいふばかりなし。あらま  
し事になみやこさんといひしも思ひいでられ  
て。もしさもあらばいかゞせんと思ふも。むげ  
にいまゝしければ。

波こさぬさきより袖はぬれに梟思ひつゝくる末の松山  
すぎにしかたの事はわすれずあんせらるゝ中  
にも。夢のやうにうちとけにし夜。あさましか  
りしふし所にしも。月なき空のけしきいと  
おぼつかなくて。かへるさのみちにまよひたり  
しも。おもひいでられて。

豫てより有し迷にしるかりき斯る戀ちに迫るへしとは  
いかなる事にか。をのづからあひても。めを  
だに見あはせじとすれば。あやしき物から。む  
げに心うくて。

蜚のかるみるをあふにて有したに今は渚によせぬ波哉  
わりなきひまもあらば。いはんといひしほど  
に。それになぐさみてもすぎしを。

自からひまたにあらは逢みんと頼めし程は慰みもしき  
心よかりしそのかみも。思ひのみしげかりし  
に。いまの心にくらぶれば。むかしは物をも  
おぼえで。

人しれぬ思ひをかけし其かみも斯やばぬれし袖の涙に  
わりなくしてふみをとらせしを。つちになげ  
おとしてとらざりしかば。

玉章を今はてにたとらしとやさこそ心に思ひすつ共  
我よりほかは。物おもふ人は又もあらじとお  
ぼえて。

つきもせず燃る思ひや我計りふしの高ねも煙のみこそ  
神のやしろにまうでて。みてぐらたてまつり  
にしおりも。此事おもひいでられて。よにむつ  
ましかりしかば。神の御しるしにこれをわす

ればやと思ひし心もいやまさりなりしかば。

是も又神はうけすそなりにける御手洗川の硯のみかは  
いまはすがたをだに見せじとせしあさましさを。

帯木の有と計りは見せよかしこそ伏屋のよそに成共  
まめやかにこの思ひのみつもれば。のちの世  
のせめとならんとうたがひなきあさましさを。

さも社はいけ覽限つらからめ後の世をたに哀とはとへ  
もし世のすゑに。ひまもありぬべきたよりい  
でくると。まづ心見るべきを。それも我身の久  
しかるべきならねば。

行末をえこそ契らね定なき世に永らへん我みならねは  
あながちにわれになさけをすてゝも。人のた  
めなにかはとおぼえて。

かくはかり我に心を盡させて思へは君か何にかはせん  
てならひしたりしほうぐどものおちちりしか

ば。なにとなくめにたちて。とりてもちたるに  
つけても。返事などせしこと思ひいでられて。

徒におちちる君か言のはもなとか我みに驕かざるらん  
そこにありともしらす。すがたをも見ず。こゑ  
をだにきかずは。中々おもひをこたふる事は。  
ありもやせんとおぼえて。

かき絶て行衛もしらぬ君ならは思忘るゝ時もあらまし  
此まゝにはかなくなりなば。ゆくすゑあらん  
事もかたくおぼえて。

誰と君この世中にとまりゐん我はよみちに先立ぬへし  
あひぬ事の後まで心にかゝらん事の返々あ  
ぢきなくて。

戀しなはうかれん玉よ暫したに我思人のつまに止れ  
さてもわれ 君につかへて こしかたは

春はみやまの 花になれ いまは雲井の

月かけの のとかにてらす 御代にあひて

こゝろゆく事 おほけれと かすかの山の

ふちなみの こたかき色に 人しれぬ

心をつくし	そめしより	ねてもさめても
わすられぬ	思ひなるかな	よしなきは
かつみるうちも	むねさはき	見ぬまはまして
けふいくか	いつか／＼と	またれつゝ
さるはまたみる	たひことに	人にことなる
ふしはゝ	はかなき事も	さもそたゝ
ためしもなきと	思ひしむ	ことのおほきは
なかつ川	まさこのかすに	たとへても
あかすおほえて	なにとして	かへしも人に
ことなると	思ひにつけて	中々に
つらくさへこそ	おほえけれ	けふ又見ても
またこひし	見かひおほき	たまつさは
さらにもいはす	てにふれし	物としなければ
はかもなき	ちりのはしまて	なつかしみ
とりつみてをく	かくまてに	たゝあちきなく
おほゆるに	みかさの山の	さかき葉の
宮このたひに	うつるとか	あめのしたみな
さはきつゝ	わきていかにと	おもふにも
さばく心は	おほかせに	くたくるなみに
ことならず	思ふもくるし	雲のうへに
かよひし道は	たえまおほみ	たま／＼かゝく

ともし火の	影ほのかなる	よひのまの
なこりはさらに	さてしもそ	せんかたもなき
こゝちなる	としたちかへる	いそきにも
なにか春の	ひかりをも	たれをかまたん
すさまじや	花のにしきを	たちきても
きみえぬ色は	ものうくて	ことにもあらぬ
なみたこそ	たもとにかゝれ	かくしつゝ
むつきとへぬる	やゝふけし	夜半にあひみし
そのほと	心のまよひ	いへは元に
たとへていはん	かたもなし	そのちさらに
こひしさの	色をそへぬる	心ちして
やかてうかれし	たましゐは	袖の中にや
いりにけん	身にはかへらず	つく／＼と
なかむる心	いとゝしく	あられぬまゝに
さりとは	神ほとけにそ	いのらめと
たのみなれにし	みたらしの	水のなかれを
たつねても	みそきかひなき	あちきなき
さてもかたへの	もろ人に	またさそはれて
ちはやふる	神のきたのに	おもむけは
はれぬ心を	しりかほに	空さへくれし
あめのうち	あまやとりして	をくるまを

かれとはかりに 見やられし  
めにかけて さてたにしはし

おもふかひなく やりする  
そよさらに しひかたきを

そのくるかすに あかすとも  
あやにくに とをさかり行

ほのかになりし ほとよけに  
なみたこそ せきもとまらず

さてもかゝらぬ おりゝの  
しよぬちもく これらをたより

見ましなれまし いはましと  
たちそそふ はるになりても

廿日になりぬ あかさりし  
ときのまの それはかりなる

いかにせんゝ いかにせんゝ  
降り霞む雨も涙に立そひて

ためしなき心の中を言葉のいはゝあたにも成ぬへき哉

右隆房卿艶詞以一本校合  
更以扶桑拾葉集一校了

たけの一むら  
あらはやと

なこりよいかに  
まはなくて

ひまもとめてん  
こすゑさへ

そゝるにすゝむ  
おちまされ

てうはいせちゑ  
さならても

たゝおもかけの  
けふははや

たゝ一たひの  
うきよけに

方丈記

鴨長明

行川のながれは絶ずして。しかも本の水にあ

らず。よどみにうかぶうたかたは。かつきえか

つむすびで。ひさしくとゞまゝる事なし。世中

にある人とすみかと又かくのごとし。玉しき

の都のうちにむねをならべいらかをあらそへ

るたかきいやしき人のすまゐは。代々をへて

# 方丈記

鴨長明

つぎせぬものなれど。是をまことかとたづぬ

れば。むかし有し家はまれなり。あるは去年

やけ・今年<sup>(ふれい)</sup>は作<sup>(れい)</sup>り。あるは大家ほろびて小家

となる。すむ人も是におなじ。ところもかはら

ず人もおほかれど。いにしへみし人は二三十

人が中<sup>(なかつ)</sup>にわづかにひとりふたり也。あしたに

死<sup>(し)</sup>し。夕<sup>(ゆふ)</sup>にむまるゝならひ。たゞ水の泡<sup>(そい)</sup>に

たりける。しらずむまれしぬる人。何方よりき

たりていづくへか去。又しらすかりのやどり

誰か爲<sup>(ため)</sup>にか心を悩<sup>(なや)</sup>し。何によりてか目をよる



こばしむる。其あるじとすみかと無常をあらそひさるさま。いはゞ朝がほの露にことならず。あるは露落て花残れり。残るといへども朝日にかくれぬ。或ははなはしほみて露なをきえず。消すといへども夕をまつことなし。をよそ物の心をしれりしよりこのかた。四十あまりの春秋を送れるあいだに。世の不思議をみる事やゝたび／＼になりぬ。去にし安元三年四月廿八日かとよ。風はげしく吹てしづかならざりし夜。戌のときばかり。都のたつみより火出来りて。いぬゐに至る。はてには朱雀門。大極殿。大學寮。民部省などまで移りて。一夜の程に塵灰となりにき。火本は樋口富小路とかや。病人をやどせるかりやより出来たりけるとなむ。吹まよふ風にとく移行ほどこに。あふぎをひろげたるがごとくすゑひろになりぬ。とをき家は煙にむせび。ちかきあたりは一向

ほのほを地に吹つけたり。空には灰を吹たてたれば。火の光に映じてあまねく紅なる中に。堪ず吹きさられたる炎。とぶがごとくにして。一二町を越つゝ移行。其中の人。うつしこゝろあらむや。あるひは烟にむせびてたふれふし。或は炎にまかれてたちまちに死ぬ。あるひは又わづかに身一からくしてのがれたれども。資財をとり出るに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となりにき。其費いくそばくぞ。此たび公卿の家十六焼たり。まして其外は。かすへ記すに及ばず。すべて都の中三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人。馬牛の類邊際をしらず。人のいとなみ。みな愚なる中に。さしもあやうき京中の家を作るとて。寶を費し心を悩ます事は。すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。又治承四年卯月廿九日。中御門京極の程より大なる辻風おこりて。六條わたりまでい

かめしくふきける事侍き。三四町を<sup>イモ</sup>かけて吹まはるまゝに。其中に<sup>イモ</sup>こもれる家ども。大なるもちいさきも一としてやぶれざるはなし。さながらひらにたふれたるもあり。けたはしらばかり残れるもあり。又門のうへを吹はなちて。四五町が程に<sup>イモ</sup>をき。又垣をふきはらひて隣とひとつになせり。いはむや家のうちの<sup>イモ</sup>たからかすをつくして空にあがり。檜皮<sup>イモ</sup>ぶき板の類ひ。冬の木のはの風に亂るゝがごとし。塵を烟のごとくふきたてたれば。すべて目も見えず。おびたゞしくなりどよむ音にものいふ聲も聞えず。彼地獄の業風なりとも。かばかりにこそはとぞおぼゆる。家の損亡するのみならず。是をとりつくろふ間に身をそこなひてかたわづけるもの數をしらず。此風ひつじさるの方にうつり行て。おほくの人の歎をなせり。辻風はつねに吹ものなれど。かゝる事

やはある。たゞごとにあらず。さるべきもの<sup>イモ</sup>のさとしかなとぞうたがひ侍りし。又おなじ年の水無月の比。にはかに都遷侍りき。いと思ひの外なりし事也。大かた此京の始をきけば。嵯峨天皇の御時都とさだまりにけるより後。すでに<sup>イモ</sup>四百・さいをへたり。ことなる故なくてたやすくあらたまるべくもあらねば。是を世の人たやすからず愁あへる様ことはりにも過たり。されどとかくいふかひなくて。御門より始たてまつりて。大臣公卿悉攝津國難波の京に移り給ひぬ。世につかふる程の人誰かひとり故郷に残りをらむ。つかさくらゐに思ひをかけ。主君のかげをたのむ程の人は。一日なりともとく移らむとはげみあへり。ときをうしなひ世にあまされて期する所なき者は。愁ながらとまりをり。軒をあらそひし人のすまゐ。日を経つゝ荒行。家はこぼたれて淀

川にうかび。地は目の前に島となる。人の心皆あらたまりて。馬鞍をのみをもくす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみねがひ。東北國の庄園をば好イモます。其時をのづから事のたより有て。攝津國・今の京に至れり。所の有さまをみるに。其地程せばくて條里をわるにたらず。北は山に傍てたかく。南は海に近くて下れり。波の音つねにかまびすしくて。嘲風ことにはげしく。内裏は山の中なれば。かの木丸殿もかくやと中々やうかはりて優なるかたも侍りき。日々にこぼちて川もせきあへずはこびくだす家はいづくに作れるにかあらむ。猶むなしき地はおほく。造れる屋はすくなし。古郷は既にあらて新都はいまだならず。あるとし有人は。みな浮雲の思ひをなせり。本より此所に居れる者は地をうしなひて愁へ。今うつり住人は土木の煩ある事を歎く。道の

邊を見れば。車にのるべきは馬にのり。衣冠布衣なるべきはおほくひたゝれをきたり。都のてぶりたちまちにあらたまり。たゞひなびたる武士にことならず。是は世の亂る瑞相とか。聞イモをけももしろく。日を経つゝ世中うき立て人のこゝろもおさまらず。民の愁つるにむなしからざりければ。同・年の冬イモなを此京にかへり給ひにき。されどこぼちわたせりし家どもはいかになりけるにか。ことごとくもとの様にしもつくらず。ほのかに傳へ聞イモににしへのかしこき御代には。憐イモみをもて國を治め給ふ。則御殿に茅をふきて・軒イモをだにもとゝのへず。煙のともしきを見たまふときは。かぎりあるみつぎ物をさへゆるされき。是民を恵み世をたすけ給ふによりてなり。今のよの中の有さま。むかしになすらへて知ぬべし。又養和の比かとよ。久しく成てたしかにも覺

えず。二年が間世中飢渴して淺ましき事侍き。  
 或は春夏日でり。或は秋冬大風大水などよか  
 らぬ事共打つゞきて。五穀ことくくみのら  
 す。空しく春耕し夏うふるいとなみのみあり  
 て。秋刈冬收るぞめきはなし。是によりて國々  
 の民或は地をすてゝ堺を出。或は家を忘て山  
 に住。さまざまの御祈はじまりて。なべてな  
 らぬ法ども行はるれ共更に其しるしなし。京  
 のならひ。なにわざにつけても。みなもとは  
 田舎をこそたのめるに。絶てのぼるものなけ  
 れば。さのみやはみさほも作りあへむ。ねんじ  
 侘つゝ様々の寶物かたはしより捨るがごとく  
 すれども。更に目みたつる人もなし。たまた  
 まかふるものは金を軽くし粟を重くす。乞食  
 道の邊におほく。愁悲しふ聲耳にみてり。前  
 の年かくのごとく。からくして暮ぬ。明る年  
 は。たちなをるべきかと思ふ程に。あまさへえ

やみ打・そひて。まさる様に跡かたなし。世  
 の人みな飢死ければ。日をへつゝきはまり行  
 さま。少水の魚のたとへに叶へり。はてには笠  
 うちき足ひきつゝみ。身よろしき姿したる者  
 「ひたすら家ごとくをい」  
 「ども」ありくかと思れば則たふれふしぬ。つ  
 いひぢのつら路の頭に飢死ぬる・類ひは。かず  
 もしらず。とりすつるわざもなければ。くさ  
 き香世界にみちゝて。かはり行かたち有さ  
 ま。目もあてられぬ事おほかり。いはむや川  
 原などには。馬車の行ちがふみちだにもなし。  
 あやしきしづ山がつも力つきて。薪・さへと  
 もしくなりゆけば。たのむかたなき人は。み  
 づから・家をこぼちて市に出てこれをうるに。  
 一人が持て出たるあたひ。なを一日が命をさ  
 ざるにだに及ばすとぞ。あやしき事は。か  
 かる薪の中ににつき。白がねこがねのはくな  
 ど。所々につきてみゆる木のわれあひまじれ



り是を尋ねれば。すべき方なきものゝ古寺に  
至りて佛をぬすみ。堂の物の具をやぶり取て  
わりくだけるなり。濁惡の世にしも生れあひ  
て。かゝる心うきわさをなむ見侍りし。又いと  
あはれなる事・侍りき。さりがたき女男など持  
たる者は。其思ひまさりて志ほそきは。かなら  
ずさきだちて死ぬ。其故は我身をば次になし  
て。・男にもあれ女にもあれ。いたはしく思  
ふかたに。たまゝ乞得たる物を先ゆづるに  
よりて也。去ば親子ある者は定まれるならひ  
にて。親ぞさき立て死にける。父母が命盡て  
ふせるをしらずして。いとけなき子のその乳  
房に・すひつきつゝふせるなども有けり。仁和  
寺に慈尊院の大藏卿隆曉法印といふ人。かく  
しつゝ數・しらずしぬる事をかなしみて。聖を  
あまたかたらひつゝ。その首の見ゆるごとく。  
額に阿字を書いて縁を結ばしむるわざをなむせ

られける。その人數をしらむとて四五兩月が  
ほどかぞへたりければ。京の中一條より南。  
九條より北。京極よりは西。朱雀よりは東。道  
の邊にある頭。すべて四万二千三百餘りなむ  
有ける。況や其前後に死ぬるものも多く。川原  
白川西の京。もろ／＼の邊地などをくはへて  
いはゞ。際限も有べからず。いかにいはむや  
諸國七道をや。近くは。崇徳院の御位の時長承  
の比かとよ。かゝるためしは有けりと聞ど。  
その世のありさまはしらす。まのあたり  
めづらかに悲しかりし事也。又元暦二年の頃  
大なるふる事侍りき。其様よのつねならず。山  
はくづれて川をうづみ。海はかたぶきて陸を  
ひたせり。土さけて水わきいで。いはほわれ  
て谷にまろび入。渚こゝ船は波にたゞよひ。道  
行駒は足の立ど・まどはせり。況や都のほとり  
には。在々所々堂舎塔廟一としてまたからず。

或はくすれ或はたふれぬる間。塵灰立上りて盛りなる煙のごとし。地の震ひ家のやぶるる音いかづちにことならず。屋(ヤ)の中にをれば忽に打ひしげなむとす。はしり出れば又地われさく。羽なければ空(そら)へもあがるべからず。龍(りゅう)ならねば雲にもものぼらむ事難し。おそれの中に恐るべかりけるは只地震なりけりとこそ覺侍りし。其中に有武士のひとり子の六七ばかりに侍しが。ついひぢのおほひの下に小家を作りて。はかなげなる跡なし事をして。あそび侍りしが。俄にくづれうめられて。あとかたなくひらに打ひさがれて。二の目など一寸ばかりうち出されたるを。父母かゝへて聲もおしまず悲しみあひて侍しこそあはれにかなしくみ侍しか。子のかなしみには。たけきものも耻をわすれけりと覺へて。いとおしく理かなとぞ見侍し。かくおびたゞしくふる事は。しば

しにてやみにしかども。其餘波しばゝ絶す。よのつねに驚くほどの地震(ちしん)二三度ふらぬ日はなし。十日廿日過にしかば。やう／＼間どをになりて。或四五度二三度もしは一日(いち)まぜ。二三日に一度など。大かた其名殘三月ばかりや侍けむ。四大種の中に水火風はつねに害をなせど。大地に至りては殊なる變をなさず。むかし齊衡の比かとよ。大なるふりて。東大寺の佛のみぐし落などしていみじき事ども侍けれど。猶此たびにはしかずとぞ。則人みなあちきなき事を述て。いさゝかこゝろのにごりも(えい)うすらぐかと見し程に。月日かさなり年越しかば。後は言の葉にかけていひ出る人だになし。すべて世の有ににくき事。我みと栖(い)とはかなくあだなる様。またかくのごとし。いはむや所により身のほどにしたがひて。心(こころ)をなやます事はあげてかぞふべからず。もしを

のづから身かなはずして。權門のかたはらに居る者は。ふかくよろこぶ事（イミ）はあれども。大に樂しぶにあたはず。歎（セツナイ）ある時も聲をあげて泣事なし。進退やすからず。立居につけて恐れをのゝくさま。たとへば雀の鷹の巢に近づけるがごとし。もしまづしく・富る家（シテイ）の隣にをるものは朝夕すばき姿を耻てへつらひつつ出入。妻子僮僕のうらやめるさまみるにも。富る家の人のないがしろなるけしきを聞にも。心念々にうごきてときとしてやすらかならず。もしせばき地に居れば。近く炎上する時。その害（ガイ）をのがるゝ事なし。もし邊地にあれば往反わずらひおほく。盜賊の難はなはだし。又いきほひ有者は貪欲ふかく。ひとり身なるものは人にかるしめらる。實あればおそれ多く。貧しければなげき切なり。人をたのめば（ミ）み他のやつことなり。人をはごくめば心恩

愛につかはる。世にしたがへば身くるし。又したがはねば狂（クイ）へるに似たり。いづれのところをしめ（ミ）。いかなるわざをしてかしはしも此身をやどし。玉ゆらも心を慰むべき。我身（ミ）。父。かたの祖母の家を傳へて。久しく彼所にすむ。其後縁かけ・身おとろへて。忍ぶかた（イミ）くしげかりしかば。つゐにあととむる事を得ずして。三十餘にして更に我心と一の庵を結ぶ。是を有し住居になすらふるに十分が一なり。たゞ居屋ばかりをかまへて。はかくしくは屋を作るに及ばず。わづかについちをつけりといへども。門（カド）・たつるにたづきなし。竹を柱として車（クルマ）やどりとせり。雪ふり風吹毎にあやうからずしもあらず。所は川原（カハ）ちかければ水の難もふかく。白波の恐もさはがし。すべてあられぬ世をねんじ過しつゝ。心をなやませる事は三十餘年也。其間折々のたがひめに。をのづ

からみじかき運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎て。家を出世をそむけり。もとより妻子なければ。捨がたきよすがもなし。身に官祿あらず。何に付てか執をとどめむ。空しく大原山の雲に臥て。又五かへりの春秋をなんへにける。爰に六十の露きえがたにをよびて。更に末葉のやどりをむすべる事あり。いはゞ旅人の一夜の宿を作り。老たるかひこのまゆをいとむがごとし。是を中比のすみかになすらふれば。又百分が一にだにも及ばず。とかくいふ程に齡はとしくにかたぶき。すみかは折々にせばし。其家の有様よのつねならず。ひろさわづかに方丈。たかさは七尺ばかりなり。所を思ひ定めざるが故に地をしめて作らず。土居をくみ。打おほひをふきて。つぎめごとにかけがねをかけたなり。若心に叶はぬ事あらば。やすく外に移さむが爲なり。其改

め造る時（ことい）いくばくの煩がある。つむ所わづかに二兩なり。車（イモ）の力をむくふる外には。更に他の用途いらす。いま日野山の奥に跡をかくしてのち。南（ひんがしに三尺あまりのひさしをさして柴折くふるよすがとす）に假の日がくしをさし出して。竹のすのこをしき。その西に闕伽棚（れい）を作。り。うちには。西（北）の垣（北）にそへて。阿彌陀の畫像を安置し（元はに普賢をかけたまへに法華經ををけり觀のきはにわらびのはとせしきてこの床とす西南に竹のつり）。落日（イモ）をうけて眉間の光とす。かの帳の扉に。普賢ならびに不動の像をかけたなり。北の障子のうへに。ちいさき「棚をかまへて。くろき皮籠三四合を置（けりイ）。すなはち和歌管絃往生要集ごときの抄物を入たり。傍に箏琵琶をのの一張をたつ。いはゆるおりごとつぎびわこれなり。東（東）にそへてわらびのほどろをしき。つかなみをしきて夜の床とす。東の垣にまどをあけて。こゝにふづくえを出せり。枕のかたにすびつあり。これを柴折くぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ。あばらなるひめ垣を



かこひて園とす。すなはちもろ／＼の藥草を  
栽<sup>イ</sup>たり。假<sup>モ</sup>の庵の有様かくのごとし。其所の  
さまをいはず。みなみかけひあり。岩をた<sup>た</sup>み  
みて水をためたり。林の軒<sup>キ</sup>近ければ。つま木を  
ひろふにともしからず。名を外山といふ。正木  
のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西<sup>ア</sup>は晴た  
り。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波  
を見る。紫雲のごとくして西方に匂ふ。夏は時  
鳥を聞。かたらふごとにしでの山路をちぎる。  
秋は日ぐらしの聲耳にみてり。空蟬の世をか  
なしむごと聞ゆ。冬は雪を憐む。つもりきゆ  
るさま罪障にたとへつべし。若念佛ものうく  
讀經まめならざるときは。みづからやすみ  
づからをこたるに。さまたぐる人もなく。又  
耻<sup>ハ</sup>べき友もなし。殊更に無言をせざれども。  
ひとりをれば口業をおさめつべし。かならず  
禁戒を守るとしもな<sup>イ</sup>けれども。境界なければ

何に付てかやぶらむ。若跡のしら浪に身をよ  
する朝には。岡のやに行かふ船をながめて。満  
沙彌が風情をぬすみ。もし桂の風はちをなら  
す夕には。潯陽の江を想像て源都督のながれ  
をならふ。若餘興あれば。しば／＼松のひびき  
に秋風の樂をたぐへ。水の音に流泉の曲をあ  
やつる。藝は是つたなければ。人の耳を悦ばし  
めむとにもあらず。ひとりしらべ獨詠じてみ  
づから心をやしなふ計也。又麓に一の柴の庵  
あり。則此山守が居るところ也。かしこに小童  
あり。時々來て相訪ふ。もしつれ／＼なる時は  
是を友として。あそびありく。かれは十六歳<sup>ア</sup>。  
われは六十。其齡事の外なれど。心を慰る事<sup>ハ</sup>は  
これ同じ。或はつばなをぬき。岩なしをとる。  
又ぬかごをもち芹をつむ。或はすそわの田井  
におりて落穂をひろひ。ほぐみをつくる。若日  
うら／＼なれば。嶺によち上りて遙に故郷の空

を望み。木幡山。伏見の里。鳥羽。羽束師をみる。勝地は主なければ。こゝろを慰むるに障なし。あゆみ煩なく志遠く至る時は。是より峯つゞき。すみ山を越笠取を過て。或岩間にまうで或石山をおがむ。<sup>(またい)</sup>もしは粟津の原を分て。<sup>(ついで)</sup>蟬丸翁が跡をとぶらひ。<sup>(ふい)</sup>田上川を渡り猿丸大夫が墓をたづぬ。歸るさには。折につけつゝ櫻をかり。紅葉をもとめ。歳を折。木のみをひろひて。且は佛に奉り。且は家づとにす。もし夜しづかなれば。窓の月に古人をしるのび。猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く眞木の嶋のかぎり火にまがひ。曉の雨はをのづから木葉吹嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴を聞ても。父か母かと疑ひ。峯のかせぎのちかく馴たるにつけても。世にとをざる程をしる。或は・埋火をかきおこして。<sup>(またい)</sup>老のね覺の友とす。おそろしき山ならねど。<sup>(またい)</sup>ふくろうの聲を

あはれむにつけても。山中の景氣折につけて・盡る事なし。いはむやふかく思ひ。深くしれ<sup>(おそ)</sup>覽人のためには。是にしもかざるべからず。大かた此ところに住初し時は。白地とおもひしかど。今すでに五とせを経たり。假の庵もややふるやとなりて。軒にはくちばふかく。土居に苦むせり。をのづから事の便に都を聞ば。此山に籠ゐて後やむごとなき人のかくれ給へるもあまたきこゆ。まして數ならぬたぐひ。盡して是をしるべからず。たび／＼の炎上にほろびたる家又いくそばくぞ。たゞかりの庵のみ。のどけくして恐なし。程せばしといへども。夜ふす床あり。晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。がうなほちいさきかひをこのむ。是よく身をしる<sup>(事イ)</sup>る<sup>(おそ)</sup>によてなり。みさごは荒磯にゐる。則人をおそろ<sup>(おそ)</sup>うがゆへ也。我又かくのごとし。身をしり世をしれらば。願はす

まじらはす。只しづかなるを望とし。愁なきを  
たのしみとす。すべて世の人の住家を作るな  
らひ。かならずしも身の爲にはせず。或は妻  
子眷屬のためにつくり。或は親昵朋友のため  
に作る。或主君師匠及財寶馬牛の爲にさへ是  
を作る。我今身の爲にむすべり。人のために  
作らず。ゆへいかなとなれば。今の世のなら  
ひ。此身のあり様。ともなふべき人もなく。た  
のむべきやつこもなし。たとひひろくつくれ  
りとも。誰をかやどし誰をかすへむ。それ人の  
友たる者はとめるをたうとみ。ねんごろなる  
を先とす。かならずしも情有と直なるとをば  
愛せず。たゞ糸竹花月を友とせむにはしかず。  
人の奴たる者は賞罰のはなはだしきをかへり  
み。恩顧のあつきをもくす。更にはごくみ  
あはれふといへども。やすく閑なるをばねが  
はす。唯我身を奴婢とするにはしかず。もし

を奴婢とするならば  
なすべき事あれば。則をのづからみをつかふ。  
たゆからずしもあらねど。人をしたがへ人を  
かへりみるよりはやすく。若ありくべき事あ  
ればみづからあゆむ。苦しといへども。馬鞍  
牛車と心をなやますにはしかず。今一身を分  
ちて。二の用をなす。手のやつて足の乗物。  
よく我心にかなへり。こゝろ又身のくるし  
みをしれ。くるしむ時はやすめつ。まめな  
る時はつかふ。つかふとてもたびくす。さ  
ず。ものうしとても心をうごかす事なし。い  
かに況やつねにありき常に働くは。是養生成  
べし。何ぞいたづらにやすみをらん。人を苦し  
め人を悩ますは又罪業なり。いかゞ他の力を  
かるべき。衣食のたぐひ又おなじ。藤の衣麻  
のふすま。うるにしたがひてはだへをかくし。  
野べのつばな峯のこのみ。纔に命をつぐ計な  
り。人にまじろはざれば。姿を耻る悔もなし。

かてともしければ。をろそかなれども猶味を  
あまくす。すべてかやうのたのしみ。富人  
に對して云にはあらず。唯我身一にとりてむ  
かしと今とをたくらぶる計也。大かた世をの  
がれ身をすてしより。うらみもなく。おそれ  
もなし。命は天運にまかせておしますいと  
す。身をば浮雲になすらへてたのますまだし  
とせず。一期のたのしびは。うたゝねの枕の上  
にきはまり。生涯の望みは。折々の美景に残  
れり。それ三界はたゞ心一つなり。心若やす  
からずは。牛馬七珍もよしなく。宮殿樓閣も  
望なし。今さびしき住居一間の菴みづからは  
をあいす。をのづからみやこに出ては。乞食と  
なれる事をはづといへども。かへりて爰に居  
る時は。他の俗塵に（モイ）着する事をあはれぶ。もし  
人此いへることを疑がはゞ。魚と鳥との分野  
をみよ。魚は水にあかず。うをにあらざれば其

心をいかでかしらむ。鳥は林をねがふ。鳥にあ  
らざれば其心をしらす。閑居の氣味も又かく  
のごとし。住ずして誰かさくらむ。抑一期の  
月影かたぶきて。餘算山の端に近し。忽に三途  
の關に向はむとす。何のわざをかかたむと  
する。佛の人を教たまふをもむきは。事にふれ  
て執心なかれと也。今草の庵を愛するも科と  
す。閑寂に着するも障なるべし。いかゞ用な  
き樂みをのべて。む（イ）なしくあたらし時を過さむ。  
しづかなる曉。此ことはりをおもひつゞけて。  
みづからこゝろにとひていはく。世をのがれ  
て。山林にまじはるは。心をおさめて道を行  
はむが爲なり。しかるを。姿はひじりに似て  
心はにごりにしめり。すみかは則淨名居士の  
跡をけがせりといへども。たもつところはわ  
づかに周梨槃特が行にだ。も及ばず。若是貧  
賤の報のみづから惱ますか。將又志心の至り



てくるはせるか。其時心更に答ふる事なし。  
たゞかたはら（ア）に舌根をやとひて。不請の念佛（アミダイ）  
兩三反を申てやみぬ。時に建暦の二とせ彌生の  
晦日比。桑門蓮胤外山の菴にしてこれをし  
るす。

月影（ア）は入山の端もつらかりきたへぬ光をみる由もかな

右以扶桑拾葉集校了

## 十樂菴記

頓 阿

### 國分寺三田村。

佛の十快神の十善になぞらへて十樂菴と名付  
侍るは。我すむ里の庵なるべし。爰も都の辰巳  
しかすむ人の心ばへは雲よりたかくものすぐ  
れけれど。解脫の心ばへあにむなしからんや。  
その十とかぞふるは。なにくれあしけれど。我  
名づくるは。此二とせ三とせのこのかた。國の  
うちに行なひて。宮古よりの聲しる人もあり。  
また此國にまふで來りしれるも有。或ひは國  
分寺にしばしの行脚の人も侍るに。佛道にも  
こゝろざし。敷嶋の道にも心ばへあるを。十人  
朝夕のかたらひがたきにもものして。それがい  
へること。我つばやきしことぐさをとむ。むか  
しをしのぶ文字のすさみとなしぬ。

國分寺の阿彌陀佛に百日經書てまいらせし  
比佛性院の弘融比丘よめる

いさきよく心もほとけの國分て寺井にすめる秋のよの月

度會宗直入道常可

もしほ草かきのこすとも身におはぬ罪も報も油にくつつへき

頓 阿

道とをく法の御國はわかつとも寺を蓮の臺ともみん

一宮の祭あすといふ今宵。度會の行量にさ

そわれて。まふで行侍に。宮のほど近き里を

千座村といふ。爰は神供などとのふる所に

に南みてぐら。そこら數見えて。神風のくに

めきたり。里のわらはべぬぼこなどことを

ぎてもちはこぶ。これを彼行量がよめる。

千早ふる天のぬほこも日の前に人の手にこそふれる白雪

雪のいとうふりて同宿の僧のもてるわらう

だなどひちかき雨の心ばへにかぶりて行。

神の御前かしことのさびたり。社頭雪。

みつかきの乙女のとても千早ふる神代もとをく杉のしら雪

國府の天王は河合のみやしるよりこの比う

つしまつりて。其神宮寺は今出川左府の久

しくうちしたまひし。わらはの乙國丸が。かしらおろしになん。此ごろかたみに聞ふれて。あひぬすなど。からめきてつづくりて。又もよめる。

あまさかるひなの身なから思ほえぬ今の都の月そかたふく

國分寺什物。

聖武皇帝 金泥維摩。

光孝天王 勅作の阿彌陀。

行成大納言 國分佛生寺ト云金泥ノ額。

源義經 奉納鎧三兩。

同 太刀三柄。

後鳥羽院 雲井百首宸筆。

源實朝公 御自筆寺領付。

順德院 長徳山叡勝院國分佛生寺ト云

宸筆額一枚。唯今現也。

貞治三年二月下旬。

當國名ある人の石塔。

若林山之内。後醍醐の比。

栗生左衛門入道長慶軒の石塔。四五年前に築ぬ。佐那具村のしりへにあり。

一品塚。

酒下の里にあり。更名くはしからず。一品親王と所の人はいへり。

靈社。

一宮國。

荒木宮。

國府宮。

唐琴。

酒下宮。

山田ノ藏王。

右何茂靈社也。其外當所ノ神社六拾二所。佛閣百二字。皆々殊勝ノ事也。

貞治三年二月下旬

釋頓阿

夢庵記

宵 柏

宗叱渡唐し侍し。彼國にて夢庵の二字を仲和といふ友人の能書にかゝせてもて來り侍り。おもひがけぬ事にて。感情淺からず。

かしこしな唐までも筆にさへきゝてそめける夢の庵は又宗輔同心に此庵號の唐筆を見せ侍し。人の國まで思忘ざりける事とおぼえて。

水くきにかけし契やたくひなきみぬ唐の夢の庵を

草庵のさま。四隣に長松花樹めぐりて。前庭に大なる巖あり。臥龍のごとく猛虎に似たり。海邊の石あひまじはる。其中に紅梅軒に近きあり。あしやの里より。はるくうつし來りて年をかさぬ。横斜三四丈にをよべり。かたはらに井あり。縋のながき事數尋。桐葉おほひに。暑を避にたよりあり。四時の花萬木にたえず。是をもてあそびて晨夕老を忘る。よて書院を弄花軒と號す。

夢なから心はとめし老らくの夏さひ來ぬる山の岩木に  
右以扶桑拾葉集校合了

## 三愛記

宵 柏

此ごろ世にひとりの居士あり。儒釋道によらず。其形自然にして。九重の中に年ををくりしが。ちかきころほひ。つのくにゐなのわたりにいほりをむすびて夢と號し。みづから牡丹花をなとせり。みにおはぬやうにきこえ侍れど。萬物一杼のことほりをおもふにや。つねのことぐさに。はなをもてあそび香を執し。さけをあひす。この三は古往今來上聖大賢もこれを用。村老小兒も賞せずといふ事なきにや。叟少年のむかしより。宮禁の月下に。春宵の一刻をおしみ。吉野山にたび／＼入て。西上人のあとをしたひ。ちかきくに／＼ある所の風光に映じ。春の道芝にまじる小草にもこゝろをとづめ。夏のしげみをわけ。しづやのかきねにむすばはれたるむばらのうへをもみすてす。霜がれの野らにのこる一花までもそ

でをふれすといふ事なし。中にも錦宮城(宮)の。あかつきの紅を腸にしめ。桃李のはるかせに類然としてふし。胡蝶の夢の中に一生をまかせ。時を感じては涙を濺のみなり。香は沉水をもととして。此くににひさしく傳し蘭奢待。紅塵。中河など名にかきを賞し。あはせたきものは梅花。荷葉。新枕等をもてはやし。家々にいどみきたれる秘方をも傳て。いさゝかのふかさあささをとゝのへ。夜雨同參のまくらに。晝簾の聲(イ元)に和し。塵裏の閑をぬすみて。吟詠のはか餘事なし。さけはもろこし南蠻のあちはひをこゝろみ。九州のねりぬき加州の菊花。天野の出群なるをもとめ。薄(タイ)と濁醪(タイ)にいたるまで一酌に千憂を散じ。あるひは春衣(イイ)をおきぬひて酔をつくし。これを以て風寒をさけて。稀なる齡にもこえたり。しばしば□(角イ)を長くして。心を年少のはじめにかへす。抑建仁寺の



正宗和尚は。命をうけし尊老なり。常庵相ついで舊好たり。この三の徳を記し給べきよしのぞみしかば。一章を書し。三愛と題し給へり。其ことは奇妙。感歎不可<sup>(三イ)</sup>迷をや。こゝにある童子のあやにくにこの事をやはらげて書あらはすべきよし。懇望なりしかば。童蒙にした<sup>(イカ)</sup>ひて。かたはしを筆にそむる事しかなり。

永正丙子抄商下瀬。七十四歳自書焉。

右三愛記以古寫一本校合  
更以扶桑拾葉集一校了

## 宇津山記

宗 長

駿河國宇津の山は齋藤加賀守安元しる所より  
今川親吉  
十七八町川につきてくだる。さながら鈴鹿の  
關こえし心地ぞする。丸子といふ里。家五六十  
軒。京鎌倉の旅宿なるべし。市あり。北にやゝ  
入て泉谷といふ。安元先祖よりの宿所。奥ふか  
き禪室歡勝院。瀧あり。門前にながれ。たゞめ  
るいはほなめらかにして。松杉さし入より。  
心すむべく見ゆ。左の岨に觀音の靈像。行基菩  
薩の御作とかいひつたへぬ。此上にも瀧音し  
て堂の前にみなぎりおつ。大なる嶽よこたは  
りて。谷のふところひろく。鳥の聲かすかに。  
猿梢にさけぶ。曉閑居の寢覺たえがたし。予は  
やうはたちばかりの程よりこゝに心をしめし  
にや。十とせのさき十とせあまり。今川親吉太守<sup>于時修</sup>  
此山うちになくらせたまひ。國の人あつまり  
文明年陰山西  
きゐて。所せかりして。家五六十間とぞ見え

し。むかしの國府をあらため。かへり給のちは。たゞ山がつやうの疎屋のみなり。卅餘年のあなたより都のかたはらにして。こゝかしこ田舎にも行かよひ。こしのしらねもたひたびこえて。越後守上杉安房守所定殿つ（く脱敗）の・にすむ能勢（臨津縣）因幡（白川郡管）守頼則。三河國牧野古白といひし陰者。さては京ちかき人のなさけにて。をのづから小野

の炭。小原の薪ともしからずぞありし。西國人も宗祇同宿して。大内多々良義興古左京兆のあたりに

一とせばかりありて。そのつゝで豊浦神宮。皇后の宮。赤間が關。隼人のわたりして。宇佐の社。安樂寺。猿嶽大慈國師開山。崇福寺にまいりて。木

丸殿ゆきゝの名のりはたゞ面影にして。いきの松はら。博多の津。箱崎の松。海の中道をも見て。松浦の渚のこりおほくぞかへりのぼり侍り。このくににくだりて後。都みだれいできて。住こし草庵も焼にしかば。のぼりくだり

のみして。匠作ちかき居をかまへ。春の草木。秋の本草もとめうへ。池ひろく水ゆたかにして。夏冬ふべき八木のめぐみしげく。朝暮のけぶりたえず。活計のあまり。又心としてとまらず。永正はじめの比。此山家すまゝほしくて。安元にかたらふ。いとやすき事などありし。其春三月はじめに安元興行に。

山さくら思ふ色そふかすみかな

山家のねがひ。かつ心行やうにおぼえて。みねのかすみ。山のたゞすまひも。いとゝもにはされ侍心なるべし。卯月ばかりに所をみたてゝ。かたのやうに草庵をむすびしなり。上に喜見庵といふ。此所ひさしき庵なるべし。其夏の五月に。

いく若葉はやしはしめの園の竹

竹をうへかきこもること。柚かたのはやし。はじめのよせもありや。此山のつたかえでうへ

茂らせ。自愛し侍か。おりしも一折に。

薦かえてみる／＼しける軒端かな

落葉にて。しげりしをみる作意。艶にもたく  
みにも侍るかな。時雨にきはひし名残。ぬれて  
かへりみがちになど。後ぞきこえし。又の年の  
正月に。

うくひすや香にめつる人宿のむめ

こととふ人なき春の述懐に鶯を賞し侍り。後  
にはつくしのはて。あづまのおくの人も。た  
よりにつけて尋來りしなり。飛鳥井の少將殿  
も富士の雪のつゐでたちより。薦の歌などよ  
みをかせ給ひけるとぞ。其頃は京都の事にて  
無念にもこそ。宗祇十三回のことも此山家に  
していとなみ。千句の追善。第一の御發句。一  
續甘首の題御詠。逍遙院前内府西殿より申請。一座か  
たのごとくにてぞ侍し。又國府に住こし家あ  
らしがたくて。しば／＼ありて白河の關みに

思ひたち侍しに。安元興行。

風にみよいまかへりこん薦葉かな

武藏野の花のかぎり。露のゆくゑわけつくし。  
しもつけの國日光黒髮山のふもと。宇津の宮まで  
くだりしに。なすの殿原矛楯合戰寂中えとを  
らず。遺恨すくなくらず。那須高資。芳賀ガカタヒ  
ニヨリ。喜連川女坂ニテ宇  
都尙綱ト  
合戰。

音にのみきゝてをかへる秋の風吹たにをくれ白河の關  
時しもなが月のはじめなり。霞とともものたび  
の空。いかなりけん。むろのやしまのあたりに  
て。

木すゑのみむらたつ霧のあしたかな

これより上野國新田の靜喜治部大輔寄閑入道の閑居にして。

かり衣きりやふきほす伊香保風

又むさし野のあたりかへりのぼるに。旅宿に  
てふと興行に。

冬枯やかやる下葉の秋の風

此旅のそらにても發句あまた侍しなり。おと

としの春。しなのゝ國木曾のみ坂をこえ。越前國に尋しるべき僧ましますに行て。七八九ありて。十月はじめに若狹路に波路やうくゆきをしのぎて。霜月に紫野眞珠庵に罷上り着ぬ。一日二日ありて。前内府御連歌のめしありて。

御發句。

まちこしや花にもみちに今朝の雪

宗祇朝夕まいりかよひしなごりとや。とを田舎まで御ふみたびく下されし。まして京都のことにては。身にあまり侍ることのみ。そのとしいまの公方様三條の昔の跡あらためつくりみがかせ給ひて。御うつりしはすとぞきこえし。東洞院。万里小路。西洞院。大宮上。一條のおほぢ。ひとつ内野と荒はてゝ。二條はしらなみのたちど。水の上の薬師さして人おぢおそれしも。所もなくつくりつづけ。さてもか

かる代にもあふものによと。あやしのくちぐちめでたがりいふめりし。室町わたりにて。

所せき家々の雪の軒端かな

日をへだてず。連歌のみにて年も暮ぬ。正月六日。北野の會所興行に。

あさかすみさゆる空なきひかりかな

御詠のよせばかりにや。元三尺後の出仕。等持寺門前惠玄寺殿の左右。輿をならべ馬をひかへ。三條坊門。東洞院。三條河原まで。男女の物見。雲霞のやうにみな人かたりし。六角室町にて連歌ありしつゝでに若菜の出仕を見物せしに。人のいひしにかはらず。けふの發句に。

今朝の雪み山しちるゝわかなかな

十五日過て。有間の湯にくだる。芥川の城にして能勢因幡守興行に。

うちなひきいつこかのこる春もなし

夢庵老人出給ひ。玄清。宗碩くだりて。よにめづらしく。おもしろくこそ侍りつれ。又千句あ



り。發句。

さくらさく春かせかほる柳かな

あしやの灘わたりにても連歌ありし。二月廿

四日京に出て。廿五日。右京兆。細川高國佳例の千句。け

ふはじめて罷出しなり。

九重の春はかすみの色香かな

中御門殿にして。

百千鳥さへつる花の雲非かな

禁裏ちかき御宿所なるべし。うちつゞき上し

もの所々連歌ありて。やうくまかりくだる

べきのあらましに。右京兆御發句一座。

かへる鴈おもへみやこのはなさかり

面目にもこそ侍れ。朝倉太郎左衛門教景。敦賀

の津にして。むかへの馬人ぐしにくだりて。氣

比の明神おりふし宮作に。

山ひこも宮木引くるかすみかな

おなじ國の府より人所望に。

うちはふく風やくもろあひ郭公

時鳥心あひのかせにや。廿日ばかりしてかへ  
りのぼりぬ。海津の旅宿興行。

ねにかへる花やしら波夏のうみ

比良のふもととなり。ひえにのぼりて横川の一

音院にして。

ふかきかひ山そありあけほとゝきす

又京にての會の中に。

むはたまのよたゝ音するくゐな哉

前内府へ見せたてまつりし。御稱美の御ふみ

ありしかば書加ぬ。五月はとかくして。六月四

日に右京兆亭泉殿にして。一日に二百句の連

歌に。

影すゝし空にいつみの夕月夜

夜ふけ酒はてゝぞまかりかへりし。五日にく

だり侍るとてまいりしに。おりふし手になら

し給團扇をたぶ。御歌あり。

九重を春のうちはと契りをく言葉の花も今よりを待

御返しとて。たびくになりて。

老ぬともあはんとそ思ふ行歸り君か言葉の花と春とに  
 ことにふれ折につけたるねんごろの御ことの  
 み。老ののちのおもひ出。筆かぎりあればつく  
 しがたし。六日は綾の小路室町ある人の家に  
 して。七日にはすでにくだり侍る。送にとて  
 をのくのなさけもたせて。竹田鳥羽までき  
 ほひあつまり名残おしみし。いまでもね覺のわ  
 すれがたみなるべし。鳥羽に一日連歌。

日もすゝしゆふたち雲の大江山

さしむかひの山にや。山城薪酬恩庵焼香申。四  
 日五日ありて。木津のわたりして。興福寺。あ  
 る坊に十日餘り。發句四五。

坂こえてすゝしくならの木蔭かな

伊勢多氣。一日連歌。六月稜の比。山田高向光  
 定宿所千句。内宮の禰宜館にて。七夕に。

星もあふ影やはうつす五十鈴川

七月十七日に大湊まで出て。尾張國智多郡常  
 滑といふ津にいたりして。參河國かりや。水野

藤九郎宿所千句。

朝きりはなみもてゆへる籬かな

八月四日。駿河府にくだり付ぬ。二とせばかり  
 のほどに。この庭も山里の庵もかつあれば  
 つる心ちぞする。とかうして年もかへりぬ。此  
 春はやがて。紫野のあらまし。心のひまもなか  
 りしに。遠江國のあらそひ去年よりいできて。

武田宗秀所

都鄙の道あからねば。まことにあらましに成

ぬ。甲斐國勝山いふ城にこの國より勢をこめ

今川加勢

られし。いひあはせらるゝ國人心がはりして。

人のかよひ絶はてつ。正月廿二日。匠作より久  
 知音の國人につきてまかりくだり。無爲の事  
 をも申かよはすべきよしあれば。貴命そむき  
 がたくて。則廿三日。こふをたちて。廿八日知  
 人の館にいたりて。一折の連歌興行。

世は春とおもふや霞峯の雪

五十日にをよび。敵味方にさまゝ老心をつ

くし。まことにいつはりうちませて。三月二日。二千餘人。一人の恙もなくしりぞき。歸路に身延と云法花堂久松寺に一宿。寺の上人所望に。

雪こほり山やあらそふ春の水

春來て雪氷我さきにとうちとけ。ながれ出たる山水のさまにや。下の心はこのたびの一和の心にもや。同四五月のほどより天龍川をへだてゝ。武衛。于時治部大輔義達。參河國さかひ濱松庄引間といふ地に國の牢人以下七八千楯籠。去年冬より此夏まで矢軍まで也。此河五月雨の洪水にして。六月中旬舟橋をわたし。うちこさるべきのための千句。發句。

水無月やかち人ならぬせゝもなし

八月十九日につゐに敵城せめおとされ生捕かれこれ千餘人とぞきこえし。やう／＼しづまるにやとおもへば年もくれぬ。老のつもりをやまひにもよほされおどろき。霜月のつごも

りに山家の草庵にのりものにてかへりぬ。つま木もとむるまかなひなどして。竹の戸ばそ柴の垣ゆひなをさせ。庭の霜がれさながら峯のあらしにはらはせ。やう／＼心もすむやうにて。老屈をのべ侍り。こゝにありて。つれづれの程に。福嶋の太郎とていとわがき人。おもしも霜ふりて。樵夫の跡もみぬ山路尋入て。日ぐらし心のとがにして。あはれにかへりがてにぞ見えし。仙人にもなど源氏物語にもかける所ありとなむ。門に出てをくりすとて。

君によりあすもや出て詠めましみ山の雪の跡を名残に  
ほどもなくて返し。

尋こしみ山の雪の跡にのみ心とゝむるけふのかへるさ都わたりにてだにかゝることは玉さかにやあらん。なごりおもひやるべし。飯尾善六郎爲清尋來て。閑居のあるじ色々もたせ。ひめもすにかたらひ。年の暮の薪を見て。

世中のうき木つみをきすむ山の心に年の暮やならん  
とりあへず返し。

何かその昔の年の暮ならむ庭にうき木を君にみえつゝ  
彼上人のみし世にも引かけらるゝなさけあさ  
からず。寶樹院住持冷然をとぶらひて。おほく  
もたせられ。草庵をき所もなかりし。日の入が  
たにかへり給しかたじけなきを。昨日ともに  
ありし珠易のかたに。文のはしに。

きのふ見しひかりにあたる冬栂の人めも草の春の山里  
御返し。

人めこそ厭ふにかれめ山里も春の光りの到らさらめや  
かやう贈答はたゞおりにつけたるのみこそあ  
れ。心詞艶にしてしかもことはりありがたけ  
れば。障子にをして。起居の吟味。徒然をなぐ  
さめ侍り。又ある人に文のつゐでに。としの暮  
の約ありしをはしがきに。

年の暮茶炭薪と山の妹とねてのよるゝむつ言にして  
やがて色々もてきたりぬ。草庵のだんな安元。

歳暮のかすゝ注文に。

炭二籠薪廿把つとふたつ大こん牛房かへしをそ待

なににても返しすべき。

草の庵かすゝ君か心さしをき所なき年のくれかな

永句とて大和の長谷寺法師二三年おり／＼か  
たらひ侍れば。此山居にもたちいりて。もろと  
もに齋非時をかしぐさま。椎の葉にもる心ち  
して。かりそめなるやうのおもしろさ。いつの  
歳暮にもまさりてぞおぼゆる。予すでに七旬  
の暮年。耻べきにも猶あまりありや。何となく  
さしもいてば。老をわするゝ活計もなどでな  
からむ。しかはあれど酒食にめでゑみさかへ。  
徘徊見ぐるしといはむと。身をしりかほの閑  
居人がまし。無益などのあざけり。いづれかい  
づれ。さもあらばあれ。すべて老といふこと。  
四十より十にたる。とし／＼かとなむ云事あ  
りとや。ふるき歌に。



老らくのこんと知せは門さしてなしと答て逢さましを  
はかなのあらましごとや。

大方は月をもめてし是そ此つもれは人の老となるもの  
老をなげく事。むかしいま。誰かひとしからざ  
らん。田樂のうたひに。

戀しのむかしやたちもかへらぬ老のなみ

一ふしのものにはあれどあはれにぞきこゆ  
る。老人と名付て吹いづる事はなれどうそ  
笛にはしかじの尺八硯のあたりをさけず。老  
人といふ二字は行成の筆の朗詠の題のなかを  
なむりやうにすきうつし。をしてのあなのし  
たにゑりいれて侍し。此一管は山名の霜臺<sup>品臺</sup>た  
づさへ給ひけむ。二管<sup>疎密</sup>頼阿作。應仁のみだれに  
津國池田の陳にして池田民部承申給し。民部  
後息三郎五郎所持す。ある時酒の中のたはぶ  
れに懇望せし也。醉<sup>兵衛</sup>さめて後悔せしとや。おと  
ししの春。匠作にまいらせをきてまかりのぼ

りぬ。執心は吹もきらず。老人といふ名は。曉を  
かたらふ友。又一はふけば人いとふなるべし。  
いづれにてもありなん。この十餘年。愚句の中  
にも老を思ふ句百餘句にもすぎぬらんかし。

いとはるゝ老を身はなとまちつらむ  
ねさめのみさすかに老のしるしにて  
あはれ身を老はてぬききにかへさはや  
しはしともたれおしむべき老ならて  
なかゝのころをおいかうらみにて  
おいを人すてかたくてや身もはてん  
老はなをあはれむ人をはつかしみ  
目も耳もおいこそ人とはかなしけれ  
いたつらに老のみ人のかみにして  
老はてつればおいむかたなし  
おいのひかみやなにもたちなむ  
ことしとなりての句に。正月七日に。  
七十の春をのみつむわか榮かな  
おもひやれわか七十のとしのはて  
あはれはつかし七十のはて

小侍從八十の年の暮に。

おもひやれ八十の年の暮なれば

いかばかりかはもの悲しき

年ふかゝらぬ人はさのみやはあはれとも思ひ  
 いり侍む。愁者其吟悲のことはり。心にあら  
 でことにいつべきかは。予つたなき。駿州嶋田ノ縁宿景金三男ナリ下臈の  
 もの子ながら。十八にて法師になり。受戒加  
 行灌頂などいふ事までとげ侍し。はたちあま  
 りより國のみだれいできて。六七年又遠江國  
 のあらそひ。三ヶ年うちつゞき。陣屋のちり  
 にまじはりしかども。口ばかりには精進ぐさ  
 きあざみやうの物にてぞをくりし。其後都の  
 靈社。奈良七大寺。高野のおくゆかしきに。此  
 國の徳をもおもはずまかり出て。四十年あま  
 りのほど。宗祇といひし閑人になづさへちな  
 みて。連歌の上下といふばかりも聞侍し。彼古  
 人京城のはまれありて。公武のもてあそび人

となりて。八十餘にて過去し侍り。されば我等  
 やうのあやしものまで。晴の御會席にもさ  
 し出侍し。前世のちぎりいかなりけむ。このた  
 び京にても其行衛と思ふ事おほかりしなり。  
 此國にありてときあらひ衣のかたらひにあり  
 ありて。子といふもの二人。ひとりはおの子  
 むまれしより安元やしなひにして出家とさだ  
 むる。假名を申あたへ。喝食かたち。承範十一  
 歳。めのわらは十三。これもあまになどおもひ  
 をきてしを。あはれがる人ありて。ことしの  
 暮。いひ名付とやらんいふ事にて。おとこあり  
 とぞ。七句の心やすさ。いまはの時にも思をく  
 事露侍らじ。しかはあれど。なにとなく不便に  
 もおぼゆる事ありて。

これ彼にかけ離るれと哀也子を思ふ闇はいふかひもなし  
 露の玉のをもし春の草にもかゝりて侍らば。  
 かならず紫野ゆき。しめの野守ともなりては

てんかし。

此一筆は此山のむかしがたりもよせあれば。  
都の知人にも。ことつで見せまほしくて。宇津  
の山ともいひたくこそは侍れ。又老のうへの  
みいひつゞくれば。老のひがごとどもやいは  
ぬ。いづれにてもあれかし。爾時永正四年臘月  
の廿六日。雪中のつれづれ。硯にむかひ侍れ  
ど。なすべきことなきあだごとなるべし。なに  
となく知音のかよひもいとふにはあらでくる  
しければ。竹の戸ばそに壁室と書付ぬりこめ。  
他行の利口。一咲。

右此一冊。匠作つたへて見給けんかし。彼老人  
しばらくあづけおかるべきつかひあり。則も  
たせたぶ。舊友にあふ心ちして。

右宇津山記以一本校合畢

## 群書類從卷第四百八十一

## 雜部三十六

## 三塔巡禮記

稱名院右府公條公

天文廿三年嵯峨二尊教院にてはじめて安居せり。衆僧一兩輩物語のついで。叡山三塔秘密の順禮の望みを申あへり。然るに當院の老師良純長老。これを聞て。我先師廣明和尚その望みはありながら。つゝに心ざしを遂給はず。ほろなき事なりし。其かはりと思ひなして。驥（馬）のおにつくべきよし有しかば。俄に廿三日巳刻ばかりに出たちて。雲母坂をのぼりぬ。きらゝは雲母とかけるにや。誠に雲のたちどと見えたり。

猶（猶）溪三塔は西東。扶老攀緣途不窮。

鶴々雲生雲母坂。

山腰路轉有無中。

かくて東塔南谷榮光坊宣祐法印の坊につきにけり。此坊は梶井宮御留守として。法印よはひ既に八句にをよべり。此順禮先達の事申せしかば。老かゞまりて室の戸をも出ずとて。固辭せられしかど。あながちに申ければいなびはてず。各隨喜の思ひをなせり。誰ともしられじと深く忍びたれど。いかにして聞えけるにや。夜に入てかの宮わたらせおはしましけり。今は殊更山務にておはしましければ。かりそめの御ありきも有がたけれど。老の坂を登りける心ざしを感じおぼしめしけるあまり。夜に忍ての御たづね身にあまりたるよし申侍り。日來の御物語に。法印もみえぬくだ物など谷



の底まで求め出して盃酌ありて歸りまし／＼  
けり。扱も此法印の心ばえ。世俗の塵をはな  
れ。前栽にのみ心を盡して。彼田游岩が泉石膏  
肓ともいひつべし。中にも春の花に心をうつ  
し。櫻の木あまたうへならべて。日毎に心經を  
一々によみて。花木の祈念をせられけるとな  
ん。むかし櫻町中納言は。花のさかりの日數  
を延むとて。春は泰山府君をまつらせ給へる。  
同じ心とぞおほえし。しかしながら草木國土  
悉皆成佛のことほりにや。此ごろは花の木  
のほとりに。兩社伊勢を勸請して此坊の鎮守と  
せり。社頭のたゞずまる。見どころおほかり  
ければ。思ひつゞけけり。

さかふへき光をこゝに和らけて跡たるゝ神の惠顧もし  
わか神に頼む日よしと瑞籬やくもらぬ影を先うつす覺  
かくて廿四日辰刻ばかりに此坊を出て。法印  
先達として。定心院よりはじめ印明を授け。さ

きにたちてみちびきけるすがた。既にみつわ  
くむべき人のかくたはやすくあゆみ行給ふさ  
ま。あやしきまでみえたり。根本中堂にいたり  
て此山の由來をきゝ。印明さづかりて感嘆の  
あまり。山家大師の聖作もおもひ出て。長老よ  
み給へり。

今そしる無上正等正覺のわかつ袖の法のみちをは  
げにとうちおもふまゝに思ひつゞけけり。

今よりは誰に求めむ聞えては我立袖に深きみのりは（をイ）

ゆき／＼て修禪が谷に至りて笠なども取あへ  
ず。谷風はげしく雨ふりやまざりけれど。法印  
は聊もくるしび（みづ）いたはるけしきもなくして  
印明しづ／＼と授け給へるをみて。又長老の  
よめる。

忘れめや雨に風の峯つたひまことの道のことの葉の露  
まことに見るにめもあやなれば

あたにしももらさし法を降雨の笠の下にも傳へつる哉  
いよ／＼雨やます風吹ければ。をの／＼衣の

袂を取て肩にかけ。裳のすそをかつぎて腰にからみなどして。からうじて横川にいたり。爰かしてまうでて。今宵は恵心院にてあかすべきよしさだめける。すべて此院は久しく退轉せしを。三光坊といふ人再興せりとなん。莊嚴むかしにも越ぬべく覺し。こゝなる人のいふやう。此谷のみならず。東塔の講堂などまで思ひたちて。堂塔修造或は起立數をしらず功をなせりといへり。あはれ此心ざし天下にをよぼす人もがななど申あへり。

講堂佛閣又鐘樓。願力新成興<sub>レ</sub>執壽。

爭僧一山修造手。國家顛覆万民憂。

たのもしな我立柚木ひきくたる今も昔を残すためしは

とおもひつゞける。此坊のぬしなる三光坊。外の谷に講説ありとて。留守なる法師。恵心僧都脇息の阿彌陀の像おがませ侍らむとていれ奉る。拜み奉るに尊容尊形こと葉も及ばず。け

ふ爰にとゞまらず侍らば。此供縁かけぬべし。雨風のさはり見佛のなかだちと有がたし。明ぬれば八王寺より廿一社の順禮しづ／＼として。ある寺につきて朝のかれいゐなどいとなみて。歸京の出たちしけり。長老神前にて詠歌あり。

我頼む日吉の誓叶ひなはか／＼けもそへむ法のともし火社頭へは十五首奉納のため。かねて一卷あり。これより梶井宮に奉りけり。紹巴法師ともに侍り。十五首を見侍りて。是も俄に十五首をつらねけり。とりぐして奉れり。頓て都へのぼりけり。法印も名残おしげなり。

身の行衛迷はむ物か頼もしな導くまゝの山めぐりして

詠十五首和歌。

秋風

穠露

秋月

袖の上に待とるものをまたきよりたれ秋風と名つけそめ劍  
秋の露てる日の草のしほれ葉に深き恵のほとはみせけり  
月はあき霞の後は明やすしこほれる影はとけてしもみす

秋雨

豫ている雲とはみえず吹いつる野分につれて雨はふりきぬ

秋花

山高き木々の紅葉のした染に千くさの花を手をつくしたる

秋鴈

今とはとて色つく小田に初鴈のかりしほいそく比もきにけり

秋虫

秋にしも我數ならぬ言の葉をつゝりさせてふ虫もこそしれ

秋鹿

霧ふかくへたつる妻を恨てや山よりしかの出てなくらん

秋水

風わたる堤の柳ちりみたれ江の水きよしの舟のかすく

秋霜

菊に今をきまとはせる色なから冬まで匂ふ霜はあらしな

秋祝

穂のくる西をむかひに動なき山のすへらき世をまもらなむ

秋旅

やゝ寒み野風山風かりころもたち出てやかてこふる故郷

秋戀

獨ねのあかしかたさは思ひやれ山鳥のおのななき夜の床

秋思

我のみの思ひのみたれたくへても人にははるけき野への刈萱

秋雜

きく人も哀そへよとなく猿の涙ももろくちる木のみかな

右以扶桑拾葉集校合了

## 石山月見記

稱名院右府公條公

去年の秋比。源氏物語の事など。これかれ物がたりして。八月十五夜石山寺にて。かの式部が筆をたてし昔のこと。或説ながらかたりつたへたる。あはれ通夜して。かしこの月見侍らばやと申て。すでに思ひたち。俄に法樂のため。かの名號を上にするへて。十六首の歌をつづりしかども。さはる事ありてむなく過し侍り。このことを金后きこしめしつけて。さらば參詣あるべきよしあり。もとよりこの物語にふけり給ひて。蓬屋に日々おはしまして讀申。一部の功をとげおはしましけり。又宗義法師。紹巴法師。これも同聽のともがらなれば。いざなひ侍しに。いたづらに日ををくらむも心うし。かの源氏のまのあたりにて。十首韻の連歌をと申せしかば。不堪のうへ老懷いかゞとおもひながら。驥の尾につくべきよし申せしに。

然らば發句の題には。かのものがたりの目錄をと申て。若菜の發句を申出し侍りしかば。をの／＼その心こゝろばせをおもひめぐらし。十の發句をさだめて。ことし天文廿四年八月十四日におもひたち。興をならべ侍る。道すがら千種の色々。をみなへしのいろにまがへる粟田山をうちこえ。しるもしらぬもたちとどまる相坂の關をこえ。うち出の濱などすぐるほどよりをの／＼のりものをかへし。かの御寺にひつじの時ばかりにつきぬ。ふかくしのびと申さだめて。行さきの宿坊など。かねて申さだむることもなくて。玉藻かりふくかげにて。最中の月は見るべきよし申て。まいりつきて。かの源氏の間にてあしをやすめ。さてこゝかしこ坊などたづねけるに。世尊院とてしかるべき坊。しる人ありてをしへけるに。まかりてみめぐらしけるに。あたりにぎは、

しくよろしき所なれど。海山みやらるゝ所にあらず。いかゞとて又たづねありきしに。倉の坊とかやいへる。月のためにはいかゞ成なおぼえし。孔子は勝母の里に車をかへし。漢高祖は柏人にやどりをこゝをからざるためしあれど。かの貫之がたみののしまの名にはかくれぬともあれば。たちいり見侍るに。東に岡山あり。麓には湖水。色こきいねどもみわたされ。額には皓月とあり。又一休老師。江山一覽と題せし墨跡もあり。江山の景氣言の葉に及びがたし。後普光園攝政の月は山風ぞしぐれのとありし連歌の會席も此坊とぞ申傳ける。こゝに過たる所あらじ。四美備たる所のさまにて。此所にてとさだめける。大かた千句などの會席。この比の風として。わづらはしき事なりしかど。これは此四人の心ざし。昔の商山の跡をたづね。薇などばかりにて目をくり



ぬべきを。金後の御さたとして。ことにぎは、  
しくなりぬ。あるときは坊より御まかなひ申  
などして。思ひしにはたがひて。十五日よりは  
じめ。日ごとに二百韻づつにて。五日にことを  
へぬ。執筆には理文。仍景。いづれも心ざしの  
人なりしをかたらひけり。さても夜をへての  
月ちかきとしぐにこえたる晴光。まことに  
薩埵の光明もそひけるにこそとみえし。あく  
る日は一日逗留すべきよし申て。世尊院にて  
百韻の連歌あり。廿一日。船にて還向し侍り。  
船中興遊ことにさまぐなり。船よりあがり  
て雨にあひて。こゝろぐに雨づつみしてた  
ちわかれけり。これも盛者必衰のことほりと  
をのゝ感じあへり。

詠十六首和歌。首題不號。

な 靡きあふ草の袂にかつみえて一葉のみかは秋の初風  
む 昔とはなにもとあらの小萩原いや珍しき花さきに鳥

に 庭つ鳥なく聲聞はあか月のふかき露もや涙なるらん  
よ 夜かれをは誰にならひて秋毎の思ひを盡す松虫の鳴  
い かにせむ月なしととも秋の空心澄ぬる夜半のさ庭  
り りんきんとみ渡す軒の古寺にさし入月の影の隈なさ  
む むら雲のかゝれる月の思ひもや花にうち吹春の山風  
く もりなき月の爲なる鏡山たておく心空もしりきや  
は はね疊くる聲數多きはへて時知廊の打連て行  
む むかへしやいつの望月引駒のあそは翳ふる逢坂の山  
せ せきかぬる思の道や迷ふらん山より出てを鹿なく聲  
お 思ひある人のしわざとよそにても聞は恨の衣うつ覽  
む むす莓の塵なき石の山深み時雨も秋の外にすくらん  
ほ ほに出る蘆わけゆくや秋の袖きながら雪に渡る釣船  
さ さすらふも心にたかふ年月や我身の老に秋風のとこ  
つ つきぐをいやとかの木に思をく跡も千歳の秋を契らむ  
この歌を御覽じて金后酬答あり。

な 長夜も名のみと思ふ月見つゝ枕もとらて向ふ空哉  
む 紫の色なつかしき藤袴きつゝゆかりを思ふ野へ哉  
に にほの海や今宵の月の光にや秋の寂中を空にせる覽  
よ よの外を求めもてきて終夜語れは共にうき秋もなし  
い 古の秋をふかめてすむ水の流の末をかすかにそくむ

り  
りうたんの花野をゆけに靡きあひて薄刈萱我もかうはし  
む  
埋木は秋に成てもそれとたに霧も時雨も染ぬ色かな  
く  
くまもなく待えし人は都にも同じ心に月やみるらん  
わ  
わけのほろ霧まの道の石山やしるへにひく入相の鐘  
む  
むは玉の夢こそたのむ心なれ願ふ佛をあきのよなく  
せ  
せきとめてすくる月日を春は花秋は籬の菊のした水  
を  
をとそひて吹たつ浪も打出の漬つたひゆく袖のあき風  
む  
埋つる身をうきとなとせめきけんさらすはこゝの月をみまじ  
ほ  
煩惱も菩提も一つ心そとみゆるものから月のむら雲  
さ  
さねかつらくる秋かけて必ずと契りしたれに逢坂の山  
つ  
綱手とく御法の船にさす棹の雫も露もきよきさなみ  
廿日。世尊院にて會あり。發句すべきよしあり  
しかば。

みるめなきなきさやいつこ月の秋

廿一日。岩坊發句所望ありしかば。

あきかせや月も浪たゝこゝの海

金后大徳寺  
義俊僧正

宗養法師

な  
なをさりに誰かはみつの濱ひさし久しき世より照す月影  
む  
虫の音も小鹿の聲も鐘の音も一つ御法のあか月の山

に  
句とも色とも何か分ていはむ枯野の中の菊の一もと  
よ  
夜を寒み我たに狭きかたしきの衣かり金鳴てすく也  
い  
色々の秋の行ゑを尋れば松にのこれる木枯のかせ  
り  
六義とて分つ言葉の花に又野への千種の色や添らん  
む  
むとくなる蔭と思ひし埋木も紅葉せさする蔦蔓かな  
く  
苦しひの海を渡せる誓とや月のみ船のさして出つ覽  
わ  
我影にたゝへても猶うたゝねの袂に宿る宵のいな妻  
む  
むら雲のかゝらぬ里もなかり鳧稻葉に續く田上の山  
せ  
せをせけは淵ともよとむ木葉哉秋の日敷のかゝらましかは  
お  
思ひ出のなき身乍らも忘れぬ昔の露を袖にかけつゝ  
む  
胸にたく煙ならぬもまかひ鳧室の屋嶋の今朝の朝霧  
ほ  
ほに出る岩もと薄風吹はなつてふ袖を返すとそみる  
さ  
さめ残る夢の渡りの浮橋に猶長き夜はかけて頼まん  
つ  
露の世とみるに付ても蜻蛉の石山深き寺をしと思ふ

紹巴法師

な  
名残あらんかへさ也せは如何せむ分る花野の袖の色々  
む  
むらゝに雲のあはたつ山のはや此頃秋の夕暮の雨  
に  
俄にも音あらましく成行や野分をさそふ萩のうは風  
よ  
よしや只手折てもみん鹿の音も露に零る野邊の萩枝  
い  
石はしる瀧の響も霧の中はひとつ木すゑの松風そ吹  
り  
りちの聲に琴の調へのすみぬるや月も更行秋風の空

むかひつゝ心を空の隔てすは我身も月のうちに社すめ  
く草のうへに置たる露のしら玉を碎はかりの庭の朝風  
は遙にもほてる海のはるゝ夜は月に浮へるをちの山々  
む結びよる人しなれば秋深き落葉の底に清水なかるゝ  
せ闕やよりくつれ出たる袖の色も紅葉にけふや逢坂の山  
ををしなへて緑の色に成にけり秋の木末の檜原まき原  
むむろの戸の曉ふかき行ひにおとろかれぬる長きよの夢  
ほほのかにも明わたる夜の霧間より行袖遠きせたの長橋  
ささしなから入目の下のしくるゝや木葉の奥の秋の夕闇  
つつの國のなにはの寺の法の水も同じなかれの月の行末

### 留題皓月江山一覽之簷下一

月明皓々夜沈々。去此清光何處尋。  
不<sub>レ</sub>換<sub>二</sub>三公子<sub>一</sub>子陵瀨。江山一覽主人心。

### 金后有<sub>二</sub>尊和<sub>一</sub>。

江月水流昇又沉。江山一覽不<sub>レ</sub>勞<sub>二</sub>尋<sub>一</sub>。  
秋宵對<sub>レ</sub>榻共閑話。塵外相逢世外心。

右以扶桑拾葉集按合了

### 嵯峨記

東光院關白植通公

世にたづきなき翁ありけり。天正元年しはす  
の中の十日あまり。やどを立出てこゝのへの  
四方をみわたし侍りて。さてもあれにけるよ  
とおもふ心にいざなはれて。おもほえず行に。  
松のむら立もかすかにてふりにたれども。宮  
の八棟のさだかにありけるにて。さては北野  
社壇よとおもひいづるまで剪あらしければ。  
寒天の雲もはげしきに。松風のたえくして。  
さすがに神さびて侍れば。ふと心にうかび侍  
る。

吹たゆむ木にきりはてゝ九重の北野のもりの松風の聲  
立出るころは雪たゞいさゝかふりて。袖のう  
へも拂ひがたくて行まゝに。西の空かき暮し  
つゝ。ふりみふらずみの道芝に。枯残りたる薄  
の雪おもげなるをみつゝ。光源氏は行末にた  
のみをかけつゝも。秋の末つがたの草むらの

虫のこゑまで。さびしき道すがらと思ひ給ひしに。今はよすがもなく。暮かゝる山のはをさしてゆかむとするに。千代古道をみて。昔の世を思ひやりて。

其上は此名乍らもさかの山さかしからしな千よの古道廣澤の池のほとりを過るに。愛宕おろしのはげしきに。水鳥の羽をともし身におぼえて。しづまるばかりなれば。

浦山しむさをしらぬ水鳥のはふく心やひろ澤の池あれはたれ時にたどる／＼清涼寺にまうでければ。灯明もなくして。佛の御まへ。そことばかりにおがみ奉るほどに。ふと思ひより侍る。

くらきより暗に入て思ひし此難解之法唯佛與佛

甘とせばかりさきに。西堂受呈の夢に入給ひて。しめし給ふいはれあれば。翌日其心まうけし侍るに。あやまたず傳教大師の造り給ふ歡喜天。忽然と心のもち來りてあたへけり。（ハイ）靈現日にあらたに。奇瑞夜に示し給ふに。三條

入道前右相府。歸依の首を傾け給ひて。禪定殿下に申されければ。又偈仰（ハヤシ）の掌を合せ給ひて。一字を起立せらるべきのよし相談ましまして。瑞相その所を認たまひけるに。龜山の上をしめし給侍れば。則開闢ありし時。塊を荷擔せし事にたよりて。一夜をかり侍れば。おりしも西堂は他行にて。弟子の受祥論師なむ心ざし淺からずして。懇にいたはりけるに。爐邊にて。寒かりし事を忘れて。しばし思惟するに。いにしへ此地に曾てもて水のなかりしを。龜山といふうへはとて。中書王兼明の願文を書てよみ給へば。忽に涌出して。今に潤澤のよしを承り置て侍れば。此水を結びて君も臣もおなじく。今行するの千年をいのらむとて。尊所にまうでて。天長地久。万民快樂。二法長久と祈請のなかば。一しきり霞の降ければ。嵯峨天皇おもき御惱に依て。歡喜天千鉢を一



日の中に刻彫して。弘法大師の供養し奉りて。即愈せしめ給ふなり。其尊容を埋て。そのうへに堂を起立し給て。雨寶と額に空海の筆にてうち給ひて今に有けり。是をおもひ合せ侍れば。此霰は成就の先兆うたがひなき事と猶祈念を凝して。此山の名につきて。古今集賀部の歌にたより侍りて。

龜のおの瀧のみならず白玉のちるや霰も千世の数かも  
有明の月は軒端の山をへだてゝ。ひかりのみほのかに。大井川の流れもこほりて。はるかに見やらるゝに。明石の浦も心にうかび侍れば。彼物語のかたはしを思ひよりて。

大井川なかれの末やかよふらむ明石の浦に見し月の影  
麓に二尊教院あり。嵯峨天皇の彌陀釋迦を安置し給ひて。四宗兼學にて巍々堂々たりしなり。久しく零落せしに。法然上人中興し。月輪禪定殿下崇敬し給へてより。<sup>(トイ)</sup>いとやんごとなき

御かたゝの相續おはしまして。他にことなる院室なり。縁起を拜見せしに其いはれ述がたし。普光院の御臺瑞春院は青蓮花院内相府の息女にて時めきし給しに。<sup>(新殿)</sup>此室に心ざしを運び給ひて。いよ／＼三條家の一類尊崇し給ふ。しかるに應仁年中の兵亂に殿堂悉く滅亡し畢ぬ。廣明和尚の草屋の形をむすびけるに。逍遙院入道前内相府の芳志を勵し給ふ事不可勝計。しかあれど穩しからざる世のうつりにて。一院造隆もことゆかで。いたづらに星霜もふりけるに。良純論師の比心をつくし侍りて。佛殿方丈房舎に至るまで。きら／＼しくならべ給ふ。此度の錯亂に隣端までも破却して殘なく濫妨せしに。一物を損せずして。其災にも遁れ侍しこと。誠に戒徳のいたれるゆへなり。四宗の旨を一々にあきらめて。四智究竟の上に福祿壽を具足して濁世に不相應たり。起居

輕利にて寒嵐をいとはず。此坂を舉（舉イ）て晝夜を

わきまへず。光臨にて予を慰し給ふ心ざしは。

恒沙もかぎり有ぬべし。ことのついでに法文

の内のかたはしを聞えくやうなれども。其こ

とはりをしらざるのみなれば問侍るに。それ

ぞれにしたへ給しに。是ぞ闇夜の灯なりと有

がたくて。容顔を守りければ。七十有餘。古來

稀なる大徳なり。廿四日は先師廣明和尚忌日

にて講聞あり。聽聞にまうでけるに。相觀經

十三三輩想の論義なり。竊以相觀との事。誠

に心をつくべきにや。安樂行品にも觀一切法

空如實相と説給ひしをおもへば。二といへば

二なり。畢竟一に歸するにや。禪話にも祖意

教意同か別かと抄して辨じけるとかや。

霜といひ雪とかはりて積れともおなし緑の峯の松か枝

小倉の山莊の跡を見やりて。

小倉山時雨し跡のふりはてゝそのなはかれぬ雪の下草

西行法師草菴の跡といふを。

こゝよりも猶にしに行しるしそと草の庵の跡は残れる  
あらし山のちかきよしをきゝて。

幾夜しも嵐の山の近ければ浮世をさかと思はさらまし  
都にのぼりあづまにくだり。千變万化の趣を  
見聞して。いつともわかでことしをけふにく  
らしければ。

何とかと見つゝ聞つゝ有きつゝ今年をけふに暮しはて鬼  
年もかへりぬ。元日より一七ケ日。觀喜天に所  
願を祈り奉りけるに。晴天にて万木枝をなら  
さす。心ものびらかにおぼえければ。あめの  
下穩かならむ年のはじめぞとおぼして。よも  
を拜み奉るおりしも。曉かたに清涼寺の鐘の  
ひびきすみのぼりてきこふるに。切利天上の  
春も思ひやられ侍る。赤旃檀の尊容の事は。ふ  
り侍ればもらしつ。

試毫

さかの寺鐘の響も久かたの空よりきぬる春をしれとや

けふとてもまた冬なから新玉の年を初めて春やまつ覽  
陪ニ柿本影前ニ

年浪のこゆてふけふは和歌の浦の磯の刈藻をかき集る  
二日。紹巴法師を二尊教院めしぐして。ことぶ  
きなどたがひの事なり。はやぐと此山まで  
たづね來れる心ざしを悦びて。

尋ねくる心はふかき奥山もへたてぬ春のたくひ成らん  
かくて盃をとりて。發句をと長老の給ふを。山  
の名につきて。

龜のおの山やいく千世代いけふの春  
と取あへすせしかば。

長老  
たつそむるよりかすみくむ袖

紹巴  
苗代のみとりの水のほとりにて

かりそめながら君をいはひ奉りて。天神に手  
向侍るならし。夜に入て二尊院の佛前にまう  
でて。二世安樂の春を念じて後に。逍遙院の肖  
像にむかひて。歌の道を願ひて。

言の葉の露の恵をおふし立しこの子の枝の末も洩すな  
稱名院入道前右相府の影前にて申事侍しをゆ  
るし侍らんと有しを。泉州兵革に付てとかく  
かゝづらうほどに遷化ありしかば。心にまか  
せぬさはりといひながら。行住座臥に是を  
のみ悔み侍れば。

歸りこぬ月日にそへてしき浪にしき忍はるゝ敷嶋の道  
三日。月をおがみて。

新玉のことはいまたみか月の出こしほととの行末の空  
四日。雪のふりて木ごとの木すゑ花かとあや  
まつほどの明ぼのに。

吉野山よしや雪こそふるらめど簾をまけは花の明ぼの  
雪の積りて比叡山の朝日の影にことに簀へて  
見えけるに。はたちあまりをとさしはからひ  
しも。さこそとおぼえて。

ふり積る雪のころ猶さそなとも都のふしの嶽の明ぼの  
五日。節分に。

あめの春を向へて後は行年の老の數にや又そはりなん

六日。立春に。

氷とけ瑞穂の國は平らけくみえて今朝より春はきに<sup>(61)</sup>息  
今日は空のけしきも日のひかりもうら・かげ  
なれば。岩扉をひらきて見わたし侍るに。東の  
山も雪まの色青やかにはるめきて。心ものび  
らかなるやうに侍るに。軒端の梅もほころび  
てにほひけるに。

自是花中集許輩。人間富貴不<sub>レ</sub>關<sub>レ</sub>渠。

此心は巢父許由とて。いにしへの隱士有しが。  
富貴に心をかけぬごとく。梅も花中にすぐれ  
たると感じて作りたる詩を。今をろかなる身  
のうへにおもひよそへて。鄙詞をつぐると云  
爾。

窓前東嶺到<sub>二</sub>青陽<sub>一</sub>。山下鐘聲送<sub>二</sub>景光<sub>一</sub>。  
我觀世間巢許輩。一枝花亦是孤芳。

このほとは冬籠せし宿の梅けふより春の香に匂ふ覽  
兼明親王のおはせし跡とて。人のをしへ侍れ  
ば。あかしのうへのしるよしとて。しばらくや

どり給ひしなどと。さうしのかたはしを耳に  
ふれ侍れば。心にしめてみわたし侍るに。今朝  
しも鶯の木づたひしに。とりあへず。

鶯の今もふるすを尋れきてうゐことならぬ聲の聞ゆる  
七日。後京極攝政殿の御忌日なれば。若菜につ  
きて。

古の若なにそへて摘殘す言の葉もかなかしにもせん  
八日のあした。はしつかたに出てながめける  
に。竝の岡の松をみて。

龜山に竝の岡の松風はちよのゆきゝの春をつけける

任助法親王の行力すぐれさせおはして。今の  
にごれる世にはまれかなるよし。天のしたま  
つりごちしる平信長をはじめてたうとみ侍り  
て。仁和寺のしり給ふ御さう所々昔に復して  
侍るをおもひめぐらすに。北嶺はすでに時に  
たれるにや。南山の智水を湛て。其流をすまし  
給ふ事を。匹夫の心にも遮り侍るまゝに。

かくはかり濁れるよにも法の水すますは一つ心也けり



十日の夜。月はてりながら雪のふるをみて。

久方の月の宮人手をもらしかつらの花の雪とちるまで  
久方の月のかつらの花咲て散かひくもる雪とみるらん

十六日。長老のおはして。懇につたへ給ふこと  
はべれば。（志にてイ）

廿二日。後鳥羽院に奉りける。  
さつけける其かひあらん世々迄も朽せし請て保つ心は

廿四日。愛宕山。雪のうへに雲のかゝるを。  
古にかへる浪もや水無瀬川山もとかすむ春はきにけり

廿五日。天神に奉る。  
愛宕山心高くもかゝる雲の積る雪にやきえをあらそふ

浅からぬ心は梅の色も香も花にふくめる比にそ有ける  
法然上人忌日。於ニ尊教院。長老の寶樹觀の  
所を講じたまふに。あし曳の御影の前に。おり  
しも梅を花瓶にさしけるを。

梅やけふいける佛の御國よりこふるにもれて匂きつ覽  
愚老右の奥より次の下の齒のぬけければ。い  
はひて。

ことし又古はの落てからなつな縁たちそひ花そ咲へき  
廿七日。東福寺にかへり侍りて入堂せしに鶯  
のなくを。

我山としめしをきつゝとめてこしなれよ幾春なれし鶯  
ささらぎのはじめの比。梅枝ををくりけるに。  
我袖のゆたかならぬに包みてもるゝ匂に思ふ梅かえ  
宮古の人に梅ををくるとて。

山里はしる人そなき色もかも君のみわけむ梅のひとつ枝

紅白梅花 招請諸老  
二月廿四日

招得高賓興最奇。爲梅幾度要題詩。

聽鶯莫作杜鵑去。紅白花開春一枝。

うつろはぬ色にとられて紅のにほひはいかゝ梅の下風

洛陽見花 於永明院光明和尚興行廿  
八日アリ天正二沾洗十一

暮捲珠簾見白櫻。詩翁修得舊時盟。

洛陽司馬約花否。吹有清香慰老成。

右題にて。櫻花第四靜慮にさかせばや。風災な  
くていつも詠むの心をととりて。

あひにあひぬ花の所は久方の雲井の春の風ふかね世に  
奈良に久しく滯留にて。やよひの中の十日の

比かへられけるに。花につけて三條大納言へ。

花かたみめならぬ人の心にはもるゝ櫻をみ山へのきと

返し

匂ひくる言葉の花を折えてそ身の埋木も春をしりける  
山里にまかりてときは木の中に櫻の花のさか  
りなるをみ侍りて。これかれ友なひてさけし  
のみて。暮るまでさりあへず侍れば。歌よめと  
有しに。

思ふとちたちならひてはみ山木の側さらぬ花の夕くれ  
東福寺南明院は俊成卿の建立にて侍るに。花  
のさかりなれば見にまかりけるに。墓のふた  
つならびけるを。俊成卿の室は月輪殿御女の  
よし住持の申侍るを。系圖にもおぼえぬやう  
に侍れども。時にあたりて。

けふこゝにみつゝをきけはゆかり有と莓の下にやさしてしる覽

三條大納言家の會に。

首夏

昨日けふ夏に入日の影なからかすみの衣たち残すらん

蓮

あかす思ふ心はさらに濁りなき池のはちすの花の朝露

蟬

蟬の聲きはしきりに村雨のよそにはふらぬ杜の下道

遠戀

仇なれや音つれとても八百日ゆく濱の眞砂を中の通路

神祇

仰けたゝ分ちしまゝに天津神國つみかみの恵ある世を

於三條殿下亭。竹契退年。といふ題にて當座  
あり。右丞相に家業をゆづりての會なれば。

家の風傳てしより吳竹のすくなる儘に千世をへなゝむ

九月盡

暮て行穠の野山の草も木もうつろふ色はけふに限らし

右以一木及扶桑拾葉集校合了

# 唐崎松記

尊朝法親王

叡山のこと。廿とせあまりこのかた退轉に及び。精舍佛閣の跡も鹿のふしどとなり。峙つたひの道は。をどろが下に埋れはてゝ。踏わたるたよりなかりしを。かしこき世の御かための命により。山門再興の事ありて。顯密の兩宗も。日々年々にいやまさりて。久かたの口吉の祭禮も。昔のほどこそなけれ。かたのやうに執をこなはれ。志賀からさきの神幸も例にたがはず。松のほとりに神輿の御船をならべ。御供などそなへ奉るに。管絃のもののねさへ。さざ浪松風にたぐひていとたうとくなん侍る。さるを此松いつぞやの大風にたふれて。かたばかりも残らず侍れば。御幸の神感もこと絶ぬるやうに世にもいひあへり。こゝに新庄駿河守直頼とて。文武世にすぐれ。五常もをのづから傳はりたる人あり。さればにや大津の御城

郭をあづけ給はられしなり。其はらからに松東玉。維齋眞壽。とてふたりあり。このかみのうしろ見にて相そはれしが。彼松の事よりよりくやみて。弟の維齋いで裁ばやとて。家中のものにいひて。風情ある松をとかたぐゝたづねられしに。からうじてほり求てうへられ。めぐりに埒ゆひ。いがさまにもげに／＼しければ。往來の人めとどめぬなきはすくなし。于時天正十九辛卯年秋のする。人もぬさとりかはしみなはらへして。それが中によめる。をのつから千年もふへし辛崎の松にひかるゝ禊也せはと聞ゆ。さて松はやうもなく生れつきて。春ならぬね稍もいま一しほのみどりにて。ちとせのねざしいちじるき事。神慮有がたく覺え侍り。又或人に松の來由をおほむねとへば。そのかみ大津宮天智天皇御宇。あめの御門とかや申込みかどいまずかりて。大津の都敏達天皇御宇。禁斜ならずして。今の三井寺も彼御門の勅願所として。津水（扶イ）のなが

れ三會の曉まで。たふまじき御誓約掲焉なり。ある時天皇から鰯に行幸ましますに沖中より漁舟二艘さはさして来る。御門是を近づけて。ことのよしを叡覽あれば。二人の翁あり。二人名あり。神祕なれば不載。御門詔さまぐにて。翁も神變奇特現じてかくうたふ。

大伴のみの濱へを打さらし寄くる浪の行ふしらすもとて。船はいづちいぬらんとも見えず。則神託にて山王の御初と聞ゆ。星霜積りて千とせにあまり。今も祭禮に。からさきにて粟飯の御供などそなふるも。其むかしのことなりとぞ。ついでにさまぐの事あれど。くだぐしければかゝす。今此御代に大津いとゞ美々敷なりて。昔の都もをよぶまじう。郡のあるじ政道たゞしくて。民のかまどの煙も。朝なぐ昨日はうすしとたなびきそひ。上は下をあはれみ。下はかみをあふぎて。いよぐをだやかなる御代に生れあふみの海水たえざらむほどぞ國家のさかへかはる事えあるまじきにこそ。

右以扶桑拾葉集校合了

## 夢想記

玄旨法印

慶長のはじめの年仲の冬。大坂の亭にうつりおはしましゝころ。奇瑞の靈夢を感ぜらるゝ事あり。其和歌にいはく。

世をしれとひきそあはする初春の松の緑も住よしの神

凡靈夢あり喜夢あり。昔黃帝夢に華胥氏の國に遊ぶ。さめての後天下大に治れる事。彼境のごとしといへり。又殷高宗の良佐をえて國家盛なりし事。めでたき夢のためしなり。中につきて松は十八公の名あり。これ又丁固が夢に感せし嘉兆にあらずや。抑住吉御神は、西の海の遠きしほぢよりあらはれ出て。ちかきさかひに迹をたれ給へり。たゞこの我朝を鎮護し給ふのみにあらず。遙に異國征伐の御ちかひ専らなるがゆへに。神功皇后の三韓を平げ給し時も。此御神ことに威猛を施し給へりとぞ。されば此秋津洲。四の海波の聲せずして。



こまもろこしもなびきしたがひ奉る事。ただ此時にあり。其久しき行さきをおもふに。住吉の松に小松のかげをならべつゝ。一木一木に千世をかぞへても。勁節枝さかへ。貞姿色みさほにして。猶かぎりなき御齡なるべし。今の事をきくに。をろかなる心にもよろこびにたへず。いさゝか筆をそめて。祝詞を奉るといふことしかなり。

住吉の神の恵もあらはれて君か八千世を松のことは

右以扶桑拾葉集校合了

## さか衣

若狭守勝俊朝臣

山よ山罪にはあらず。みやちかくていきほひをへだつとしもなきこそ佗しけれ。宿よ宿つみにはあらず。隣あしくて萬にかしがまじきこそわびしけれ。さるはよしのの奥のよぶ子どりをよすがに。やすくもよほさるべく。青根がみねの苦のむしろもたのもしう。岩根のとことほにかたしかむあらしも。こゝろきよくおかしけれど。ほだしおほかる身には。あらましのほいたがひて。のぞみとげぬぞくちおしきや。いくその春秋をむかへて。かゝる谷の戸にはすみそめけむかし。門はさし入より。道もなきまでしげりあへる蓬が柚のきりぎりす。過ゆく秋をかぐみ池の水草は。庭もひとつにのらとあれわたり。たれにならへる松むしの音すごう。ふりたてゝなくすむしの聲。いかになりゆく身のはてならむとなみだ

つゆけきゆふべなりけり。木だかき松たちなれしかたもあはれにしのばれんものとはなしになどす〔前歌〕るもたゞならず。ふとさのほど。

本はいだきあまれるばかり。末は雲に入。おもふことなからむにてだにたへしのぶべくもあらず。さすがに事とふ人もあれど。鶴の毛衣とよびそぼれあへる主の許よりみつをたう紙の端にすこしかいつけて。これらつくらしめよとせうそす。しろきそかちにやせたりと笑へし。ふたつは例のものわすれいづちにけん。老はこれまでもうきものになむ。からうじてひとつは。山家のふるきおもひとへる題に。

またいそく妻木の道のきか衣君か僞にはいつ迄かきし東方未明顛倒衣裳。詩とかいひためる文にやさや有けむ。さのみしらぬことまねぶもかたはらいたし。またふるきうたさかさまにきし

や衣の年も経ぬつかふる道にいそぐならひはなど。これかれ裳のすそより落たることなれど。只今のをのがさまにかよひて。むかしは忠のためさかさまにきし衣。いつしか妻木のみちのいとなみにかはり。買臣があとにくるしみこうじにたれど。鄭公が乞しかせのたすけもなし。冬の夜一夜すぎにしかたのことども。かきくづしおもひいづめれば。ほろ／＼とただいできにいでくるなみだのやがて袖の氷とむすぼうれ。〔はい〕あらはなる寢やのいたまよりもりくる月のまくらに落たるかげいともすさまじう。うちもまどろまれず。まろびかへしかへし。かけまくもかしこからずやはあらぬ。故關白おほきおとど。わかくは信長公につかうまつり玉へりしころ。明智のなにがしとやらんいひけんおこのもの。おほけなきころつきて。はかりうしなひたてまつりつ。此殿

ものしくきこしめす。いでやさつなでう事かあらむ。頭きりてんものをといかりをなし。そこらのつはものを雲のかすみのごとたなびかせ。いとくのぼりおはすといふほどこそあれ。みやこの軍とみにやぶれて。かれをほろぼし我君のあだをむくひ。あまりのたぐひかしこゝに追うち給へり。ほいとげて紫野におはして。かの御はうぶりのこと。さまぐさたし行ひものし給ふ。其日になりぬれば。天下に名あるかぎりは。各御ともにつかうまつる。御はかしみづからもたまへり。いたうしほだけの御袖みたてまつる人さへなみだぐまし。烏のやうにはるぐとあゆみつぎたる儀式。しめやかにこなきがつゆのうたうたふいとものがなし。事はてゝ後の御わごこまやかにいとなみ。たうときことどもしつくさせおはします。さて御寺いかめしうつくりみが

き。御封あまたよせらる。そうけんぬんといふめり。御そうにたちつぎ給はんうつはものにたへたるひとおはしまさぬことをこよなうなげきおぼす。馬車さながらこの御門につどひ。道もさりあへぬけしきおもひやるべし。かかればをのづから世をしらしめす。漢の高祖。みさかの劔をたぶさにせし匂ひになすらへつべし。大風おこりてなびかぬ草木もなく。東はえぞが千嶋もたゆまず。夜晝みつぎものをはこび。せたの長はし駒もとどろとふみならす。吾たえざるべし。逢坂の關ながく戸ざしを忘る。西は隼人の薩摩がた。沖の小嶋壹岐の國。對馬の海も波の聲おさまり。こまくだらしらぎの王。氣長足姫のむかしにかへり。我國にきたりまうで。ぬかづきかしこまるいとやむごとなし。もろこしの御門きこしめしすぐさず。事々しき名つきたる。將軍御使にはるけき

浪路をわけつゝきたりまどふ。さはおぼろげの所は。ふびんならむかしとの玉ふて。中納言と聞ゆる御婿の館にそのまうけしつ。おはします所は仁徳のむかしの御あとにつくりみがき給へる玉の臺は。四方にてりかゞへて。むかふ面もまゝばゆきほどなり。よき日してめしあればまいりぬ。みちすがらたち樂めでたうふきたてたるさまぐのものの音いへばさるなりや。からめいたるよそひどもめづらかにこよなきもの見ならし。かゞの大納言利家。備前の中納言秀家侍ふ。宰相中將侍従など。すべてあまたおほかれどみなもらしつおとどはこと更にきら／＼しうかまへいでたるおましにでうをかさね。えもいはぬ錦のはしさしたる御しとねまいりて。あをやかなる簾。たかうまかせ御らんすべし。こと國のものの對面たまはらせ給事は。不比等の御例とぞきこえし。たち居はいしたてまつるさま興あり。御前の

事しづまりて座につく。たてまつれるもの左右にかきすふれば。山もさらにうごきいでたらむごとし。夜ひかる玉の千箱。あやにしきは常なれど。これは色しななめかしうあざやかに目もをよばず。鴻臚のものすゝみよりて。こなたかなたおほせ事つたふ。我王けふよりながくせうとの國のむつひをなし。したしまんとねがふまごゝろをあらはす事しかなりといへり。なにくれといひつゞけんもことばたるまじ。いさやかうやうの事はいにしへの代々にもありやなしやと先難波のみやこどりととひてんかし。たかきやは半雲にそびへ。玉の甍。めなうの梯。ふむ足もそらおそろしう。琉璃の瓦中々あさまし。夜のぼれば手をのべて星をつむかとあやまたれ。ひるはめちとをく千里もふかき烟をのぞみ。民のかまどにぎはふべかむなる事をおもほすべし。御母ひとりおはす。大政所ときこゆ。うや／＼しうたうとみ。けうの御こゝろいたらぬくまなし。あまたさぶらひ給へる御かたぐ。夜ふかく目



をさましてとりのそら音におほめき。月のひかり虫のとぶにそゝのかしたまふもさることや。北の政所とかしづきたてまつるは糟糠の御妻ぞかし。堂よりくだし給はぬもあはれにかたじけなし。ねぢけたる御こゝろ露おはせざりき。まつりごとをすゝめ。こめきおほやけしく。萬の人をめぐみのどかにすぐし給ければ。きしらふ人々もをのづからなだらかに。御なからひあらまほし。文王の大姒もかばかりにや。されば君子のよきたぐひなるべし。榮花物語に一條院の御代の事。后中宮女御更衣などの御ありさまより。なにくれの御調度まで。いみじう有がたきやうに。ことごとくしかきなし。御堂殿の法成寺をためしなくいひたれど。それはことのかずにもあらず。いまの世のためたきを衛門のかうに見せたらましかば。いとくはぢて。げにおもても赤染ならむとほゝゑまる。やまとうたこのませたまふおとゞにて。春秋の色にふかうおもひしみ。おりにつけたる御口ずさみこゝら世にとまり

けん。まことに月花もおもておこすべき時なむや。ひとしくめぐりすませ給へるくれ竹のふしみの御所。花のみやこの殿は聚樂。世ゆずりてひゞきのゝしる。かしこにいますほどなるべし。我こがねをして北斗をさゝふるとしひさし。ふようにをろかなるかなとの給て御藏あけさせくばり給はすべき日をさしてきこゆれば。とをき國々よりもまいりつどひ。此寶をうけとりさはぐ。大和にも唐にもさることありなむや。かみ中しも千とせをよばふ聲たえず。ほとくよろこぶことかぎりなし。いまはむかしなごりなかりける夢なりけりや。そもこの比の世を人のことぐさに。田成子とやらむほひろかならねど耳ごとするは。なぞいともこゝろえぬわざなむめりかし。

立返る道社なけれ思出ることはおほえのきし方の世におもひあまれる。しのぶぐさのつゆばかり千千にひとつをだにえかきとゞめぬ老くちば。なにのいけるかひとぞ。

右扶桑拾葉集校合了

群書類從卷第四百八十二

雜部三十七

多武峯少將物語

本よりかゝる御心ありけれど。師範ちゝおとゞおはしけるほどは。せいしきこえ給ければ。えおぼしたゝざりけれど。うせ給てのち。はらゝのきみだちはみなころとおはしませば。おとどおはしまさねども。ことにものしき事もし。この齋宮齋子の宮の御はらの女姫ぎみは。またともかくもなくておとゞのかしづき給ひしに。かゝりておはせしに。さもあらねば。たゞこの御せうとだちをむつまじきものにかたらひきこえ給て。世中のあはれなる事をおぼしゝをみたてまつり給ふをかた時みたてまつらではえおはしますまじけれど。本よりかゝる御

心有けるうちに。御めのとおはしけれど。それもさとすみにてことなることもなくて。よろづのことこゝろばそくおぼえ給まゝに。たゞこのことのみ御心にいそがれ給ひつゝ。いで給たびごとには。女重光姫女ぎみに。ほうしになりにやまへまかるぞときこえ給ければ。れいのこととはぶれにおぼしてなんきこえ給けると。まことにこのたびはときこえ給ければ。れいのよさはかへり給へらんをこそは。法師かへるとは見めときこえてわらひ給ければ。まことにやときこえていで給ければ。女重光姫女ぎみ。法師にならむと侍は。我をいとひ給なめりとて。

哀れとも思はぬ山に君しいらは麓の草の露とけぬへし

ときこえ給へば。高光の少將の君。

我いらむ山の端になをかゝり南思ないれそ露も忘れし

と申給て。あい宮の御もとにまで給て。詔たちな  
がらいで給へば。ものきこえむとのたまひけ  
れば。などえのぼり給はぬときこえ給けれど。  
なみだもいで給ければ。いそぎものへまかる  
ときこえ給て。ことなることもきこえ給はで  
ひえにのぼりたまひて。御おとうとのおはし  
けるむろにおはして。とうぜんじの君をめし  
て。かしらそれとの給ひければ。いとあさまし  
くて。せんじのきみ。などかくはのたまふ。御  
心かはりやし給へるとて。のたまふまゝにな  
き給。それとのたまふ阿闍梨もなきてうけ給  
はらざりければ。御もとよりをてづからかう  
ぞりしてきりたまひにければ。いかゞはせむ  
とてなをそりたまひける。せんじのきみなき  
まどひ給けり。阿闍梨もいとあさましきわざ

かな。御はらからの君たちも。をのれをこそ  
給はめと。御せうそをだにもきこえあへず  
なりぬるとなく。せむじのきみかうくなむ。  
いとにはかにあさましくと京の殿ばらにきこ  
えたまひければ。いみじうあさましがりのゝ  
しりければ。うちにてきこしめしおどろきて  
けり。御いもうとのきみなどもなきまどひ給  
けり。女房もなきまどひて物もおぼえ給はず。  
あさましきにいさゝかなる物もまいらでなき  
給ける。宰相中將君源朝公をはじめたてまつりてお  
どろきとぶらひきこえ給。山にみなをのぼり給  
とて。よなかにぞおはしける。たまひたりけ  
るときこゆる人ありければ。うちおき給て。  
見まいらせ給てのたまふ。

哀なる名にはおふやとみつれ共形は殊にあれはかひなし  
かたちもことになり給へるときけど。そのす  
ぢにはあらねば。あはれにもあらずときこえ

給けるを。そのきたの方みたまひて。

逢事の形はことになれりとも心たにゝは哀れなりけん  
ときこえたまひければ。その御返。

もとむともかひやなからん類なく哀にありし君か心に  
との給ひつゝ。おりふしごとになき給をうけ  
給はる人ことにあはれがる。三月ばかりうぐ  
ひすなきければ。きたのかた。

我身にも世を驚となきけれと君かみ山にえこそ通はね  
あねきたの方の御返。

〔此間亦有誤脱〕

とも。げにたれもおなじやうにしりたまはざ  
らむをなむ。おなじうきよかはと思ふたまふ  
べき。うからねばこそそのぼりおはすらめと。

山にてもと。いふことあらばとなむきこえま  
ほしきを。このかみもこのよをそむきて。あは  
れなる人のすみ給らむよかはをわたりて。御  
かげをだにみるまじくとも。猶そむきても。を  
こなひ侍まほしきを。宮にもしかに又おぼし  
めすなる御ともにもと参き。いもうとをみす

はといふこともなきにこそは。まことにやた  
れにとはましとか。すみ給人にこそとひきこ  
えめ。うからねばこそ。

流れても君住へしと水の上に浮よかはとも誰か問へき

となむきこえ給ける。つねにこのふた所。かな  
しうあはれなることをなんきこえかはし給け  
る。かくてかのもゝぞの權中納言殿師氏の中將

のきまいり。中宮安子よりはじめたてまつりて。

おどろきとぶらひきこえ給なかに。御めのと  
とあい宮となむものもきこしめさすなきまど  
ひ給ける。かくいひていふがひなくて月ごろ  
になりぬ。女ぎみはあまになりなむとなきた  
まひけり。あい宮の御もとなんつねにかな  
しきことをもかよはし給ける。あまにもこゝ  
にもとなむおもひたまふる。ひとたびになり  
給へどあい宮の女君の御もとにきこえ給ひけ  
れば。あまにはたれもなるとも。おなじやま



にはいらざらむこそかひなけれど。よかはのふもとまでだにとおもふたまふるに。それもかたくや。かくきこゆる。

いづくにもかく淺しき浮よかはあな覺束な誰に問ましとあいのみやにきこえ給ければ。女ぎみ。あまにと思ひたもふれ。

山ちしる鳥に我身をなしてしか君かくこふと泣てつくかくて。あい宮の御もとよりきこえ給ける。

なそもかくいける世をへて物を思ふ駿河のふじの煙絶えせぬあはれ／＼。そこにもいかにとなむ思ひ聞ゆる。ゆめにもやまのきみのみえ給おりは。さめてくやしくなむときこえたてまつらるれば。御返。

物思ひは我もさこそは駿河なる田子の浦浪立やますしてとなむ。たれも／＼御はらからの君だち。このあい宮のなきかなしびたまふをきゝ給ひて。あはれがりきこえ給も。〔前歌〕ものをきこえておはしふるとき／＼。故式部卿のきたのかたは。時

時とぶらひきこえ給ひける。四月ばかりにうの花につけて。

君のみかわれもさこそは世中をあな卯花となく時鳥かへし。

卯花のさけるかきねに時鳥我はまさりてなくとしら南又式部卿のきたの方もそのとのにきこえ給。なを思ふ／＼ともあさまし。やまよりもいかにつきせずおぼすらむ。ゆめもあらば。

憐なること語らひて郭公もろ聲にこそなまほしけれと御かへりかしてまりてなん。いとも／＼うれしく。かくつねにとはせ給ふことなむ。つきせぬことには。いでや／＼。すべて／＼。ただをしはからでまことや。

かたらはぬさきより鳴つ時鳥物の憐をしれりと思へはかくてあせちの大納言どののきたのかた。高明 藤原公三女あのみやの御もとに。此ごろはいかゞあやしうものさはがしくおもふたまへられてなむしばしもきこえぬ。あはれよの中をいかにながめ

たまふらむ。こなたにもなどかわたり給はぬ。  
やまよりはとぶらひきこえ給や。さもこそは  
やはそむき給はめ。しのびてもいても。おほ  
むもとにはかたらひきこえ給へかし。女のか  
よふ所ならば。さてかよはまほしくなむおも  
へど。いまこそあはれな<sup>（れ）</sup>。いかにそこにも。  
世中ごゝろにかなはぬおりは。やまへいりぬ  
べきありあれど。えやはよのなかをそむく。  
まが／＼しくあまにならむとの給ふなる。ま  
ことかゆめ／＼しかなおぼしそ。

恨こし背まほしき世也共みるめ被かぬあまになるなよ

あい宮の御返し。いとうれしうとはせたまへ  
るなん。つれ／＼なるに。これよりこそきこえ  
まほしけれど。つねにさはがしうおはします  
らむに。とぶらはせ給をよろこびて。そなた  
にもまいらまほしきを。あけくれのながめに  
袖ひぢつゝ。ものおもはぬになむ。やまよりと

きどきをとづれ給。かしらそりたまへらむす  
がたのみ見たまへほしきに。みえ給はぬが。  
うきよの中にかへらじとにやあらむと。あま  
にはさもやとおもふたまふれども。さてもな  
をよの中にこそおもひかへりこめとおもふた  
まふれば。またおもひたゝすなむ。

海士ならて夫にも汐はたるれ共うきめ被くと父に成へき  
世にはしりてやまちにまどふこゝろも<sup>（下聞）</sup>

おとうとのせじのきみ。

出てこし人の家ちも思ほえす我深山こそ佳よかりけれ  
かくてあい宮の御もとに右衛門のすけおはし  
て。少將のきみおはしつるやうかたりきこえ  
給へは。わればかりうき身はなし。おとこは  
おはしかよひたぶと。

山の井の麓に出て流れなん戀しき人のかけをたにみん  
とのたまへば。すけのきみの御かへし。

君かすむ山かは水の淺ましくうき世中になかれ出にし  
さてかのもゝぞのひめぎみ。少將の御そで

に涙のかゝりぬれたりければ。

ほのく／＼とあけの衣をひきまれば草葉か袖は露のかゝれるはき給し御はかしのまくらがみなるをみたまひてもなき給ふ。さぶらふ人々。上下かの御身よりなみだのながれいでぬるときこえ給ければ。ひめぎみ。

つの國のほりえに深く物思へはみより涙も出る成らんひとく／＼きたの方にきこえ給ければ。あはれがりたまひて。

ともすれは涙を流す君は猶みをすみかまのこまもたえぬ又少將のつねに見たまひし御かづみをひめぎみ見たまひて。ほうしはかづみはみぬかとして。かはしきのしたにいれ給。

常にみし鏡の山はいかゝあると形かはれる影もみよかしやまにもてまいりたる御ふみにいとあはれおほかる御かへりに。

鏡山君か影もやそひたるとみれは形はことにそ有けるたれ／＼もかのひめ君の御なげきをあはれが

りたまひけり。もゝぞのゝことにきこゆるに。をとこ君つねにおはしてあはれがり給。御ふみにてもありけり。ひめ君なを世のなか心うし。あまになりなんとのたまふをきゝて。少將のきみ。

尼にても同じ山にはえしもあらし猶世中を恨てそへむかへし。

袖の浦にみをうしほやく蟹なれはみるめかつてあらむ物かはさてこのひめぎみ。山のきみのをこなひたまふらむ。われいをくはんこそゆゝしけれとて。御さうじ精進をぞなをしたまひける。山のきみきこしめしてあはれとおぼして。こゝかしこよりおかしきさうじ物まいらせたるは。時々たてまつり。おくろにかひにをきたるめをはじめていれたり。又四月つごもりばかりに。うぐひすのす三つばかり。むめすちばかりいれたり。

頼みなくはかなくみゆる我故に君か詠めを思ひやる哉

あはれ／＼ときこゆかひなくおぼすれ。まことやさうじし給なるは。しほうらこえぬ山なれど。こゝろざしありて。をひいでたるめぞやとあり。うぐひすのあふすちには。かくぞせん

とあり。  
わかすみか君は床しく思ほえすあな鶯のすの内をみよかへし。

こひてねし君なき床の岩浪にこゝの詠めに袖の濡ぬるしのびきこゆるかひもありけるかな。

鶯のすの内

見ても

ねをそなく君か住家は是かと思へは

さて中納言<sup>師氏</sup>どの、北の方。このきみの御そうそく。けさよりはじめて。ひとくだりせさせ給て。これやまへたてまつりければ。山へたてまつり給ふ。この御ぞどものいとあはれなれば。わすれてはたれがことぞとおぼめかれつる。

君かきしきぬにしあらねは最染の覺束なさにきて立つるなを／＼。

新古

奥山の苔の衣にくらへみよいつれか露のをきは勝ると

生さるとも集

なんきこえ給ける。うへの御ぞよりはじめてすみぞめなる。たゞあはせの御はかまぞかいねりなりける。やまの御かへり。やまぶしはこけのころもなどのみこそ身にはそひたれ。これはみにもあはぬものどもなれど。御こゝろざしあるものどもにてなむたまはりぬる。むかしのきものにもあらねばや。おぼめいたまひつらむ。いまよりならひ給へかし。わいてもこと人のころもがえやしたまふらむ。あたらしくそでぬれぬ。ぬぎ給はゞ。もとのいろわすれたまひなむ。まことやすみぞめのきぬはきたまふなればにや。いとゞぬれまさりてな

銘ぬれはくものよそ／＼最染の衣の裾を露けかりける

露霜はあした夕におく山の苔のころもは風もとまらず

新古白鳥の集

さば集

となんありける。さらに京にいでじとぞの給ひける。これをこのひめぎみあいみやおぼつ



かながりたまふ。あにをとゝをこなひなんよくよくしたまひける。はゝ君ちゝおとゞをなむいとくよくこひたてまつりたまひける。あいみやの御もとにもゝぞののおほひめ君のたてまつり給ける。

物思ひのやむよも無て程經れは忘るゝ事もしるのわかき。たちはきたるをみれば。ゑにかきたるさへなむかなしう侍ける。けふの御かたちはしらず。むかしのみおも影には見え給。そこにはいかがとなん聞え侍。つれづれの御すまひなればにこそおもひすてられける。しのぶぐさうとからずや御らむづらむ。こゝにも。

獨のみ眺むる宿のつまことに忍ふの草を生まさりけるうけ給はりぬ。これよりも聞えむとおもふ給ふれど。袖ぬらすながめにあかしくらすほどにをこたり侍にける。つきせぬ物おもひはいつはてなん。おやたちにをくれたてまつりた

るに。ましてかゝるものおもひのそひて侍はおぼしやれ。よもぎのしげきやどにたちより給ひて。あはれとの給ひし御すがたの見えねば。月日のふるまゝにいとあはれに侍。かたちことになり給へらむ御すがたを。時々見えたまはゞ。なぐさむよをねたしとの給ふなるこそいとどおぼつかなけれ。しのぶ草はこゝにもや。

茂りますしふの上に置そふる我か一つは隣の程にそおもひきえなでいきてとなむありける。さて此ひめぎみにはやうよりこゝろがけきこえたりし人もとぶらひけり。それがきこえ給ふ。なかかこのきみをやまにいり給ふべくみたまひぬべきことはあらせたてまつり給し。まろこそむかしやまずみはせんとおもひしか。人に物おもはせたまへりしむくひとおぼしめせよ。まめやかにやまにすみ給よりも。とまりて

ひとりねしたまふこそいかにねぶたからずおぼすらむと思ひたてまつりて。

聲たかく哀といはゝ山彦のあひ答へすはあらしと思よしついでとてかへりごとしたまはす。かなしさぞまさりける。又ほどへて。

山となる耳無山の山彦はよへともさらすあひも答へすこたへもとりのゝ人を見まほしとてない給ふ。京のとのより御ふみに。このごろはいかにおぼすらむ。こゝには心ばずき（そめ）をいとあはれになん。こゝにはこのつきなみだとぞめず。そこにはおぼすらむをおもひたてまつりて。あまにならんとさへの給ふなる。つねはよの中にさぞおぼすらむ。こゝにぞうきよをばそむきはてなんと。いさやよのなかにないしかみのぬしといふなれば。かしらおろしてはかうぶりとられなむと人のものすればなむ。いさゝかうしろのこして侍。さうじをさへ

し給ふなれば。わかき人だにふかくものをおぼえずなれば。こゝにはまして水風のいものをせましとなむ。あまにてもうき世をばはなれずや。なをしかなおぼしそ。

船流す程久しと云なるをあまと成てもなめかるてふときこえ給ける。御かへしかしこまりてうけ給はりぬ。いとうれしうつねにとはせ給へるをなん。みづからまうさまほしうおもふたまふれど。このごろみだり心地れいよりもまさりてあやしうはべりてなむながめ侍。

あまとてもみをし隠さぬ物なれば我からともうきめかる也とうけたまはれば。おもひもさだめずときこえ給へり。又右衛門佐中納言どのにつたへたまへりけるついでに。大ひめぎみの御方につたへ給へりけり。

忘ても嬉しかりける君かとて黄昏時はまとはれそするひるねしておきたまへりけるほどなりけり。ゑもむのすけたちながらきこえ侍。あやしけ

れどもいそぎて内へまいり侍ればなん。いか  
にとて。えしば／＼もきこえ侍らずとて。いか  
によのなかをたちはきたるさまをも見たまふ  
とてなむきこえたまへる。御返いとうれしう。  
たちより給へるをいそぎたまへばなむ。すが  
たはたそがれどきにおぼつかなくなむ。こゝ  
にはそれともあはれになん。つれ／＼のなが  
めに。すまゐさへかはりたれば。あの人のか  
げもみえねば。こゝろぼそきをとせたまへ  
るなんきこえたまへば。さらばしづかにまい  
らむ。たちはきたるすがたも見給んとあらば。  
ゑりくゝつにてもさぶらはむとていでたまひ  
ぬ。みやのこのかみのとのにて人たまへるつ  
いでに。ようさりつがた月のほのかなるにた  
ちよりたまへり。むかしきくやどのありしえ  
にいかによや。山人はしのびてをり給や。あ  
いなし。

足引の山より出ん山ひこのそまやま水に音まさらん  
ときこえ給へれば。いとうれしくたちよりて  
とはせ給へるをはじめはうれしかりつれど  
も。のちの御ことばにさしあやまちていとど  
しくさまもみえてとて。うたのかへしはきこ  
えたまはず。さがさうのやうに人もこそきけ  
こと。このきむだちはしばしはこそあはれが  
り給しか。あいみやぞおぼしやむことなかり  
ける。さてこのひめぎみ。身をやなげきてまし  
とおぼせど。きむだちのおはしければ。われな  
くてはいかゞせんとおぼして。やまにきこえ  
給ふ。世をのがれたになくはいかゞせむとお  
もふに。すこしつゆのいのちをもとめいづる。

きみやうへし我やおふしゝなてしこのふたはみつ葉に  
おひたるを。かせにあてしとおもひつゝ。花のさかりに  
なるまでに。いかておほさむとおもへとも。つゆのいの  
ちやあへさらむ。いまもけぬへきこゝちのみ。つねにみ  
たるゝたまのをも。たえぬはかりをおもほゆる。ものの

かすにもあらぬ身を。たゝひとへにてあさましく。あまたのことをおもひいてゝ。きみをのみよにしのふくき。やまにしけくそおいのよに。こひてふこともしらぬ身も。しのふることのうちはへて。きてねし人もなきところ。まくらかみをそおもほしき。ことかたらはんほとゝきす。きてもなかなかんよをうしと。君かいりにしやま川の。水のなかれてをとにたに。きかまほしきをほたされて。よにすみのえのみつのはに。むすへることのなかりせは。つねにおもひをたきものゝ。ひとりゝももえいてなまし。

# やまの御かへし。

もろともに。なてゝおふしゝなてしこの。つゆにてもあてしと思ひしを。あなおほつかなめにみえぬ。花の風にやあたるらむと。おもへはいとそあはれる。今も見てしかとおもひつゝ。ぬるよのゆめにみゆやとて。うちまるとめとみえぬかな。めのうつゝまにかきりなく。こひしきおればおもかけに。みえても心なくさみぬ。かたみにさこそみやこを。おもひわするゝときやはある。はるけきやまにすまへとも。つかまわすれす思やる。くもひなからもあしかきの。まぢかゝりしにおとらす。あは

れあはれとまこもかる。よとゝもにこそしのひ草。わかみやまにもふもとまで。をふとしらなむしらかはの。ふちもしらすはひたふるに。きみかたにのみうきよかは。うれしきせをそなかれてはみむ。

となんありける。五月ついたちに御はらからのきみたちわりぐゞしておはしたりけるに。あめふりたりければ。いしをぎみ。

かゝりてふよ河ともへとさみたれていとゝ涙に水まさりぬる  
飛絮  
 少納言。

君かすむ横河の水やまさる覽涙の雨のやむよなければ  
 右衛もんのすけ。

草深き山ちを分てとふ人を哀と思へとあとふりにけり  
 宮權亮。

何くへも雨のうちより離れなは横河にすめは袖を濡さず  
 となむ。とみのこうぢのきみだちわりごしつ  
 つまで給へり。  
遠度

よのなかこゝろうければ。をのれこそかしら  
 そらん。山へいらむとおもふたまへしかど。  
 おとゝのきみのかくしたまはでうせたまひに



しかば。つみふかくなるとおもへたまへて。

おもはぬやま／＼にありくこといまに思ひ侍れど。きみのおはすれば。御でしにもやなりなましと思たまふるとのたまへば。せじのきみ。でしまさりにこそあなれときこえ給ば。六らうぎみ。でしまさりとおぼさば。これよりふからむやまにこそいり侍らめ。いづくならむとて。六らうぎみ。

都へもさらに歸らしわかことくつみ深き山いつこ成覽  
せじのきみの御かへし。

是よりも深き山へに君いらはあさましからむ山河の水  
四郎ぎみ。

君をなを浦山しとそ思らむ思はぬ山にこゝろいるめり  
七郎ぎみ。せじのきみにきこえ給。

君かすむ山ちに露や茂るらん分つる人の袖のぬれぬる  
御返し。

昔の衣身まへを我はそほちぬる君は袖こそ露にぬるなれ  
おとゝせじのきみ。

昔より山水にこそ袖ひつれ君かぬるらん露はものかは

高亮

歸朝

かくてこの入道のきみ。御ゆめにおとゞのきみ出家し給へりし御すがたにてこのよかはにおはしましてなきてきこえ給ける。なにをうしとてかくはなり給じにか。たふとさはいとたうとけれど。いとかなしくなむあはれにとひきこえ給へば。それにたすかることもあり。さはあれど。いとくちおしくなむあるなどの玉へば。なく／＼きこえ給。いとあはれなるすまゐし給けるを。あまかけりてもたづねとぶらはむ。かゝりとならばよにたち給なとて。御かへりごと。

君かすむ横河の水し濁らすは我なき魂は常にみせてん  
いと／＼袖そひちぬる横河には君か影みは水も濁らし  
ときこえ給ほどに。やがてさめ給ひぬ。こひちかひ給て御をとのきみにかたらひきこえたまひてかくなき給。さてかの入道の君の御こは。

たちはきたまへる人を見たまひては。てゝ君かとのたまふに。あらずとのたまへば。はゝぎみこそてゝきにはあらず。なかてゝきのひさしく見えざらむとてなき給へば。ひめぎみよゝとなき給。御ぐしかきなでて。きはやまにぞおはするとなき給を。おほぢぎみ見たまひてのたまふ。

芦引の山なる親をこひてなく鶴のこみれは我を悲しききたの方。

ひえにすむ親こひてなく子鶴ゆへ我涙こそ河と流るればゝぎみ。

澤水にすむたにもみえよかしこゝち子鶴の鳴て戀るにてなき給。かくてあはれなることがちになんありける。たちはきたる人みても。こはや。てゝきなどはしきのもとにおはせぬ。我をいだきたまはぬとて。なげきたまへば。

逢事の難きもしらす内になく雛鶴みるそ悲しかりけるきたのかた。

逢事の難く迎たに慰まてわらはなきにそ我もなかるゝおほぢぎみ。

かたにても親ににたらはこひなきになくをみるにそ我も悲き兵衛爲光のすけのきみにぞたうの少將きみの御かはりに少將になり給て。よろこびにこの中納言師氏どのにまいりたまへるを見給ても。又せきやりがたき御けしきなり。なかのきみ少將は。やまのきみのかはりかとして。

たかはすや同じみ笠の山の井の水にも袖を濡しつる哉きたのかた。

たかふ事少きみには哀なるみ笠の君かかはりと思へはこのいかを少將も思ひいで給てなみだのこさでぞおはしましたける。つかさもことにうれしからずとぞのたまひける。あにきみのなりいでたまはむ。しりにたちてありかむとこそ思しか。よろこびにありかんことのかなしきこととの給ひけれど。いかゞはせんとぞありきたまひける。かくて近衛づかさの人きて。う

たひのゝしれど。なにのうれしげもなくて。し  
ほたれたまひける。

なにてるみ笠の山に入きても涙の雨になをぬるゝ哉  
かへしうけ給はる人のきこえける。

みかさ山雨（雨氏）はもらしを古の君かかさしの露にぬるゝそ  
もゝぞの中納言のきみしろがねのはながめ  
をよつばかりつくりて。そのころのはなさし  
て。やまにたてまつり給とて。

山のはゝかくしもあらし君が爲都の花はおれは袖ひつ  
御かへり。

我ために君かおりける花みれはすむ山端の露に袖ぬる  
さてこのはななどきみたちみなきこえ給て。  
みなのはりて見たまふ。念佛堂には。このかめ  
にはなたてゝなむをこなひたまひける。殿上  
のきみしかゝとにうだうのきみにかたりた  
まふ。ある殿上人。

空にすむ物と云共君ともにかめさへのほるみ山也けり  
同上殿人。

又。横河てふなには立れと今よりは龜山と社云へかりけれ

哀なる君か齡をゆつりてそ横河に龜もたちのほりける  
返し。せじの君。

又あせちど（高明）のよりもゝぞののきたのかたの御  
もとにあふみのきたのかたの御ふみ。いかに  
世中をおぼしめしますらむに。おさなききみ  
だちをみたてまつり給に。かなしくおぼすら  
む。されどやまにだにおはしませば。たのも  
しくおぼしめすらん。ここにこそ人かずに侍  
らねど。ちゝなしごをもてわづらひぬれ。そ  
れはよの中をなにとはおもはん。まづかの山  
御すまゐのあはれなるをなん。さとへいで給  
ましとあるはまことか。されど御いのちだに  
おはせば。

あし引の山に年へむと思へとも都戀しくならは出なん  
たとふべきことにはあらねど。しでの山いり

にしおきなどものとしをふれどあふことなく  
はべれ。いみじくとあり。きたのかたひめぎみ  
にかくなんときこえたまへれば。ひめぎみの  
御かへりきこえ給。

宮古をは厭ひて山に入ぬれと戀しからねは思ひ出しを  
みちにわすれぐさこそおひたらめとなん。こ  
のせじのきみの御はらからのきみたち。山は  
なつともさむかなるを。わたもの奉入した  
まふ。中宮安子よりくるみのいろの御ひたれ。  
くちなしぞめのうちぎひとかさね。ふるきの  
かはのおほんぞ。あをにびのさしぬき。あはせ  
のはかまたてまつれたまふ。御うた。

夏なれと山は寒しと云なれは此かは衣そ風はふせかん  
とてなむたてまつるとある。御かへし。

山風もふせきとめつるかは衣の嬉しき度に袖を濡ぬる  
大納言どののきたのかたのたてまつれ給。い  
ともきよげなるつむぎをあを色にそめて。山

ぶきいろのうちぎひとかさね。あをにびのあ  
やのさしぬき。あはせのはかまひとかさねた  
てまつれたまふ。そへられたる歌。

君か爲たちぬひたれは露そそふ都の人の苔のきぬには  
かへし。

そはりける露も絶せぬ苔の衣いとと涙にぬれまざる哉  
重明  
式部卿のきたの方ひとりおはすれば。ことな

ることおはせねど。人のもののたまふに。思  
しりてもあらねど。ふすまたてまつり給。

露のこと宵あか月に置なれは夜の寒さにふすま重ねん  
御かへし。

よるとても打ふすまなき山伏は衣定めす今よりそしく  
かくてこの中宮におはしますをみな人御ぞた  
てまつれ給。かならずわれもたてまつらむと  
のたまひければ。きさいの宮。われとぐしてた  
てまつらむとて。あをにびのうちぎひとかさ  
ね。おなじいろのはかまひとかさねなんたて  
まつれたまひける。



君か影みえもやすると衣河渡たちゐるに袖そぬれぬるかへし。

我爲になみのぬひける衣河きてたになれむ年を渡りてあい宮。われなにわざをせんとて。きぬの御かたびらひとかさね。ぬののけうらなると御ゆとのしるからんにとて。

君か爲なくぬへは世中になみたもかゝる衣たち見御をいてあはれや。これよりこそやますげのやうなりとも。御ぞはたてまつれまほしけれ。ゆかたびらたづのといかにせさせ給へらむと。あはれくとみたまふるに。

袂よりぬれ劔袖もまたひぬにみにもしみぬるから衣哉わがきたの方にはあふことのかたみにとこそみたてまつれとなむきこえたまへりける。いみじうあはれとなん。ことよりもあいみやのたてまつれたまへるをとりわきてなき給ひける。すべて／＼いひつくすべくもなく。いみじう憐になん。

右多武峯少將物語以濱田侯秘本校合

鳴門中將物語一名奈與竹物語

いづれのとしのはるとかや。やよひの花ざかりに。花徳門の御つばにて。二條前關白。大宮<sup>公賴</sup>大納言。刑部卿三位。頭中將などまいり給て御鞠侍しに。見物のひとくく<sup>に</sup>にまじりて女どもあまた侍なかにうちの御心よせに思めすありけり。鞠は御心にも入せ給はで。かの女のかたを頻に御覽すれば。女わづらはしげにおもひて。うちまぎれて左衛門の陣のかたへ出にけり。六位をめして。この女の歸らむ所見をきて申侍れとおほせたびければ。藏人をいつきて見るに。この女心えたりけるにや。いかにも此をとこそすかしやりてにげんと思て。藏人をまねきよせてうちわらひ。くれ竹<sup>なるとけ</sup>のと申させ給へ。あなかしこ御返しをうけたまはらんほどは御門にて待まいらせむといへば。すかすとはゆめ／＼思よらで。たゞすきあひまい

らせんとするぞと心えて。いそぎまいりて此よし奏し申せば。さだめて古歌の句にてぞ侍らむとて御尋ありけるに。その庭にはしりたる人なかりければ。爲家卿のもとへ御たづねありけるに。とりあへず。ふるき歌とて。

大和物語  
高く其何にかはせん吳竹の一よ二よのあたのふしをは

と申されたりければ。いよ／＼心に／＼き事に思食て。御返事なくして。たゞ女のかへらむ所をたしかに見て申せとおほせたびければ立かへり。ありつる門を見るに。かきけつやうにうせぬ。又まいりてしか／＼とそうすれば。

御けしきあしくて。たづねいださずはとがあるべきよしを仰らる。藏人あをざめてまかりいでぬ。此ことによりて。御まりもことさめて入せたまひぬ。その後にか／＼しくまめたゝせ給て。心ぐるしき御ことにぞ侍りけるに。ある時近衛殿。二條殿。花山院大納言。大宮大納

言公相。中納言通成などやうのひと／＼まいり給て御遊侍れども。さき／＼のやうにもわたらせ給はず。物をのみおぼしめすさまにて。御ながめがちなれば。近衛殿御かはらけをすすめ申させ給ついでに。まことにや。ちかごろ行がたしらぬやどのかやり火にこがれさせおはしまし侍るなる。尋行みん。かくれ侍まじものを。もろこしには蓬萊まで尋侍りけるためしも侍を。是は都のうちなれば。やすきはどのことなりとて。御みきまいらせ給に。内もすこしうちわらはせたまへどもそぞろかせ給ていらせ給ひぬ。其後藏人。いたらぬくまもなく。もしやあふと。もとめありきて。神佛に祈申せどもかひなし。おもひ侘て。文平と申陰陽師こそ。當世にはたなごころをさして推察まさしかなれ。此ことうらなはせんと思て。罷向てとひ侍りければ。申けるは。是は内にも

承り及べり。ゆゝしき大事なり。文平うらは是にて心み侍べし。火のゑうをゑたり。かみこ神門イとなり。今日は巳の日なり。巳はくちなは。此ことをすいするに。一旦のかくれ也。つゐにはあはせ給べし。たゞし火のゑうは。夏の氣にいたりて御悦なり。くちなはなれば。もとのあなに入てもとの所に出べし。夏の中五月中にかくれけん所にてかならずあはせ給べしと申せども。これも凡夫なれば。一定たのむべきにはあらぬども。むげにうはの空なりしよりは。このこゑを聞て後は。つねに左衛門の陣のかたにぞたゝすみける。五月十三日。宸勝講の開白の日この女ありしさをあらためて。五人つれてふと行あひぬ。藏人あまりの嬉しさに。夢うつゝとおぼえず。あやしまれじとおもひて。人にまぎれて見侍れば。仁壽殿のしのひさしになみゐて聴聞す。御こうははて

てひしめかん時又うしなひていかゞせんと思て。經俊の殿上ぐちにおはする所にて。此ことしかく奏し給へとかたらへば。只今中宮一所御聴聞のほどなり。こちなしと申ければちから及ばず。一位殿さい相のすけに申しかば。わが御つばねぐちにて女房と物おほせらるゝを見あいまいらせて。畏て申けるは。推參に侍れど天氣にて侍り。しかくのこと急ぎ奏し申給へと申ければ。かねてきこえあることなれば。やがて奏し申させ給に。女ばうして神妙なり。かまへてこのたびは不覺せで。行方をたしかに見せをきて申せと仰らるゝほどに。講はつれば夕暮になりぬ。この女どもひと車にてかへるめり。藏人わが身はまたあやしまれじと思て。さがくしき女をつけて見入さすれば。三條白川になにがしの少將といふ人の家なり。このよしを奏すれば。やがて御文あ

り。

あたにみし夢か現かくれ竹のおき伏わふる戀を苦しき  
〔なよ〕

このくれにかならずとばかりあり。藏人御書を給はりて。かの所にもて行に。おとこある人なれば。わづらはしうてなげくに。御使は心もなく御返しをせむれば。いかにまかくれあらじとおもひて。ありのまゝにかたれば。少將さすがにわづらはしげにおもひて。男の身にて左右なくまいらせんにもはばかりあり。あなかまといさめんもびむなかるべきことなり。人によりてことゝなる世なれば。ひとつは名聞なり。人のそしりさもあらばあれ。とくとくまいり給へとすゝむれば。うちなきて。かなうまじきよし返々なび申せば。少將申けるは。この三とせがほどをろかならず思ひかはしてすぎぬるも世々の契なるべし。今又めされ給もあさからぬ御ちぎりならんかし。や

うやうしゝてまいり給はずは。さだめてあしざまなることにてわが身も置所なきことにも成ぬべし。よもあしくはからひ申さじ。ととくとくまいり給へとかへすゝすゝめければ。女うちなみだぐみて。御ふみひろげて見るに。此くれにかならずとある文字のしたに。をといふもじをたゞひとつすみぐろに書て。もとのやうにして。御使にまいらせけり。御文もとのやうにてたがはぬを御らんじて。むなしく歸たるよとはいなくおぼしめすに。むすびめのしどけなければ。あけて御らんするに。このを文字ありとて。御案あれども御心もめぐらせ給はず。さるべき女房たちを少々めして。このをもじを御尋ありければ。承明門院に小宰相の局とて家隆卿のむすめのさぶらひけるが申けるは。むかし大二條殿のりみち。小式部のりの内侍のもとへ。月といふもじをかきてつか



はしたりければ。さるすきもの泉式部がむすめ也ければ。母にや申あはせたりけん。やすくこゝろえて。月のしたにをといふ文字ばかりを書てまいらせたりける。其心なるべし。月といふ文字は。よさりに侍侍るべし。いで給へと心えけり。又人のめし侍る御いらへに。男はよと申。女はをと申なり。されば小式部内侍も上東門院にさぶらひけるが。まかりいでてまいたりければ。いよ／＼心まさりしてめで思食ける。これも一定まいり侍りなんと申ければ。御心地よげにおぼしめして。したまたせ給けり。夜もやう／＼ふけぬれど。よるのおとどへもいらせ給はず。とのゐ申のきこゆるはうしになりぬるにやと御心をたましむるほどに。藏人忍びやかに。此女まいり侍るよし奏し申ければ。嬉しうおぼしめされて。やがてめされにけり。漢武の李夫人にあひ。玄宗の

楊貴妃をえたるためしもこれにはまさりはべらじと御心のうちもかたじけなく。さま／＼かたらひ給ほどに。あけやすきみじか夜なれば。曉ちかく成ゆくに。此女身のありさまをかきくどき。こまかにはあらねど。心にまかせぬことのさまを奏し申ければ。まづかへしつかはされにけり。御心ざしあさからず。やがて三千の列にもめしをかれて。九重のうちのすみかをも御はからひあるべきにて侍りけるを。まめやかになげき申て。さやうならば。中御なさけにても侍らじ。ふちせをのがれぬ身のたぐひにもなりぬべし。たゞこのまゝにて。人のいたくしらぬ程ならばたえずめしにもしたがふべきよしを申ければ。つゐにもとのすみかへかへされて時々忍びてめされけり。彼少將は隠者なりけるを。あらぬかたにつけてめしいだされてよろづに御なさけをかけ

られて。近習の人数にくはへられなどして。程なく中將になされにけり。つゝむとすれどおのづからもれきこえて。人のくちのさがなさは。そのころのもてあつかひにて。なるとの中將と申ける。なるとのわかめとて。よきめののぼる所なれば。かゝる異名をつけたりけるとかや。凡君と臣とは水と魚とのごとし。上としてもをごりにくまず。下としてもそねみみだるべからず。もろこしにも楚の莊王と申きみは。てうあひの後の衣をひくものをゆるしてなさをかけ。唐の太宗と申かしこき御門は。すぐれておぼしめしける后をも。臣下のやくそくありとてくだしつかはされけり。我朝にもかゝるふるきためしもあまたきこえ侍にやあらむ。いまの後さがの御門の御心もちゐの御かたじけなさ。中將のゆるし申けるなさけの色。いづれもまことに優にも。ありがたき

ためしにも申つたふべき物をや。きみとし臣としては。なにごとにもへだつる心なくて。たがひになさけふかきをもととすべきにこそとむかしより申つたへたるもことはりにおぼえ侍けり。

右奈與竹物語以一本及古今著聞集校合

# 群書類從卷第四百八十三

## 雜部三十八

### 時秋物語

甲斐守義光左兵衛尉に侍しとき。このかみ陸奥守義家朝臣。武衛家衛等をせめけるを京に候てつたへきけり。御いとまを申てくだらんとしけるを御ゆるしなれば。兵衛尉を辭し申て。陣に絃袈をかけて馳りくだりける。あふみのくにかぐみのむまやのこなたにて。はなだのひとへかりぎぬ。青色の袴きて。ひきいれ烏帽子したる男。をくれじと駒にむちうて來るあり。あやしうおもひて見れば。豊原時秋なり。あれはいかに。なにしにきたりたるぞととひければ。とかくの事はいほで。たゞとも

つかうまつるべしとばかりぞいひける。このたびの下向ものさはがしき事侍てなれば。ともなひたまはん事。尤ほいなれども。やくなしと頻にとどむるをきかず。しみてしたひきにけり。ちからをよばで諸共にゆく／＼相摸のくに足柄山にきにけり。こゝにてよしみつ馬をひかへていはく。とどめ申せどももちひたまはでこれまでもなひたまへる事。そのころろざしふかし。さりながらこのやまのせき。たやすくとをす事もあらじ。よしみつは所職を三拜申てみやこをいでしより。命をなきものになしてまかりむかへばいかなるせきにてもはどかるまじ。かけやぶりととをるべし。

それにはそのやうなし。是よりかへりたまへといふを時秋なをうけひかず。またいふ事もなし。そのとき義光ときあきがおもふところをくむで。みちよりすこしいりて。木蔭にうちより。しばきりはらはせ。馬よりおり。楯二枚をしきて。一まひには我身座し。一枚には時秋をすへけり。人をとをくのけてうつをより文書をとりにて時秋に見せけり。父時元みづからかきたる大食調入調曲譜なり。よしみつはときもとが弟子にて管絃のおうぎをきはめたるものなり。ときあきいまだ十歳にもたらぬほどに時元はうせにければ。ときあきにはさづけざりけり。さて笙はありやとひければ。候とて。ふところよりとりいだしたりける。やういのほどまづいみじうぞ侍ける。かくしたひきたまふはさだめて此れうにてもや侍らんとて。ふたつの曲をさづく。義光は

かゝる大事によりてまかれば。みの安否しりがたし。もゝにひとつも安穩ならば。都の見參を期すべし。そこには豊原數代之樂工。朝家要須之仁也。我真志あらば。すみやかにきらくして。みちをまたうせらるべしといひければ。理にまけてのぼりにけり。

右時秋物語以森敬典所藏爲家卿眞跡書寫校合了



# 今物語

前右京權大夫信實朝臣

大納言なりける人内へまいりて女房あまたものがたりしける所にやすらひければ。此人のあふぎを手ごとにとりてみけるに。弁のすがたしたりける人をかきたりけるを見て。此女房ども。なくねなそへそのべの松むしとくちぐちにひとりごちあへるを此人聞ておかしとおもひたるに。奥のかたよりたゞ今人の來たるなめりとおぼゆるに。是はいかに。なくねなそへそとおぼゆるはとしたりがほにいふをとのするを。この今きたる人。しばしためらひて。いと人にくゝいふなるけしきにて。源氏のしたがさねのしりはみじかゝるへきかはとばかりしのびやかにこたふるを。このおとこあはれにこゝろにくゝおぼえて。ぬしゆかしきものかな。誰ならんとうちつけにうきたちけり。とふべくもおぼえざりければ。後にえさ

らぬ人に尋ねければ。近衛院の御母。ひが事かうのとのの御つばねとさゝやきければ。いでやことはりなるべし。そののちはたぐひなきものおもひになりにけり。

語

大方の秋の別もかなしきになくねなそへそのへの松虫

薩摩守忠度といふ人ありき。ある宮ばらの女房に物申さんとて。つばねのうへぎまにてためらひけるが。ことのほかに夜ふけにければ。扇をはら／＼とつかひならしてきゝしらせければ。此局の心しりの女房。野もせにすだくむしのねやとながめけるをきゝて。あふぎをつかひやみにけり。人しづまりて出あひたりけるに。この女房。あふぎをばなどやつかひ給はざりつるぞといひければ。いさかしがましとかやきこえつればといひたりける。やさしかりけり。

かしかまし野もせにすたぐ虫のねよ我たに物はいはて社恩

或殿上人さるべき所へ参りたりけるに。おりしも雪降て月おぼろなりけるに。中門のいたにさぶらひて。寢殿なる女房にあひしらひけるが。此おぼろ月はいかゞし候べきといひたりければ。女房。返事はなくて。とりあへず。うちよりたゞみををしいだしたりける心ばやさ。いみじかりけり。

新古今  
照もせず曇もはてぬ春のよの臘月夜にしくものそなき

ある殿上人ふるき宮ばらへ夜ふくる程に参りて。北のたいのめむ馬道だうにたゞすみけるに。

局におるゝ人の氣色あまたしければ。ひきかくれてのぞきけるに。御局のやり水に螢のおほくすだきけるを見て。さきにたちたる女房の。螢火みだれとびてとうちながめたるに。つぎなる人。夕殿に螢とんでとくちすさむ。しりにたちたる人。かくれぬものは夏むしのはなやかにひとりごちたり。とりゝゝにやさ

しくもおもしろくて。此男何となくふしなからんもほいなくて。ねすなきをしいでたりける。さきなる女房。ものおそろしや。螢にも聲のありけるよとて。つやゝさはぎたるけしきなく。うちしづまりたりける。あまりに色ふかくかなしくおぼえけるに。今ひとり。なく虫よりもそこそとりなしたりけり。是もおもひ入たるほどおくゆかしくて。すべてとりどりにやさしかりける。

後拾おもひにもゆるる昔巻  
昔もせてみさほにもゆる螢こそ鳴虫よりも哀なりけれ  
螢火亂飛秋已近。辰星早没夜初長。

後撰  
夕殿螢飛思悄然。

つきめとも隠れぬ物は夏虫の身より餘れる思ひ成けり  
近き御代に五節の比。ゆかりにふれてたれとかやの御局へ或女のやんごとなき忍びて参りたりける事ありけるをちときこしめして。いかで御覽せんと思しけるまゝに。俄にをしいらせ玉ひけり。とりあへずともし火を人のけ

ちたりければ。御ふところよりくしをいくらも取いでて火びつの火にうちいれ給ひたりければ。おくまで見えてよく／＼御らんじけり。御心のふせい興ありて。いとやさしかりけり。此比のこととかや。ある田舎人いうなる女をかたらひて都に住わたりけるが。とみの事有て田舎へくだりなんとしける。その夜となりて此女れいならずうちしめりてうしろむきてねたりけるを男いたう恨てけり。いつまでかくもいとはれまいらせむ。たゞ今ばかりむき給ひてあれかしといひけるに。この女。

今更に背くにはあらず君無て有ぬへきかと習ふ計りそといひたりければ。男めでまどひて。田舎くだりともりにけるとかや。いとやさしくこそ。

大納言なりける人日比心をつくされける女房のもとにおはして物語などせられけるが。世に思ふやうならであけゆく空も猶心もとなか

りければ。あからさまのやうにて立出て隨身に心を合せて。今しばしありて。まことや今宵は内裏の番にて候ものをもしおぼしめしわすれてやとをとなへと教てうちへ入ぬ。その儘にしばしありて。こちなげに隨身いさめ申ければ。さることあり。今夜はげに心をくれしにけりとて。とりあへずいそぎ出んとせられけるけしきを見て。この女房心得て。やがていとうらめしげなるに。おりふし雨のはらはらとふりたりければ。

ふれや雨雲の通ひちみえぬまで心空なる人やとまるといふなるけしきにでわざとならずうちいでたりけるに。此大納言なにかのことはなくて其夜ともりにけり。後までもたえずをとづれられけるはいとやさしくこそ。かく中は後徳大寺實是右大臣ときこえし人の事とかや。粟田口の別當入道といひける人わかくて人を

おもひけるに。やう／＼かれ／＼になりて。後におもひ出て。いとの有けるをやりたりければ。いとをば返して。歌をなんよみたりける。

忘られて思ふ許りのあらは社かけてもしらめ夏引の糸

或藏人の五位の月くまなかりける夜草堂へ参りけるに。いとうつくしげなる女房のひとり参りあひたりける。見すてがたくおぼえけるまゝにいひよりてかたらひければ。おほかたさやうのみちにはかなひがたき身にてなんどやう／＼にいひしろひけるを猶たへがたくおぼえて歸りけるに。つきて行ければ。一條河原になりにつけり。女房見かへりて。

玉みくりうきにしもなとねをとめてひきあけ所なき身成らん

とひとりごちて。きよめが家の有けるに入にけり。男うれしもうとあはれにふしぎとおぼえけり。

大納言なりける人小侍従と聞えし歌よみにか

よはれけり。ある夜物いひて曉かへられけるに。女の家の門をやりいだされけるが。きと見かへりたりければ。此女名残を思ふかとおぼしくて。車よせのすだれにすきて。ひとり残たりけるが。心にかゝりおぼえてければ。供なりける藏人<sup>蔵人</sup>にいまだ入やらで見をくりたるが。ふりすてがたきに。なにとまれ。いひてこの給ひければ。ゆゝしき大事かなとおもへども。ほどふべき事ならねば。やがてはしり入ぬ。車よせのえんのきはにかしこまりて。申せと候とは。さうなくいひ出たれど。何といふべきことの葉もおぼえぬに。折しもゆふつげ鳥聲々になき出たりけるに。あかぬわかれのといひける事のきとおもひいでられければ。

新拾 物かはと君か云けん鳥のねのけさしもなとか悲かる覽

と計いひかけて。やがてはしりつきて。車のしりにのりぬ。家に歸りて中門におりて後。さ

新古戀三  
小侍従。  
待よひに  
更行かね  
の聲きけ  
はあかぬ  
別れの鳥  
はものか



ても何とかいひたりつると問玉ひければ。かくこそと申ければ。いみじくめでたがられけり。さればこそ。つかひにははからひつれとて。感のあまりに。しる所などたひたりけるとなん。此藏人は内裏の六位などへて。やさし藏人といはれけるもの也けり。この大納言も後徳大寺左大臣の御事なり。

能登前司橋長政といひしは今は世をそむきて法名寂縁とかや申なんめり。和歌の道をたしなみて其名きこゆる人也。新勅撰えらばれし時。三首とかや入たりけるをすくなしとてきりて出たりける。すこしはげしきには似たれども。みちを立たる程はいとやさしくこそ。其人此比あるやんごとなき大臣家に和歌の會せられけるに。述懷の歌をよみたりける。

仰けとも我身助くる神な月さてやはつかの空を詠めむ  
とよみたりければ。満座感歎して。此歌よみた

めて。主も稱美のあまりに。國の所ひとつやがてたまはせたりけり。道の面目。世の繁昌。ふしぎの事也。末代にもさすがかゝるやさしきことの残りたるにこそ。此事を聞て隆祐侍從室禰男いひやりける歌。

磨磨きける君に逢てそ和歌の浦の玉も光をいとふ覽

吉水前大僧正と聞えしは今は慈鎮和尚と申にや。天王寺の別當に成て拜堂有けるに。上童おほく具せられたりける中に。たれがしとかやいひける兒を天王寺に有ける女たへがたう思ひかけて。紅梅の檀紙に心も及ばすあしでをかきて此ちごのもとへをこせたりける。ぬしもよそながらもつや／＼見しりたる人もなくてむげにはちがましくありぬべかりけるに。此ちごうちあんするけしきなりければ。何とすべきにかと人々まばゆく思ひたりけるに。やがてそのあしでのうへに。

覺束ななにはにかけける言葉そ都にすめはしらぬ蘆手を  
と書てやりたりける。取あへず。いとあしから  
すや。

宇治のひだりのおとゞの御前に銀をきり火桶  
につませられて。頼政卿のいまだ若かりける  
時。召ありて。きり火をけとわが名をかくし題  
にて。歌つかふまつりて。是をたまはれと仰  
事有ければ。とりもあへず。（首巻一）

宇治川の瀬々の白浪落たきりひをけさいかにより勝る覽

とよみたりけり。めでさせたまひけるとなん。  
秦公春といひける隨身宇治の左大臣殿につか  
ふまつりけるが。御くつをまいらせけるが。  
御沓のしきに千鳥をかゝれたりけるを見て。

（次致説）  
沓のうちにもとふちとりかな

といひでたりけるを。とりつぐ殿上人ももの  
もいはざりけるに。おほい殿。しばし御くつを  
はき玉はで。

（同）  
難波なるあしの入江をおもひ出て

と仰られたりける。いとやさしかりけり。

待賢門院の堀川。上西門院の兵衛。をとゞいな

りけり。夜ぶかくなるまでさうしをみけるに。

ともし火のつきたりけるにあぶらわたをさし

たりければ。よにかうばしくにはひけるを。

堀川。（首巻二）

（同）  
ともし火はたきものにこそ似たりけれ

といひたりければ。兵衛とりもあへず。

（同）  
ちやうしかしらの香やにほふらん

とつけたりける。いとおもしろかりけり。

或者所の前を春の頃修行者のふしぎなるがと

をりけるが。ひがさに梅のはなを一枝さした

りけるを。兒ども法師などあまた有けるが。

世におかしげにおもひて。あるちごの梅の花

笠きたる御房よといひて笑ひたりければ。此

修行者立かへりて。袖をかきあはせてゑみゑ  
みとわらひて。

新拾。二  
條院御時  
ひだりま  
きのふち  
ふちきり  
火をけを  
こめて河  
によせて  
歌奉るべ  
きよし仰  
ありけれ  
ばみづか  
らの名を  
そへてよ  
み待ける  
る。從三  
位頼政。  
水ひたり  
まきのふ  
ち。下  
同。  
和名鈔容  
飾具云。  
澤。釋名  
云。人髮  
恒枯悴。  
以レ此令ニ  
澤也。  
俗用ニ脂

身のうさの隠れさりける物故に梅の花笠きたる御房よ

と仰られ候やらんといひたりければ。この者どもこはいかにとおもはずに思ひて。いひやりたるかたもなくぞ有ける。さうなく人を笑ふ事あるべくもなきことにや。

或所にて此世の連歌の上手と聞ゆる人々より合て連歌しけるに。其門のしたに法師のまことにあやしげなるが。かしらはをつかみにおひて。かみぎぬのほろ／＼とあるうちきたるが。つく／＼と此れん歌を聞て有ければ。なにほどの事をさくらんとおかしと思ひて侍るに。此法師やゝ久しく有て。うちへ入て縁のきはにゐたり。人々おかしと思ひてあるに。はるかにありてふし物は何にてやらんと問ければ。其中にちとくわうりやうなる者にて有けるやらん。あまりにおかしくあなづらはしきまゝに。何となく。

寛  
くゝりもとかす足もぬらさず

といふぞといひたりければ。此法師打聞て。二三返計詠じて。面白く候ものかなといひければ。いとゞおかしとおもふに。さらば恐れながら付候はんとて。

名にしおふ花のしら河わたるには

といひたりければ。いひ出したりける人をはじめて。手をうちてあざみけり。さて此僧はいとま申てとてぞ走出ける。後に此事京極中納言きゝ給ひて。いかなるものにかと返す返すゆかしくこそ。いかさまにてもたゞものにてはよもあらじ。當世は是ほどの句などつくる人は有がたし。あはれ歌よみの名人たちはたゝかうかきたりけるものかな。世中のやうにおそろしきものあらじ。よきもあしきも人をあなどる事あるまじき事とぞいはれける。伏見中納言といひける人のもとへ西行法師行

て尋けるに。あるじはありきたがひたる程に。さぶらひの出で。なにごとといふ法師ぞといふに。えんにしりかけて居たるを。けしかるほうしのかくしれがましきぞと思ひたるけしきにて。侍共ならみをこせたるに。みすのうち箏の琴にて秋風樂をひきすましたるを聞て。西行此侍にももの申さむといひければ。にくしとは思ひながら立寄て何事ぞといふに。みすのうちへ申させ給へとて。

ことに身にしむ秋の風かな

といひでたりければ。にくきほうしのいひごとかなとて。かま<sup>額骨</sup>ちをはりてけり。西行はふはふ歸りてけり。後に中納言のかへりたるに。かゝるしれ物こそ候つれ。はりふせ候ぬとかしこがほにかたりければ。西行にこそありつらめ。ふしぎの事也とて。心うがられけり。此侍をばやがておひ出してけり。

七十七  
後白川院の御時日吉社に御幸有て一夜御泊り有て次の日御下向有けるに雨の降ければ。御車近うつかうまつりけるかんだちめの中に。

きのふ日よしとおもひしものを

といふ連歌の出来たりけるを。おほかたつくる人なくて程へければ。左馬權頭なりける人のはるかにさきなりけるを召かへして。是付よと仰ごと有ければ。ほどなく。

同  
今日はみな雨ふるさとへかへるかな

と付たりければ。安かりけることを口おしくもおもひよらざりけると人々いひあへりける。此左馬權頭加茂の臨時祭の舞人なりけるに。曉つかひ也ける人をうちぐしてかへり。たち<sup>た</sup>にまいりけるが。雪いたくふりて。袖にたまりたりけるをみて。

同  
おをすりの竹にも雪はつもりけり

といひたりけるに。つかひなりける人はつけ



ざりければ。秦兼任人長にてうちぐしてけるが。馬を打よせくけしきばみければ。兼任がつけたるとおぼゆるぞといはれて。下臈はいかでかとはしくいひけるをなをせめとはれて。

同色はかさしの花にまかひて

と付たりける。まことに兼久兼方などが子孫とおぼえて。いとやさしかりけり。

やむことなき人のもとに今參の侍出來にけり。やき繪をめでたくするよし聞えければ。前によびて。檀紙にやきゑをさせけるに。何をかやき侍べきといひければ。水に鴛をやけといばれてけるに。打うなづきて。

水師水にはをしをいかやくへき

と口ずさみけるをあるじ聞とがめて。同じくは一首になせといはれければ。かいかしこまうて。

同波の打岩より火をは出すとも

といへりければ。人々みなほめにけり。

京極太政大臣宗範と聞えける人いまだ位あさかりけるほどに雲居寺の程を通られけるに。膽西上人の家をふきけるをみて。雜色をつかひにて。

亮ひしりのやをはめかくしにふけ

といはせて車をはやくやらせけるに。雜色のはしりかへるうしろに。小法師をはしらせて。

同あめの下にもりてきこゆることもあり

といはせたりける。その程のはやさ。けしからざりけり。

待賢門院の女房加賀といふ歌よみあり。

兼てより思しことそふし柴のこる計りなる歎せんとは

といふ歌を年比よみてもちたりけるを。おなじくはさりぬべき人にいひむつびて。忘られたらんに。讀たらば集などに入たらんも。いうなるべしと思ひて。いかゞありけん。花園有七の左のおとどに申そめてけり。其後おもひのご

とくやありけむ。此うたをまいらせたりければ。大臣殿もいみじくあはれにおぼしけり。かひがひしく千載集巻三に入にけり。世の人ふし柴の加賀とぞいひける。

松殿左所の思はせ玉ひける女房かれ／＼になり給

て後はかなき御なさけだにもまれなりければ。我ながらあらぬかとのみたどりわび。人の心の花にまかせて。月日をむなしくうつり行に。宮の鶯白さえづりすれども。おもひあればきくことをやめつ。うつばりのつばくらめ。ならびすめども。身老ればねたます。ちゝたる春の日もひとりすめばいとゞくれやらず。せうせうたる秋の夜は。むなしき床にあかしがたくてすぐしけるに。事のよすがや有けん。むかへに御車をつかはされたりける。夢現ともわきかねつらん。嬉しともおもひさためず。さればとて今更待よろこびがほならんもいた

うつれなく。身ながらも中々うとましかりぬべければ。是にこそ日頃のつきせぬなげきもあらはさめと思ひつ。よりてたけにあまりたりける髪を押切て。白きうすやうにつゝみて。

今更にふたゝひ物を思へとやいつも變らぬ同じ憂身にと書付て。御車●にいられてまいらせたりける。此人は後にはみそののあまとて。近くまでもきこえしとかや。

東山のかたすみにあはれに人もかげみぬあばらやに。いとやさしくいまだ人なれぬ女ありけり。庭の萩原まねけども。風より外はどふ人もなく。のきばのよもぎしげれども。杉村ならねばかひなくて。月にながめ嵐にかこちても。心をいたましむるたよりはおほく。花を見郭公をきゝても。なぐさむべきかたはまれなることにて明し暮すに。清水詣のついでに思はぬ外のさかしら出來て。いたらぬくまなか

りし御心にたゞ一夜の夢の契をむすびまいらせてける。是も前世をおもへばかたじけなかりけれども。さしあたりてなげきに恨をそへて心のうちはるゝまもなし。かひなくありふれど。今一度のことはばかりの御なさけに待かねて。よし是ゆへそむくべき憂世なりけりとおもひ立て。ありし御心しりのもとへつかはしける。

中々にとはぬも人の嬉しきは憂世を厭ふたより也けり

とばかり心にくゝおさなびれたる手にてはなだのうすやうに書たるを折をうかゞひて奏しければ。まことにさる事あり。尋ざりけるこゝろをくれこそと御氣色有ければ。頓て走向ひて尋るに。さらぬだに荒たる宿の人すむけしきもなきをやゝ久しくやすらひて。老たる女ひとり尋えて。ことのやうをくはしく問ければ。何といふことはしり侍らず。あるじは

天王寺へ参り給ひぬといへば。やがて夫より天王寺へまいり寺々をたづぬるに。龜井のあたりにおとなしき尼ひとり女房二三人ある中に。いと若き尼のことにたどゞしげなるが有。此心しりを見付て。淺ましと思ひげにて。たゞやがてうつぶしてなくより外の事なし。かたへの者ども聲をたてぬばかりにて。をとる袖なくしぼりければ。御使も見捨て歸るべき心地もせず。おとなしき尼は此人の母也ければ。事のやうこまかに尋けれども。もとより是は思ひつる事也。何しにかは君の御ゆへにてさぶらふべき。かしこくといひもあへずなきで其後はこたへざりければ。よしなき御使をしてかはゆきことを見つるよと悲しくて。さりとて爰にて世をつくすべきならねば立かへりぬ。此よしを奏するに。はしたなの心のたてざまや。心をくれがとがに成つる

よとて。かひなかりけり。あはれにもやさしくもなげき世の物がたりにぞなりぬる。みそ野のあまのこゝろとはいづれかふかゝらん。

或人こと有て遠き國へ流されけるに。年頃心ざしふかかりける女のはらみたるを見捨てゆきければ。いか計の別にか有けん。其後此女尋ゆかんとしけれども。父母有ける故にてゆるさざりければ。たゞ一人出て行けるに。漸其國までかゝぐりつきにけり。腹なる子のむまれんとしければ。かた山にうみおとしてきたりける物にひきつゝみて捨て置て。血つきたる物などあらはむとて。人の家の有けるかたへ漸よろほひ行けるに。此家にはしをあつむるをとして。流され人の死たるを葬らんする杯いふ。殊にあやしくむねつぶれてくはしくたづねければ。京なる人を戀悲しみてけさうせ給ひたるなどいふに。たゞ此人なりけり。

こと葉もたゝず。わななゝかれけれど。からくして。此死人のもとに行て見れば。我男也けり。かなしきことかぎりなくて。枕がみにゐて。かく参りたるなり。今一度めみあはせたまへとなきもまれて。此男いき出て目を見合せて。此世にては今はいかにもかなふまじきぞと計いひて頓て又死にけり。さてのみあるべきならねば。はふりけるに。その火に此女飛入てやけしににけり。腹の中の子をうみおとしけるは罪のあさかりけるにやとぞいひあへりける。一人ぐしたりけるめのわらはもともに火に入んとしけれども。取とめて此人の有様をくはしくたづね。うみおとしつる子などをも取て。村の者のやしなひけるとぞ。此事はちかきほどのことなり。

小式部内侍大二條殿教通におぼしめされける比。久しく仰ごとなかりける夕ぐれに。あながち



に戀奉りてはしちかくながめ居たるに。御車の音などもなくてふと入せ給ひたりければ。

待えて夜もすがらかたらひ申ける。曉がたに

いさゝかまどろみたる夢に。糸の付たる針を

御直衣の袖にさすと見て夢さめぬ。さて歸ら

せ給ひにけるあしたに。御名残を思ひ出て例

のはしちかくながめ居たるに。まへなる櫻の

木に糸のさがりたるをあやしとおもひて見け

れば。夢に御なをしの袖にさしつる針なりけ

り。いとふしぎ也。あながちに物をおもふ折に

は。本草なれどもかやうなることの侍るにや。

其夜御渡あることまことにはなかりけり。

小大進と聞えし歌よみいとまづしくて。うづ

まさへ参りて御前の柱に書付ける歌、

なまやくし憐み給へ世中にありわつらふもおなし病を

とよみたりければ。ほどなく八幡の別當光清

に相ぐしてたのしく成にけり。子などいでき

て。後もろともに居たりける所。近き所にいものつるのはひかゝりてぬかごなどのなりたりけるを見て。光清。

寄許はふほとにいかぬかこはなりにけり

といひたりければ。ほどなく小大進。

同今はもりもやとるへかるらん

とつけたりける。おもしろかりけり。

ある女房の加茂のたぐすに七日こもりてまかりいづるとて。物にかきつけける。

鳥のこのたゝすの中に籠めて歸らん時は問さらめやは

とよめりければ。あはれとやおぼしめしけん。

やがてめでたき人におもはれて。さいはい人

といはれけり。

加茂につねにつかうまつりける女房の久敷ま

いらざりける夢に。ゆふしでのきれに書たり

けるものを直衣きたりける人のたまはせける

を見れば。

思ひいつや思ひそいつる春雨に涙とりそへぬれし姿を  
とありけるをみて夢さめにけり。あはれとお  
もふ程に。手に物のにぎられたりけるをみけ  
れば。ゆふしでのきれに墨三十一付たるにて  
有。ことにあはれにめでたく涙もとどまらず  
ぞありける。

嘉祥寺僧都海惠といひける人のいまだ若く  
て。病大事にてかぎりなりける比。ねいりた  
る人俄におきて。そなるふみなど取入ぬぞ  
ときびしくいはれけれども。さる文なかりけ  
れば。うつゝならずおぼえて。前なる者ども  
あきれあやしみけるに。みづから立走て。あ  
かりしやうじをあけて。たてぶみをとりにて見  
ければ。ものども誠にふしぎにおぼえてみる  
程に。是をひろげて見て。しばし打あんじて。  
返事書てさし置て。又頓てねいりにけり。起臥  
もたやすからずなりたる人のいかなりけるこ

とにかとあやしみける程に。しばしねいりて。  
汗おびたゞしく流れて起上りて。ふしぎの夢  
を見たりつるとて語られける。おほきなるさ  
るのあゐずりの水干きたるが。たてぶみたる  
文を持て來つるを人の遅く取入つるに。自ら  
是を取て見つれば歌一首あり。

とありつれば。御返事には。  
新拾頼めつゝこぬ年月を重ねれはくちせぬ契いかゝ結はん

心をはかけてそ頼むゆふたすき七の社の玉のいかきに  
とかきて參らせつる也。是は山王よりの御う  
たを給りて侍る也と語られければ。まへなる  
人あさましくふしぎにおぼえて。是は只今う  
つゝに侍ること也。是こそ御ふみよ。又かゝせ  
給へる御返事よといひければ。正念に住して。  
前なる文どもをひろげて見けるに。露たがふ  
ことなし。其後やまひをこたりにけり。いと  
ふしぎなり。

延應元年正月十九日の曉或人の夢に清水の地主よりとて御文ありけるを見ければ。

月日のみ杉の板戸のあけくねをすきにし方は夢か現かと有けり。いとあはれにめでたかりけり。

八幡、袈裟御子がさいはいのち打つゞき人に思はれて。大菩薩の御事をしりまいらせざりければ。若宮の御たゝりにて。ひとり持たりけるむすめ。大事にやみて。目のつぶれたりけるをこと祈りをせず。むすめを若宮の御前にぐして参りて。ひぎのうへに横ざまにかきふせて。

奥山にしをるしをりは誰か爲身をかきわけてうめる手の露といふ歌を神歌になく／＼あまたゝびうたひたりければ。頓て御前にてやまひやみ。目もさはさはとあきにけり。

讃岐三位俊盛と聞えし人春日の月まうでをしけるに。さだまりたることにて。夜泊にまいり

て。曉下向しけるに。夜ふかかりけるたび雨降ていと所せかりけるに。後生の事をかくほどに信を致して佛にもつかうまつらば。いか計めでたかりなん。現世の事のみおもひて此宮にのみつかうまつることと思ひて春日山を通りけるに。高き梢より菩提の道も我山の道といふ御聲の聞えけるに。かぎりなく信おこりてたふとくおぼえける。

ひえの山よかはに住ける僧のもとに小法師の有けるが。坊の前に柿の木の有けるを切てたかんとていちのきれをわりたりける中にくろみの有けるが。文字に似たりけるをあやしと思ひて。坊主にみせたりければ。南無阿彌陀佛と云文字にて有ける。ふしぎ杯もいふばかりなくて。横川の長吏こゝに法印といひける人に見せたりければ。上西門院おりふし御社に御こもり有けるに。持て参りて御覽せさせければ。

とらせ玉ひて後白川院にまいらせさせ玉ひて  
けり。蓮花王院の寶藏に納りけるを。我所に  
こそをくべけれとていきどをり申けるとな  
ん。

後龜川  
安貞のころ河内國に百姓有けるが子に蓮花王

といひけるわらはありけり。七なりける年死  
けるが。念佛申て西に向てかたはらなる人に。  
我死たらば七月といはんにあけて見よと云て  
死にけり。其後人の夢に必あけよといふとみ  
て。あけてければ。舍利に成にけり。是を取て  
人におがまさんとて。かりそめにちやうをし  
て入たりけるに。此張をほどなくむしのくひ  
たりけるを見ければ。

歸命蓮花王。

大聖觀自在。

廣度衆生界。

父母善知識。

とくひて。はての文字の所に虫の死てありけ  
る。いとふしぎにめでたき事也。

鎌倉武士入道して高野山イ元の蓮花谷にをこなふ  
有けり。此者がぬる所にて夜な／＼女と物語  
をしける音のしければ。具したりける弟子ど  
も大方心えがたくて。びんぎの有けるに。或  
弟子此入道に尋たりければ。さることあり。吾  
女の鎌倉に有しが。夜な／＼是へ來るなり。そ  
れに何事もいひあはせ。又古里の事の覺束な  
さも語り。世間の事もはからひなどして有也  
といひければ。弟子いふばかりなくふしぎに  
覺えて。ふしぎの餘りに空阿彌陀佛に有のま  
まに申ければ。空阿彌陀佛うち案じて。さる  
こともおほく有。此女のいたく戀しくおもふ  
によりてたましゐなどのかよふにこそ。此定  
ならば臨終の妨にも成なんす。急ぎ祈るべき  
ぞとて祈られけり。或時に念佛にて祈て見む  
とて。蓮花谷のひじり三四十人計めぐりゐて  
此入道を中にすへて念佛をせめふせて申た



るに。入道おなじく申けるが。空阿彌陀佛の秘藏の本尊の帳に入たるがおはしましける。そのかたをつく／＼とまもりて。おそろしげに思ひて。わな／＼とふるひければ。空阿彌陀佛よりてなどおそろしげにはおもひたるぞとへば。其御本尊の御前にかの女房がまうできて。我を世に恨めしげに見て候が。などやらんあまりにおそろしくと申ければ。其時空阿彌陀佛。門々不同八万四。爲滅無明果業因。利劔卽是彌陀號。一聲稱念罪皆除とたかく誦せられたりければ。この女のかほの中より二にわれて。ちるやうに見えてうせにけり。是をば人はみず。たゞ入道ばかり見て。いとゞおそろしくて。つん／＼とかみへおどりたるが。其後はもとの心になりてをこなひけり。念佛のちからのたうとき事。いとゞ人々たふとびあひけり。ほんたいの女はつや／＼さること

なくて。もとのやうに鎌倉に有けりとぞ聞えし。天魔のしわざか又めの戀しとおもひけるがゆへにか。いとふしぎなり。

少輔入道寂遠ときこえしうたよみ。ありまの社にまうでて社の前なるものを見て。

此山のしゝいかめしく見ゆる哉いか成神の廣前そこはとよめりける。いと興有てこそ聞えけれ。びんなきさまにてぞ聞ゆる。すべてかやうの歌。

いみじくよまれけるとかや。寄鳥述懷の歌に。

玉このうちも猶うらやまし山からの身の程隠す夕良の宿

風の氣有て灸治しけるに人のとぶらひて侍りける返事に。

年へたる風の通ひち尋ねすは蓬か關をいかゝすへまし此人うせて後。宇治なる僧の夢にありしよりことの外にぼけたるさまにて。

我身いかにするかの山の現にも夢にも今は問人のなきとながめてける。いとあはれなり。此うたのさま。うつゝに其人の好まれしすがたなるこそ

まことにあはれに侍りけれ。

或人の夢に其正躰もなきものかげのやうなる  
が見えけるをあれは何人ぞとたづねければ。

紫式部也。そらごとをのみおほくしあつめて  
人の心をまどはすゆへに地獄におちて苦をう  
くる事いとたへがたし。源氏のものがたりの  
名をぐして。なもあみだ佛といふ歌を巻毎に  
人々によませて吾くるしみを訪ひ給へといひ  
ければ。いかやうによむべきにかと尋けるに。

桐壺に迷はむ間もはる計なもあみた佛と常にいはなむ  
とぞいひける。

昔の周防内侍が家のあさましながら建久後鳥羽の比  
まで冷泉堀川の西と北とのすみに朽残りて有  
けるを行て見ければ。

我さへ軒のしのふ草

と柱にむかしの手にて書付たりしが有ける。  
いとあはれなりけり。是をみてあるうたよみ  
かきつけける。

是やその昔のあととおもふにも忍ふ哀のたえぬ宿哉

近ごろ和歌の道ことにもてなされしかば。内裏  
仙洞攝政家何れもとりにそをきはめさ  
せ給へり。臣下數多聞えし中に民部卿定家宮  
内卿家隆とて家のかせたゆることなく。其道  
に名を得たりし人々也しかば。此二人にはい  
づれも及ばざりけるに。或時攝政後白河殿宮内卿を  
めして。當時たゞしき歌よみおほく聞ゆる中  
に何れかすぐれ侍る。心におもはんやう有の  
まゝにと御尋有ければ。いづれともわきがた  
く候とばかり申て。思ふやう有げなるをいか  
にいかにとあながちにとはせ給ひければ。ふ  
ところよりたゞう紙をおとしてやがて出にけ  
り。御覽せられければ。

新勅秋上

男は又秋の半も過ぬへしかたふく月のおしきのみかは  
と書たり。此歌は民部卿の歌也。かゝる御尋  
あるべしとはいかでかしるべき。たゞもとよ

金葉雜  
上人はな  
ちてはな  
とて柱に  
かきつけ  
侍りける  
周防内侍  
住わひて  
我さへに  
草しの忍  
かたかた  
しかたか  
かな

四百六十九

いのうしろをまことにゆゝしげにてとをりけるに。つばねのさうじ。あなゆゝし。はとふく秋とこそおもひまいらすれといひたりければ。

ついふされといひてけり。女心うげにてかくれにけり。隨身所にて秦兼弘といふ隨身にあひて。北のたいのめのわらはべに散々にのられたりつると云ければ。いかやうにのられつるぞととはれて。鳩吹秋とこそおもへといふに。兼弘は兼方が孫にて兼久が子なりければ。かやうの事心えたる者にて口惜事のたまひけるかな。府生殿をおもひかけていひけるにこそ。

三山出て鳩ふく秋の夕暮はしはしと人をいはぬ計りそといふ歌の心なるべし。しばしとまり給へといひけるにこそ。無下に色なくいかにのり玉ひけるぞといひければ。いで／＼さては色直して参らんとてありつる局のしも口に行て。物承らん。たけまさ。はとふく秋ぞよう／＼と

いひたてりける。いとおかしかりけり。

鳥羽院主四の御時花の盛に法勝寺へ御幸ならんとしけるに。執行なりける人見てとて参りけるに。庭のうへに所もなく花散しきたりけるを。浅ましき事なり只今御幸のならんするに今迄庭をはかせざりけるとしかり腹立て。公文の從儀師をめして。今迄いかにさうちをばせざりけるぞふしぎ也といひければ。ついひざまづきて。

ちるもうし散しく庭もはかまうし花に物思ふ春の殿守と申て。こや御房がはき侍らぬになどいひければ。はゝかつひといいひて猶しかりけり。

兼久原の頃住吉へ然るべき人の参らせ玉ひけるに。折ふし神主經國京へ出たりけるが。人をはしらせて住の江殿など掃除せさせよといひやりたりけるに。あまりのきらめきに。年比しかるべき人々の書をかれたるうたども柱な



げし妻戸にありけるを皆けづり捨てけり。神主くだりて是を見て。こはいかにせんと足すりをして悲しめどもかひなかりけり。是をみて。ふるき尼の書付ける。

世中のうつりにければ住吉の昔の跡もとまらさりけり

是は承久の亂ののち世中あらたまりける時のこと也。

松嶋の上人といふ人有けり。修行者のあはむとてゆきたりけるに。幽玄なる僧の出あひたりければ。いと思はずに覺えて。かへりいたりける跡に。又ありける僧に。あれは誰にておはしますにかと尋ければ。あれこそひじりの御房よといひけるに。たふとげになんとやおはしますらんとこそおもひつれといふをひじり物ごしにきゝて。よめるうた。

紫の雲まつ嶋にすめはこそ空ひしりとも人のいふらめ

とよめりけり。此ひじりのもとへ肥後の右衛

門入道といひけるもの行て。かくておはします程何事か候と尋ければ。させる事も侍らす。法花經などおぼえ奉りて。ねたるおりく。此嶋の松の葉毎に金色の光の見えてかゞやく事などぞ侍るといはれける。いとめでたかりけり。

文學上人。佐渡國に流されたりけるが。召歸されたりけるに。あるやんごとなき歌よみのもとより。

別れしを悲しと聞し老の身の今迄有し嬉しきはいかにと有ければ。かへし。

嬉しきも都に出しそはいかに今は返りて語るおひせを

此上人のうたに。

世中に地頭ぬす人なかりせは人の心はのとけからましとよみて。我身は業平にはまさりたり。春の心はのどけからましといへる。何條春にこゝろのあるべきぞといひけり。

小侍従が子に法橋實賢と云もの有けり。いか

なりける事にか。世の人は是をひきがへるといふ名をつけたりける。法眼をのぞみ申て。

法の橋の下に年ふるひきかへる今ひと上り飛上らはやと申たりければ。やがてなされにけり。

弘誓房といふ説經師人の物をかりておほく成てのち。かへしやるとて。其文のうちに書付け

る。  
夜や寒き衣や薄きかる錢の口比をへてはあと遣ひつゝ

然るべき所に佛供養しけるに。堂のかざりよりはじめてえもいはぬ聽聞の局のきちやうの中にそらだきの香みちていみじかりけるに。聽聞の人のおほくあつまりて耳をすましたるに。うちよりおびたゞしくおほきなるへの音出きにけり。皆人興ざめて侍に。導師とりもあへず。放逸邪見の里にはついくわをもおしむ。聽聞隨喜の局よりおほへをこそうち出されたれといひたりける。あさましくもおか

しくも有けり。

或説經師の請用して殊にめでたくたふとく説法せんとしけるに。はこのしたかりければ。こといそがしくなりてよろづいそぎて布施もとらずかへりて物ぬぎちらして急ぎひとのへ行たりけるに。へばかりひりて又ものもなかりけり。かゝるべしと知たらば。高座の上にてもしばしこらへて説經をもすべかりけるものをと悔しく思ひてける程に。其次の日又人に呼れて説經しける程に。又はこのしたかりけるをすかしてんとおもひて少し居なをるやうにしければ。まことの物おほく出にけり。此僧すべきかたなくて。きのふははこにすかされてへをつかまつる。けふはへにすかされてはこをつかまるといひて走りおりてにげ出にければ。うへのはかまよりたりおちて。堂の中きたなく成にけり。聽聞の人はなををさへ

さめてけり。いとおかしかりけり。

念佛者の中につちゆいふふイけつと云僧有けり。

或所にいたぶろと云物をして人々入けるに。

此僧目をやむよいひければ。目をひさぎて

いるはくるしかるまじきよしを人々いひけれ

ば。さらばとて。目をゆひて板ぶろのありさま

もしらぬものの。目は見えざりければ。風呂

の前にわき戸のうちのありけるに。ふろと心

えて。はだかにてかゝへたる所もうちとけて

ゐにけり。人々女房など見をこせたるにはだ

かなる法師のかくし所も打出して。あなぬる

のふろや。たけくといひてゐたりける。いと

おかしかりけり。人々笑ける聲を聞て。あやし

くおもひて。目をあけて見れば。風呂にてもな

き所にゐて。人々笑ひける時に。あさましくお

ぼえてはしりにげにけり。人々おかしくおも

ひあへりけり。

了  
右今物語以村井敬義本書寫以屋代弘賢楠田茂語本授合

## 群書類從卷第四百八十四

## 雜部三十九

## 野守鏡上

すぎにし比。播磨の書寫にまうでて侍し折しも。人おほくまいりあつまりて。寶藏の戸ぼそをひらきつゝ。性空上人のふるき調度どもとり出て。拜見侍りしかば。つゝでもいとうれしくて。いそぎ傍にたちよりて見侍しに。ゐ中びたる聲のひがくしきけはひどもして。あれよこれよとさはぐに。なにのあやめもわきがたかりしを。いそぢあまりばかりなる僧のなまめきたりし。寶藏の中へ分入つゝ彼聖人の御足駄をとり出て。かれ見たまへ。これこそまさしく佛の道に入たまひける。あなうら

をうけたりしもの也これといふに。そこらの人もげにやとおもひけん。みななりをしづめて。とりわけこれをなん拜見侍りき。まことしくとりなしにへる心のいたりいみじく覺て。いづくよりまうで給へるぞとたづぬるに。この國よりは猶西ざまよりとこたへしかば。入道はこの國にすみ侍りつれど。けふこそ初めてまうでて侍るに。國をへだてゝおもひたち給ひける。ゆかしき御心ざしなりやと申せば。彼僧うちほゝゑみて。舍衛の三億の家は佛の世に出たまへる事をなをしらざりき。同じ國といへども縁のもよさるゝほどは。さのみこそ侍りけれとあざむける氣色。心あるさまな



れば。なをかたらはまほしきに。寶藏すでにたておさむれば。各ちりく行わかれつゝ。ひとり如意輪堂にまうでてはるかに見おろせば。山高くがけつくれるかまへ。天にさしはさみ。谷ふかくおひのぼれる木ずる。手にたづさはりて。海の面まなこのまへにつきぬる心ちしつゝ。泪もこぼるばかりたうとくて。つゞらおりの道わけのぼりつるくるしさもおぼえず。禮拜恭敬するに。ほどなく暮行入相のかね松風にひゞきあへるをと。いとゞ信を催しがほなり。太山の秋は。猶こそあはれふかきくなりけれとおもひしらるゝ時しもあれ。山路に日くれぬとしめやかにうち誦して。御堂の中へ人のあゆみまいる音すれば。たれならんとあやしくて。正面の柱によりそひてゐたりしをちかくゐざりよりて見侍れば。彼上人の御足駄もてはやしつる僧なりけり。今は下向

し給はんとこそおもひ侍つるに。ふたゝびまいるあひぬるも佛の御しるべにやとかたらへば。げにあひがたきは。伴にてこそ侍なるに。かくまいりあひぬるはしかるべき事にこそ。今夜は通夜の志侍れば。念誦の後。心靜にとて。陀羅尼よみつるこはづかひ。すこしかれいろにて。くゆぼりたるほど。いとたふとくきこゆ。念誦はてしかば。ずゝをしすりて。いかなる願をかもとめんとおもふ。一切汝にほどこそんといふ文をとなへつゝ。やゝ久しくぬかづきて後。ひたいの汗をしのごひ。袖ひきつくるひて。いきつき居たる有さま。物をふかくおもひ入たるけしきなれば。いはいとあやしくて。何のねがひおはしてか身をくるしめ。心を摧ていのり申給へるととひ侍しかば。誠にさぞみえ侍らん。これよしなき妄念にて侍り。いまだいとけなくして艸をたゝかひ。塵をも

てあそびしより。うたかたのはかなき跡に心をとどめて。すでにいそぢにあまるまで讀をけるうた。林の木葉のごとくつもりぬれど。つらぬべき花のたもとにもあらぬ身を顧みて。撰集のありしときにも望まざりしゆへに。いまだ勅撰にもいらす侍り。しかはあれど。代代の集にもさきにはいらざる人もまたもれたる歌も後にはえらび入られたるためしおほく侍れば。をのづから又撰集もあらばなど心になぐさめ侍るを。今の世となりて。柿の下のこたち皆あらたまりぬれば。嶋がくれのもくづいとどたづぬべきあまなくなりぬべき事のなげかしくおぼえ侍るあまり。祈申しをなんがたりしかば。おなじ心に歌のことをしも祈申給けるにこそいと不思議に覺侍れ。入道もみそぢあまりのとし世をそむきしより。むそぢのいまにいたるまで。官途はな

かく心にわすれ。世事は口にもいはずして。穢土をいとひ淨土を願といへども。なをことのはのしげきさはりをいでやらざるによりて。一筋に念佛の數返をつむ事をえず。これもし往生のさはりと成ぬべきわざにて侍らば。その旨をしめし給へ。源氏のものがたりも紫式部ののり申けるによりて。石山の觀音其風情をしめし給ひけるとなん申つたへて侍り。此寺もまた同觀音にておはしませば。などかりのをしへもなかるべきなど思つゞけてまうでて侍りつるに。難波津のよしあしをもてなやみ給ける人にしもあひたてまつりぬる。たゞこのぼさつの變化し給へるにこそ。願くはをろかなる疑をはるけたまへといひしかば。むらさき式部はあらたなる色につきて祈申しむ。猶人のねがひをみて給ふ御誓さがたきによりてしめし給ひけるにこそ。まして

これは實のみにて侍れば。いかでかそのをしへもなくて侍るべき。但まよひふかき心にて佛の御心をはかりがたく侍り。しかはあれど。そのためしを思ふに。清水寺はさせもぐさに我世のたのみをかけ。六角堂はあし火たくやのまちかき事をつけ。大山寺は山ふかくとしふる事をかこち。太神宮はさかづきにさやけき影をうかべ。宇佐はいさぎよき心をわすれず。加茂は雲わけてのぼる誓をたて。春日は南の岸に北の藤なみをよせ。三輪はわがいほに杉たてるしるしををしへ。すみよしはかたそぎのゆきあひのまに霜ををき。北野は菅原のあはぬいたまをあらはし。稻荷はながきよのくるしき事をしめし。貴ぶねは瀧津瀬に玉ちるおもひをなぐさめ。熊野はおもひおこせよ我も忘じとちぎりたまへり。また聖徳太子はかたをかの旅人をあはれみ。行基菩薩

は眞如くちせず逢見つる事をよろこび。傳教大師は我立柚の冥加をいのり。弘法大師はたかきやまにいたれる事をこたへ。慈覺大師はおほかたにすぐる月日をながめ。慈惠僧正はいもゐの庭に艸のむしろをしき給ひしよりはじめて。あらたなる佛神。かしこき權化。いづれか歌をよみ給はざりし。そのとがあらばかゝらんやとこそおぼえ侍れ。思へばちかき比の事なるうへ。新古今にしるされて侍れば。人皆知たることにて侍るぞかし。百首の歌をすゝめける念佛のつとめにさしあひて西行よまざりければ。何事もをとろへゆく世のすゑまでも。歌ばかりこそかはらぬ情にてあるよしをなん。熊野の權現夢の中にしめし給ひたりけるより。いとゞ歌のみ讀つゝ。そのもち月のきさらぎの比。ついに西のむかへにあづかりにきといひしかば。いまこそ日比のうた

がひはとけ侍りぬれ。この春むかしの友にて侍りし人。尋まうできて。むかし今の事どもかたりしつゝでに。この比爲兼卿といへる人。先祖代々の風をそむき。累葉家々の義をやぶりにてよめる歌ども。すべてやまとことのはにもあらずと申侍しかど。彼卿は和歌のうらかせたえずつたはりたる家にて侍れば。さだめてやうこそあらめと思侍しほどに。くはしく思ふ事もなくてやみにき。今又これをうれへ給へるにこそまことのあやまりとはおもひしり侍ぬれといふに。かの僧あざわらひて。堯舜の子。柳下惠がをとゝ。みなをろかなりしうへは。その家なればとてかならずしもかしこかるべきにあらず。又佛すでにわが法をば我弟子うしなふべしとて。師子の中の虫の師子をはむにたとへさせたまへり。そのむねにたがはず。内外の法みな其みちをつたふる人。

その義をあやまるよりすたれ行事にて侍れば。歌の道も歌の家よりうせん事ちからなき事にて侍る。かの卿は御門の御めぐみふかき人にて侍なるに。これをそしりてみつしほのからきつみに申しづめられん事もよしなかるべきわざにて侍れば。委そのあやまりを申がたし。たゞ此略頌にて心得給へ。夫歌は心をたねとして心をたねとせず。心すなほにして心すなほにせず。こと葉をはなれてことばをはなれず。風情をもとめて風情をもとめず。姿をならひてすがたをならはず。古風をうつして古風をうつさざる事にてなん侍りと申すに。いとゞおぼつかなくおぼえつゝ。まことに我をそしるをよろこび。をのれをつみせしばかりのためしは。またも有べき事ならねば。おそり給ふもことはりにては侍れど。道をたつるならひ。義をあらそふにとがなき事にて



侍り。たとひまた。龍逢比干におなじ事ありとも。やまとことの葉にみをかへ給ひなは。集に入給て侍らんよりもはるかにやさしき名を世々にとゞめ給ふべし。聞つたへてもらし侍べきにもあらず。たゞ入道が心ひとつにこそおさめ侍らめ。かつはこの六義。観音の御手の數にしもあたりて侍り。その心をもつて御手毎に奉たまへとすゝむれば。かくあながちにの給ふも観音の御すゝめにやとおぼえ侍れば。あら／＼申べしとてかたりし事どもをなんしるしをける成べし。

心をたねとしてこゝろをたねとせざる事。それ心に善惡の二あり。故に佛教にも心を師として心を師とせざれといへるがごとく。歌も又よき心をたねとしてあしき心をたねとせず。先よき心といふは。おもしらくやさしうして俗に近からず。きく人皆感じおもふべし。

これを古今序には。感こゝろざしになり詠こにあらはるといへり。あしき心といふは。我ひとり義をなしてよき風情とおもへども。なべて人の心になはず。これを同序には。歌とのみおもひてそのさましらぬなるべしといへり。然を爲兼卿の歌は心をたねとするぞとなれば。ともかくもたゞおもはんやうにその心をたゞちによむべしとて。詞をもかざらず。物がたりをするやうによめるいまやうすがたの歌ども。げに玉津嶋の明神もわかうら浪に御耳をやあらひたまふらんとおぼえ侍り。古今序に。やまと歌は人の心をたねとしてよろづのことの葉とぞなれりけるといへる。世中色につき花になる。人の心のたね也。またしげき言の葉とは。水に住蛙のその曲なきものまでやさしき歌の言葉ある義なり。またく今のごとく。色なくにほひなき心ことば

にはあらず。齊桓公に車つくりがいひけんがごとく。言葉はつたはるといへども心はつたはらざりけるにや。かつはその心を得てかの序にかきたりし。貫之よりはじめて代々の歌仙どもみなこれをしる所なれども。今の歌のやうによまざるにてしるべし。かの卿はあやまりなるといふ事を。又一遍房といひし僧。念佛義をあやまりて。踊躍歡喜といふはをどるべき心なりとて。頭をふり足をあげてをどるをもて念佛の行義としつ。又直心卽淨土なりといふ文につきて。よろづいつはりてすべからずとて。はだかになれども見苦しき所をもかくさず。偏に狂人のごとくにして。にくしと思ふ人をばはづかる所なく放言して。これをゆかしくたふとき正直のいたりなりとて。貴賤こぞりあつまりし事。さかりなる市にもなをこえたりしかども。三の難を申侍りて。つ

ゐにその砌へはのぞまざりき。一には。踊躍歡喜の詞は諸經論にありといへども。諸宗の祖師一人としてをどる義をたてず。殊更善導和尚は身心をうごかさずして至誠心を表給ひけるうへはさらにをどるべきにあらず。二には。人を放言して見ぐるしきところをかくさざるは放逸の至也。また。正直の義にあらず。三には。その姿を見るに如來解脫のたふとき法衣をあらためて畜生愚癡のつたなき馬きぬをきたまゝ衣の姿なる裳を略してきたるありさま偏に外道のごとし。この三の難を加て都て信をさりしをもむきを一遍房にかたりて侍りければ。陳答はなくてよめりける歌。

はねははね躍らはおとれ春駒の法の道をば知人そしる  
とよめるよしきゝ侍しかば。

春駒の法の道もいをはしらねはやおとる心をとめさる覽  
濁り江の蓮のうき葉にゐる蛙おとれは落て沈こそすれ

此難のごとく阿彌陀佛も思召けるにや。かねては紫雲たち蓮花ふるなどをどろ／＼しくいひたてしが。まことのきはには來迎の儀式も見えず。あまり正躰なかりければ。弟子往生とかやの風情ににもかへずして。人の見ぬさき。いそぎ焰にまじへ侍ける。その時しも

漆河に侍しほどに。かの最後のありさまよくきゝ侍て。三の難のあやまりなかりける事をさとりなき。しかあるにかの歌の義。又今の難に少もたがはず侍り。先心をたねとする詞につきてたゞしからぬ心をくるひよめる事。踊躍のよみにまかせてをどるにおなじ。次にただこと歌のすなをなる事をおもひてかざる所なくひたくちによめる事。正直の義をあやまりて人を放言し。見ぐるしき所をかくさざるにおなじ。次にふるきすがたのやさしき心ことばをまなびずして俗に近き姿をよめる事。

法衣をあらためて馬きぬをきたるにおなじ。これを思に。かのあやまりいよく疑なく覺侍り。すべて歌の趣をそむけるうへは。わきて申べきにはあらねど。殊に彼卿の秀歌なりといへる二首の歌をこれかれにかよはして。その難を申侍べし。

なけとなる有明かたの月影よ郭公なる夜のけしき哉

萩の葉を能々みれば今そしるたゝおほきなる薄也けり

まづ郭公なるといへるなるの字は。いかなる義ともおぼえず。するがなる富士のたかね。信濃なる浅間のたけなどいへるなるの字はその所にある義にて侍り。しかあらば郭公のある所によのけしきのみゆべきにや。もしまたほとゝぎすのなきぬべきけしきになる義にて侍らば。すでに上句になけとなる氣色。あり明かたの月影にくもりなく見え侍るうへは。下句にさのみかさねて郭公なるといはずと

も。そのけしき見えざるべきにあらず。いづれの義につきても。みゝにたちたる時鳥なるにや。爲家卿はすべてけしきといふ事をばよむべからずと申侍しかども。むかしよりよめるうへは。なにかくるしかるべきなどひごろはおもひ侍りつるに。この歌にこそげにあしき氣色とはおもひしり侍りぬれ。郭公のなきぬべきけしきをよめる。

家隆卿歌。

新古 いかにせんこぬよあまたの時鳥待たしと思へ村田の空

又行家卿。

新古 やよやなけ有明かたの郭公聲おしむへき月の影かは

かくてこそそのけしきもおもしろくみゆる事にて侍るに。なけとなるほとゝぎすとは。やよやなけに。ことのほかにをとりてこそきこえ侍るに。わろきすがたをいはず。人と猿とのかたちのごとし。つぎに古き狂歌にいはいく。

十五夜の山端出る月みれは只おほきなるもちる成けりこのもちるのすがたにおほきなるすゝきはたちまがひて侍れば。おかしからぬ狂歌にてこそ侍るめれ。俊成卿は顯輔歌をば。

詞花 難波江の蘆間に宿る月みれは我身一つは沈まさりけり

とよめりし心まではやさしく侍りしを。そのちすこし誹諧にかゝりて。歌のすがたやつれたるよしをなんしるしをきて侍り。すでに誹諧にかよへる猶これをそしれり。いはんや狂歌におなじからんをや。俊成卿は和歌に長せし事神に通じたりしかば。他家の人なりとも後生としてたやすくその義をやぶりがたし。いはんや子孫たらんをや。春日にたてまつりける歌。

新古 春日野のなとろかしたのむもれ水末たに神の驗顯はせ

參社のたびごとに此歌をのみ詠じ侍りて。法樂したてまつりつゝ。子孫の事を祈申けると



かや。又夢のつげ有ける時奉りける。

猿蓑

春日山谷のまつとは朽ぬとも梢にかへれ北のふちなみ

これに大明神めでさせたまひけるにや。定家卿中納言になりしより。次第に子孫さかへて

みな大納言をきはめ。次男の家まで中納言にいたりぬる。偏にかの歌の徳なるべし。然ときはたとひ人丸赤人來て今のごとく讀べきよしをなんをしへ侍るとも。彼卿の身としては及ばざらんまでも。藤なみの末をこそおもふべきにて侍るに。かけはなれたるすがたをのみこのみよめる事。家にをきても不孝なり。道にをきても不義なり。心あらん人は此一義にてもかのあやまりは知ぬべきにて侍る。またあらぬすがたなりとも。歌だにもおもしろく侍らば。さる一すがたもやとおもひ侍るべきを。歌とだにもきこえぬやうなれば。かた／＼しかるべしとおぼえ侍らず。もし又わが心の

をよばざるゆへにやと案じ侍れば。よき歌はをろかなるみゝにもおもしろくきこゆる事にてなん侍るなるゆへに。秀歌はつねに人の口ずさむ事にてなん侍り。道因法師。

新古今

山の端に雲の横きる宵の間は出てゝも月を猶待りける

とよめる歌をめぐら法師の口ずさみてとをりけるをきゝて。秀歌よみたりけりとてよろこびつゝ。かの目くらをよびいれて。やう／＼に引出物をなんたびたりける。また源雅光も。

金葉集

あふ迄は思もよらず夏引のいとおしとたに云と聞はや

とよめる歌をめなわらはの辻に立てうたひけるを聞つゝ。わが秀歌は此歌なりけりと申侍けるにたがはず。金葉集に入て侍り。又慈鎮和尚も歌はよしあしをしらぬ人のみゝにもおもしろくきこゆる秀歌にて有よし定家卿申侍りけるとて。歌をよみいだしてはかならず歌心もなき人にもとはれけるとかや。げにさる事

にて侍るやらん。かく歌のすがたやつれざり  
しまでは。上つかたの御會もしは家々の會の  
歌までも手毎に書うつして。しるもしらぬも  
これをもてあそび口すさみき。今は御會あれ  
ども。此道をたしなむ人よりほかあまねくし  
る事なし。古今序には。たま／＼後世のため  
にしらるゝ者は和歌の人のみなり。いかにと  
なれば。語る人のみ／＼にちかく。義神明に通  
ずればなりといへり。しかあるに今様すがた  
の歌は。語人のみ／＼にちかからず。義神明に  
通せざる故に。當時なをしる人まれなれば。  
末の世までつたはりがたくや侍るべき。たと  
ひこれをえらびをかるとも。撰集のつたなき  
名をとゞめ。作者のをろかなる心をあらはす  
べし。此篇はあしき心をいましむるがゆへに。  
煩惱のにごりをきよめんがため。持給へる蓮  
花の御手にたてまつるべし。

思分く心のなとかなかる覽よきも悪きもしらぬ人かは  
一心をすなほにして心をすなほにせざる事。

それ歌の心は屏風をたつるにおなじ。みなひ  
きはへて一おりする所なければたつ事をえ  
ざるがごとく。たゞすなほなる計にてひと  
おりの節なきは。彼大すゝき。其難をまねき  
侍るにや。薄はしのゝをすゝき。糸薄などい  
ひて。細くちいさき名をこそ得て侍るに。た  
だ大きな薄。そのふしもなく見え侍り。  
又身にしむ色の秋風をぞ。なによはるすゝき  
にしもむすびかへたる。萩の葉何ゆへともき  
こえ侍らず。おなじく此風情なるとも。か  
うよみて侍らば。いま少しは萩の一ふしも見え  
ぬべくや。

秋風のをとせきりせは萩原や末はのたき薄とそみん  
ひとり古今の間にあゆみて。和歌道を始めてあ  
きらむるばかりの宗匠の歌をかりにもよみ

なをし侍る事。返々人のあざけりと成ぬべ  
けれど。たゞ一ふしの義をあらはさんがため  
也。俊頼抄に。心をさきとしてふしをもと  
め。詞をかざりよむべきなり。心あれどもこ  
とばかざらねば。歌おもてめでたしとも見  
えず。詞かざりたれども。させるふしなけれ  
ばよしともきこえず。目出たきふしあれど  
も優なる心詞なきは又わろし。けだかくおも  
しろきをひとつの事とすべしといへり。しか  
あるを彼卿は。歌の心にもあらぬ心ばかり  
をさきとして。詞をもかざらずふしをもさぐ  
らず姿をもつくろはず。たゞ實正をよむべし  
とて。俗にちかくいやしきをひとつの事と  
するがゆへに。皆歌の義をうしなへり。すべ  
ていつはりかざれる事なれどもそのいはれ  
をよくよめば實正にきこえ。實正なれども  
其詮なくよめば實正ならずきこゆる事にて

侍れば。あながち實正をもとむべきにもあ  
らず。かつは有爲の法はみな假躰成べきによ  
りて。實あらざるを實とすべし。ことに歌は。  
又はかなき言の葉。あだなる思なるがゆへ  
に。かりの事をのみよめり。またみざる事をも  
見きかざる事をもきゝ。おもはざる事をも  
おもひ。なき事をもあるやうによむをもて歌  
の義とす。これによりてつねのたとへにも  
まことなき事をば歌そらごととこそ申侍る  
めれ。また眞實中道一如の法。猶以空假の二  
法を具足して。三諦の義をあらはす。いは  
んや和歌の風情をや。彼卿の申侍るなるをも  
むき。たゞ事の義をあやまれるなるべし。六  
義にはことのとのほりたゞしきをもて。た  
だごと歌の義とす。しかあるに彼卿はこと  
のとのほる所をばしらす。たゞひとへにた  
だしき事をのみよまんとするがゆへに。一

遍房が正直の義のごとくして。六義をはなれたり。此篇はたゞしき心はまよへることをいへる故に。癡暗の心を見がかわがため。もちたまへる念珠の御手に奉る。

うきことの葉のみ茂りて吳竹のうき一節の絶や果へき  
一詞をはなれて詞をはなれざる事。

夫世俗のことばをはなれてやまとことばをはなるべからず。しかあれば口傳にも。ことばは古をしたひ。心はあたらしきをもとめよといへり。世俗の詞といふはかの萩の歌のごとく。よく／＼みればたゞおほきなるなどいへるやうなる詞なり。やまとことばによくよく／＼る心をいはば。つく／＼とながむればともいひ。又つく／＼見れば。あくまで見ればなどいふべきにや。又おほきなるすゝきをよまんには。さきにいふがごとく。すゑはのたかきともいひ。また葉末のひろきともいふべきにこそ。寂蓮は歌ほどいみじき事な

し。猪のむくつけくおそろしげなる物まで。かるもかくふすゐの床などよみぬればやさしくなれりと申けるやうに。やさしからぬ事をもやさしくやはらげよめばこそやまと言葉のおもしろき事にて侍るに。彼卿の歌のをむきのごとくならば。ゐのしゝのふしたるとこなどよむべきにや。人木石にあらざればみなおもふ心はありといへども。言葉よくやはらぐる事のかなはざるによりてこそよみよます。をとりまさる人もある事にてぞ侍る。世俗にいふがごとく。おほきなるものをやがておほきなりといひ。ちいさきものをやがてちいさきといはんには。たれか歌をよまざるべき。また心をあらはす事はいづれもおなじ事にて侍れども。經論。外典。解狀。消息。眞名。假名。世俗ものがたり。詩歌の言葉ども。皆その文脉ことなり。なんぞいま和



歌と世俗おなじくせんや。藤原保昌歌をうらやみて。早朝におきてぞみつる梅花を夜陰大風不審々々よとよみたりける。和泉式部きゝて。歌詞にはかくこそよめとて。

朝またきおきてそ見つる梅花よのまの風の後めたきにとやはらげたりける。おなじ心ともおぼえずおもしろくきこゆるをもてもしるべし。其詞たがへば其心うする物也。たゞ保昌が詠のごとし。但世俗の詞もよくよめば歌詞になり。歌ことばもあしくよめば世俗の詞になる事にて侍り。詞はそれ心のつかひなるがゆへに。詞をろそかなれば心もろそかにきこゆ。詞切なれば心も切にきこゆるなり。しかあるに詞のなかにはまた詞肝心たるによりて。百偏にかきたる文よりも。わづかに三十一字にいへる心は切におぼゆるゆへにこそ。天地をうごかし。目に見ぬおに神。たけき

ものゝふ。おとこ女のなかをもやはらぐるこにて侍るに。彼歌は詞つたなきがゆへに。ふみにもこよなくをとりて見え侍り。これひとりおもふにあらず。いまだ彼歌を感じる人をきかず。ただかゝる風情詞をもよむべきにやとうたがふ人おほし。且はかく山がつのそしりをおひぬるもあまねく人の心になはざるゆへなるべし。また上古の歌もさのみこそ侍めれとてやまひ禁忌をものぞかざる事ゆゝしきあやまちにて侍り。歌いまださだまらざりし時は中にをよばす。古今集よりこのかたは。病をのぞかざる事なし。但をのづから病ある歌をえらび入たる事あり。それも皆ゆへあるべし。あるひは心めづらしくあるひは詞やさしきにつきてこそ。おいが身に大節ある時は。すこしきあやまりをいはざる義なり。然に今そのとがゆるさるばかりの

心詞もなくして。いかでかこれをゆるさるべきにや。和歌は善惡の心に通るゆへに。ことに禁忌の詞をいましめ侍り。經信卿自稱承暦の歌合に。

君か代はつきしと思神風やみもすそ川のすまん限りは  
とよめりけるによりて。御門の御寶算のびさせおはしますよし夢のつげなんありける。かくよむまでこそかなはずとも。歌のひじりといふばかりにては。そのはゞかりありぬべき事をも心うべきにてこそ侍に。しでの山路の鳥とかや申つたへたる郭公の歌にしも。はじめになけとなるといひて。をはりによのけしきかなともてあはせたるいかゞとおぼえ侍しにたがはず。かの歌よみ出したりしとしは。蓮臺野ばかりへまかりける人だにも萬人にあまりたりなどきこえ侍りき。すでに世のためみちのためよろしからずといへど

も。或はこの道にくらき人々。ことぢににかはする義にまよはされて。その黨をむすび。或は鹿をさして馬といひけるがごとく。ただそのむねにしたがふゆへに。和歌こゝにたえなんとす。思べし。蛟龍は水を得てのち其神をたて。和歌は詞を得て後其心をあらはすもの也。この篇は言葉のみだれたる事をいへるゆへに。さはりをのぞかんがためにもちたまへる持輪の御手に奉るべし。

言の葉のなをさらに云心をは思計りにいかゝ知へき

一風情をもとめて風情をもとめざる事。

それ風情は錦を織におなじ。ひとつはたものの上にして色々さまゝなる文をわかつごとく。ふるき風情のうちにしてあたらしき風情をもとむべし。故にもとめてもとめずといへり。古き風情といふは。たとへば花に風

をいたみ。月に雲をいとふやうに。その物につけてよみならはせる事ども也。これをはなれていまめかしきことをよまんとすれば。かの萩の歌のやうにかへりてめづらしきおもひもうせて風情もなくなる事にて侍り。つねの人のことぐさにも。事過てわろきをば風情すぎたると申侍るは。歌より申はじめたる事にてなん侍り。八雲の御抄にもいまめかしきをよめるをば風情のいりほか詞の入ほかとぞかゝせおはしましたる。但すべてふるき風情をはなれてよむまじきにはあらず。これは大かたの義にて侍り。孔子の。造次顛沛にものりをこえずとのたまへるごとく。和歌の大勢を得つるのちは。いかなる事をよめども六義を越ざるゆへに。そのあやまりなきもの也。しかあれば明匠どものをのづからおもひがけぬ事をよみたるは。みなさる事も有

とおぼえて見所も侍り。それもわざとよめるにはあらず。風情のいたれるあまり自然によりきたるなるべし。なにをもてしとならば。わざととめたる風情はいかにもことづくりたるやうに見えて。あるは心得がたく。あるは詞くだけておもしろからず。りうごをまはすと風情をめぐらすとは其義おなじき事にて侍り。りうごはよくまはせば心と繩のうへにうかれたちて。なげあぐれどもおちず。いまだよくもまはらぬさきになげあぐればふりくとしておつるがごとく。歌も未いたらざる心をまはさんとすれば。詞のなはにかゝらずして風情のりうごおつる事にて侍り。卽其趣又かの萩のはによく見えたるにや。花を雲にまがへ。紅葉を錦にあやまつやうなるにせものは。いまださだかにみえわかぬそれかあらぬかと思ふ事にてこそ

侍るに。おぎの葉をよく／＼みながら猶すゝ  
きとおもへる事。ゆかしきひがめにこそみえ  
侍れ。かやうに歌はあまりめづらしき風情を  
もこめんとすればほれ／＼となりて題の心  
をもわすれ。その難もおぼえぬ事まで侍り。  
ことに初心不堪の人は心うべき事也。白河院<sup>キヤ</sup>  
御時公定は月の題に月をおとして無月の宰  
相といはれ。能俊は月の中なる月を見るか  
なとよみて天變の少將となんいはれける事  
をおもふに。むかしなりせば彼卿をも大薄  
中納言とぞ申侍らまし。今は歌の心をしれ  
る人もなきにや。わらふべき事をもわらは  
ず。たゞ事にいでてあらそふひとは。爲世卿  
よりほかはきこえ侍らず。たゞしき歌仙だに  
もあまたありて。あざけりをなさんには。こ  
れにはゞかりて。かの卿はかくおかしき歌  
どもをばよも讀侍らじ。たとひよむとも又こ

れをまなべる人あるべからず。歌の家に人  
なくなりにけるほどもかなしくこそ覺侍れ。  
おほかた歌の風情のおもしろき事。代々好土  
濱のまさごのかずをつくして。よみのこせ  
る心言葉もありがたくなりつゝ。ふりぬる  
身をながらの橋によすればさらに心のわた  
るべきみちもなく。もゆるおもひをふじのね  
にくらぶればをのづからことばのをよぶべ  
き煙もたえぬれど。なをそのあとを尋てよむ  
べき也。残たるをあんじいだして侍ればこ  
そ。いかにしてこの風情いままでのこりたり  
けんとかしこくもめづらしくもきこえてお  
もしろくおぼゆる事にて侍るを。かの卿は俗<sup>キヤ</sup>  
にちかくして歌の風情にもあらぬいまめか  
しき事どもをめづらしき風情とおもへり。む  
かしよりよむべからざるによりてよまざる  
心詞をよめる。さらにめづらしきにあらす。



この篇は風情をめぐらすことをいへるゆへに。衆生をわたさん事をあんじ給へる思惟の御手にたてまつるべし。

吹まよふ波ちは出る舟もなし風は便のしるへなれとも

一姿をならひてすがたをならはざる事。

それおほかたのすがたといふは。六義のをもむき。みづからがすがたといふはわが得たるすがた也。是をたがへて人の歌をまなべるはわがふりにあらざるがゆへに。秀歌はいできがたし。たゞおほかたのすがたをだによくならひぬれば。わが心にまかせてよめども六義をはなれず。たとへば手をよくならひえたる後は。我輩のいきほひにしたがひて。あらぬふりにかけどもよき手に見ゆるがごとし。信實朝臣はこの比たれがやう彼がやうとて。よみもおほせぬすがたをまなぶ事。その心をえざる事也。をのがすがたをさま／＼

によめばこそ人の心をたねとする義にもか  
なふ事にては侍れと申き。もしかの卿はこの  
義などをあしく心得て。大かたのすがたをさ  
へ心にまかせてあらため侍にや。代々の集を  
みるにも時にしたがひ人によりて歌の姿は  
おなじからずといへども。みな六義のうちに  
してやまとことばをみだらす。たとへば春の  
草木のひとつみどりにしてをのが青葉をま  
ちまちにわかてるがごとし。しかあるにたゞ  
おほきなるすゝきはみどりの青葉かれはて  
てやけのゝ原となれり。すべて歌にもかぎ  
らずよろづの事を。みな姿によりて其義をあ  
らはせるゆへに。諸尊は本誓にしたがひて形  
像をあらため。先王は貴賤によりて法服を  
さだむ。即たかきがいやしき衣をきいやしき  
がたかき衣をきる事をいましめて不忠失位  
とす。これをおもふに。かりそめの衣なをそ

のすがたをたかぶれば其失あり。いはんや心  
詞をたがへて歌のすがたやつさんをや。口傳  
に云。ちかき世の人はたゞおもひえたる風情  
を三十一字にいひつゞけん事をさきとして  
さらにすがた詞のをもむきをしらすといへ  
り。いまの歌すなはちもつはらおもひえた  
る事をさきとせり。何ぞ先賢のいましむる所  
を思はざらんや。またかの卿の説には。をの  
をのともかくも心にまかせて。おもひく  
によむべきにて侍るうへは。當世様といふ事  
あるべからずと申よし或人かたり侍き。も  
しまことにて侍らば。みづから知る事のかた  
きゆへに。當世ざまあるべからずとおもへ  
るなるべし。かの卿ふるき歌のすがたによ  
めるをば。例の風情といひて。めをそばむる  
がゆへに。をのくいまめかしき事どもを心  
にまかせてよめり。これにつきて。いかでか

いまめかしくみだりがはしき姿なからんや。  
たとひ心かたくなにして。めしひたる人なり  
とも。よく今様すがたをば見しり侍ぬべし。  
すべて古今集より續古今集に至るまで十一  
代の集の中にいまのごとくなる歌はあるべ  
からず。たとひまたありといふとも。百丈の  
木のなかに一のふしあらん事をおもひて。こ  
れをまなぶべきにあらず。つらく事の心  
をあんするに。和漢の博才あつまりたりし延  
喜の聖代に古今集をえらばれて歌の六義を  
さだめられしよりこのかた。みなそのをも  
むきにしたがひて六義をやぶらず。なんぞい  
まかしこき上古の風をあらためて。末學のを  
ろかなる俗をうつさんや。この篇はすがた  
をよくすべき事をいへり。故にほどこし給ふ  
らんがため。もち給へる寶珠の御手に奉るべ  
し。

さま／＼に見ゆる姿も増鏡ひとつ思のかけにそ有ける

一古風をうつして古風をうつさざる事。

それ古今の古風をば寫して萬葉集の古風をばうつすべからず。其故に萬葉はあまねく由緒ある心詞をさきとして歌いまだやはらがざりし風にて。今の世のきゝをとをくせり。

古今序には。上古の歌をみるにおほく古質の語を存していまだ耳目のもてあそびとせずといへり。よく歌をやはらげて。人のきゝをちかくして六義をわかちて。かれこれえたる所えぬ所をあらはしつゝ、事の心ををしへし事古今集よりはじまれり。これによりて萬葉は集の源なれども古今をもて本とすべきよし明匠どもみな申侍り。たとへば一返ひらきみたまひて大小乗をわかちて序正流通をさだめつゝ、委く釋をつくり給し故に。顯教には大師を祖師としたてまつるごとし。又大

嘗會の三代集の御手箱にも。拾遺集いできて後よりは萬葉をのぞかれけるも。耳目のもてあそびとせざる義なるべし。然にかの卿をよばざる萬葉の風をねがへるにや。たゞおほすきのおほやうなる歌どもおほくきこえ侍り。爲家卿はかの集の歌を本歌にとる事をだにもいましめ侍き。その子孫として。などや鶯のかひこの中の時鳥にてしもは侍ける。上古の歌は世あがり人かしこくして其心其時にかなへるゆへに。心詞ともにたゞしくしておほやけしきすがたあり。たとへば不動愛染王などの降魔のかたちにておそろしげなる御すがたなれども。内に慈悲の御心あるによりて。むかひたてまつればたうとくおぼゆるがごとし。いま世くだり人をろかにして。其風時にしたがはず。そのすがた身にをよばざるをかへりみず。これをまなばんにあ

に上古のごとくならんや。たとへばおさなき子に鬼の面をきせるがごとし。たゞおそろしげなるかたちばかりは見えて。まことによははしく。そのいきほひなき物也。これによりてことに末の世には上古の風をいましむべき事にて侍り。但万葉の中にもいまの風にかなひておもしろき歌どもあり。これをばまなぶべし。また古風の中にもまなぶべからざる風あるべし。たゞ大跡の義也。又古今を本歌にとりとりざる事近比の明匠どもあらそひ申侍き。其兩義をあんずるに。まづ本歌をとる義は。手跡も人のよき手をならひて能書になり。又水をとる火をとる玉も月日のひかりをたよとし。また詩も古詩をとるたる事のみこそおほく侍れば。これを思ふべしといふ義もしかるべし。次に本歌をとるべからざる義は。人丸赤人も本歌をとった

りし事やはある。また人の心はおもてのごとく同じからざる事にて侍れば。人の歌をとるべからずといふ義も然る也。いづれもそのいはれなきにあらざれば。一篇にさだめがたし。但とるべしといへる人もさのみとりたる事もなし。とるべからずといへる人もすべてとらざる事もなければ。たゞ大かたの義にて侍べし。其肝心はわざと本歌をもとむべからず。又自然によりきたるをものぞくべからざるにや。光俊朝臣の義につきて。中務卿親王專本歌をとらせ給ひし事を爲家卿難申けるも。あまりこれをむねととりすござせ給ふ事をなん申けるにこそ。當時はまた一向本歌のさたまでもをよばす。今案の風跡をさきとするゆへに。風情を凝すとおぼしきは心得がたく。すなをによむとおぼしきは俗にちかく侍り。これを思ふに。本歌をへつらふ心



なくしては歌のをもむきたがふべき事にて  
なん侍りけり。大かたは人乳赤人も本歌をと  
らざりし義はさる事にて侍れど。内外の道み  
なさのみこそ侍れ。釋尊は經教なかりしさに  
に。正覺をとり給ひしかども。さとりをひら  
かんと思ふには經教を學し。又孔子老子もみ  
づからこそ仁義の道をばさと給ひしかど  
も。その道をたづぬる人をばかの曲をうかゞ  
ふよりはじめて。いづれのわざかそのみな  
もとをまもらざる。これにつゐて本歌を思は  
んに。あながちにそのとがあるべからざる  
にや。この篇は。古今取初の風をあらたむべ  
からざる事をいへるがゆへに。法性の金山を  
をしてうごきたまはざる。按山の御手にたて  
まつるべし。

粘てゆく萩の古枝の立かへりもとの心に花のさけかし  
すべてかの卿のいま様すがたの歌おほしと

いへども。たゞ二首を六義にかよはしていへ  
る事は。兩首の中にだにもあやまりのおほき  
事をあらはさんためなるべし。

### 野守鏡下

すでに法樂のために略頌の心をばかたはじ申  
侍ぬ。たゞし心せばくことばみじかくして。  
そのことはりあらはれざるべし。和歌はたゞ  
花鳥のたよりのみにもあらず。内外の法をか  
ねたる子細もついでに侍れど。はやうし三に  
もなり侍ぬ。いますこし念誦し侍るべしとい  
ひしを。内外の法に過たる念誦やはあるべき。  
かつは眞實の義をしものこし給はん事くちお  
しく覺侍れば。雪山童子のためしをもひきい  
づべしなど申侍しかば。さばかりの御心ざし  
ならばとてかたり侍りしは。それ恩をすてて

無爲に入しより。あしたには花藏世界の花を  
たづね。夕には本有常住の月をまち。音律浮世  
の曲を傳て。聲塵得道の業をなし侍しかども。  
ふたそぢあまりのとしより山がつとなりにし  
後は。ひとへに歌にのみ心をなぐさめて。い  
そぢあまりのとし月ををくり侍りつるに。い  
まかくこの道のすたれゆく事たゞ我身ひとつ  
のなげきのやうにおぼえ侍り。先外典につき  
ていはゞ。和歌は仁義禮智信の五徳を兼て。よ  
く禮樂をたすけつゝ。國をおさめ民をやはら  
ぐるなかだちたり。かるがゆへに古今の序に  
も。天地をうごかし。鬼神を感じ。人倫を化  
し。夫婦をやはらぐる事。和歌よりも宜はなし  
といひ。また君臣の情。是によりて賢愚の性  
をみつべしといへり。其心をいふに。聞人皆感  
じおもふは是仁也。ひとふしをとゝのへよむ  
は是義也。和國の風にやさしくことばやはら

ぐるは是禮也。珍敷風情をめぐらすは是智也。  
切なる心をあらはすは是信也。しかるをいま  
の風体は聞人みな感ぜざれば仁にあらず。ひ  
とふしなれば義にあらず。やさしくことば  
やはらげざれば禮にあらず。よき風情をよま  
ざれば智にあらず。切なる心あらはさざれば  
信にあらずる物也。また樂を兼たることをい  
はば。上五文字に糸竹金石革の樂器をとゝの  
へ。下五文字に陰陽五時をわかち。中の七文  
字に七調子をこめ。をはりの七々に呂の七聲  
律の七聲をふくめり。をのづから一字二字あ  
まることも。樂にのふけむあやまりある故也。  
又長歌のかずさだまらざるも調子にしたがひ  
て呂律の聲の輪轉する事無窮なる義をあらは  
すなるべし。風情をもては調子とし。ことば  
をもては聲とするものなり。思ふべし。おなじ  
人の聲なれども。調子たがへばあしくきこへ。

調子たがはざればよくきこゆるごとく。おなじ三十一字なれども。風情の調子調それ。ことばの音曲たがひぬれば。そのきゝよろしからず。但樂を兼たりといふ事。樂のこゑきこえざるにつきて。人みな信ずべからずといへども。魏徵古人の説をひきていはゞ。禮といひ禮といふ。なんぞ玉帛をしもいはん。人のとゝのふるによりて禮のよそはひをなす。樂といひ樂といふ。なんぞ鐘鼓をしもいはん。人和するによりて曲をなすといへり。又波斯匿王敵國のたゝかひにくすりをつゞみにぬりてうちければ。その聲にひかれて毒の箭ぬけて害をなさざりける。是もまさしく其樂をつけざりけれども。藥をつゞみにぬりたりける義ばかりにて。その徳をほどこしけるうへは。なにのうたがひかあるべき。なんぞあながち樂を歌に和するとならば。國家の治亂。佛法の興廢。ひ

とへに禮樂によるゆへなり。弘決云。禮を制し樂をおこして五徳を世におこなふ。佛教の流化まことにこれによれり。禮樂さきにはせ。眞道のちにひさしといへり。又詩序に。おさまれる世のこゑはやすくしてたのしめり。みだれる世のこゑはうらみていかれり。又文選に。關雎麟趾には正治の道あらはれ。桑間濮上には亡國の聲あらはる。又孝經云。國をおさめ民をなづくるには禮よりよろしきはなし。風をうつし俗をかふるには樂よりよろしきはなし。又弘決云。民の徳ありて五穀さかりに疾疫おこらず妖祥なしといへり。これによりて釋尊震旦國に三聖をつかはして仁義の道ををしへたまひはじめ。樂をおこしけるよりして三百六十律をたて、聲をたゞしくせられけれども。世をとろへゆくにしたがひてきゝわくる人なかりければ。役刑法といひける人

六十律になしたりける後。猶又わきまへがたくなりゆきければ。則天皇後の時十二律にさだめられにけり。いまはこれをだにもあきらかにきゝわかず。たゞくちにまかせて。吹手にしたがひてあやづるばかりにて。轉輪聖王より乃至第六天の妓樂の音聲。あひすぐれたる事千億万億也。第六天上の万種樂の聲は無量壽國の七寶樹の一種の音聲にしかずといへり。しかあれば小國は大國をとり。末代は上古にをよぶべからざる事をかゞみつゝ。素盞烏尊五章の義をかね。音律のかずをわかちて。三十一字にさだめ給へり。しかあれば和歌よく禮樂をとゝのふるが故に國おさまりて異敵のためにもやぶられず。佛法の流布する事も大國にすぐれたるは。これひとへに和歌の徳也。宋朝には和歌なくして禮樂をたすけざるによりて。八宗みなうせつゝ。異賊のために

國をうばはれたり。これを思ふに。法をあがめ國をまもり。詞をあひし給ふ神たち。さだめていまの風躰をにくみつゝ。その御とがめもあるべしかし。かの卿つゝがなくして。勅撰をうけたまはり。いまやうすがたのみだりがはしき歌どもをえらびをきなば。和歌こゝにたえぬべきもの也。かつは後鳥羽院八十の御時。有心無心の連歌とてみだりがはしくおかしき事どもをあらそひ詠じけるを。時の歌仙どもゆくすゑにはやすきにつきて。無心の風をのみこのみて有心のすがたをわするべき事をなんなげき侍て。各無心をとゞめらるべきよしをうたへ申ける。いはんやいまの歌をや。また内典につきて樂の徳をいはず。般若には一切諸法は聲にをもむくとき。止觀には聲法界たり。一切法を具といふよりはじめて。諸經論にあかす所。聲の徳にはしかず。然則釋迦善



逝微妙法の聲をのべて法をときつゝ衆生を教化し。法照禪師は五會の典をとゝのへて現身に無生忍をえしよりこのかた。月氏日域おなじく音律聲明の道をたしなまずといふ事なし。いはゆる法道和尚は卽身に極樂世界にゆきて寶池の浪の音を引聲の念佛につたへ。慈覺大師は獨行に如法法花を修して懺悔のなじみのこゑを懺法の妙典にとゞめ。また玄奘三藏は。梵網戒品に流沙のおぼれ聲を誦せしかば。出家の人はこれを學し。在家の人はかれをたとびて。佛事ををこなふにはこの道をぞさきとし侍りける。源氏ものがたりにこゑすぐれたるかぎりさぶらはせたまふ念佛の曉がたなどしのびがたしといへるも。たゞ其聲のよきにはあらず聲明にすぐれたる僧をえらばれたるよし。念佛といへるは阿彌陀經の典なるべし。またおなじき物がたりに法花三昧を

こなふ堂の懺法のこゑやまおろしにつきてきこえくるいとたうとく瀧の音にひゞきあひたりといへるも。おほかたの景氣ばかりをいへるにあらず。懺法の典に山風のおろしぶし。瀧のつたひぶしといふ口傳のあるを思ひよそへてかきたり。むかしはかく女房だにもしり侍りけるに。いまはこの名目をだにきゝたる僧もなきにや。娑婆世界は聲塵得道の國なるがゆへに。音律たゞしければ。内外の法をのづから成するもの也。淨藏貴所は大峯の仙人にあひてこの道を傳しより法驗ならびなかりけり。又云。公任大納言も聲明のとくによりて才能人にすぐれたりけるとかや。大原の良忍上人は卅の年もすごすべからざるよしまさしき宿曜相人ども勘申ければ。廿五のとしながら山をいでておほ原のおくにうつり居つゝ。來迎院を建立して。聲明法則をたゞしくして。

出離をいのりけるに。夢のつげありて稻荷社へまうでたりける時。命婦いでさせ給て。水精の錫杖をくはへて上人の前にをかせたまひければ。やがて七ケ日こもりて九條錫杖を誦せられけるに。金の五古を尾にたれたりける命婦いでさせ給て御聽聞ありける。これによりて上人の壽命たちまちにのびて。なまそぢあまりにいたれり。またかの上人入滅の後。家寛法印先師の跡を尋ていなりの社にこもりつつこの水精の錫杖を持して九條錫杖を誦しけるに。上人の時のごとくなる命婦出させ給て御聽聞ありければ。錫杖の靈驗いまだうせざる事をたとび。聲明の秘典あやまりなかりけることをよろこびけるとかや。後日キキ河法皇はこの法印に聲明を傳させまし／＼て常にかの水精の錫杖をめされつゝ九條錫杖を誦せさせおはしましけるによりてひさしくたもたせま

しますよし御夢想ありける。また祖師蓮界上人は宜秋門院の御惱の時まいりて法花懺法をやみけるに。懺法の聲におどろきて六根をやましたてまつりつる鬼六人なく／＼まかりいづなど女院の御夢に御覽せられたりける。曉より御心ちさは／＼とならせ給たりけるとなん申つたへて侍り。慈鎮和尚は此上人を先達として聲明を興行せられき。或經に佛法滅せんとする時は聲明菩薩まづかへるといへり。もしこの道すたれば。佛法もとろへ。門跡もすたるべしとて。朝夕音律の曲をのみたしなまれければ。法驗もことにあらたに。門跡もまことにさかへたりける。愚僧はかの上人の嫡家をうけて水精錫杖をば傳て侍れど。いまはやみのにしきにてそのかひなければ。

いかにせん磨きし玉の白からくもらぬ影も光なき身を  
一節のたえゆく末を思ふにも笥の竹の身つからそうき

但かの錫杖は長壽のまもりなるがゆへに。良

忍上人より先師にいたるまで五代はすでに七そちにあまりやそちに、あまらずといふ事な

し。愚僧もはや六そちにちかづきて侍れば。そ

のはまれなしといへども。その徳なきにあら

ず。たゞつゞりきて玉をいだけるなるべし。後

嵯峨法皇わらはやみに久しくわづらはせまし

ましけるに。さまぐの御祈かすをつくされ

しかどもそのしるしなかりしかば。成源僧正

をめされて冥道供をこなはれしに。僧正先師

をまねきよせていはく。冥道供は九條錫杖を

肝要とするうへ。かの水精錫杖靈驗あらたな

り。まげてこれを持して秘曲を法樂し給へ。

たのむところはたゞ是に有と申侍りしにより

て參勤したりしに。やがて御おこりなかりし

かば。是我法驗にあらず。ひとへに錫杖の効

驗なるよし僧正のもとより申をくりて侍し狀

にかきそへたりし歌。

いかにして神の心を寫さましきやけき玉の影無りせは  
先師にかはりて。かへし。

寫しをく法の鏡の影にあひていと光や玉にそひけん

聲明の曲のあらたまりしはしめをたづぬれ

ば。蓮入房といひし人くはしく良忍上人の口

傳をうけざりし流にて。たゞはかせにまかせ

て大原の聲明を興行せしよりして。上人の妙

曲をうしなへり。その子細今の歌のごとく。

はかせにまかせ聲にまかせて思ふさまに曲を

なすによりて。呂の曲は律になり。律の曲は呂

になりて。陰陽たがひ侍しほどに。專修念佛

の曲流布して。男女是にこぞりしかば。人皆聲

明のきゝを遠し侍りけるに。嫡々相承の妙曲

をあらためしゆへなるべし。それよりしてい

まにいたるまで。專修念佛の曲さかりなれば。

正道の佛事をこなふ人まれなり。たびく

かみつかに修せらるゝも顯密の僧をのみめ  
されて音律の道を尋られざれば。おもひ／＼  
の聲々みだりがはしくしてその感をもよほす  
ことなければ。またこれを賞せられず。賞な  
ければまたこれを學せざるによりて。この道  
はやがてすたれ侍り。かの念佛は後鳥羽院の  
御代の末つかたに。住蓮安樂などいひしその  
長としてひろめ侍けり。これ亡國の聲たるが  
ゆへに承久<sup>順徳</sup>の御亂いできて王法をとろへたり  
とは。古老の人は申侍し。すべて世間はことに  
佛法の肝心にて侍り。そのゆへは人のこゝろ  
をたねとするによりて心外無別の義をあらは  
す。又あだなるおもひをいひ。はかなきことを  
かたりてまことの心をのぶるは。これ權實の  
二教。空假中の三諦也。密教につきていはゞ。  
よろづのものにつけて心ざしあらはすは事理  
俱密の心なるべし。又六義の躰をわきまへ。

やさしきことをとゝのへ。ふかき心をあらは  
すは。これ身口意の三密を成する所也。又ち  
かきをとくよみ。とをきをちかくいひ。いま  
だ見ざる名所をも見たる様によむごとくなる  
風情は。これ密教不思議の秘術。無所<sup>レ</sup>不至  
の躰也。又心なき物にも心をつけ。ものいはざ  
る物にもものいはするやうなる事は。有情非  
情みな即身成佛のさとり也。しかあるをかの  
卿いつはりかざる事をば實正にあらずとてい  
ましめ侍て。かへりてはまことのこゝろをう  
しなへるなるべし。しかのみならず。眞言は  
諸佛所説の肝心のことばをえらび衆生化度の  
速疾の理をきはむるがゆへに。章句すくなし  
といへども。功能もとおほし。歌もまたそ  
のことばおほしといへども。これをえらびす  
ぐりて卅一字につゞむる事眞言におなじくし  
て。其心ざしのまことをあらはす事は。やま



とことのはにすぎたる物なく侍るに。かの卿  
ことばをもえらばす心をもすぐらずして。た  
だおもふさまによむべしといふ義をたて侍る  
事歌のみちをうしなふのみにあらず。法理  
を破するものなり。三寶の御照覽もともおそ  
るべき事にて侍り。凡密宗も其義理を談する  
時は。身分のうごく所。密印にあらずといふ事  
なく。言音のいへる所。眞言にあらずといふこ  
となしとならひ侍しかど。まさしく行する時  
は佛菩薩の印眞言をむすび誦することく。歌  
の義をいふ時はこゝろをたねとする事なれ  
ば。我心にまかせてよむべしといへども。げに  
よむ時は六義のすがたをやぶらず。ふるきこ  
とばをおもほへてつゝしみよむもの也。かつ  
は諸法のならひ。文につきて義をたつると行  
にのぞみて法を修するとは。その心ざしおな  
じからず。しかるをいま愚學の禪定はわづか

に頌文のことばをきゝてはやく得法の思をな  
し。辭案の專修はたゞ一稱の文をもてたやす  
く往生の業をなす。これ釋迦彌陀おなじく國  
をすて家をいでて難行苦行したまひしかど  
も。禪念兩宗の人さとりやすく行じやすきを  
たてゝ。學をわづらはしくせざるによりて。  
人みなこれに歸して顯密の法學する人も稀に  
なれり。これをおもふに。いまの歌は古歌を  
もうかゞはず。やまひをものぞかず。ことばを  
もかざらず。禁忌をいましめず。たゞ心にま  
かせてよむ事。やすき義にて侍れば。もし撰  
集などもありて。いまやうすがたの歌どもを  
えらびをかれなば。行末には皆かの義にした  
がはん事うたがひなき事にて侍り。いにしへ  
の明德は禪定といへども。雪をつみ霜をかさ  
ねて座禪のゆかをしりぞかず。專修すとはい  
へども。世をそむき身をすてゝ唱念のまこと

をいたし侍けれども。いまの愚學のともがら速疾の文をひき權化の證をいひつゝ。凡身を權化にひとしくし。愚鈍を智徳になすらへて。行學をやすくして人をも懈怠ならしめ。みづからも懈怠ならしむ。あまさへ禪宗は教外別傳と號して諸教をないがしろにおもへるによりて。この宗さかりに流布してより後。宋朝には八宗皆うせて侍るとかや。たとひ諸教にすぐれたりといふとも。たかきはひきゝをもとひとし。實教は權教よりさとり義をおもふべきにて侍るを。末學のあやまりによりて。諸教のあだとなれり。別傳の義をいはず密宗にすぐべからず。いかにとならば。釋尊自受法樂のため一切經の外にこれをとき給ひて在世のあひだついにかくして南天の鐵塔にこめをき給しゆへに秘密となづく。しかあれば金剛頂經の疏にいはく。三密法要は諸經になき

所。五智奧源はたゞこの教にありといへり。また禪宗より諸宗にいふ所。その義おなじからずといへども。さとり所はたゞ是心是佛是心作佛の義をはなれず。これみな理の成佛を期するところなり。眞言は事の成佛を期するが故に卽身成佛といふ。則釋尊成道の時。一指をあげて魔を降し。龍女成佛の時。甚深の陀羅尼を得し。みなこれ事の成佛なるべし。しかあれば現身にあらはれて成佛すべき別傳は眞言にすぐべからず。たゞいふといはざると。しるとしらざるとなり。たゞし別傳の義に思て。佛神をうやまひたてまつる心ざしふからず。それいやしき民も最初の本種姓を尋ねれば君臣の末なりといへども。そのふるまひひとしからざるが如く。本源清淨の佛性はおなじけれど。まどひの凡夫となれるによりて。猶人身たるうへは。いかでか佛におなじき事

をえんや。はそのあやまりの二也。次文字にかゝはらずとて。釋尊の敎文をば信せずして祖師の語録をば信ず。いかにゆゝしき祖師といふとも。佛の御ことばだにをよばぬ法をば。いかでか頌文にあらはすべきや。言語不可得の義はことに眞言に談する所也。大日如來不可得の因果を攝して遮那の果徳をあらはし。しかあれば言語をはなれずして言語をはなるといへども。いまの愚學の禪宗は言語にかゝはらずといふことばにかゝはりて。やがて言語を絶するがゆへに。かへりて言語をはなれず。これそのあやまりの三也。次他宗を破する時は敎文をもちゐず。自宗をたつる時は心外無別法ともいひ。唯有一乘法ともいひて經文をひく所。すでに事と心とたがへり。これそのあやまりの四也。次心すなはち佛なりと

いへども。心みづからしらす。心みづからみず。もし心想おければ無智となる。しらん事をおもひていたづらに座禪のゆかにねぶりで。妄想妄念をのみおこせり。はそのあやまりの五也。次自宗の心をもさとらず。他宗の義をもきはめずして。たゞ別傳といふ名目ばかりをきゝて。諸經にすぐれたりとおもへり。はそのあやまりの六也。次禪宗のともがらはみな我身佛なりとのみおもへるゆへに。未得己證のとがをまねく。はそのあやまりの七也。次得法の人意樂の門にをもむきて酒肉五辛等を食せし事を例にひきて。いまだいたらざるともがらはをはずからず。あに鵝鴨のよく水にうかぶことをおもひて。庭鳥を水にいれんに。よくうく事をえんや。かつは釋迦迦葉しからざりしうへは。是をまなばざるべきにあらす。はそのあやまりの八也。次宋朝はしら

す。我朝の禪宗の辭世の頌をきくに。大略平生の時これをつくりてをきて。歿後につくりたるといへり。且は妄語なり。且は名聞也。出離のさまたげとなるべきにや。これそのあやまりの九也。次にさかひに入て風をとふは古賢のをしふるところ也。しかるを禪宗のともがら神國に入ながら死生をいまざるがゆへに。垂跡のちかひをうしなひて神威皆おとろへて其罰あらたならず。是につきていよ／＼はゞからざるがゆへに。鬼病つねにおこり風雨おさまらずして人民のわづらひをなす。是そのあやまりの十也。すべて經論の文をひきて宗の大意を申さばたゞ一二夜に申つくすべきにても侍らねば。まづおほかたのいはれにつきて十ヶのあやまりを申侍り。もし禪宗の人これをつたへきく事あらば。ことばの會釋はさまざまなりといへども。心のをもむきはこの

難をはなるべからず。是もいまの歌のごとくたゞ心をさきとする義を思ひて。その難をかへり見ざる故也。宇佐宮御詔宣云。穗浪宮にとゞまらんと思。佛法を勤修して天下國土をいのらんがため也。末世にをよびて佛法の威をとろへたり。爰に禪宗さかりにして諸國に流布する所邪法にあひあたれるにや。すべて邪正は法によらず心によるがゆへに。禪宗も正法なりといへども。あやまれる心あるによりて。邪法となれるなるべし。是もいまの歌の義のごとく。たゞ我心に任てさとらんとするほどにをろかなる心にひかれてまよひ侍り。たとひまよひなしといふとも。神明の護持し給ふ所は顯密の法也。我國にをきては是をまなぶべし。天照太神と申は遍照如來秘密の神力をもて王法を守國土をおさめんがために伊勢にてあとをたれたまへり。内宮はこれ胎



藏界。外宮は是金剛界。兩部の大日也。五瓶の水をたゞゆるがゆへに五鈴河といふ。五智如來に五瓶五鈴ある事を表す。河のなかに鏡有。五智のなかの大圓鏡智のかぐみなり。凡日吉春日の天台法相をまもり給ふよりはじめて。諸社靈神護持し給ふ所は皆八宗也。就中眞言天台は。大乘無上の法にて。佛徳をあらはし。神威をます事餘宗にすぐれたり。住吉の御詫宣に云。昔新羅をせめし時は我大將軍として日吉副將軍たり。將門をうちし時は日吉大將軍としてわれ副將軍たり。是天台の法施によりて威光倍增のゆへなりといへり。又北野天滿大自在を得給て威勢をほどこし給ひし時。尊意僧正をかたらひ仰られしも。秘密の神力にはをよぶ事なきゆへなり。この教は諸佛のいたゞきにをきつゝうへなきによりて金剛頂經となづけられたる事。天滿大自在の

猶おそれ給ひけるにておもひしられ侍り。すべて三世の諸佛の正覺をなし給し事も。一切衆生の成佛すべき事も。皆眞言の功力なるべし。いはゆる第六天の魔王成道をさまたげし時も。釋尊一指をあげて魔を降し。龍女成佛せし時も。隨羅尼をえつゝ甚深の秘藏をさとりて後正覺を成き。又仁王經に五千女人現前成佛とときたるも秘密の成佛也。天台の一生入妙覺。花嚴の三生成佛。禪宗の見性成佛。みな理によりて速疾の義をたつれども。密宗の事の成佛にくらぶれば。天地懸隔也。かるがゆへに理の成佛の義をば。十住心論には徒に年劫をつみて心身を費といへり。たとへば理の成佛は。たかき山にのぼりてはるかに見わたす所はへだてなしといへども。其見ゆる所へげにゆくにはをそきがごとし。然るに釋尊龍女などのやうに現身に成佛せず。事の成佛

はたとへば一間のうちにへだてたる障子をあくればやがてひとつ所になるがごとし。しかあれば速疾成佛の要道は密宗にすぎずといへども。眞言は人のいのり計をして得脱の義なきやうにのみ人みなおもへり。すなはち行ずる人と又身をたて験をほどこさん事をおもふゆへに。この宗の人やゝもすれば慢心にひかれて天狗道にをもむく。然て佛道ちかきがゆへに。慢心の業をつくのひぬれば。成佛する事程なく侍り。餘宗はみづから佛にならんとのみ觀行する程に。やがて自調自度の二乗心になりて佛意にをもむきがたし。眞言は衆生の願をみてんと行するゆへに利他の力にて行法の時三摩地に入ぬれば成佛する義有。成佛するゆへに他の願を成す。かつは東寺天台大師先徳の驗あらたなりしにてしるべし。佛にならずしては。いかでか他をすくふべき

や。名聞をおもはずしては。眞言に過たる速疾成佛の法あるべからず。また宇佐御詫宣云。昔我天下國土を鎮護せしはじめ。戒定惠の宮をか松原にうづみをけり。かるがゆへに其地を箱崎と號す。はやく穗浪宮をすて、箱崎にうつすべし。我まさに戒定惠のちからを靈鏡として朝野の人をてらし。神劍としては隣國のかたきをはらはんといへり。此戒定惠の箱は顯密律義の箱なるべし。戒は律。定は顯。慧は密也。さきの御詫宣のごとく。末法にをよびて佛法の威をとろふるがゆへに。世のおさまらん事をねがふ時は。神のをしへにしたがふ義をもて。異國の難もおこらば。この御詫宣のむねをあふぎて佛法の威をまさんがため。神明の方便にて異敵の難をおこし給て。神劍をふるひまし／＼けるにや。然てそのさたなき事をおどろかしたまはんがために。又關

東大地震動して神堂はたふれやけたりしに。

律院はつゝがなかりけるこそふしぎにおぼえはべれ。禪宗の諸國に流布する事は關東に建長寺をたてられしゆへ也。是まことに神慮にかなはざりけるやらん。建長。正嘉。正元うちつゞき人のやみうせ飢饉せし事おびたゞしかりし事ぞかし。是をもまたおもひとがむる人なかりしかば。文永に彗星いで。また箱崎宮やけしにも御詫宣のむねをさとする人なかりしほどに。異國の難きたり侍りき。それよりしていまにいたるまで。國のさはぎとなれり。また後鳥羽院の御時建仁寺いできてのち王法をとろへ。かの寺禪院の洛陽に立しはじめ也。聖德太子の御記文に。建の字の年號の時。世中あらたまるべき由見えて侍り。かの御時建の字の年號のみおほかりしにあはせて。まづ王法をとろへにき。すでに都鄙建の字の年號の時

禪院みなたちはじめて後より佛法するゑになれり。おそるべきはこの建の字。つゝしむべきはまた禪の法也。たゞしいづれも佛法なれば。そのとがあるべからずといへども。かの宗のをむきは。自然智嚴の義をたてつゝあふぎをあげ。木をうごかして得法をしるやうになるによりて人みなまよへり。まことに上根上智。もしは廣學多聞の人より外は。その心をさとするべからず。しかあるに學もなく智もなき下根のともがら。をろかなる心を師として是をつたへならはんに豈邪見にいらざらんや。且達磨和尚のすゝめによりてかの法をひろめんがために聖德太子この國に誕生し給ひたりけれども。神明此法を愛し給はず。又小國にして機根叶ふべからざりけるゆへに。是をひろめられず。かへりて佛法うせぬべき事をおぼしめされてひろめさせ給はざりけれ

ば。達磨和尚かたをか山に化現してその心ざしを見せたてまつりける時。太子これをひろめがたきよし仰られける御歌。

しなてるや片岡山にいに飢てふせる旅人哀れ親なしかたをか山にいにうへてとは。小國邊土の機根よはき事たゞうへたるものゝちからなきにことならぬ義也。ふせるたび人あはれおやなしとは。おやなき子のそだちがたきがごとくうけとるべき人もなく護持すべき神もなければ。ひろめがたき義也。この御歌によりて和尚化現ありけれども。ちからなくてや返歌にいはく。

斑鳩やとみの小川のたえはこそ我大君の御名は忘れめとみのを川のたえはこそとは。たえたる機根のあるにひろめられずばこそ君をうらみめといふ心なるべし。是を思に。權化なををしへがたくしてひろめられず。凡夫いかでかをしへつたふべきや。又上代の機根なをしかり。い

はんや末世の我等をや。すべていたりてかしこきといたりてをろかなるとは。ものにいたく不審をなさるゝがゆへに。いまこの宗の心得がたきをも心得やすくおもひ。さとりがたきをもさとりやすく思へり。いたりてをろかなる所也。然則末世の下根になりてこの宗さかりに流布せるなるべし。又専修のあやまりをきくに。まづ難行は専修にもかぎらず。諸家にもきらふ所也。その心はひろく學せんとて。一法をもきはめずして一生むなくはせ過は。その益をろかなるべきによりて也。専修の心これにおなじ。然て難行のものはかの國にむまれがたしといふ義につきて。諸教をばいたづら事にのみおもひいへるがゆへに。謗法のとがをも諸宗のあだをなす。且は讀誦大乘の行よりはじめて諸行の果位を九品にわかたるゝうへは。なんぞ餘行のものはむまれ



すとおもふべきや。これそのあやまりの一也。念佛の行は正法の機にかなはざる衆生のためと説て侍るを正法にすぐれたるおもひをなすがゆへに。十念成就する事なし。第十八の願文のをはり。乃至五逆誹謗正法の句にてしるべしといへども。乃至十念の句をば信じて。誹謗正法をばかへりみず。これ其あやまりの二也。次正道專修のおなじからざる義は。この生にて正道は證をえんとおもひ。淨土にて專修はさとりんとおもふ。しかるにこのごろもはら即得往生とかやの義をたてゝ。即身に成佛すといへり。すでに宗の大意をやぶりとて。正道門に在るにあらずや。そのあやまりの三也。次因果をわきまへざる十德五逆の罪人。善知識の教化をきゝておどろきつゝ。ひごろの罪を懺悔すれば往生する義につきて。惡をつくるともくるしかるべからずとて。罪をお

それつゝしまざる事。たゞあみだ佛のつみをつくれとすゝめさせ給ふにいたり。七佛みな諸善奉行諸惡莫作とき給へるうへは。いかでか此義を存すべきや。十惡の往生は日比つみともしらすつくりつるゆへにこそゆるさるゝ事にて侍るに。知ながらつみををかさん事。そのことはり有べからず。善導和尚の遺言にいはく。十惡五逆の衆生もむまるといふなれば。懺悔して今なり(上略)後はつくらじとおもへといへり。念佛の五祖の中には三昧發得して生身のあみだ佛に對したてまつりて三部經の釋をつくりたまひたりけるとて。善導の説をさきとしながらかの遺言をそむきけり。そのあやまりの四也。次正道門は難行なれば生がたく。淨土門は易行なれば生じやすしとおもへり。易行にたつる所ぞたゞおろかなる衆生。やすき義につきて。此教に歸する方便な

り。まことに行ずる時は。さらに易行にあらす。善導は三十年ねぶらずして。毎日に念佛十万遍。あみだ經十卷讀誦すといへり。正道の難行もこれにをよぶべからず。又道綽四修をたて。長時修無間修といひつ。唱念間斷なかりけり。然に易行と號してねんごろに行せず。あまさへ正法にすぐれたりといふ。これそのあやまりの五也。次惡をきはざる事。正道門には煩惱即菩提生死即涅槃ともいひ。

又惡性は善生の法也故に斷すべからずといふ。又父母所生の穢惡の身たちまちに即身成佛し。五道の違多記別にあづかる所。みな惡をゆるせりといへども。正道は行學あるによりて。その心をさとりつゝ惡をゆるさず。こゝに愚學の專修四重五逆。諸衆生一聞名號必引攝などいふ文につきて。やがて惡をきはざる事は。專修の德正道にすぐれたりとす。こ

れそのあやまりの六也。次稱名の功能の事。法華に一稱南無佛皆已成佛道といふよりはじめて。諸佛菩薩の名號多羅尼。いづれもみな一反三反乃至七反の證據有。しかあるに一念十聲の誓願は。たゞみだにかざれりとのみ心得り。是そのあやまりの七也。次彌陀如來九品建立して衆生引攝したまふ事は。極樂にをきて是を教化しつ。一實妙道をさとらしめんがためなり。いまの專修ども此心をしらすして。念佛のひまにあそびたはぶれをすとも。法華經よむべからずなどいふ事愚癡の至極なり。惠心先德は念佛往生の衆生十三大劫をへて。蓮花の中より出生といふ事妙法蓮花經の結縁なき往生の義也。かの經に値遇したてまつりなば。速疾に妙蓮花より出生して須臾のあいだに開悟すべしとて。廿五人の智德をえらびて。廿五三昧をはじめをこなはれし次第。ひるは法花を講じ夜は念佛を行じき。これよりかの法衆をのゝみな順次の往生をとげられえいざんのみねに紫雲つねにたな引。蓮臺

野の定覺上人これをうらやみて。又をこなひ侍りけるに。蓮花化生したりければ。結界して此所にて墓をしめん人をばかならず引攝せんと發願をしたりけるより。蓮臺野となづけて一切の人の墓所となれり。然るにこのごろの專修の廿五三昧には。觀經をよみて法華經をよまざるあり。本願の意樂にたがひ。眞實の利益をうしなふ。是そのあやまりの八也。

次念佛の行者戒をたもつべからずといふ事おほきなる僻案也。先九品のうち中品は持戒のもの生じ侍り。したがひて觀經には孝養父母。具足衆戒。發菩提心等の三種の業は。三世諸佛の淨業の正因と見えたり。彌陀如來豈三世諸佛のうちにあらずや。すでに末世の一切衆生のためこれをときたまへりといへるうへは。さらに異義あるべからず。しかれば善導等の師祖をのく持戒して念佛を行じき。彼遺言のむねも戒をたもちて念佛を行ずるは小石を大船に入て順風にゆくがごとし。戒をたもたずして念佛を行ずるは大石を小船に入て惡

風にはしるがごとしとこそ侍るめれ。近代念佛者指南とする所の選擇集にも一佛の制し給ふ所をば一切佛同制して前佛の殺生十惡等のつみを制斷したまふがごとしといへり。此うへは釋迦のをしへ給ふ所の戒をみだをしへ給はずと思ふべからず。是誤の九なり。專修も禪宗のごとく生死をいまざるがゆへにみな神國の風をうしなふ。神明のこれをいみたまふ事たゞ世間の義にあらず。この時生死をいみてながく衆生輪廻の業をもとめんがため也。しかれば我身はたとひこれによるべからざる義をさるといふとも。化度衆生のため。心ざしを神明におなじくして是をいみ侍らば。いよく生死をはなれん事そのさはりあるべからずといへども。一向專修と號して神慮をはぐからず濟度を思はず。是そのあやまりの十也。此十ヶの外もそのあやまりのみありといへども。事おほければ略し侍ぬ。凡禪念兩宗はまことに末世流布の法なるゆへに。をろかなる學者のみ有。偏執の思をふかくし

て。邪見のそしりをさきとし。諸教にすぐれたりといへり。是につきて人皆かの兩宗にをもむく所なり。すべて人の心は法を信するも善をつくるも。たゞ名聞をおもひ憍慢をおこすによりて。法の正邪をばしらねども。諸教にすぐれたりといふにはしたがひ。佛の誓願はおなじけれども。諸人のあつまる堂へはあゆみをはこぶがごとし。いまの歌も其心をばわきまへず。黨をむすぶ人々もおほくなれりと申侍しほどに。鶏籠の山すでにあけなんとせしかば。かの僧いそぎ下向し侍るとてよめりし詞。

舟よする入江に騒く亂れ芦のきはりかちなる法の道哉  
哀とは誰か見るへきうたかたの消行跡をかきとむ共

これを記さん事。かたゞはゞかりありぬべきによりて。思ひわづらひて侍し夜。住吉の堂の別當がもとに隆願といふ僧御とのゐのためまいりたるよしを申と夢に見侍しかば。住吉の明神の御心になひたるにやと思侍て。永仁三のとしなが月のころしるしをき侍

り。もし夢に見ざるを見たりと申侍らば。大明神あらたにみたまひて。その御とがめあるべきものなり。是を野守鏡となづくる事ははし鷹のそれたる事共おもはず。よそにみてるす義。又守のごとくいやしき身にこれをかぐみたる心。またはいにしへの野中のしみづをかぐみとして。もとの心をあらはす義なるべし。

見ぬ夢をみたりといは、住吉の岸による波松の末こせ

野守鏡 依<sub>レ</sub>仰書<sub>ニ</sub>寫<sub>ス</sub>之。姉小路三位基綱卿本云。右一冊上下。以<sub>ニ</sub>作者有房公。眞筆正本<sub>ニ</sub>令<sub>ニ</sub>臨寫<sub>ス</sub>終不<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>比校<sub>ス</sub>落字等之失錯滿數。審證本之書寫。却有<sub>レ</sub>恨者也云々。仍處々多<sub>ニ</sub>不審<sub>ス</sub>。雖<sub>レ</sub>然先書<sub>ニ</sub>寫<sub>ス</sub>之。後日猶以<sub>ニ</sub>證本<sub>ニ</sub>可有<sub>ニ</sub>校合<sub>ス</sub>者也。

于時文明十一年九月六日

按察使藤原親長

右野守鏡以村井敬義本書寫以流布印本校合了



群書類從卷第四百八十五

雜部四十

吉野拾遺上

先帝の御時世の中うつりかはりもてきて。吉野のかりみやにわたらせ玉ひ。うかりし年もことのさはぎの内に暮はてゝ。春たつといふばかりなる御節會のさまもいとかなし。ささらぎのなかば過ゆくほどに。御庭のさくらのやうく咲出たるを御覽じさせたまひて。勾當の内侍に仰られける御うた。

爰にても雲の櫻咲にけり唯かりそめの宿とおもへとおなじみかどとよのあかりの節會をさせ玉へるに。あまりにかたばかりなるありさまをおぼしなげかせ玉ひけるに。袖ふる山のまぢ

かくみえわたりければ。

袖かへす天津乙女もおもひ出よ吉野の宮の昔かたりをとうちながめさせ。月更るまでおはしましけるに。御夢ともなく袖ふる山のうへよりしら雲のたなびきて。南殿の御庭の冬がれし櫻の梢にとどまりけるに。それかとばかりおぼしやらせたまへるに。おとめの姿のうちしほれたるが。

返しなは雨とやふらむ哀しる天つ乙女の袖のけしきもとなく詠じて。雲にかくれるを御覽じをくらせ玉へて。御心ぼそげにわたらせ給ひし御ありさまのわすれがたくこそ。

おなじみかど花山院をひそかに出御ならせた

まひて。やまとのかたへおもむかせたまひけるに。いとくらき夜なりければ御ともにさぶらひける人々もいかにせむとわびあへるをきかせたまひて。こゝはいづくのほどにやとたづねさせ玉ひければ。忠房の侍従。いなるの御やしろのまへにこそとそうし給へば。御歌。

むは玉のくらき闇路に迷ふ也我にかきなんみつゝの燈火  
とてふしおがませたまひければ。みやしろのうへよりいとあかき雲一村むらだち出てり  
ん幸の道を照しをくりて。やまとのうちやまにいらせ玉へば雲はかねのみだけのうへにて消うせにけり。まさしく御供に侍らひてみしことにこそ。

おなじみかどよし野へうつらせ玉ひけるまたの年の春。む月のすゑつかた。よし水の法印にたまはせける御歌。

み吉野の山の山守こととはん今幾日ありて花は咲なむ御返し。

花咲ん比はいつも白雲のゐるをしるへにみ吉野の山  
おなじ御時。山の櫻をながめさせ玉ひて勾當  
内侍に折ふしのうつりかはるにこそ。昔のうたに。

押なへてこのめも春とみえしより花に成行み吉野の山  
とよみつる時は此山をまだ見ざりし。今はたこゝに住なれて。その折ふしのこひしくおもひ出らるゝはいかにとの給すれば。ともにうちなきたまひて。

いにしへを忍ぶ涙はみよし野の吉野の山の花のしら露  
とけいし玉へば。いといたうあはれがらせたまひけり。まことにかぎりなき涙のいとしるく覺え侍る。おりふし雁のとをりければ。おなじ内侍に。心なくかりこそかへれとの玉はせたまひければ。

鷹金に我身をなさはみ吉野の花も見捨て歸らざらまし

同じ内侍に故郷のいもうと君のかたより山の  
うちの御住ゐこそおもひやられていとかなし  
うこそとありける御ふみの返事に。

春は花秋は紅葉をみ吉野の山のかひある住ゐとをしれ

先帝の御時。さみだれのいとひさしうふりつ  
づき侍りける比。かんだちめあまた御まへに  
さぶらひ玉ひて御あそびのおはしましける  
に。實世卿の川音たかき五月雨に岩もと見せ  
ぬ瀧のけしきこそこよなうとけいじさせたま  
ひければ。さもこそあらめ。空さへはれなばと  
のたまはせて。そのあけの日。とりあへずみゆ  
きありけるに。くはんをん堂のほとりまでわ  
たらせ玉ひけるに。空のけしきいとおどろお  
どろしくなりて。またかきくもりてしのをつ  
くがごとふり出ければ。御堂にしばらく立や  
すらはせたまひて。

こゝは猶丹生のやしるに程近し祈らは晴よ五月雨の空

と詠じさせ玉ひければ。ときにとりてはれけ  
るのみかは。日かげうらゝかになりて。それ  
よりふらざりけり。帝徳のいみじうわたらせ  
たまへるを人々もたのもしくおもひあひける  
に。おなじ八月のはじめ比よりあきざりにを  
かされさせ給ひけるが。かねて時をもしろし  
めしけるにや。同十五日の夜。親王を左大臣  
經忠公の亭にうつしたてまつらせ玉ひ。みく  
さの御たからをゆづりおはしまし。御行末の  
こといとこまやかにおほせをかれて。御劔と  
法花經とを左右の御手にものし玉ひ。いざよ  
ひの月とともに雲がくれさせ給ひけるに。つ  
きしたがひたてまつりし人々は。たゞやみ路  
にまよふ心ちなんしたまひける。御すがたを  
あらためたてまつりて。如意輪寺の御堂のう  
しろのかたにおさめたてまつり。御をくりし  
て人々はかへり玉ひけれども。さらに人心ち

もなかりければ。御廟の前になきあかして。しのめ過るほどにまちてかしらおろし。かしこき御影のあたりちかく草の庵をむすびて。なき御跡までつかうまつりけるに。そのなが月の十日あまりの月いとさやかにみゆるに。むかしの御事など思ひ出して。

今ははやわすれはつへき古を思ひ出よとすめる月哉

といひてすこしまどろみけるに。御廟のまへに百官袖をつらねてなみゐたまへるをおぼつかなくおもひて。資朝卿のよろづはからはせ玉ひておはします御袖をひかへてとひたてまつるに。こゝにては舊都に程とをうして。御ほゐをとげさせたまはむ御はかりごととなりがたければ。龜山の仙洞に行幸ならせ玉へるにこそあれとのたまひもあへぬに。御戸びらのひらき給つるに。みたてまつれば。そのきはの御姿にて玉の御こしにめされければ。伶

人樂をそうし。百官供奉したてまつりけると見て。うちおどろきけるに。松吹風に音樂のなをきこゆるものから。いつゝの色の雲御廟より出て北のかたへながうたなびきてみゆるに。さらに涙もとどまらで。御影も今はこゝにおはしまさぬにやといとかなしくて過し侍る程に。おなじき夜に舊都にいますむそう和尚の夢に。君龜山の舊跡に行幸ならせたまひて。群臣と共に宴せさせたまへると見給ふて。武家に心をあはせて御寺をいとなみ玉へると後につたへ聞けるに。今さらのやうに思ひ出られて。みな袖をしぼり侍りし。

先帝の御時。弁の内侍といひけるは右少辨俊基朝臣の御娘なりけり。御ちゝにをくれさせ玉ふものから。母君さへ世をいとはせたまひければ。三位行氏卿のもとにおはしましけるを。先帝御位をかへさせ玉ひしより御宮づか



へし給ひけり。又世中みだれて皇居も所さだ  
まらざりけれども。はなれたまはでよし野ま  
でまいりたまひけり。ある夜。御前に中納言隆  
資卿。洞院の實世卿。宗房卿。其外あまたさぶ  
らひ給ひけるに。みき玉はせんと此内侍の御  
かはらけもて出玉ひけるに。いかゞしたまひ  
けんとりおとしたまふてふたつばかりにわれ  
ければ。御けしきのいとあしげにみえさせけ  
れば。とりあへず。

さかつきもわ<sup>のイ</sup>れてそ出る雲のうへ

とのたまひければ。御こゝろよげに。誰かつぎ  
玉へかしと秀句にとりなさせ玉ひければ。宗  
房卿。

ほしのくらゐのひかりそへはや

といひ玉へるに。けうせさせたまひて。夜も  
あけなんとするまで御酒まいりけるに。山が  
らすのこゑのきこえければ。隆資卿。

くわん幸と鳴や吉野の山鳥かしらもしろし面白のよや  
とのたまひければ。いといたう御心よげにわ  
たらせ給ひけり。

弁の内侍御かたちのいとめでたくさぶらひし  
をむさしのかみ高階のもろ直がいかなりけん  
折にかみそめけむ。こゝろにかけておもひけ  
るに。みかどかくれさせ給ひて後。ひそかに  
御ふみたてまつりて。しのび出させ玉へ御む  
かへをまいらせてんとたび／＼いひこしけれ  
ど。御返しもしたまはざりければ。ねたくおも  
ひて。行氏卿へかよひける女のありけるをも  
とめ出で。北のかたへかゝることなん侍る。と  
もにはからはせたまひてほゑとげなんには。  
しらせ玉はむところをも餘多つけはべりな  
む。三位どのゝ官位をもすゝめてなどいひを  
こすれば。さらぬだに世の中の人のをそれぬ  
はなきにいとたのもしくきこえければ。御ふ

みをとゝのへ玉ふて。内侍の君にもてつかうとイまつりし梅がえといひし女をそへてともにはからはせたまへかしときこえけるに。いとよるこびていのちをかけてちぎりけるさぶらひ二十人がほどえらびて。梅がえにそへてよし野へつかはしける。内侍の君に梅がえが北の御かたのふみをもちてこそといひ入けるに。御こひしう思ひて過しつるに。こなたへとめされて御ふみたてまつるに。はるかにこそわたらせ玉へ。やまざとの御住みさこそとおもひやらるゝごとに。袖をこそしぼりあへたまはね。御こひしさのいとせめて。すみよしへまうで侍りし程に。道のたよりもしかるべければ。あひたてまつらんことをおもひて。かうちのくにとかや。たかやすの邊にしりたる人のさぶらふにまいりてこそ待たてまつれ。はかなき世中のましてみだれがはしければ。

此たびならではいかであひみんなど書たまふて。

相みんと思ふ心をさきたてゝ袖にしられぬ道しはの露御つかひも御ふみのこゝろにかきくどきければ。まことの御母君にすてられまいられしよりは。それにもまさりておもひたまひし御なさけのわすられで。朝夕こひしう思ひたてまつりつれとて。君に御いとまをけいし玉ひて。とりあへず出させたまへり。女房二人。青さぶらい三人。御ともにはつかうまつりけるに。みちに人出あひて。たかやすにまたせたまひけれども。人おほくてむづかしければ。佳吉までまかるにこそ。もし御出もさぶらはゞ。あれまでぐしたてまつれとおほせおかれ・さぶらへばとて。人多出あまたイてとりこめたてまつる。いと心えぬことにこそ。住よしまではるゝといかで行なん。御こしをかへせとのたまは

すれば。青さぶらひども御こしをかへしな  
んとしければ。たゞ住よしまでいそぎ玉へとひ  
きたつるに。いかにもかなふまじけれと引と  
むるを。さないはせそとて。三人ともにうち  
ころしてけり。君はいとおそろしく。鬼にとら  
れ玉へる心ちしたまひて。たゞなきになかせ  
給へり。ものゝあはれをもわきまへぬものゝ  
ふども。なさけなう。こよひすみよしまでいそ  
ぎなん。殿もそれまでいむかひおはさんな  
どいひのゝしりて。石川といふ所までいでゆ  
きけり。たてわき正つらがよしの殿へめされ  
てまいるに行あふて。そのほど過しなるとか  
たはしなる木陰にたちしのぶを。こゝろもと  
なくおもひて。立とまりて事のさまをとひけ  
るに。つばねがたの住吉にまふでさせたまひ  
けるといふに。さてはとて過なんとするに。内  
侍のなき玉へるこゑをきゝてをして御こしの

ほとりへ立よりてとへば。かうくゝのことに  
なんとのたまはするに。いかさまあやしけれ  
ば。そうしなんほどはみなめしとれとてのこ  
らずからめにけり。耻をおもへるものみたり  
よたりありて。ぬきあはせたゝかひけれども。  
つゐにうちころしぬ。吉野へまいりてことの  
よしをそうしたてまつれば。梅がえをすかし  
てとはせ玉へば。はかりつる事を申けるに。  
さぶらひどもはみなきられて。梅がえはあま  
になし玉ふて。かゝるありさまを北のかたへ  
よくくゝけいせよとてかへされにけり。正つ  
らがなかりせば。いとくちおしからましに。  
よくこそはからひつれとて。内侍を正つらに  
たまはせむとみことのり有ければ。かしこま  
りて。

とても世にならふへくもあらぬみのかりの契をいかで結はん  
とそうして辭しにけり。そのときはこゝろえ

がたくおぼえしが。後におもひあはされて。いとどおしみあひにけり。

新待賢門院に伊賀のつぼねといふありけり。

これは左中將義貞朝臣のさぶらひに篠塚伊賀守といへるがむすめになんありける。女院の御所は皇居のにしのかたにて山につづけるところなりけり。去ぬる正平ひのとの亥の年の春の比。ばけものあなりとて人々さはぎおそれ玉へる。かたちをしかと見さだめたるものもあらず。行あひける者は心ちくらく成にけり。内裏より御とのゐ人あまたまいらせ玉ふてひきめなどいさせければ。そのほどはしづまりにけり。みな月十日あまりの程にいとあつき比なりければ。此つぼね庭に出てたちたまへるに。月のさしいでいとあかゝりければ。

すゝしさを松吹風に忘れて袂にやとす夜半の月かけ

とたれきく人もあらじとひとりごち玉へるに。松の梢のかたよりからびたるこゑして。ただよくこゝろしづかなれば。すなはち身もすずしといふふるき詩の下句をいふに。みあげ玉へば。さながらおにのかたちにてつばさのおひ出けるが。眼は月よりもひかりわたるに。たけきものゝふのこゝろもきえうせぬべきに打わらひたまふて。まことにさにこそありけれ。さもあらばあれ。いかなるものにかあるらん。あやしくおぼゆるにこそ。名のりし玉へととはれて。我は藤原の基とをにこそ侍れ。女院の御ためにいのちをたてまつりさぶらひしにせめてはなきあととはせ玉はむことにこそあれ。それさへなくさぶらへば。いとつまふかく。かゝるかたちになりて。くるしきことのいやまされば。うらみ奉らんとおもひて。此春の比よりうしろの山にさぶらへども。お



まへにはおそれてまいらぬにこそあれ。此よしけいして玉ひなんとこたへければ。げにさは聞えよびし。されどうらみたてまつるべき事かは。世のみだれにおもひ過したまへるぞかし。そのことばかりならばけいしてとぶらひてん。さるにても御法御イにはいかなることかよかるべき。心にまかせ侍らんとしたまへば。たゞそのことばかりにさぶらへ。御とぶらひには法華經にしくはあらじ。さればかへりなるといふに。かへらむところはいづくにかとの玉へれば。露ときえにし野の原にこそなき玉はうかれさぶらへとて。北をさして光りもて行をみをくりてのち。女院のおまへにまいりてけいしたまひければ。まことに思ひわすれてこそ過しつれとて。あけの日吉水法印にみことのりありて。御堂にて三七日法華經を供養し玉ひけるに。そののちあへてことなる

わさ  
こともなかりし。うかびてや有らんといたのもし。

このつばねひとゝせむさしのかみもろなをが皇居をおそひ奉る時に。ふせぐべきたよりのなかりければ。人々なを山ふかくいらせ給ひけるに。女院の御ともにはかゝしき侍もつき玉奉イはで女ばうだちばかりなりけり。よし野川のはし一けんが程ふみおとしてありけるに。せんかたなくてみなあきれてたゝせたまへるに。このつばねそのほとりの松櫻の大きなるえだどもをひき折くうちわたして。女院をおひたてまつりて。人々をもわたしはてたまひけるに。そのときのおほきさなる枝をそのべの六郎におらせて御覽ありけれどもかなはでやみにけり。いとかめしきことにぞありける。今は左馬頭正のりの妻になんなりたまひし。

先帝の御時。源中納言みちのくのいくさをあまたしたがへ玉ひ。道々をたいらげてみゆくにまでおはしけるよしさきだちてきこえければ。うへよりはじめてたのもしきことにおぼしたまひけるに。あべのゝ露ときえさせ玉ひけると刑部丞ともなりがそのきはのありさまをまいりてなく／＼かたるに。ともし火のきえぬるやうになん人々の御心はなりにけり。御父の卿はいか計おぼすにか。

さきたてし心もよしや中々に浮世の事を思ひわすれて北の御かたはたゞふししづませ玉ふて。さらに御こゝちもなかりけるを。さはぎておもてに水などそゝぎしける程に。またの日の夕ぐれのほどにすこし御心ちのいできさせたまひて。

玉のをのたえも果なてくり返し同じ憂世に結ほゝる覽なをおなじ道にとおぼしたち給へる御けしき

のいちじるく侍りければ。立さり玉はで人々のまもりければ。御こゝろにもまかせたまはで。くはんしむ寺といへる山寺にて御ぐしおろしてすませたまへるに。

そむきても猶忘られぬ面影はうき世の外の物にや有覽こゝにみとせが程過し玉ふて。世のさはぎもしば／＼<sup>〔體〕</sup>しづまりければ。さすがふるさとのかたやおもひ出されたまひけん。よし野山をたどりいでさせたまふとて。

いつくにか心をとめんみ吉野の吉野の山を出てゆくみは親房卿の御もとにしば／＼<sup>〔體〕</sup>おはしてあかつきがたにたち出させたまひけるに。御なごりのつきさせたまふまじき御ことにて有ければ。かへりみさせ玉へるに。ありあけの月のいとさやかに山のはちかくみえければ。

別るれとあひも思はぬみ吉野の峯にさやけき有明の月あべ野を過させ玉ひけるに。こゝなんその人

の消させたまへる所とつげければ。草のうへにたふれふさせたまふて。

なき人のかたみのへの艸枕夢もむかしの袖のしら露

このほとりに刑部丞ともなりが世をそむきてありけるをたづねさせたまひけるに。いそぎまいりて御ありさまをみたてまつるに。さしもゆかしくわたらせ玉ひける御よそほいのいっしかかはりおとろへさせたまひけるにやとなみだもとどめあへで。<sup>ザイ</sup>住吉天王寺のほとりまで御をくりにまいりて。所々のあないしけるに天王寺のかめ井の水のほとりの松の木をけづらして。

後の世の契のために残しけりむすふかめるの水藻の跡

とかきつけたまへり。それよりともなり入道はかへりにけりとひとせしたづね來りてかたりけるに。いとあはれにおもひたてまつりて。そののち天王寺へまいりけるに。御筆のあと

の消もはてずしてのこりけるを見まいらせて。そぞろに袖をしぼりにけるにこそ。そのち舊都にのぼらせたまひて。母君もともに世をそむきおはしけるが。さきだち玉ひて。又の年の春うせさせたまひけるときこえし。日野中納言資朝卿の御むすめなりし。

おなじころ大納言實世卿の御もとへわらはの御ふみもてきたりけるをみたまはせければ。

君かすむ宿のあたりをきてみれば昔にぬらす墨染の袖

御手もさながらむかしにかはらぬをあはれとおどろかせたまひて御つかひのわらはをめしよせてとはせ給へれば。今朝にしなる野に出て草をかりはべるに。やせをとろへたるす行者のこのふみとゞけ・よとおほせさぶらひしといふに。いそぎ皇居へまいりたまふて。やまときのくにかはちせきくにみことのりしてす行者をとどめけれども。それともおぼし

きもあらざりけらし。中納言藤房入道の御手にて有けり。刑部卿義助朝臣の越前越前よりいましてものがたりに。越前のくにたかの巢の山はたかくそばだちて。城柳にしかるべきところなりければ。畑六郎左衛門時能義イといふものにまぼらせけるに。あないをしらんがためになをおくふかくわけ入にけるに。谷河のいきよくながれるを。そのみなかみをたづねにのぼりけるに。さし出たる岩をかたどりて松の葉にて葺たる庵のみえけるを。かゝるところにもすむ人のありけるにやとたちよりて見侍れば。木葉をあつめてむしろとし。たいらなる石の上に法華經ををきける外にはなにもみえず。しばしありけるに山路をたどりくる人をみれば。疲（病イ）をとろへたる僧のしきみを手にもてり。いかにしたまふにやと物のかくれよりみけるに。谷河の水をむすびて庵のうち

にいり・經テイのひもとときけるほどに。よみはじめ玉はぬさきにといそぎ行て。かゝる御住居こそいとたとくおぼえさぶらへ。いかなる人の世をそむかせたまひけるにやととひたてまつるに。そこにはいかにとたづねさせける程に。名のりをしつれば。いとほいなきさまして。あづまのものにこそとばかりの玉ひて經をよみたまひしほどにかへりてさぶらへ。藤房卿の御面影して侍るといひしまゝに。いとゆかしくて一條少將をともしひてまいりけるに。庵はそのまゝありて僧はみえたまはず。經のありつる石ときこえしに。

こゝも又うき世の人の問くれば空行雲にやと求めてんとかきつけ給へる筆の跡を少將のよく見しり玉ひて。そのほとりの山々をたづねさせたまひけれどもさらにみえ玉はねば。いとほいなくてとの玉ひしを人びと聞もあへたまはで。



みな涙おとしてけり。さしもいみじかりける人のきゝしがことの御住ゐはまことにありがたき御こゝろにこそ。とし月をあはせてみ侍るに。君がすむ宿といひこされしはのちの事なり。こしのかたよりつくしへとをり玉ふらん折にや。そののちはたえて御をとづれもきかざりし。この藤房の卿は大納言宣房卿の御子なりし。才智世にすぐれさせたまひて。君にも御おぼえのあさからで。中納言(多敷)までなりたまひしが。建武きのえ戌のとしの春(多敷)にはかに世をすてたまひし。

### 吉野拾遺下

藏王權現は役のうばそくのをこなひ出させ玉へるよりこのかた。れいげんあらたにわたらせけるにより。大塔。金堂玉をみがき。南のか

たには金剛りきしのたゝせたまへる二階の門。東に救世觀音の御堂。阿彌陀如來の御堂は西のかたにたゝせたまへり。中にも大ると天神のみやしろは日藏上人のめいどにて延喜のみかどのちよくをうけたまひて此ところいとなませ玉へるとかや。さしもゆゝしきのきをならべておはしましけるを。正平つちのとのうしの年む月の比にや。帶刀正行が世をみじかう思ひとりて。ちからのをとろへぬうちに君のため父のために打死してむと先帝の御廟にまうでて心をひとつにおもひさだめけるともがらの名をかきつけて。敵の陣にむかひけるが。おほくのいくさを追なびけて後つゐにうち死せし。いさほひにのりてむさしの守もろなをが四万餘のいくさをしたがへ皇居をおそひ奉りしに。ふせぐべきたよりなかりしかば。君をはじめたてまつりて。猶山ふ

かくいらせ玉ひけるに。皇居をはじめまいらせておほくのがらんを焼ほろぼしけるが。まことにあさましきわざ也けり。神といひ佛といひ二世のくるしみをいかでかのがれさぶらはんや。かくていくさどもかへりしかば。かたばかりなるかり屋をつくりて本尊をうつしたてまつるに。衆徒の中になにがしの法眼とかやいひしが。夜もすがらおまへにさぶらひて。今は佛の御力もうせさせたまひけるにや。

かくあさましき御ありさまにこそとにうわの御姿を引かへさせ玉へる御しるしもなかりつれとてさめぐとなきたまふてうちねぶりけるに。夢ともなくうつゝともなく。にうわの御尊体のあらはれさせ玉ひて。よしやたどうらみずともあらなん。佛はまよへる衆生をみちびかんがためにこそ此十にはさいど方便のことにてこそあれ。佛ももこは衆生なり。衆生

はつゐの佛なり。罪をつくりしうへにこそ。又罪をもあたへめ。さしむかひてはほいにあらず。それとしらるゝことのなどかなからんとて。

恨むなよさてやはやまむ梓弓まゆみ月ゆみ年はふれ共といひすてさせ玉ふて。あかつきの月の山のはにかくれさせたまへるが。ことなりけるにうちおどろきて。そのありつる事をくはしくしるして。そうしたてまつらるゝに。人々もおぼつかなくおぼしたまふてふかくおさめをき玉ひけるが。はたしてあけのとしより尊氏と直義との中らひあしく成て。直義御みかたにまいりて。又の年の二月の程にむさしのかみが一族みなほろびにけり。その折にさまざまふしぎのありけるよしつたへきゝしかど。見ぬ事なりければ爰にはもらし侍る。直義も君の御ちからをかりたてまつりてわたくしの

はいをとげぬれど。また心がはりして都へかへりけれども。まことの道ならねば天にそむきて。その秋のころにやあづまにて尊氏のためにころされけるとぞ聞えし。

大夫のはうぐはん赤松光範がつのかためありける時。左馬頭正儀にたび／＼はかられけるを口おしくおもひこめて過し侍りけるに。去ぬる住吉のたゝかひにうたれてうせし宇のゝ六郎といひしが子にくま王といひけるが。(まだ蛇)又おさなきとき光範にいひけるは。正のりは我ためにも親のかたきにてさぶらへばいかにもしてうち侍らん。かうちへこえて正のりにつかへ侍らんに。おさなくさぶらへば。などか心をゆるし申さぬことのなかるべき。たとへこゝろをゆるすことのはべらすとも。七とせ八とせ程もつかへさぶらはゞ。そのうちにはうちぬべきたよりのいかでなからむ。

御いとまをこそ玉はらめと涙をながせば。光範もいとあはれと思ひながら。おさなければかたきのくにへやらむもこゝろもとなし。またはいのちにかはりてうたれしものの子なれば。かたみともおもふべけれどしゐてとめ玉ひけれども。すこしおとなしく成なば。よもちかづけたまはじ。おさなくありなん時まいりてこそとしきりにのぞみければ。力をよびたまはで。つねに身をはなち玉はざりし刀をたまひて。これにて本意とげよとて。あべ野まで人あまたそへてやらせけるに。それよりは我にひとしきわらはひとりを具してあかさかの城にゆきて。そのほとりにたゞすみてありけるを。兵庫助忠元が見つけて。いかなる人にやおはすらんとたづねられて。われは大夫尉光範のさぶらひに宇野の六郎といひけるものゝ子にくま王といへるものにてさぶら

へ。父にて侍る六郎はいんじ住吉のたゝかひにうたれてさぶらふを一門にて侍る備後守が我をおひうちて領地をうばひさぶらへども。

光範とこゝろを合せさぶらへば。せむかたなく。いかなる寺へも入侍りて。僧法師にもなりちゝのあとを<sup>が</sup>とぶらひさぶらはんがためにさそらへ侍るといひけるを。あはれときゝて。まづわが<sup>が</sup>かたにともなひてさまぐゝいたはりて後に。正のりにありつる事をかたりて。

おさなくはさぶらへど心のさかゝしくてなご申すに。あはれがりたまひてめしよせ玉へり。もとよりなさけある人なりければくま王もおもひつきて。おやのあだをもわすれにけるにや。よく宮づかへにけり。十五<sup>六</sup>程になりければ。かうちのくににてすこしなる所をしらせんといひけれども。はぢある一矢をも射さむらひてこそとて辭しにけり。あくる年の春。

父の七めぐりにあたりけるにおもひつけて。こよひまさのりをうちて父のたむけにもし光範のこゝろをもやすめ奉らんと思ひたちてありけるに。そのひおまへにめして。けふは吉日にてあるなれば元服せよかしとて。和田和泉守にもとどりとあげさせて。和田小次郎正寛と名のらせ。吉野殿より玉はせけるよろひをたまひければ。なみだを袖にかけてよろこぶ。夜に入まで正のりの御前にありけるが。またふと思ひ出てうちたてまつらんなれば。こよひこそとおもひて。ひざををしなをして正のりにめをかくれば。年比のなさけふかかりしこと。けふのげんぶくのことなどおもひつづけて。いかでなさけなくうち奉らむとおもひかへして。こゝろをしづむれば。ちゝのかたきといひ。譜代の主君のあだといひ。一かたならねばとおもひさだめけれども。何心もな



くわたらせたまふありさまをみければ御いたはしくてたへかねけるにや。ひろえんに出てこゑをあげてなきさけぶを。人々も正のりもおぼつかなくおもひ玉ふて。障子をひらき見たまへるに。ふししづめるさまの。たゞにはみえずありければ。いかにやとはせ玉ひければ。ありつるころのうちをけいして。とにかくに君のため先君の爲父のためにみづから死なんより外はさぶらはずとて刀をとりなせば。ありつる人どもみな涙にくれてあらながらいかでさはあらんととりつきてはたらかせねば。力あよばでそのかたなにてもとどりをしきり。往生院にてかたちをかへ。君より給はせる名なればとて。正寛法師とぞいひける。寺のかたはらに草の庵をむすびて。もしも心のかはることのありもやせんとて。わうじやうゐんの門の外へは出すしてをこなひて

有けり。光範より玉はりける刀は。ありしありさまをくはしくかきそへてかへしけるとかや。いとあはれなりけることにこそ。

將軍の宮わかき殿上人あまたもなはせたまひてよし野川にて鶺鴒をつかはせて御らんありけるに。左衛門尉やすかたがわかゝりけることに。鶺鴒のあゆをくらふをみて。あたらことにこそ。鳥のくらふ魚をとりてまきな事にせさせたまへかし。あみ・よかるこぞイべけれといひけるに。みな人おかしがらせたまひて。なんぢあみさばきなんやとのたますに。いとさばきなんといふてあみウイをもちていづるに。きぬみなぬぎすてゝ。えぼしはありしまゝにありけるを緒をつよくしめ。船にのらむとするに。たゞをきたまへいとあやしうとせいさせ玉へども。何かはとてあみをうちいれけれども。魚ひとつもなかりければ。人々わらふに。又あ

みをいれんとせしが。ふみはずす。ごとくにし  
てつぶ／＼と水のそこにしづみけるを。され  
ば社とて人々さはぎて。水になれたるものど  
もを川のしもに入てもとめさすれども。あへ  
てみえず。暮なばかぎり火にて鶺鴒をつかはし  
てむ。螢のおもしろからしなどおもひ玉へる  
けうもつきて。せめてはなきがらをだにと岩  
根岩根をくまなくみせさせたまへどもかひな  
し。したしきがもとへ人をはしらせなどした  
まひ。一時がほどもすぎにければ。人々はか  
へり給はんといひあへたまへるに。すこし河  
上のかたにえぼしばかり水のうへに見えける  
を。あれ／＼といふがうちに。かほばかりさ  
し出してうちわらふを。いかにといはれて。  
まसानことにせさせたまはんほどのものはあ  
みにてはとめえじと思ひさぶらひて。水そこ  
をもとめ侍りしに。こゝもとにはさぶらはで

宮の瀧のあたりまでゆきてこそおもふ程にさ  
ぶらひ玉はねといひてうきあがるをみれば。  
三尺ばかりなるすゝきといふ魚と二尺餘の鯉  
とを左右のわきにはさみて。ひるこのさまし  
て岩の上につゐゐけるに。人々おどろきて。  
なきものとおもひなして。あはてさはぎつ  
るさまなどかたり玉ひて。けうに入給ひぬ。そ  
の夜鶺鴒をつかはせ螢をとりなどせさせたまひ  
て。つとめてうへのおまへにありつるすゝき  
をたてまつりてやすかたがことをけいし玉は  
せければ。けうある事にこそ。ちかきほどにみ  
ゆきありて御覽じさせたまはむとのたまはせ  
けるとかや。  
此康方が父大夫尉康藤がもとに下づかへしけ  
る女ありけり。おなじくさぶらひける藤六と  
いひけるさうしきとこゝろをかよはし侍りけ  
り。かの女いたくいたはりけることの侍りし

かば。藤六が居ける山陰の屋にこさせて有けるに。京にありける女の母の夕ぐれの程にかかることのありときゝて。いと心もとなくおもひて。とりあへずきにけりといふに。女もいとうれしげにむかしの物語などしける。此母いとかひくしくあつかふをおとこいとうれしきことにおもひて。この程のつかれにこころをこたりにしてねぶ<sup>み</sup>りけるに。此女のことゑしてさけぶにうちおどろかれて。何ゆへにやといへど。又女はいらへもせずふしめるに。夢にや有つらんとおもひて。ともし火のかげより見るに。母はまくらがみにゐてなき居けるを。こゝろえす思ひながら。又しばしねぶりけるほどに。此たびはいたくさけびて。屋のうへのかたに聞えるに。そのまゝおき出けれども。ともし火も消うせにければ。はしり出てきくに屋のうへより山のかたにさけび行

あはてゝよばはるほどに。康藤もなにごとにかとておはす。外の人もきゝつけてあまた入きて。松どもともしてたづぬるに。うしろの山に聲につきてゆけば。下なる谷にこゑすなり。此谷にゆけばかしこにきこえ。かしこにゆけばこゝにきこえ。手をわけてさけぶ聲をしるべに。をひゆけば夜のあけゆくにしたがひて。こゑもかすかになりて。ほのくゝとあけにければ。をひとゞまりにけり。わかちをひける人々の青根の峯のかたへ行しもあり。宮の瀧。むつだの淀。朝が原などまで。聲につきてゆきしぞこゝろえられね。ありつるねやにかへりてみれば。女はそのまゝふしてあり。母はみえずなりけり。そののちたよりにつけて母のことを聞侍るに。その日の夕ぐれの程に京にて身まかりけるとかや。なをこゝろえられぬことにこそ侍れ。

今上御位に居させてひし初つかた。伊豫國大館左馬介氏明のもとより世にためしなき程の逸物なりとてはい鷹一もとたてまつられしを大納言隆資卿にあづけさせ玉ひて。おりおり御覽じさせたまひけるに。まことに勝れたりけり。そのころ皇居のうへなる山のしげみより夜な／＼出て。からすの聲に似て。内裏にひゞきわたりてなくを。あやしき鳥にてあらんと武士におほせて射させ玉ひけれども。所さだめざりければ。かれもこれもかなはでやみにけり。あるときかの鷹をふもとの野べにて雉子にあはせたまひけるに。雉子にはめもかけで。山のかたへそれゆくを。さしもかしこうおぼしめす御鷹をとて。行かたにむらがり行に。しげみのうちに入るをいかにせんとてまもりぬけるほどに。鶴の大きなるくろき鳥ををひいだして。空にてくみあひ。と

もにおちけるを人々よりて・ころしてけり。怪鳥をイかたちはからすのごとくにて。右ひだりのつばさをひきのばしてみければ。七尺あまり有けり。鷹も胸のほどをくはれて。しばし・程ありて死にイけり。夜な／＼鳴つるはこの鳥にてや有けん。そののちはをとせざりけり。いづれにたゞごとにてはあらじとて。ふたつの鳥を塚にこめて。そのうへにちいさき社をたてゝ鳥塚といひて當にありける。いとあやしき事にこそありつれ。おなじ比。先帝の御廟のうしろのかたに異木のおひ出けるを誰もしらで過にし。その年三尺あまりにのびけるまゝに人見つけにけるに。いかなる木ともしらず。木の皮はさくらにひとしくて。葉はかつらのやうにて。それよりはいと大き也。またのとしの春きさらぎの比に花の咲けるをみれば。つばきのなりして



ひらけたるが。五寸ばかりもあるらむ。色は  
ちしほのくれなゐもをよびがたき程になん有  
ける。しばみちりて秋の半に實のなりけるが。  
いと大きな柿のなりしてはじめより花の色  
のごとくにあかりけり。ふるき山人あまた  
めし出されてたづねさせけれどもしれるもの  
なし。てんやくのかみもふるきふみにも見え  
侍らずと奏し奉れば。かくあやしきものはさ  
て有なんとて。まはりをきびしくかこはせて。

人をつけてまもらせ玉ひけるに。源康村の下  
づかへのわらは。よるひそかに此實をぬすみ  
とりてくらひけるに。あぢはひのかうばしき  
ことはものになぞらふべくもあらずといひけ  
るが。かしらよりあしのさきまでたゞあかく  
なりぬることたとふべくもあらず。こゝちそ  
こなひ二三日して死にけり。その木もしはす  
ばかりの雪にあひてかれにけり。いとあやし

き事にこそ有けれ。

おなじころ。兼好法師が玉津嶋にまうで給へ  
るとて。たづねおはせしに。いにしへふかくち  
ぎりけることなりければ。いとうれしくてむ  
かし今の物語しけるに。古法皇の和歌の道に  
ふかくおぼし入らせ。御なさけのあさからせ  
給はで。かしこき御影とならせたまひしかな  
しさのまゝ世にながらふべき心地もあらざり  
けらし。せめてのやるかたなさに。御後の世  
をもとおもひ玉ふるまゝに。かゝる姿となり  
侍れども。露のいのちのきえがたくて。かゝ  
らん世をまのあたりに見ることもと袖をしぼ  
られけるに。我も先帝の御情のわすれがた  
くて。御跡をもしたはまほしくおもひ玉ふれ  
ども。さすがに思ひかへし侍りて。柴のとぼ  
そには侍れどもこゝろはうき雲の風にたゞよ  
ふらむさまして。はかなき夢路にはふるさと

の空にもかよひ思ひとつむれば。西の御そらにもあてがれ。春のあしたにはよし野の花の梢にやどり。秋のゆふべのあはれを思ひつゞけては。さやけき月の影をもくもらせ。もろくもおつる木の葉をみては。はかなき世をおもひめぐらす袖の時雨となりて。そめにし墨の色もむなしく。旅行人をおもひ送りては。まだみぬ嶺をもこゆるにこそ。いかなる縁にもふれ侍りて。人めたえなん深き岩ほのほらにもおさまらでとこそ歎きて過し侍りぬといへば。まことにさにはさぶらへども。我一とせ木曾の御さかのあたりにさそらひ侍りし時。山のたゝずまぬ。河のきよきながれにこゝろとまり侍りしかば。こゝにぞおもひとゞまりぬべき所にこそ侍れとて。

思立つ木曾の浅きぬ浅くのみ染てやむへき袖の色かはと詠じて庵をひきむすびてしばしさぶらひし

に。くにかみの鷹狩に人あまたぐし玉ふて山ふかき庵のほとりまでいましてかりしたまふさまの浅ましくたへがたかりければ。

こゝも又浮世也けりよそなから思ひし儘の山里もかなとながめすてゝ出侍りし。それよりいづかたにこゝろをとむべくもあらずとおもひとりて。ふるさとにたちかへりて侍れば。世中のみだれける程に。たゞ和歌をとまなひととして。こゝろをすまし侍らむよりほかはあらじとおもひ侍るにこそとのたまはせしに。まことに世をそむく心はひとしくこそありけれとそゞろに袖をしぼり侍りし。

なが月の比よし野を出てならの都のゆかしく侍りて。爰かしこみありき侍るに。大安寺といへる所に公行朝臣の世をいとひいますなるをおもひ出てたづね侍しに。ひまあらはなる柴の戸のしばしがほども住べくもあらぬ。い

たるの水は木の葉にうづもれ。わざとならぬ庭の草むらのいろはさながら霜にけたれぬるにや。風もたまりぬべくもあらぬしやうじをひきたてゝいますにや。そのかたに御經のこゑぞきこゆなる。よみみてさせ玉へる程を待てみえ奉れば。さしもはなやかにわたらせ給ひし御ありさまはいづちにけむやせをとろへさせて。香のけぶりにふすばり玉へる御かたちに涙をうかべさせたまひて。世中のつましきにふと思ひ立て。かゝる姿にこそ侍れ。そのきには人々の俤のみたちそひ侍りて。世をのがれしかひもなくこそとくやしきのみに過しさぶらひしか。程ふるまゝにうき雲のきえゆくこゝちになんものし侍りて。心の月もすみわたりにて。後世のいとなみより外もさぶらはねども。ちゝの卿のさぞたよりなくおぼしなげかせ玉ふらんとおもひ出るたびごと

に。またかきくもるにこそ。されどよみたてまつる御經はその御ためにゑかうすなれば。二世ともに御こゝろやすくわたらせ玉はむかしと立かへり給はゞつたへなんなどおほせられて。一夜のほどむかし今の御もの語して。ほのぼのとあくるほどになく／＼かへりにけり。此公行朝臣は洞院の右大臣殿の御子にて御おぼえもいかめしくわたらせ玉ひ。頭中將までならせ給ひけるが。今上のきさいのみやをいか成たまだれのひまもとめさせたまひけるにや。ほのかにみさせたまひけるに。たへぬ御おもひに世のなかのこともおぼし忘れて。うちふさせ玉ひけるを。しばしはいかなる御なやみにやと人しらざりけるに。おもひよはらせたまひけるにや。忍びて御ふみたてまつらせたまふ。

吉野河岩うつ浪のいはてのみ玉ちる袖を君にみせはや

御返し。

なき名さへ早く流るゝ吉野河岩うつ浪のいはてやみ南とありけるを。うちもおかせ玉はでながめさせたまひけるに。御父の卿のふといらせたまひければ。おどろき給ふてをきわすれさせけるを見玉ふて。ためしなきことにはあらねども。かくみだれたる世にしあれば。君さへひなの御住ゐにわたらせ給ひてやすき御こゝろもおはすべきかは。まして下としては。御敵をほろぼしなんはかりごとを心にこめてこそまことの道ならめ。それさへあるに。御うしろめたき事にこそ。おもひとまらせたまへ。公泰公の三の君をこそむかへさせたまはんすれといさめさせたまひけるを。いといたうはづかしげにおぼし入させ玉ひし御けしきなりしが。その夜よし野をしのび出させ玉ひて。御行衛のしばしはしられざりけるが。程へて大

安寺にいますよしのかえければ。大臣殿よりさまへ仰られけれども。心づよく世をのがれさせたまひけるとかや。

洞院の實世公の御むすめは御こゝろばへよりはじめて御かたちのいとめでたくおはしましければ。みかどにたてまつらんとかしづかせ玉ひけるを宰相中將實勝朝臣のせちによばひわたらせけれどもゆるしたまはねば。ちからなく過し玉ひしに。春のなかば過行比なるべし。高間の山のさくらをよそながらみさせ玉はむとて。實世公女房達をともしたまふて山ぢをたどらせたまひ。高根にのぼらせ給ひけるを。宰相中將の君かねて君の御めのと、御心をあはさせて。しげみにかくれいますをしらせ玉はで。めのとゝともにながめやらせ。げにもたかまの山のなもいちじるくこそあれ。花はたゞ雲とみゆるはこゝろあてにやと



たはぶれ玉へるを。なをかなたよりはよくこそあらめ。しげみを出はなれなば。よしの河もみおろされぬべしといひ／＼て。こなたへさそふを。實勝朝臣つと出たまひて。岩橋わたりして奉りなん。こなたへとかいおはせ玉ひて。めののゝともにかへりたまひけるを人しらざりけり。さて姫君こそみえさせ給はねと人びとさはぎて。手をわかちて。谷へやおちさせたまひけるにやと。いはほのかくれ。はざま／＼をもとむれどもかひなし。かゝる奥山には天狗などいふものゝつねにすむなれば。とりたてまつりやしてんとて。谷嶺をこえてあされどもいませねば。なく／＼かへり給ひぬ。日をへて宰相中將のもとに給へるとつぐる人の有ければ。いきまき玉ひてみかどにうたへてつみせんとたまはせけれども。かゝるみだれのうちにはたゞおはしませとせいする人

人のおほかりければ。こゝろにもあらでやみ玉ひけり。いく程もなくて將軍義詮公のもとよりかうしたまふて都へ還幸をすゝめ奉れば。君は八幡へ皇居をうつされしに。實勝朝臣も都しづまらば御むかひにまいりてむとちざり給ひて。御ともにまいらんと立出させ玉ふ。御袖をひかへたまふて。

何となく心にかゝる白露のをきわかれ行袖のけしきなどさはおぼすにかとて。

別ちの露にはあらぬ嬉しさをやかて袂につゝみ社せめといひなぐさめて。こゝろよく立出たまひけり。かくて年のなかばほど御心を雲にやどして待わびさせたまひしかひもなく。やはたにてうたれさせたまへるときかせ玉ひしより。さればよ。そのわかれ路の何とやらむ心にかゝりておぼえしが。かゝらむ事にこそ。今はながらふべくもおぼえぬなり。ちぎりは

じめしその折からは。我心をあはせてあられぬわざをしたまへるとうとからぬかぎりには。思ひおとされ<sup>めい</sup>たのむべき人はむなしければ。おもひさだめにけりとかきくどき玉ひければ。めのとの侍従。さおぼしたまへるともかひもさぶらはじ。かゝることもためしなきにはあらずなどいさめて。まことにはおもひたち玉はじとすこしをこたりけるひまにうかれ出させたまへり。夕ぐれの程なりければ。さらでも道のおぼつかなきに。河をとのかすかなるかたをしるべにて。なつみの河のほとりにたどりつかせ玉へども。月さへうとき山かげのほたるをよすがにたのみたまひて。岩のおもてにさだかならねど。

山影の暗き闇路に迷ひなんつみの河に身を沈めなはとかきつけ玉ふて。御身をしづめ玉ひけるに。御跡をたづねもとめけるものゝ。あまたつど

ひて松どもともして見けるに。あへなき御かたちの岩のはざまにかゝらせ給へるをとりあげたてまつるに。わづかに御いきのかよはせ玉ひけれども。御かほの色もかはらせたまへるに。みな涙おとしてさまゝにとりあつかひたてまつれば。やう／＼御こゝろのつかせ給へるにや。御めのすこしひらければ。みなよろこびてかへりけり。御心ちのつかせたまへるまゝに。御なげきをおぼし出させ給ひて。せめては御さまをかへ玉はんとしきり給へばせむかたなくて御こゝろに任せさせたてまつりてけり。あさましくみだれぬる世中には。かゝることさへかすそひにけりといとかなしくこそ。

平三位行輔卿のしのびていひかはしたまへる女の京にすみけるが。秋のなかばのころいひをこせける。

思かねそなたの空をなかわれは我にたくへる初鷹の聲  
御返し。

我袖を猶しほれとや初鷹のつはさにつかけし露の玉つき  
内大臣實守公の節會の内弁をつとめさせたま  
はんとて。いぎたゞしくつくろはせ玉ひて參  
りたまふ道にて。きのくによりはじめて參り  
ける武士どもの行あひたてまつりて。あなお  
そろし山伏ともみえず。まして人にはあらじ。  
天狗のたぐひにてあるらむといひけるをきか  
せ玉ひて。

天狗ともいはいはなむいはずとて鼻ひくからぬ我身ならは  
きはめて御鼻のたかくわたらせたまひけるを  
いひあてにけりと。のちまでおかしがらせた  
まへりけり。

高野・よりそねむ法師のたづねいまして。あか  
棚にありける松茸をみたまひて。

いつかはと其あか月を松茸の開る法にあはむと思ふ

とのたまはせしほどに。

松茸の開くる法にあふことも其あか月の雨のうるほひ  
隆俊卿のもとにめしつかひ玉ひしいぬ王丸。  
山だちにあひて矢にあたりなむどしけれど  
も。やう／＼にげのびてといきもつきあへず  
かたりけるをとのきかせ玉ひて。

梓弓ひきてしたへる山たちは犬おふ物と云にかあら南  
とておかしがらせたまひける。

楠正行の墓所にいかなるものゝしわざにやあ  
りけん。書つけゝる。

楠木の跡のしるしをきてみれば誠に石と成にける哉  
瀧口長しげがむさしのかみ師直皇居をおそひ  
なむとしけるとき。いちはやく落ゆきけるを  
しらで。跡にてたづねられけれどもみえざり  
ければ。源やす村。

三吉野にありと聞こし瀧口か落ては名をも流しける哉  
といひけるをつたへきゝて。やすからずおも

ひ。いかにもして此かへしをせんとするかゞひけるに。よしの河のみなかみのほとりのさかひを山人のあらそひてうたへけるを康村に仰られてさかひをみに行てかへりなんとするに。年老にければ。しばらくうちやすみしける程に。うたへ人はやくまいりてけいだん所に待ぬけるほどに。大理のやすむらをたづねさせれども。いまだかへり玉はずといふ。はるかにまたせて後にかへりきて。しかじかなんといひけるを。

吉野河その源をたゞす身の老にけりとてなと休むらんといひし。いとおかしかりし。

二條關白殿にありける右馬允行繼といひけるは。去ぬる八はたのたゝかひにいかなることかありけんかへらせ玉ひて御勘氣有ければ。おさなき子ひとり女子とをむつだのさとししたしきものゝありけるにあづけて。かうやの

山にのぼりてかみおろしけり。三とせばかりありて。わがいほにきたりてあめしづくとなきけるを。いかにとゝへどもいらへもせでころのゆくかぎりなきて。おきなほりいひけるは。諸國修行の心ざし侍りて。高野を出はべりしに。さすがに過しがたくて。むつ田のあたりをよそながらもみなましとおもひて。そのほとりをさそらひ侍りしに。あたらしきつかの前に十あまりなるわらはのふししづみてなげきぬけるを。あはれなるさまの見過しがたくていかにととひ侍りければ。ちゝはみとせばかりさきに世をのがれて。いづちともなく出玉ひ。御をとづれもさぶらはぬを。は君のあけくれなげきたまひしあまりに。御こゝろのみだれて。過つる夕ぐれの程にまぎれ出させ玉ひて。河よどのほとりへ身をしづめたまひしを。人々のなきがらをたづねて。



このつかにこめさせたまひてさむらへども。  
したしかりつるもうとくて。御跡をとふべき  
たよりもなくさぶらへば。一かたならぬかな  
しにかくてさぶらふなり。御經をよみて玉  
ひてんといひし俤の見しこちしければ。あ  
まりかなしくおぼえて。いかにめぐりにけ  
んとくやしきまでにおもひさぶらひながら。  
こゝろよく經をもよみ念佛たむけて。草の  
かげにはいかゞおもふらんとをしはかるにも  
涙にむせび。のこしをきけるわらはのさまを  
みるにもたへがたくめももたげられさぶらは  
ざりしを見て。日もくれにければいざわがや  
どへといざなひさぶらひし程に。行衛のこゝ  
ろもとなく侍りてゆきさぶらひしに。すむべ  
くもあらぬほどにあればてゝ。むかしさぶら  
ひしつかへ人もいかなりぬるにや。たゞひ  
とりのみすむなる。したしき人はおはせぬに

やとへば。まづしくなり行まゝにとはすは  
べり。むかしつかひし女のこのあたりにのこ  
りて朝夕のいとなみをしてあたへぬるばかり  
にてこそさぶらへと。夜もすがらかたりける  
は。皆我身のうへのことなりけり。よもあけ  
なんとしければ。かの女のきたりなば見わす  
れぬ事もやあらましょおもひて。はか所にて  
經をよみてん。かへりこむ程に立よりなむと  
いひて立わかれ侍る。この心のうちをおしは  
かり玉へかしとかたるに。ともに袖をぬらし  
侍りて。げにもかゝるほだしはさぶらはじ。  
ゆくへしられず出たまふとも。玉のをのたえ  
たまはぬほどにはわすれ玉はじ。後の世をさ  
またぐるにぞあらむ。ぐし玉へのべたてま  
つりてむ。こゝろやすく後世ねがひおはせよ  
かしといひければ。いとうれしげにてかへり  
けり。なにとかたばかりけむ。やがてぐしてき

たりけるを。ありつることをけいしてともなひつれば。いと不便におぼして。御身ちかうめしつかはれて。このごろは右馬允行朝と名乗て。むらなき剛の者にてありけり。

正平みづのえたつの年の春。舊都の主上。本院。新院。ともにとらはれ人とならせ玉ひて。此山にいらせたまへるに。黒木の御所のあさましきに。なをそのほかにうばらからだちをひまなく植たるうちにをしこめたてまつる。まことにみるめもいとかなし。さくらよりほかに御なぐさめもなかりけるにや。中納言のつばねの。

かゝる世もよしや吉野の山櫻宿の物とて挿頭にもせんとそうし玉ひにけるときゝて。世中のはかなきことを花におもひなぞらへ侍りて。

かく計移れはかはるみ吉野の花みて暮す身社つられやよひのころ。日のうらゝかなるに。女院の御

所の御庭に散つもりける花のいと多かりければ。とものみやつこめさせ玉ひて。ひと所に集めさせ給へば。たかさ五尺ばかり程の山のなりにありけるをいとけうせさせたまひて。よしののほなをうつせし山なればと。あらし山となづけさせたまひて人々に歌よませ。うへにもけいし玉ひければ。あすの程にわたらせたまひてんとたまはせたまひけるに。その夜風のはげしく吹て。いひがひなく成にけり。つとめて弁の内侍のかたへ兵衛のすけのつばね。

みよしのゝ花を集めし山のなもけきは嵐の跡に社あれとありけるをそうしたまひければ。

千早振神代もきかす夜の程に山をあらしの吹散すとはとの玉はせていとイいたうおかしがらせ給ひにけり。

梶井二品親王とらはれさせたまひて。この山

のあさましげなるしばの庵にすませ玉ひけるを山本の三郎といひけるものうけたまはりてきびしくまもりにつけり。一とせばかりありて。御邪氣の心ちの日にそひておもらせ玉へるといひのゝしりて。嶺とをる山ぶしもがな。をこなひさせてんといひあへれば。まもりけるぶしどもうちちりて。たづねけるに。そのあけの日たとげなる山ぶしを三人ぐしてまいりにければ。よろこばせたまふて。御まくらがみにめしてをこなひしけるに。二日ばかりありて。御こゝろのさはやぎけりと御布施など給はり。まもりけるぶしども御よろこびのみき玉はせければ。夜ふくるまでうたひなどしてあそびをりけり。山ぶしはあかつき出立なんとて御いとまをまうしてまだくらきにかへりけり。ひるの程にや。みやのおはしまさぬとさはぎて關々へ人をはしらし山伏をとどめ

けれども。それよりさきにとをらせ玉ふてその夜こうふくじまじつかせたまひけるとかや。これは御門徒の律師元祐といひけるものかねてはかりてをのれ山伏になりて。おひをおほきに宮のかくれさせたまへる程にものしけると後にきこえし。それより皇居をいよいよかたくまもりければ。さまゝはかりけれども。せむかたなかりしとかや。

ひろなりの御子のまだおさなうおはしましけるときに。わかき殿上人あまたともなはせ玉ひて。なつみの河の河よどのほとりにて鷹つかはせて御覽ありけるに。かたはらにいと大きな岩のえもいはれずおもしろきに松のおひ出たる有けり。みこの御覽じさせて。この岩をかへりなん時皇居の御庭にもてまいれ。うへにたてまつらんと實爲中將にのたまはせければ。おさなき御こゝろををしはかりて。御

事うけげさせ玉ふ。鳥などあまたとらせた  
まひてかへらせたまへるときに。忠行侍従に  
岩をわすれたまはじとのたまはせければ。民  
部大輔がちからもつよく侍れば。御あとより  
もてまいりさぶらふなりとけいして。皇居に  
いらせ給ふ。御鷹の鳥などたてまつらせ玉ふ  
て實爲中將にありつる岩をとめさせけるに。  
忠行の侍従のおほせごとをうけたまはりぬと  
けいしたまへば。侍従をめていかにとたづ  
ねさせけるに。民部大輔の御あとよりもてこ  
むといひ侍る。民部をめさせ玉ひなむとのた  
まはせば。むづからせたまふて。中將にこそ  
よくいひつれ。などさはいふにかとしぼらせ  
給ひければ。中將のありつることをけいし玉  
へば。おかしがらせたまひて。まことにおもし  
ろからむ。岩こそみまほしけれ。民部がちか  
らこそゆゝしければ。もてきなんにめさせた

まへとのたまはすに。中將たちたまひて。民  
部大輔にかゝることなんある。いかゞしてむ  
との玉へば。すべきことこそあなれとて。御  
庭にありけるちいさき岩に松の枝をとりつけ  
て。中將といとおもげにもちて。みやのおま  
へにすへたてまつれば。ちいさくこそあれ。  
それにはあらじとなをむづからせ給ひけれ  
ば。民部大輔さればこそその岩をもちてうへ  
の山をとをりさぶらひしに。右ひだりより山  
のさし出て道のいとせばきところにてかなひ  
がたく。いかにせましとたゞよひ侍りしに。む  
かひのかたよりやまぶしのきたりけるが。岩  
にせかれてとをられぬにこそ。のけたまへと  
のゝしりけるほどに。我もせんかたなさにか  
くて侍る。いかにせましとわびあへるに。さ  
らばすべきことこそあれとて。すゝををしも  
み。何やらむつぶやきて。いのるにしたがひ



て。この岩ちいさくなりて。やす／＼とをりてさぶらひしほどに。山ぶしも行過しをよびかへしてもとのごとくにいのりなをしてんといひければ。また行ききにはそき道のいますれば。いかゞし給はむといひし程に。げにもとおもひ侍りて。そのまゝ持てまいりぬといひたなへば。うへよりはじめて。ありつる人々おかしがらせ玉ふに。宮の御けしきもいとよくならせたまひて。げにさもあらんことなれ。その山ぶしをめしかへせかしとのたまはすに。はやはるかに行過て。いづち行らむもしらずとけいし給へば。ほいなきことにこそあれ。とどめて民部大輔の大きなるそらごとをすこしきやうにいのらせむものをとの玉せけるこそ。まことに行すゑたのもしき御ことにこそ。いとせめておほえ侍りし。過つる年の春のすゑつかた。あまてるおほむ神にまうでて。三

七日がほど法施たてまつりて。かへさに中納言あき能卿の御もとへ立よりて一夜がほどむかし今の御ものがたりしけるに。世のなかのかくみだれぬることひとのくにはためしおほかりぬべけれども。わが國にはこれぞはじめならめ。いつかはしづまるべき。かゝるおりふしに生れきぬらんすくせのつたなくてなどわびあへるに。まことにさこそおはすなれ。されども御てきはほろびてつゐにくわんかうならむとこそおもひたてまつれ。今上のいまだ陸奥守にてあづまへおもむかせ玉はんとし給ひける時。まうけの君にたゞせ玉はんむねをひそかに申きかさせたまへり。建武つちのとうしの年七月の末つかた伊勢のくにへ越させ玉ふておほむ神に御いとまをまうしにまふでさせたまひければ。とどまらせ玉ふべき御つげのわたらせたまひけれども。かくいでた。

たせ給ひぬるうへはとて。あまたの御船よそひして。九月の初めつかた上總の地近く御船のつき侍りしに。いさゝか空のけしきのかはりてみゆるまゝに。なみ風あらく侍りしかば。あまたの舟ども伊豆の御崎にたゞよひ侍りしに。猶風のつよくふきもてきて。船どものちりちりになり。おなじところにあるに。みやの御船はその日のくれほどに伊勢の海まで吹もどして。それより吉野にいらせ給ひしに。程なく三くさの御たからをつたへ玉ひて。あまつひつぎをうけさせたまへば。何ごともおほむ神の御はからひにこそいますかりけれ。われも宮の御船にさぶらひて。まのあたりのことにさぶらへばたのもしくおもひて過し侍るとかたりたまひしに。このたびまうで侍りしを神ノイもうけさせ玉ふ御神託にこそあれとおもひ

つゞけて。いとたのもしくかへりきにけるにこそ。

正平つちのえいぬのとしの春。草のいほりの夜の雨によし野の花の露をしたてゝ。よしなしごとを書つらね侍るこそものぐるをしけれ。

隠士松翁

右吉野拾遺上下二卷以所藏舊本書寫以屋代弘賢藏本按合畢流布印本偽造爲四卷其第三第四文殊不同且記不與吉野事特所載發句成係宗祇法師作則後人竄入不待辨可知也

群書類從卷第四百八十六

雜部四十一

江談抄第一

公事。

依無中納言例不行叙位事。

被命云。延喜十延長末。貞信公以實例小野宮殿加級事。

被申延喜聖主。主上不具許。其後叙位日。貞

信公稱所勞不令參。于時大臣只一人也。召

大納言道明卿。又稱所勞不被參。依無中納

言例。叙位停止。明日節會道明卿參上。主上被

仰云。去夜稱所勞不參。今日參仕如何。可弁

申。道明退出之時數曰。道明乎有私ト思召ニ

コソ有ケレ。此外無所言。還家之後。有所勞

不參。遂以薨逝。六月十七日

惟成弁任意行叙位事。

內宴始事。

又云。花山院御卽位之日。於大極殿高座上未觸剋限。先令犯馬內侍給之間。惟成弁驚玉佩并御冠玲聲。稱鈴奏。持參叙位申文。天皇以御手令飯給之間。任意行叙位云々。

又被命云。內宴始者。嵯峨天皇之時始也。弘仁四年癸巳之歲。翫櫻花之序。野相公書之云。翫櫻花之題。善相公進之。

八十嶋祭日可避主上御衰日事。

又云。八十嶋祭者。多以酉日爲使立并行祭日。若日次不宜之時雖不行之。使立并行祭日之間。一日用酉日。而延喜聖主十四歲之時。應和二年被立件使。酉日御衰日也。主上廿二歲。仍以

西日爲御衰日。依然又避之。

同祭日猶被避。儲君御衰日例。

又云。延久之時。雖不當主上御衰日。以當儲君御衰日亦避之。

仁王宸勝講并臨時御讀經佛具居樣事。

又云。禁中仁王講。宸勝講并臨時御讀經。又御佛名等佛具置樣并居樣。皆以不同也。講筵者多自御讀經。御讀經多自佛名云々。

石清水臨時祭始事。

又云。藏人式云。石清水臨時祭者。安和□年三

月中旬日所被始祭也。使大入道殿也。舞人裝束。下襲櫻色之。非常。宰相以銅自死。不次納

言。

賀茂祭放免着綾羅事。

被命云。放免賀茂祭着綾羅事。被知哉如何。答云。由緒雖尋未弁。被命云。賀茂祭日。於棧敷隆家卿問。齊信卿云。放免着用綾羅錦繡

服。爲檢非違使其人何故乎。戶部答云。非人之故。不憚禁忌也。公任卿云。然者雖放火。斂害不可加禁遏歟。他罪科者皆加刑罰。於着美服。條有指證文歟。齊信卿答曰。贖物所出來物ヲ染。招成文衣袴等。件日揭焉之故。所令着用歟。四條大納言頗被甘心云々。

宸勝講被始行事。

又被談云。宸勝講一條院御時被始行也。長保四年五月七日以後被行者也。三條院御時不被行歟。

相撲節日賜祿公卿起。

淨御原天皇始五節事。

又云。清御原天皇之時五節始之。於吉野川鼓琴。天女下降於前庭。詠歌云々。仍以其例始之。天女歌云。ヲトメコカヲトメサヒスモカラタマヲヲトメサヒスモソノカラタマヲ。



五節時瀧口殊饗應事。

又問云。五節時。瀧口殊令饗應事何故。被命令云。無指例。只周防守通宗通俊兄也。獻五節之時。相語瀧口等。以美麗裝束等。各令與也云々。爲仕五節之役也。

賀茂臨時祭始事。

又云。亭子院時。賀茂臨時祭始事。村上之時。主殿寮下部令問。先朝作法事。

佛名有出居否事。

佛名之時有出居否事。先年故資仲卿與資綱卿被論云。是普通之事。何及爭論哉。又立磬之事。故經信卿與隆俊卿有相論。彼時未一決云々。

幼主御書始事。

被談云。幼主御書始。是待十二月寅庚日被始事也。無件日年者不被行。御馬御覽日馬助以上可參上事。

往代御馬御覽之日。馬助以上參上云々。又被命令云。忠文民部卿爲助之時。延喜聖主御馬御覽之日。參入自瀧口陣方伺候東庭于時北下也。芝駕御馬二疋。忽以相沛艾無人範賞。忠文自進出取放之事。畢退出之間。寮御馬部宿老者一人偷語云。阿波禮葉江奈幾與加奈。先朝乃御時奈良末之加波云々。主上聞食此事。令耻給云々。

神泉苑修請雨經法事。

又云。神泉苑修請雨經法。四箇度人々。大僧都空海一七箇日不雨降。延二箇日。九箇日龍破神泉苑上天。卽降雨。天下潤澤。陰陽師滋岳川人勤五龍祭。今度殊同成精之度云々。又云。大僧都元杲。一七箇日雨不降。延二箇日至九日雨降。于時又云。小僧都元眞。一七々日雨不降。延二々日遂不降。仍隱居鎮西安樂寺云々。

又云。阿闍梨仁海。寬仁二年六月四日始。五箇日之間雨降。可任律師之狀蒙宣旨。八月十一日任權律師。陰陽師安倍吉平亦勤五龍祭云々。

延喜聖主臨時奉幣出御間事。

或人語云。延喜聖主臨時奉幣之日出御南殿。先是有風氣。把笏着靴欲奉拜之間。風彌猛。御屏風殆可顛倒。被仰云。阿奈美久留志乃風也。奉拜神之時爾何有茲風哉。即時風氣俄止。御起伏之間御鬢委地。自靴後見。甚以長久御ケルニコソアメレ云々。宇治殿所被仰也。花山院御即位之後太宰府不帶兵仗事。

又被命云。花山院御即位之後十日。太宰府帶兵仗之者無一人。是皇化無程遠及之驗也。警蹕事。

或人云。警蹕。問云。天子用之。見上文私行之時何用此哉。答曰。公卿皆隱。公達者隱也。秘事

云々。

又云。警蹕者。文選云。出警入蹕。是天皇迎送事歟。近衛司誠諸人之義也。卿相公達私行之時。誠諸人者。卿相皆隱。公達者隱也云々。此事都督之說也。

殿上陪膳番三番准三壺事。

又被命云。殿上陪膳番定事。花山院御宇始也。時人可結六番之由定申也。而惟成弁議云。負三壺巨鼈。結四番准據。件無極家誓可爲四番者。尚可結三番也。詳見漢書。時棟知此事。又殿上簡三番也。見文選巨鼈之文。故也。

殿上陪膳番起事。

殿上葛野童絕了事。

紫宸殿南庭橘櫻兩樹事。

內裡紫宸殿南庭櫻樹橘樹者。舊跡也。件橘樹地者。昔遷都以前橘本大夫宅也。枝條不改。

及天德之末云々。又秦川勝舊宅者。但是或人說也。

### 安嘉門額靈踏伏事。

香神入道帥談曰。安嘉門額者。髮逆爾生之童乃着靴沓之躰也。昔渡行伴門前之者。時々依被踏伏。竊人登行摺損中央云々。

### 大內門額等書人々事。

予問曰。伴額等誰人手跡乎。答云。南面者弘法大師。東面者嵯峨帝。北面者橘逸勢云々。就中皇嘉門額殊有靈害。人之由見秘記云々。又大極殿額者。敏行中將手跡也。但火災以前誰人書乎。

### 攝關家事。

### 攝政關白賀茂詣共公卿并子息大臣事。

攝政關白賀茂詣共公卿并子息大臣御前并少納言御後檢非違使等令供奉始於何世乎。此事不載指舊記如何。江左大丞云。天慶以

往凡無父子共大臣之例。見九條殿記而貞信公御

時。小野宮殿。九條殿兩相府被候御共。但彼

時必四月御祭之間。不被參詣也云々。源右相

府被仰云。大入道殿御攝籙之間。子姪大臣大

納言以下一族之人多以在朝也。仍始自彼時

歟。又御後號御武者五六人許。而近代以檢

非違使被具歟。小野宮殿者大臣之時。祭日

早旦被參詣。還向之次。於一條大宮若堀川之

邊。立車見物。前駟纔十餘人歟。強不被好過

差。以伴前駟人々差遣祭渡內侍前駟料也。

其以前引率公卿被參事不聞歟。但子姪人

人。各爲我志被參詣之時。同御共ニト

テ被參也云々。非定例。只各用意也云々。行

成卿ナド幼少之時。祭日被參於社頭。前駟廿

餘人。僕從等着美服云々。大略各々被參詣

歟。治部卿伊房云。宇治殿少將ニテ御座之時。

堀川大臣顯光。賀茂詣令前駟給云々。宇治殿

攝籙之時。堀川大臣爲上卿。有陣定。內覽文  
 遲來。經數剋語。傍人云。爲我前駟之人也云  
 云。又宇治殿仰云。一ノ人有障不參之時。二ノ  
 人必被參詣ケリ。近代無殊事也。又是當時前  
 駟難參來上。可如二舞之故停止歟。治部卿  
 伊房云。九條殿御遺誠云。爲我後人者。賀茂春  
 日御祭日必可參詣社頭也。但於春日者。路  
 遠有煩。可參大原野也者。而參大原野已以  
 斷絕也。件事極秘事。不載流布世間之遺誠。  
 若件事在別御記歟。又故宇治殿御時。以殿  
 上人爲舞人。令參詣賀茂給二ケ度也。後一  
 條院御時一度。後冷泉院御宇一度。仲度內大  
 臣以下至中納言資平卿乘車。兼賴卿以下至  
 非參議三位皆騎馬。件日儀式異於例年。下御  
 社馬場西邊立檜皮葺舍一字爲御在所。有上  
 達部饗事。先着袂殿。御禊之後着件御所。差  
 使奉幣。不令參社內給。上御社祓儀同前

歟。又上達部騎馬前駟。始于大入道殿御時  
 也。小一條右大將<sup>源時</sup>不知內議。被參會御出立  
 所。俄有可扈從之儀。被借馬。是被謀也。雖  
 腹立愁被供奉云々。二條殿御攝籙之間無  
 件儀。賢主臨國。諸事皆決於聖意之故也。延  
 久年中。二年<sup>忠實</sup>。而其後任宇治殿御時例。可行  
 之由殿下所被仰也。先人被申云。先參御內  
 裏。依御氣色可及披露也。不然者。自稱有  
 障歟。殿下不令承諾給。命旨已出。人々遍  
 聞天氣不快。不遂件事。取嗤於路人給也。爲  
 仲云。二條殿御時。上達部不被皆參。時人謂  
 乖先例。宇治殿聞食此由。被仰云。賀茂詣日。  
 上達部必皆不參來。故御堂御時。有不參人  
 人。時光中納言ナト參御堂立所。出御之後立  
 車見物。被仰云。彼平尹丸爲舞人。裝束如何  
 美也ヤト被戲仰<sup>波</sup>。時光ハ美麗候ナトコソ  
 ハ。被戲仰ケレ。非子姪之人。必不扈從先例



也。我攝籙初度。故殿ノ差遣別使。被仰云。關白物詣之日無別障。必可被來訪之由。被催仰之故。人々不辭退。何況一族之人乎。自爾以降爲流例也。非親昵人者雖來不共何難之有哉云々。又子息大臣被參仕事。大入道殿御時內大臣道隆入道殿御時內大臣宇治宇治殿御攝關之間久絕無件事。至康平四年又有件儀。內大臣師實又左右內府并北政所被參事。始自故大殿御時也。

殿下騎馬事。

被命云。後一條院御宇之間。行幸之日殿下騎馬。令供奉御輿之後給也。

大嘗會御禊日殿下乘車供奉事。

後朱雀院大嘗會御禊之日。始乘御車。令供奉給也。其後爲常例也。

大入道殿夢想事。

大入道殿兼家爲納言之時。夢過合坂關。雪降

關路悉白。ト令見給天。大令驚天。雪ハ凶夢也ト思天。召夢解欲令謝テ令語給ニ。夢解申云。此御夢想極吉夢也。慥以不可有恐。其故ハ。人必可令進斑牛。卽人令進斑牛。夢解預纏頭也。大江匡衡令參。此由有御物語匡衡大驚テ。纏頭可召返。合坂關者。關白之關字也。雪者白字也。必可令到關白。大令感給。其明年令蒙關白宣旨給也。

正統元年

大入道殿令讓申關白於中關白給事。

大入道殿臨終召有國申云。子息之中以誰人可讓攝籙乎。有國申云。令執權者。町尻殿歟云々。是道兼之事也云々。又令問惟仲。惟仲申云。如此事可有次第之理也云々。令問大夫史國平。國平申旨同。惟仲依一人之說遂被讓申中關白道隆。關白攝籙之後被仰云。我以長嫡當此任。是理運之事也。何足喜悅。只以可報有國之怨爲悅耳云々。故無幾程

及除名父子被奪官職云々。  
町尻殿御惱事。

町尻殿道策所惱危急之時。有國令申云。書讓狀可被讓所藏於入道殿者。栗田殿被命云。關白者非書讓狀之事云々。

藤氏獻策始事。

藤氏獻策始ハ佐世也。昭宣公ノ家司ニテ。彼家起ニ天神モ被引添テ令座給ケレバ。時ノ儒者等皆悉不用ケレバ。昭宣公被歎息ニテ。切々被請云々。予問曰。以何故不請哉。答云。其事有理。紀家良香等云。藤ニ麻幾多天良禮那波。我等ガ流ハ不成立ジ。不然藤氏ハ無止流ナレバ可昇進也ト云々。雖然遂以獻策。問頭儒良香也。獻策之日ハ昭宣公敷荒薦下庭令申請天道給云々。

佛神事。

熊野三所本緣事。

又問云。熊野三所本緣如何。被答云。熊野三所ハ伊勢太神宮御身云々。本宮并新宮ハ太神宮也。那智ハ荒祭。又太神宮ハ救世觀音御變身云々。此事民部卿俊明所被談也云々。

源賴國熊野詣事。

又被談云。源賴國者高名逸物也。而服中<sub>香</sub>天參詣熊野三所。還向之時能々物凶也云々。聖廟御忌日音樂可停止彼廟社事。

經信卿常被示云。聖廟御忌日音樂ハ彼廟社ニハ可停止事也。菅家御作。仲秋翫月之遊。避家忌以長廢之句。九日菊酒飲序令作給也。然者音樂事可無歎云々。倩案此事難計也。神慮之趣。暗以難測也。

經信北野前不下事。

紀家參長谷寺事。

被命曰。紀家爲望大納言參長谷寺祈請。夢有人告曰。他國可迎文章人云々。得此告之

後。不歷幾程逝去云々。

興福寺諸堂安置諸佛事。

又云。興福寺內被置佛者。金堂置釋迦佛并脇士藥王觀音二牀。彌勒淨土。講堂置阿彌陀佛觀音盧空藏。南圓堂置不空絹索并四天王。勝前西金堂置釋迦佛并十一面觀音。東金堂置藥師如來十二大將日光月光。北圓堂置彌勒四天阿難迦葉。食堂置千手觀音。

藤氏氏寺事。

又云。藤氏人々被始事。自古尙在。大織冠建興福寺。法華寺。施藥院。淡海公建佐保殿。閑院大臣立勸學院。始南圓堂。良房忠仁公始長講會。昭宣公點木幡墓。房前宰相手自作南圓堂不空絹索并四天王。貞信公立法性寺。九條右府建楞嚴院。大入道殿建法興院。中關白建積善寺。道長入道殿造木幡塔三味堂。建法成寺。宇治殿建平等院。

聖德太子御劔銘四字事。

丙毛槐林

吉切。槐林。是切。守屋大臣之頭也。

弘法大師如意寶珠瘞納札銘事。

又云。弘法大師如意寶珠瘞納札銘云。六。一山精進峯竹木目之底土心水師道場。此文未讀云々。

弘法大師十人弟子事。

又云。弘法大師十人弟子。其五人傳門徒。五人立門徒。眞濟僧正傳高尾。眞雅僧正傳眞觀寺。實惠僧都傳東大寺。眞然僧正傳高梵。眞如親王傳超證寺云々。

增賀聖慈惠僧都慶賀前驅事。

教圓座主誦唯識論事。

教圓座主暗誦唯識論十卷之間。自誦始第一次第十卷之時。住房松樹下。春日大明神令舞給事侍。尤憐有興事也。

玄寶律師辭退事。

又云。弘仁五年玄賓初任律師。辭退哥云。三輪川ノ清キ流ニ洗テシ衣ノ袖ハ更ニケカサシト云々。

### 同大僧都辭退事。

又云。辭大僧都哥云。外國ハ山水清シ事多キ君カ都ハ不住マサレリ。

又云。去洛陽赴他國。道ニ來合女人。脱衣奉之侍シニ。歌云。三輪川ノ渚ノ清キ唐衣クルト思ナエツトオモハシ。

### 亡考道心事。

被<sub>レ</sub>命云。亡考<sub>成衡</sub>者道心者也。毎日念誦讀經敢以不懈。雖自不然。彼ハ道心堅固事非他事。吉吉有暇歟。又者頗可謂信心。常頸紙不差。水干ノ如法師衣ナル結紐ニテ。五十許ツラヌキタル珠誦ヲ持テ不論精進。雖食葷腥。以先師助給土云爲其口實。或又常披累代之文書。修理其朽損。皆悉捺印重之無極。或人問

云。何故如此ナルト問ケレハ。弊身ハ江家ノ文預也トゾ被<sub>レ</sub>命ケルト云々。

### 時棟不讀經事。

又被<sub>レ</sub>命云。時棟者全以不讀經。只理趣分許受<sub>ラ</sub>習清範也。觀音ヲハ觀イ<sub>ン</sub>トヨム也。補怛<sub>ホク</sub>羅山ノ觀音ト云ハ常事也云々。

### 江談抄第二

### 雜事。

天安皇帝有讓<sub>次徳</sub>位于惟喬親王之志事。被<sub>レ</sub>命云。天安皇帝有讓<sub>次徳</sub>寶位于惟喬親王之志。太政大臣忠仁公物攝天下政爲第一臣。憚思不出自口之間。漸經數月云々。或祈請于神祇。又修祕法祈于佛力。眞濟僧正者爲小野親王祈師。眞雅僧都者爲東宮護持僧云云。各專祈念。互令相摧云々。



陽成院被飼卅匹御馬事。

又云。陽成院御所立御厩。常被飼卅匹御馬。  
號北邊院。

冷泉院欲解開御璽結緒給事。

故小野右大臣實家語云。冷泉院御在位之時。大入道殿兼家。忽有參內之意。仍俄單騎馳參。尋御在所於女房。女房云。御夜御殿。只今令解開御璽結緒給者。乍驚排團參入。如女房言。解宮緒給之間也。因奪取如本結之云々。

圓融院末朝政亂事。

圓融院末。朝政甚亂。花山寬和二年之間。天下政忽反。淳素多是惟成弁之力云々。天下于今受其責云々。

華山院出禁中被向花山事。

被命云。粟田關白扈從花山院。出禁中被向華山寺之時。大入道殿以平維敏被爲止出家之使。時人見維敏之氣色。万人不敵云々。

華山院御時被禁女房以下袴事。

又云。華山院御時。被禁女房并下女等袴。一裳袴被免云々。

濟時卿女參三條院事。

爲仲云。濟時卿女被參三條院東宮之時。之日夕。大將參大入道殿。被中云。被下輦車宣旨哉。作事欲蒙莫大恩。返答云々。ナトカハ可有恩許之事也。欲奏達云々。大將不堪感悅。起座拜舞退出。及入內之剋限。雖相待宣旨。已以無音。敷筵道被參入也。時人密號空拜大將。又彼大將家前庭有紅梅。便稱空拜云々。

堀川院崩御運叶天度事。

被談云。堀川院崩給事。大略御運叶天度歟。近代帝王及廿餘年。給寶位希代之事也。御宿曜過畢。而御寶位運久之故。于今令持給也云云。予問云。御算盡者。御寶位豈久哉如何。被談云。此事尤興然也。但彥作初謁。宿曜事相語之。

日。帝王御運者。漢家本朝共異於凡人也。其故壽命百歲。寶位五十年。帝王可在ニ。至六十算令即位給ハ。百歲壽所殘四十年。五十寶祚所期四十年也。仍五十年寶位今十年可欠。然而自六十一年即位。猶傳五十年位給也。仍算ハ百十年ニ延引。而至百歲之時有大病也。其心ヲ不得。信宿曜期算通位者。今十年不持。即算又盡乎。位五十年。位不避ハ亦令持位延齡也。然而帝王之位。荒涼不可避。又帝王位ハ強ク算ハ弱事也。因之異于凡人ト云ナリ。凡人ハ不然。以官位有鬼瞰。辭職延齡。宿曜秘說也。皆有其理云々。此事秘事也。披露無由。匡房欲隱居。足下令仕朝ハ亦可預朝議之人也。可得其心云々。

上東門院御帳内犬出來事。  
上東門院爲一條院女御之時。帳中ニ犬子不慮之外ニ入天有遠見付給。大ニ奇恐。被申入

道殿。道長。入道殿召。匡衡テ密々令語。此事給ニ。匡衡申云。極御慶賀也ト申ニ。入道殿何故哉ト被仰ニ。匡衡申云。皇子可令出來給之徵也。犬ノ字ハ。是點ヲ大ノ字ノ下ニ付ハ太ノ字也。上ニ付レハ天ノ字也。以之謂之。皇子可出來給。サテ立太子。次ニ至天子給歟。入道殿大令感悅給之間。有御懷妊。令奉產。後朱雀院天皇也。此事秘事也。退席之後。匡衡私令勸件字。天令傳家云々。

九條殿燧火事。

小野宮叙二位事。

小野宮右府嘲範圍五位藏人事。

故小野宮右府被參陣。件日範圍自甲斐前司補五位藏人之日也。右府不被甘心。則成嘲被問人云。甲斐前司ニハ誰カ罷成タル云々。宇治殿聞食此事。被仰云。以大臣以上之身。居陣座。被嘲朝議事不可然云々。則被勸

發以經賴爲勘發使云々。其時藏人頭ハ經輔也。仍被示彼頭隨申其由也。宇治殿被答仰。後日右府怨經輔云々。

惟仲中納言申請文事。

惟仲中納言爲肥後守之時。有申請文。文名忘却可尋

也。於陣獻上卿。上卿者一條右大臣雅信也。上卿被難此文。惟仲以爲恨之。上卿被命云。此文者於陣難之。於里第許之文也。是先例也。

惟仲爲耻云々。

惟成弁失錯事。

又云。有國爲藏人頭之時。以（實難）使着駄解文取違。申文下陣座之間。惟成辨乍知失錯讀申上卿云々。

公方違式違勅論事。

問云。公方違式違勅論其義如何。答云。天曆御時。諸國受領不濟率分之輩。勘公文之時。勘會諸司文書。加署判之者。可勘其罪狀之

由。被問公方。公方勘云。當違式云々。被仰云。事出自勅語。然則可違勅。公方不可。然之由執中。爰以文範令問之間。問云。破勅語之起請皆可稱違式之者。何故格條中注云。若違此格者。論以違勅之罪。公方答云。以此文案之。格條事偏皆可謂違勅之者。何更令始有違勅之詞矣。格條事不可必稱違勅之。故新立違勅之文。文範又難云。格條立違勅文。文異陳狀。然者。今令條稱曰。論以違勅之罪。此條如何。公方無所陳之旨。遂依此過及左遷。公方卒後。子允亮思其父之耻。研精此事七八年許。遂相其文書。向文範亭欲討論之處。文範命云。令問給之聖皇モ不御坐。公方モ其身不存。僕モ又老タリ。是討論以無益也云々。允亮懷文書還畢。問。此論如私曲相須歟。被答云。私曲相須者。及諸道之沙汰矣。違勅者只公方一身也。

外記日記圖書寮紙工漸々盜取問師任自然書取事。

被談曰。外記日記。一筆書取人者孝言也。近代希有事也。依大夫外記之懇切也。一生中之間。常ニ紙ヲ卷テ以年飼小舍人童等令持云々。予問云。外記日記。又誰人之持哉。被答云。日次日記。持人粗所聞也。但皆悉令人稀也。師遠祖父師任大外記之間。皆悉所書取也。師任書取之後。外記日記等爲圖書寮紙工漸々被盜取也。事發天被尋。日記本在故師平許。希代之事也。帝王之運未盡之所致也。若師任當初不寫取者。一本日記定絶失ナマシ。皆悉持人稀之故也。奉爲國家。サハカリ致忠者ナレハ。子孫ハ不絶繁昌也。此師任師平。殊有寬仁之心。強無貪欲云々。師遠相繼不事繼其跡。又希有之事也。當時之一物也。

晉人卿爲別當時長岡獄移洛陽事。

被談云。匡房仕帝王。至納言ハ。始祖晉人卿爲檢非違使別當之時。奉爲國家能致忠之故。必仕帝王也云々。予問其由緒如何。被答云。晉人卿爲檢非違使別當之前。獄所在長岡京。件所ニテ獄所極以荒涼。囚人動逃去。仍晉人卿改立此獄門之後。無逃刑人。還又重恩也。修善根之人。與饗膳稱施饗。是彼時始也。仍晉人卿最後被談ケルハ。我子孫ハ依國家致忠。必仕帝王。可至大位也。但刑人其罪尤重之者。此依囚獄門無輒逃之者。又路次往行之者。動與食物。依別法之目。不能輒入獄門。依其報定子孫ニアラン云々。此事尤理也。仍匡房モ爲勅負佐之時。爲追其跡。路頭夜行事。稠以所申置也。奉爲國家致忠也。仍後三條院御時。全以無強盜之聞。又於身學天令拔群ハ。先考雖爲無才能。傳家之文書。條



條爲書寫被加之所致也。先考以明障子立

四面。其中曝涼家文書。皆悉捺印。又損失之處

ニハ必尋求其本被共繼也。常ニハ。我是江

家ノ文預也トソ被申侍シ。以青侍四人置

件障子之中。一人ニハ續飯ヲ令餉。一人ニハ

令披。又一人ニハ令繼立。一人ニハ令書繼。

如此送年月。後代物語也。不可被披露歟。

六壬占天番廿八宿可在天而在地番不審事。

被命云。陰陽家事心被得如何。答云。於書籍

者。大略隨分雖歷覽不能委學。此間逢陰陽

博士宗憲。占事少々所請候也云々。被命云。

占事尤可被知事也。但番事能被學哉。番不

審事在之也。天番可在廿八宿。在地番。地番

可在十二神。在天番如何。此事可被學也云

云。

大外記師遠諸道兼學事。

被命云。大外記師遠諸道兼學者歟。今世尤物

也。能達者不劣。中古之博士歟。

助教廣人兼學諸道習諸舞長工巧事。

助教廣人者。是能讀左傳兼學諸道習諸舞。

長工巧。時人無失歟。但一日亡精。一眼誠明。

高村カ文章博士對策判ニ預天。多科病累處落

第。而弘仁皇帝命被置及第之時。高村竊云。

一目亡人何識我策哉。廣人聞之云。以一目

見汝書。尙不足可見。何況兩眼共存時乎。以

此等例思之。紀傳明經者。共以可廣學也云

云。

天曆皇帝問手跡於道風事。

天曆皇帝召道風朝臣勅云。我朝上手誰人哉。

中云。空海。敏行。時人難云。於大師御名可奏

音讀也。敏行ヲハ猶止志由岐止奈牟可奏云

云。

道風朝綱手跡相論事。

天曆御時。野道風與江朝綱常成手書相論

之時。兩人議曰。給主上御判。互可決勝劣云云。仍申請御判之處。主上被仰云。朝綱力書劣於道風事。譬如道風劣。朝綱之才云々。兼明佐理行成等。同手書事。

兼明佐理行成三人。等同之手書也。各皆樣少相乖也。後人難決殿寮歟。故源右相府云。行成卿世人謂劣於道風歟。信者佐理兼明等止奈牟世人稱ケル。

積善作衛玠能書事。

積善作衛玠家風。衛玠能書之義。有所見歟如何。答衛玠能書也。故稱家風歟。分明不被告。

平中納言時望相一條左大臣雅信事。

故右大弁時範談云。一條左大臣年少之時。故平中納言時望到。其父式部卿敦實親王召出雅信。令時望相之。時望相云。必至從一位左大臣歟。下官子孫若有申觸事者。可有必舉用之也。數剋感歎云々。時望卒後。一條左大臣

感彼知己之言。惟仲肥後之公文問。殊施芳心。惟仲者是時望孫。珍材男云々。是故平宰相之說也。彼家傳語之由。時範所談也。

平家自往昔爲相人事。

又平家自往昔累代傳相人之事。又惟仲中納言。其母讚岐國人也。珍材爲讚岐介之時所生子也。而去任之後。尋來珍材。召人相之云。汝必至大納言歟。但依貪心。頗有其妨。可慎之也云々。後果至中納言太宰帥。件時宇佐宮第三寶殿付封之。依件事。被停任之。是往年先親所傳語也云々。

行成大納言雖爲堅固物忌。依召參內事。

又云。行成大納言爲藏人頭之時。依堅固物忌。籠居里亭之間。自禁中稱大切事。有召令參上。時於殿上。俄心神失度。乍恐參清涼殿。主上先識其氣色。揚音タソアレハト被仰。卽應御音稱朝成。留御簾限。行成入御

前免此難云々。是則行成祖父小一條大將漢時與朝成大納言依爲敵人欲陵云々。

延喜之比以束帶一具經兩三年事。

又談曰。延喜之比。上達部時服不好美麗。朱雀院御時。或公卿遣消息於內裏女房許令奏云。先朝恩賜御襲。年月推移。處々破損。御下襲一領可被申下者。大略調束帶一具。兩三年之間。節會公政之庭着用歟。何況近代之例。諸國受領不濟封物。無賴公卿可類乘下之人云々。

小野宮殿不被渡藏人頭事。

又被命云。英明少年時獻押綾。小野宮殿以此故不被渡藏人頭云々。

四條中納言嘲弼君顯定事。

又四條中納言爲藏人頭之時。嘲弼君顯定。誰吐虛誕。爲宇治殿仰云。某申。宇治殿聞食被勘發。定賴云。攝政關白ナドハ人ノ嘲哢ス。

ル者ニモ非ズ。依此事半年許蟄居云々。顯定宇治殿方人也云々。定賴二條殿方人也。故有意緒歟。古今藏人頭。久被處勘例事之例云云。

範國恐懼事。

又範國爲五位藏人。有奉行事。小野宮右府爲上卿。被候陣下。申文之時。弼君顯定於南殿東妻。被出于陰根。範國不堪。遽以笑。右府不被知案內。以咎及奏達。範國依此事恐懼。

實資公任俊賢行成等被問公事其作法各異事。

又被命云。資業談曰。實資公任俊賢行成四人爲御使。向彼亭。被問公事之時。其作法各異。實資者。日記中可停證文。處被取出。俊賢者。先見日記畢。識覺被陳之。公任者。只被申可依執政申之由。四人之殊皆以不同也云々。又被命云。此人々皆雖達朝議。於被

造式目。多公任被作獻。人其人家。其家令封也。但自作法進退。劣自其所知云々。諸御屏風等有其員事。

又云。諸御屏風等有其數。所謂漢書打毬。坤元錄變相圖。<sup>天イ</sup>賢聖。山水等御屏風之類是也。隨時立之。委事見裝束司記文歟。

可然人着袴奴袴不着事。

戶部卿曰。故右大將御童稚之時。着袴之日夕。從上東門院被奉御裝束一襲。兼日依被申請也。不

被副進奴袴。時人或稱令忘却給之由。或重申可被申請之由。殿下無遺答不審。尅限之至矣。不着用給。其後院聞食此旨仰云。宜人者着袴之時不着奴袴也。近代人々不知案內歟。于時近習上達部殿上人。非參議等識者濟々焉。何不傳聞哉。尤耻辱多乎。資業章信不知此旨。猶以不及古賢也。

善男坐事承伏事。

善男坐事之日。大納言南淵年名。參議菅原是善卿等奉勅。於勘解由使局推問之。更不承伏。卽詐令人謂云。息男佐已以承伏畢。何獨不然。善男聞之。口惜男力ナト云。天承伏。又法隆寺僧善愷訴善男之時。辨正躬王等之少姪曰。羣蚊成雷之日。善男死國之時也。

御劔鞘卷付何物哉事。

又談曰。御劔鞘有五六寸許物卷付。人不知何物事。資仲卿自撰進之。四卷云云。故大納言敦命云。予昔三條院御宇時爲殿上人。參內自無名門。主上御于殿上御倚子。予謹跪候地上。仰云。可昇候小板敷者。仰云。御劔鞘有被纏付之物。是何物哉。汝有所聞乎者。予奏云。至愚之身難知如此事者。又仰云。猶可申者。奏云。不承慥說。但或人申云。若是御辛櫃鑑歟者。末氣有感。後日量理朝臣相語曰。主上仰云。我問秘事。衆人不知。而資平之所申已



相叶。尤所感也者。抑件鑑事。右相府仰也。又

在清慎公御口傳。又江左大丞說云。神璽宮鑑

纏寶劔之組。纏籠之由。見延喜御日記。是秘

事也。非普通御記云々。

貞信公與道明有意趣歟事。

又被命云。貞信公弱年爲右大臣。予時道明一

大納言。此時貞信公辭退。不令任左大臣。道

明薨之後。不歷幾程。被任左大臣。定方任右

大臣。若有意趣歟。

古人名唐名相通名等事。

又云。古人名。唐名相通名等。三善清行<sub>居逸</sub>。田

忠臣<sub>達音</sub>。紀長谷雄<sub>發超</sub>。源順具<sub>瑋</sub>。慶保胤<sub>定安イ</sub>。田

心<sub>幸</sub>。江舉周<sub>達</sub>。藤明衡<sub>安蘭</sub>。江匡房<sub>滿呂</sub>。

古人名并法名事。

又云。古人名。并法名等。定基<sub>江家。法名寂照。參</sub>

圓通<sub>大師。遍昭僧正。良峯。能因。橋永。宗貞。</sub>今毛人大師。愛發朝

成<sub>悟妙。法名。</sub>惟成<sub>法名。</sub>華山院<sub>法諱。</sub>入覺<sub>義懷中納言。悟真。</sub>大入

道殿<sub>法名</sub>。仲平<sub>靜覺</sub>。道長<sub>行觀</sub>。又高<sub>光少將</sub>。如覺<sub>道</sub>。

內相<sub>藤押勝</sub>。仲麻呂<sub>號</sub>。又云。藤慶者<sub>道明大納言字云々。</sub>藤

文者<sub>右衛字</sub>。藤賢者<sub>有國字</sub>。式大者<sub>惟成字</sub>。

經賴卿死去事。

又被命云。經賴卿蒙宇治殿御勘責之後。不

經幾程。有病死去云々。

英明乘檳榔車事。

又被命云。英明昔乘檳榔車。被參法性寺御

國忌。公卿多以參會。朝成卿云。公卿之車外有

檳榔車。誰人車哉。英明被答云。下官車也。若

被答仰者。不可乘檳榔車之由。有所見者

欲承云々。件法式無所見云々。

忠文被聽昇殿事。

又被命云。忠文爲近衛司。有聽昇殿仰。然而

不承仰云々。每陣直夜。遣取寮御馬一疋。立

枕邊。常語云。聞馬食。秣不眠之計云々。

忠文炎暑之時不出仕事。

又云。忠文秋冬者勤陣直。夙夜匪懈。炎暑之時請暇。向宇治別業以避暑爲事。或時被髮洗于宇治川云々。

元方爲大將軍事。

又被命云。天慶征討使之時。朝議以堪其事。欲以元方爲大將軍。元方聞之云。大將軍所言。一事以上國家無不被用。若被拜大將軍者。必請眞信公子息一人爲副將軍云々。因茲寢此議云々。

人家階隱事。

人家階隱者。元者不同事也。其起被知哉如何。答云。不知。被命云。荷前行幸之日。天皇□五條皇居御在所爲羣御輿。有新議造階隱也。乃皆□於此時也。

喫鹿突人當日不可參內裏事。

又被命云。喫突當日不可參內裏之由見年中行事障子。而元三之間。供御藥御齒固。鹿猪

可盛之也。近代以雉盛之也。而元三日之間。臣下雖喫突不可忌歟。將主上一人雖食給。不可在忌歟云々。但愚案思者。昔人食鹿殊不忌憚歟。上古明王常膳用鹿突。又稠人廣座大饗。用件物云々。若起請以後有此制歟。件起請何時。慥不覺。又年中行事障子被始立之時。不知何世。可檢見也。

咒師猿樂物瑩始事。

又咒師。猿樂等物瑩始事。後三條院令供養圓宗寺。給之時。舞裝束爲人之擇。俊綱朝臣始構出事也。

江談抄第三

雜事。

吉備入唐間事。

吉備大臣入唐習道之間。諸道藝能博達聰慧

也。唐土人頗有耻氣。密相議云。我等不安事也。不可劣先普通事。日本國使到來令登樓且令居。此事委不可令聞。又件樓宿人多是難存。然只先登樓可試之。偏殺左ハ不忠也。歸ハ又無由。留天居ハ爲我等頗有耻ナント議天。令居樓之間。及深更風吹雨降。鬼物同來。吉備作隱身之封。不見鬼天。吉備云。何物乎。我是日本國王使也。王事靡盬。鬼何伺ヤト云ニ。鬼云。尤爲悅。我モ日本國遣唐使也。欲言談承ト云ニ。吉備云樣。然ハ早入レ。然ハ停鬼形相可來也ト云ニ。隨天。鬼歸入天着衣冠出來相謁。鬼先云。我是遣唐使也。我子孫安倍氏侍ヤ。此事欲聞。于今不叶也。我ハ大臣ニテ來テ侍シニ。被登此樓テ不與食物シテ餓死也。其後鬼物ト成ル。登此樓人爾無害心イヘドモ。自然ニ得害如此。相逢欲問本朝事。不答シテ死也。逢中貴下所悅也。我子

孫官位侍リヤ。吉備答。某人々々官位次第子孫之樣。七八許令語聞。大感云。成悅聞此事尤極也。此恩ニ貴下ニ此國事皆悉語申サント思也。吉備大感悅。尤大切也云々。天明鬼歸畢。其朝開樓食物持來ルニ。不得鬼害存命。唐人見之彌感云。希有事也ト思。其夕又鬼來テ云。此國ニ議事アリ。日本使才能奇異也。令讀書テ欲笑其誤云々。吉備云。何書乎。鬼云。此朝極難讀古書也。號文選。一部卅卷。諸家集ノ神妙ノ物ヲ所撰集也ト云々。其時吉備云。此書聞テ令傳說哉如何。鬼云。我ハ不叶。貴下具申。於彼沙汰所爲令聞如何。閉樓タリ。爭カ可被出ヤト云ニ。鬼云。我ハ有飛行自在之術。至テ聞ト思ト云。出自樓戸隙。相共到文選講所。於帝王宮率三十人儒士。終夜令講聞天。吉備聞之。共歸樓。鬼云。令聞得哉如何。吉備云。聞畢。若舊曆十餘卷

被求與平ト云ニ。鬼受約與曆十卷。即持來。吉備得之。文選上帙一卷ヲ端々三四枚ヅツ令書天持ルニ。歷一兩日天誦ヲ皆悉成ス。持夫シテ食物荷セテ文選ヲ令送樓。儒者一人爲勅使欲試ル。文選端破テ樓中ニ散置。使唐人來者見之天。各恠天云。此書ハ又ヤ侍ト云ニ。多也ト云テ令與ニ。勅使驚天此由ヲ申帝王。此書又本朝爾有歟ト被問。出來天已經年序。號文選天人皆爲口實誦者也ト申ニ。唐人云。此土在之也ト云爾。吉備見合ト云テ。乞諸直冊卷天令書取。令渡日本也。又聞天云。唐人議云。才ハ有トモ藝ハ必シモアラジ。以圍碁欲試ト云テ。以白石擬日本。以黑石擬唐土テ。以此勝負殺日本國客樣ヲ欲謀間。鬼又聞天。令告吉備。吉備令問圍碁有樣就列樓計組入三百六十目計。別天指聖目。一夜之間案持了之間。唐土圍碁上手等撰

定集テ令打ニ。持ニテ打無勝負之時。吉備偷盜唐方黑石一飲了。欲決勝負之間。唐負了。唐人等云。希有事也極テ恠ト云テ。計石爾黑石不足。仍課ト筮占之。盜テ飲ト云推之大爾爭爾在腹中。然者瀉藥ヲ服セシメントテ。令服呵梨勒丸。以止封不瀉之。遂勝了。仍唐人大怒テ不與食之間。鬼物每夜與食已及數月也。然又鬼來云。今度有議事。爰高名智德行密法僧寶志爾令課テ。鬼物若靈人告トテ。令結界テ。文ヲ作テ貴下ニ讀セント云事アリ。力モ不及ト云ニ。吉備術盡テ居之間。如案下樓。於帝王前令讀其文。吉備目暗テ。凡見此書字不見。向本朝方暫祈申本朝佛神神者住古大明神。佛者長谷寺觀音。也。目頗明ニシテ文字許見ニ。無可讀連樣ニ。蛛一俄落來于文上天。イヲヒキツ、クルヲミテ讀了。仍帝王并作者モ彌大驚テ。如元令登樓互。偏不與吉



備食物欲絶命。自今以後不可開樓ト云ヲ。  
鬼物聞之告吉備。吉備尤悲事也。若此土ニ  
歷百年タル雙六筒。又簞盤侍ラム欲申請  
ト云爾。鬼云。在之ト云テ令求與。又筒棗盤楓  
簞置杯上覆筒。唐土日月被封テ。二三日許  
不現シテ。上從帝王下至諸人。唐土大驚騷。  
叫喚無隙動天地。令占之。術道之者令封隱  
之由推之。指方角ニ當吉備居住樓被同  
吉備爾答云。我ハ不知。若我ヲ強依被冤陵。  
一日祈念日本佛神自有感應歟。可被還我  
於本朝者。日月何不現歟ト云爾。可令歸朝  
也。早可開ト云。仍取筒ハ日月共現。爲之吉  
備仍被歸也云々。江師云。此事我慥委ハ雖無  
見書。故孝親朝臣之從先祖語傳之由被語  
也。又非無其謂。大略粗書ニモ有所見歟。我  
朝高名。只在吉備大臣。文選園基野馬臺。此  
大臣德也。

### 吉備大臣昇進次第

吉備者。右衛士少尉下道朝臣國勝子也。本姓下道。  
天平寶字八年九月十一日叙從三位勳二等。  
卽任參議中衛大將。天平七年四月入唐留學  
生。授正六位下。拜大學助。元從八位下。獻百  
五十卷雜書。色々弓箭具等色目。在續日本紀  
第十二卷。八年正月辛丑叙從五位下。高野天  
皇師之授之。九年二月戊子從五位下。十二月  
丙寅加從五位上。依賞中宮職官人。以眞備  
爲亮也。及漢書恩寵甚深。賜姓吉備朝臣。累  
遷七歲中至從四位上。右京大夫兼衛士督。十  
一年爲太宰少貳。(爲才)天平寶字二年左降筑前。後  
爲肥前守。四年入唐副使。六年六月正四位  
下。任太宰大貳兼造東大寺長官。或未經參議也。天平  
神護二年正月八日任中納言。同三月十六日  
任大納言。同十月廿日任右大臣。大將如元  
年七神護慶雲三年二月癸卯天皇幸大臣亭。  
十四

授從二位。是日幸芳慶也。爲造東大寺長官。寶龜元年十月止中衛大將。同二年三月致仕。<sup>年七</sup>十九。十月二日薨。又說。十月廿二日薨。<sup>年八十一</sup>國史云。八十三云々。生年甲午也。歸朝年紀可尋。

### 安倍仲麿詠歌事。

靈龜二年爲遣唐使。仲麿渡唐之後不歸朝。於漢家樓上餓死。吉備太臣後渡唐之時。見鬼形與吉備大臣談。相教唐土事。仲麿不歸朝人也。詠哥雖不可有禁忌。尙不快歟如何。師清手(拜一)返也。

天の原振さけみれは春日なる三笠の山に出し月かも  
件歌ハ仲九讀歌ト覺候。遣唐使ニヤマカリ  
タリシ。唐ニテ讀歟如何。何事ニマカリタリ  
シゾ可有禁忌之事歟。永久四年或人問師  
遠。

花山院御轅乘犬馳町事。  
清和天皇先身爲僧事。

又被命云。清和太上天皇先身爲僧。件僧望內供奉十禪師。深草天皇欲令補之。而善男奏以停之。件僧發惡心。奉讀法花經三千部。願云。以千部功力。當生宜爲帝王。以千部功力爲善男。可爲其妨。以殘千部功力。當蕩妄執。可離苦得道。此僧命終無幾程。清和天皇誕生。雖爲童稚之齡。依先世之宿緣。觸事令惡於善男。善男見其氣色。語得修驗之價。令修如意輪法。仍則成寵。然而宿業之所答。坐事重罪云々。

菅家本土師氏也。子孫雖多。官位不至事。

被談云。菅家人ハ子孫多シテ官位不至有其故。菅家本姓者土師氏也。河内國土師寺是其先祖氏寺也。而帝王葬斂陵墓。必以人令埋事アリ。漢土之法也。我朝亦以可然也。而件土師氏以土人替之。見格文。仍爲萬民雖施其生恩。奉爲國家不忠也。仍人多官少也云々。

又被命云。高名樓事尙侍也。

伴大納言本緣事。

被談云。伴大納言者先祖被知乎。答云。伴氏文大略見候歟。被談云。氏文ニハ違事ヲ傳聞侍也。伴大納言ハ本者佐渡國百姓也。彼國郡司ニ從テゾ侍ケル。其ニ彼國ニテ善男夢ニ見様。西大寺ト東大寺トニ跨天立タリツト見テ。妻ノ女ニ語此由。妻云。ミル所ノ夢ハ勝ヲサカレヌト合ル。善男驚テ。無由事ヲ語リヌト恐思テ。主ノ郡司ノ宅ニ行向ニ。伴ノ郡司極タル相人ニテゾアリケルガ。年來ハサシモアラデ。俄ニ夢ノ後朝行タルニ。取圓座出向テ事ノ外ニ響應シテ召昇セケレバ。善男成恠テ又恐様。我ヲスカシテ此女ノ云ツルヤウニ無由事ニ付。勝サカムズルニヤト思程ニ。郡司談云。汝ハ高名夢想見テケリ。然ラ無由人ニ語ケレバ。必大位ニ至ルモ。定其

徵故ニ不慮ノ外事出來テ坐事歟ト云ケリ。然間善男付緣テ京上シテアリケル程ニ。七年ト云ニ大納言ニ至ケル程ニ。彼夢合タル徵ニテ配流伊豆國云々。此事祖父所被傳語也。又其後爾廣俊。父ノ俊貞モ。彼國ノ住人語シナリトテ語リキト云々。

勘解由相公者伴大納言後身事。

勘解由相公者有嗣是伴大納言之後身也。伊豆國留伴大納言影。件影等有國容貌。敢以不違。又善男臨終云。當生必今一度爲奉公之身云云。

梨本院爲仁明天皇居事。

又云。梨本院者。在左近府西也。仁明天皇居也云々。見實錄云々。

花山法皇以西塔與院爲禪居事。

河原院者左大臣融家事。

緒嗣大臣家在瓦坂邊事。

緒嗣大臣家在法住寺北邊瓦坂東。仍號山本大臣也。故治部卿大納言被命云。公卿記ニハ在法性寺異今ノ觀音寺是也云々。

仲平大臣事。

治部卿伊房。談云。仲平大臣者富饒人也。枳杞殿一町內。四分之一立桂屋<sup>桂イ</sup>。殘皆立倉庫。珍寶玩好不可勝計云々。

藤隆方所能事。

藤隆方於殿上計其所能十八箇。某爲數。人頗嘲之。

入道中納言顯基被談事。

又被命云。入道中納言顯基常被談云。無咎被流罪。配所ニテ月ヲ見バヤ云々。

忠輔鄉號帥中納言事。大將事。

又被命云。忠輔中納言者世人號帥中納言也。小一條大將濟時遇之云。天ニ何事カ侍ト云ニ。忠輔云。大將ヲ犯セル星コソハ現ヌレ

ト云々。不經幾程。濟時薨云々。

惟成弁號田ナキ弁事。

又云。稱惟成弁號田ナキ弁。初令蒞禁內裡之田并西京朱雀門京中等田之故也。

源道濟號船路君事。

源道濟爲藏人之時號藤原賴貞。荒武藏是也。稱船路君云々。此人不可腹立之時。甚以優也。而性甚惡人也。仍不可向之。船路者天氣和順之日甚以優也。風波惡之時人不可堪之。故稱船路君。

稱藤隆光號大法會師子事。

又稱藤原隆光號大法會師子者。其躰極有威儀。無心情。故稱也。

勘解由相公暗打事。

勘解由相公昔有可被暗打之儀。有國聞之。偷於暗處持油立。偷以其油欲灑打人之直衣袖。明旦知其人以油爲驗云々。



以英雄之人稱右流左死事。

世以英雄之人稱右流左死。

四字皆吳音

其詞有由

緒。昔嘗家爲右府。時平爲左府。其人望也。其後右府有事被流。左府薨逝。故時人稱有人望之者。號右流左死云々。

忠文民部卿好鷹事。

忠文民部卿好鷹。重明親王爲乞其鷹。向宇治宅。忠文以鷹與親王。親王臂之還。於路遇鳥。此鷹頗以凡也。親王則自路歸。返與鷹忠文。忠文更取出他鷹云。此鷹欲令獻上。恐不爲用。則與之。李部王得之還。於路遇鳥放之。鷹入雲去。此鷹五十丈之內得鳥必擊之云々。頗知主之凡飛去歟。

大納言道明到市買物事。

又被命云。往代人多到市買物。道明與妻同車。到市買物。市中有二嫗。見大納言妻曰。君必爲大納言妻。次見道明曰。此人之力歟。

云々。

致忠買石事。

又被命云。備後守致忠元方男買閑院爲家。欲

施泉石之風流。未能得立石。則以金一兩

買石一。件事風聞洛中。件事爲業之者傳聞

此爭運事載奇巖恠石。以至其家欲賣。爰致忠

答云。今者不買云々。賣石之人則拋門前云

云。然後撰其有風流者立之云々。

橘則光搦盜事。

又被命云。橘則光於齊信大納言宅自搦盜。

勇力軼人云々。

保輔爲強盜主事。

被命云。致忠男保輔保昌兄也是強盜主也。事發覺

繫獄之後。致忠到獄召出其身。以己盾觸其身云々。

善相公與紀納言口論事。

善相公與紀納言口論事。

又被談云。善相公與紀納言口論之時。善相

公云。無才博士ハ、和奴志與利始也。低云介利。于時紀家秀才也云々。以之思之。善家無止者也。孝言聞云。龍乃昨合ハ久比布勢良禮多留仁和呂加良須。他獸ハ不倚付者也云々。菅根與菅家不快事。

被命云。菅根與菅家不快。菅家令坐事之日。寬平上皇爲申停止此事。令參。菅根不通仰。皆以遏絕之。是菅根計也。

菅家被打菅根煩事。

菅根無止者也。雖然殿上庚申夜。天神ニ煩ヲ被打也云々。

勘解由相公與惟仲成怨事。

有國與惟仲成怨隙之本緣。有國爲石見前司。惟仲爲肥後前司。奉幣使之間。論云々。

有國以名薄與惟成事。

有國以名薄與於惟成。人々驚曰。藤賢式大。往日一雙也。何敢以如此。有國答曰。入一人

之跨欲超万人之首。

融大臣靈抱寬平法皇御腰事。

資仲卿曰。寬平法皇與京極御休所幾子同車渡御河原院。觀覽山川形勢。入夜月明。令取下御車。疊爲御座。與御休所令行房內之事。殿中塗籠有人開戸出來。法皇令問詰給。對云。融候。欲賜御休所。法皇答云。汝在生之時爲臣下。我爲主上。何猥出此言哉。可退歸者。靈物乍恐抱法皇御腰。御休所半死失顏色。御前駟等皆候。中門外。御聲不可達。只牛童頗近侍。召件童。召人々。轡御車。令扶乘御休所。顏色無色不能起立。令扶乘還御。召淨藏大法師。令加持。纔以甦生云々。法皇依先世業行。爲日本國王。雖去寶位。神祇奉守護。追退融靈了。其戸而有打物跡。守護神令追入之跡也。又或人云。法皇御簾中。融靈參居檻邊云々。

公忠弁忽頓滅蘇生俄參內事。

公忠弁俄頓滅。歷兩三日。蘇生告家中云。令我參內。家人不信。以爲狂言。依事甚懇切。被相扶參內。參自灑口戶方申事由。延喜聖主驚躁令謁給。奏云。初頓滅之剋不覺而至。冥宮門前有一人。長一丈餘。衣紫袍。捧金書札。訴云。延喜主所爲尤不安者。堂上有紆朱紫者卅許輩。其中第二座者嘆云。延喜號頗以荒涼也。若有改元歟云々。事了如夢。忽蘇生因之忽改元延長云々。

佐理生靈惱行成事。

次談話及古事。前與州云。佐理卿平生時。行成卿可書進某所額之由。蒙勅命不被奏。先達候之由。欲書進之間。佐理生靈來而惱行成。及數日而痛惱云々。予謁主殿頭公經之次。語此事。公經答云。佐理存生之間。按察大納言未曾一度不被書額歟云々。

小藏親王生靈煩佐理事。

前中書王隱遁之間。佐理度々依勅宣被書分明無止之勅書等。然間依小藏親王生靈常以煩給。是與州僻事也云々。

熒惑星射備前守致忠事。

又被命云。備後守致忠天曆御時爲藏人。召天文博士保憲有召仰事。致忠爲御使往反之時。粗知天文事。後於廁向人指陳天文之事。忽有射之者。矢中柱。致忠驚云。尤理也。於廁談天文。故熒惑星射吾也。今年有木星之助。故中柱云々。

陰陽師弓削是雄於朱雀門遇神事。

野篁并高藤卿遇百鬼夜行事。

又云。野篁并高藤卿中納言中將之時。於朱雀門前遇百鬼夜行之時。高藤下自車。夜行鬼神等見高藤。稱尊勝陀羅尼云々。高藤不知其衣中乳母籠尊勝陀羅尼之故也。野篁其時

奉爲高藤。致芳意。令遇鬼神云々。

野篁爲閻魔廳第二冥官事。

其後經五六ケ日。篁參結政。剋限。於陽明門前。爲高藤卿。被切車。簾轡等云々。于時篁左中弁也。卽篁參高藤祖父冬嗣亭。令申子細之間。高藤俄以頓滅云々。篁卽以高藤手引發。仍蘇生。高藤下庭拜。篁云。不覺俄到閻魔廳。此弁被坐第二冥官。仍拜之也云々。都督爲熒惑精事。

匡房ヲハ世人有謂云々。可聞事侍也。先年陰陽道僧都慶増來云。世間人。殿ヲハ熒惑精ト申也。然者閻魔廳乃訴仁仕ラントテ來也云々。聞此事以來。身モ事外也ト思給也。唐太宗時ニソ熒惑精ハ燕趙間山ニ降タリケル。李淳風ト云者。熒惑ノ精降ヌト云ケレハ。太宗遣人令見ニ。白頭ノ翁アリ云々。又李淳風モ熒惑精也。如此ノ精皆有ル事也云々。

郭公爲鶯子事。

戶部卿談曰。郭公者非眞也。負沓手タル鳥ノ呼云。保止々岐爪。保止々岐爪止云也。眞實郭公鳥者。隱居於卯花垣云。(保止々岐爪止云)コトコトシト云也。又万葉集云。藍縷鳥者鶯子也。昔人宅之樹蔭ニ造巢生子。漸生長之比。近臨見之。自鶯頗大鳥。羽毛漸具ニハ。舐其羽。卽奇思之間。ホト、キスト鳴去了云々。

嵯峨天皇御時落書多々事。

嵯峨天皇御時。無惡善ト云落書。世間爾多々也。篁讀云。无惡サガナ善ヨカリト讀云々。天皇聞之給天。篁所爲也ト被仰天蒙罪トスル之處。篁申云。更不可作事也。才學之道。然者自今以後可絶申云々。天皇尤以道理也。然者此文可續ト被仰令書給。(續ト)十廿卅五十海岸香。有怨落書也。二門口月ハ三中トホス。市中用ニ小斗一



唐ノケサウ文谷傍有欠。欲ニ日本返事。

木頭切月中破。不用。

ツキヨニハコヌヒトタルカキクモリアメモフナシコヒツ、モネン  
一伏三仰不來待書暗降雨慕漏寢。如レ此讀云々。

粟イ粟天一沼。深イ沼郡イ坂

或合爲市ニハ有砂々々。

又左繩足出。志女砥與布。

波斯國語。

一サ、カ。 二止ア。マイナカ。 四ハ。ナム。 五利摩。

六ナム。免九。 八玄美。羅。 九佐伊。沙羅。 十盧。

廿止ア。卅。 卅アカ。肥波。 卅不盧。百。 百セ、羅止。 千ヒ、保。

松浦廟事。

件宮者。綱時大臣也。

古塔銘事。

又云。古塔銘云。粟天八一。スナ、ヤツナリ此文未被讀云々。

件塔在所可尋也云々。

疊上下事。

又被談云。知疊上下。天可敷事也。面庭ヲ裏仁

折返天間付タルヲ上ト知也。不折天只付ヲ下仁可敷也云々。

名物。

被命云。高名物等被知哉如何。

笛。

大水龍。小水龍。青竹。葉二。柯亭。

讚岐。中管。釘打。庭筥。

橫笛事。

橫笛者大水龍。小水龍。天曆御時寶物也。

葉二爲高名笛事。

又被命云。葉二者高名橫笛也。號朱雀門之鬼

笛是也。淨藏聖人吹笛。深更朱雀門鬼大聲感

之。自爾此笛乎給。件聖人云々。其後次第傳

之在入道殿。後一條院御在位之時。以藏人

某召此笛。藏人不知笛名。只はふたつまい

らせさせたまへと申ニ。入道殿何事モ可承

ニ。齒二古曾得かくまじけれ。若此葉二ノ笛歟

トテ令進給云々。

穴貴爲高名笛事。

又被命云。穴貴ト云笛ハ高名笛也。雖然損

失之。式部卿宮吹此笛之時。御衣上雪降懸タ

リケルヲ打拂之間折了云々。

小螺鈿笛被求出事。

又被命云。小螺鈿高名笛也。一條院御時比失

了。仍旁被祈請之間。五七日許御湯殿下ニ有

之。見付之御覽ズルニ。空以朽了。仍少々切

之。其後尙其音美也云々。

博雅三位吹横笛事。

被談曰。博雅三位。横笛吹ニ鬼瓦吹落ルト。被

知哉如何。答曰。慮外承知候也。

笙。

大蚶界繪。小蚶界繪。雲和。法花寺。

不々替。小笙。

不々替爲高名笙事。

又被命云。不々替是笙名也。唐人買之。千石

ニ買ト云。伊奈加倍志低云介禮波。以之爲名

云々。

琵琶。

玄象。牧馬。井手。渭橋。一名爲堯。木繪。

元興寺。小琵琶。無名。

玄象牧馬本緣事。

予問。玄象牧馬元者何時琵琶哉。答云。玄象牧

馬者延喜聖主御琵琶歟。件御時。琵琶上手玄

上ト云モノアリ云々。予又問云。然者依件名

令付歟。被命云。委不覺也。

朱雀門鬼盜取玄上事。

玄上昔失了。不知所在。仍公家爲求得件琵

琶。被修法二七日之間。從朱雀門樓上。頸仁

付繩天漸降云々。是則朱雀門鬼盜取也。而依

修法之力。所顯也云々。

井手愛宮傳得事。

井手ト云琵琶高名者也。延喜孫ニ天十五宮子成明仁愛宮ト中人ノ琵琶。傳今在宇治寶藏。渭橋又高名琵琶也。三條式部卿寶物也。

### 小螺鈿事。

小螺鈿高倉宮琵琶也。木繪琵琶又有殿下元興寺一名〔校オ〕號切琵琶。後冷泉御寶物也。元ハ元興寺ノ財也。而後冷泉院東宮之時。件寺別當爲充寺修理用途。後朱雀院以納殿金令買之。獻東宮給也云々。今傳在殿下。无名ト云高名琵琶ヲ上東門院寶物ニテ令持給之間ニ。濟政三位ノ三條亭令御座之間。燒亡了ト云々。

### 元興寺琵琶事。

元興寺ト云琵琶ハ名物也。爲修造仁遣保仲許之間。念珠造盜取切尻了。仍號切琵琶。後冷泉院寶物也。

### 小琵琶事。

小琵琶高名之物也。件琵琶者音甚細カリケレハ。大過ナリトテ。宇治殿當時上手等召集可レ舞腹之由被仰天。爲恐靈物召有行被卜筮。卜筮可也。

### 博雅三位習琵琶事。

博雅三位會坂目暗ニ琵琶習事被知乎如何。答曰。不知。談曰。尤有興事也。博雅高名管絃ノ人ニテ。イミシク道ヲ重ク求ニ。會坂目暗琵琶寂上之由風聞。世上人々雖令請習。更以不得。又住所遠以ところせくて。行向人少々也。博雅先以下人内々にいはするやう。なとかくて不思議所ニハ住ヌルソ。京都ニ居テ過よかしとすかすに。目暗詠歌曰。

世中はとても斯ても過してん宮も葦屋も果し無れば  
ト詠テ不答。使者以此由云爾。博雅思様。此目暗命有旦暮我モ壽不知子トモ。尙流泉啄木ト云曲ハ此目暗ノミコソ傳ケレ。相構テ

聞彈欲傳之處。三ヶ年間夜々向會坂目暗許。竊立聞宅頭。更以不彈。三年ト云八月十五夜。ヲロ／＼クモリタルニ風少シ吹。博雅思樣。アハレ今夜ハ有興夜カナ。會坂目暗。流泉啄木ナトハ。今夜カ彈ラント思テ。琵琶譜ヲ具テ向會坂。如案琵琶ヲ鳴ラシムル程。盤涉調ニ鳴。博雅聞テ尤有興。啄木ハ是盤涉調也。今夜此絃鳴。定テ欲彈カト思テウレシク思間。目暗獨遣心テ。人モナキニ詠哥曰。

逢坂の關の嵐の烈敷にしひてそゐたる世を過すとて

ト詠テ鳴絃ニ。博雅頻啼泣ス。好道アハレナリトオモフニ。目暗獨又云。アハレ有興夜カナ。若我ナラススキ者夜世間ニアラナム。今夜コ、ロ得タラン人ノ來遊セヨカシ。物語セント云ヲ聞テ。博雅出音云。博雅コソ參タレト云ケレハ。目暗云。タレニカヲハスルト

間ニ。然也ト答。目暗ヲトニ聞ケレハ。感シテ物語シテ。遣心令傳。件曲ニ云々。博雅依不隨身琵琶。只譜傳請歸云々。諸道之好者。只可如此也。近代作法誠以不可有。サレハコソ上手ハ諸道ニアレ。近代仁無事也。誠以アレナリト被談ニ。又問云。件曲近代アリヤ。被答曰。第一世無双者。代團亂旋ソ。第一ノ曲ニ用也。傳者少。件人所傳也。

和琴。

井上。鈴鹿。朽目。河霧。齊院。宇多

法師。

鈴鹿河霧事。

和琴ハ鈴鹿。是累代帝皇渡物也。河霧故上東門院ニ渡テ令持給之時。故大臣殿任右大臣。令初參。給引出物ニ被獻。仍在殿下。宇多法師。寛平法皇御和琴也。御遊之時。先御多良志止召云々。



箏。

大螺鈿。小螺鈿。秋風。

三鼓。

黑筒。神明寺。號三神明黑筒。

左右大鼓分前事。

又被命云。大鼓乃左右ヲ知事ハ。左ニハ靱繪乃數三筋也。又筒モ赤久色採也。右ハ靱繪乃數二筋。又筒モ青久色採也。

帶。

唐雁。落花形。垂無。鵝形。雲形。鶴

通天。鵞通天。

帶ハ唐雁。落花形。共有御堂寶藏。

劔。

壺切。

壺切者爲張良劔事。

又被命云。壺切ハ昔名將劔也。張良劔云々。雄劔ト云。僻事也云々。資仲所說也。

壺切事。

劔ハ壺切。但壺切燒亡歟。未詳。件劔ハ累代東宮渡物也。而後三條院東宮之時。廿三年之間。入道殿不令獻給云々。其故ハ。藤氏腹東宮之寶物ナレハ。何此東宮可令得給乎云々。仍後三條院被仰之樣。壺切我持無益也。更ニホシカラスト被仰ケリ。サテ遂ニ御卽位ノ後。コソ被進ケレ。是皆古今所傳談也云々。

硯。

露。鷄冠木。

高名馬名等。

赤六。穗坂。十七栗毛。戀地。鳥子。

尾白。榛原。翡翠。若菜。別栗毛。御

坂。近江栗毛。三月月。本白。和琴。

宇都濱。穗檀。糟毛。鳥形。花形見。

野口。宮橋。前黑糟毛。後黑糟毛。望月。

宮城。野里。尾花。日差。蝶額。大廿

子。小甘子。白紵。夏引。

近衛舍人得<sub>レ</sub>名輩。

尾張安居。

童名安居。不<sub>レ</sub>改用訓云々。

六人部助利。

尾張

宣時。山廣景。播磨武仲。播磨定正。茨

田助平。下野重行。土師武利。清井正武。

一雙隨身等。

村上御時。兼時。重行。安信。武久。

圓融院御時。安近。武文。

一條院御時。正道。公忠。

後朱雀院御時。近俊。助友。

後冷泉院御時。近重。助友。

隨身者公家寶也事。

故帥大納言常談云。隨身ハ公家之寶也。三條

院御時正近ナトカ様者可。有難云々。一生之

間不<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>競馬云々。

自餘寶物者註別紙云々。

江談抄第四

蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。白。

古人傳云。此句文集第一句云々。故源右府仰

云。不<sub>レ</sub>避三連之句也。難爲<sub>レ</sub>規模云々。

苑花如雪同隨輦。宮月似眉伴直廬。白。

此詩文集中有兩所云々。在天寶樂叟長韻

詩。又在四韻詩云々。

鳳池後面新秋月。龍闕前頭薄暮山。白。同。斐李文。天拜編閣詩。

此詩可尋之。文集歟。洛中集歟。見卷集云々。

或名紫集。

醉中賞翫欲其奈。未得將心地忍之。白。宴翫。半開花。

延喜御製。

故老云。此落句下七字。講師讀師詩。儒味不

諸於<sub>レ</sub>歡情。被<sub>レ</sub>仰其由。儒者恐。

閑閣唯聞朝暮鼓。登樓遙望往來船。行幸河陽館弘仁御製。

故賢相傳云。白氏文集一本詩。渡來在御所。尤

被秘藏。人敢無見此句在彼集。叡覽之後即行幸。此觀有此御製也。召小野篁令見。即奏曰。以遙爲空寂美者。天皇大驚勅曰。此句樂天句也。試汝也。本空字也。今汝詩情與樂天同也者。文場故事尤在此事。仍書之。

進箏纔抽鳴鳳管。

蟠根猶點臥龍文。

清涼秋月曾承露。

和暖春天始掃雲。

禁廷被種竹。偶述事。中書王。

鄴口呈諸好事。中書王。

故老傳云。延長末移立清涼殿於醍醐寺。更又

改作。如本種竹云々。

白雲似帶圍山腰。青苔如衣負巖背。在中詩。

こけ衣きたるいはほはまひろけむきぬく山

のをひするはなと。（ふるかなと）

女房。

年々別思驚秋雁。夜々幽聲到曉鷄。掃衣詩。後中書王。

後中書王文藻。此詩以後。萬人歎伏云々。

雲衣范叔羈中贈。風櫓蕭湘浪上舟。賓鴻是故人。同人作。

古人云。范叔與蕭湘所謂雙聲側對也。以蕭

湘范叔歎云々。又云。作秋雁數行書詩之時。以言匡衡共詠此句云々。

鹿鳴猿叫孤雲慘。葉落泉飛片月殘。秋聲多在山人。同人。

此詩六條宮有雄張之御氣色。而覽以言衆類

曉興林頂老之句。大令歎息。妬氣結云々。

離家三四月。落淚百千行。

萬事皆如夢。時々仰彼蒼。

雁足粘將疑繫帛。鳥頭點着憶飯家。蒼家。

此句。謫居春雪絕句也。而天曆之時於比良宮

御詔宣有之。志於我之者。可詠此等句云

云。

家門一閑幾風烟。筆硯拋來九十年。

每仰蒼穹思故事。朝々暮々淚漣々。天滿天神正曆四年

御託宣。

落花狼藉風狂後。啼鳥龍鐘雨打時。朝綱。送殘春。

楊巨源詩。有狼藉龍鐘。爲對之詩云々。

天山不辨何年雪。合浦應迷舊日珠。禁庭詠月。三統理平。

故老傳云。講詩之間。讀師早置他詩。延喜聖

主仰而不令讀。再三誦此句。作者不堪感。叩

膝高感曰。アハレ聖主哉。聖主哉。時人笑之。

金波卷霧每相思。不似涼風八月時。天德三八十六內裏

詩合與月  
有秋期。

右方作者直幹。或人密云。江納言維時欲評定

此等詩。仍左方雇納言令作云々。

汝陽簾篠遙分韻。巴峽泳泉近報聲。同詩合。秋聲曉管絃。

銀管吹時鸞發響。玉徽彈處鳳和鳴。

感成一曲羌人念。夢斷三更叔夜情。

孤竹當脣秋月色。孫桐應指曉風輕。

右方作者。或人曰。欲評定此詩者。江納言維

時者。右方人密屬納言令作。占手絕句與此

寂手（八十一）二韻云々。

青嵐漫觸粧猶重。（清才）皓月高和影不沈。省試御題。山明望松雪。

蒼在明。

古人評定以前。延喜聖主詠此句。彈御琴。諸

儒傳承令及第。

着野展鋪紅錦繡。當天遊織碧羅綾。

洗開塾戶雪翻雨。投出蟠龍水破氷。（日才）野

相公。

古老相傳。昔我朝傳聞唐有白樂天巧文。樂

天又聞日本有小野篁能詩。待依常嗣來唐

之日。所謂望樓爲篁所作也。篁副使入唐之

時。與大使有論不進發。會昌五年冬樂天已

亡。而後年也。文集渡來。中篁所作相同之句三

矣。野草芳菲紅錦地。遊絲繚亂碧羅天。野蔭人

拳手。江蘆錐脫囊。元和小臣白樂天。觀舞聞

歌知樂意等句也。天下珍重篁者也。

五嶺蒼々雲往來。但憐大庾萬株梅。（名才）

廣州山中嶺有五。其一在大庾。嶺上多梅樹。

南枝先花開。此御屏風詩題目者。左大弁大江

朝綱奉勅自坤元錄中撰進三人作詩。卽朝

朝綱奉勅自坤元錄中撰進三人作詩。卽朝



綱文章博士橋直幹。大內記菅原文時也。參議大江維時蒙詔評定。采女正巨勢公忠畫。左衛門佐小野道風書。竝當時秀才也。惣八帖廿首。三人作六十首。撰定江十首。橋二首。菅八首。作者瀝思不如。此詩。或人云。紀在昌不入作。內心竊爲歎云々。

氣霽風櫛新柳髮。

永消浪洗舊苦鬚。內宴春暖。都良香。

故老傳云。彼此騎馬人。月夜過羅城門。誦此句。樓上有聲曰。阿波禮阿波禮。文之神妙自感鬼神也。

周墻壁立猿空叫。

連洞門深鳥不驚。大內應試。藤博文。

延喜二年十月六日於大內。有此試。召秀才進士等。博文于時秀才也。此句有歡感。應及第者二人。博文。藤諸蔭也。博文補藏人所雜色。諸蔭亦候同所。惣參者十人。不參者三人。舉直朝臣云。彼時博文者只候於所。以諸蔭被補雜色也。口傳云。延喜聖主勅曰。博文詩

得作文辭。然者諸蔭詩者每句上字用逸人名。才有餘力也。以之爲優矣。仍抽被補雜色云々。

自有都良香不盡。後來賓館又相尋。鴻臚館南門。都良香。故老傳云。裴感此句尤甚。但作者定改姓名間。凡時人大感云々。

與君後會應無定。從此懸望北海風。送裴大使。裴都在中。

故老曰。在中任越前掾。於彼州與裴結交。臨別呈詩。裴大感。但不蒙勅命。任意寄詩之由。朝家可被召問處。而聞裴有感慨寬宥云々。

暗作野人天與性。狂官自古世呼名。陶好古。野相公。故老傳云。野相公爲人不羈好直。世妬其賢。呼爲野狂。是則筆字音狂字音也云々。仍作此句。

河畔青袍雖可愛。小臣衣上太無心。正月編叙。草牙生。內宴雪盡。

依此句叙位。臨時。

悲盡河陽離父昔。樂餘仁壽侍臣今。

淳茂昔與老君謫行之日。爲公使被駟路宿于河陽驛。一宿之後分去。曉遙拜。談遂不再逢。今侍仁壽殿下。至恩勅命。預榮級。悲至。

飛當時涕淚一似故云々。

悲倍夜蛩鳴砌夕。淚催黃葉落庭晨。秋懷。藤後生。

箕裘欲絕家三代。水菽難酬母七旬。

此詩經天覽。蒙方略宣旨云々。

雙淚幾揮巾上雨。二毛多鋪鏡中霜。難行爲。述懷。

右兵衛督嶋田忠臣爲五位藏人之時。以此詩入天覽。有哀憐蒙登省宣旨。

醉望西山仙駕遠。微臣淚落舊恩衣。內宴。昭宣公。

公家傳文云。元慶四年正月廿日侍宴座。謂左右曰。前陪太上皇命。此宴今日所着太上皇

脫下御衣也。此日應製詩末句及之。滿座感動。

或有拭淚者。于時太上皇御水尾山寺。

且飲且醒憂未忘。會稽山雪滿頭新。賦。消酒雪中。天。越前。操管宣斯。

是詩山城守雅規所作與也。滿座褒賞。斯宣悲泣。人悉解頤。斯宣于時七十。

莫言撫養猶如子。此字反音是息郎。題家南階下。忽生桑樹。

時人美之。妬能者自先思。此句被裁之。相

公聞咲之。江相公。

百里奚車長可轄。五官掾火遂無燃。省試御題。晏天降。豐澤。

大江如鏡。

或人云。可爲佳句。天皇頻誦之。世以奇之。但

依他句字誤落第。本作不轄。江相公改換長

可轄。高感悉爲人作云々。

三千世界眼前盡。十二因緣心裏空。晚夏。遊竹生。嶋。述懷。都。

良。

故老傳云。下七字作者難思得。嶋主弁天才告

教之。

巫巖泉咽溪猿叫。胡塞笳寒牧馬鳴。驛馬閣聲相應。苦雅。燃。

竹露松風幽獨思。瑤箏玉瑟宴遊情。

題者管吏部。此日貫首上卿橋大納言好古。再三朗詠誦曰。腸斷々々。但牧馬者。定是文馬也者。言及天聽。散感專深。

鴻漸散間秋色少。鯉常趨處晚聲微。於三管師匠舊亭一賦。一葉落庭。保胤。

故老云。文時沒後於舊亭所作也。故有心。

蘭蕙苑風摧紫後。蓬萊洞月照霜中。花寒菊點。叢菅三品。

香依德暖。爐烟散。影爲恩深。□砌融。

故老云。此詩深可案云々。

楊貴妃飯唐帝思。李夫人去漢皇情。對雨戀。源順。

故老云。數年作設。而待八月十五夜雨。參六

條宮所作也云々。

瑤池便是尋常號。此夜清明玉不如。月影滿。秋池。菅淳茂。

故老云。淳茂此詩於河原院講。上皇被仰云。

此夜所恨者。先公不見之云々。北野御事歟。(也才)

詞託微波。雖且遣。意期片月欲爲媒。代牛女。待夜。

古人傳云。此度文時與輔昭父子相論詩云云。

蒼苔路滑僧飯寺。紅葉聲乾鹿在林。(不可拍才)

本作之滑字。或人訓云。押不可然云々。

胡角一聲霜後夢。漢宮万里月前腸。王昭君。朝綱。

霜字此韻要須字也。然而犯大韻作之。

班姬裁扇應誇尙。列子懸車不往還。清風何處。隱。保胤。

本上句。麗人展簾宜相待云々。而後中書王

被改作云々。

山投燐燐秋雲晴。海□恩瀾曉月涼。□

此詩源爲憲之作也。後聞一條院令感給。稱自

作云々。

爲深爲淺風聲晴。何紫雲影秋。夜闌不。弁。レ色。以言。

古人云。滿座相感云。文集能一も有けるはと

云々。

扳提河浪應虛妄。耆闍峴雲不去來。常住此說。法。以言。

或人云。此句文之神妙者也。

以佛神通爭經。僧祇劫欲朝宗。弘誓深如海。以言。

此句吟字。夕作基。大之朝宗爲對之也。寂心

上人見之。感歎頗有妬氣。

仁壽殿中謁聖人。殘櫻景暮哭慇懃。

水成巴字初三日。源起周年後幾春。

此詩作詩舊者也。凡薦茂作詩哀歎。於弟子

習其跡。增其風心者也云々。

春娃眠足鴛衾重。老將腰瘦鳳劍垂。以言。

此詩題。弱柳不勝鴛云々。匡衡朝臣聞此題。

謂以言云作上句七字。下七字可繼云々。以

言次其末。二人共感歎各終一篇。故件句共

在二人集。

龍宮浪動群魚從。鳳羽雲起百鳥鳴。以言。

題。松爲衆木長。此句古人號大似物。或人云。

此句不甘心。然入本朝秀句如何。

多時縱醉鶯花下。近日那離獸炭邊。火是臘天春。輔昭。

獸炭羊琇所作也。

外物獨醒松澗色。餘波合力錦江聲。山水唯紅葉。以言。

故橘工部孝親被語云。少年向江博士宅。匡衡

博士云。此句冠宮書之曰。以言詩可謂日新。

九枝燈盡唯期曉。一葉舟飛不待秋。於鴻臚館錢紀客著薦茂。

薦茂。

此詩下句作之。不能作上句。語合於朝綱。朝

綱被諫曰。可作燈之由。仍所作。

蘇州舫故龍頭暗。王尹橋傾雁齒斜。問江南景物白。

江從巴峽初成字。猿過巫陽始斷腸。白。送蕭處士遊黔南。

件詩天曆御時。朝綱文時依勅撰進文集第一

詩。其不相議。獻此四韻云々。申云。至一句

者雖有勝。以備四韻所進也云々。

三五夜中新月色。二千里外故人心。白。八月十五夜禁中對月。

寄元九。

新月人以爲微月初生也。齊信公任被相論。

以此詩爲證。夕見東方之月也。

蝸牛角上爭何事。石火光中寄此身。對酒。



此詩自「往古」有「諸說」云々。

可憐九月初三夜。露似眞珠月似弓。暮江吟。

古人傳云。憐字訓樂也。避禁諱之時可用「件」訓。

不是花中偏愛菊。此花開後更無花。十日菊。元。

隱君子鼓琴時。元稹靈託人稱曰。件詩開盡也。後字不可然。或謂嵯峨隱君子吟此詩彈

琴。從天如絲者下來云。我自愛此句之貴。其靈依有宿執。聞琴不堪甚感。

螢火亂飛秋已近。辰星早沒夜初長。元。夜座。

辰星古來難儀也。但見漢書曰。仲月之星也。今過五月當六月故云々。

四五朵山粧雨色。雨三行雁點雲聲。杜荀鶴。淮陽道中詠。

古來難義也。但大略見古集。以蓮喻山也。呂

榮望花山詩云。花岳陰森秀色濃。削成三朶碧

芙蓉。張方古女兒山詩云。空唱香兒在山上。碧

玉蓮花數朶高云々。

聖皇自在長生殿。不向蓬萊王母家。楊衡。上卷詞。

蓬萊王母家二所歟。

再三憐汝非他事。天寶遺民見漸稀。白。贈康聖。

再度三度之三可用去聲。而用平聲。

踏沙披練立清秋。月上長安百尺樓。文集。八月十五夜詩。

此詩朝綱卒去之後送數年。於相公二條京極

梅園舊亭。八月十五夜時。好士有□輩。翫月

到彼梅園舊亭。有老比丘尼一人出來。問曰。

誰人令遊給哉。故宰相殿之人遺唯尼一人也。

彼家奴共天死。尼亦不知。明旦云々。好事人

人彌以感歎拭泣。（夜オ）然問尼云。抑月ハ上長安ノ

百尺樓詩。不似往日相公之詠。月ニトコソ被

詠シカ。只古也。月ニヨリテ上。百尺樓也。月

ハナニシニ樓ニハ可登ソト云ニ。人々皆信

伏問。尼答云。故宰相殿ノ物語ナリ。依人々各

給纏頭。終夜語了。相公之風詠珍重云々。

逐夜光多吳苑月。每朝聲少漢林風。秋風。隨日落。詩後中書王。

漢林事。人々伊鬱曰。若漢之上林苑離合任意也云々。宮以詞林被爲證。人々歎伏。以言云。此句雖佳句。於中書王御詩不如八葉風聲

承祖業。一枝月桂作孫謀句云々。

忽驚朝使排荆棘。官品高加感拜成。

雖悅仁恩覃遽竄。但羞存沒左遷名。

被示贈左大臣宣命勅使詩。正曆四年。

被贈太政大臣之後託。正曆五年四月。

昨爲北闕蒙悲士。今作西都雪耻尸。

生恨死歡其我奈。今須望足護皇基。

吾希段干木。優息藩魏君。

吾希魯仲連。談笑却秦軍。

此詩天滿天神令詠之人每日七度令護卜誓

給之詩也。

東行西行雲眇々。二月三月日遲々。菅家後集。讀樂天北窓三友

詩古調。

此詩及後代。菅家人室家令尋北野。令詠之

間。天神令教テ曰。トサマニユキ。カウサマニユキ。クモハル。キサラキ。ヤヨヒ。ヒウラウラト可詠云々。

點着雖黃天有意。歎冬誤綻暮春風。題不詳。作者不詳。或云。清慎公小野宮宴。無今作者云々。

大隅守清原爲信云。故親父典藥頭真人相談

云。昔中書大王爲大納言之時。謂彼大王第

地富風流。天縱煙霞。當青陽之時。暮見黃花

盛開。于時大王憑欄干吟詠此句者。其人於

朱雀院所作也。見其氣色稱譽作者也。爰父

真人從容言。歎冬和名。山不々支。見於本草。

其花冬開。今以歎冬爲山吹名誤也。於是中

書大王感悟云。若於學者不可言詩矣。

唯知秋昔爲情感。三五晴天徹夜遊。江影泛秋池。江村公亭。

古人相傳。昔有凶人告相公曰。江納言常曰。

相公巧詩於才淺也。相公聞之。亭子院詩席。

江納言必爲講師。相公作此句。誤欲令讀。而

如「作者心講之。相公大感。昔猶夜。爲猶教也。」

合雨嶺松天更霽。

燒秋林葉火還寒。延喜御屏風詩。幽居秋

晚。後江相公。

奏此詩等。宣旨。還寒等音。同音如何。

巖前木落商風冷。

浪上花開楚水清。

天曆御屏風詩。營三品。

青草舊名遺岸色。

黃軒古樂寄湖聲。

彼時聞者傳。作者以此句不入爲愁。判者聞

之曰。黃帝張樂於洞庭之野。尤其是強文第一。

專非詩。作者聞之彌久愁。後代臨終常吐。怨

詞云々。又故大府卿江匡衡云。坤元錄屏風洞

庭詩云。黃軒古樂之句。維時難云。如莊子成

莫落文。天地之間有洞庭之野。非大湖之洞

庭云々。此難頗強難歟。文章有所許歟。或人

問云。件事以其調非詩詞爲難歟。被答曰。此

爲憲案僻事。注千載佳句注也。非件儀。只非

大湖之洞庭之義也。

裴文籍後聞君久。逢渤海裴茂。營禮部孤見我新。大使有感。

故老曰。裴公吟此句泣血云々。裴璆者裴迥子

也。迥以文籍少監入朝。營相公以禮部侍郎

贈答。有此句。

此花非是人間種。

瓊樹枝頭第二花。

暮春於孫王書亭賦花。

後江相公。

此花非是人間種。

再養平臺一片霞。

名花在蘭軒。營三品問題。

傳聞。于時相公爲文章博士。吏部爲秀才。作

同七字。其下句意各異。江作「二郎意。營作「親

王子被親養。王已孫桃園源納言。其後養者十二

親王。時人難詳下七字勝劣。于今爲美談。又

云。朝綱被稱云。後代人以予并文時爲「一雙

歟。

長沙鵬翅山行急。

大沛龍鱗怒不深。

內宴有勅。初賜芳緋。

不填感淚。伏抽中懷。敬上員外納言。

獻此詩後夢家君仰云。汝淳茂。何喜乎。覺後數

日病惱。

欲識酒々流出處。

南陽平氏是清源。

賦置酒如淮。江相公。

北堂戲讚州平刺史贈物作也。此詩注云。坤元

錄云。淮水出南陽平氏縣。故云。刺史者平中典

也。爲讚岐守之時。招秀才以下學生以上於

本堂。羞膳頌紙。相公爲秀才作此句。中典朝

臣感此句。同車坂宅授女子云々。

今宵奉詔歡無極。建禮門前舞蹈人。及第。

宗岡秋津久住大學。不趁時世。延喜十七年

十一月四日奉試日及第。同月十三日外記記

云。秋津久住學館。年齡已積。頻逢數年之課

試。常歎一身之落第。今年適逢天統之聞。忽

預及第之列云々。故老傳云。昔有老生拜舞

大庭。青衫映月白髮戴霜。夜行宿衛奇而問

之。老生無答只詠此句。吟詠之趣無知。仍召

其身參藏人所待之人驚尋由緒。事及天聰

問其姓名。勒云。今日依勅及第文章生秋津。

深感天恩。竊拜紫庭也。

寒瀨帶風薰更遠。

夕陽燒浪氣還長。

菊潭水自香。淳茂。

右承句。詞意清新。能傳家樣。可謂拾虬龍之

片甲。得鳳凰之一毛者也。延喜聖主依太上

法皇詔。令評定宴詩。令奏給御書某言。右近

權中將衆樹朝臣持菊潭水自香應製詩示之。

兼傳詔旨。評定此詩篇可否。臣素無別經渭

之清濁。何足知詩語之識議。一臨藻鑒。推辭

露膽。而天旨重降。無地逃命。忘其妄動。叙

彼優劣。抑詩雖舉。編要在被煩辭。故摘一兩

句。次第高下而已。無可無不可者。猶反覆不

注勸之。某謹言。

涯頭百味非由擣。

浪上桺檀不待攀。

右辭句雖滯。思風間發。或興味雖老。言泉流

利。採彼補此。各有作者之旨。

近臨十二因緣水。

多勝三千世界花。

紅梅花下作。應太

上法皇製。



故老傳云。講此詩之間。滿座感歎。江相公獨

不許。法皇問。奏云。十二因緣是煩惱也。不圖

禪定法皇蓋煩惱水。衆人忽驚。

見如冰雪。融如桐。侍女傳從翻帳中。贈納言。

寬平二年四月一日。依例賜群臣飲。別勅掌

侍藤原。且子願賜御扇。以詩取思。

眞圖對我無詩興。恨寫衣冠不寫情。像眞菅贈大相國。

見渤海裴大使眞圖有感云々。

鄉淚數行征戍客。棹歌一曲釣漁翁。山川千里月。保胤。

入詩境之由。彼師匠菅三示給。一曲字人々難

之。作者云。黃河千里一曲云々。

陶門跡絕春朝雨。燕霞色衰秋夜霜。閑中日月長。以言。

燕霞造化云々。今案。許渾贈殷堯藩詩。有可

淮之事。

一行斜雁雲端滅。二月餘花野外飛。春日眺望。

或人云。依閏二月許作。二月餘云々。而見正

筆草。無閏月事。又或人云。孝言佐國二月餘花

說相論云々。

万里東來何再日。一生西望是長襟。

或人云。此句詩之本樣云々。可被案之。

蒼波路遠雲千里。白霧山深鳥一聲。橋直幹。石山作。

翫然入唐。以件句稱已作。以雲爲霞。以鳥

爲虫。唐人稱云。可謂佳句。恐可作雲鳥。

山腰飯雁斜牽帶。水面新虹未展巾。春日閑居。都在中。

於後入道殿被賦。秋雁數行之詩。匡衡以言

二人。終夜竝詠此句云々。

多見栽花悅目儔。先時豫養待開遊。栽秋花。在兩。菅

三品。

待開遊。末生等伊鬱。然者以文集待我遊。可

爲證。豫養見後漢書帝紀云々。

花色如蒸栗。俗呼爲女郎。順。詠女。蓮花。

或云。近日以栗爲栗可恠之。檢文選注。木名

也云々。

文峰案。轡白駒影。詞海艤舟紅葉聲。秋未出。詩境。以言。

以言初作駒過影葉落聲云々。六條宮見草被書白字肝要之由。仍改作云々。以言與齊名被相試日承作云々。齊名常以爲愁。稱曰。寂手片廻何謀計云々。齊名臨終宮被訪。報命恩旨恐悚千廻。但白字事不忘却云々。又大府卿談曰。件題齊名作。霜花後發詞林曉。風葉前駈飛驒程。至于七字。風之駈葉涉前駈之義尤有興。霜花後發甚以無由。彼□齊名云。以言詩白駒之白字。六條宮不令直者。劣於我詩マシ。久而件詩雖不直。紅白二字。案艤兩字古題意未出之心籠。此義之中。然則可謂勝齊名霜花之句歟云々。或人問云。但不直字者駒過景葉落聲二字。讀甚以碎歟。答云。無白字者非讀碎。上句無秋心歟。白駒者秋也。白字直千金也。

林露校聲鶯未老。岸風論力柳猶強。尚齒會詩。菅三品。輔昭講云。強字誠強也。文時被講可案由。數

知案後。申無可改字由。文時曰。予無計所案也。

人烟一穗秋村僻。猿叫三聲曉峽深。秋山閑望。紀納言。

人烟近代忌之不作。

飯嵩鶴舞日高見。〔補略〕晴後山川清。以言。

件以言詩。被講之時。以言卽爲講師。讀件句之時。飯嵩二字。飲渭二字。音連讀之。若有其由歟云々。爲憲朝臣同在其座。件朝臣每文場所隨身之囊。名曰書囊〔釋〕。此入抄筆之器也。聞講此詩不堪情感。入頭於囊而涕淚數行。時人或感或笑云々。慶滋爲政同在此座。後日難曰。此詩犯忌諱龍昇字。尤可避之。是黃帝登遐事也云々。以言聞之微笑。不敢陳一言。大略不足言歟。

摩訶迦葉行中得。妙法蓮華偈裏求。保胤。

老樂於靜處詩也。或人難云。此句有何秀發入本朝佳句哉。上句迦葉行者。若是頭陀歟。

上句有「常行頭陀事之心」下句甚以荒涼也。何句非「法華經一偈」矣。大府卿答云。所思如此。但其對頗優故歟。

眞如珠上塵厭禮。忍辱衣中石結緣。以言不輕品。

我不敢輕於汝等。或人問云。上句其義如何。大府卿答云。眞如珠者不輕。大士塵毼陀婆羅等歟。眞如佛性理之上。煩惱之容。塵積忌厭其禮之心歟。此詩上句爲「髣髴作者之心如何」。

山雨鐘鳴荒巷暮。野風花落遠村春。帥殿暮山眺望。

此詩帥殿與齊信眺望詩也。荒巷暮三字。長國深以感之。此事存「夢想」云々。

瑤池偷感仙遊趣。還賞林宗伴。李膺。橘倚平。

此詩省試詩也。題飛葉共舟輕。勒澄陵水膺倚平爲「祈」登省事。每日夜々參詣清水寺之間。於寶前有「夢想」。示云。今度登省ハ李膺可煩云々。其事更以不得心之間。勒韻之中有膺字。其時得「夢想」之心。作「叶官韻」不作「李膺」。

作李膺之輩不登省。仍倚平及第云々。是則觀音之靈驗也。

邨原資叔濟。雲鶴譽居多。雲中白雲。羅字限八十。字。三善豐山第八句。

以叔濟之字誤從叔濟。仍不第。詩省試。

逐舞生羅襪。驚歌起畫梁。詠摩真韻爲限。第四句任博士。營清岡。

清岡家傳云。於大學廳試之。及第者清岡善主也。是則叔父與姪也。世以爲簡。

鷹鳩不變三春眼。鹿馬可迷二世情。以言。

此句依「恨暗漢雲之子細。寂感之餘擬補藏人。雖然入道殿并殿上人。不承引之故不補。仍爲放言」所作也。其時殿上人諺曰。湯氣欲上云々。本姓弓削ナレハ也。

機緣更盡今飯去。七十三年在世間。

此詩大江齊光卒去之後。良源僧正夢所見也。

昔契蓬萊宮裏月。今遊極樂界中風。

此詩義孝少將卒去之後。賀緣阿闍梨夢見。少將有歡樂之氣色。阿闍梨云。君ハ何心地喜ケ

ニテハ被<sub>レ</sub>坐。母君ノ被<sub>レ</sub>戀慕ニハトイヘハ。  
少將詠曰。

時雨てはち、の木の葉を散まかふなに古里の袂ぬる覺

詠之後。又詠此詩云。

荒村桃李猶應愛。何況瓊林業苑春。業イ

橘廣相九歲昇殿詩。暮春云々。童名文人云々。

低翅沙鷗潮落晚。鷗イ亂絲野馬草深春。菅家

此詩題云。蘭氣入輕風之詩也。鶴間雲三字。

有古集云々。元稹詩有那將薤上露鶴邊雲

云々。又有他古集中鶴間雲三字。

一條露白庭間草。三尺烟青瓦上松。以言。栖霞寺云題詩。

庭間草三字。已非詩詞。甚以凡鄙之由。儀同三

司被<sub>レ</sub>命云。以言雖詩匠都無古集時。是則此

詩心歟。

朝隱山雲細帙卷。暮過林雀臣文加。秋雁數行書。以言。

此詩當座人云。半難半答。明衡不詩。豈遠空詩

退過林雀哉。

碧玉裝箏斜立柱。青苔色紙數行書。菅三品。

題。天淨識宿鴻。胸句也。統理平疑之見。唐韻

經。不出三史十三經之中云々。

都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。菅家。

此詩於鎮府不出門胸句也。其時儒者評云。

此詩文集。香爐峯雪撥簾看之句ヨリハ猶勝

被<sub>レ</sub>作云々。

書窓有卷相收拾。詔紙無文未奉行。保胤。

收拾ハ唱和集ニソムク。不<sub>レ</sub>叶此處義。

桃李不言春幾暮。烟霞無跡昔誰栖。文時。

桃李不言。烟霞無跡。乃爲對句。在淳茂願文

句也。古人必同事不避之歟。何イ

三巴峽月雲収白。七里灘波葉落紅。藤爲時。

此詩田家秋詩也。以言見此詩云。白字可習

置處云々。

酈縣村閭皆潤屋。陶家兒子不垂堂。菊散一盤金。善相公。

善相公初作酈縣村閭皆富貨云々。心存可



有褒譽之由。而管家只美紀納言廉士路裏句不被感。此詩宴罷退出時。公不散鬱結。於建春門見尋管家。仰云富貴字恨不作潤屋。相公乃改作云々。

佳辰令月歡無極。萬歲千秋樂未央。謝任雜言詩。

此詩贈哥詩也。古塔瓦銘有萬歲千秋樂未央字。今案件文見唐神州三寶感通錄上。件錄云。仁壽二年正月復分布舍利五十三州。至四月八日。同年時下其州。如左云々。其中梨州塔地下瓦文。千秋樂云々。件錄唐麟德元年終南山釋氏所撰也。

青山有雪諳松性。碧落無雲稱鶴心。許渾寄殷堯藩。

許渾詩多一軀也。詩後文時謂之許渾作。但至此句。

一樽酒盡青山暮。千里書廻碧樹秋。許渾寄園秋日寄洛。

此句許渾集在兩三所。寄洛中友人。又送元書上人飯蘇州。

漁舟火影寒燒浪。驛路鈴聲夜過山。杜荀鶴宿臨江驛詩。

古人語云。忠文民部卿。爲大將軍下向之時。宿駿河國清見關軍監清原滋藤夜詠。此句將軍拭淚之。

三千仙人誰得聽。含元殿角管絃聲。章孝標。

此詩意人難得。及第日報被東平詩也。先達未決。

蛇驚劍影便逃死。馬惡衣香欲啗人。都良香代渤海源中將。

寄上左親源中將。

魏文帝時。朱建平相馬事也。

北斗星前橫旅雁。南樓月下擣寒衣。劉元淑薄命論。

此詩劉元淑詩也。朗詠集中云。白。

雖愁夕露埋人枕。猶愛朝雲出馬鞍。山名也。青山馬鞍。

雲。後江相公。

怨是老閑生也得。擬將何事奈余何。元放言。

黃壤誰知我。白頭猶憶君。五言。

此詩題元小尹詩。二首同引。六十。又。

若非宋玉粧重下。疑是襄王夢不長。花落鳳臺春。江相公。

吹亂綺窓風色脆。灑來珠砌雨色香。

故老曰。相公常稱此句之美也。

和風曉扇恐吹盡。清景夜明須靜香。知房

又被命云。去春月老惜梅花之作。前美州知房

被贈一句。此句如何。僕答云。若夜衰紅把燭美

看之詩樣歟。被答云。近々此詩天仁三年事也。

遊子三年塵土面。長安万里月花西。季仲

僕問云。去年前帥季仲自常州被送詩畢。此

句如何。遊子者其義無由。加之面字如何。文集

云。遊子塵土顏。若摸此句歟如何。白氏文集

云。万卷圖書天祿上。一條風景月華西。是則呈

集賢閣之一句也。天祿者閣名。月華者門名。彼

閣在伴月華之西歟。非桂月之西。此詩甚以

奇異也。又江都督被笑云々。

古渡南橫迷遠水。秋山西繞似屏風。江佐國

又被命云。一昨日江都督被申云。江佐國淳和

院眺望詩。上句無其謂。予所案得。寒樹東橫

應障日。此句今案如何云々。但東字下字未

思。障子者本障日也。然則其對可謂叶。美州

聞之被談曰。橘孝親作內秘菩薩行詩云。潔

清丹地珠長琢。十四秋天月暫陰之句。上七字

不似下七字。明衡云。試求之未得云々。而先

年都督被笑云。上句何無此哉云々。仍問其

句。被答云。清涼夏水蓮猶嫩。此句如何云々。

僕申云。然則似齊名詩歟。伴詩云。眼蓮豈養

清涼水。西月長留十五天之句。彼詩若爲避

此句。強求上句歟。仍有甘心之氣歟。

江談抄第五

詩事。

文集中他人詩作入事。

被命云。文集中ニ他人詩作入事被知乎。答

云。不知何作乎。被命云。第六帙中李仲作詩

也。其詩如何。被<sub>レ</sub>命云。長談鴻寶集。無離小乘經云々。鴻寶集ト云ハ大乘經ヲ云也。因茲文集ヲハ。古人モ大乘經之次。小乗教之上ト云ケル。故橘孝親ハ常信之。敢以不忽諸。凡反古ナトニモ。敢鼻カマヌ人也云々。

文集無同詩哉事。

又被<sub>レ</sub>命云。文集無同詩ヤ。僕答曰。苑花如雪隨行蟄。宮月似眉伴直廬。此詩在天寶樂更長韻詩。又在四韻詩。又云。一以老年淚。泣灑故人文。又哭晦叔。唯將兩眼淚。一灑秋風襟云々。僕問。許渾集。一樽酒盡青山暮。千里書廻碧樹秋之句。在ニケ處。帥被<sub>レ</sub>答云。然也。僕問云。文集放々龍々在牛角。雷擊競來牛狂死。其義如何。帥被<sub>レ</sub>答云。件事見異記。不具記。

文集常所作炙<sub>レ</sub>牛事。

又問云。文集常所作炙<sub>レ</sub>牛。其義如何。被<sub>レ</sub>答云。淮南子事。不具記。

齊名不點元稹集事。

又被<sub>レ</sub>命云。一條院以元稹集下卷。齊名可點進之由被<sub>レ</sub>仰之。雖然辭遁云々。

王勃元稹集事。

又被<sub>レ</sub>命云。注王勃集。注杜工部集等。所尋取也。元稹集度々雖詵唐人。不求得云々。

絲額字出元稹集事。

予談云。菅家御作者類。元稹集之由。先日有仰。其言誠而有驗。菅家御草云。低翅沙鷗潮落曉。亂絲野馬草深春。元稹詩。遮天野馬春無曉。拍水沙鷗濕翅低。此兩句實以相類焉。予又云。善家柳詩有絲額字。元稹詩云。春柳黃。是亦出自彼集。被<sub>レ</sub>答云。兩家甚以有興云云。又善家內宴。何處春光到詩。柳眼新結絲額出。梅房欲拆玉瑕成。

白行簡作賦事。

予問云。白行簡作賦中。以何可勝乎。被<sub>レ</sub>答云。

望夫化爲石賦第一也。抑白行簡被知乎。何  
流乎云々。答曰。不知。被命云。居易之弟也。サ  
テ賦ハ行簡勝云々。答云。然者何世人以行簡  
集強不規摸乎云々。被命云。詩者尙居易勝  
也。行簡不可敵。兄弟四人也。其中有敏仲云  
云。

古集體或有對不對事。

古集。孰或有對。或有不對。如何。被命云。是方于者。缺脣者也。盧照隣者。惡疾人也。李白者。謫仙也。或人問云。以李白號謫仙人之由。見文集。是謂文章之舛。譬謫仙之舛。又實以金骨之類。歟。被答云。實謫仙也。

古集并本朝諸家集等事

問云。古集并本朝諸家集等之中稱人之處。如稱十一十二之類。其義如何。帥答云。件事見以言集雜筆之中。以言對唐人問此事。答云。立人子孫之處。譬有一人。件人有子三人。始

自次第稱一二三。次嫡子有子五人。自嫡孫次第稱四五六七八。次二男有子四人。自其嫡子次第稱九十一十二。次三男有子三人。自其嫡子次第稱十三十四十五。次嫡孫有子二人。稱十六十七。次稱庶子之子。如此次第稱之。限以卅九。不及五十。又或說。只以嫡男稱十一。以二男稱十二。至于十字者。只以加之云々。然則於卅其義如何。此說頗無所據。以言集可引見之。

王勃八歲秀句事。

又被命云。王勃八歲所作。秀句アリ云々。不覺。

燒秋林葉火還寒句事。

又燒秋林葉火還寒云句。准的華光燭々火燒春之句也。問云。當簾楊柳兩家春之句也。

菅家御文章事。

被命云。營家御作之中。尙匡房不<sub>レ</sub>知事多云。



云。被<sub>レ</sub>答云。尤理也。匡房不知事記副紙。然者御所學之才智令習給。文氣天ニ令受給也。不可<sub>レ</sub>申左右。居易ヲモ樂府探詩。官斷作損也。有失錯之由被<sub>レ</sub>仰ケリト云々。令知其甲乙給。尤希夷也。然者居易ノ樂府上下作。爲諷諭詩官之事也。然作損如何。

### 六條宮御草事。

又被<sub>レ</sub>命云。秋聲多在<sub>レ</sub>山詩。六條宮御作。鹿鳴猿叫之句。有雄張之御氣色。而覽以言衆籟曉興之句。大令歎息妬忌給。件詩胸句更以神妙。一首之秀句也。

### 菅家觀九日群臣賜菊花御詩讀樣事。

菅家觀九日群臣賜菊花御作云。術中彭祖九重門。其讀樣如何。帥被<sub>レ</sub>答云。古今件句有讀樣云々。術ノ中彭祖ナリ九重ノ門ト可讀云云。問。次句鷄雛不老仙人曙。曙字如何。云。若署字歟。帥云。官署之義也。仙官義也。鷄雛不

老如何。件事雖側見慥不覺。被<sub>レ</sub>答云。以菊合樂。如<sub>レ</sub>基子服之。若不信者。與鷄雛令食之。至老不死。見菊花方云々。帥被<sub>レ</sub>命云。件詩次句非祖五柳曉雲孫。此事非心之所及。予答云。禁園之仙菊繁美勝。昔時五柳東籬之閑寂之心歟。又被<sub>レ</sub>命云。祖字讀如何。未覺事云云。又被<sub>レ</sub>命云。件詩落句如何。予答云。件落句<sub>〔聯々〕</sub>蔦収讀樣ハ如何。件事見文選舞賦歟如何。不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>答。

### 菅家御作爲元稹之詩牀事。

又被<sub>レ</sub>命云。菅家御作者元稹之詩牀也。古人云。如此。帥。菅家御作者非心之攸及。

### 菅家御草事。

又被<sub>レ</sub>命云。菅三品云。菅家御草者。如削龜甲其上加<sub>〔拾イ〕</sub>綵鏤。非心力之所及。紀家作者如削拾木加磨瑩。沙物可用之。尤可庶幾云々。然則況於區々之末學。其自豈樂云々。問。菅家

御作者眼不及。文集者眼及。是何故哉。寄其時代。寄其文章。此等庶幾歟。帥云。依人也。紀家君同時也。然而不似耳。若是殊有幽玄道歟。

菅家御草事。

又被命云。菅家云。溫庭筠詩。牀優長也。

後中書王以酒爲家御作事。

後中書王以酒爲家御作云。杜康昔構容人息。下三字讀如何。帥被答云。人息ヲ入ト可讀云云。未詳覺。出何書乎云々。

世尊大恩詩讀樣事。

又世尊大恩詩作。重々干雲嵩嶺重。深々納日海潮ヨリモ深。如此讀云々。近代一人不知其說。

天淨識資雁詩事。

天淨識資雁詩。頻寒着三字不被讀。何等書文哉。凡如此之類尤多。僕貢士答云。千載佳

句。詩云。雁着行之着字。雁義頗近之歟。被命。此義者公謂叶。彼詩者不叶云々。此事前濃州知房同審之云々。

資忠簞爲夏絕詩事。

又云。菅資忠簞爲夏絕詩。以言記之。紀用平聲。與禮記說相違云々。

文章博士實範長樂寺詩事。

又被命云。故文章博士實範長樂寺松柏山寒枝不長句之詩序。詩云。白駒々々可尋注。書云。見盧照隣集。主人被感云々。序云。盧照隣集往年所一見也。件集有泥人事如何。帥被答云。若旱天田之事歟。僕曰。不家墓詩也。詳不被答。

月明水簡詩腰句事。

又被命云。予近曾於右金吾亭作月明水簡詩腰句。陸張池白兩家秋ト云句。白字。江都督被命云。可改冷字歟云々。藤原爲時詩云。三

巴峽月雲収白之句。以言云。白字可習置處。此句。白字甚以優也云々。又以言詩。桂花秋白之句。白字宜得其舛焉。此然可學之。但餘事也云々。

### 日本紀撰者事。

被談云。日本紀被見哉。答云。少々見之未及。廣。抑日本紀誰人所撰哉。被答云。日本紀者舍人親王撰也。又續日本紀者。左大弁菅野真道撰也。依其功給免田卅町。日本後紀者左大臣藤原緒嗣撰也。續日本後紀者忠仁公也。文德天皇實錄者昭宣公撰也。三代實錄者左大臣時平所撰也。

### 扶桑集被撰年紀事。

又云。扶桑集長德年中所撰也云々。時歷九代歟。今上之時也。

### 本朝麗藻文選少帖東宮切韻撰者事。

又云。本朝麗藻者高積善所撰之。橘贈納言文廣相

選少帖所抄也云々。又東宮切韻者菅家主刑部尙書集十三家切韻。爲一家之作者。著述之日。聖廟執筆。令滯綴云々。

### 新撰本朝詞林詩事。

爲憲所撰本朝詞林在。故二條關白殿。以件書令諸家集爲憲撰給也。世間流布披露本甚以省畧也。保胤正通等集詩三百餘首。今所書入也。

有國集。故廣綱所集不幾云々。

### 粟田障子坤元錄詩撰者事。

又被中者。粟田障子詩輔正卿撰之。坤元錄詩維時卿。然則作者與判者各互有長短。隨其功也。粟田詩以言以帥伊周殿方人不被入之。怨言云。雖坤元錄絕句一首者何不罷入哉云云。故文章博士實範後傳聞此事。不被許此書云々。

### 扶桑集順作多事。

又云。扶桑集中順作尤多。時人難云々。問。順序多自紀家序如何。帥答云。花光浮水上。序順序也。專不可入也。而齊名以其爲祖師。多入之由。時人難云々。

朗詠集相如作多入事。

又四條大納言者高相如之弟子也。仍撰朗詠集之時。多入相如作。所謂蜀茶漸忘浮光味。并蘿蘇往反之句。有何秀發乎。

四韵法不用同字。長韻詩不避事。

又云。四韵法不用同字。長韻之詩強不避之。江以言圓成寺當座詩。第二上句云。鄉國迢遞令雲隔。第五下句云。初逢雲洞薜蘿僧。是雲字二所。第二下句云。林草凋殘被雪凌。又第三上句云。風凋寒時樹綠桂。又第六上句云。風情忽發冷猶苦。風字兩所如。風月字之類必避之。然以言用之。此詩已在本朝麗藻云々。

匡衡詩用波浪濤是置同義字例事。

又匡衡朝臣所列省試詩。置句用波浪濤。是置同義字之例也。又保胤者四五朶對風烟行。江以言者蓬萊洞對十二樓。皆詩人之秀句也。

以兩音字用平聲作之詩憚哉事。

予又問云。以兩音字用平聲作之詩猶可憚作哉。被命云。不可憚。天神御作。鶴飛千里未離地之句。坐在爐邊。手不龜之句。離字龜字。毛詩莊子之文。兩字他聲也。尙不憚。被用平聲。又朝綱登省詩。以兩音字用平聲之時。評定諸儒於仗座欲落第。爾朝綱傍爾立詠云。鶴飛千里未離地。音頌ケリ。諸儒尙不聞入之處。朝綱云。菅丞相ノ被仰之事。モ聞テ侍也。ト云ケルヲ延喜聖主聞食テ。彼ハ有謂可及第也。ト被仰下也。然者不可憚歟。

兩音字通用事。

僕又問云。明衡詩。車漸惟裳。漸字如何。漸臺月



露義也。而用他聲如何。被答云。漸臺之義。猶以平聲也。然則明衡失也。但兩音字有通用之例。文章之所許也。隨時可斟酌歟。菅家御作云。鶴飛千里未離地。離字用平聲。此其例也。又坐在爐邊手不龜。此詩用脂之韻。如莊子者此无眞臻韵。又用平聲也。僕問云。用脂之韻由東宮切韻諸家釋中有一說歟。被答。然也。僕問云。古賢之所尙雖仰取信。世說一卷私記者。紀家善家相共被釋累代難義之書也。

### 隨音變訓字事。

又或人云。隨音變訓之字。不勞其音用之事。文章之一跡。古人之所傳也。

### 并其字和名事。

被命云。延喜御時。渤海國使二人來朝。其牒狀爾此兩字各爲使二人姓名。紀家見之。雖未知文字。呼云。并。木ノツフリ丸。并。石ノマフ

リ丸參レト喚。各應會參云々。異國作字也。以當時會釋讀之。可謂神妙者也。異國人聞而感之云々。

### 簡字近代人詩不作件字事。

又云。簡字。近代人詩。不作云々。明衡并範綱作此字。件人以後。強以不作云々。或人秘抄中有之。

### 忤字事。

予問云。忤字如何。被答云。件字塚古文字也。

〔二万六千六百十日祇讀云々。以官位令讀歟。時博士讀之云々。人之壽命日數云々。〕

### 柚字事。

又問云。柚字誠本朝作字歟如何。被命云。柚字本朝山田福吉所作也。柚字又見日本紀云云。

### 美材書文章御屏風事。

又云。小野美材内裏文章御屏風書了。奥書大原居易古詩望。小野美材今草神云々。

四條大納言野行幸屏風詩事。

近曾謁美乃前司知房之次被談云。四條大納言野行幸屏風詩。德照飛沅雲夢月之句。下三字本者靈園月ト被作タリ。後被改雲夢月。鷹司殿屏風詩事。

又被命云。鷹司殿屏風詩。齊信卿被撰之。齊信頗多被人資業詩。花塘宴詩色絲句撰入之。義忠聞之中。宇治殿云々。絲字他聲。非平聲。可謂僻事。詩云。俊遠保昌之所作也。資業依當任受領。其詩被多入云々。戶部納言聞此事。勘文集詩被獻云。聲々麗句敷寒玉。句句妍詞綴色絲云々。宇治殿聞食此事被勘仰義忠。義忠塾居。及明年三月不被免之。則付女房獻和歌云々。アヲヤキノイロノイトニテムスヒテシヨレハホトケテハルソク

〔或本トチテ〕

レヌル。依此和歌被免云々。

鷹司殿屏風齊信端午詩事。

鷹司殿屏風詩。齊信端午詩。片月絃鳴士卒喧之句。道濟在筑後國傳聞之。此句者勝德照飛沅之句。伴句者雖秀句。村濃絲ノ綫達タル様也云々。又帥被示云。雲夢之字平聲歟。文選有兩音歟。

清行才管家嘲給事。

善相公者巨勢文雄弟子也。文雄薦清行狀云。清行才名超越於時輩云々。管家令嘲此事。則改超越爲愚魯字。又被問廣相云。不詳不詳云々。管家令怨之。爲先君也。門人於事無芳意云々。

齊信常庶幾帥殿公任歎中務宮事。

又被命云。齊信常庶幾帥殿公任。又感歎中務宮。齊信常被稱云。帥殿以文章被許云々。其年齒以等輩也。以被人許給爲面目豈不

甚哉。

輔尹舉直一雙者也事。

又被命云。輔尹舉直一雙者也。匡衡送書於行成大納言許云。爲憲爲時孝道敦信舉直輔尹。此六人者越於凡位者也。故共甘貧云々。統理平。高五常。工詩者也云々。又云。

紀家深被感五常。又先年見菅三品自筆被書統理平集。所好事不嫌善惡歟。將又先達歟。

順在列保胤以言等勝劣事。

問。順在列勝負如何。帥答云。順勝。問。順保胤勝劣如何。帥答云。保胤勝。問。順以言如何。帥答曰。以言勝歟。但故人孝親朝臣或以順爲勝。予儉不甘心耳。夜闌不弁色題。以言作云。爲深爲淺風聲暗。滿座相感云。文集毛志計留波斗云々。時綱長國勝劣事。

問云。時綱與長國如何。帥答云。長國勝歟。明衡談云。長國ニ被仰ハ不可爲恨云々。本朝詩可習文時之跡事。

本朝集中ニハ。於詩者可習文時之跡也云云。文時モ文章好マム者可見我草云々。此草以往雖賢才廻風情。尙以荒強也云々。又六條宮保胤ニ詩ハ伊加々可作ト阿利介留毛。文芥集ヲ保胤ニ令問給ヘトソ云ケル。於筆者不然歟。

父子無相傳文章事。

問云。古今父子相傳文章者希歟。帥答云。良香子在中。菅家御子淳茂。文時子輔昭。村上御子六條宮。此外無之云々。

維時中納言夢才學事。

維時中納言日記中書云。菅家夢中令告云。汝才學漸勝朝綱之由所託云々。雖然於文章非敵歟。

夢爲憲文章事。

橘孝親父

名可尋

求可爲師匠之者。祈請其先祖

建學館院之者

名可尋

夢中告云。文章者可習爲

憲者。爲憲聞之稱雄云々。

成忠卿高才人也事。

又云。成忠者高才人也。儀同三司御亭園文集

二帖詩與六帖詩之日。二帖詩最初出天宮閣

早春之詩。成忠難之云々。天宮閣者與也。何最

初出此詩。成忠卿有相論之詞。以其同事是

後人才智者也云々。

齊名者正通弟子事。

問云。齊名者誰人弟子哉。帥云。橘正通之弟子

也。正通者順之弟子。問。以何知之。帥云。爲憲

集云。順以家集不付一弟子正通付我者。以

之知之云々。

道濟爲以言弟子事。

道濟者以言弟子也。昔請詩於以言。以言於稠

人之中稱之曰。後風情日進。時人以爲一雙云々。

以言者薦茂弟子也事。

問。以言者誰人弟子哉。答云。薦茂之弟子也。

文章諍論和漢共有事。

雖賢人君子。文道之諍論和漢共有事也。宋明

帝與鮑明遠爭文章之間。明帝其性甚以凶

惡也。仍鮑明遠致モンスルトテ故ラ作損ス。時

人曰。文衰タリト云。隋煬帝與薛道衡爭文

章之間。薛道衡遂被致了云々。

村上御製與文時三位勝負事。

又被談云。村上御時。宮鶯囀曉光題詩ニ。召

文時三位被講之。其間物語被知乎如何。答

云。不知。被語云。尤有興事也。件日。村上與

文時相互爾相論日也。件製云。露濃緩語園花

底。月落高歌御柳陰ト令作給。文時。西樓月落

花間曲。中殿燈殘竹裏看ト作タリケレハ。主



上聞食天。我コソ此題ハ作拔シタレト思爾。文時詩又以神妙也ト被仰天。召文時近於御前。無偏頗。我カ詩事無憚申。難有無ト被仰レハ。文時申云。御製神妙侍。但下七字ハ。文時ニモマサラセタマヒタリ。御柳陰ナレハ宮ト思ヒ候ニ。上句ハイツコニ宮ノ心ハ令作御ニカ候ラム。園ハ宮ニソアヤハ可作ト申ニ。村上被仰様ハ。足下ハ不知ヌカ。其園ハ我カ園ソカシト被仰爾。文時申云。然コソ侍ナン。上林苑ノ心ニコソ侍ナレ。雖然イカ、侍ヘカラムト申爾。尤有謂ト被仰ニ。一問答云。又有興仰事アリト云テ。サコソハ侍ナント申テ退座ニ。主上又被仰様。然者我カ詩ト足下ノ詩ト勝劣如何。慥可差申ト被仰ニ。文時申云。御製ハ令勝給。尤神妙也ト申爾。主上被仰之様。ヨモ不然。慥尙可申也ト被仰テ。召藏人頭テ被仰之様。若文時不申。此詩勝劣。

依實不令申者。自今以後文時申事。不可奏達我ト被仰ヲ聞テ。文時申云。實ニハ御製與文時詩對座ニ御座ト申ニ。實可立誓言ト被仰ニ。又申云。實ニハ文時詩今一膝居上テ侍ト申ヌ。逃去了。主上令感歎給。啼泣給云々。

齊信文章帥殿被許事。

又云。齊信如何。被答云。小松雄君者。若齊信歟云。齊信自稱云。帥殿以文章被許云々。儀同三司者是論其年齒。齊信之後進等輩也。而以彼人被許。爲面目豈不甚乎。

公任齊信爲詩敵事。

又帥殿常示云。公任齊信可謂詩敵。若譬相撲者。公任雖善擲不可打齊信云々。

爲憲孝道秀句事。

爲憲文章劣。於爲時孝道云々。就之言之。孝道秀句只三也。巫陽有月猿三叫。衡嶺無雲雁。

一行之句。明妃有淚之句。樹應子熟之句等也。爲憲者有其員。

勘解由相公有誹謗保胤事。

勘解由相公常誹謗保胤。保胤守庚申序云。夫庚申者古人守之。今人守之。勘解由相公嘲之云。古之人守。今之人守。可讀云々。又以書籍不審事問保胤。保胤常稱有々。仍勘解由相公爲試保胤。作虛本文問之。又稱有有。仍嘲號有々主。保胤傳聞之作長句云。藏人所粥燒唇。平雜色之恨難忘。金吾殿校碎骨。藤勾當之恩難報云々。此事皆有由緒。彼人瑕瑾云々。古人皆以如此。保胤雖作人佛人。人情被輕慢者。其情不堪者歟云々。

匡衡以言齊名文牀各異事。

予又問云。匡衡以言齊名三人文牀各異。而共得其佳境。被答云。齊名偏持古集於其心腹。敢無新意。文々句々皆採撫古詞。故其牀有

風騷之牀。至其意不得之日。亦不驚目。無新意之故也。予申云。齊名作非詩。雜筆毛猶探古集潤色之誠。而有驗。千載佳句詩云。江郡謳謠誇杜母。洛城歡會憶車公。齊名採此句。餞序云。海浙之政類王祥。而縱康洛城之遊憶車公。而豈忘此其有驗也。又被命云。以言文牀與之相違。所作之詩任意恣詞。都無響策。其牀實新。其興彌多。至于不得之日者。非後學之可法。則一代之尤物也。汗収赤驪溝之句。不可及者也。源起周年後幾霜之句是也。以言於弟子習其牀。增其風心者也。

廣相七日中見一切經。凡書籍皆橫見事。

又云。廣相獻策之時。七日之中見一切經。凡書籍皆橫見之。雖如此拔萃之性。尙有備忘却之事。故何者。先年見唐年號寄韵之書。是廣相之所抄也云々。伴書注付年號難等。所謂大象者。涉大人象之義。隆紀者似死之牀。或人問

云。大象者後周年號。隆紀者北齊年號。件年號北齊被滅。周歟。又魏時有正始年號。或人云。正字者一止也。詳不覺所出書。又唐高宗時有乾道年號。反音不吉也。仍改之。此事見唐書。

廣相任左衛門尉。是善卿不被許事。

又云。廣相任左衛門尉。是善卿不被許。此事云々。營家獻策之時來。省門。彼時強不寵小屋。只徘徊省門。廣相着毛沓到此處。微事之處々相共被勘之。有一事不通。廣相策馬到嵯峨之隱君子之許。問之云々。

隱君子事。

問云。隱君子名如何。被答云。淳歟。嵯峨源氏之類歟。策科判問諸儒論。尤可見物也。是善與音人相論事。尤有興云々。亦云。良香者文章之道。可謂受之天。可尋謂學之。又慈父宜傳受子。此句尤珍重也云々。

匡衡獻策之時一日告題事。

又帥殿被命云。匡衡獻策之時。文時前一日被告題。匡衡參文時亭。期日今明也。題如何。問之處。文時。足下爲被好婚姻。自所好壽考也云々。卽歸了。當日早旦被告微事云。太公望之逢周文。渭濱之波疊面。營三品見之云。面疊渭濱之波。眉低商山之月。可作。直云々。此事又叶區々短慮。有興々々。

源英明作文時卿難事。

又被命云。源英明。池冷水無三伏夏之句。文時聞云。水冷池無三伏夏。風高松有一聲秋。可作云々。

源爲憲作文時卿難事。

又源爲憲。鶴閑翅刷之句。文時卿難云。翅閑鶴刷千年雪。眉老僧垂八字霜。可作云々。

以言難齊名詩事。

又被命云。齊名作。行色花飛岐路月之句。語。

以言云。月夜見花哉如何。

左府與土御門右府詩事。

問。左府與土御門右府詩如何。帥被答云。源

右府勝歟。予云。於才學者然也。非同年之論。

詩者左府御作者有古人之流。頗非凡流。問。

源右府秀句何句哉。帥殿被答云。樓臺美麗。并

奩匣鏡明之句也。予云。左府者曲水霞落句非

凡流。人間此會應希有。花前主客備三台云

云。頗被服膺之氣也。

源中將師時亭文會薦昌事。

被命云。文場何等事侍哉。答云。指事不候。一

日コソ源中將師時亭文會候シカ。被答云。昨

日進士薦昌所來談也。人々詩大略聞之。貴

下詩薦昌頗不受歟。答云。尤理也。又薦昌詩希

有也。坐人々被申候如何。被命云。然也。不足

言者歟。事外ニ英雄之詞ヲコソ稱シ侍シカ。

文場氣色如何。答云。傍若無人也。奇怪第一事

不可過之。奴袴事。可有制止事也。被命云。

立英雄尤理也。寶志野馬臺識。天命在三公。

百王流畢竭。猿犬稱英雄ト見タリ。王法衰微

憲章不被行之徵也。予答云。件識何事起乎。

被命云。未被知歟如何。答云。不知候。被命

云。件識者是我朝衰相ヲ寄テ候也。依之將來

號識書也。仍爲之日本國云野馬臺也。又渡

本朝有由緒事也。

秀才國成來談敦信亭事。

敦信爲山城前司之時。秀才國成時來彼亭

談文事。國成飯之後。敦信常言云。秀才ハ與幾

者加奈。耆樂（音）加加々良麻志加波（音）云。稱耆樂

明衡是也。

都督自讚事。

被命云。倩案情。云官爵云福祿。皆以文道

之德所經也。何況才藝名譽殆過於中古之

人所思給也。雖似自讚又非無謂。於壽命



者及七十事。近代之難有之事也。非短壽之難。顏回至德僅三十歟。仍世間事全無所思。只所遺恨ハ不歷藏人頭ト。子孫カ和呂クテヤミヌルトナリ。足下ナトノ様ナル子孫アラマシカハ。何事ヲカ思侍ラマシ。家之文書。道之秘事。皆以欲湮滅也。就中史書全經秘說。徒ニテ欲滅也。无委授之人。貴下ニ少欲語申如何。答云。生中之慶何以如之乎。被答云。史記爛脫ハ只三卷也。本紀第一。第四。第五傳也。後漢書ニハ廿八將論也。共有注。有別紙。被談云。菅三品所被作。老閑行能被心得如何。答云。未得心。但粗依先父之談說。纔置文字之様所。承知也。自晝夜各一字可至數十廿之字歟云々。被談云。然也。譬如扇本末也。伴行ハ文時乃三ヶ年之間。時而不解所案作也。草之後先令見。順許之處。順見之一夜中令。和答送文時許云々。文時大令歡樂給。不覺人

之由。時人又以歎之傾之。其故ハ不辨凡只無念也。又無其憚。一々遺恨也。其又被談云。文時モ頗順ヲハ不受ケル歟。但賦舛ニハアラス。自中間之奧ハ已非賦之文章。ナニワサシタルソト被云ケル。サテ此賦都我見トナ順ニナ不令聞トソ被云ケル。

### 都督自讚事。

都督又云。取身自讚有十餘。其中四歲讀書。八歲通史記。十六歲作秋日閑居賦。其一云。李廣漢室之飛將也。ト宅於隴山。范蠡越國之賢相也。避祿於湖水云々。明衡朝臣深以感之。又落葉埋泉石詩。羊子碑文嵐裡隱。淮南葉色浪中深云々。安樂寺御廟院序一句曰。堯女唐荒。春竹染一掬之淚。徐君墓古。秋松懸三尺之霜。雖垂異代之名。皆非同日之論云云。又云。自高麗中醫師返牒云。雙魚難達鳳池之月。通職扁鵲何入鷄林之雲。是則承曆四年

事也。其後赴鎮西之日。宋朝賈人云。宋天子有鐘愛賞翫之句。以百金換一篇之句也。

江談抄第六

長句事。

曉入梁王之苑。雪滿群山。夜登庾公之樓。月明千里。白賦買詩。

檢秋賦登字作歸字。雪滿群山。是文選文也。

樵蘇往反杖。穿朱買臣之衣。隱逸優游履。踏葛稚川之藥。長和寺落葉山中。路序。而相如。

以紅葉爲藥例。紅宮。履字或作屐。文選之意也。

新豐酒色清。冷於鸚鵡盃之中。長樂歌聲幽。咽於鳳凰管之裏。送友人歸大梁。

非送友人歸大梁。其意見於賦中。

菓則上林苑之所獻。合自消。酒是下若村之所傳。

傾甚美。增添草樹色。

含消梨。是梨名也。

泰山不讓土壤。故能成其高。河海不厭細流。故

能成其深。漢書。

文選。高作大。厭作擇。下成字。圖文。

佳人盡飭於晨粧。魏宮鐘動。遊子猶行於殘月。

函谷鷄鳴。

以言朝臣稱云。函谷鷄鳴四字可謂絕妙。

春過夏闌。袁司徒之家雪應路達。且南暮北。鄭大

尉之溪風被<sub>人知</sub>。右大臣一奏。職第三表。晉三品。

時人稱云。恨不奉見於先朝。申三天。

隴山雲暗。李將軍之在家。潁水浪閑。蔡征虜之未

仕。清鎮公辭。大將狀。文時。

或人夢。行役神依此句。不弘於文時家云々。

王子晉之昇仙。後人立祠於維嶺之月。羊大傳之

早世。行客墜淚於現山之雲。相規。

件句後人於安樂寺。月夜竊見之。有直衣人。

被詠云々。若天神令感給歎云々。

昇殿者是象外之選也。俗骨不可<sub>レ</sub>以踏蓬萊之雲。尙書者亦天下之望也。庸才不可<sub>レ</sub>以攀臺閣之月。

直幹請<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>民部少輔。申文。件申文天曆帝令<sub>レ</sub>置御書机給云々。

前途程遠。馳思於雁山之暮雲。後會期遙。雷纓於鴻臚之曉淚。於鴻臚館。饒北客一詩序。後江相公。

此句渤海之人流淚叩<sub>レ</sub>匄。後經數年問。此朝人曰。江朝綱至三公位乎。答云未也。渤海人云。知<sub>レ</sub>日本國非用<sub>レ</sub>賢才之國云々。

楊岐路滑。我之送人多年。李門波高。人之送我何日。別路花飛色詩序。

前中書王見<sub>レ</sub>此句。被稱云。以言平同也云々。自此才名初聽。

谷水洗花汲<sub>レ</sub>下流。而得<sub>レ</sub>上壽者三十餘家。地血和味。食<sub>レ</sub>日精。而駐<sub>レ</sub>年規者五百箇歲。群臣賜菊花一序。紀納言。

高五常序。有似<sub>レ</sub>此序之作。古人傳云。五常作

後以言被稱。自餘頗催<sub>レ</sub>此序。可<sub>レ</sub>到佳境。以仍<sub>レ</sub>此序云々。

螢日螢風。高低千顆万顆之玉。染枝染根。表裏一入再入之紅。花光浮水上。詩序。三品。

此序冷泉院花宴也。序遲無極。主上欲<sub>レ</sub>還御。而依<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>序首留給。万葉仙宮百花一洞也云云。

昔忉利天之安居九十日。刻<sub>レ</sub>赤梅檀而摸<sub>レ</sub>尊容。今跋提河之滅度二千年。螢<sub>レ</sub>紫磨金而禮<sub>レ</sub>兩足。匡衡。

此句仁康上人入唐之時。爲母於六波羅密寺供養佛經之願文也。講筵參會貴賤濟々焉。講畢集會人皆悉令<sub>レ</sub>散之間。保胤入道猶留到俗客座。叩<sub>レ</sub>匡衡背云。弼殿筆リケリ云々。于時匡衡彈正弼也。在此講席之故也。又入道陳云。依<sub>レ</sub>如是不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>文場也。見<sub>レ</sub>此句作骨心有。

攀緣。且爲「菩提之妨」云々。

願廻翔於蓬嶋。霞袂未遇矣。思控御於茅山。霜

毛徒老焉。藤雅材。

依此句。俄補藏人云々。

聚丹螢而積功。雖仰堯日之南明。問青鳥而記事。恨暗漢雲之子細。

依此句。擬補藏人。雖然入道殿并殿上人。不承引之故。不補。

虛弓難避。未拋疑於上弦之月懸。奔箭易迷。猶成誤於下流之水急。

懸急字不可有由。文時心中思之。卅年後案得。可有由稱云。我減於朝綱卅年云々。

漢皓避秦之朝。望礙孤峯之月。陶朱辭越之暮。眼混五湖之煙。視雲知隱賦。以言。

後中書王稱云。作賦以言爲物上手。以望夫化爲石賦爲規模所作歟。至于牀者不知云々。

蕭會稽之過古廟。託締異代之交。張僕射之重

新才。推爲忘年之友。香亂難識詩序。後江相公。

蕭允過吳札廬。張鑽結江摠交。並見陳書。

漢高三尺之劍。居制諸侯。張良一空之書。立登師傅。

件句雅材冊文也。調和歌舞。非後漢書句。

仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。古今序。淑望。

日本國牀如秋津蟲鬻帖也云々。

梁元昔遊。春王之月漸落。周穆新會。西母之雲欲歸。鳥聲韵谷粒序。文時作。

後中書王被難云。既而下無小句。有此句。文時之匆忙也。又故源右府命云。梁元者雖不吉

之帝。作之。取一端也。春王臺也。梁元所作也。花明上苑。輕軒馳九陌之塵。猿叫空山。斜月瑩

千巖之路。閑賦張贊。

輕軒馳與閑義異。可深案云々。或人云。有閑人聞奔車也云々。



榮路遙兮頭已斑。生涯暮兮跡將隱。侍大王萬歲之風月。向後未必可知。橘止通。梅近夜香多。

此句七條宮宴序。自憊句也。滿座人無不拭淚。其後長去不知所之。或人云。復高麗國得仙云々。

晝夜八十之火。假唱於鶴林之烟。東方五百之塵。長懸於鷺峯之月。以言。

此句月ニ懸リト可讀歟。月ヲ懸リト可讀歟。答。詳不被示。此句非優美。唯恐人也。

漢四皓雖出。應曜獨留於淮陽之雲。堯三徵不來。許由長棲於潁水之月。後入道殿御表。匡衡。

應曜栖淮陽之句。齊名疑之。此事見唐昀注。不出三史十三經云々。

秦皇泰山之雨風。消黃雀之跡。周穆長坂之雲汗。收赤驪之溝。松聲當夏寒。

以言作也。

唐人感兔裘賦事。

一物集ハ渡唐書也。唐人見兔裘賦云。此賦ハ此國ニモ往代人ノ作タリセハ。文選ニハ入ナマシト云々。尤神妙事歟。

順序王朗八葉之孫句事。

問云。順序王朗八葉之孫。誰事不詳覺云々。次談話及古事。

菅家御序秀勝事。

帥於序者每讀無不腸斷。爾栢梁兮擬蘭亭。同華林兮種拱木之句。并秋水何處見序。風月同天閑忙異他之句。并花時天似醉序。思魏文而翫風流之句。催粧序。內則綺羅脂粉。又風月學花之句等染心肝者也。又被談云。菅家御作見自餘時輩是渴儒之句。天善相公ハ清行候モノヲ。伊加仁加久波被仰仁加砥天ト云々。僕又云。宮人□夜殿上舉燈者例也之句神也。又妙歟。

在昌萬八千年之聲塵事。

在昌序云。萬八千年之聲塵。其心如何。答云。分明不覺。下句七十二代之軌躅者。封泰山之者七十二君歟。其次云。在昌坤元錄屏風詩。愁難之間。既以病惱死去々々。〔云歟〕

菅三品尙齒會序事。

又云。菅三品尙齒會序。猶已衰齡之句。無力而有餘情。如美女之病也。

匡衡菊花映宮殿序事。

瑤池賦詩遙往來於春霄之月。汾水奏樂漫遊吟於秋風之波。

匡衡序云。瑤池賦詩往來於春霄之月。春霄事有所見哉。被答云。可見穆天子傳。件書六卷書也。立四時。然則春字有所據歟云々。

齊名序事。

又被示云。齊名。僕夫待〔馬〕卷。雞籠之山欲曉之〔曉〕

句。僕夫是前書儒林傳文云々。

以言序破題無秀句事。

又被命云。匡衡常談云。以言序破題句無秀句云々。此事誠以然焉。匡衡序者破題多秀句。少斑婕妤團雪之扇。代岸風長忘之句。并醉卿氏之國四時獨誇溫和之天之句等也。

齊名勸學會序事。

齊名勸學會序。非獨東山勸學會。終爲記風煙泉石之地之句。爲憲云。不可有此句云々。然者此序彌以優美歟云々。

齊名攝念山林序秀逸事。

齊名攝念山林序。秀逸者也。保胤聚沙爲佛塔。不可敵之。以言數度勸學會序。又以不敵。

以言古廟春方暮序事。

以言。古廟春方暮序終句。一生只樂道。万事皆任廟意之句。爲憲云。不可有此句。又云。以言古廟序。廟字甚多之由。時人難之。件序有廟字七八ヶ所云々。

高積善於式部卿宮作序自謙事。

又云。高積善於式部卿宮。敦慶作序。自謙句云。海西自弟之秋。猶爲非家風夜之遺老。時人嘲弄其爲外戚云々。

### 江都督安樂寺序間事。

又問云。江都督於西府安樂寺。令作內宴序之時。御殿戸鳴之由風聞。件事實否未決如何。被答云。件事都督被談云。內宴作序之時。御邊如有人詠。其中句府官等所見聞也。然而件夜依屬終有事疑。後日曲水宴序披講之時。御殿戸有聲。滿座府官僚下不遺一人。皆以聞之。僕又聞之。件聲何許哉。被答云。如雷無事疑。又書件序之時。夢中有人告云。此序中有失誤可直。夜夢忽驚。反覆見件序。有柳中之景已暮。花前之飲欲止之句。柳中秋事也。非春時。則覺悟直云々。

### 都督表事。

又都督被命云。表令兩三度欲作。作草猶多。

而年已老矣病焉。露命欲消云々。問云。所作儲句何等句哉。被答云。在朝又在野。霖雨人殷丁之夢。釣人不釣魚。七十遇文王之畋。此句未出。遺恨云々。

### 匡衡天台返牒事。

臨白首而始知。恨陽面於菴波万里之外。仰玄蹤而遙契。願促膝於龍華三會之朝。天台座主覺慶遺唐返牒

匡衡天台返牒終句。願促膝於龍華三會之曉。句爲憲云。不可有此句者。以言謂之。爲憲能知文章者歟。但空也。聖人甚見苦物也。非誅是之傳也。口遊亦有二失。一者以朔望弦晦爲廿四氣。一者晉朝七賢加山簡是也。聖廟西府祭文上天事。

聖廟昔於西府造無罪之祭文。於山山名可尋。訴祭文漸々飛上天云々。

### 田村麻呂卿傳事。

又云。田村麻呂卿傳者弘仁御製也。其一句云。

張將軍之武略。當案轡前驅。蕭相國之奇謀。宜執鞭後乘云々。神之神妙也。

左府和歌序事。

左府竹題和哥序。可謂優美。但改黃帝帝堯。爲炎帝帝魁者。跡善歟。是文選成文也。予云。黃帝帝堯者。少許和哥序ト覺候歟。帥被命云。尙下句ニ赤人。人丸ト我始テ作ラム日ハ。尙片方ハ健可作也。

匡衡願文中秀句事。

又被命云。以言問匡衡云。尊下願文中秀句何句哉。匡衡則詠古劔在窓撫秋水。而拭淚之句。以言再三以詠。不陳感否云々。

仁和寺五大堂願文事。

又被命云。院仁和寺五大堂之御願文。是則老耄之身所思得之句。須臾忘却。仍思得之時。且以所進覽也云々。其願文云。自伏羲四十年。訪之漢朝未有。自神武七十二代。問

之我朝未聞。是則奉譽後三條院之句也云云。伏羲四十年。莊子文也云々。次及近代願文事。江都督曰。故中宮御願文云。惠質秋馨。琬瓊芝於西晉之風。此句尤爲珍。瓊芝者。楊皇后字歟。答云然。楊駿之女。又問云。同願文云。閭野之石。斜谷之鈴。此義如何。答云。閭野之石者。漢帝戀李夫人。刻閭野之石。彼形石。答云。我有毒不可令近云々。斜谷之鈴者。玄宗幸蜀之時。聽斜谷鈴聲。思貴妃。夜雨聽猿腸斷聲。猿字可改鈴字。件事昔所披見也云々。僕問。然者文集僻事歟。又傳寫之誤歟。詳不答。所見書可尋記。忘却畢。又問云。昭陽殿翫花之序。芳塵凝兮不拂。此句所銘肝葉也。被答云。實以神妙之句也。況吟有自不堪之氣。又被命云。故女御殿願文云。昭陽殿美人就香煙兮。再見去都館之疲馬。其意如何。被答云。有仙人呈詩於件館云々。件詩中有山下鬼瘦



馬羅中玉等之義。詩不覺。可三尋記。山下鬼者鬼字是鬼

也。羅中者貴妃以羅巾自縊花。玉者環是貴

妃少名也。所見書忘却。可尋云々。是江都督

所被談也。

寬平法皇受周易於愛成事。

被命云。周易被見哉如何。答云。少々所一見

也。周易上古人以誰說被用哉。被命云。善淵

愛成能讀之云々。永貞弟也。寬平法皇者受周

易於愛成給云々。竟宴之日叙位云々。

周易讀樣事。

又云。周易云。參天カキナシ雨地カタキアリナクニモ一陰ナクニモ一陽ナクニモ履捉トリ

足滅趾アヒ此讀秘事也云々。料慄ワルカレ神カミ。又云。筆執

論有百廿樣云々。

缺文

抱朴子文云。文章與榮耀。如十尺與一丈事

云々。又云。學積成聖。水積及淵云々。又云。王

昭君有子。號知才師。匈奴子也云々。又云。雖

云書籍盈腹之士。難追文章從手之生。

三史文選師說漸絕事。

三史文選師說漸絕。詞華翰藻人以不重之句。

當宣義見之云。文道宗匠足下一人歟。宣義力

無ラム之時。可被書之句也ト云。匡衡答云。

足下達令生レハ。巨曾漸トハ書ト云々。

文選三都賦事。

又問云。文選三都賦序云。揚雄賦。甘泉陳玉樹

青葱云々。則所無實也。而坤元錄云。甘泉宮

有玉樹。揚雄所賦是也。其義如何。被答云。此

書籍相違事耳。但玉樹者何乎。僕答云。不知。

被命云。玉樹者槐也。江家私記也。

文選所言麝食栢而馨李善爲難義事。

文選所言麝食栢而馨李善以爲難義。而件書

引集注本草文明件事。以之謂之。兩家博覽

殆勝李善歟。而件書中有號太傅越之處。雖

區々末學明所見得也。被答云。應聲對之是

東海王越歟。僕答云。然也。倩案此事。可謂神速之至。其次被命云。善家有被不審事。春秋後語文。予見得此事云々。

### 高祖母劉媪媪字事。

都督被命云。史記并漢書。高祖母劉媪媪非媪字。是溫字也。其事有證驗。昔有王生者。讀前書難。高祖云。起自布衣。提三尺劍。取天下。雖其賢不改。其母名溫字。可謂愚。是則溫字。訓與媪通之故也。其後夢中見高祖。高祖忽率數人責王生云。汝不見泗水亭碑哉。溫字是僻事也。溫字也。汝讀僻字書。猥誹謗先王。其罪甚多。則命從者縛王生父。太公贖之。既頃之夢覺。汗浹背。

### 和帝景帝元武紀等有讀消處事。

後漢書和帝紀讀消處有一行。史記景帝紀。太上皇后崩。五字讀消。又後漢書光武紀。代祖光武皇帝代字。可讀世音之云々。予案之尤有

理。而俗人無讀此音之者。雖普通事。不知之歟。

### 張車子富可見文選思玄賦事。

予問云。丹波殿御作詩中。司馬遷才雖漸長。張車子富未平均。張車子事見集注文選思玄賦之中。第一有興事也。漢土有無術貧人。不注其名。歟。清貧之中無比之者也。司命司祿之神見之成憐之樣。此人之貧前生之果報也。雖欲與無其種子。然者只車子ト云人ハ未生者也。其福巨多也。先以件車子福暫借ト云テ。司命司祿以夢想令告天云。汝無福種子。仍以未生車子ト云人福暫令借與也。過今何年車子可生。其時必可返與福也ト云テ令與之間。俄不慮之外。一天之人令與財物。已成富人。過件年限之間。此カ思樣。此福主可生之年今年也。取モソ被返ルトテ。運財物偷去其土。移異國恐思之間。常只恐爾。從者之中一人姓者

アリテ。於旅行之共生産。此者如此之物中ニヤ生タルトテ。件從者等之中。子產者ヤアルト問ニ。候ト云。問云。名何名ソト問ニ。昨日產テ候ヘハ。幾程ニ可名乎ト云。サテモイカテ名ハナカルヘキソト云ニ。母云。如此令旅行。然者無宅テ。令積財物給車ノ轅ノ中ニテ生也。仍欲名車子也ト云ニ。財主出來ト云。俄逝去畢云々。

缺文

類聚國史五十四。安康天皇三年。爲眉輪王殺。大泊瀨天皇。坂合黑彥皇子深恐所疑。竊語眉輪王。遂共得間。出逃入圓大臣宅。天皇使使乞之。大臣以使報曰。蓋聞人臣有事逃入王室。未見君王隱匿臣舍。方今坂合黑彥皇子。與眉輪王深恃臣。心來臣之舍。誰忍送歟。由是天皇復益興兵。圍大臣宅。大臣出立於庭。索脚帶。大臣妻持來脚帶。愴矣傷懷而歌曰。オミノコハタヘノハカマヲナ、ヘヲシニハ

ニタクシテアユ比ナタスモ。大臣裝束已畢。進軍門。跪拜曰。臣雖被戮莫敢聽命。古人有云。匹夫之志難可奪方屬乎。臣伏願大王。奉獻臣女韓媛與葛城宅七區。請以贖罪。天皇不許。縱火燔宅。於是大臣與黑彥皇子眉輪王俱被燔死。推古天皇卅四年夏五月戊子朔。大臣薨。仍葬于桃園墓。大臣則稻目宿禰之子也。性有武略亦有弁才。以恭敬三寶家於飛鳥川之傍。乃庭中開小池。仍興小嶋於池中。故時人曰嶋大臣。

師平燒新國史事。

新國史失事。闕文

遊子爲黃帝子事。

遊子有二說。一者黃帝子也。黃帝子有四十人。其最末子好旅行之遊。敢以不留宮中。於旅遊之路死去云々。其欲死之時。誓云。我常好旅行之遊。若如我有好旅行之者。必成守

護神擁護其身ト誓成道祖神令護旅行之人。此事見集注文選祖席之所也。餞送之起此之緣也。予又問云。此事尤有興祖餞兩字。訓讀如何。被命云。兩字共ムク也。旅行之人爾令酌酒テ令饗爾。以其上分道祖神爾ムケテ令祈付旅行也。仍號祖席云々。予又問云。其今一說如何。被命云。件一人遊子ハ只遊子トテサルモノアル歟。ソレモ見事侍也。不詳。

## 首陽二子事。

先年木工助敦隆カ來タリシニ。言談之次。首陽ノ二子何カ廉ナル事勝タルト問シニ。答フル様。伯夷叔齊ハ孤竹ノ二子也トソ知テ候。其廉勝劣不知云々。未見其廉歟如何。伯夷勝歟。天爲試其廉。白鹿二令與之。叔齊不堪飢。心中欲食此鹿之處。鹿知其心。俄去了也云々。

稱雲直又夢澤號楚雲事。

又云。雲夢者稱雲直或夢澤。號楚雲云々。瑤池在周。故爲周瑤。柏梁在漢。故呼漢栢。松江在吳。故稱吳松。雲夢在楚。故作楚雲也。華騶者爲赤馬事。

故土御門右府御亭作文。紅葉詩席作云。嵐似華騶周坂曉。注書云。騶者赤馬也。見穆天子傳云々。右府御覽其注。被借召件書云々。駱賓王事。

又云。駱賓王爲徐敬業作檄云。一坏之上未乾。六尺之孤何在。則天皇后云。不舉如此人宰相之誤也。又被命云。駱賓王以帝宮篇爲第一秀句。其句云。不覺。

## 豐山鐘事。

予問云。風聞達及霜鐘動。其意如何。被答云。霜鐘者豐鐘也。焉山相聞也。

## 三遲因緣事。

三遲酒式云。一遲不得通。二遲須問架均。三



遲不得悠々。犯者罰一盃云々。

又打酒格歸田抄事。

鼠尾其酒盡故成鼠尾事。

連珠●●●●●シ其酒差多故連珠。注也。

瀝滴●●●●●餘澤未斷。故命瀝滴。注也。

又云平索者清云々。假令應滴願唱曰平聲。把

盞曰索。後待順手之。和右手把盞者。卽左

傍人宜曰着飲畢無酒。亦曰清云々。

波母山事。

又都督於西府所作詩序。波母之山。其義如

何事雖側見。慥不覺云々。被答云。波母山謂

日出國也。トソ。都督ハ被談レシト被答。見

淮南子云々。件書常所披露卷無之

護塔鳥事。

僕又問云。護塔鳥如何。被答云。見內傳要。具

不記。

擬作起事。又被談云。擬作之起。天神始被作儲。可有之

由也。

連句七言。

尾拂樹間黃牛背。手打門前白鴈聲。

五言。

二藍經一夏。蒼朽葉幾廻秋。紀。

泡垂觀藥口。秦能貧負秦能肩。齊名。

芸閣二貞序。公任卿。蘭臺八座賢。惟貞。

何能才子何人。齊信卿。明法生爲親稱何能也。

朝器非朝器。秀才茂才是茂才。

深草人爲器。匡衡小松僧沸湯。

負牛一屋具。乘馬二分人。

千六百年鶴時棟。二三兩月鶯。則衡。

人曰山城介。孝言。扇亦貢士腰。

家々懸孔子。世稱永驛官。佐國。

文武兩家姓。隆兼。處々呼彭侯。

貫月查浮海。時棟。江平一士名。

宣風坊在京。朝衡。

〔以慶長本按語注イ大槻氏藏本按語注イ加一按了〕

# 群書類從卷第四百八十七

## 雜部四十二

### 續古事談第一 王道 后宮

帝王ハ人ヲアハレミ。民ヲハグ、ム心オハシマスベキ也。シカレバ一條院ハ極寒ノ夜ハ御衣ヲヲシノケテオハシマシケレバ。上東門院ナドカクハセサセ給ゾト問タテマツリ給ケレバ。日本國ノ人民サムカラムニ。ワレアタ、カニテネタル事無慙ノ事也トゾ仰ラレケル。延喜御門モサムクサユル夜ハ御衣ヲヌギテ夜御殿ヨリナゲイダシ給ケルトイヒツタヘタリ。神璽寶劔（んざいほうけん）神ノ代ヨリツタハリテ。御門ノ御マモリニテ更ニアケヌタ事ナシ。冷泉院ウツシ心ナクオハシマシケレバニヤ。シルシノ宮ノ

カラゲヲ解テアケムトシ給ケレバ。宮ヨリ白雲タチノボリケリ。ヲソレテステ給タリケレバ。紀氏ノ内侍モトノゴトクカラゲケリ。寶劔ヲモヌカムトシ給ケレバ。夜ノ御殿ヒラトヒカリケレバ。ヲヂテヌキ給ハザリケリ。カルメデ度オホヤケノ御タカラ物。目ノ前ニウセニキ。

東宮ノ御マモリニツボキリト云太刀ハ。昭宣公ノ太刀也。延喜ノ御門儲君ニオハシマシケルニ奉ラレタリケルヨリ傳ハリテ。代々ノ御マモリトナルナリ。後三條院東宮ニ立給時。後冷泉院ヨリワタサレザリケリ。後冷泉院ウセ

給テ後モトメイデテ。大二條殿關白ノ時。後三條院ニタテマツラレニケリ。立坊ノ後廿餘年ヲサレデヤミニキ。今位ニツキテ後トバメラレズトモアリナムト世ノ人申ケリ。後三條院オホセラレケル。神璽寶劔エウナリシカドモ廿餘年スギニキ。何カクルシカラントテトドマリニケリ。其後ホドナク二條内裏ノ火事ニヤケテ身バカリノコリタリケルニ。ツカサヤヲ作リテグセラレタル也。

造酒司ノ大刀自ト云ツボハ三十石入也。土ニ深クホリスヘテワヅカニ二尺バカリイデタルニ。一條院ノ御時ユヘナク地ヨリヌケ出テ。カタハラニフシタリケリ。人オドロキアヤシミケルホドニ。御門ウセ給ニケリ。三條院御時大風フキテカノツカサタフレニケルニ。大トジ。小刀自。次トジ。ミナウチワリテケリ。後冷泉院御時主殿寮ヤケケル時。アマクダリ

タル油漏器ヤケニケリ。賀陽親王コレヲウツシツクリタリケレドモ。功用ホドコス事ナシ。夫モ同ジクヤケニケリ。大嘗會御火オケ。元三ノ御クスリアタムルタバラナンド。世ノハジマリノ物皆焼ニケリ。クスリ殿ノ御テウシハヤブレ損ジタリケルヲ。雅忠典藥頭ノ時。アタラシキ銀ヲフルキニマセテウチカヘテ供御ニソナヘケリ。

典藥寮明堂圖ハ靈物也。雅康寮御時。本寮破レテステヲキテヨロヅノ人ミケリ。カヤウノ累代ノ寶物。今ハ一モノコル物ナシ。

堀川院皇子ヲソクイデキ給ケレバ。白川院ナゲキ給テ。鳥羽院ノ御母后ハ入内アリケリ。ハラミ給テ後。カノ御母坊門尼。上賀茂ニコモリテ。男子ヲ祈ケル。夢ニ大明神キヌノソデニキサセ給テモノ仰セラレケリ。又男子ヲウムベシ。又其マキナル物ヲトレトミテ。オドロキテ

ニツクリタル籠アリケリ。

ハリテ。鳥羽院ニタテマツ

カノ大明神居給タリケルキヌヲ

テ。四條坊門ノ別宮ヲバカノ尼

リ。女御ハラミ給ケル時。女一人參

申云ク。コノハラミ給ヘルハ王

クオハシマスベシ。右ノ御尻ニア

マスベシト云ケレバ。女房。電宮大夫

ツゲ申タリケレバ。イデアハントセラ

レ。トニイヅチトモナク失ニケリ。生給

テ。コトニ右ノ御尻ニアザオハシマシケリ。

院。御時大地震ノアリケル日。冷泉院オ

ホセ。レケルハ。池ノ中島ニ幄ヲタテヨ。オハ

シマスベキ事アリト仰セラレケレバ。人心エ

ズ思タガラタテ。御簾カケ簾シキタルニ。午

時計リニワタリ給ニケリ。其後未時バカリニ

大地震アリテ。ヲソク出ル人ハウチヒシガ

ケリ。人々此事ヲ問タテマツリケレバ。去夜ノ

夢ニ九條（附録）大臣來テ。明日ノ未時ニ地震ア。ベ

シ。中島ニオハシマセトツゲツルナリトゾ仰

セラレケル。聞人涙ヲナガシケリ。彼大臣ノ靈

ツキノヒテマモリタテマツルナルベシ。

河内前司重通ト云者童ニテ西宮ニアリケル

ニ。ミチアシカリケル所ニアユミノ板ヲ三四

枚バカリシキワタシタリケルニ。朱雀院ノカ

メヨリシラヒゲナル翁ノモトバリハナチタル

スヲトリテコノ板ヲワタラントシケルヲ。

コノ重通ガオサナクテ。イタノ端ヲフミテウ

ゴカシタリケレバ。此翁ヒレフシニケリ。朱雀

院ノ方ヨリ藏人二人ハシリキテ。手ヲ引テカ

ヘリニケリ。後ニキケバ。冷泉院ノオハシマシ

ケル也。イトアヤシキコト也。

堀川院ハ末代ノ賢王也。ナカニモ天下ノ雜務

ヲ殊ニ御意ニ入レサセ給タリケリ。職事ノ奏



シタル申文ヲ皆メシトリテ。御夜居ニ又コマ  
カニ御覽ジテ。所々ニハサミガミヲシテ。コノ  
コトタヅヌベシ。コノコトカサネテ問ベシナ  
ド。御手ヅカラカキツケテ。次日職事ノ參リタ  
ルニタマハセケリ。一返コマカニキコシメス  
事ダニ有ガタキニ。重テ御覽ジテ。サマデノ御  
沙汰アリケム。イトヤム事ナキ事也。スベテ人  
ノ公事ツトムルホドナドヲモ御意ニ入テ御覽  
ジ定メケルニヤ。追儼ノ出仕ニ故障申タル公  
卿元三ノ小朝拜ニ參タルヲバ。コトゴトク追  
イレラレケリ。去夜マデ所勞アラムモノノ。イ  
カデカ一夜ノ内ニナラルベキ。イツハレル事  
也ト被仰ケリ。白河院ハ此ヲ聞食テ。キクト  
モキカジトゾオホセラレケル。アマリノコト  
ナリト思召ケルニヤ。

堀川院在位ノ御時。坊門左大辨爲隆職事ニテ  
太神宮ノウタヘヲ申入ケルニ。御笛ヲフカセ

給テ御返事モナカリケレバ。爲隆白川院ニ參  
テ。内裡ニハ御物氣オコラセオハシマシタリ。  
御祈ハジマルベシト申ケリ。院オドロカセ給  
テ内侍ニ問セ給ケレバ。サル事夢ニモ侍ラズ  
ト申ケリ。アヤシミテ爲隆ニ御尋アリケレバ。  
ソノ事ニ侍リ。一日太神宮ノ訴ヲ奏聞シ侍シ  
ニ。御笛ヲアソバシテ勅答ナカリキ。是御物ノ  
タナドニアラズバアルベキ事ニアラズト思テ  
申侍リシ也ト申ケレバ。院ヨリ内ヘ其ヨシ申  
サセ給ケリ。御返事ニハサル事侍リキ。タバノ  
事ニハアラズ。笛ニ秘曲ヲ傳ヘテ其曲ヲ千遍  
フキシ時。爲隆參テ事ヲ奏シキ。今二三反ニナ  
リタレバ。フキハテハイハムト思シホドニ。尋  
シカバマカリ出ニキ。ソレヲサ申ケル。イトハ  
ヅカシキ事也トゾ申サセ給ケル。

又此御時。或人内裡ヘ柑子ノ木ヲマイラセタ  
リケルヲ。ナニガシノツボニウヘテ愛セサセ

給ケレバ。藏人瀧口ナドアツマリテ。木ヲカラサジトテ家ヲツクリオホヘリケルヲ爲隆參テ此ヲ見テ。アレハ何事ゾサル事ヤハアルベキトテ。御クラノ小舍人ヲ召テ散々ニコボタセテケレバ。木ホドナクカレニケレドモ。人チカラモヲヨバズ君モオホセラル、事ナシ。

白川院ノ御前ニテ爲隆事ヲ奏シケルニ。題目事ノ外ニ重リテウルサゲニ思食タリケルヲ。此次ニ申文ノアルカギリ奏シハテムト思テ。シラズガホニテ申キタリケルニ。申文今五六通バカリニナリテ。院タ、セオハシマサムトシケルヲ。爲隆ミズガホニテ祭主大中臣某謹申請天裁事トヨミキカセマイラセタリケレバ。太神宮ノ訴ヨナトテ。カヘリキサセ給ニケリ。ソレヲチカラニテ殘ヲモ申ハテ、ゾイデニケル。スベテケヤウニオシガラアリテ。ユ、シカリケル人ナリ。

白河院法勝寺ツクラセ給テ。禪林寺ノ永觀律師ニイカホドノ功德ナラント御尋アリケレバ。トバカリモノモマウサデ。罪ニハヨモ候ハジトゾ申サレタリケル。

後一條院オサナクオハシマシケル時。傳大納言參テ御前ニ候テ金百兩ナゲチラシタルヤ御覽ジタル。イミジク興アル物也ト申サレケレバ。イマダミズイカナルゾト被仰ケレバ。大納言。マコトニオモシロキ物ナリ。御覽ズベシトテヲノコドモメシテ。オサメ殿ノ砂金百兩タテマツレトアリケレバ。藏人トリテ參タルヲヒキアゲテ。御前ニナゲチラサレタルヲ御ランジテ。イヅレオモシロキト被仰ケレバ。大納言。サラバステ候ナントテヒキツ、ミテ。フトコロニ入テイデラレニケルトゾ。

一條院御時。臺盤所ニテ地火爐ツイテト云事アリケリ。左大臣傳大納言ナムドツカウマツ

ラレケリ。大納言ハ銀ニテ土鍋ヲツクリテ。ヒ  
サゴヲタテ、イモガユヲイレタリケリ。中ノ  
渡殿ニ上達部候テ。清涼殿ノ廣庇ニ。庖丁ノ人  
人。高雅明順ナド候ケリ。供御マイラセ。人々  
ノ衝重スヘテ。御酒シキリニマイラス。管絃ヲ  
奏ス。醉ニノゾミテ。傳大納言タチテ舞ホドニ  
冠オチニケリ。人々咲アヘルニ。廣幡ノオトバ  
アザケラレケルヲキ、テ。此大納言何ゴトイ  
フゾ。妻ヲバクナガレテトイハレタリケル。聞  
人ハチヲシラズ。ウタテキ事也トゾ云アヒケ  
ル。サテ中宮ノ御方ニワタリ給テ御遊アリケ  
リ。主上笛フキ給ケリ。通網卿ナデシコオリテ  
御カザシニタテマツル。其後宮ヨリ御ヲクリ  
物。人々ノ祿ナドアリケリ。

堀川院御時ノ逍遙ニ序代カクベキ人ナカリケ  
リ。大業藏人國資無才ノ者ニテ人ユルサズ。五  
位藏人時範カキテケリ。其日主上殿上ニテ人

人ニ連句イハセ給ケルニ。國資ニ末句イヘト  
被仰ケレバ。今日ワタクシノ衰日也。ハバカ  
リアリト申ケレバ。主上殿上ノ曆ヲ召テ御覽  
ズルニ巳日也。巳日衰日イマダナキ事也。君ヲ  
アザムキ申。連句イハヌホドノモノ。イカデカ  
博士ニナルベキト被仰ケル。今モ昔モ無才ノ  
博士ハアルモノナリケリ。

圓融院大井川ニ御幸アリケルニ。先少<sup>兼家</sup>リ寺ノ  
前ニ絹屋ヲタテ、オハシマス。大入道殿攝政  
ノ時。御膳マウケラレタリ。茶碗ニテゾアリケ  
ル。其後御船ニタテマツリテ。トナセニオハシ  
マシケリ。詩歌管絃ヲノノ船ゴトナリ。源中  
納言保光卿題タテマツル。翫水邊紅葉トゾ。  
詩ノ序右中弁資忠。和哥ノ序大膳大夫時文ツ  
カウマツレリ。法皇御衣ヲヌギテ攝政ニタマ  
フ。攝政又衣ヲヌギテ大藏卿時仲ニ給ケリ。管  
絃ノ人々上達部キヌヲカヅケラレケリ。内裏

ヨリ頭中將誠信朝臣御使ニマイレリ。祿ヲタマヒテカヘリマイル攝政管絃ノ船ニ候。時仲ノ三位ヲメシテ院ノ仰ヲ傳テ參木ニナサレケリ。人々ヒソカニ云ケル。主上ノ御前ニアラズ。タチマチニ參木ヲナサル、事イカバアルベキトカタブキケリ。今日ノ事何事モ興アリテイミジカリケルニ。此コトニスコシ興サメニケリ。

一條院圓融寺へ御幸アリケルニ。御拜ハテテ御對面シ給時ニ、御クダ物。イモガユナドマイラセテ後。主上釣殿ニイデ給テ。上達部ヲメシテツイガサネタマフ。オホセアリテ母后ノ女房車甘雨。池ノ東ニタテラル。船樂シキリニ奏シテ盃酌タビくメグル。主上御盃ヲ左大臣ニタマフ。庭ニオリテ拜セラル。院御盃ハ攝政給テ堂上ニテ拜セラレケリ。仁和寺別當濟信ヲ召テ。カハラケトラシメテ。律師ニナサレケ

リ。御遊ノ時主上御笛フキ給ニ。ソノネメデタクタヘナリケレバ。院感ジテ御笛ノ師左衛門督高遠朝臣ヲ召テ。三位ヲユルサレケレバ。高遠舞蹈シテ上達部ノ座ニクハ、リツキケリ。内裏ヨリ院ノ御ヲクリ物ニハ。瑠璃ノ香呂。金ノ御スゞ箱。銀ノ紅梅ノ枝ニ鶯ノキタルニ附ラレケリ。院ヨリノヲクリモノハ。御手本。御帶。御笛也。

堀川院初テ朝覲行幸ニ。御笛フキ給ケルニハ。御笛ノ師政長朝臣息男有賢。殿上ユルサレケリ。

大齊院ト申ハ村上御門ノ御女也。其時小野宮實女右大臣大納言ニテ。マツリノ上卿ニテ。本院ニ參テ客殿ニツカムトセラレケルヲ。申ベキ事アリマヅコレヘト仰ラレケレバ。御前ヘマイラレタルニ。御簾ノ内ニ茵シキテ女房ツタヘ仰ラレケル。中宮ヨリ色々ノ扇ヲタマハセタ



リツル。ツカヒ少將雅通也。女房トバメツレドモ。ヒキハナチテニゲヌ。ネタキ事也。イカバスベキ。コノ事イヒアハセントテナムト仰ラレケレバ。大將申サレケル。明日ノ下ニテ參タラム時。今日ノ祿ヲタマフベキナリ。中宮ヨリノ御ヒ扇トリイデテミセサセ給ケリ。女房トリ傳フトテ。御簾ニカホヲカクシテ。身ハアラハニイデテナムアリケル。ソノフルマヒタヨリアリテエンニミヘケリ。カヘサノ日。雅通モノミムトテ知足院ノ邊ニアリケル所へ。齋院ノサブラヒ。御フミ。祿ヲモチテキテ。車ニナゲイレテ。馬ヲハセテカヘリニケリ。興アル事ニナン時ノ人申ケル。少將用意ナキヨシヒトピト云ケリ。

殿上ノ一種物ハツネノ事ナレドモ久シクタエタルニ。崇徳院ノスエツカタ。頭中將公能朝臣ハ。絶タルヲツギ廢タルヲ興シテ。神無月ノツ

ゴモリ比ニ殿上ノ一種物アリケリ。サルベキ受領ナカリケルニヤ。クラヅカサニ仰テ。殿上ニ物スヘサセテ。小庭ニウチイタヲシキテ火ヲオコス。人々酒肴ヲグシテ參テ殿上ニツキヌ。頭中將ノ一種物ハ。ハマグリヲコニ入テウシヤウヲタテ。紅葉ヲムスビテカザシタリ。ハマグリノ中ニタキ物ヲ入タリケリ。瀧口コレヲトリテ殿上口マデス。主殿司ツタヘトリテ大盤ニヲク。頭中將トリテ人々ニクバラレケリ。人々トリテケウジアヘリ。コト人々多ハ雉ヲイダセリ。主殿司トリテタテジトミニヨセタツ。信濃守親隆大鯉ヲイダセリ。庖丁ノ座ニヲキテ。御厨子所ノ頭久長ヲ召テトカセントスルニ。ソノ事ニタヘズトテキラズ。御鷹飼ノ府生敦忠鳥ヲカタニカケテマイレリ。小庭ニ召テ庖丁セサス。一二獻藏人季時信範ス。少將資賢タケノハニヲク露ノイロト

イフ今様ヲウタフ。藏人辨朝隆三獻ノカハラケトル。又頭中將ノス、メニテ朗詠ヲイダス。佳辰令月ノ句ナリ。頭中將朝隆ガヒモヲトク。人人ミナカタスグ。色々ノ衣ヲキタリ。用意アルナルベシ。頭中將朗詠。雖三百盃莫辭ノ句ナリ。ヤウ／＼醉ニノゾミテ。資賢白<sup>シ</sup>スヤウノ句ヲハヤス。主殿司アコ丸コトニタヘタルニヨリテ。クツヌギニメシテツケシム。人々亂舞ノ後。ミコエイダシテ座ヲタチテ。御殿ノヒロビサシニテナダイメンハテ。宮ノ御方ニ參テ朗詠雜藝敷反ノ後マカリイデケリ。殿上ニテ人々連哥アリケリ。

鳥<sup>羽</sup>院宇治ニ御幸アリテ經藏ヒラキテ御覽ジケルニ。此經藏ハヨノ常ノ人イル事ナキニ。富家殿御前ニ候給テ。播磨守家成時ノ花ニテアリケレバ。御氣色ニカナハムトヤオボシケン召入ラレケリ。後白川院御幸アリケル時。コノ

事ヲヤキ、ヲヨベリケン。右衛門督信賴メシアラムズラムト思ケルニ。法性寺殿イトサヤウノ氣オハセデ。召事ナクテヤミニケレバ。人シレズムツケハラダチケルナゴリニヤ。範家ノ三位トイヒケル人ヲ輕慢シテ。ニヤクリ三位。キ三位。散三位。ヨク三位。ムコトリ三位ナドハヤシタリケルトゾ世ノ人イヒワラヒシ。マコトニヤ。

後中書王賀茂ニテヨミ給ケル。

思フ事モロヤナカラニカナヒナハ御手洗川ノシルシト思ハシ

藤壺ノ中宮<sup>感字</sup>后ニ立給ケル日、上達部穩座ニウ

ツリテ後、<sup>源長</sup>殿カハラケトリテイデ給ケレバ。

攝政座ヲサリテ<sup>實資</sup>右大臣ニ向テキ給ケリ。大殿

タハブレテ<sup>實資</sup>右大將ニオホセラレケル。ワガ子

ニサカズキス、メ給へ。大將カハラケトリテ

攝政ニス、ム。攝政トリテ<sup>顯光</sup>左大臣ニツタヘ給

フ。左府大殿ニタテマツル。大殿右府ニツタヘ

給ケリ。又右大將ニノ給フ。哥ヲヨマムト思  
ニ。カナラズカヘシ給ベシ。大將ナドカツカマ  
ツラザラムト申サル。大殿仰ラル、ヤウ。ホコ  
リタル哥ニテナムアル。タバシカネテノカマ  
ヘニハアラズトテ。

此世ヲハ我ヨトリ思モチ月ノカケタル事モナシト思ヘハ  
大將申サル。コノ御哥メデタクテ返哥ニアタ  
ハズ。タバコノ御哥ヲ満座詠ズベキ也。元稹ガ  
菊ノ詩居易和セズ。フカク感ジテヒネモスニ  
詠吟シケリ。カノ事ヲ思ベシト申サルレバ。人  
人響應ンテタビ／＼詠ゼラルレバ。大殿ウチ  
トケテ。返哥ノセメナカリケリ。

五節ニ上東門院へ人々參テアソビケルニ。右  
大辨定頼朝臣カハラケトリテヨメル。

日影サス雲ノ上ノコサリセハ豊ノ明リヲイカテシラマシ  
白河院法勝寺ニオハシマシテ花ヲ御覽ジテ。  
常行堂ノ前ニテ人々マリツカウマツリケル

ニ。殿ヨリ隨身公種シテマリヲタテマツリ給  
テ。

山櫻タツヌト聞トサソハレヌ老ノ心ノアクカル、カナ

御返

山深ク尋ニハコテ櫻花ナニカ心ヲアクカラスラム

昔平城天皇ノ御時マデハ。此國ニモ朝マツリ  
ゴトシ給ケリ。ソノ儀式。イマダホノ／＼ノホ  
ドニ。主上イデテ南面ニオハシマス。群臣百寮  
ヲノ／＼座ニ攝ス。四方ノ訴人サウナク内裏  
へ參集テ。タカキ机ノ上ニウレヘブミノハコ  
トイフ物ヲヲカレタリケレバ。アヤシノ民百  
姓マデ申文ヲモテ參テ。コノハコニイル。史外  
記辨少納言ナド次第ニトリアゲテコレヲヨミ  
申。群臣ヲノ／＼コレヲ評定シ。主上マノアタ  
リ勅定ヲクダサル。ウレヘモシ左右ニアレバ。  
スナハチメシトハル。カタガタノモノ當時ナ  
ケレバ。シリゾキテトハルベキヨシヲ仰ス。申

文オホクシテ事ノホカニ日タケヌレバ。ヤガテソノ座ニテ供御ヲマイラス。諸卿御膳ヲオリゴトニアハセ給ハザリケルナリ。

ロシテ各コレヲクフ。ソノマツリゴトモシシハテヌレバ、ソノノチゾ舞樂御遊ナドモアリケル。君ノ御コ、ロニハ民ノウタヘヲキコシメシテ御コトハリアルヨリ外ノ大事ナカリケリ。微旦取衣領會者少トイフ本文。コレヨリオコレル事也。アサマツリゴトニイヅル事ハ。イマダクラキホドナレバ。衣ノクビヲサグリウル事カタシトイフナリ。嵯峨天皇ヨリコノカタ、コノ事スタレニケリ。コノ君事ノホカニ放逸ニシテマツリ事ヲ御心ニイレ給ハズ。サレドモソノ儀式ハ猶アリケリ。五位ノ藏人二人ヲサシテ。御倚子ノ傍ニスヘテ。ウレヘヲキカシメ。群議ヲキカシメテ。ノチニキコシメシテ。成敗セサセ給ケリ。コレ今ノ職事ノハジメナリ。嵯峨ノ別業ナドヘ常ニオハシマシケルユヘニ御イトマナクシテ。ミヅカラアサマツリゴトニアハセ給ハザリケルナリ。寛平法皇ノ御位ノ時。菅丞相君ヲイサメタマツリ給事。漢土ノ賢臣ノ諫言ヲタマツルニコトナラズ。或時コトニ殺生禁斷オコナハレタリケル次ノ年。君ミヅカラタカガリヲシ給ケレバ。丞相申給ケリ。今年ハ鳥獸ナニノアヤマチアレバ。カタチマチニコレヲカリ給ゾト申サレケレバ。ミカドコトハリニツマリテ。カリヲヤメサセ給ニケリ。スベテカヤウノ器量ヲ御覽ジトリタリケルニヤ。首尾ワヅカニ九箇年ノアヒダニ。讃岐守ヨリ右大臣内覽ノ臣マデナシタマツリ給タリ。サル程ニ醍醐ノ御門ノ御時延喜元年ニ事ハイデキニケリ。善宰相ハ筭道ヲ以テコレヲ、キテ。明年カナラズ天下ニ事アルベシ。君臣運ノアタルトコロ。御身ニ事アルベシトオボユ。スベカラク顯名



ノ官ヲノガレテ。ツヽシミ給ベシト申ケレドモ。菅丞相コレヲモチヒ給ハズ。カサネテ申テ云ク。雖離朱之眼不見睫上塵。雖仲尼之才不知箱中物トテ。イカニ申セドモ。御身ノ上ノ事ヲバシラセ給ハジモノヲト申ケレドモ。ナヲモチヒ給ズシテツイニ事イデキニケリ。今思ヘバ。君臣ノアヒダノ寵辱ノ朝暮ニアル事ヲシメサムトシ給ケル權化ノ方便ナレバ。トカク申ニオヨバス。

寛平法皇ハコトニ儉約ヲコノミ給ケリ。御アトノ事。葬禮ノ事ナドオホセラレヲキケルニハ。筵ニテ棺ヲツヽミテ。カヅラニテコレヲカラゲヨトゾノ給ケル。重明親王李部王記ニカキ給ヘルナリ。

後三條院ハイカ程ノ學生ゾト人ノ問ケレバ。江中納言オモヒマウケタル事ノヤウニ。佐國<sup>國房</sup>ホドニヤオハシケントイヒケリ。長方卿ハコ

レヲキヽテナキケリ。國王ノサホドノ學生ニテオハシマシケンコトヲ感ジテナリ。

後三條院宸筆ノ宣命ヲカキテ太神宮ヘタマツラムトセサセ給ケル時。江中言ノ御前ニ候ケルニ。ヨミキカセサセ給ニ。我クラキニツキテ後ニ。一事トシテ僻事セズト云事ヲカヽセ給ヘリケレバ。匡房卿コノ御コトハイカバ侍ルベカラムト申ケレバ。事ノホカニ逆鱗アリテ。何事ヲ思テカクハ云ゾト問セ給ケレバ。實政ニ常陸ノ弁隆方ヲコエサセラレタル事ハイカニト申タリケル時。御氣色スコシナフリテ。サルコトアリト思食イデタルサマニテ。ヨミモハテバ。宣命ハモチテウチヘイラセ給ニケリ。此事ハ此君イマダ春宮ニオハシケルトキ春日詣ノアリケルニ。泉ノ木津ニテ隆方實政フナアソビヲシテ事ヲ出シテケリ。今モ昔モ勸修寺氏ノハラノアシサハ。隆方ノ實政ヲ

ノルコトバニ。サマデモナキマチザイハヒノ  
同ジトウカナト云テケリ。實政ハ多年ノ春宮  
ノ學士老者也ケレバ云ケル也。實政ナク  
此事ヲウタヘ申テケリ。是ヲヤスカラズオボ  
シメシツメテ。御位ニツカセ給テ後。隆方ヲコ  
サレタリケル也。君モ此事ヲ深クオボシ知ケ  
ルニヤ。其<sup>御</sup>時マデハ。出居ノ御座ニテ。供御  
ハマイリケルニ。御前ニ誰カ候ト問セ給ケレ  
バ。隆方候ト人ノ申ケルニ。ソレニ向テエ物ク  
ハジト仰ラレテ。内ニテゾ供御ハマイリケル。  
ソレヲヨリヤウ<sup>コノ儀</sup>ハイデキニケリ。  
後三條院ハ春宮ニテ廿五年マデオハシマシ  
テ。心シヅカニ御學問アリテ。和漢ノ才智ヲキ  
ハメサセ給フノミニアラズ。天下ノ政ヲヨク  
ヨクキ<sup>ハ</sup>ヲカセ給テ。御即位ノ後サマザマノ  
善政ヲオコナハレケルナカニ。諸國ノ重任ノ  
功ト云事長ク停止セラレケル時。興福寺ノ南

圓堂ヲツクレリケルニ。國ノ重任ヲ關白大二  
條殿マゲテ申サセ給ケルニ。事カタクシテタ  
ビタビニナリケレバ。主上逆鱗ニヲヨビテ仰  
ラレテ云ク。關白攝政ノオモクオソロシキ事  
ハ。帝ノ外祖ナドナルコソアレ。我ハナニトオ  
モハムゾトテ。御ヒゲヲイカラカシテ。事ノ外  
ニ御ムヅカリアリケレバ。殿座ヲタチテイデ  
サセ給トテ。大聲ヲハナチテノ給ハク。藤氏ノ  
上達部ミナマカリタテ。春日大明神ノ御威ハ  
ケフウセハテヌルゾトイヒカケテ出給ケレ  
バ。氏ノ公卿マコトニモ一人モノコラズ皆座  
ヲタチテ。殿ノ御トモニ出ケレバ。事ガラオビ  
タバシクゾアリケル。主上是ヲキコシ食テ。關  
白殿并ニ藤氏ノ諸卿ヲメシカヘシテ。南圓堂  
ノ成功ヲユルサレニケリ。殿ノ御威モ君ノ御  
心バヘモアラハレテ。時ニトリテイミジキ事  
ニテナンアリケル。

一條院御時大和國ソフノ上ノ郡ニ檜山ノ峯ニ  
三町ばかり未申ニアタリテ。小山ノタカサハ  
九尺ばかりナルニ。オヒタルウヘ木モハタラ  
カズシテウツシヲキタリケリ。其峯ノ上ニ藏  
アリケリ。藏ノ中ニ佛像アリケリ。五ヶ日ヲヘ  
テ風フキタフシテケリ。ナニノ故トシラズ。不  
思議ノ事也。

皇嘉門院ノ御名ハ聖子也。聖字ノ上ノ作ハハ  
ラムト云ヨミアリ。王子ヲハラムト付奉レリ  
ケルヲ。或人難ジテ云ク。聖ノシタノツクリ  
ハ。王ニハアラズ。壬ト云文字也。壬ニハムナ  
シト云ヨミアリ。ムナシキ子ヲハラミタラ  
ム。此御名ハハカリアリト云ケル程ニ。タマナ  
ラヌ御事ニテ御産ノ月ニ成テ御祈ナニクレト  
ヒシメク程ニ。水ヲオボラカニムマセ給ニケ  
リ。カハル事ハサノミコソハ侍ルニ。ハタシテ  
ムナシキ子ナリケリ。イトフシギノ事ナリケ

リ。

宜秋門院ノ御名ノサダメアリケル時。兼光中  
納言任子ト云御名ヲタテマツラレタリケル  
ヲ。靜賢法印申テ云。白氏ノ遺文ニ任子行トイ  
フ文アリ。シカモカレハコトアル文也。此御名  
イカバアルベカラント申タリケレバ。九條殿  
モチヒサセ給テ。アマネク御尋アリケレドモ。  
サル事アリト中人モナカリケルニ。敦綱バカ  
リコソオボエテ。サル事侍リ。モトモサルベ  
キ事也ト申タリケレ。大才ノ人モヲノヅカラ  
ミヲヨバヌ事アリ。チカラヲヨバザル事也。

### 續古事談第二 臣節

宇治殿白川殿ニテ子日シ給ケルニ。義忠朝臣  
カナノ序書タリケル。殿御衣ヲカヅケ給フ。東  
宮大夫トリ傳ヘ給ヘリ。此日四條中<sup>之儀</sup>言祭主

輔親マイラザリケル。殿ヨリ始テクチヲシキ事ニ人々思ヘリケリ。各家風ヲ傳ヘタル人ナレバ也。

宇治殿南面ノ紅梅ニ雪ノツモレルヲ御覽ジテ。人ヲメシテヲラセ給フ。

ヲラレケリ紅ニホフ梅ノ花ケサシロタヘニ雪ハフレトモレトイ

經衡ヲ召テ此御歌ヲタマハセケレバ。經衡サハギテマカリタチニケリ。二三日アリテ。堀川賴宗右大臣和歌フタテマツラレケリ。

ヲラレケル梅ノ立枝ニフリマカフ雪ハニホヒテ花ヤ咲ラン

貞信公太政大臣ニ成給テノ給ヒケル。我カタジケナク人臣ノ位ヲキハム。コノカミ時平大臣ヲ太政大臣ニナサルベキヨシ前皇オホセラレケルニ。カノオトバ奏シテ申サク。弟忠平必此官ニイタルベシ。一門ニ二人キルベカラズトテ。勅命ヲウケズトイヒキ。コレヒガ事ナリ。タバシ三善文君ガ宮内卿實託宣シテ云ク。

冥途宮中ニ金籍ノ銘ニ太政大臣從一位トシルセリト云テ。其時此事ヲウタガヒキ。今ムナシカラズ。又故大江玉淵朝臣我ヲ相シテ。官位ヲキハムベシト云キ。ハタシテ相カナヘリトゾノ給ヒケル。

神泉南面ニハ二階ノ樓門アリケリ。小野宮殿實ノ三條大宮ノ邊ニオハシケル時。藍摺ノ水干袴キタル男ノオリエボウシナルガ。色シロクキヨゲナルサシ入テタマズミケレバ。アレハ何人ゾト問給ケレバ。コノ西ワタリニ侍ルモノ也。只今外ヘマカリムカヘリ。近クオハセバ案内申ナリト云ケレバ。サ承リヌトノ給ケレバ。カイケツヤウニウセニケリ。其後ソラクモリカミオドロノシクナリテ。此樓門ヲクエヤブリテケリ。神泉ノ龍ナリケリトゾノ給ヒケル。其後此門ハナキ也。元果僧都請雨經法オコナヒケル時。此門ハヤブレタリト云傳タル。



此寺ニヤ。

師範

廣子

九條殿シノビテキタノ宮ニカヨヒ給。イマダ人モイタクシラザリケルニ。正月一日小野宮殿ウチニマイリテ。九條殿ニアヒタテマツリテ。北ノ宮ノ拜禮ニマイラムト思ニ。雨ノフリテオマヘノキタナクテ。エ參リ侍ラズトノ給ケレバ。九條殿顔スコシアカメテゾオハシケル。閑院太政大臣公季トキコユルハ。此宮ノウミ給ヘル人也。殊ニユ、シキシナヨシ也。此人ハオサナクテ常ニ村上ノミカドノ御前ニサブラハレケリ。御前ニテ物クヒテ。エツ、ミクハムトイハレケレバ。帝我ハサルモノクハズトゾオホセラレケル。エツ、ミワロキモノニテアルニヤ。コノ人ノ童名ハ宮雄トゾ。

伊井

一、位攝政ハミメイミジクヨクオハシケリ。弘徽殿ノホソドノノツボニイリテ。アサボラケニ冠シ入テ出給ケレバ。隨身キリ聲ニサキ

追ケル。イミジカリケリ。コノ御子義孝ノ少將

モミメヨカリケリ。往生シケル人也。其事コトフリタレバカ、ズ。此大臣ト朝成中納言トハ。ウラミラムスビテ怨靈ニナルトゾ。サテ其子孫ハ三條西洞院ノ朝成家ニ不入トゾ申ス。彼攝政ト朝成ト同ク參木ヲ申ケル。朝成。伊尹ナルマジキヨシヲヤウ、ニ申ケリ。其後朝成攝政ノモトニ向テ。大納言ニナラムト申ケルヲ。ヤ、ヒサシクアリテ日暮テ後ニ。君ニツカウマツルミチ有興事也。昔參議ヲ望シトキ。伊尹無用ノ由申サレキ。今大納言ノ用否我心ニアラズヤトイハレタリケレバ。朝成耻テ車ニ乗トテ。マヅ笏ヲナゲ入ケレバ。其笏中ヨリヲレニケリ。サテ病ツキテウセテ靈ニ成タリトゾ。此朝成ハアサマシク肥テ。ミメ人ニコトナリケルニヤ。始テ殿上シテ參リタリケルヲ。村上ノ聖主御覽ジテ替給テ。カレハタソト

コノカミノ朝忠ニ間給ケレバ。朝忠ガ弟ニ候  
ト申サレケレバ。能ヤアルト間給ケレバ。カタ  
ノゴトク學問シ侍レドモ。コトノサウニヲヨ  
バズヤ侍ラム。又笙ヲゾツカマツル。ヨシアシ  
ハシリ侍ラズト申ケレバ。帝御笙ヲタビテフ  
カシムルニ。ソノ聲雲ニトヲリテタヘニ目出  
タカリケレバ。ソレヨリ恩寵アリテ。御遊ノオ  
リゴトニカナラズメサレケリ。

八條大將保忠ト申人オハシケリ。本院ノオト

時平

ドノ子ナリ。大ニハチラレタル人也。内へ參リ  
給ケル道ニ。時ノ靱負ノ佐アヒテ。車ヨリオリ  
テ立タリケリ。大將トガメテ云ク。騎馬ノ時此  
禮アルベシ。車ニテハアルベカラズ。靱負佐陳  
ジテ云。車ニテオリザル事ハ。タガヒニ其人ト  
シラヌ時ノ事也。君隨身グシ給ヘリ。我又火長  
相シタガフ。ステニ其人ト知ヌ。何ゾ禮節ヲイ  
タサバラント云ケリ。大將理ニヲレテホメ給

ケリ。コノ大將大臣ノ宣旨ヲ蒙テ程ナクシテ  
ウセ給ニケリ。

西宮<sup>高朝</sup>左大臣口クレテ内ヨリマカリ出給ケル

ニ。二條大宮ノ辻ヲスグルニ。神泉ノ丑寅ノ  
角。冷泉院ノ未申ノ角ノツイチノ内ニ。ムネツ  
イチノ覆ニアタルホドニ。タケタカキモノ三  
人タチテ。大臣サキオフ聲ヲキ、テハウツブ  
シ。ヲハヌ時ハサシ出ケリ。大臣其心ヲ得テ。  
シキリニサキヲヲハシム。ツイチヲスグルホ  
ドニ。大臣ノ名ヲヨブ。其後ホドナク大事出キ  
テ左遷セラレケリ。神泉ノ競馬ノ時。陰陽識神  
ヲ囑シテウヅメルヲ今ニ解除セズ。其靈アリ  
トナンイヒツタヘタル。今モスグベカラズト  
ゾ。アリユキトイフ陰陽師ハ申ケル。コノオト  
ド行幸ニツカマツラレタリケルヲ。伴別當廉  
平ト云相人見テ。イマダカ、ル人ミズトホメ  
ケルガ。スギ給テ後ウシロヲミテ。背ニ吉相ナ

カリケリ。オソラクハ遷謫ノ事アラムト云ケル。ハタシテ其詞ノ如シ。

粟田ノ左大臣在衡。西宮ノ大臣ツミカウムリケル時、其所ニ大臣ニナレル也。家人大臣アキタリ。我殿ナリ給ヒナント喜ケレバ、大ニ怒リテ追出テケリ。延喜御門ノ御胤ニテ、西宮カ、ル事ニアヒ給トテ、オホキニナゲキ給ケリ。右大臣ニ成テイクホドヲヘズ。左大臣ニ成時、右大臣ハアトアリ。左大臣ノ事思カケズト云ケル。アヤシキ事也。

村上御時清涼殿ニテ、華經ノ御讀經アリケルニ、法藏、慶白、仁宗ノアラソヒアリ。覺慶申テ云。玄奘、三藏、柳ノ花鬘ヲツクリテチカヒテ云ク。モシ一分不成佛ノモノアラバ、コノ鬘、觀音ノ手ニカ、ハルマジトテナゲ給ニ。觀音ノ手ニカ、レリ。サレバ定性無性不成佛ノ義アルベカラズ。コ、ニ法相ノ人云事ナシ。御門在衡ヲ

メシテ此事ヲ問給ニ。在衡申テ云ク。岐山魯水猶未能。遊心内教事僧侶ヲラス。イカデカ是非ヲ申ベキ。タバシ慈恩傳并ニ玄奘行狀ヲミルニ。是以自身疑一分不成佛云々願也。時ノ人感ゼズト云事ナシ。此大臣奉公人ニスグレタリケリ。大雨六風ノ日、左衛門陣ノ吉上イヒケル。在衡ナリトモ今日ハマイリガタキ日也ト云ホドニ。カサヲサシフカグツヲハキテマイレリケレバ。ミル人大ニカンジケリ。此人六位ニテ鞍馬寺ニコモリタリケルニ。御帳ノ内ヨリ笏ヲ給ト夢ニミテケリ。其笏ニ右大臣從二位在衡トカ、レタリケリ。ツネニマイリテキル所アリケリ。今ニ在衡ノ問トゾ云ナル。正面ノ西ノ間ナリ。コノ人才學アナガチニ人ニスグレネドモ。性トクシテ。御門問給事アキラカニ申ニヨリテ。イミジキモノニオボシメシケリ。内ヘ參ルトテ文籍ヲ車ニ入テ道ニテミケリ。コ

ノフミノ事ヲ御門カナラズ問給ニヨリテ。ト  
バコホル事ナク申ケル也。

泰賢民部卿。勸修寺氏ノ人也。宇治殿ノ御後見  
也。平等院ツクリテイカホドノ功德ニテアル  
ラムト被仰ケレバ。餓鬼道ノ業ナドニテヤ侍  
ルラムトゾ申サレケル。

昔高麗國王惡瘡ヲヤミテ。日本ノ名醫雅忠ヲ  
給ハラント申タリケリ。此事陣ノサダメニ及  
テ。サマハニ沙汰アリケルニ。帥大納言經信  
中云。高麗ノ王惡瘡ヤミテシナム。日本ノタメ  
ニナニクルシト云ハレタリケル一言ニ事サダ  
マリテ。ツカハスベカラズト云事ニナリニケ  
リ。サテ返牒イカバイフベキトイフサダメニ  
ハ。此事エ申トヲサズトイフベシトテ。匡房卿  
其狀ヲカキケルニ。申トヲサヌヨシヲカキオ  
ホセズシテ。二タビマデカヘサレニケリ。第三  
度ニ雙魚難達鳳池之月。扁鵲何入雞林之雲

ト云秀句カキタリケルタビ。メデノ、シリテ  
ツカハサレニケリ。後ニ彼國ノ商人來ケルガ。  
此句ヲ紳ニ書シテコソキタリケレ。ヒトゴト  
ニカクカキテモタルトナンイヒケル。

古ハ野干ヲ神ノ禮トナシタル社ノホトリニテ  
キツネヲ射タルモノアリケリ。コノモノトガ  
アリナシノ事。陣ノ定ニ及テ。諸卿サマハニ  
申ケル中ニ。帥大納言經信卿申テ云ク。白龍之  
魚。勢懸預諸之密網。ト計リウチ云テキラレタ  
リケリ。イミジキ神ナリトテモ。キツネノスガ  
タニテハシリ出タラムヲ射タラムハ。ナニノ  
トガカアラント云心ナリ。此事ハ龍ノ身ノス  
ガタニナリテ浪ニタハブレテウカビイデタリ  
ケルホドニ。預諸ト云モノノアミヲヒキケル  
ニカ、リテカナシキメラミテ。大海ニカヘリ  
テ龍王ニウタヘケレバ。龍王コトハリテ云ク。  
ナニシニカ魚ノスガタトハナリケル。サレバ



コンアミニハカ、レ。今ヨリノチサル事ヲスマジキナリト云ケリ。今カク云ハ此事也。又或人申テ云ク。射タリト云トモ。其野干マサシク死タルヲミズ。トガヲモカラズト申。此日ノ定文ハ宰相中將隆綱ゾカキケル。此人ノカタチヲカクニ。雖聞<sub>レ</sub>飲羽之號。未見<sub>ニ</sub>首丘之實<sub>ト</sub>イフ秀句ハイデクルナリ。後三條院ハコノ定文ヲ御覽ジテ。餘リニ感ゼサセ給テ。隆綱ガ宰相

中將ヲ過分ニ思ケルハユ、シキ僻事也ケリ。伊勢太神宮正八幡宮イカバオボシ召ケントゾ仰セラレケル。隆綱ハ才智ハアリケレドモ。心バヘスコシアトナカリケリ。雜色ノコハキ裝束シテ晴ワタルヲヨニウラヤマシキ事ニ云テ。宇治ノ離宮ノ祭ニ雜色ノ裝束ヲ一具儲テ卿相ノ床下ニツキタリケルガ。俄ニタチテカタガタニヨリテ。ハタト裝束シテ。馬長ノトモニカチニテユ、シクネリテ。ワタリノケレ

バ。モトヨリミメヨキ人ニテアリケレバ。見物ノモノドモコレヲミテ。ユ、シキ雜色カナト云ノ、シレドモ。スベテミシル人ナシ。ヲノヅカラゾユ、シク。宰相中將殿ニ似タルモノカナト云モノアリケレドモ。アマリニ思ヨラヌ事ナレバ。イクホドナクシテコトスギニケリ。コノモシキ事ハ。カナジクミエテケリ。

陣ノ定文カクト云事ハキハメタル大事也。大弁ノ宰相ノスル事也。ソコラノ上達部マイリアツマリテ。サマルノ才學ヲハキ本文ヲ誦シテ。ヲトラジマケジト定申コトバヲヌシニモトハズ。フミヲモヒカズ。ウチキ、テカキキタルナリ。又ザレゴトモコトバヲモガザラズイフ人アレバ。其心ヲ取テ。ソガコトバヲツシリテイミジクカキナス。隆綱ノ筆ノゴトシ。サレバ其詞ノ淺キニツケ深キニツケテ。カタガタカキニクキ也。カ、ル大事ヲシテ。當座ニ

是ヲアグル。ユ、シキ大事也。ヨノツネニハ。モクロクヲトリテマカリ出テ。ヨク案ジカムガヘナドシテ後ニタテマツル。コレハヤスキ也。古ノ通俊匡房ナド。當座ニエモイハヌコトバヲツラネテカキケリ。コレラハ又今ヒトキハノ事也。マネブ人サラニナシ。チカゴロ當座ニアゲタル人ハ。俊憲ノ宰相。長方中納言。實守ノ中納言。コノ中納言ノ當座ニマイラセケル日ノ上卿ニテ妙音院ノ入道殿左大臣ニテオハシケリ。ヒサシク此儀ナシ。イミジキ事也トテ。モテナシ給ケル氣色コソ。カ、ル一ノカミニアラズハ。カクハアラザラマシトオボエテ。イミジカリケリ。

師頼ノ中納言參木之時。人ニ越ラレテ籠居ヒサシクシテ。タマノ中納言ニナリテ。ソノ初ノ出仕ニ釋奠ニイデラレタリケルニ。作法進退ノ間。事ニヲイテ不審ヲナシテ。傍ノ人ニ問

事ヲス。其時成通卿參議ニテ座ニ列ケルガ師頼卿ニ語ケルハ。久ク御出仕候ハデ公事御廢忘カト云タリケルニ。師頼卿返事ヲバイハズシテ獨言シテ云。大廟ニ入テハ毎事ニ問トイハレタリケレバ。成通ハジヌルヤウニ覺テ。アセミヅニゾナラレタリケル。後ニ人ニカタリテ云。アサマシカリシ事カナ。ナドサル事ヲ云ケントクヤシマレケルコトカギリナカリケリ。此事本説ハ。孔子ノ大廟ニテ事ヲ行給ケルニ。ヨロヅ、事ヲオボメキテ人ニトヒ給ケレバ。誰謂。鄒人之子知禮乎。入大廟每事問ト云ケレバ。問者禮也ト答ヘ給ケル。此事ヲ思テ。乍知被問ケルヲ淺ク云成テ。本文ヲ誦セラレテカナシガリケルナリ。晴ニテ人ニ物ヲ問ハ不苦事ニテアルナリ。失禮ヲコソツ、シメ。孔子云。不知爲不知是知也。是モ同心也。故少納言入道人ニアヒテ。敦親ハユ、シキハ

カセカナ。物ヲ問ヘバ不知々々ト云ト被<sub>レ</sub>云ケ  
リ。其間タル人。不知ト云ムハ何ノイミジカ  
ランゾト云ケレバ。身ニ才智アルモノハ。不  
知ト云事ヲ不<sub>レ</sub>耻也。實才ナキモノノヨロヅノ  
事ヲシリガホニスル也。都テ學問ヲシテハ。皆  
ノ事ヲシリアキラムル事ト人ノシレルハ僻事  
也。大少事ヲソキマフルマデスルヲ學問ノキ  
ハメトハ云ナリ。ソレヲ知ヌレバ。難議ヲ被<sub>レ</sub>  
問テ不知ト云ヲ耻トセヌ也トゾ云レケル。入  
道出家ノ心付テ後。院ニテ宇治ノ左府ノイマ  
ダワカクオハシケルニ參會テ申テ云ク。ヲノ  
レハ出家ノ暇申テ已ニ法師ニナリ侍リナム  
ズ。ソレニイタマシキ事ノ一侍也。才智身ニア  
マリヌルモノハ。遂ニ不運ナリト人ノ申テ。學  
問ヲモノウクセムズル事ノカナシキナリ。君  
ハ攝籙ノ家ニ生レテ。前途タノミオハシマス。  
必學問才智ヲ極メテ。シカモ人臣ノ位ヲ極サ

セ給テ。ヲノレ故人ノオコシタラム邪執ヲヤ  
ブリテ給ヘト被<sub>レ</sub>申ケレバ。ツラ／＼トカホヲ  
マモリテ。御目ニ涙ヲ浮ベテ詞ハナクテウナ  
ヅカセ給ケリ。其後出家シテ兩三年ヲヘテ後  
ニ。左府風ノ病ヲ煩給ケルニ。入道御訪ニ參ジ  
テ。御病オモカラネバ。乍臥文談シ給ケルホ  
ドニ。龜ノウラト周易ノウラト何レ深シト云  
事ヲ云出シテ。左府ハ龜ノウラフカシト被<sub>レ</sub>仰  
ケリ。入道ハ周易フカシト申ケリ。其論事ノ外  
ニシアガリテ。文ヲ取出。本文ヲヒクニヲヨビ  
ニケリ。良久ク論ジカタマリテ後。入道遂ニ  
奉<sub>レ</sub>負ヌ。サテ入道申テ云ク。今ハ御才智スデ  
ニ朝ニアマラセ給ニケリ。御學問イルベカラ  
ズ。若猶セサセ給ハバ。一定御身ノタハリトナ  
ルベシト申テ出ニケリ。此事ヲ自モイミジキ  
事ニオボシテ。御日記ニカレタリ。其詞ニ云  
ク。先年院ニシテ學問スベキヨシヲ被<sub>レ</sub>誂コト

ハ。予ガ廿ノ歳ナリ。今病席ノ論廿四歳也。中  
ワヅカニ四年ノ間ニ才智既ニ彼ガ許可ヲ蒙  
ル。都テ四年ノ學問ノ間。書卷ヲ開クゴト。彼  
一説ヲ忘ル、事ナシ。今感涙ヲ拭ヒテ此事ヲ  
記スト云々。

大二條殿ノ日記ニコソ不思議ノ事ハ侍レ。六  
條壬ニニ死タルヲヒキステタリケルヲ。  
犬ノ腹ヲ一クチクヒヤブリタリケレバ。腹ノ  
中ヨリ火イデキテ。ソノカバネヲヤキウシナ  
ヒテケリ。是權者ニヤ。

宇治ノ左府内覽臣ニテオハシケル時。入道大  
納言光賴卿職事ニテ。院ヨリ御使ニ參テモノ  
ヲ申サレケルニ。アマリニ題目オホクカサナ  
リケレバ。左府オホセラレケリ。事シゲクナリ  
ヌ目六ヤアリヌベキトテ。御簾ノ内ヨリ硯紙  
ヲトリ出テ給タリケレバ。紙ヲシヨリテ。スコ  
シモウチアンゼズカ、レケルガ。アマリニタ

ヤスカリケルヲ御覽ジテ。召テコレヲミ給ケ  
ルニ。カキザママコトニメデタカリケレバ。シ  
キリニ御感アリテ返シ給ツ。光賴座ヲ立テ後  
仰ラレケルハ。アハレ職事ヤ。又ヨニカ、ルモ  
ノイデキナムヤ。ユ、シキ君ノ御タカラカナ  
ト仰ラレテ。タバシ一ノ人ナドノ御前ニテ。御  
硯給テツカウヤウゾイマダナラハザリケルト  
仰ラレケリ。ソレホドノ

キコト也。

孝謙天皇。西大寺ヲ建立ノトキ。塔婆ニオキテ  
ハ八角七重ニ作ラムト思召テ。長手大臣ニ仰  
合サレ給ニ。五層ノ塔ヲツバメテ三層ニクミ  
ナセリ。此罪ニヨリテ。後生地獄ニ落テ。銅柱  
ヲイダク報ヲエタリ。子息家賴宰相ミヅカラ  
ノ病ノタメニ僧ヲ請ジテ修法セシメケルニ。  
ソノケブリ熱銅ノ柱ヲヘダテ。苦患シバラ  
クヤスム事ヲエタリト夢ノツゲアリケリ。父  
子ノ契マコトニアサカラズ。ミズカラノ祈父



ニコタフル事ヲカク思フベシ。史記ト云文ニ君臣父子ノ禮ヲサダムル文云。父悞子ニ諫不聽者。隨之可事。君悞臣三諫不聞者。義以可去云々。

少納言入道鳥羽院ノ御トモニテ。或所ニ唐人ノアリケルニ。通事モナクテアヒシラヒケレバ。院アヤシミテイカニシテカ、ルト仰ラレケレバ。モシ唐ヘ御使ニツカハサル、事モゾ侍ルトテ。彼國ノ詞ヲナラヒテ侍ル也ト申サレケリ。遣唐大使ノ用意イトコチタシ。コノ比ノ人ハ當時イル事ヲダニナラハヌモノヲ。

四條大納言隆季或人ニ問云。行幸ノ幸ノ字、是ヲモチヒル何ノ故ゾ。其人エ答ヘザリケリ。ソバニテ梅小路中納言長方。ソレハ本文アリ。天子行處必有幸トイヘリ。故ニ幸ノ字ヲ用ル也。御幸ニハタ、行ノ字ヲ用ル。小野宮水心抄ナムド云古キ日記ニハ皆御行トカキタル也。

タ、シ世ノ末ザマニハ。上皇ノ御ユキミナ勸賞アリ。サレバ幸ノ字用ルモ議タガハザル事也。仙院ノ渡御フバ御行ト云。帝王ノ御出ヲバ行幸ト云也。御行モトヨリミユキナリ。行幸モ又ミユキトヨムナリ。

或人云。諸國ノ地頭ト云名心エズ。イカニツケタルヤラムト年來思ヒシ程ニ。或唐書ノ中ニ云ク。世ニ俄ニ謀反ノモノイデキタルヲウタントテ。率爾ニ兵ヲアツムルトキ。兵糧米ノタメニ國王郡々ヲセメテアツメタルヲ地頭錢ト云トイフ文アリ。コレ今ノ地頭ノ義ニカナヘリ。此文ヲ見タリケル人ツケンメタルカ。又星ナドノ童謡シテ云イデタルガ。フシギノ事也。妙音院大相國禪門云ク。舞ヲ見哥ヲキ、テ國ノ治亂ヲ知ハ漢家ノ常ノナラヒナリ。シカルヲ世間ニ白拍子トイフ舞アリ。其曲ヲキケバ。五音ノ中ニハコレ商ノ音也。コノ音ハ亡國ノ

音也。舞ノスガタヲミレバ。タチマハリテソラヲアフギテタテリ。ソノスガタ甚物オモフスガタナリ。詠曲身體トモニ不快ノ舞ナリトゾノ給ケル。

六波羅ノ太政入道福原ノ京タテ、ミナワタリキテ後コトノ外ニホドヘテ。古京ト新京トイヅレカマサレルト云サダメヲセントテ。古京ニノコリ居タルサモアル人ドモミナヨビクダシケルニ。人ミナ入道ノ心ヲオソレテ。思バカリモイヒヒラカザリケリ。長方卿ヒトリスコシモ所ヲカズ。コノ京ヲソシリテ。コトバモヲシマズ散々ニ云ケリ。サテモトノ京ノヨキヤウヲ云テ。ツイニソノ日ノ事。彼人ノサダメニヨリテ。古京ヘカヘルベキ儀ニナリニケリ。後ニ其座ニアリケル上達部ノ長方卿ニアヒテ。サテモアサマシカリシ事カナ。サバカリノ惡人ノイミジト思テタテタル京ヲサホドニハ

イカニイハレシゾ。イヒヲモムケテ歸京ノ儀アレバコソアレ。イフガヒナクハラダチナバ。イカバシ給ハジトコト云ケレバ。此事我思ニハサル儀アリ。入道ノ心ニカナハムトテコソサハ云シカ。ソノ故ハ。ヒロク漢家本朝ヲカムガフルニ。ヨカラヌ新儀オコナヒタルモノ。ハジメニ思立ヲリハ。ナカ／＼人ニ云アハスルコトナシ。ソノシワザスコシクヤシムコハロアルトキ。人ニハトフナリ。コレモカノ京。コトノホカニキツキテノチ。兩京ノサダメヲオコナヒシカバ。ハヤコノ事クヤシウナリニケリトイフ事ヲシリニキ。サレバナジカハコトバヲオシムベキトゾイハレケル。マコトニ其後ニ人ニコエラレムトシケル時モ。コノ入道ヨキヤウニ申テ。長方卿ハ事ノ外ニ物オボエタル人也。タヤスク人ニ超越セシムベカラストテ。後マデモ方人ヲセラレケル也。梅小路中納言

ノ兩京ノサダメトテ。其時ノ人ノ口ニアリケリ。

在衡維時オナジ時ノ藏人ニテ。藤内記江式部トテゾアリケル。コノ維時ハ聰敏フシギナリケリ。遷都ヨリ後ノ人ノ家。始ヨリ今ニイタルマデ。ソノ主ノ名ウリカフ年月皆コレヲ覺エ。又人ノ忌日ミナシリタリケリ。此藏人ノ時。於御前前裁ノ名ヲ書タリケル一草ヲヨム人ナカリケリ。

高内侍ト云ハ中關白ノ室。成忠二位ノ女也。圓融院ノ御時典侍シケレドモユルサレザリケレバ。内侍所ニ屏風ヲタテ、サブラヒテ。云事アル時ニハカミヲアゲテ女官ヲオホクシテ參テ石灰ノ壇ニゾ候ケル。御門ソノ御心アリケレドモ。トゲ給ハデヤミニケリ。

小野宮右ノオトバノ思人ニスミ殿トイフ人アリケリ。キハメタル賢女也。彼家ニメデタキタ

マノオビアリケリ。オトバウセテ後。宇治殿カノオビミムトオホセラレケレバ。アヘテヲシマズ。ツカヒニツケテタテマツレリ。カハリヲタバムトオホセラレケレバ。サラニ給ベカラズト申ケリ。オビノ事ヲバトカク申サズ。宇治殿思ワヅラヒテカヘサレニケリ。カシコキ女トゾノ給ケル。

公任齊信中納言左右衛門督ニテオホヤケニツカウマツルニ。齊信神社ノ行幸ノ行事ヲ承テ。其賞ニテ加階シテ。公任ヲ超テケリ。公任ソノウレヘヲヤスメガタクシテ。中納言ノ辭表ヲタテマツリツ。御門經通朝臣ヲ勅使トシテ表ヲカヘシテノ給ハク。思トコロアリテタテマツル表也。一階ヲユルシ給フ。モトノゴトクツカマツルベシトアリケリ。時ノ人云ケル。イマダ昔モアラザル事也。コエラル、耻ヲ雪ノミニラズ。カヘリテ光ヲナムマスト云ケリ。採

用人ニスグレタルニヨリテ。君モヲシミ給ナルベシ。サラバコサレデアレカシ。

土御門<sup>副房</sup>右大臣ムマレテ二歳ノトキ。後中書王ノ給ケル。コノチゴ將軍ノ相アリ。カナラズ大將ニナルベシ。入道コノ事ヲキ、給ケリ。ハタシテカナヘリ。

堀川<sup>俊房</sup>左大臣始テ舞人セラレケル時。閑院春宮大夫能信父ノ大納言ニツゲラレケル。コノ人ヤムゴトナキ相アリ。必大臣ニイタルベシトゾ。フルキ人々云トコロ。ミナムナシカラヌ事也。

法成寺ヤケタリケルニ。時ノ人省試題ニ偶獨施明トイダシタル文ノシルシナリト云ケリ。土御門ノ大臣コレヲキ、テ。偶字訓ニドヨム。二火ノ徴ナリトアリケルニ。ウチツバキ豊樂院ヤケニケリ。オアル人ノコトバムナシカラヌ事ナリ。

大宮<sup>俊家</sup>右大臣納言ノ時。大二條殿關白ノ宣旨ヲウケタマハリテクダサレケリ。彼殿ノ給ケル。此宣旨ヲ奉行スル人多ク大臣ニイタレリ。ハカリ知ヌ。汝モ大臣ニイタルベシトノ給ヒケリ。此事肝ニソミニキ。ハタシテ大臣ニナリタリトゾイハレケル。コノオトバノ孫宗忠ノ右大臣殿上人ノ時。夢ニ六條右大臣<sup>副房</sup>汝我ガゴトク大位ニノボルベキ人也トイハレケレバ。不肖ノ身イカデカイタルベキト申サレケレバ。ヒトヘニ天恩ヲ蒙テ。必イタルベシトアリケリ。思ハザルニ大臣ニナレル人也。

宇治左府妻戸ノ内ニ居テ大内記令明トイフハカセソノ前ニ候ケルニ。雜人ノチカク前ヲトヨリケレバ。制シケレドモ猶スギケルヲミテ。コノ令明サメノトナキケレバ。アヤシミテ問ハレケレバ。申ヤウ關白殿イトケナウオハシマシ、時ハ。雖不制雜人御前チカクスグル



事ナカリキ。イマハ制スレドモ猶不用。世ノクダレル事。アハレニテナクナリトゾ申ケルマコトニサル事也。

民部卿大納言ト云人宰相ニテ堀川ノ大臣ニミチニアヒニケリ。宰相小野宮ノ説ナリトテ。車ヲカケハツサズ。タバヲサヘタリケレバ。大臣九條ノ説トテ。前ヲオロサレザリケリ。其後ハカケハツシケリトゾ。

左大弁經頼ト云人アリケリ。五十ニ及テ藏人頭ニナリタリケルヲアナガチニヨロコビケレバ。教惠座主ト云人イサメテ云ク。カクヨロコバルハ、コソ無廉ノ事トオボユレトソシリケレバ。コノ人云ヤウ。コレハヨク案ゼラレヌナリ。天下ノ人イクソバクゾ。公卿廿餘人ハ論ゼズ。其外タマノ貫主ニナレリ。コレオホキナルヨロコビニアラズヤ。教惠ノ云ヤウ。コレハ大乗ノ觀ナリ。トカク申スニヲヨバズトナム。

道方ノ民部卿頭左中辨トテ位階ノト藹ニテアリケルニ。ヲノノゾミ申ケルニ。道方ナルベシトキ、テ。説孝ヲキノ陣ノ床子ノ座ニテ南ニ向テ念ジ入タリケルニ。夢ノゴトク春日山ヲミテタノモシク思テ道方ニ云ヤウ。イカデカ我ヲコエ給ベキトテ涙ヲノゴヒタリケレバ。血ノ涙ニテソデニツキタリケレバ。道方オソレヲナシテ。コノタビハナルマジキヨシヲ申テケリ。此説孝ハ左大辨マデナリタリケルニ。三條院東宮御時。ミクリヤノ事ニヨリテ。ビムナクオボシメサレタリケレバ。昇進カナハジトヤ思ケン。辨ヲステ、播磨ニナリタリケリ。

爲房宰相ニナリテヨロコビ申シケルニ。子孫六人前駐シタリケリ。爲隆顯隆中辨ニテアリ。重隆靱負佐ナリ。ソノ外孫ドモナリ。世ノ人子孫繁昌コトノホカナリトナムイヒケル。

宇治臨時客ニ堀川右大臣尊者ニテコトハテ  
テイデラレケルトキ。兼賴俊家能長基平ミナ  
子孫ナリ。上達部ニテイデラレケレバ。マツヲ  
トリテ前行セラレケリ。コレ又子孫繁昌ト人  
人申シケリ。

鳥羽院大嘗會ノ御禊ニ。狹實内大臣俄ニ服暇ニ成

テ。一大納言俊明節下ヲツトムベキヨシ被<sub>レ</sub>仙

ケルヲ。江帥モリキ<sub>ハ</sub>テ。五代太政大臣ノ子孫

家忠

ナル右大將ヲヲキテ。受領ヘタル民部卿コノ

事ヲツトム。心エズトヒトリゴチケルヲ白川

院キカセ給テゲニトヤオボシメシケン。右大

將ニアラタメ仰ラレケリ。江帥ニマコトニサ

ヤイハレケルカト人間ケレバ。タシカニオボ

エズ。藏人辨顯隆物イヒアシキ人ナリトナム

イラヘケル。

江帥歳十一ニテ。父成衡朝臣ニグシテ十御門

大臣ノ御モトニ參テ。此春ヨリ詩ヲツクルナ

リト申ケルヲ猶ウタガヒテ。雪裏見ニ松貞ト云  
題ヲイダシテツクラセケルニ。抄物切韻モグ  
セズ。筆ヲ染テヤガテカキタテマツリケレバ。  
マコトニ優ノ事也トテ。コノ詩ヲ内ニモチテ  
參テ御覽ゼサセラレケレバ。叡感アリテ學問  
料給ハリケリ。コレヨリ名譽サカリナリケリ。  
江家ノ書籍ハ昔ヨリヤケウセズ。匡房卿二條  
高倉ニクラヲ作りテフミドモヲ置ケルヲ。京  
中火災オソルベシト人申ケレバ。江帥云ケル。  
日本國ウセズハ。コノ文ウスベカラズ。朝家ウ  
スベキ期キタラバ。コノフミウスベシ。火災ヲ  
オソルベカラズトゾ。仁平ノコロカノフミ皆  
ヤケニケリ。オソラクハ其後朝家ナキガゴト  
シ。

殿上ノ逍遙ハ代ノ始ゴトニ必アル事也。鳥羽  
院ヨリ後タエニケリ。後冷泉院御時經成ノ中  
納言藏人頭ニテ。アリケルニ。殿上人ヲグシテ

六條齋院大膳職ニオハシマシケルニ。マヅ參テ。ソレヨリ大井ニムカヒケルニ。堀川右大臣御子左ノ民部卿ヨリハジメテ。人々大宮近衛

ノ御門ニ車タテ、ミラレケルニ。經成ウルサシトテ中御門ヨリ出テ。南ザマニユキケレバ。人々車ヲハセテサハギケリ。經成ナヲ無愛ノモノナリトゾイヒアハレケル。コノ經成ヲバアラモノトテ。頭ノ時モアラ頭ト云ヒ。別當時モ荒別當トゾ云ケル。コノタビノ逍遙ノ和哥ノ序ヲ式部大輔國成朝臣書タルニ。命黃頭而棹水郷トカキタリケル。コレモ經成ヲイフナルベシ。經信朝臣哥ニアラシノヤマトヨメルモコノコハロトゾ人申ケル。此經成スクヨカナル人ニテ。公事奉行ユルサバリケリ。此人別當ノ時。上東門院東北院シクリテ供養シ給ケルニ。公家大赦オコナヒ給ケリ。別當コノヨシヲ聞テ。人ヲツカハシテ。獄ニアリケル海賊

三人ガ手足ヲキリテケリ。時ノ人赦オコナハレズハ三人シナザラマシ。大赦カヘリテ死罪ナリトゾナゲキケル。

此經成ハ宰相ニナリテ後ノ年ノ冬別當ニナリニケリ。中納言ニナリテ別當ヲ辭シテ。次年ウセニケリ。サレバ公卿ノアヒダ十五年別當ニテアリケル也。此人ノ祖父重光大納言モ別當ニテ十八年アリケリ。此經成別當ノ時三井寺ノ強盜ノ首濱人丸ト云童アリケリ。死罪ニオコナフ。惟尊法橋罪業ノヨシイサメケレバ。別當罪業ナルマジキヨシタビ、カヘシ云ケレバ。惟尊舌ヲマキテカヘリニケリ。イトコハキ人ナルベシ。

コノ人納言ヲノゾミケル時。八幡ニマウデテ祈ケリ。獄ヲオサムルアヒダ死罪ニ行物オボユルトコロ三十人。コレ君ノタメナリ。ソノ事道理ヲ背バコノタビノ所望カナフベカラズ。

モシコトハリニソムカズハカナフベシト申ケルニ。中納言ニ成ニケリ。サレバ神明道理ヲステ給ハヌナルベシ。八幡ノ別當戒信カタリケルナリ。

大入道殿攝政ニオハシケル時。法住寺ノオト

ドヨリハジメテ。オホクノ上達部。一種物ヲグ

シテマイリアツマリ給ケリ。カネテチギリア

リケルナルベシ。閑院ノ大將ハ銀ノ鯉ノ腹ノ

中ニコナマスフエコミ。ヲリビツニ入テイレ

ラレタリ。小一條大將ハ銀ノ鮎ノ桶ニアユ

ヲヲリビツニ入テイレラレタリ。左衛門督重

光ハ酒一瓶子。雉一枝。春宮權大夫公季ハ銀ノ

葉餅修理大夫懷遠俎。攝政殿ノ御マウケアリ。

盃酌管絃アリテ。人々ノ祿。隨身ノコシザシマ

デタマヒケリ。右大臣ミヅカラ馬ノツナトリ

テイデ給ヒケリ。

右大將通房臨時祭ノ舞人セラレケルニ。宇治

殿ニテ拍子合アリケルニ。人々マイリアツマリテ。舞ノ師武方ニ纏頭セラレケリ。盃酌カサナリテ人皆醉ニケリ。播磨守行任朝臣ヲ殿上人ノ座ニメシテ酒ノマセラレケルニ。オホキナル鉢ニテ十盃ノミタリケリ。事ノ外ノ大飲トゾ人々云ケル。昔ハ一ノ所ノヒルノヲロシヲバ。女房寢殿ノ妻戸グチニテヲタ、ケバ。六位ノ職事マイリテトリイデテ藏人所ノ大盤ニヲキテワケクヒケリ。範永ト云シ人勾當ニテ參テトリテカヘリケルホドニ。ワリワタ殿ニテフミスベリテサカサマニタフレテ。サムザムニウチチラシテケリ。範永後ニ云ケル。出家シテウセナントゾオボエシトカタリケリ。宇治殿平等院ツクリテ庄園ヨセラレケルトキ。所々ノ米ヲスコシヅツナガビツノフタニスナゴノヤウニマキナラベテ。ソノ上ニチヒサキフダヲツクリテタテ、。ソノ所ノヨネト



カキテ。モチテマイリテ御覽ゼサセケルニ。河内國玉櫛ノ庄ノ米。一ニヨカリケリ。

基房

松殿御時。内ノ女房宇治ニ參リテアソビケル

ニ。和哥會アリケレバ。人々アマタ參ケルニ。

刑部卿重家朝臣アニヲト。清輔季經ナド一

車ニテ參ケル。道ニテヲノ云ケル。宇治ニ

テハ水干裝束ヲ着アヒタルニ。清輔ヲトナシ

キ人ニテ。アヤクスカミシモヲキタリケルニ。

和哥ノ後連哥アラムズラン。其時季經アヤク

ズヲタテヌキニキル人ナレバトイヒタラン

ニ。清輔ケシキバミテ。ソバヒラミマハシテ。

コノ連哥ハ清輔ハナチテハタレカハツクベキ

トテ。フリベノカミニコレヲナサバヤトツケ

ムズルナリト各約束シカタメテケリ。案ノゴ

トク和哥ノ會ハテ。人々連哥スル時。約束ノ

マ。季經アヤクズヲタテヌキニキル人ナレ

バト云イデタルニ。清輔ソバヒラミケシキバ

ミフルマハントスルホドニ。重家ソバヨリ。ヲ

リベノカミニコレヲナサバヤトツケタルニ。

清輔コハイカニト支度タガヒテ。ナニトナク

ヲビエテヲドリアガリタリ。此事ヲシラヌ人

ハ。ナニトモエ心エズアヤシゲニ思タルニ。ア

ニヲト。三人コノ次第ヲカタリタルニゾ。其

座ノ人々ハラヲキリテワラヒアヒタリケル。

一座ノ比興ナリ。此重家ノ朝臣モノオカシク

云テ。カヤウノ座ニテイミジカリシ人也。今ノ

世ニハサル人サラニナシ。其時白拍子ノ會ア

リケリ。若千歳ニゾアリケル。

基房

六條攝政ニ甲斐權守ナニガシトカヤイフナマ

君達アリキ。御倉ノアヅカリシケル侍ノムコ

ナリ。東三條ノ上官ノ廊ノ北ノツボニテ馬ヲ

ミ給ニ。隨身敦睦ヒキテマイレリ。人々少々北

ノ縁ニキタリ。此權守ガ前ニテ西ニ向テ。コノ

馬タカクアガリテオチタツホドニ。前ノ足二

ヲモテ。コノ權守ガ左右ノ指貫ノウヘヲフマ  
ヘツ。權守アハテサハギテ西マクラニタフレ  
フシテ是ヲアガケドモ。馬フマヘテヤ、ヒサ  
シクノカズ。隨身馬ヨリヲリテヒキノケタル  
ニ。權守エボウシヨコザマニナリテ。オキアガ  
リテ。アサマシキケシキニテタチテマカリニ  
キ。左右ノ指貫ハ馬ノ足ガタニアナアキテゾ  
アリシ。日ノ不祥トハカヤウノ事ニコソ。

宇治殿高陽院ノ哥合ニ哥ヨミ人未定ナリケレ  
バ。兼長經衡ヲメシアハセテコ、ロミアリケ  
ルニ。特ニサダメラレケルニ。兼長父ノ服暇ニ  
ナリテ。經衡ヲ入ラレニケリ。コノ人々ウセテ  
後。爲仲朝臣陸奥守ニテアリケル時。國ヨリ賴  
家ガモトヘ哥ヲヨミテヲクレリケルニ。其カ  
ミノ人ノコリトバマル人。君ト我トナリトイ  
ヘリ。賴家イカリテ云ク。爲仲ソノカミ六人ノ  
中ニイラス。カクイフ事ヤスカラズトゾ云ケ

ル。哥讀六人トハ範永。棟仲。賴實。兼長。經衡。  
賴家。或ハ棟仲。經衡。義清。賴家。重成。賴實ナ  
リ。

堀川右大臣宇治殿ノ御前ニテ和哥ノ事申テ  
ハ。コレハ殿ハエシロシメサジ。賴宗コソシリ  
テ侍レトテ。イタジキヲ扇ニテタ、カレケレ  
バ。宇治殿ワラヒ給ケリ。和哥ノ事ハ。自讃モ  
アシカラヌコトニヤ。

土御門右府哥合セラレケルニ。棟仲ツユツ、  
マルトヨミタリケルヲ。カタキノ方難ジケレ  
バ。棟仲万葉集ノ哥ト云テ。當座ニヨロシキ哥  
ヲヨミテ。證哥ニイダシタリケリ。後ニカノ右  
府感ジ給ケリ。コノ事ヲ江帥イヒケルハ。コ、  
ロバセハアレドモ。ソラ事ハ便ナキ事ナリト  
ゾ。  
大<sup>殿</sup>殿ヤヨヒノツゴモリニ齋院ニ參給テ。次官  
惟實シテ女房ニタマハセケリ。三月ニ閏月ア

リケルニ。

春ハマタノコレルモノヲ櫻花シメノ中ニハ散ニケル哉  
女房ノカヘシアリケリ。

堀川院御時。内ノ女房車アマタ色々ノキヌ出  
シコボシテ。花ミニ花山ヘムカハレケリ。サル  
ベキ上達部殿上人馬車ヲツラネテアヒシタガ  
フ。女官少々馬ニノリテサブラヒケリ。栗栖野  
ノ邊ニテ車アマタ有。花ヲ折テ籠ニサシタリ。  
是ヲ見テ車ザマニハセウタレヌ。コノ人々ノ  
府生行高ガアルヲツカハシテ。タレゾトトハ  
レケレバ。行高ハセツキテトヘバ。車ヨリ扇ノ  
ツマヲヲリテ。哥ヲカキテタビタリケレバ。コ  
レヲ取テカヘリマイレリ。コノ車ナル肥後ノ  
君。返哥セラレケリ。花山ニ行ツキテ。人々マ  
ヅマリヲアゲテ。ミギリノモトニタハミシキ  
テ管絃アリケリ。藏人廣房題ヲイダシ。序ヲカ  
ク。杯酌タビ／＼アリテ。俊賴朝臣連哥。

ケフヲマチケル山サリラカナ

師時朝臣ツケテ云ク。

ムレテクル大宮人ヤカサストテ

内ヘカヘリマイリテ。哥ヲカウジケリ。サテモ  
ミチナリツル車ヲタヅネキケバ。中宮女房ナ  
リケリ。イミジキコトニゾ世ノ人イヒケル。  
式部少輔成佐ト云博士在生ノ時。事善ハ無益  
ノ事ナリ。後世ノタメニ理觀ヲコラスベキ也  
トツネニ云ケリ。死テ後。菅登宣トイヒシ者ノ  
夢ニ。カタチイミジクヲトロヘテ。クズノハカ  
マニアヲバミタル衣ヲキテアリケレバ。後世  
ハイカニトトヒケレバ。三途ヲマヌカレズト  
イヒケレバ。平生ノ時タテラレシ義ハイカニ  
ト問ケレバ。焰王ノ疑問ヲエテ。其義ヲ述ニア  
タハズトナム云ケル。生ヲヘダテツレバ。才學  
ノモノモ思ホドノ事イヒヒラキガタキニコ  
ソ。アハレナルコト也。

堀川院ノ御時。五位藏人ニテ兵部大輔通輔ト云人アリケリ。ワカテウセニケリ。ソノ人ノ子公明ガ夢ニ詩ヲツクリテ。

初受下地下濁浪漸重上界三鉢衣

父母千日ノ講ヲ行テ。後世ヲトブラヒケレバ。ソノシルシニテ天上ニムマレケルニヤ。

堀川左大臣ハ一上ニテ三十餘年。八十二アマルマデ出家ノ心モナカリケル人ノ八十七ノトシノ春。人ノイサメニハアラデ俄ニ出家シテ。

山ニ登テヒキツクロヒテ受戒シテ。其年ノ冬。ワヅカニ一兩日ナヤミテウセニケリ。其時花嚴經ノ外題ヲカキ。不輕品刹利居士懺悔如意輪經壽命經ノ終不墮三惡道ノ文ヲヨマレケレバ。カタハラナル人間ケレバ。年來ノ持經ニテ思イデトゾイハレケル。サテ手アラヒテ五色ノ絲ヒキテ。念佛三十反バカリ申テイキタエニケリ。此時紫雲家ノ上ニ覆ヘリケリ。西ザ

マニタナビキケリ。葬送ノ夜イヒシラズカウバシキ香ミチタリケリ。決定往生ノ人也。世ノツネニコトナル道心ナケレドモ。宿善アル人臨終ニハカハルニコソ。メデタクタクウトキ事也。後年ニ彼ノ家ニテ人々如法經カキケルニ。池ノハチスミナアカキ中ニ白蓮花一莖サキタリケリ。不思議ノ事也。此經カキケルホドニ。出家ノ人十餘人アリケリ。功德昔ニハデズトゾ人イヒケル。

一條院御時。權山將成信光少將重家ト云ワカキ有職ノ殿上人アリケリ。サソヒイデテ内裏ヨリ靈山寺ニ行テ。カシララロシテ三井寺ニ向ニケリ。中將ハトシ廿二。少將ハ廿五也。時ノ左右大臣ノ御子也。父ノ大臣ヲノ<sub>ノ</sub>オドロキサハギテ。三井寺ニ馳<sub>致</sub>向ヒ給ケリ。權中將ハ村上ノ御子入道兵部卿親王ノ御子也。一條<sub>清良</sub>左大臣ノ女ノ御ハラナリ。左大臣殿ノ上ノ姉



妹也。コレニヨリテ左大臣トシゴロ子ニシ給

ヘリ。才學フカ、ラネドモ。心バヘ人ニスグレ  
タリ。去ニシ年ノ夏。左大臣殿ヤ、ヒサシクナ  
ヤミ給シ時。此中將朝夕アトマクラニツキソ  
ヒテ。アツカヒタテマツル事ヲコタラズ。月カ  
サナリ日ツモリテ秋ニモナリユクニ。ツカウ  
マツル人。或ハ看病ノ心ウミ。或ハイエガタキ  
事ヲウタガヒテ。ソノコハロザシカハリユク  
ヲミテ。コノ中將世ノハカナク人ノ心サダメ  
ナキ事ヲカヘリミテ思ヤウ。カバカリ官位權  
勢ナラズ事ナキ御身ダニ。病ヲウケツレバス  
コシノヤクナシ。二世ノハカリゴトヲウシナ  
フ。シカシ佛道ニイラムニハト。コレヨリ世ヲ  
イトフ心ヲキザシハジメシナリトゾノ給ケ  
ル。光少將ハ右大臣顯光ノヒトリ子ナリ。村上  
第五ノ内親王ノ御腹也。コノ人モトシゴロ此  
心アリケルヲ。中將トチギリヲナシテ。オナジ

クユキテカシラソラレニケリ。善知識アヘル  
ナルベシ。コレヨリサキニ此中將少將ノトキ  
ドキ内ヨリ豐樂院ニユキテミマハリケリ。人  
ナニノ心トシラズ。後ニコレヲ思ニ。カノ所ヤ  
ブレカタブケルコトアタカモ姑蘇臺ノゴト  
シ。無常ノ觀念ヲマシテ。イヨ／＼發心ヲカタ  
クセムタメナルベシ。出家ノ前ノ日。頭辨行成  
外記ノマツリゴトニツキテシシ（ハ驚歎）ネブラレケル  
夢ニ。人アリテフミヲトラセケレバ。タレガフ  
ミゾトトヘバ。權中將ノフミトイフ。夢心地ニ  
出家ノヨシツゲタルト思テオドロキニケリ。  
サテ中將ニアヒテユメヲカタラレケレバ。中  
將ワラヒテ。マサユメニコソ侍ラメトイヒケ  
リ。月ゴロ出家ノ心フカキヨシヲコノ辨ニモ  
カタラレケル也。

## 續古事談第四 神社 佛寺

行教和尚一夏九句宇佐宮ニ籠テ。晝ハ大乘經ヲ讀。夜ハ眞言ヲ誦シテ法樂シタテマツル。九句ミチナムトスル時ニ。ワレ王城ノ近邊ニ向テ國家ヲマモリタテマツラムト託宣シ給ケレバ。ナミダヲナガシテ十日延テ御體ヲ見タテマツラント祈ニ。三衣箱ヲミルベシト託宣アリケレバ。コレヲミルニ。七條ノ袈裟ノ上ニ字ニモ非ズ繪ニモ非ズ阿彌陀三尊現ジ給ヘリ。行教コノ御スガタヲウツシタテマツル。サテ京ヘノボリテコノヨシヲ奏スルニ。御門ノ御夢ニ男山ノ上ニ紫雲タチノボリテ王城ヲ覆ヘリト御覽ジキ。此事ナルベシトテイソギ御殿ヲ作り。内殿ノ中ニ此御體ヲカケタテマツル。人アヘテ見事ナシ。タゞ御殿ノアヅカリ御座ヲシク時。ウシロムキテシク。此内殿ノ中ハツネニカウバシキ香ニホヘリトゾ。

行教和尚大菩薩ノ御前ニ候テ勅命ヲウケタマハルケシキアリケリ。始ノ別當安宗。大菩薩ノ御草鞋ノ鼻。水精ノ御念珠ノ十弟子ヲミタテマツリケリ。外殿ノ木像ハ敦實親王ツクリタテマツルナリ。始テ御供ヲタテマツリケルニハ。雅信重信束帶ニテ役シ給ケリ。保延ノ火トニナニモミナヤケニケリ。口惜キ事ナリ。江帥申ケルハ。大菩薩ハ釋迦ノ三尊ナリ。或聖人釋迦佛ヲ奉見ト祈テ眼ヲ閉タルホドニ。トブガゴトクニシテ八幡ノ寶前ニマイリケリ。釋迦佛ニオハシマスナルベシ。大權ノ化現ナレバ。釋迦彌陀イヅレニテモアルベキニヤ。兵庫頭知定トイフ陪從アリケリ。産穢ニ入テ廿餘日ヲヘテ。八幡ノ御神樂ニ參勤テカヘリ事ナカリケレバ。又臨時祭ニ參タリケルニ。舞殿ニテ鼻血アエタリケレバ。恐ヲナシテマカリ出テ思樣。コノ産穢ノ外不淨ノ事ナシ。コノ

タヽリニヤトウタガフホドニ。知定ガムスメ  
ノ十歳バカリナルガ。俄ニ氣色カハリテ。知定  
ヲヨビテイフヤウ。我ハ八幡ノ御使也。汝ヲ誠  
メムトテ來也。イカデ産婦トイダキネテ。上菩  
薩ノ寶前ヘハマイルゾ。仍御勘當アル也。早ク  
御神樂ヲシテ勘當ヲユルベシ。汝ガ哥ヒサシ  
クキカズ。我愛スルトコロ也。ハヤクウタフベ  
シ。又蒜鹿サラニクフベカラズ。大菩薩ニクミ  
給物也トイフ。知定申様。産穢ヲバイク日バカ  
リイムベキゾヤ。女子云ク。三十日イムベシ。  
ワレオトナニツクベケレドモ。一ニハウタガ  
ヒアルベシ。一ニハケガラハシ。オサナキモノ  
ハウタガヒナク。ケガラハシカラズ。コノ故ニ  
託宣スルナリトテサメニケリ。知定人々カタ  
(手懸)  
ラヒテ八幡ニ參テ御神樂ノコナヒケリ。

山王ハ傳教大師ノ靈ト申。僻事也。社司成信カ  
タリケルハ。先祖ミツノ濱ノ住人ニテアリケ

ルニ。夕暮ニ旅人來テ船ヲカリテ云ク。此濱ニ  
カヨフ人也。コノ船コレニ在ベシトイフ。ツト  
メテ高キ木ノ上ニ此船アリ。神人ノシワザト  
シリテ。歸命シテ問タテマツル。則現テ神託ヲ  
ノタマハク。此山ノ麓ニスマント思フ。則社ヲ  
ツクリテシヅメ奉ル。此ハマノ住人ノ子孫ナ  
ガク神人ナリトゾ。又傳教大師大和ノ三輪ノ  
明神ヲ勸請シテ山王トストモ申ス。コレモ僻  
事也。大比叡小比叡ミナ大師ヨリ先ニスミ給  
也。住吉ノ明神託宣シテノ給フ。昔新羅國ヲウ  
チシ時。我大將軍也。日吉副將軍也。後ニ將門  
ヲウツ時。日吉ハ大將軍。我ハ副將軍也。コレ  
天台宗繁昌シテ法施ヲウケテ。威德倍増ノ故  
ナリトゾ。

三井寺ノ新羅明神ハヤムゴトナキ神也。宇治  
殿ノ御祈ニ賴豪阿闍梨參リタリケレバ。寶殿  
ノ妻戸ヨリ御直衣ノ袖サシ出タリケリ。

祇園ノ寶殿ノ中ニハ龍穴アリトナムイフ。延久ノ燒亡ノ時。梨本ノ座王ソノフカサヲハカラムトセラレケレバ。五十丈ニヲヨビテ猶ソコナシトゾ。保安四年山法師追捕セラレケルニ。オホク寶殿ノ中ニニゲ入タリケレバ。其中ニミゾアリ。ソレニオチ入タリトゾイヒケル。後冷泉院ノ御時世間サハガシカリケル年。ナラビノヲカノ邊ニ社ヲツクラバシヅマルベシト示現アリテ。兵衛府生時重ヲハジメテ六衛府ノモノドモ社ヲ作リテ御靈會オコナヒケリ。花園ノ社トゾイヒケル。

鳥羽院御時。治部卿雅兼ノ夢ニコノ今宮祇園ニ參テ申給ケル。我居所ヤブレ損ジテスデニ年月ヲヲクルニ。院宣アリテ修理セラル。カギリナキヨロコビナリトミタリケレバ。時重トイフモノ兵衛尉ノ功ニツクリケル。覆勘ヲマタデナサレニケリ。

一條院ノ御時。六月晦日ニ風吹。雷オドロオドロシクナリケルホドニ。母后ノ御方ニ藤典侍トイフ人ニ北野天神ツキタマヒテノタマヒケル。我家ヤブレタリ修理セラルベシ。又攝政上達部ヒキグシテ賀茂ニマウデテ十列音樂タマツラル。ウラヤマシキヨシ託宣アリテ。歌ヲヨミ給ケル。

ウラヤミニ迷ヒシ胸ノカキ陰リフルハ涙ノ様ヲミテシレ此アヒダ殿上ノ殿モリ司一人。鬼問ニテシニイリタリケリ。陣ノ外ニ昇イデイキイデニケリ。ソノノチ攝政人々ヲグシテ北野ニマウデテ作文和哥アリケルトゾ。

式部大輔在良トイフ人。三條壬生ニナンスミケル。コレハ天神昔スミ給ケル所ナリ。其後人スムコトナシ。在良申ウケテキタリケリ。夢ニミルヤウ。汝ハキルトモ子孫ハスムベカラズ。在良老ニ臨テ病ツキテ後此家燒ニケリ。夢ノ



ツゲムナシカラズ。ヲソロシキ事也。

金峯山ノ御在所ニハ九月九日ヨリ後三月三日マデ人マイラズ。コレハタゞ寒氣ニヨリテノミニアラズ。天人クダリテ供養シ給トモイヒ。又邪魔ヒマヲウカバヒテ充滿ストモイフナリ。

下野國二荒山ノ頂ニ湖水アリ。廣サ千町バカリ。キヨクスメル事タグヒナシ。林ヨモニメグルトイヘドモ。木葉一水ニウカマズ。魚モナシ。若人魚ヲ放テバスナハチ浪ニウタレテイヅ。二荒ノ權現山ノ頂ニスミ給フ。麓ノ四方ニ田アリ。其數ヲシラズ。國司檢田ヲイレズ。千町ノ田代アリ。宇都宮ハ權現ノ別宮ナリ。カリ人鹿ノ頭ヲ供祭物ニストゾ。

白山ノ西因上人カタリケルハ。三所權現ハ阿彌陀勢至觀音十一面ノ垂跡也。衆生ノ煩惱邪魔ヲコノ池ニカリコムル故ニ。カリゴメノ池

ト云也。四十八年此山ニ籠テ。大願ヲ發シテ山ノ頂ニ堂ヲ作テ。阿彌陀ノ三尊ヲ居タマツル。此山ニ三人ノ上人アリ。一人ハ眞言ヲ習テ山ノ頂ニスミテ。三昧ノ行法ヲシテ人ニアフ事ナシ。五六十日物ヲクハネドモウヘタル氣色ナシ。山内ノ人コレヲ證果ノ人トイフ。一人ハ人近クスミテ。結縁ノ人來リテイマダ其詞ヲノベスサキニ。カネテ人ノ心ヲシレリ。人コレヲ化人トイフ。一人ハ座ノ前ニ鉢ヲヲキテ。天水ヲマチテウケテノム。旱スル時ハ。咒ヲミテ、加持スレバ。雲起雨降テ此鉢ニイル。其水絶ル事ナシ。年九十二也。起居輕利也。人コレヲ神仙ト云フ。日泰上人トイヒケル聖人。ヨロヅノ靈驗所オガミノコス所ナシ。此山ノ瀧ノ池ノ水昔ヨリクム人ナシ。始テコレヲクミテ人ニノマセケリ。飲人皆病愈ケリ。

廣隆寺ハ上宮太子秦河勝ガモトヘ御ケルミチ

ニ。ハチヲカノホトリニ假屋ツクリテ御儲シ  
タリケル所ヲ太子御覽ジテ。コノ所地形イミ  
ジキ所也。三百歳ノ後。ミヤコヲ此所ニ移シテ  
佛法ヲ崇テ。帝王ノ苗胤アヒツギテ絶ベカラ  
ズトノ給テ。十箇日トバマリテ。コノ所ヲ楓野  
別宮トイフ。其後寺ニナシテ河勝ニタマフ。寺  
ノ前ニ水田三十町。ウシロノ山野六十町。オナ  
ジク給ヒケリ。コノ寺ノ本佛ハ百濟國ノ彌勒  
也。光ヲ放給フ佛也。藥師佛ハ客佛也。

昔攝津國ニ富原ト云所ニ翁アリケリ。家ノ前  
ナル梅樹夜々光リケリ。アヤシミテ此木ヲ切  
テ一椽手半ノ藥師佛ヲツクリタテマツリテ。  
丹後國石造寺ニウツシタテマツレリトモイ  
フ。一説ニハ山蔭中納言佛ヲツクラムノ願ア  
リテ佛師ヲ尋ケル。夢ニ見様。ユカム路ニ始テ  
ヒタラン人ヲ佛師トシテツクラシムベシト  
云テユメサメヌ。サテイデテユクニ。牧童一人

行逢ヌ。牧童再三固辭ストイヘドモ。ヤムコト  
ヲエズ。コレヲツクラシムルニ。メデタクツク  
リタテマツレリ。コノ童佛ツクルアヒダ。ツネ  
ニツバキヲハキテ物ヲケガシケリ。ムヅカシ  
ク思ヘドモ。佛ヲツクラムガタメニシノビス  
グスホドニ。造ハテ、カヘラントスル曉ガタ  
ニ門ヲタ、キテコノ童ヲヨブモノアリ。長谷  
寺ノ觀音ハコレニカトイフ。コノ童イフヤウ。  
クチニクキ文殊カナトテウセニケリ。コレ長  
谷寺觀音ノ化現ナルベシ。サレバコノ藥師佛  
ハ長谷寺ノ觀音造リ給ヘルトゾ。

此寺ノ阿彌陀堂ノ中尊ハ稽文會ガツクレル  
也。惠心僧都ノ夢ニ極樂ノ阿彌陀佛ヲオガマ  
ントオモハバコノ佛ヲミタテマツレトミ給ケ  
リ。佛ソノカミ光リヲ放給ケリ。寺僧火事カト  
テオドロキサハギケリ。

道昌僧都ト云人ハ。俗姓秦氏。讃岐國香河郡ノ

人也。年十四ニテ出家シテ。元興寺ノ明證法師ニシタガヒテ三論宗ヲナラヒ。カネテ諸宗ニワタル。弘仁八年ニ得度。年廿也。天長五年弘法大師ニ從テ眞言ノ大法ヲウク。内裏ノ佛名會ニメサレケリ。御門問給ハク。帝王ノ殺生ノ罪ト凡夫ノ罪トイヅレカオモキ。道昌申テ云ク。帝王ハオモク凡夫ハ輕シ。此事ヲ聞者。法師年ワカクテイフ事アサシト思ヘリ。御門良久アリテノ給ハク。帝王ノ罪オモシトイフ。其說アリヤ。道昌申テ云ク。ヒソカニ此事ヲ思ニ。帝王ノ供御ハオホクノ魚鳥ヲ殺シテ。ワヅカニ一膳ニアツトイフトモ。ソノ罪オモシ。凡夫ハ山海ノ禁制アレバ。カリスナドリタヤスカラズ。ワヅカニコレヲトリテ口腹ヲ養フ。ソノ業カロキ也。御門此事ヲ信ジテ殺生ヲヤメラレケリ。

此僧都水尾帝ノ御持僧ニテ。廣隆寺ノ別當

リケル時。御藥アリテ僧都ヲメシテ祈念セシムル時。僧都申様。大炊寺ニ靈驗ノ藥師佛イマヌ。彼佛ヲ廣隆寺ニ安置シテコヽロミニ奉祈ラント。スナハチ宣旨ヲクダシテ此佛ヲ廣隆寺ニ奉移。七日祈奉ルニ。玉躰平安也。其後大炊寺ノ聖人。道昌僧都ガモトニユキテ。御惱平愈シ給ヌ。カノ佛モトノ如クカヘシワタサルベシトイフ。道昌アヘテキカズ。聖人ナゲキテ寢食ヲワスレテ。鬱ノアマリニ醍醐ノ聖寶僧正ノモトニユキテイフヤウ。大炊寺ノ藥師佛。道昌ヌスミテカヘサズ。取カヘサントスルニ力ヲヨバズ。イカバスベキ。聖寶イフヤウ。イトヤスキ事也。スミヤカニトリカヘシテン。タダシ廣隆寺四壁マタクシテ。タヤスクヤブリガタシ。ソノ日ソノ時ニ。人夫千人ヲ大極殿ノ邊ニマウケテ我ヲマツベシ。ワガチカラニテナドカトリカヘサバラムトイフ。ヒジリ悅テ。

飯テ人夫千人ヲヤトヒアツメテ。ソノ日ニナリテ大極殿ノ邊ニ儲テ僧正ヲマツニ。タマタマ出キテイフヤウ。其藥師佛ハワヅカニ一操手半也。一人シテモトリテム。千人ノ夫ハ東大寺ノ大佛ヲヌスムベキナリトアザケリケレバ聖人不足言トテヤミニケリ。

或說云、早シケル時。道昌大井川ヲセキテ祈ケルニ。時ノ人イフヤウ。石造寺ノ藥師佛靈驗ノ佛也。ソレニ祈ベシ。道昌コレヲ聞テ暫奉迎テ祈ニ。ソラクモリテ雨コハロヨクフリニケリ。サテヤガテ廣隆寺ニ安置シタマツリテ。新佛ヲ作テ。彼寺ヘハワタシタマツリニケリ。サテ廣隆寺ハ繁昌シ。石造寺ハアレニケリ。

此寺別當時圓法橋四十餘年寺務シテウセニケリ。寺僧例ニマカセテ東寺ノ人ナランズルト思ホドニ。ハカラザルニ園城ノ増譽僧正ニナ

サレヌ。寺僧オドロキサハギテ。本尊ヲ取テ山林ニ可入之由議定シテ。御帳ノ中ナル厨子アケテ。本尊ヲトリイダサムトスルニ鑑ナシ。ニノ鑑失テヒサシクナリニケリ。サリトテアルベキナラズトテ。厨子ヲウチャブリテ本尊ヲイダサントスルニ。アヘテウゴキタマハズ。トカクスルホドニ右ノ御手オレニケリ。寺僧オドロキテモトムルニサラニナシ。アヤシミヲソリテ。モトノゴトク御帳ノ中ニヲキテ去ヌ。コノノチ阿彌陀堂ノ柱ニ押文アリ。門跡藥師佛ヲトリタマツルトカキタリ。所司大衆コレヲ見テ。オドロキテ御厨子ヲミルニ。御厨子破テ靈像ノ右ノ御手ナシ。衆人ナゲキテ御手ヲモトムルニ。ウル事ナシ。人ウタカフラク。靈像ウゴキ給ハヌニヨリテ。御手ヲオリトリタルカト云テ。トビラヲヲシアハセテ。布シテカラゲユヒテ封ヲツケテ。コノヨシヲ別當ニ



フル、ニ。タバヲソル、事ノミアリテサセル  
沙汰ナシ。僧正ウセテ後。仁和寺ノ寛助僧正別  
當ニナリテ。コノ事ヲキ、テオドロキナゲキ  
テ。佛ノ御手ニヲキテハ。タチマチニ左右シガ  
タシ。先厨子ヲ修理スベシトテ。淨行ノ寺僧三  
人ニ淨衣ヲタビテ帳ノ中ニイレテ。カラゲタ  
ル布ヲトキテミルニ。厨子アヘテ破損ナシ。奇  
異ノ思ヲナシテ鑑ヲタヅヌルニ。寺僧申テ云。  
件ノ鑑往ニウセテヒサシクナリニケリ。タヤ  
スク閑事ナキ故ナリ。僧正カサネテ仰テ云ク。  
累代ノ物ムナシクウスベカラズ。ヨクモトム  
ベシ。コ、ニ寺僧一人フルキ鑑ヲサ、ゲテ出  
來レバ。試ニ此鑑ニテ厨子ヲアクルニ。忽然ト  
シテアキヌ。御帳ノ中クラクシテミエズ。脂燭  
ヲサシテミルニ。本尊ノ右ノ御手ナシ。僧正悲  
歎シテ大座ノモトヲミルニ。マロカナル物ア  
リ。トリテミルニスデニ此御手也。コレヲ取テ

ナクナクヨロコビテ。ツギタテマツリス。アヘ  
テタガフ事ナシ。アタカモ藥王ノ臂ノ還復ス  
ルガゴトシ。僧正ヨロコビノアマリニ所着ノ  
綿衣三領ヲヌギテ寺僧三人ニカヅケテ云ク。  
前世ノ宿縁ニヨリテ此寺ノ吏ニナリタリ。始  
ハ辭退ノ思アリシカドモ。今ハ既ニ隨喜悅與。  
此寺タビ、炎上アリトイヘドモ。本佛ヤケ  
給ハズ。

西明房座主源心僧都ノ給ケルハ。中堂ノ藥師  
佛ウヅマサノ藥師佛オナジ契也。病者中堂ニ  
マウデテイノリケレバ。夢ニミルヤウ此病ハ  
右京ノ醫師ニツクロハスベシ。我ハチカラヲ  
ヨバズ。彼此分別ナケレドモ。タ、緣ノ有無ニ  
ヨルベキ也トミテ。此病人思廻シテ廣隆寺ニ  
マウデテ祈ケレバ則愈ニケリ。廣隆寺ノ南大  
門ノ西力士ハ相撲人宗平ニ似タルトナム中傳  
タル。

日野藥師佛ハ傳敎大師ノツクリ給ヘルト申。マコトニヤ。有國宰相ガ家ニツタハリタル佛也。正家朝臣ガ時ニ家ノ長ツタフベシト實綱朝臣申ニヨリテ。後冷泉院ノ御時。實綱給タルナリ。

西京ノ座主ノ申ケル。齋院ノキタニ安國寺ト云所ニ藥師佛オハシマス。傳敎大師中堂ノ藥師佛ツクリテ後ニ一年ヲヘテツクリ給ヘル佛也。一斧一禮ツクリ給ヘルナリ。身金色。衣文ハ綵色也。中堂ノ佛モカクオハスルナリ。藥師佛ハ弘法大師三寸ノ像ヲツクリテ。コレヲオヒテモロコシニワタリ給ヘリ。傳敎大師又藥師佛ヲヌノニカキタテマツリテ。コレヲ持テ唐ニ渡給フ。皆是佛法ノ祖師也。

河原院ハ融左大臣ノ家也。臺閣水石風流ヲツクシテ。ツクリミガキテスミ給ケリ。ウセ給テ後其御子宇多法皇ニタテマツリテ。時々ワタ

リ給ヒケリ。カノ大臣ノ靈トバマリスムキコエアリケレバニヤ。ツネニハスミ給ハズ。大臣ノ拔苦ノ爲ニ誦經セラレタル事アリ。其後佛閣ニナリニケリ。仁康聖人ト云モノ知識ヲススメテ。丈六ノ釋迦佛ヲクリテ。コノ所ニスヘタテマツリケリ。大安寺ノ釋迦佛ハ天人ノツクリタル也。ソレヲウツシテ佛師康尙此佛ヲツクレリ。維敏滿仲ナドイフ武者ヨリ始テ結緣助成セリ。假堂ヲ作テ始テ五時講ヲ行フ。時ノ明匠日ゴトニ請ニオモムク。所謂山ノ座主花山嚴久僧都。横川明豪僧正。東塔靜仲供奉。靜昭法橋。清範律師也。說經論義コトバラ盡テオキロキハム。願文ハ大江匡衡ツクリ。佐理宰相清書セラレタリ。イカニメデタカリケム。思ヒヤルベシ。聽聞ニハ。山ニハ惠心檀那ノ僧都ヨリ始メ。奈良ニハ小嶋眞興僧都。清海上人已下七大寺コゾリテアツマル。内記上

人三川入道ナドサモアル人ノコルハナカリケリ。結縁ノ爲ノミニアラズ。人多夢ノツゲアリケリ。此會ニアハムハハ。三途ヲハナレテ淨刹ニムマルベシトイフ。又靈山ノ釋迦アヅカリ給ナドミタリケリ。第三日。講師靜仲高座ノ上ニテ南無大恩教主釋迦大師トオガミタリケレバ。聽聞集會ノ人同時ニトナヘテ五體ヲ地ニナゲテ禮拜シケリ。ハカラズ今日釋尊フタ、ビイデキ給ヘリトゾ。ヲノノ隨喜瞻仰シケル。時明朝臣來千石造堂ノ料ニ施入シケリ。其後コノ所鴨河水ミナギリ入テ。苑池ホトノ水底ニナリヌベカリケレバ。上人廣幡院移作ケリ。コノ所ハ顯光左大臣ノ家也。昔庶明中納言スミケリ。古老ツタフラク。行基菩薩此地ヲミテ。三災不動ノ所也。尊重スベシトノ給ヒケリ。此所ハ宇多法皇モオハシマシケリ。清貫民部卿モ住ケリトゾ。顯光ノオトゞ施入ノ後。上

人堂ヲツクル時ノ受領多ク助成シケリ。供養ノ日。僧衆ヲ集音樂ヲ調ケリ。昔釋迦佛。竹苑ヨリ舍衛城ニ趣給ニコトナラジ。其後西方院ノ座主院源此所ニテ舍利會ヲ始メ行フ。入道殿ヨリ始テ大臣公卿貴賤ツドヒアツマリケリ。祇陀林トナツケタル事ハ。須達長者祇園精舍ヲツクリテ如來ニ施與ス。今左大臣此地ヲ上人ニタマヘリ。コノ事相似タルニヨリテ。源信僧都名トセルナリ。

六角堂ノ如意輪觀音ハ淡路國イハヤノ海ニ辛櫃ニ入テ鑊子サシテウチヨセラレタリケルヲ聖德太子アケテ御覽ジテ本尊トシ給ケリ。コレハ思禪師六代ノ本尊トゾ。太子守屋大臣トタハカヒ給ケル時。心ノゴトクカチタラバ四天王寺ヲツクラムトチカヒ給ケルニ。思ノゴトク勝給ケレバ。材木トラムトテ山城國愛宕ノ杣ニオハシケル時。コノ本尊ヲシバラクタ

ヲノ木ノウツボニスヘ奉リテ水アミ給テ。モ  
トノゴトクトラントシ給ニ。此佛アヘテハナ  
レ給ハズ。アヤシミテフシ給ヘル夢ニ。此佛ノ  
給フ様、汝ガ本尊トシテステニ七世ヲヘタリ。  
今ニヲイテハコノ所ニトバマリテ。蠢々ノ衆  
生ヲ利益スベシ。コレニヨリテ堂ヲ此所ニツ  
クリテスヘ奉ラントスルニ。東ノ方ヨリトシ  
老タル女出來レバ。太子問テノ玉ハク。此所ニ  
小堂ヲツクラントスルニ材、木アルナンヤ。此  
女申様。コノカタハラニスギノ木一本アリ。ア  
サナアサナ紫雲ヒキオホフ。コレニテ作給ベ  
シ。次日太子ユキテ見給ニ女ノコトバノゴト  
シ。スナハチ此木ヲ切テ六角ノ小堂ヲ作テ此  
佛ヲ安置シ給フ。遷都ノ時。造宮使申テ云ク。  
丈尺ヲ以テ小路ヲ打テサガムルニ。六角ノ小  
堂道ノ中心ニアタレリ。是聖德太子ツクリ給  
ヘル六角ノ小堂也。宣旨ニ云ク。他所ヘワタス

ベシ。ココニ勅使祈請シテ云ク。コノ所ニスマ  
ントオボシメサバ。南北ノ間ニスコシ入給ヘ  
ト申スニ。空俄ニクレフタガリテ。五丈バカリ  
北ヘ引入ニケリ。サテ六角ノ小路ヲトラシツ。  
其後五百餘歲ヲヘテ。天治二年十二月五日京  
中大焼亡ニ此堂ハヤケニケリ。左大弁爲隆ノ  
侍トシゴロツカウマツリケル此本尊ヲ取出タ  
テマツリケリ。其後シキリニ火事アリ。  
巖間寺正法寺トイフ。山城國宇治ノ郡上醍醐  
ノ奥ノ笠取山ノ東ノ峯也。越ノ小大德トイフ  
ヲコナヒ人。十二年ヲコナヒタル所也。日本第  
三ノ靈驗所トゾ。一ハ熊野。二ハ金峯山也。コ  
ノ大德ヲバ秦澄法師トモイフ。又金鎮法師ト  
云。越後國古志郡ノ人也。白山ヲコナヒテ。次  
ニ此所ニキタレリ。一揅手半ノ金銅ノ千手觀  
音ヲ本尊ニテ。身ヲハナタズイタバキマツリ  
ケルヲ。此所ノヒツジサルノ方ニ桂木ノアリ



ケルヲ切テ。自手等身ノ千手觀音ヲ作テ。此金銅ノ佛ヲ籠タテマツリテ置之タル也。コノ人ハ唐ヘワタリテ。カレニテウセニケリ。此寺ノ護法ハ熊野ノ權現。金峯山ノ藏王。白山ノ權現。長谷寺ノ龍藏權現也。龍藏ハ大德カノ寺ニマウデテ歸ケルニ。隨逐シ給ケレハイハヒ奉ルトゾ。清瀧權現ハ地主ニテオハスル也。三井寺ノ叡効律師トイフ人。コノ寺ニ二三年オコナヒテ。無言ニテ法華經ヲ六千部ヨミ講ジキ。夜ゴトニ三千反拜シケリ。サテ堂ノヒツジサルノ桂木ニノボリテ。我不愛身命。但惜无上道ト誦シテ谷ヘ身ヲ投ケレバ。護法袖ヲヒロゲテウケトリテ。ツユチリコトナカリケリトゾ。コノ事一定ヲシラズ。此人ハ後一條院東宮ニオハシケルトキ。ワラハヤミヲワヅラヒ給ケルニ參テオトシタテマツリテ。御衣給リテ律師ニナサレケリ。マカリイデテ後發給タリ

ケレバ。勸賞アマリトシト時ノ人申ケリ。叡効ガ後。此所ヲコナフ人タエニケリ。信増トイフ者キタリヲコナヒテ。ソノ後常住七八タエズ。其中ニ誓源トイフ常住。難行苦行ス。天王寺ノ海ニテ身投テケリ。ク壽元年十月ノコトナリ。

近衛

### 續古事談第五 諸道

待賢門院法金剛院ツクリテ始テ御幸アリケルニ。人々コヽカシコニ興ジケリ。立石ハ德大寺法印セラレタリ。林賢トイフ法師。瀧ノ石タテテ。ソノカタハラニフダニカキテタテタリケル。

衣ニテナツレトツキヌ石ノ上ニ万代ヲヘヨ瀧ノシラ絲人々見テ或ハ興ジ。或ハ無益ナリナド云アヘルホドニ。二條ノ帥長實和セラレタリケル。

シレ物ノヨシナシ事ヲスル法師遂ニ人ヤニサルト社キケ

人々ワラヒノ、シリテヤミニケリ。

前左衛門佐基俊ト云人。俊房老ノ後師賴大納言サソハレケレバ。故堀川左大臣ノモトニムカヒタリケルニ。月前歎老ト云題ニテ人々歌ヨミケルニ。一句ノ序代アルベシトセメラレケレバ。ノガレガタクテカクゾカキタリケル。

仲秋十二日。猶正好之夕也。浮生八十廻。是非暮齡哉。

月前歎老。誠矣斯言。其詞云。

昔ミシ人ハ夢チニ入ハテ、月トワレトニナリニケル哉

典藥頭雅忠ガ夢ニ七八歳バカリナル小童寢殿ニハシリ遊テ云様。先祖康賴ネンゴロニ祈シ心ザシニコタヘテ。文書ヲマモリテ二三代アヒハナレヌニ。コノホド火事アラシズルニツツシムベシトミテ。廿日バカリアリテ家ヤケニケリ。サレドモ文書一卷モヤカズトゾ。昔ハ諸道ニカク守宮神ダチソヒケレバ。シルシモ冥加モアリケルニコソ。

醫師采女正盛親ガモトヘ十七八計ナル女來

テ。マヘノアナナシイカバスベキト云ケレバ。コレヲミテチカラヲヨバズト云ケレバ。ナクナクカヘリニケリ。後ニ秀成ト云醫師コレヲキ、テ。ソノ女ヲヨビテ。針ノカタナニテカハヲサシキリタリケレバ。世ノツネノ人ノヤウニナリニケリ。希有ノ事ナリ。

采女正俊通ト云醫師アリケリ。七十餘ニテヌノノナヲシニムラサキノサシヌキヲキテ人ニ會ケリ。

モガサト云病ハ新羅國ヨリオコリタリ。筑紫ノ人ウヲカヒケル船。ハナレテ彼國ニツキテ。ソノ人ウツリヤミテキタレリケルトゾ。天<sub>聖武</sub>平九年官符ニ。コノ病痢ニナラン時ニラキヲ煮テ多ククフベシトアリ。後ノ人カクシテシルシアリ。ソレヲ雅忠。熱氣ノホドクヒソメズハ。熱氣サメテ後ナヲイムベシトイヒケリ。サレドクヒテオホクシルシアリトゾ。

後朱雀院カサヲヤミ給ケルニ。典藥頭相成ヨ  
ロシク成給ヘリ。水トバムベキヨシ申ケルヲ。  
雅忠イマダワカカリケルガミタテマツリテ。  
コノ御瘡イヅ水トバムベシトモミエズト申ケ  
リ。其後嵯峨ノ瀧殿ノ阿闍梨重源ト云モノ。  
重秀ガ孫ナリ。ソレヲ召テミセ給ケレバ。雅忠  
ガ申ヤウニ申テマカリイヅトテ。故資仲。帥ノ  
五位藏人ナリケルニアヒテ。コノ御瘡イツ愈  
給ベシト云事ミエズ。雅忠心エタル醫師也。明  
日御胸ヤミ給バ大事ナルベシト申ケリ。マコ  
トニ御胸ヤミテウセ給ヒニケリ。カサヤム人  
胸ヤムハ。ヲハリノ事也トナム。

富家殿炙治シ給ケルニ。重康申サク。日神モモ  
ニアリヤキ給ベカラズ。コノカミ忠康申サ  
ク。内モ、外モ、コトナリ。醫書明堂圖ニ見エ  
タリ。外モ、ハバカルベシ。玉篇切韻。マコト  
ニ忠康ガ申ガゴトシ。コレニヨリテ重康ヲメ

サズ。忠康ヤキタテマツル。兄弟中アシクシテ  
ツネニカハル事アリケリ。忠康ハ雅忠ガ實子  
ニハアラズ。上野守良基ガ子也。雅忠オサナク  
ヨリ子ニシテ道ヲツタヘタルナリ。醫道ノ課  
試忠康マデシタリ。其後スルヒトナシ。

典藥頭滋秀ガ申ケルハ。典藥別當ノ八卿ハカ  
ナラズ大臣ニナルナリ。六條左大臣。兼右大臣小野宮右  
大臣コレナリトゾ。自然ノコトニヤ。又ユヘア  
ルニヤオボツカナシタシカニカンガフベシ。  
唐人ノ云ケルハカリニテ藥ハ合テ服スベキ  
也。反魂香ト云物アリ。死人ノタマシキヲカヘ  
ス香也。一銖モタガヒスレバキタルコトナシ。  
カハレバコト藥モヨクハカリヲサムベキナ  
リ。

遍教僧都慶命座主ノ童ナリケルヲエテ母ニイ  
フヤウ。今日大僧都ヲナムエタル。母火ヲトモ  
シテミテ云。大僧正ナリ。ハタシテ大僧正ニイ

タル。母ノ相逼教ニマサレリケリ。

丹波守貞嗣北山ニ詣百寺ノ金鼓ウチケルニ。洞照トイフ相人イフヤウ。君ノ顔色アシシ。ヲソラクハ鬼神ノ爲ニヲカサレタル歟。貞嗣心地タガフコトナシ。ツネノゴトシト云フ。洞照トクカヘルベキヨシヲ云ホドニ。貞嗣俄ニタエ入テ。ヨミガヘリテ家ニカヘリテ。モノ、氣アラハレテ云ク。別ノ事ナシ。ワレラ遊ツル前ヲトフリツレバ。胸ヲフミタルナリトゾ云ケル。天狗ノシワザナリ。サテ三日アリテ死ニケリ。洞照ガ相神ノ如シ。

晴明大舍人ニテ笠ヲキテ勢田橋ヲユクニ。玆光コレヲミテ。一道ノ達者ナラムズル事ヲシリテ。ソノヨシヲイヒケレバ。晴明陰陽師具曠ガモトニユキタルニモチイズ。又保憲ガリユキタルニ。ソノ相ヲミテモテナシケリ。晴明ハ術法ノ物ナリ。才覺ハ優長ナラズトゾ晴明

光榮論ジケル。保憲ガトキ。光榮ヲバ前ニイタスコトナシト晴明申ケレバ。愛弟トニクマンコトナヲヒトシカラズトゾ光榮申ケル。晴明ガ云ク。百家集我ニツタフ。光榮ニハツタヘズ。コレソノ證ナリト云ケレバ。光榮百家集我が許ニアリ。又唇道ツタフトゾ云ヒケル。

大外記賴隆真人ハ近澄ガ子ナリ。廣澄善澄ガヲイ也。諸道ヲ極メタル才人也。明經。紀傳。算。陰陽。曆道等文マデマナビタリケリ。常ニ云ケル。醫道明法イマダクチイレズトゾ云ケル。一條院御時。齊信民部卿ニツキテ。明經准得業生ヲノゾミ申ケルニ。齊信卿本道ニユルスヤイナヤ知ムタメニ。善澄ヲ召テ。明經道ニ大成ヲアラハスベキ物タレカアルトハレケレバ。善澄申ケル。貞清ト申モノコン師說ヲツタヘテフカク經典ニ通達セル物ナレ。末代ノヤムゴトナキ物也ト。齊信本意タガヒテカサ



ネテトハレ。賴隆ト云物ハイカニ。善澄ケシキ  
カハリテ。ワキヲカキテ申ケル。賴隆ハ非常ノ  
物ナリ。タゞ明經一道ノミナラズ。百家九流ヲ  
タグレル者ナリ。コノ時齊信卿直問シテ云ク。  
賴隆モシ將來ニ國器ニアラズハ。濟信不實ノ  
物ヲ吹嘘スルセメラカウブルベシト申サレケ  
リ。ツキニ官旨クダリニケリ。ワカクテ明經ヲ  
ステ、紀傳ニイラムトテ。式部大輔匡衡朝臣  
ノガリ行タリケレバ。匡衡云ケル。汝ハ一道ノ  
長者スベキ相アリ。モシ他道ニイラバカナラ  
ズシモ長者ニイタルベカラス。タゞ本道ニア  
ルベシトラシヘケリ。

友則朝臣近江ノ任ニ賴隆其國ノ目代シケル  
ニ。洞照相シテ云ク。コノ生才學得長國寶ナル  
ベシ。サラニ執鞭ヲコノムベカラズトナム云  
ケル。賴隆云ケルハ。我別ノ學問セズ。廣澄ガ  
子ニシテ。弟善澄ト明經道ノ相論ノ時ツカヒ

シテ。往反キクトコロノ事。一生ノ才學ナリト  
ゾイヒケル。安海供奉ハ廣澄善澄ガヲト、ナ  
リ。

昔ハ諸道ノ博士ナドハ裴束執スル事ナカリケ  
ルニヤ。光榮ト云ケル陰陽師。上東門院ノ御產  
ノ時。アサマシゲナルウヘノキヌ指貫ニヒラ  
クツハキテ。ビムモカ、デ中門ヨリイリテ。ハ  
シガクシノ間ヨリノボリテ。フトコロヨリ白  
虫ヲトリ出シテ。カウランノヒラゲタニアテ  
テ。大ユビシテコロシケリ。ウヘノキヌノシタ  
ニハ。ヌノノアヲトイフ物ヲゾキタリケル。

祇園ノ社燒失ノ御時。久安四ウラヲコナハル、ニ。陰

陽師秦親ウラナヒ申テ云ク。六月壬癸日。内裏  
燒亡アルベシ。六月廿六日壬子。土御門内裡ヤ  
ケニケリ。希有ノ事ト人イヒケリ。本文ニ云  
ク。ウラハ十二シテ七アタルヲ神トス。秦親ガ  
ウラハ七アタル。上古ニハヂズトゾ鳥羽院仰

レケル。

登昭トイフ宿曜師

師長

大殿ヲサナクオハシマシ

ケル時、宿曜ノ勘文ニ。十九ニテ大臣ニナリ給

ベシト勘タリケルニ。ハタシテソノマヽ十九庚辰三

ニテ大臣ニナリ給ニケリ。宇治殿結通感ジ給ケリ。

又シゲヲカノ川人ガ勘文ニ。貞觀以後壬午長久三

トシ聖人ムマルベシトイヘリ。コノトシ大殿

ムマレ給ヘリ。白川院コノヨシヲキコシメシ

テ。伴ノ勘文ニ。平地九丈ノ大水イヅベシトイ

ヘル年ソノ水イデズ。信ジガタキ事ナリトゾ

仰ラレケル。

左舞人光末申ケルハ。圓融寺供養之時。兼助。

茂助。青海波マヒ。好茂。身高。信正。光高。輪臺

マフ。コレハ舞ノ仙也。近ハ正方。光高。青海波

マヒ。正助。時助。則高。光末。輪臺ツカウマツ

ル。コレイミジキ事也。光高ハ兼時ガ弟子ナ

リ。左右ノ舞タエナムズル道也。正方シナムト

スル時。正助胡飲酒ノ事ヲトヒケレバ。孫子ニ

ヲシヘタリ。ソレニトヘトナム云ケル。サテ正

助ハ子ニナラヒケリ。カクホドヨキ物正助ニ

サキダチテ。ワヅカニ廿餘バカリニテウセニ

ケリ。光末又子ナシ。女子ノ子ニテ光貞光則ア

レドモ。光貞ニハ舞ミナヲシヘタレドモ。ソノ

身中風シテ目ミエズ。光則ニハワヅカニ半分

ヲシヘタリ。光末七十ニアマリニタリ。ヲシヘ

ハツベカラズ。左右ノ舞タエナントストゾ申

ケル。其後右舞ハ助忠シニテタエニケリ。忠節

ワヅカニ舞シカドモ。ソレダニツタヘタル子

モナシ。スデニタエハテニタリ。左ノ舞光近マ

デハサスガニ傳タリシカドモ。其後タエニケ

リ。胡飲酒ハ村上ノ御時。忠義公殿上人ノ時。

タビノ御前ニテ此舞ヲ奏シテ多好茂ニツタ

ヘラレケリ。其後カノ好茂ガナガレ。右ノ舞ナ

レドモコレヲマフナリ。白河院ノ御時。臨時樂

アリケルニ。正助ウセテ後、胡飲酒舞ベキモノ  
ナカリケレバ。時助ヲ召テ、父正方。兄正助コ  
ノ舞ヲツタヘテタビ／＼奏シキ。汝サダメテ  
ミナラヒナン。ツカウマツレト仰ラレケレバ。  
イマダナラハヌヨシ申シケルヲ。猶ツカウマ  
ツレ。汝ガ子助忠。正助ニナラヒタルヨシキコ  
シメス。カレニイヒ合テソカウマツレト仰ラ  
レケレバ。シブ／＼ニ仰事ナレバツカウマツ  
ルバカリナリトテ。マカリタチニケリ。コノ詞  
ネイナリトナン人々イヒケル。サテソノタビ  
舞テ賞カウブリニケリ。時助ガ子助忠。タビタ  
ビ舞テ勸賞カウブレリ。助忠正連ニコロサレ  
テ後。ナガクコノ舞タエニケリ。タビシ後冷泉  
院ノ御時殿上人ノ舞御覽ジケルニ。雅實ノオ  
トゞ童ニテ。正助ニ此舞ヲナラヒテマハレケ  
リ。勅祿ヲタマハル時感ニタヘズ。祖父士御門  
ノ臣座ヲタチテ祿ヲトリテマハレケリ。コレ

當時欣感ノミニアラズ。村上ノ御時。實資大臣  
納餘利マハレタル時。清愼公タチテ舞給フ。舊  
貫ナリ。白河院五十ノ御賀ノ時。此大臣ノ子雅  
定童ニテ又コレヲ舞。助忠シニテ後。此舞絶タ  
ル事ヲイタミ思食シテ。白川院此大臣ニ仰ラ  
レテ。助忠ガ子忠方ニヲシヘシム。大臣雅定ヲ  
師トシテ忠方ニヲシヘシム。サテ最勝寺供養  
ノ時ハジメテコノ舞ヲ奏ス。父助忠ニナラハ  
ズトイヘドモ。コレハ正助ガオナジ流ナリ。正  
助ガイキタリケル時。外孫正連童名。ニ胡飲酒  
ヲシフベキヨシ白川院頭辨實政朝臣シテ仰ラ  
レケレバ。正助峯丸ヲグシテ御前ニテヲシヘ  
ニケリ。サレドモ正連ツミカウブリテ。カレガ  
流タエニケリトゾ。

院入道童名大臣童ノ時。公私トコロ／＼ニテ  
タビ／＼胡飲酒マハレケリ。中納言ノ後舞ノ  
裝束シテ白川院ノ御前ニ召テマハセラレケル

ニ。廿餘年ヲヘテ舞ノ手ツユワスレズマハレ  
タリケリ。アリガタキ事ニナム人申ケル。タ  
シ納言已上舞ノ裝束シテマフ事オボツカナ  
シ。左舞人光季ガ申ケルハ。ソカクヨリ正方。  
正助。助忠。胡飲酒タビミルニ皆タガヒタ  
リ。此事オボツカナシナラヒツタヘン事タガ  
フベカラズ。モシ此舞手様々オホカル歟。又本  
體ノ手ヲ舞エヌニヤ。心エズトナム申ケル。

久我大臣<sup>實</sup>カタラレケルハ。童ニテ宇治殿ノ御  
前ニテ此舞ヲ御覽ゼシ時。正助ガヲシヘタル  
秘スル手ヲ舞タリシカバ。後ニ正助ハラダチ  
テ。ソノ手ヲバタヤスクマハズトナン云ヒケ  
ル。此日宇治殿正助ヲハシノモトニ召テ。御衣  
ニカヅケラレケリ。香染白也。忠時ガ嫡子景時  
マドヒウセニキ。忠成又ヌ人ニコロサレニ  
キ。其後此舞ナガクタエニケリ。世ノ末ニナル  
事カヤウノコトニモ思シルベシ。

採桑老ハ正方。時助。助忠ツタヘテ舞ケリ。タ  
ガフ事ナシ。光季ガ申ケルハ。正方ガ舞シハコ  
トニメデタカリキ。コレソノ骨スグレタルナ  
ルベシ。此舞モ助忠シニテ後。ナガクタエニケ  
リ。

白川院天王寺ノ舞人公貞ヲ召テ。此舞ヲ近方  
ニヲシヘシメテ。朝觀行幸ニマハセラレケリ。  
此事時ノ人ウケザリケリ。公貞ガ舞ヲモチイ  
ラレバ。公貞舞ベシ。公貞舞マジクハ。舞ヲ習  
マジトゾカタブキケル。タビシ後冷泉院ノ御  
時。蘇莫者ヲメシテ御覽ジケリ。此舞ハ天王寺  
ノ舞人ノホカニハマハヌ舞ナリ。宇治殿キ、  
給テ。近衛官人雅樂ノモノナラズシテメサル  
ル事イカガアルベカラムト仰ラレケリ。若此  
儀ニテ公貞ニハマハセラレザリケルニヤ。近  
方ガ採桑老多ノ氏ノ流ニハアラズ。天王寺ノ  
流也。



宇治殿ノ卅講ニ公近蘇支摩トイフ舞ヲマヒケルヲ。正方ミテ。此舞ハソラ舞也。父ヨシモチ

申シ、ハ。天曆ノ御時舞御覽ノ時。此舞ハタエタルヨシ奏シケルヲ宣旨ニテアタラシクツクリテマヒタリケレドモ。其後ナラヒツタヘズトナン申ケル。左ノ一ノツラニ則高。光季。右ノ一ノツラニ時助。助忠タチタリ。ミナ父子ナリ。ミル人イミジキ事ニナンイヒケル。

一條院御時。清涼殿ニテ臨時樂キコシメシケルニ。舞人身高。兼時。好茂トリノ、ニイミジカリケレバ。ヲノ、賞カウブリケリ。一度ニ三人マデ勸賞アマリナリト人オモヘリケレドモ。イヅレモヲトラザリケルナルベシ。樂ノ行事ニテ備前前司相方朝臣。御前ノ庭ニ召テ祿タマヒケリ。此日文範ノ民部卿八十二ニアマリテ。セルメシナキニ參テ座ニサブラヒテ。舞ノホドニウソブキケレバ。主上ヨリハジメテ

ミル人ヲトガヒヲトカズト云事ナシ。老クルヒトナム云アヘリケル。

同御時。相撲ノヌキデノ日。アラ、ギマヒトイフ舞御覽ジケリ。コレハ藥師寺風俗トゾ。女スガタニテ。始ハ人ノタケノホドニテ。ヤウ、タカクナリテ。二丈ニヲヨビケリ。從女アリケリ。ソノ後御門ホドナクカクレオハシマシケレバ。ヤガテコノ舞ナシ。

白河院ノ御時。童舞御覽ジケルニ。左ニハ光季ガ孫千手丸ホコヲフリケリ。右ニハ時助ガ弟子鶴法師丸イデテホコヲフラントシケルヲ。三條内大臣能長座ニオハシケルガ。大聲ヲハナチテ。正助ガ孫峯丸ヲキテ。時助ガ弟子ホコフルベカラズトテ。オヒイレラレケレバ。峰丸イデテフリケリ。人々イハレアリト思ヘリケリ。

元正ト云シ樂人ハ横笛ノ上手也、ソレガ童ニ

テ八幡ニアリケルヲ。イミジキ天性ナルニヨ  
リテ。八幡別宮賴清樂人正清ヲヨビテ笛ヲシ  
フベキヨシイヒケレバ。子ニヲシフベシトテ  
キカザリケレバ。奈良ノ樂人惟季ヲヨビテ此  
童ニ笛ヲシヘヨトイヒケレバ。我子孫ナシ。心  
ニ入テナラハバ。秘スベカラズトテヲシヘケ  
リ。皇帝ナラヒケル時。賴清米百五十石トラセ  
ケリ。惟季コノ樂ヲ正近ニナラヒケル時。山階  
寺ノ眞範トラレタリケル例也。正清惟季トモ  
ニ正近ガ弟子ナレドモ。スコシタガヒテ。タガ  
ヒニウケヌトコロアリケリ。正清ガイヒケル  
ハ。カシコキ弟子ヲロカナルコニハラヨブベ  
カラズ。惟季イヒケル。正清ムマレヌサキニヲ  
シヘン子アルベシト。カネテシランヤトゾイ  
ヒケル。正近ハ樂所ノアヅカリ賴義ガ弟子也。  
ヨリヨシハ左右ナキ物也。コレスエホドナク  
ウセニケレバ。皇帝團亂旋此八幡ノ童ツタヘ

タルナリ。コノ元正ガ子ニ元方ト云モノアリ  
キ。父ニヲヨブベカラズ。樂モハカハシクオ  
ボエザリシニヤ。内ノ舞御覽ノ時。皇帝エフカ  
ジト申テ。樂人ドモニソシラレシモノナリ。  
經信大納言イハレケルハ。玄象ト云フ琵琶ハ  
シラベエヌ時アリ。資通大貳コノ琵琶ヲヒキ  
ケル時。シラベエザリケレバ。父濟政。今日琵  
琶ツカウマツルマジキ日也。琵琶ノヒガメル  
ナリトゾ申ケル。經信白川院ノ御遊ニ呂ノ遊  
ノ後律ニシラベナス時。ツイニシラベエズ。古  
人ノイフ事マコトナルカナトイハレケル。  
鳥羽院御時。賭弓ニ陵王ノ廣序ヲ舞ケルニ。正  
清俄ニ故障アリテ笛吹カケタリケル時。侍從  
大納言成通中將ニテ。幔ノ外ニタチテ廣序ヲ  
吹タリケル。時ノ人イミジキ事ニ申ケリ。  
白川院御時。飛香舎ニテ中宮大原野ノ行啓ノ  
試樂アリケルニ。大鼓ウツベキ樂人ナカリケ

レバ。人々ニトハレケルニ。政長。師賢朝臣ツ  
カウマツルベキヨシ申ケレバ。ソノヨシ仰ラ

ル、ニヲノ、辭申ケレドモユルサレズ。ノ  
ガレガタクテ。政長大鼓俄ニ承テ。一拍子ノア

ヤマリモナクツカウマツラレケル。イミジキ

事トナン人々ホメアヘリケル。重代管絃ノ家。

マコトニ人ニコトナル事也。此二人ハ兄弟也。

政長横笛ノ上手也。後冷泉院ノ殿上ノ哥合ノ

日。童ニテ御遊ノ時笛吹タリケリ。堀川院ノ御

師ナリ。朝觀行幸ニ始テ御笛フカセ給ケルニ。

御笛ノ師ニテ。其賞ニ子息有賢殿上ユルサレ

ケリ。師賢ハ和琴ノ上手也。父資通卿申ケル。

御遊ノ時和琴ツカマツルモノスクナシ。師賢

頗ソノ骨アルヨシ申ケレバ。宇治殿メシテコ

トヲタビテ心ミ給ケリ。二位中納言俊家卿拍

子トリテ呂律哥ウタハレケルニ。マコトニソ  
ノ骨イミジクテ。キク人感歎シケリ。ソノコロ

内裏ニ臨時樂アリケルニ。御遊ノ時殿上ユル  
サレテ。和琴ツカウマツリケルトゾ。

神樂ハ近衛舍人ノシワザナリ。ソノ中ニ多ノ  
氏ノモノムカシヨリコトニツタヘウタフ。今

ニタエズ。コトモノハ今ハハカ、シクウタ

フモノナシ。宇治殿ノ東三條ニテ神樂シ給ケ

ルニ。下野公親コノ道ニ長ジタルキコエアリ

ケリ。多時助又家風ヲツタヘタルモノ也。メシ

アハセテキコシメスベシト人々申ケレバ。公

親本拍子。時助末拍子。シナガトリイセンマノ

哥ツカウマツルベキヨシ公親ニ仰セラレケル

ニ。イマダナラハズト申テウタハザリケリ。時

助コレヲウタフ。コノ家風ナラスグレリトテ。

次日時助ヲ召テ祿タビケリ。時助ガ子助忠コ

レヲ傳テコトニ堪詰ナリケレバ。堀川天皇階

下ニ召テウケナラヒ給テ。ツネニコノ神樂ア  
リケリ。藏人盛家ソノ骨ヲエテ人長ヲツカマ

ツリケリ。カ、ルホドニ時助助忠父子カタキノタメニコロサレニケリ。君ヨリ始テ此道ノタエヌル事ヲナゲキ給テ。助忠ガ末ノ子忠方近方イマダイトケナキ童ニテアリケルヲ召イデテオトコニナシテ。忠方ハ哥ノ骨アルニヨリテ。神樂ノ風俗ヲウタハシム。ユダチミヤ人トイフ哥ハ助忠ガホカシル人ナシ。助忠カタジケナク君ニサヅケタテマツレリ。内侍所御神樂ノ時。本拍子家俊朝臣。末拍子近方ツカウマツレリケルニ。主上御簾ノ内ニオハシマシテ拍子ヲトリテ。此哥ヲ近方ニヲシヘ給ケリ。マコトニ希代ノ勝事。イマダ昔ニモアラヌ事也。父ニ習ツタヘンハヨノツネノ事也。イヤシキミナシゴニテ。カ、ル面目ヲホドコス事。コノ道ノタエザル事ヲ世ノ人感涙ヲナガシケリ。

人長コレモ近衛舍人スル事也。昔尾張安居兼

時ムネトコノ事ニタヘタリケリ。尾張時頼トイフ人長ウセテ後。スベキモノヤナカリケム。下野安行兼時ガ孫ナルニヨリテ。宇治殿メシイデテ。ソノ藝ヲコ、ロミ給ニ。家風オトサズ優美ナリケレバ。兼時モ近衛ニテツカウマツレル例ニヨリテエラビモチキラレケリ。タバシ番長ヨリシモツカタ人長スルコトヒサシクタエテ。ソノ装束タシカニ知人ナシ。時ノ儀アリテサダメ仰ラレケリ。此安行モホドナクウセニケレバ。中臣宗武ソノ家ニツタヘズトイヘドモ容體スグレタルニヨリテ。宇治殿メシテ此事ヲツトメシメ給ケリ。天曆御時。仲秀ト云人長アリケリ。ソレガ孫ニ紀本武ト云人長アリケリ。重代ノモノトイヘドモ。庭火ノマヘニス、ミイデテカナデケルコトガラ兼武ニハヲヨバズトゾ時ノ人イヒケル。カヤウノ事モモノガラニヨルコトナリ。中原氏ノ人長兼武



ヨリハジマレルナリ。ソノ子近友兼近モ人長也。兼近殿ノ隨身ニテアリケル時。松尾行幸ニ御供ニ候テ。社頭ニテ人長裝束シテ。還御ノ時ソノ裝束ナガラ。弓ヤナグヒオヒテ御共ニ候

ケリ。扶宣モ人長ナリ。骨ナカリケルニヤ。茨田重方トイフモノハ五位ノ後マデ人長シケ

リ。今ノ世ニハ秦氏兼方ガナガレノミスルコトニナリタリ。ソレダニハカハシクナラヒタルモノキコエズ。兼弘モノフシニテ始テ人長シケルニハ。フタアキノカウシヌノカリバカマニフセグミシテ。金銀ノ造花ノ枝ラ

ケタリケリ。鳥羽院小六條内裏ニオハシマシケルニ。ツカヒ陪從御サジキヲワタシテ御覽ジケル時。仰アリテ人長兼弘馬ニノリテアケツ、御前ヲワタリケリ。近衛舍人ハヨキ人ノチカク召仕モノニテ。事ニフレテナサケアリ。ミメヨク藝能フルマヒ人ニコトナルベキ

モノ也。カレバ昔ノモノドモハ。皆サノミコソアリシニ。今ノヨニハミメノワロク。能ノナキノミナラズ。心ギハアサマシキモノドモナリ。ナガクウセニタルモノナリ。

御堂承香殿ノハザマヲスギ給ケルニ。女房氷

ニ哥ヲカキテ御隨身清武ニトラセタリケルヲ。陣ニツカセ給ケルニモテマイリタリケレバ。文字ミナキエテミエザリケリ。ナグキ給ケルニ。フトコロヨリタ、ウガミニウツシテトリイデタリケリ。カヤウニ心バセアルモノニゾアリケル。

近衛舍人ハ弓矢ヲグストイヘドモ。武勇ニハヲヨバヌモノナリ。宇治殿ノ御隨身ニ四郎先生行武トイフモノアリケリ。馬ヌス人ヲトラヘテ殿ニキテ參タリケレバ。御隨身ハ近習ノモノナリ。カヤウノ事ケチカ、ラヌトノ給テ。ハカハシク沙汰ナカリケレバ。イツトナク

カラメヲキテヤミニケリ。

右大將通房春日使セラレケルニ。カタノ大將ニテ大二條殿イデタチノ所ヘヲハシタリケルニ。宇治殿ヒキイデ物ノ馬二疋タマツラレケル。出羽ノ一栗毛。後ノ糟毛也。コノカスゲハ高名ノアカリ馬ナリ。ノリタマル人ナシ。殿ノ御隨身助友ヲ召テノセラレタリケルニ尻ウゴカズ。クギニテウチツケタランヤウニテオチザリケレバ。ミル人アザミ感ジケリ。殿紅梅ノ御衣ヲカヅケ給ケリ。

京極ノ大殿ノ賀茂詣ニハ。院ノ御隨身近友敦季ヨリ始テ舞人シタルナカニ。下毛野敦時モノハフシニテヒトリ舞人ニイレリケリ。東三條ノ南面ワタリニ右府生敦重ホネナシトイフアカリ馬ニ乗テフタハビオチニケリ。下ノ社ニテ御馬ハスル時。敦重御厩別常盛中ニツゲテ云ク。ホネナシノ御馬ツカウマツルニアタ

ハズ。敦時ガ馬ニノリカヘムト申ケレバ。ユルサレヲ蒙テノリカヘテケリ。御馬アグル時。敦時ホネナシニ乗テアグル事キハマリナシ。ミル人ナヲタヘガタシ。シカルヲ敦<sub>リ</sub>ソバニテ左右ニナルコト。スナ地ニキタルガゴトシ。ミル人オドロキ感ゼズト云事ナシ。次日大將殿ヨリ祿給ケリ。

法性寺殿ノ賀茂詣ニ舞人兼弘ハトリカゲト云コエ馬ニアタリテツカウマツルニアタハズト申ケレバ。敦延ガ馬ニノリカフベキヨシ仰ラレケリ。敦延ナマジキニノリテ南庭ワタルニ。寢殿ノ西ノホドニテハシリイデテ。梅木ノシタヨリ東ノ中門ノ廊ニムキテハシリケレバ。人々タチサハギケルニ。殿御笏ヲナラシ給ケレバ。廊ノキハニテトマリテ。ヤリ水ヨリ南ザマニ行ニケリ。後ノ年番長忠利此馬ニ乗テココカシコニテヒカレテヒザヲツキテ下ノ社ニ

テトマリニケリ。御馬ハスル時。琴持武通コレニ乗テ散々ニアゲテハシラセタリケリ。忠利ガタメ面目ナキ事也。

宇治左大臣ノ賀茂詣ニ六ノフシゲトイフクセモノヲウツシ馬ニヒカレタリケルニ。近衛貞弘トイフモノ乗テ一度モタマラズナガシテ。カチニテワタリニケリ。一條京極ニテワタリシ馬ニ乗テ下ノ社ヘマイリタリケリ。後日ニ召テ纏頭タビケル。人アヤシミケレバ。ヨク乗タリトニハアラズ。心タカクノラムト思ヨル纏頭ナリトナムノ給ヒケル。

京極大殿臨時客ノ日。尊者堀川左大臣ノ隨身敦久。六條右大臣前驅盛正ヲ召テ御衣ヲヌギタタマヒケルヨミテ。通俊民部卿殿ヲオハレザラマシカバ。今日御衣ハタマハラザラマシト云ケレバ。人々ソラヒケリ。

大饗ノ應飼ハ中門ヲトヨリテ幔門ノ本ニテタ

カハスウルナリ。ソレニ東三條ハ中門ヨリ幔門ノモトマデハルカニトヲシ。下毛野公久トイフタカガヒ。西ノ中門ヨリタカモスヘデアユミ入タリケルヲ上達部ノ座ヨリアラハニミエケルニ。錦ノボウシキタルモノ手ヲムナシクシテアユミキケレバ。人々千秋万歳ノイルハ何事ゾトワラヒケリ。ソノノチ中門ノトニテタカヲスヘテイル也。

盛重ハ童名今犬丸ナリ。下臈ナレドモ心ギハウルセクスクヨカナルモノナリ。カレバ次第ノ昇進多クハ別功ノ賞也。盗人射トバメテ兵衛尉ニナリ。仲正ガ郎等カラメテ大夫尉ニトバマル。大夫尉三人コノ時ハジマルナリ。鳥羽院ノ御時。仁寛阿闍梨謀反オコスヨシ落書アリケレバ。千手丸トイフ童ヲカラメトリテトハル、ニ承伏シニケリ。別當宗忠卿。檢非違使盛重重時ヲ召テ仁寛メシトルベキヨシ仰ク

ダスニ。盛重ハスナハチ鞭ヲアゲテ醍醐ニユ  
キムカヒケレバ。僧ドモツゲヲエテ山ヘニゲ  
入ケルヲリニユキアヒテ。ヤガテメシグシテ  
マイリニケリ。重時ハ家ニカヘリテイデタチ  
ケルホドニヲソクナリニケリ。コノタビ盛重  
石見守ニナリ。其子盛通檢非違使ニナリニケ  
リ。

白河院法勝寺ヘ御幸アリケルニ。大雨フリテ  
水オビタバシクイデテ。浮橋ナガレタリケル  
ニ。盛重陣ニツカウマツリタリケルガ。沓ヌ  
ギテクハリタカクアゲテ。御車ノサキニス、  
ミイデテ。アサセヲフマセテ御車ヲワタシケ  
リ。カヤウノヲリニツケタルフルマヒ人ニス  
ダタリケリ。白川院ウセオハシマシケル御イ  
ミニ。丈ハノ阿彌陀ノ三尊ツクリテ。佛具在宮  
マデト、ノヘグシテ供養シケリ。車廿兩。僧ゴ  
トニ長櫃十六合ヒキケル。一日ノミモノニテ

アリケリ。僧ニ車ヒク事コレヨリイデキタル  
ナリ。昔ハ帝王ノ御イミニ御所ニテ私ノ佛供  
養スルコトハ便ナキ事トセザリケリ。後冷  
泉院ノ御イミニ大宮右大臣<sup>・俊家</sup>大納言ノ時セラレ  
タリケル時ノ人カタブキニケリ。世クダリテ  
ハカヤウノ事沙汰ナシ。サテ盛重モスルナル  
ベシ。重時モ御佛事セント申ケレドモ。鳥羽院  
御墓所ニスベキヨシ仰ラレケリ。イカナル盛  
重ユルサレテ御所ニテスルニ。重時ユルサレ  
ザルラムトイキドヲリケリ。イハレアル事也。  
又コノ盛重千僧供ヒクトテ。ヤウノノ物ヲ  
ト、ノヘテ。我身子ドモヨリハジメテ。人夫五  
千人ニモタセテ山ヘノボリケリ。院御サジキ  
ヲシテ御ランジケリ。

保輔ト云者ハ元方ノ民部卿ノ孫致忠朝臣ノ子  
也。故國章ノ三位ノ家ニ強盜人ニケリ。保輔カ  
シワザトキコエテ。カレガ郎等サシ申テ。ザウ



物ドモアラハレニケリ。又忠信朝臣ヲイタル事。兵衛尉維時ヲコロサントスル事。ミナ保輔ガ所爲ノヨシ郎等白狀ニヨリテ。檢非違使所ヲウカバフトイヘドモカラメエズ。顯光中納言ノ家ニコモリタルヨシキコエテ。檢非違使并ニ武藝ノ者瀧口ニイタルマデ。カノ家ヲカコミテサグリモトムルニ。中納言ノ北方車ニノリテイデムトスルニ。ウタガヒテクルマヲサラシメズ。父致忠ニハ看督長下部ヲツケテ。スダレモカケヌ車ニノセテマモリケリ。此家ニモナカリケレバ。三日ノ内ニタテマツルベキヨシ父致忠ガ請文ヲタテマツラシム。此事ニヨリテ諸衛ノ官人弓箭ヲオヒテ内裏ニ候フ。京中シズカナラズ。カラメテタテマツリタルムモノ勸賞ヲコナハルベキヨシ宣旨クダリケリ。父致忠ハ左衛門弓バニクダサレケリ。保輔セメニタヘズ。北山花園寺ニテ出家ノヨシ

キコエケレバ。檢非違使ハセ向テタヅスルニゲニケリ。キリステタル髮。狩衣。指貫ヲトリテカヘリニケリ。其後保輔法師ヒソカニ從者左大將ノ隨身忠延トイフモノノモトヘキタリケルヲハカリゴトヲマハシテカラメテケリ。保輔ニグルニアタハズ。カタナヲヌキテ腹ヲサシキリテ。腸ヲヒキイデタリケリ。檢非違使コノヨシ申テ禁獄セラレニケリ。此賞ニ忠延左馬醫師ニナサレケリ。保輔次ノ日獄中ニテ死ニケリ。獄ヨリトリイデテキテユクトテ葬禮シテ念佛僧グシテユケレバ。公家トガメ仰ラレテ。檢非違使爲狀タテマツリケルトゾ。中比ノ事ニヤ奈良ニ說法ヨクスル僧綱アリケリ。或所ノ法事ノ導師ニユキテ。多ノ布施トリテカヘリケルニ。日クルハホドニアヤシノ尼公門ニキテ。大和國ノ者也。物ミタヘズモノタ

べズ。コヨヒバカリ日クレヌ。ヤドシ給ヘトテトマリヌ。夜フクルホドニ門ヲコトハシクタ、クモノアリ。何事ゾトトヘバ。使廳ノ使也。コレニヤドレル尼ハヌス人ニカ、リタルモノ也。ニガサルベカラズトイフ時ニ。コノ尼ヲシバリテウケトラムズル使ヲ待ホドニ。夜フケテ判官ト云モノ來テ門ヲタ、ケバ。盜人請取ニキタルト思テ門ヲアケテ。房主コノ檢非違使ニアハムトスルニ。コノ判官ト云モノハシリヨリテ。此房主ニトリツキテ。カタナヲヌキテサシアテ、。汝モシハタラカバサシコロシテム。房中ノモノヲトセバ汝ヲコロスベシ。クラヌリゴメアケヨト云テ。ヨロヅノモノ心ノマ、ニトリテ。馬十疋バカリニオフセテ。此房主ヲモ馬ニノセテ。アハダノ山ニキテユキテ云ク。此事モシ沙汰セバ。三日ガ内ニコロスベシ。後ノ世ニハ佛種ヲタ、ムト誓言ヲセ

サセテユルシテケリ。希有ノ事也。

齊信民部卿別當ノ時。法住寺ニテ文行正輔先祖ノ事ヲ云テイサカヒテ。正輔サカヅキヲ文行ニナゲカケタリケレバ。文行タチヲヌカントシケルヲ。河内前司重通ガ父大力ニテヌカセザリケリ。正輔ガ一族三人文行ヲトラヘントシケレバ。文行庭ヘヲドリオリタリケレバ。文行ガ郎等君醉給ニケリトテ。矢ヲハゲテ向ヒケレバ。正輔ガ方人エトラヘズ。文行ヤナグヒオヒテ法住寺ノ内ニテ馬ニノリテイデニケリ。別當マイリテウケラレケレバタビテケリ。日政所ニ候テユリニケリ。文行イヒケル。坂東ノマウザナリセバ。カクハイタサバラマシ。京ハクチヲシキ所ナリト云テ。東國ニクダリケル。其時コノタスケタリシ郎等ヲコロシテケリ。彼日ノ事ヲ東國ノ人ニキカセジトナルベシ。コノ事ヲヨノ人ヨシアシハイマダ

サダメズトゾ。

白川院位ノ御<sup>ミコ</sup>。山三<sup>さん</sup>寺ノ大衆オコリタリケルコロ。八幡行幸アリケルニ。宣旨ニテ下野前司<sup>さきつか</sup>家ツカウマツリケルニ。本官ナキ物ニテ殿ノ前<sup>まへ</sup>驅ヲゾシタリケル。還御ノ時東帶ヲヌギテ衣冠ニテ胡<sup>こ</sup>。オヒテ御輿チカクサブラヒケルニ。ヤナグヒノウシロヲヲバコシノウヘヨリヒキマハシタリケルヲナン。ミル人イミジキトホメケル。

嘉承元年ノ夏。世中サハガシクテ。東西二京ニシヌルモノオホカリケリ。ソノ中ニ□所ノ御筆ユヒ能定病ツキテ七日ト云ニ死ニケリ。ヒツニ入レテ畠ナル衣覆テ。人ハナレタル所ニステツ。四日ヲヘテ道ユク人キ、ケレバ。ヒツノ中ニヲトシケリ。アヤシミテミルニヨミガヘリタリ。水ヲノマセテカレガ家ニツゲタリケレバ。妻子ヨロコビテツレカヘリテ。日比ヘ

テ心地例ザマニナリテカタリケル。死テ後ヲソロシキモノドモ我ヲヲヒタテクヲキ野ヲユクニ。此世ニテミシ人サラニナシ。タゞ風ノヲト水ノ音バカリ耳ニキコユ。ワカキ童子ノ我ヲシリタルトオボシキウシロニソヒテハナレズ。熾魔王宮ニイタリテ二階ノ門ヲイル。冥官ソノカズアリ。壇ノモトニハ。罪人或ハシバラレ或ハクビカセシタル者ドモナミキタリ。ハルカニ見アグレバ。冠ウヘノキヌキタル人三十餘人アグラニツキナミキタリ。ヒラヲハアレドタチハカズ。我ツミヲ判ジテ。尸<sup>しかばね</sup>獄ヘツカハスカナヘニイル、ニ。コノグシタリツル童子熾魔王ニ申サク。コノ人ハ壽限イマダツキズ。ユルサルベキナリ。王コレヲキカズ。童子イカリテ云ク。熾王ナリトモイカデカワガイハン事ヲバタガフベキトテ。火ヲモチテ王宮ヲヤカントス。ケブリミ。チ／＼テ王宮ノウ

チクレフサガリス。コノ時王オドロキテ。冥官  
トトモニカサネテフミヲカンガウルニ。マコ  
トニイノチツキズ。王功德ヲツクリ罪ヲヲソ  
ルベキヨシヲ云テ。此童子ニトラセツ。童子コ  
レヲグシテフルサトニカヘル。大ナル穴ノ口  
ニイタリテ我ヲヲシ入ト思ホドニヨミガヘリ  
タリ。ツラ。此事ヲ思ヘバ。年來不動ヲタノ  
ミタテマツリテ本尊トス。生々加護ノチカヒ  
タガハズカクシ給。タフトクメデタキ事カギ  
リナシトゾイヒケル。

續古事談第六 漢朝

唐朝ニ齊威王ト云ミカドオハシケリ。ソノ時  
淳于髡ト云フ賢人アリ。王ヲイサムルコトバ  
ニイハク。古君好馬。王亦好之。古君好色。王  
亦好之。古君好味。王亦好之。古君好賢。王不

好之トイヒケレバ。威王ノ云ク。イニシヘノ  
君ノコノミモテナシ給シホドノ賢人ナケレバ  
コソコノマネトノ給ケレバ。髡難ジテ云ク。馬  
ヲコノミ給モムカシノ駿逸ニハヲヨハズ。タ  
ダ随分ニ當世ノ逸物ヲエラバル。色ヲコノミ  
味ヲコノム又カクノゴトシ。イカナレバ賢人  
ニイタリテ昔ノアトヲネガヒ。ヨノ事ニヲキ  
テハ當時ノヨロシキヲモチキ給ゾトイヒケレ  
バ。威王口ヲ閉テノブル。ナカリケリ。  
唐ノ玄宗皇帝ハ近世ノ明王也。ソノシルシニ  
ハ。アル門下ノ皇帝ハナドイタクヤセ給タレ  
ゾト申ケレバ。コタヘテ仰ラレケリ。杞崇景  
ガクラキニアリシヨリコノカタ。アマリニイ  
サメラレテ。カタ時モ心ノノビタル事ノナケ  
レバヤセタルナリトノ給ケレバ。ソノ臣又申  
テ云ク。アデキナキ事ニコソ侍ナレ。ナニ事モ  
御身ノ爲ナリ。ナドカヤセ給マデハイサメタ



テマツルト申ケレバ。世ダニモコエナバトノ  
給ケル。マコトニヤンゴトナキコトナリ。カク  
ノゴトク賢王ニテオハシケルガ。楊貴妃ト云  
物イデテノチ。アサマツリゴトモセズ。天下ノ  
事ヲステ給ヒニケルナリ。桃崇宋璟トハ二人  
ナリ。コトナル賢人也。

サレバ大國ノナラヒハ。イカナル君ニモアレ。  
臣ノイサメヲキ、イレテモチキル心アルヲ國  
王ノ器量トハスル也。世ノハジマリノ三皇無  
爲ノ化。ツギノ五帝ハ以德收。ソノ五帝ノサ  
シツギニテ。漢高祖トイフミカドノ世ヲトリ  
給事ハ。コトハク不實不思議ノ人ニテオハ  
シケレド。人ノ申事ヲキ、イレテ。我御心ヲサ  
キトシ給ハザリケルナリ。世ノ末ノ王ノアリ  
サマヲアラハシケルナリ。楚項羽ハ武威モ  
オモフバカリモ高祖ニハマサリタリケレド  
モ。ソノ事ヒトツハ又ヲトリテゾオハシケル。

楊貴妃ハ戸解仙トイフモノニテアリケルナ  
リ。仙女ノ化シテ人トナレリケルナリ。戸解仙  
ト云ハ。イケルホドハ人ニモカハラズシテ。死  
後ニカバネヲトドメザルナリ。或唐書ノ中ニ  
貴妃ヲ改葬シタルコトヲイフニ。肥膚已壞。香  
囊猶在トイヘリ。コノ文ニアヘリ。ハダヘスガ  
タナドハナクテ香囊バカリアリケリ。貴妃ハ  
モト親王ノ妻ナリ。ソレヲ玄宗メシタルナリ。  
長恨哥傳ニ壽邸ニエタリトアルハ。彼王ノ居  
所ヲイヘル也。安祿山ハ又ソノ外ノ密夫ナリ。  
祿山ハユ、シキ玄宗ノ寵臣ナリ。

或人ニ問テ云ク。漢家ニ男色ノ事アリヤ。ナカ  
ニモ國王ノコノ事ヲシ給ヘル事ヤミエタル。  
其人答テ云ク。故入道長方卿シメサレシハ。漢  
成帝トイフミカドノ御。董賢ト云モノサヤ  
ラムトミエタリ。書ニ云。帝臥起シケリト。  
ノチニハアマリニ寵シテ位ヲユヅラムトスレ

ニヲヨブトミエタリ。

張喩ト云フモノアリケリ。コトノホカノスキ  
モノ又好色ニテアリケル。心ニフカク風月ヲ  
モテアソビテ身ツネニ名所ニアソビケリ。此  
人ツタヘテ貴妃ノアリサマヲ聞テ。ハルカニ  
愛念ノ心ヲオコシ。ミズシラヌ世ノ人ヲコヒ  
テ。心ヲクダキミヲクルシム。離宮ノフルキア  
トニノゾミテハ。昔ヲ思テ涙ヲナガシ。馬嵬ノ  
ツヽミノホトリニユキテハ。イニシヘヲカナ  
シミテハラハタヲタツ。カクノ如ク思ヒカナ  
シメドモ。オナジ世ニアル人ナラネバ。イヒシ  
ラスベキカタナシ。イタヅラニナゲキ。イタヅ  
ラニコヒテ年月ヲスゴス程ニ。アルトキ夢ニ  
ミヅラユヒタル童子キタリテイハク。玉妃ノ  
メスナリスミヤカニマイルベシト。夢ノ中ノ  
心。ヨロコビヲナス事カギリナシ。童子ヲサキ  
ニタテハヤウヽユクホドニ。ホドナク玉妃

ノ宮殿ニワタリヌ。玉ノスダレヲ入テニシキ  
ノトバリニノゾミヌ。玉妃ハユカノ上ニアリ。  
張喩ハシモニキタリ。年來ノ志ヲノベテソノ  
詞ツクル事ナシ。玉妃ハソノゴロニアハレミカ  
タラフコト人間ノ女ノゴトシ。ムツビチカヅ  
キテ後。其思イヨヽフカシ。玉妃ノ手ヲトリ  
テユカノ上ニノボラムトスルニ。身オモクテ  
タヤスクノボル事ヲエズ。妃ノ云ク。汝ハ人間  
ノ身也。ケガラハシクイヤシクシテ。我ユカニ  
ノボリガタシ。張喩ハソノゴロニチカヅカンコ  
トヲノゾム。其時玉妃人ヲヨビテ。エモイハヌ  
香湯ヲマウケテ。其身ヲ洗浴セシメテ後。手ヲ  
取テユカノ上ニノボルニ。身カロクシテ思ノ  
ゴトクニノボリヌ。マジハリフス事ヨノツネ  
ノ如シ。ナツカシクムツマジキ事スベテコト  
バモヲヨバズ。ワカレノ思ヒイマダノベツク  
サバルニ。曉ノ風ヤウヤクニオドロカス。人間

ニカヘラスジテコヽニトヽマラム事ヲノゾメ  
ドモ。玉妃サラニユルス事ナシ。ユルサズトイ  
ヘドモ。ソノ思アサカラザルケシキ也。後會ヲ  
チギリテ云ク。今十五日アリテソノ所ニユキ  
テ。フタヽビアヒミルコトヲエント。コノチギ  
リヲキヽテ後夢ハヤクサメヌ。ワカレノ涙枕

ノ上ニカハクコトナシ。ムナシキ床ニオキキ  
テナキカナシメドモ甲斐ナシ。其後十五日ヲ  
スギテ契リシ所ヘユキヌ。彼所ハヒロキ野ナ  
リケリ。野烟渺茫トシテユケドモヽ人ナシ。  
タマヽ牧童ノ一人アヘリケルニ。コヽロミ  
ニコレヲ問ケレバ。彼童ノイハク。ケサイマダ  
クラキヨリ此野ニアリ。アサギリノタエマニ  
エモイヒシラス天女一人マミヘテ我ヲヨビテ  
云ク。コレニモシ人ヲタヅヌルモノアラバ。カ  
ナラズヽコレヲアタヘヨトテ。一通ノ書ヲノコ  
シテ。キリノ内ニキエ雲ノ中ニイリス。カノ人

ノシメセル人カトテ。ソノ書ヲアタヘタリ。コ  
レヲキヽテ。一タビハアハザル事ヲカナシミ。  
一タビハ書ヲノコセル事ヲヨロコブ。心ヲシ  
ヅメマナコヲノゴヒテコレヲヒラキミルニ。  
一紙コトバスクナクシテ。四韻ノ詩ヲカケリ  
ソノ中ノ一句ニ云ク。

天上歡榮雖可樂 人間聚散忽堪悲、

トナムアリケル。人ノ思ノムナシカラザル事。  
古今モヘダツル事ナク。天上人間モヲノヅカ  
ラカヨフ。マコトニアハレナル事也。

玄宗ノ御子肅宗ハミヅカラ威ヲホドコシテ祿  
山ヲタイラゲテ。其後靈武郡ニイタリテ位ニ  
ツキ給ヘルナリ。オホヨソ漢家ノナラヒハ。カ  
タキトナリテ位ヲウバフトイヘドモ。必ソノ  
ユヅリヲ得テ位ニツクコトナリ。狀ニハ必堯  
ノ舜ニユヅリシガ如シトカクコトナリ。肅宗  
皇帝ハ世ノミダレヲナヲシテ玄宗ヲミヤコヘ

ムカヘカヘシタテマツリ給ケルマデハイミジカリケレドモ。其後ハスコシ不孝ニゾオハシケルトゾ。

堯ハ舜ノ器量ヲコハロミムガタメニ。娥皇女英ト云フ二人ノ女ヲモテ妻トセシム。二人トモニアヒソネムコトナクシテカタラヒテアリケルニ。舜ノ心ノタクミナル事ヲ知テ。位ヲユヅリテケリ。二人ノ妻ヲナラベテ。シカモソノ心ヲナダムル。キハメテカタキ事ナルベシ。此二人舜ニオクレテナゲキケル涙ソミタル竹ナリ。コレニモツタハリテ。ヘンチクノツカノフデヲバイレズトナムイヒナラハセルコノ故ナリ。竹斑湘浦トカケルハコノ事ナリ。

白樂天ノ遺文ノ文集ニイラザルアリ。ソノ中ニ任子行ト云フモノアリ。カノ文ニハ狐ノ女。人トナリテ男ニアヒタリケルヲ。カノ男フカク愛念シテ。シバラクモハナレジトシケルホ

ドニ。カリバヘイヅルトテ馬ノ前ニノセテケリ。ヨキ犬ヲグシタリケルガ。コノ女ノキツネナル事ヲ知テ。トビアガリテクヒヲトシテケリ。ソノ事ヲツクリタルフミナリ。行ト云ハ謠哥ナドテイノモノナリ。文筆ノヒトツノスガタナリ。

宜秋門院ノ御名事有定王道ノ帖ニ有之。

唐國ノ習ヒハ女ニハ十六ニテカナラズ嫁娶ノ儀アリ。國王親王ナドニモアハスルナリ。或國王ヲ王女父ノ王ニ申サレケリ。モシ夫ヲマウクベクハ。宋弘トイフモノヲアハセ給ヘト。王コノ事ヲキハテカノ人ヲ召テソノヨシ仰ラレケレバ。カナフマジキヨシヲ申ケリ。王オドロキテソノ故ヲトヒ給ニ。宋弘申テ云ク。貧賤之知音不可忘。糟糠之妻不可下堂トイフ本文ノ侍ルニ。我昔マヅシカリシ時ヨリアヒグシタル妻アリ。カレヲサリテ王女ヲアヒグシタ



テマツル事エナムアルマジキト申ケル。イトアリガタキ事也。コノ國ニハ。惟成弁マヅシカリケル世ニ恩フカカリケル妻ヲサリテ。花山院ノ御時世ニアフオリ。滿仲ト云フ武者ガムコニナリタリケル。宋弘ニハヲトリタル心ナリカシ。宋弘ハユ、シキミノヨシナリ。サテ王女モ思ヲカケ給ケルニヤ。

漢文帝ト申ケルキミハ。アマリ國ヲヤスクシ民ヲアハレミテ。儉約ヲコノミ給トテ。上書ノ袋ヲヌヒアツメテ。帳ニタレテゾオハシマシケル。上書ノ袋ト云ハ。賢臣ノ君ヲイサメタマツルフミヲパウルハシクシロキキヌニヌヒククミテ。ヌヒメニ封ヲカキテタテマツル事ナリ。文ヒトツヌヒク、ミタルフクロナレバ。イカニヒロシトイフトモ。二三寸ニハスギズ。ソレヲヌヒツバケテ帳ニタレ給ケン。イトヤムゴトナキ事也。サレバ保胤ハ漢文帝ヲ異代

ノ聖主トス。儉約ヲコノミテ人民ヲヤスクスルガ故ニトカキタルナリ。オホヨソ漢家ノナラヒハ。臣ノイサメ事ヲキクナリ。賢愚ヲイハズ位ニツキヌルハジメニハ。能直言極諫ノ士ヲタテマツレトイフアマネキ宣旨ヲクダスナリ。コノ宣旨ニヨリテ官職ヲオビタル。サモアル人ニカギラズ。山ノ奥谷ノハザマ身ヲカクシアトラタチタルモノドモマデ。ヲトラジマケジト世ノワロク政ノアシキコトヲカキシルシテ。ハ、カリナク君ゴタテマツルナリ。イカナル暗主トイフトモ。ヒトカヘリコレヲミヌコトハナキナリ。賢王ハコレヲモチキル。サラヌハミルカヒハナケレドモ。スベテミヌコトハナキナラヒナリ。賢臣ノ君ヲイサメタルモノガタリハ。アマリニオホカレバシルシツクスベカラズ。

漢朝ノナラヒ。ソノツカサニ隨テ其事ヲ行テ。

タガヒニミダレガハシキ事ナシ。丙吉トイフ丞相アリケリ。ミチヲユクニ人ヲ殺シタルモノ刀ヲヌキテハシリアヘリ。スコシモコレヲミイレズオドロカズ。オホクノトモ人アレドモ。トラヘカラメヨト云事ナシ。ソノシタガヘルモノモアヤシト思テスギニケリ。ツギニ牛ノ一頭アヘギテタテリケルヲミテ。ハナハダアヤシミサハギテ。ソノヌシヲタヅネテソノ故ヲトヒケルコト。コトモヲロカナラズ。人ソノ故ヲトヒケレバ。丙吉云ク。オホヤケニツカウマツルナラヒ。ワガミチナラヌ事ヲシルハ非禮ナリ。サキニ殺害ノモノスグトイヘドモ。武官世ニアレバ。ワレコレヲシルベカラズ。イマ一牛ノアヘグニアヘリ。寒天ニ牛ノアヘグ。コレ陰陽ノタガヘルナリ。大臣ノ位ニキルモノハ。モトモ陰陽ヲオサムベキ器ナル故也ト云ケリ。

周勃トイフモノアリ。國王コレヲメシテ一年中ノ米穀ノ用途ヲカゾヘヨトノ給ケレバ。エカゾヘズシテ。ソノアセ衣ヲトヨリニケリ。次ニ陳平トイフモノヲメシテ又同様ニトハレケレバ。スコシモサハガズシテ。コレハリガシルベキ事ニアラズ。治粟内史トイフツカサアリ。コノ事ヲシルベキモノナリトイヒケレバ。スナハチカレヲ召テトハルニ。アキラカニカズヲ申テケリ。コノ二人ガ事ヲ宰相入道俊憲。

丙吉周勃

擬表ニカキテ云ク。

應對易忤。汗通周勃之背。陰陽難理。牛喘丙吉之前。

漢土ノ隱者ハミナコトハク一旦ハ君ノメシニシタガヒテイデツカウマツルナリ。巢父許由ナドモミナイデテ又カヘリカクレタルモノナリ。マメヤカニ世ヲノガレムノ心フカキモノハ。メシイデテツカハルレドモケウモナク。物ノ要ニモカナハネバ。君ノ御心ユキテ返シ

モツカハシ。シバシアリテヒキイルヲ又モメ  
サヌナリ。スコシ世ニアル心アルモノハ。ヤガ  
テツカウマツリツキテ。官職ヲモ帶スルナリ。  
アサク思ニハ。ナニシニ一旦モイヅルヤラム  
トオボユレドモ。ヨク思ヘバイハレタル事ナ  
リ。イデズハスベカラクシヌベキニアルナリ。  
伯夷叔齊ガ首陽ノ蕨ヲクハズシテシニタルガ  
ゴトシ。

南史隱逸傳トイフ文ヲミシカバ。隱者ハ賢也。  
朝ニアルモノハ愚也トイフ事ヲイヒテ。又コ  
レヲ問ニ。ナニカハカナラズサルベキ。ヨニア  
トガカシコク。カクレタルガヲロカナル事モ  
アリナムトイヘルヲ。又文コレヲコタフルニ。  
ヨニアラムヨリハ。ミヤスカルベキミチヲシ  
ラザルトコロガ。一モイカニモ隱者ニハヲト  
リタルトゾイヘル。マコトニサル事ナリ。  
徐孝克トイヒケルモノ文學ヲキハメテ才學ヒ

ロカリケリ。飢渴ノ世ニアヒテ母ヲヤシナフ  
ニチカラナシ。最愛ノ妻ノカタチヨキヲゾモ  
チタリケル。ソノ時猛將ナリケル物ノイキホ  
ヒチカライカメシカリケル。コノ妻ヲケサウ  
シケレバ。コハロヨクユヅリアタヘテ。カレガ  
アハレミヲ蒙テ。ウヘノ世ニ母ヲヤシナフコ  
トネンゴロナリ。妻ニモハナレニケレバ。出家  
シテ佛道ヲツトムルホドニ。又内典ヲキハメ  
テケリ。其後猛將コトニアヒテホロビウセヌ。  
モトノ妻ミチニアヒテネンゴロニカタラヒテ  
昔ノゴトクアヒグセント云ケリ。スデニ佛弟  
子トシテ威儀ヲタバシクストイヘドモ。シバ  
ラク物モイハデウチ案ジテ。猶コノ女ヤサリ  
ガタカリケン。タチマチニ僧形ヲアラタメテ  
還俗シテケリ。オホヤケコレヲモチヒ給テト  
カクスルホドニ。家マヅシカリケレバ。出仕ノ  
チカラヲ給テメシツカヒケレバ。カタハ俗

ニカヘリナガラ。心ハイマダ道ヲワスレズ。君ノメグミアレドモ。人ニアタヘテ身ニモチキズ。アヤシキスガタニテ君ノカドニ出入シケレバ。王ヨクノメグミテ。コノホカニタマモノヲマシケルニゾスコシヨロシクテミエタテマツリケル。出家ノ時ノ學問モ。人ニスグレタリケレバ。内典ノ方ニモ召仕ハレテ。俗形ナガラ僧ノ座ニマジリテ講義論議シケルニ。有智ノ禪侶ニモヤ、マサリテゾアリケル。君ノ御前ニテ高座ニノボリテ。仁王般若經ナド講ジケリ。ソモカヘリサマムガタメニ還俗スルホドニオボエケン。妻室ヲワガ母ヤシナハシガ爲ニ人ニアタヘケン孝養ノ心タグヒナキモノナリ。又還俗ノトガラユルシテ内外ノ才智ヲモチキ給ケム君ノ御心モイトヤンゴトナシ。オホヨソ漢土ニハ在俗ノ法門ヲサトル僧ニマジハリテ論說スル事ツネノ事也。日域ニ

ハ聖德太子ソノタグヒニオハシマス。陸法化トイヒケルモノハ。タケキケダ物アリケル山ニ向テ三歸戒ヲサツケタリケレバ。ソノ山ノ猛獸ナガク人ヲ害セズナリニケリ。コレモ在俗ノ法ノシルシアルタグヒ也。又土ノ中ヨリ龜ヲホリイデタリケレバ。此龜ハ過去ノ七佛ノ時ヨリ爰ニ在トナン云ケル。フルキ人ノサマノノ物語ヲヲノヅカラ廢忘ニソナヘンガタメニカキアツメテ侍シ。ワスレテ年ヲヘテ。ハコノソコニクチノコレリ。イホリヲハラフ塵ノ中ヨリモトメイデテ。クラシカネタル雨ノ中ニコレヲシルス。ミヅクキノフルキアトラアラタメテ。ヤマトアシ原ノコトグサニカキナガス。コレ猶要ナキシワザナリ。ハヤクケブリトナスベシ。建保ナ、トセノ卯月ノシモノ三日コレヲシルス。



群書類從卷第四百八十八

雜部四十三

東齋隨筆

音樂類

村上聖主明月の夜。清涼殿の晝の御座にして  
玄上を水牛の角の撥にて彈すましてたゞ一所  
御座有けるに。影のごとくなるもの空より飛  
て參たり。孫庇に居ければ。彼は何物ぞと問し  
め給所に。申云。大唐の琵琶の博士廉承武に  
候。唯今虛を罷通る事候つるに。御琵琶の撥音  
のいみじさに參入する所也。恐は昔貞敏に授  
殘したる曲の候を授奉らむと申す。聖主叡感  
の氣色有て。御琵琶をさしやらしめ給たりけ  
れば撥鳴して。これは廉承武が琵琶に候。貞敏

に二給候内にて候と申けり。終夜御物語有て。  
上玄石上の曲をば授け奉れり。

承和遣唐使掃部頭貞敏をば。妙音院入道相國  
はつねに吾祖師守官令と仰られけり。玄上の  
事を江中納言に人の問れければ。慥なる説を  
ばしらず。延喜のころ玄上の宰相といひたる  
琵琶引のびはやらむとぞ答られける。平等院  
の寶藏に水龍と云笛有。唐土の笛也。唐人此朝  
に渡る時。海中に船沈むとす。舟人等種々の財  
物を海に入しむるに。皆以不沈。仍件笛を入  
るとき卽沈。船無爲に着岸せり。後に木主砂金  
千兩を儲て龍王に相轉せんと思て。金を沈め

むとする時。件笛忽に浮出たり。よて金に替て取返せる笛也。宇治殿此事を聞召て。件の笛を買取給ひて。寶藏に籠られけり。

慈覺大師音聲不足にまします間。尺八をもて引聲の阿彌陀經を吹傳せしめ給ふが。成就如是功德莊嚴と云所を得吹せ給はざり。(音聲)常行堂の辰巳の相扉にて吹あつかはせ給たりけるに。空中に音有て告て云。やの音を加よと。これより如是やと云やの音は加也。

放鷹樂と云樂をば明暹已講只一人習傳たりけり。白河院熊野行幸あさてと云ける夜。山階寺

の三面僧坊に有けるが。今夜は戸なさしそ尋人あらむとぞ云ける。待ける所に案のごとく入來る人有。これをとへば是季也。放鷹樂習にかと云ければ。然也と云。別房の内へ入て件の樂を授けり。

堀河院の御時。南都僧徒を召て大般若の御讀

經を行れけるに。明暹此中に有て。其時主上御笛をあそばしけるが。様々調子を替て吹しめ給けるに。明暹調子ごとに聲をたがへず經を揚ぐれば。主上あやしませ給て。此僧を召ければ。明暹庭上に跪き候す。勅にて寶子に候す。笛や吹とひ給ければ。おろ／＼吹候と申に。さればこそとて。御笛を給て吹せらるゝに。萬歲樂をえもいはず吹たりければ。叡感有てやがて其御笛を給けり。般若丸と名を付て持たりけり。傳々して今八幡別當幸清がもとに有となん。

逢坂の蟬丸は式部卿敦實親王の雜色也。盲目と成て琵琶を引けるが。逢坂の邊に庵を結て住り。博雅の三位。延喜御孫克明親王子。源氏也。是に流泉啄木の調をつたへたり。敦實親王管絃の道に達し給へり。蟬丸がびはは是を聞取て彈ける也。其

よりして盲目の琵琶引ことは始れり。

博雅三位の箏譜の奥書云。古樂萬歲樂自序始  
て六帖に畢る迄。無不落涙。予誓世々生生在  
在所々箏の生い彈萬秋樂を也。身凡調の中に  
は盤涉調。殊勝樂の中には萬秋樂神妙也。博雅  
は此調子并に此樂を好むにて。都率外院に  
生ずるよし。經信卿記に見たり。

博雅三位月のあかりける夜。直衣にて朱雀  
門の前に遊て。終夜笛を吹けるに。同さまに直  
衣着たる另の笛を吹ありければ。誰ならむと  
思ほどに。其笛の音此世にたぐひなく目出く  
聞えければ。あやしくて近くよりて見ければ。  
いまだみぬ人也。我も物をいはず。彼もとふ事  
なし。かくのごとく月の夜ごとに行合て吹事  
夜頃に成にけり。彼人の笛の音ことに目出か  
りければ。心みにかれをとりかへて吹けるに。  
世になきほどの笛也。其後猶々月の頃になれ  
ば。行合て吹けれど。本の笛を返取むともい

ざりければ。やがてながくかへてやみにけり。  
三位うせて後。御門此笛を召て。時笛吹どもに  
ふかせらるれども。其聲を吹あらはす人なか  
りけり。其後淨藏と云目出たき笛吹ありけり。  
召て吹せらるゝに。三位にをとらざりければ。  
御門感じ給て。此笛の主。朱雀門のほどにてえ  
たりけるとこそきけ。淨藏彼所に行て吹けと  
仰られければ。月の夜仰のごとくかしこに行  
て此笛を吹けるに。御門の樓の上に。たかく大  
きなるこゑにて。獨逸物かなとほめてけるを。  
かくと奏しければ。始て鬼の笛と知食てけり。  
葉二と名付て天下第一の笛也。其後傳て御堂  
入道殿御物になりけるを。宇治殿平等院を  
つくらせ給ける時。御經藏に納られけり。此笛  
には葉二あり。一は赤一は青し。朝ごとに露を  
くと云傳たれば。京極殿御覽じける時は。あか  
葉落て露をかざり梟と富家入道殿かたらせ給

けるとぞ。笛には皇帝。團亂施。師子荒。序これを四の秘曲と云。其にをとらず秘するは萬秋樂の五六帖也。笛の寶物には青葉二。大水龍。小水龍。頭燒。雲太丸是なり。名によて各由緒有とかや。宇治殿葉ふたつと云笛をつたへ持れたりときこし召て。内よりある藏人をして彼笛を召けるに。御使はふたつ召あるとばかりを申て。笛といふ事を申ざりければ。老後には二めさむ事術なきよし御返事に奏せられける。一の不思議也と云り。

承香殿女御徽子女王。式部卿重明親王一女。

と申しは齋宮女御

よ 御門ひさしくわたらせ給はざりける秋の夕暮に琴を目出たく引給ひければ。いそぎわたらせ給ひて。御側におはしましけれど。人やあるともおぼしたゝでせめて引給をきこし召ば。秋の日のあやしきほどの夕暮に萩吹風の音を聞ゆると引たりし程こそせちなりしか

と。御集に侍こそいみじう候へ。

東三條院の御賀に此關白殿頼通。陵王。春宮大夫殿頼宗。納蘇利まはせ給へりし。目出たさはいかにぞ。陵王はいとけだかくあてにまはせ給て。御祿給はらせ給て舞捨て。しらぬさまにていらせ給ひぬるうつくしさ。目出たさにならぶ人あらじと見まいらするに。納蘇利のいと賢く。一人かくこそ有けめと見えて舞せ給ふに。御祿を是はいとしたたかに御肩に引掛けて。今一かへり。えもいはず舞せ給へりし興は。亦掛るべかりけるわざ哉とこそ覺侍しか。御師の陵王は。必御祿は捨て給てむぞ。同さまにせさせ給はむ。目なれなるべければ。さま替させ奉りたる也けり。心ばせ勝ればとこそいはれ侍しか。女院かうぶり給せ侍。大夫殿をばいみじくかなしがり申させ給へばこそ龍王の御師はたまはらで。寂からかりけり。其にこ



そ北の政所少しむづからせ給けれ。さて後にこそ給はすめりしか。かたのやうに舞せ給ふとも。あしかるべき御歳の程にもあはしまさず。わろしと人の申へきにも侍ざりしに。こそ二所ながら此世の人とはおぼえさせ給ひで。天童などのをり來るとこそ見えさせ給ひしか。

### 草木類

南殿の櫻は本是梅の木也。桓武天皇遷都のとき植らるゝ所也。仁明天皇承和年中に枯失たるにて。櫻の木を改めうへらる。其後天徳四年九月廿三日。内裏焼亡にて造内裏の時。式部卿重明親王の家の櫻を移し植らる。件木はもと吉野山の櫻なりと云り。橘の樹は本より。遷都以前。此地橘大夫が家の跡にて有となん。實方中將奥州に下向ののち。歌枕をみむために毎日園の中を經廻せしに。或日あこやの松

みに出んと思給ふ所に。國人申けるは。あこやの松と申所は國中に候はずと申ければ。中將などやなかるべきとの玉ひけるととき。老翁一人進出て申云。君は若みちのくのあこやの松に木がくれて出べき月の出やらぬか。とよめる古歌を思召て仰られ候か。その歌は陸奥の國をいまだ出羽の國に割出されぬ時によめる歌也。兩國に分たれて後はかの松は出羽のくにの中にまかり成て候と申けり。亦奥州に菖蒲なきにて。水草は同事とて。五月五日にかつみをふかれけり。そののち國のならひとなりて。かつみをふくといへり。

二條三位平經盛の家に梅花めでたく咲ける時。源三位賴政その前をとをとて。車をとめて。思の外に參りて侍りといひ入たりけるを。いひつぎの侍。源三位殿申と侍り。思はざるほかにこそ參りて侍れときこえければ。心

えぬやうに思ひながら。對面してかへされにけり。從に事。次にこの事かたりいでて。かたみにおかしき事にいはれけり。此侍思のほかに君がきませるといふ古歌をしらざりけるにや。心えぬ物は。ものまねにとがの出くるなり。

一條院御時臨時祭の試樂。實方中將遲參して挿頭の花を賜はず。追て舞に加るとき竹臺のもとに進よりて。くれ竹の枝を折てこれを挿す。優美の由人みな感歎す。これにて試樂のかざしには。ながく吳竹の枝を用と云り。

天曆の御時に清涼殿の御前の梅の木かれたりしかば。求めさせ給ひしに。なにがしのぬしの藏人にていますかりし時承りて。ひと京まかりありきしかども侍らざりしに。西京のそこそこなる家に色こく咲たる木の容體うつくしく侍りしを掘取しかば。家のあるじの木に是

ゆひ付てもてまいれといはせ玉ひしかば。あるやうこそはとてもて参りて候を何ぞと御覽じければ。女の手にて持て侍りける。

勅なれはいさも長し鶯の宿はとよはゝいかゝこたへむ

と有ける。あやしく思召て。何ものの家ぞと尋させ給ひければ。貫之のみ娘の住所也けり。口惜さわざをもしたりける哉とて。あまへおはしましける。

拾遺集云。此歌をまづ奏せしめければ。ほらず成にけり。

鳥見落世子

衆樹の宰相五十迄させる事なくおほやけに捨られたるやうにていますかりけるに。八幡に参たるに。雨いみじう降る。石清水の坂登りわづらひつゝ参給へるに。御前の橘の木すこし枯て侍りけるに立よりて。

千早振神の御前の橘ももる木もともに老にけるかな

とよみ給へば。神もあはれみさせ玉ひて。橘も

榮へ。宰相もおもひがけず頭に成給へるとぞ。内大臣鎌足藤原の姓を給り玉ふ時。紀氏の人のいひけるは。藤の掛ぬる木は枯ぬるもの也。今ぞ紀の氏はうせなんずるとぞの玉ひける。誠にこそしか侍れ。

橘季通と云人則光朝臣のともに陸奥國に下りて。竹隈の松をよみ侍りける。

竹隈の松は二木を都人いかにとは見きとこたへむ  
僧正源覺季通が歌を聞てよみ侍り。

竹隈の松は二木をみきといはよく讀るにはあらぬ成へし

### 鳥獸類。

御堂關白殿法成寺をつくらせ給とき。日ごと  
にわたらせおはします。其頃白犬を愛して飼  
せ玉ひける。御堂へも毎日御供に參りけり。或  
日門を入らせおはしましたけるに。御前にすゝ  
みて走りめぐりて吠ければ。立どまりて御覽  
ずるに。させる事なかりければ。猶歩び入せ玉

ふに。犬御直衣の襦をくひて引とめたてま  
つれば。いかにも様あるべしとて。榻を召て御  
尻を掛けて給て。安陪晴明朝臣を召て子細を  
仰らるゝ時。晴明しばらく眠て思惟したる氣  
色にて申様。君を咒咀したてまつる者。厭物を  
道に埋てこえさせ奉らむとかまへて侍也。今  
御運やむ事なくて。御犬ほえあらはす所也。も  
とより犬は小神通のものなりとて。其所をさ  
して掘らするに。土器を打合せて黄なる紙ひ  
ねりをもて十文字にからげたるを掘出せり。  
晴明申云。この術はさはめたる秘事也。晴明が  
外しりたるものなし。但道滿法師が所爲歟。其  
人を知べしとて。ふところ紙を取出て鳥の形  
をおりて。咒をとなへて打上るところに。白鷺  
となりて南をさして飛行。この鳥の落とまら  
む所を厭術のものの住所と知べしと申けれ  
ば。則下部をもて彼鳥のとび行方をまもりて

行ぜしむる間 六條坊門萬里小路河原院のほとり。ふるきもろ細戸の中に落とまりぬ。すなはちさぐり尋ぬるに 老僧一人有。是をからめ取てかへり参る。子細を問るゝに。道満堀河左府のかたらひを得て術を施すよし白狀す。然ども罪をばあこなはれず。本國播磨へをひ下さる。但ながくかくのごときの術をいたすべからざる由誓狀をめさる。これ運の強く慮りのかしこくましますによりて。かゝる難をのがれさせ給へり。

大納言行成卿いまだ殿上人にておはしける時。實方中將いかなるいさどをりか有けむ。殿上に参りあひていふことなくて。行成の冠を打おとして。小庭になげすてゝけり。行成さはがずして主殿司をめして其冠を取あげさせて着して。何程の過怠によりてこれほどの亂罰にあづかるにや。其故をうけたまはらむと云

ければ。實方一言をのべずして立にげり。折しも主上小薙より御覽して。實方は嗚呼の者なりとて。中將を召て。歌枕見て参れとて陸奥守になしてながしつかはされければ。つゐにかしこにてうせにけり。實方藏人頭にならずして。やみにけるをうらみて。其執心雀と成て殿上の小臺盤にゐて。臺盤をつゝきけるとなむ中傳へたり。

延喜聖主御衣の上に蠅の一居たりけるを御覽じて。仰られて云。世こそ無下に陵遲しにけれ。我運も亦末に成にけり。かくはなかりしものをとなん。

六條の南室町の東一町は。祭主三位輔親が家なりけり。丹後の天橋立をまねびて池の中嶋をはるかにさし出て。小松をながくうへなどしたりけり。春の初に軒ちかき梅の枝に鶯のよりて巳の時ばかりにきて鳴けるをありがた



く出て。これを愛するよりほかの事なかりけ  
。時の歌よみどもにかゝる事こそ侍れとつ  
げめぐらして。明日の辰の時にわたりてきか  
せ給へとふれまはして。伊勢武者のとのぬす  
るがありけるに。かゝる事有ぞ。人々わたりて  
きかむずるに。あなかしこ驚こちなくしてや  
るなといひければ。この男なじかはつかはし  
候はむと云。輔親とく夜の明よかしと待明し  
て。いつしかとくおきて。寢殿の南面とりしつ  
らひていとなみ居たり。辰の終ばかり。時の歌  
よみ共あつまりきたりて。いまや驚なくとぞ  
めきあひたるに。さきくは巳の時ばかりに  
必きなくが。午の時さがりてみえねば。いかな  
らむと思て。此男をよびて。いかに驚のいまだ  
見えぬは。今朝はこざりつるかたとへば。驚の  
やつはさきくよりもとく参りて侍つるが。  
かへり候げに候つるあひだ。召とめて候と

いふ。召とむとはいかにとへば。取て参ら  
むとて立ぬ。心得ぬ事かなと思ほどに。木の枝  
に驚を結付て持來れり。大方あさましとも云  
ばかりなし。こはいかにかくはしつるぞとと  
へば。きのふ仰に。驚やるなと候しかば。いふ  
がひなくにがし候なむは。弓矢とる身に心う  
く覺え候て。じむどうをはげて射おとして侍  
りと申ければ。輔親もゐあつまれる人も淺猿  
と思て。此男が良をみれば。わきをかひとり  
て。いきまへてひざまづきたり。祭主とくたち  
ねといひけり。人々おかしさいふばかりなけ  
れども。男の氣色におそれえわらはず。ひと  
りたちふたりしてみなかへりに見。興さむな  
んどほ。事もをろかなり。

#### 人事類

高野天皇崩道詔に云。大納言白壁王を以て皇  
太子とすべし。然を右大臣吉備朝臣眞備は大

武天皇の御孫眞親王の子從一位文室淨三真人を立て太子とせむとす。左大臣藤原永手、左中弁藤原百川等けなを白壁王を立むとす。異論まぢ／＼也。但淨三真人は固辭し玉ふ。よて吉備公は其弟參議太市真人を立むとす。この人はうけうし給。策命の日に及て、百川はかりごとにて偽て宣命をつくりて、百官の前によましむ。其文に。白壁王は諸王の中年齒長ぜり。亦先帝に功有。故に太子に定る由披露す。吉備公大に驚て舌を卷。いかむとする事なし。光仁天皇の位につき玉ふは。參議百川が功といひ傳たり。

顯基中納言は後一條院の寵臣也。天皇長元九年四月十七日崩御。年廿九。顯基忠臣は二君に仕へずと云て。七々の聖忌の後。天台山楞嚴院にのぼりてつゐに出家す。發心の根元は。天皇晏駕の後故宮に灯を供ずる人なし。子細をと

へば。所司は皆新主の事勤仕すと云。此事を聞てたちまちに發心す。尋常のとき。白樂天の詩古墓何世人。不知姓與名。化爲道傍土。年々春草生と此詩を詠じ侍り。亦あはれ罪無して此所の月を見やとの玉へり。大原山に住して往生せり。法名圓昭。宇治殿大原にのぼり給て庵室をとぶらはせ給て終夜御物語有しに。今生の事をば一言申出されざりけり。宇治殿後世をば必引導し給へと示玉ひて。曉更に歸給ひけるとなん。

嵯峨帝御時。無惡善とかける落書有けり。野相公に見せらるゝに。さがなくてよけむとよめり。惡はさがとよむゆへ也。御門御氣色あしくて。扱は臣が所爲かと仰られければ。か様の御疑侍らむには。智臣朝にすゝみがたくやと申ければ。一伏三仰不來人待書暗雨降戀簡寢とかへせ給て。是をよめとて給はせけり。

月夜には來ぬ人々たる蟬曇り雨もふらなん戀つゝもねんとよめりければ、御氣色直りにけりとなん。落ぶみはよむ所にとがあらと云事はこれより初るとかや。わらべのうつむきさいと云物。一ふして三あふげるを月夜といふ也。

此歌は古今集に讀人不知の歌也。

所頃嶋社氏人にて菊大夫長明といふ者有けり。和歌管絃の道にて人にしられたりけり。社司をのぞみけるが叶ざりければ。世をうらみて出家して大原山に住けり。其後日野外山と云所に在て。方丈記とて假名にて書たる物有。出家の後本のごとく和歌所の寄人にて候べきよしを後鳥羽院より仰られければ。

沈みにし今さらわかの浦浪によせはやよらむ海士の捨舟と申て。つゐにこもりゐてやみにけり。

天曆御宇橘直幹が民部・輔を望申ける申文をばみづから書て。小野道風に清書をさせけり。

主。御覽ぜられけるに。依人而事異。雖以偏頗。代天而授官。誠懸運命など述懐の詞書すぐせるにて。御氣色あしかりけり。人是を恐思ふところに。其後内裏焼亡有て。にはかに中院へ行幸せさせ給たるに。代々傳りたる御倚子。時簡。玄象。鈴鹿以下もてまいりたるを御覽有て。直幹が申文は取出したりやと御尋有ける。時人いみじき事にぞ申ける。

忠義公の御子閑院大將朝光と申はいみじかりし御世の覺にて。まじらしいの程事の外にさらに好給て。平胡六の水精のはず。冠のすゝ額。此殿の思ひより給へるなり。なにがしの有幸につかうまつり給へりしに。此胡録負給へりしかば。朝日の光にかやきあひて。さ。目出事やは有し。今は目なれたれば。珍からず人も思ひて侍り。

伏見之修理のかみ俊綱と聞えしは。宇治關白

殿 御子と申侍れども。さやかならぬ事なれば讃岐守橘の俊遠が子に定りて。橘の姓を名乗しが。其後猶との御子にて藤原の姓にかへり侍りて。直衣などゆるされ侍りけるにや。近江守有清といひし人は後三條院のまことは御子と聞しかども。讃岐守顯綱の子にてやみにき。各母のふるまひゆへに。あなた此方とまざれたる事昔よりありしなり。

御座の覆掛るさほはもととりはなちに侍りけるを。鳥羽院の御位の時にや。殿上人のいさかひ侍りて。其さほをぬきて打むとしたりしより。打付られたりとなむいへる。

## 詩歌類。

後三條院住吉社に御幸有ける時。經信卿序代を奉られけり。其歌に云。

おきつ風吹にけらしな住吉の松の下枝をあらふしら浪

常座の秀歌也けり。帥卿後に俊頼朝臣をよび

ていはれけるは。古今集に入る躬恒が歌に。

すみよしの松を秋風吹からに聲打そふるおきつしらなみ

此歌は任大臣の大饗せん日所詠のおきつ風の歌。中門の中に入て史生の饗につきなんやと。俊頼も此仰如何。彼御歌またくをとるべからず。然ども古今の歌たるによりて限有て。まづ任大臣候はんに。御作は一の大納言にて。尊者として南階よりねりのぼりて。對座にゐなんとこそ存候へと云。帥卿さらばさも有なんや。如何有べきとて感氣有けり。又自歎じて云。躬恒家集に哥有中にも。彼松を秋風のため品。を閑たる胡人の錦の帽子したるが。尺八琵琶をならし。紫檀の脇足をさへて詩を講じ。うそぶき眺望したる姿也。此人にむかひてあらそひつべきは。我興津風の哥こそあれといはれけり。

都良香竹生嶋に詣たりけるに。眺望の心すみ



て。

三千世界眼同盡。

と云句を作て。其末を案得ざりければ。靈天詔宣を下して。

十二因縁心裏空。

と一句をくはへ給へりけり。

同人羅城門の前を過とて。氣霧風梳新柳髪と詠じたりければ。樓の上に聲有て。氷消波洗舊苔鬚と付たりけり。良香膏丞相の御前にて此詠を白歎し申ければ。下の句は鬼の詞也けりと被仰ける。

能宣入道伊豫守實綱にとまひて彼國に下りけるに。夏初日久敷照りて。民の歎あさからざるに。神は和歌にめで給ふ物也。こゝろみによみて三嶋に奉べき由。國司頻にすゝめければ。

天河なほしる水にせきくたせ天くたります神ならは神

とよめるをみ幣に書て。社司人中上たりければ。炎旱の天俄に曇りて。大なる雨降て。枯た

る稻葉押竝て緑に歸にけり。

待賢門院の女房に加賀と云哥よみ有けり。

公實卿女かねてより思しこそ伏柴のこる計なる歎せんとは

と云歌を年頃詠て持たりけるを。同じくはさるべき人にいひむつびて忘たらむによみたらば。集などに入たらむおもても優なるべしと思ひて。如何したりけむ。花園をとと申そめてけり。思の如にや有けん。此歌をまいらせければ。おとといみじく哀におぼしけり。世人伏柴の加賀とぞ云ける。さてかひなく敷千載集に入けり。

六柱兼教女和泉式部男のかれなく成ける頃。貴布根に

詣でたるに。螢の飛をみて。

物思へは澤の螢も我身よりあくかれにり。玉かとそみる

と詠じてければ。御社の中に忍たる聲にてか

く聞えけり。

奥山にたきりて落る瀧津せの玉ちるはかり物なおもひそそのしるし有けりとぞ。

齊名以言等を試られける時。秋未<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>詩境と云事を作らせられけるに。以言の詩。文峯按<sub>レ</sub>轡駒<sub>レ</sub>過景。詞海<sub>レ</sub>艤船<sub>レ</sub>葉落聲とつくりたりける。ひそかに先後中書王に見せ奉る所に。白字大切也と被仰に付て。白駒景紅葉聲と直して秀句に定にけり。其後以言。病をもちりける時。みこ訪給ければ。恩問之旨恐千廻。白字事不忘却とぞ申ける。

政道類

延久善政には先器物を作られけり。資仲卿藏人頭にてこれを奉行せり。升を召よせてとりどり御覽して。簾を折て寸法などさし給けり。米をば穀倉院よりめしよせて。殿上小庭にて。貫首以下藏人出納など檢知して。小舍人玉

だすきして量けり。本米をば帝屋紙に裹て持参りたりければ。御覽有て。勅封を加へられて。御持僧の許などへつかはされける。斛器は方なる櫃を差す。石をくくり下ておもしにして。二またの木に懸て穀倉院にして國々の米をば納られけり。仍何石とは石字を用也。伴器石等于今穀倉院に有といへり。

延喜の御門常にえみておはしきける。此故は。まめだちたる人には物いひにくし。打とけたるけしきにつきてなむ人は物いひよき。されば大小事きかむためなりとぞ仰事有ける。

佛法類。

大織冠の家は山城國宇治郡山村陶原にあり。大臣久身病有時に。百濟の尼法明と云人有。病をいやすべき法を問給ふ時。維摩經を供養し給は。病平愈すべしといふ。これによて大臣の家の中に堂を立て。維摩經を講せしむ。

問疾品を講ぜるとき。大臣の病すなはちいへたり。是より毎年此經を講ぜしむ。淡海公の世に至て。陶原の家の堂を移して奈良の京にたつ。是にて興福寺をば山階寺ともなづけ亦藤原寺とも號せる也。長岡大臣内膳大願を發て。不空羂索觀音像并四天王像を造立す。閑院贈太政大臣冬嗣公弘仁四年に南圓堂を立て觀音像を安置し玉へり。法花會は長岡大臣の御佛事也。十月十六日の忌日を結願にあてゝ七ケ日行るゝ也。備前國鹿田庄を其料所とせり。大安寺は天平元年道慈律師先皇の遺詔によて造立す。大唐の西明寺の結構を移して。道慈歸朝してつくれり。西明寺は祇園精舎を摸して作る。祇園精舎は兜率の内院を移せりと云り。大安寺本の名は大官大寺といへり。大和國添上郡平城右京五六條三坊にあり。孝謙天王法花寺を建立し給ふ時。塔婆にをき

ては八角七重につくらむと思玉ふよし左大臣永手に仰合せらるゝ時。永手云。四角五重は足ぬめし。八角七重に造らればさだめて國土の費たらむかと申す。是にて四角五重に造らる。大臣は國の公平を思て申すといへども。後生の責となりて銅の火の柱を抱といへり。其後永手の息男從四位上藤原家依病患の時。名德僧を請じて數日加持せしむ。或日傍人俄に託宣して云。我は是永手也。法花寺の塔婆を申滅せるによて。冥途にて銅の柱をいだきて年序（る期）おふるところに。炎魔王宮に香烟薫り満り。琰王あやしみ驚て冥宮に尋らる。冥官申云。日本國の罪人永手が息藤原家依病によて一僧を以て加持せしむ。件の僧堅固の信心をこらして己が命にかはらんと祈請して効驗あり。志の甚深なるによて。香烟（の）薫ずる也。これによて忽に苦患をまぬがれて。同朋廿餘

人引牽して天上に生ぜり。此由をつけむがために來れる也といへり。

宇治殿平等院を建立し給ふとき。地形の事など示合せられむために。土御門右府を相伴なはせ給ふ。宇治殿仰られて云。大門の便宜北向にあらずんば便なかるべし。北向に大門ある寺侍べりや。右府申されて云。覺悟せしめず。時に匡房卿いまだ無官にて江冠者として有けるを終車にのせて具せられたるを召出されて。かれこそ加様の事うるせく覺えて候へとてとはるゝ所に。匡房云。北向に大門ある寺は天竺には奈良陀寺。唐土には西明寺。本朝には六波羅寺也と申す。宇治殿大に感しめ玉ふ。

後朱雀院 御宇長久年中。叡勝講源泉僧都說法勝なり。此時四天王道場に現じ玉ふ。天皇外餘人はこれを見ず。是にて源泉菩薩に法

印に叙せらる。其後より四天の座を設らると云り

六條坊門の北。西洞院の西に堂有。みのわ堂と號す。伴堂は伊豫入道賴義奥州の俘囚打たいらげて後建立せり。佛は等身阿彌陀也。賴義此佛を造立し恭敬禮拜して極樂へ必引導し給へと申ければ。うちうなづかせ給けり。十二年の間戰場にしてうたれたるものの片耳をさりあつめて。ほして皮子に合に入れて持のぼりたりけるを。伴堂の土壇の下に埋めるにて。耳納堂といへり。みのわ堂と云はひが事なり。

粟田左大臣在衛文章生の時鞍馬寺に參詣せり。正面の東の間にて禮拜をするに。十三四歳ばかりの賤き童きたり。ついて同く禮をなす。七反許と思けれ共。この小童の禮拜より前にしてたらむは人わろかりなんとおもひて。心ならず禮をなすあひだ。すでに三千三百三



十三度に満たる時。此童忽にうせぬ。在衛奇異の思をなし渴仰の信をいたす。然ども窮屈餘り聊睡眠する間。さきの童子裝束は天童のごとくにして。御帳の中より出來て在衛に云事は。官は右大臣にいたり。歳は八十二なるべし。其後昇進雅意に任せたり。左大臣八十三の時。彼寺に詣て申云。往日右大臣八十二のよし示し玉ふ所に。今既に如此。毗沙門又夢の中に示し給て云。官は右大臣迄にて有しかども。奉公の勞によりて左にいたれり。命をばあしく見たり。八十七歳也。果して伴歳薨逝せり。其後彼寺の正面東間をば。人以進士の間と號す。

播磨國書寫山の性空聖人生身の普賢菩薩を見たてまつらん事を祈請す。夢の告有て云。生身の普賢を見んと思はゞ。神崎の蓮女の長者をみべしとみて。喜びながら神崎に行て長者の

家を相尋る所に。たゞ今京より下の輩あつたり來りて遊宴亂舞の間也。長者も横座に居て鞍を打て亂拍子の上句をうたふ。其詞に云。周防むろつみの中なるみさらぬに風ふかねどもさゝら浪立。其時聖人奇異の思を成て睡眠する時。長者忽に普賢の形を現じて。六牙の白象にのりて。眉間より光を出して道俗を照す。則微妙の音聲をもととなへて云。實相無漏の大海に五塵六欲の風は吹ざれども。隨緣真如の波のたゞぬ時なしと。其時聖人信仰恭敬して感涙をのごふ。目を開く時は又もとのごとく女人の形をなして。周防のむろつみを出す。眼を閉ときは又菩薩の形と現じて法文を演ぶ。如此する事數ヶ度。聖人なくく退き歸るときに。伴の長者俄に立て。閑道より聖人の所にをひ來て云。口外に及べからず。即逝去す。時に異香室にみてり。長者頓滅の間。遊宴樂を

さませりと云り。書寫上人は六根清淨を得たる人也。ある時は客人來臨せり。對面の間客人懷中に蚤をひねる時。聖人云。いかにさは蚤をばひねりころさんとし給ぞとて。大に慙愧して。客人あどろきて退去すといへり。

<sup>性悟</sup>ナ御室は御壽命十八歳を限たるよし宿曜の勘文に見えたるによりて。十八歳の春。尊勝法を修して祈なさしめ玉ふ間。ある人の夢に閻魔王宮火付て已焼むとする間。王宮大に騒動す。伴壽命十八のよし札の文に已明白なりといへども。炎上難治によりて。八の字を上へ釣られたるとみえたり。果して八十の御歳九月廿七日入滅し玉ふと云り。

御室は世間に疾病おこるときは。ひそかに御在所を出給ひて。唯一人御棚の菓子などを懷中に入給ひて。大垣の邊の病者に次第にこれを給て。眞言をよみかけて。過させしめ給け

れば。病者立どころに滅を得たり。御所にかへり入らせ給ときは。玉の輿にのり給ひて。天童等多御供にていらせ給ふと見奉る人あり。

小野皇太后宮は後冷泉院の后。<sup>殿子</sup>大二條關白の三女也。生年十四の年。舍<sup>本願正大二條關白</sup>靜圓僧正にしたが

ひてひそかに法華經を受給て。毎日一部讀誦し給。人曾て知ことなし。春秋十六にて入内<sup>有</sup>。治曆四年四月十九日立后。此夕帝崩御し給。しかしよりこのかた偏に道心を發して。念佛轉經の外に他事ましまさず。二條東洞院亭にてみづから宸勝王經を書寫し給ふ。或時雲雨俄に降て霹靂殿に入る。皇后經と筆を手に握り玉ひて。存せるがごとくじせるがごとし。即時雷あがりて天晴たり。眼を開て經を見給ば。ひなしき紙は焼て文字はやけず。御衣はもえたれ共身はつゝがもま<sup>ま</sup>さず。法に歸する志これによりいよく深くまします。承暦

元年に飾を落して出家あり。良眞座主を戒師とし玉ふ。たび小野の寒雲に入しより。再び長秋の曉の月を見ず。往生の素懷をとげ玉へりといふ。

清信律師は播磨國人興福寺の法相宗也。空晴信都の法孫守朝已講の上足。說法無雙にて文殊の化身といはる。不思議なる事あげて計へからず。御堂入道殿實否をしり給はんとて。佛事を修し百僧を請ぜらる。僧の座にはみな半疊を儲らる。一の半疊に文殊とかきたる札をへりの中に隠て百座に敷まじへらる。此律師吾座は候とてかき分て此半疊に坐せられたり。其後決定文殊化身とは知玉へり。卅八にて遷化。清水寺の上綱と號せり。

參河守大江定基は參議左大弁濟光と云人の子也。出家して寂昭と云。この人渡唐して諸の聖迹を禮す。僧供を受とき寂昭鉢の飛て物をう

くる事有。五臺山に詣て文殊の女と化せるをみる。圓通大師の號をさづけらる。

内記慶滋保胤は陰陽師賀茂忠行が子也。博士の子と成て改姓す。發心出家の後。世に内記聖人といへり。

惠心僧都の頭陀行せられける折に。京中こぞりていみじき御ときまうけてまいりしに。四條宮にはうるはしく銀のごきどもをうたせ給へりしかば。かくてはあまり見苦しとて僧都乞食とめ給へりと云り。

河内國そこゝに住なにがし聖は庵より出る事もせられねど後世の責を思へばとてのぼり參られたりけるに。關白殿守時殿まいらせ給て難人

ども拂ひのゝしるに。是こそは一の人におはすめれと見奉るに。入道殿の御前にゐさせ給へば。猶まさらせ給也けりと見奉る程に。亦行幸なり。亂聲し待うけ奉らせ玉ふ様。御こしの

入らせ給程など見奉る。殿だちの畏り申させ給へば。國王こそ日本一の事也けれと思ふに。おりおはしまして。阿彌陀堂の中尊の御前につゐらせ給て拜み申させ給ひしに。猶々佛こそ上なくはおはしまして。此會の庭にしかしこう結縁し申て。道心なんいとぞくし侍りぬるところ申されしか。

書寫の聖結縁經供養し侍けるに人々餘た布施を送ける中に。遊女宮木が奉れるを。聖思ふ心や有けむしばしとらざりければ。宮木よみ侍ける。

津の國の難波の事か法ならぬ遊女はむれまでと社きけ

### 神道類。

佐理の大貳任はてゝ鎮西より上るとき。伊豫の國の泊にて風波惡て舟を出す事あたはず。其夜の夢に三嶋明神社の額をかゝせんとて留め給へる事見へたり。則神の御前にて額をか

きてうたせたれば。順風に成て煩なく着岸せり。日本第一の能書なり。三嶋社の額と六波羅密寺の額とは。此人筆跡也。

紀貫之集云。紀伊國に罷下りて罷上に。馬の煩て死べきあつかひを。路ゆく人々とまりて見て云様。例こゝにいます神のし玉ふとて。かく社もなくしるしもみえねど。心いとうたておはする神也。さきふも祈を申てなんやむと云に。みてぐらもなければ。何わざをすべきにもあらず。いかゞはせんとて手計あらひ跪て。さても何の神し申さんずるぞといへば。蟻通の明神となむ申すといへば。かくよみて奉る。

搔曇り綾目もしらぬ大空にありとほしなほ思へしやは

經信卿圓融院の御八講に參する時。北野の社の前にて下車せず。不審をなして問人有ければ。答云。彈正（ミナモト）に。四位は二位を拜せずとみ



えたり。神は非禮をうけず。若をりてはかへりて禮を知ざるに似りと云り。

放生會行幸に准ぜらるゝ事。延久二年是始也。上卿は大納言隆國なり。初年許は壺胡籙沓を用。第二年よりは平胡籙靴に改められけり。

貞信公の御所小一條と申所は。宗像明神のちはしませば。洞院のうしろのつじより車より下りさせ給へり。雨などの降日の料に大路に石だたみをせられたりけり。この貞信公は宗形明神現に物など申給けり。我より御位高くてゐさせ給けるなんくるしきと申させ給ければ。いと不便なる御事とて。神の御位はまし申させ玉ひけり。

### 禮儀類。

御即位の時代々主上の着し給ふ玉冠は應神天皇の御冠也。禮服に相具して内藏寮におさめをかる。後三條院の御頭に目出たくあはせ給

けり。此事つねに御自讃有けるとなむ。中原師遠攝津守に任じて知足院入道殿へ参りて慶賀を申けるに。笏を持ずして三度拜し奉けり。入道殿中門の連子より御覽有て仰られけるは。猶師遠也。禪室に入ときは笏をとらずといへる者也。

参議前頼卿多年沈淪して寵居す。中納言に任て後。初釋奠の上卿を勤仕す。作法進退の間。事にをいて不審をなして傍人に問事をす。時に成通卿参議にて座に列けるが。師頼卿に語けるは。年來御寵居によて公事御忘却うゐるしく思食たるや尤道理也。師頼卿返事をばいはずして。ひとりごととして云。大廟に入ては毎事に問。成通卿是を聞て閉口す。後日に入逢し。ひけるは。思分る方なうして不慮の言を出侍。悔千萬也。

白河院の御即位の時たえて久敷事ども再興

せられし中に。記録所とて天下の政を行はれし事。後三條院の御時有し後は。この御代に寄人など云物餘多置れて。げに／＼敷事共有けり。大内をも作りいだされて渡らせ給ふ。殿々門々の額は法性寺の關白書せ給ふ。宮作りたる國司七十二人。勸賞行はれて位など玉はれり。内宴ととも／＼とせ餘りたえたる事をもおこなはれて。春生聖化中と云文字にて詩を作らしむ。青色赤色のうへのさぬを着せり。綾綺殿にて十人の舞姫袖ふる氣色あるべきを。俄にて誠の女は叶はねば。仁和寺法親王。舞童を奉らしめ給へり。詩をば仁壽殿にて講ぜらる。尺八と云笛も吹絶たるを此時吹せらる。相撲の節も此御代再興せられて十七番有。少納言道憲と申人後に法師に成て信西と申けるが。かゝる事共はすゝめ奉りて。目出度御代にて有けるとなむ。紀内侍と云は法皇の御めのと

也。これは信西が室也。是によりて信西によろづ打まかせられ侍り。やそしまのつかひと云事も紀内侍つと。侍りて。其時よめる歌。

すへらきの御代の御蔭に隠れすはけち住吉の松をるまじや

二條院御位に即せ給て。保元四年正月廿一日。今年も内宴有。公卿七人。四位五位十一人。文つくりてかうぜらる。序は式部大輔永範書侍り。題は花下催哥舞。法性寺關白是を獻ぜらる。舞姫今年はうるはしき女舞にて有。是も通憲法師神社などにて舞共ならはせ侍りけるとかや。

### 好色類。

二條后いまだ内へまいり玉はざる時。業平中将しのび／＼に通侍り。或時后をゐてかくし奉らんとせしをせうと違うばひかへして。則中將の本鳥をさりけり。中將髮生ん程とて。歌枕みむために關東に下向す。奥州の八十嶋に

宿せる夜。野中に和歌の上句を詠ずる聲有。其詞秋風の吹度ごとにあなめあなめときこゆ。音につきて求るに人なし。たゞ一つのされかうべ有。明る朝なを是を見るに。かのかうべの目の穴より薄生たりけり。風の吹毎に薄のなびく音。歌の上句に聞えけり。奇異の思ひをなす間。或人云。小野小町此國に下向して此所に死せり。其かうべなりと云。こゝに中將哀に思ひて。下の句を付て云。小野とはいはじ薄あひけり。件所をば玉作の小野と云るとなむ。賢子中宮は白河院の御寵愛他に異なる故に。禁中にて崩じ玉へり。いまだ御惱危急の時も退出をゆるされ玉はず。既に閉眼の後も猶抱給ひて起去給はず。時に俊明卿参入して申云。帝者菟曹の問未曾有の事に候。はやく行幸有べきよしを奏。勅答云。例は此よりこそ始まらめと仰けり。

道命阿闍梨は道綱卿の息也。其音聲微妙にて。讀經の時間人皆道心を發せると云り。但好色無雙の人也。或時和泉式部の所に行て會合の後。曉方に目をさまして讀經兩三卷せり。さてまどろみたる夢に一の老翁有。誰人ぞと相尋る所に。翁の云。我は五條西洞院邊に侍る者也。御經の時梵天帝釋を始奉て天神地祇ことごとく聽聞し玉ふ間。此翁などは近邊へちかづき參る事あたはず。然るに唯今の御經は行水も候はでよみ給へれば。諸神祇も御聽聞なし。よき隙と存て此翁は參て能々聽聞中て悦存たると云と見給へり。

小野宮右府實資公をば賢人のおとゞと申けり。他事のかしきには似ず。女の事に忍び給はざりけり。北の對の前に非有。下女等清涼水と名付て集り汲けり。其中に少年の女を見て。閑所に招寄て戯れ玉へり。宇治殿此事を聞給

て。侍所の雑仕の女のみめてよきを撰てかの水を汲につかはす。件女に教へさせ給へるやう。水を汲むに招引あらば參て。其後水桶を捨て歸り參るべしと仰られけり。果して案のごとく招寄られけり。後日にかのおとゞ宇治殿へ參られたりけるに。公事言談の後。先日侍所の女の水桶今はかへし給はるべしと仰られければ。おとゞ赤面して申ことなくして出られにけり。賢人なれども。振舞に付てははかられ玉ひにけり。或時此殿の御前をこと宜しき女の通りけるを門より走出てかきいださ給へりけるに。或人亦通り逢て車より下て。あれば賢人の御ふるまひかと云たりければ。女人に賢人なしとこたへて。にげ人給ひけり。

小一條のおとゞ細尹公の御女。村上の御時の宣耀殿の女御。御かたちおかしげにうつくしうおはしけり。内へ參給ふとて。寢殿のひがく

しの間に御車寄て奉り給ひければ。御身は車にのらせ給ぬれど。御ぐしは母屋の柱のもとまでぞおはしける。一すぢをみちのくに紙にきて見けるに。いかにもすき見えさせ給はずとぞ申傳へたる。御かたちのいみじくおかしげにおはしましたけるに。目のしりのすこしたり給へりけるが。らうたくうつくしくおはするを御門いとかしこく時めかせ給て。かく仰られける。

いきての世しにての後の後の世も羽を交せる鳥と成南

### 御返事女御。

秋になることの葉たにも變すは我もかはせる枝と成南  
古今廿卷を空にうかべさせ給へる女御にてましまししなり。

### 興遊類。

六條の式部卿の宮と申しゝは延喜の御門のひとつ腹のおとゞにおはします。野の行幸せさ

教習親王  
延長八年十月十九日



せ給ひしに。此宮供奉せしめ給へりけれど。京のほど遅參させ給て。かつらの里にぞ參あはせ玉へりしかば。御こしとめてさきだてゝ參らせ給しに。なにがしと云し犬飼の犬の前、足を二ながらかたに引こして。深き河を渡りしこそ。行幸につかうまつりたる人々皆興じ給はぬなく。御門も興有げに思食たる御さそくにこそ見えおはしましゝか。扱山口いらせ給ひし程に。しらせうといひし御たかの鳥を取ながらみこしの鳳の上に飛まいりえて候しが。やう／＼日は山のはに入方に。光いみじう指して。山の紅葉錦をはりたるやうなるに。たかの色はいと白く。きじはこむじやうのやうにて。はねうちひろげゐて候し程は。誠に雪すこし打散て。折ふし取集て。去事やは候しとよ。身にしむ計思ひ給へりし。

御堂殿の一とせ大なる河にて逍遙させ給しに

作文の舟。管絃の舟。和歌の船とわかたせ給て。その道に堪たる人々をのせさせ玉ひに。公任大納言遅參有けるを。入道殿かの大納言いづれの舟にかのらるべきとの給へれば。和歌の船にのり侍らんと給てよみ玉へりしぞかし。

小倉山嵐のかせの巻ければ紅葉のにしき着ぬ人そなき

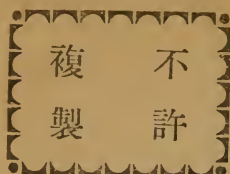
人皆感じける歌也。みづからもの給なるは。作文の舟にのりてかばかりの詩を作たらましかば。名のあがらむ事もまさりなまし。口惜かりけるわざかな。さても入道殿のいづれにかとの給はせしになん。我ながら心おこりせられしとぞの玉ふなる。一事のすぐるゝだに有に。かくいづれの道にもぬけ出給けんは。右も侍らぬ事也。

延喜御門延長十九の河行幸に富小路の御息所の御腹の雅明の御子の七歳にて舞させ給りしは。

かりの事こそ侍ざりしか。万人しほたれぬ人侍らざりき。餘り御かたちのひかるやうにし給しかば。山のかみめてて取奉り給てしぞかし。

亦圓融院大井河逍遙の時公任卿は三船にのるとも有。帥民部卿經信卿亦此人にはをとらざりけり。白河院西河に行幸の時。詩歌管絃の三舟を浮べて。其道の人々を分ちのせられけるに。經信卿の遲參の間。ことの外に御氣色あしかりけるに。とばかりまたれて参りたりけるが。三事かねたる人にて候き。汀に跪て。やゝどの船まれよせ候へといはれける。時に取ていみじかりけり。かくいはんれうに遲參せられけるとぞ。扱管絃の舟に乗て。詩歌をけむぜられたりけり。三船に乗とはこれ也。

昭和六年三月廿五日印刷  
昭和六年四月一日發行  
昭和十一年九月二十日再版發行  
昭和十八年七月二十日三版發行 (200)



(文協會員番號 115016)

(出文協承認 あ 410054)

發行者

東京都豊島區池袋二丁目一〇〇八番地  
續群書類從完成會代表者

太田 藤四郎

印刷者

東京都豊島區西巢鴨二丁目二五七四番地

丹羽 誠次郎

印刷所

東京東二八五  
東京都豊島區西巢鴨二丁目二五七四番地

忠義堂印刷所

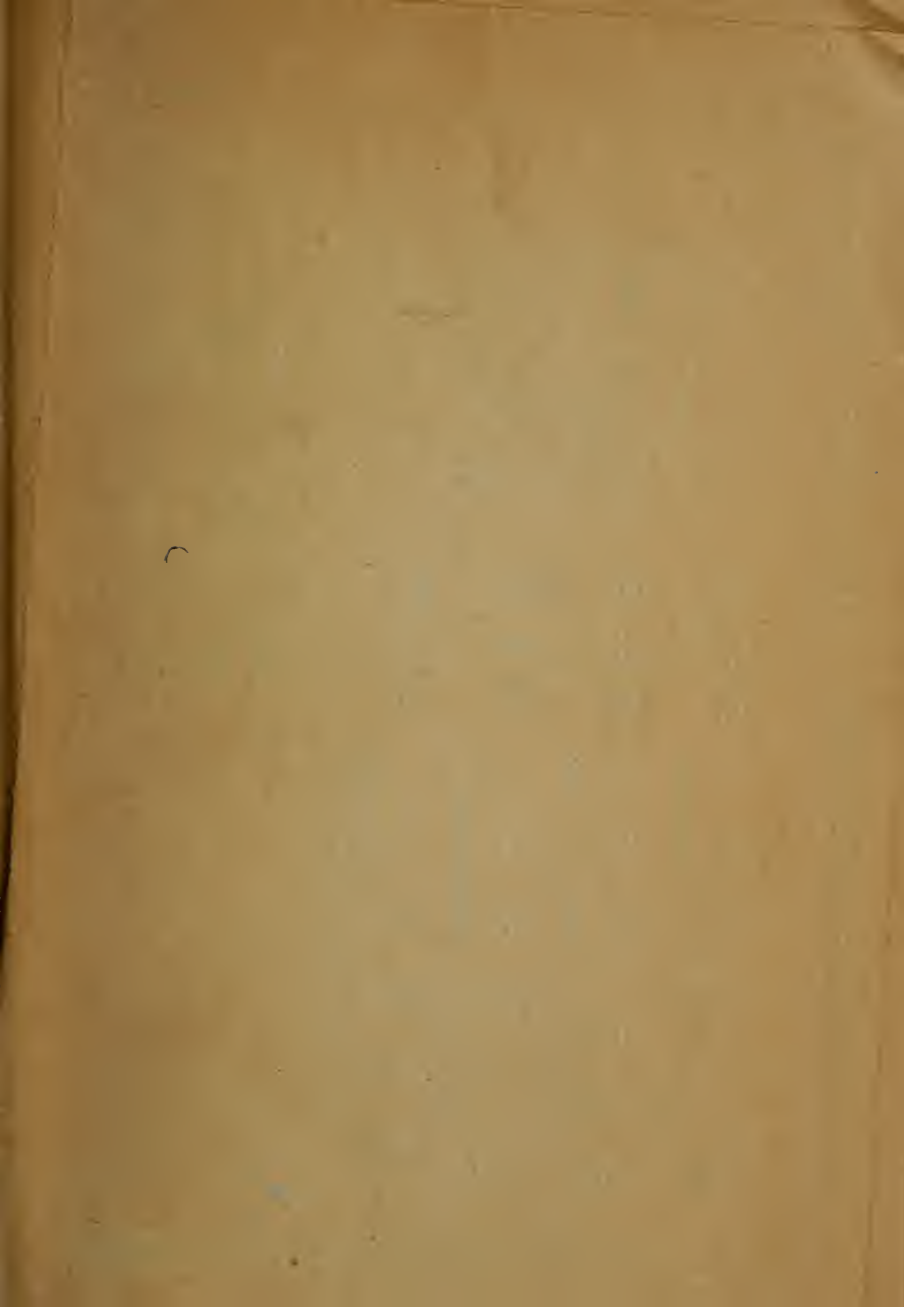
發行所

東京都豊島區池袋二丁目一〇〇八番地  
續群書類從完成會  
振替東京六二六〇七・電話大塚七一八

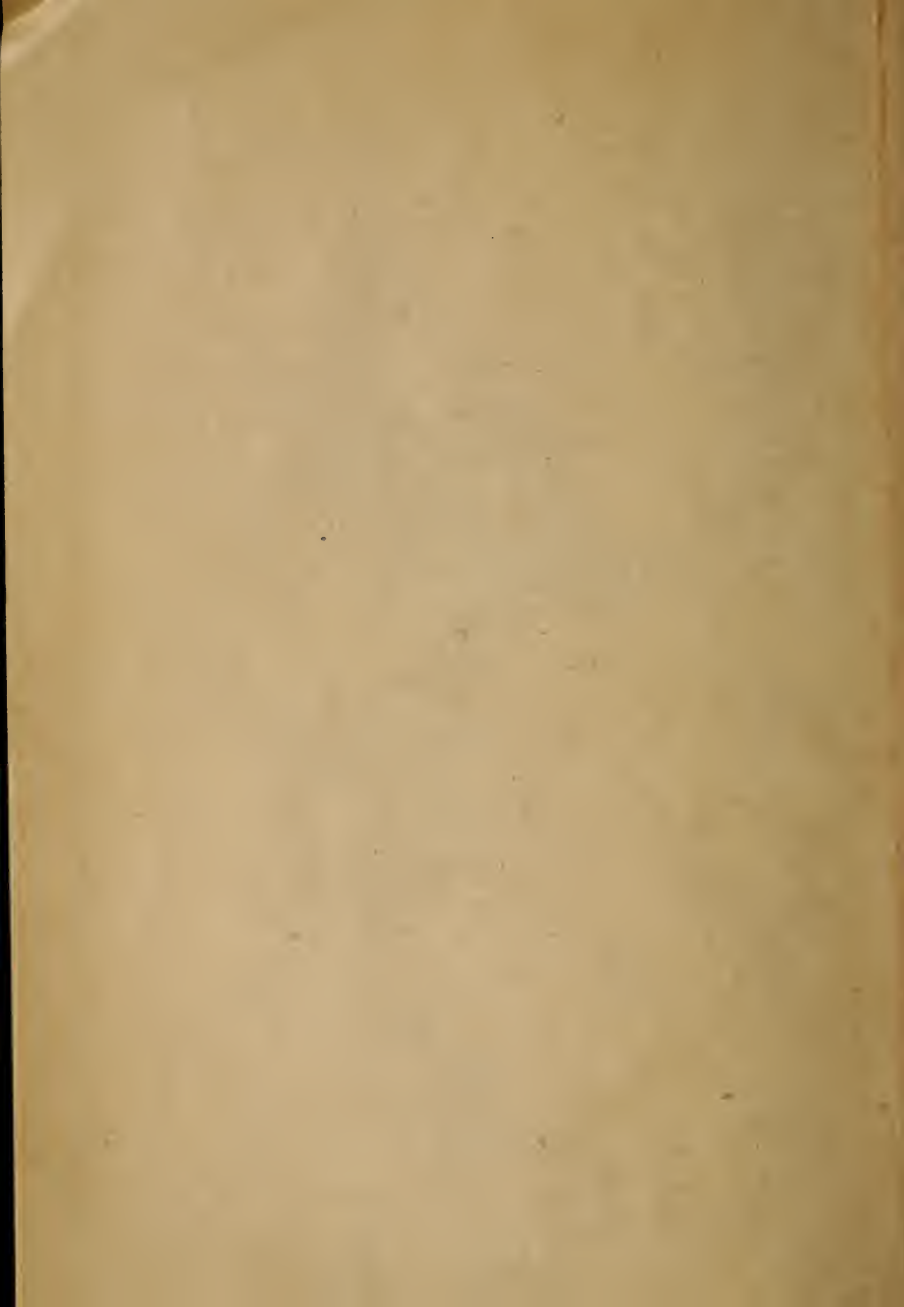
續群書類從完成會

(配給元)

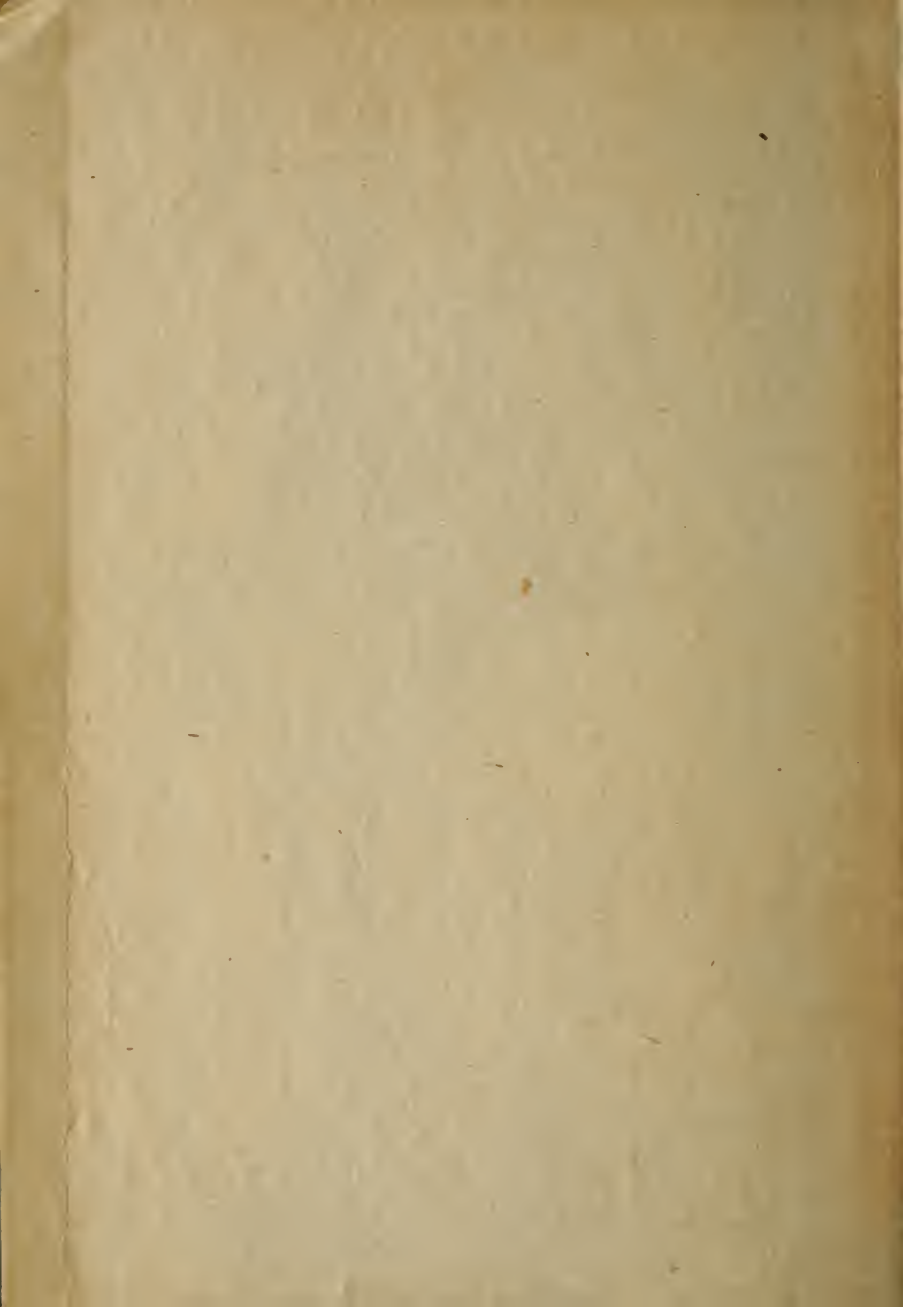
東京都神田區  
淡路町一ノ九  
日本出版配給株式會社











EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7765

FOR USE IN  
LIBRARY  
ONLY

BRITTLE SHELF